

---

**【お知らせあり】 聖伝 光と闇の邂逅**

こいしるつこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

【お知らせあり】 聖伝 光と闇の邂逅

### 【コード】

N9648G

### 【作者名】

こいしるつこ

### 【あらすじ】

【お知らせ】 2010年4月末より、PCサイトにて当作品を原作とした漫画の連載を始めました。そちらも合わせてお楽しみ頂けますと幸いです。 サイトURL：<http://koishih625.web.fc2.com/> (PCサイトです)

以上お知らせでした。この冒険は、ひねた大人とばかの子どもの提供でお送りします。個性豊かな少年らが織りなす、友情と勇気の物語。ひとつずつ明かされる謎、やがて彼らは真実を知る。ファンタジー全開の異世界冒険物語です。

序章・はじめの音（前書き）

Ⅴ 1 1 3 9 6 0 | 4 5 4 Ⅳ

## 序章：はじまりの音

### 『聖伝』プロローグ

アイシスが目をさましたのは寒さのせいではなかった。声を聞いたのだ。

うすく雲のかかった空はまだ暗く、窓の向こうで町はまだ眠っていた。

アイシスは朝が苦手だった。だからそんな時間に自然と目がさめたことは驚きだった。

加えて驚いたことに、その朝アイシスは幽霊を見た。

それはアイシスがこれまでに見ただれよりも美しい女の人だった。彼女はアイシスが深い眠りにあると思っていたらしく、目を開けるのを見ると小さく息をのんで身を引いた。

すきとおるように白い肌の奥で筋肉が動くのをアイシスは見た。

そして消えた、アイシスがまばたきをする一瞬のあいだに。

彼女がこの世のものでないことは明らかだった。

しかしアイシスは恐怖を感じていなかった。

さつき聞こえた自分を呼ぶ声の正体は、もしかすると彼女かもしれないと思っただけほほ笑みさえこぼれた。

気の早い鳥がさえずりを始めた。

太陽がようやく顔を出したころ、アイシスはまだ幽霊のことを考えていた。

彼女は美しかった。そしてアイシスは年頃の少年だった。

小さな物音がしたのはそんなときだった。

アイシスはうわずった声をあげて飛び上がった。顔が赤くなるのを感じる。

アイシスはすぐに顔が赤くなる。男のわりに白い肌のせいによけいにそれが目立つ。

ゆるゆると息を吐きながらアイシスは窓に駆け寄った。物音は窓のほうからした。

「おはよう」

音の正体はわかっている。

窓を開け、アイシスは声の調子に十分気をつけながら挨拶をした。声はもつとわずつてはいなかった。

二階にあるアイシスの部屋の、ちょうど真下にラナがいた。あまった小石を手の中でもてあそんでいる。

「おはよう」

そう返してラナは窓を見上げた。口元がいたずらっぽく笑ってい

る。

「なんだよ、さっきの声は。踏みつけられた猫の悲鳴みたいだったな」

「ええ、なんだ。聞こえてたの」

うなだれるアイシスを見て、ラナはおかしそうに笑った。

「それよりも、今日はどうしたの。いつもより早いね」

「まあな。とりあえず降りてこいよ」

「でも」

「いいから早く」

アイシスは迷った。

今日は朝の礼拝があるのだ。

アイシスはこれまでに何度も寝坊をしては、神父さまから便器みがきの罰をいただいていた。

欠席などしたらどうなるだろうか。きっと教会内の便器全てを三度はみがいてまわることになるだろう。

しかし、言いだしたら聞かないラナのことだ。

アイシスがかぶりをふると、空いた窓のふちに手をかけ、なんのためらいもなく二階のそこから飛び降りた。

それこそ猫のようなしなやかなやさで着地する姿を見てもラナは驚か

なかった。

彼の人間離れた運動神経についてはみんなが知っていることだ。

「それで、どうしたの？」

「心当たりねえの？」

アイシスは首をひねった。

なにか彼を怒らせるようなことでもしたかしら。朝のはやくから呼び出されるようなことを。

しかし思い当たるふしはなかった。

「ない、と思う」

「本当おまえは自分のことに無関心だな。ほら」

ラナは後ろ手に隠しもっていた包みをさしだした。

「誕生日おめでとう」

アイシスは目を丸くしてそれを見た。

朝の寒さは頭から飛んでしまっていた。

十二月二十三日。

言われるまですっかり忘れてしまっていたが、今日はアイシスの誕生日、ということになっていた。

こつ曖昧なのはアイシスが捨てられた子どもで、彼の誕生日を覚えてくれるのは古い走り書きひとつだったからだ。

それはともかく、アイシスは自分のことにあまり興味がないようだった。

彼の関心はもっと他のこと、たとえば神父さまのことやななめ向かいに住む妊婦の奥さん、目の前にいるラナたち友人にばかり向けられていた。アイシスはとても心優しい少年だった。

両手でうけとった包みは見た目よりも重みがあった。目でラナが開けるようにうながす。

やや不恰好な包みを解くと、中から銀の短剣が出てきた。

アイシスの髪の色とそっくりなそれには、柄にも鞘にも控えめな装飾がほどこされてある。

それは華美なものを好まないアイシスにぴったりだった。

そのうつくしさに、アイシスは目をさらに丸くした。そしてラナを見た。

「十六歳、おめでとう。おまえもようやく大人の仲間入りだな」

ありがとう、と言う声はかすれていた。

ラナはもういたずらな笑みを浮かべてはいなかった。そこにあるのは一番の親友の笑顔だった。

それからラナはアイシスをとなり街へと誘った。

「音楽隊がきてるらしいぜ」

この一言はアイシスをおおいに喜ばせた。歌はアイシスがもっとも好むもののひとつだ。



彼らの住むティエラの町は小さい。  
だからこそ町人はみな仲がよく、強く結束しているのだが、彼ら  
のような若者には娯楽が少なすぎた。

それに比べてとなり街は賑わっていて、ときどきはこうして音楽  
隊や雑技団が訪れる。

となり街へは山をひとつ越える必要があったが、それが彼らにと  
ってなんの障害でありえるだろう。

「行くよな？」

「うん！」

アイシスは大きくうなずいた。

一瞬、どこまでも続くかというほどに並ぶ便器が頭をよぎったが、  
あえて忘れることにした。

今日はめでたい誕生日で、心から祝ってくれる親友がいる。アイ  
シスは嬉しかった。

今日が終わったら喜んで罰を受けよう。

冷たい水に、きつと手は凍えるだろうけど。

それを思ってもなおあり余る幸せがあった。

となり街に向かって駆け出すアイシスは、右手にしっかりと短剣  
を握っていた。

昨夜、アイシスの心は静かに平和を歌っていた。  
アイシスはこれから自分がなにをするか、なにが起こるかをすべて知っていた。

しかし今日はアイシスの誕生日だった。  
彼はひとつ年を重ね、自発的に目をさまし、そして幽霊を見た。  
これはアイシスの予期していないできごとだった。

沈黙を守っていた運命はついに眠りからさめたのだ。  
それが求める場所をめざして動き始めた。

日常はもはやアイシスの手の中にはなかった。  
しかしアイシスはまだそのことを知らない。

変わらない毎日はアイシスにとって平和を意味した。  
彼は変化をおそれる少年だったからだ。  
そして彼の心はもはや平和を歌おうとはしなかった。

小さな小さな物音をたてて、歯車が回転をはじめた。  
神父さまただひとりだけがそれを聞いたのかもしれない。

教会の窓辺に立ち、アイシスとラナの背が小さくなっていくのを  
彼はじっと見つめていた。

## 第一話：山道の攻防

### 『聖伝』 第一話

ティエラの町が燃えている。それもけっこうな勢いで。

そう聞かされたのは日も傾くころで、音楽隊の舞台はもうすっかり終わってしまった。

いまごろは明日に向けての準備でもしているのだろう。しかしふたりにとって、そんなことは本当にどうでもよかった。彼らの楽しみの余韻なんて、あっという間もなく崩れてしまったのだから。

町が火事だ、と触れ回っていたのは若い男だった。

商人風の体をしていたから、きっとティエラには納品のために出かけてもしたのだろう。

そんなことあるはずがない、とラナは根拠なくその男に食いかかったがアイシスは違った。

そうもあるう、と感じた。

だって、ぼくは気づかなかったか？

今朝、ぼくの心が幸せを歌わなかったことに。

彼はうすうす感じていた、自分の心が騒ぐ声に。

そしていま、彼の心が叫ぶことは「行け」。

アイシスは走り始めた。

「アイシス!？」

ラナがすつとんきょうな声をあげた。

あわてて彼も駆け出したが、アイシスの速さといったらなかった。

いくらアイシスが運動能力に長ける少年だからとはいえ、ラナは自分もその一だと自負していたし、事実そうであった。

その気になれば、彼だって二階の窓から アイシスほど軽やかでないにせよ 飛び降りることができる。

しかし、あの速さはなんだというのだ。とても追いつけるはずがない、とラナは思った。

緑の野原を風がいくようにアイシスは駆けてゆく。

見る間に彼は街の門をくぐり、ティエラに続く山道へと向かった。

ラナは無心にあとを追う。

ティエラのことにはラナの頭になかった。いまはアイシスを守ることのほうが重要に思えた 危険はアイシスのほうにこそ差し迫っている、ような気がする。

ラナ自身は気づいていなかったことだが、彼の心もまたそう叫んでいたのだった。

舞台は大にぎわいだった。

音楽隊の演奏は観客をおおいに魅了し、彼らは立ち上がっての盛

大な拍手でそれを称えた。アイシスは誰よりも大きく手を叩いた。咲きこぼれるかのような笑顔だった。

しかし、舞台のために建てられたテントから出るころには、アイシスの顔はもうすっかり曇ってしまっていた。

ラナはそのわずかなあいだでの彼の変化に驚いたし、戸惑った。なにか不備があっただろうか、と。

今日の日のために、ラナはもうずいぶんと前から下調べをしていたのだが。

彼はアイシスを弟のように、ときには息子のように大切に思っていたから、十六歳の誕生日は楽しい思い出で埋めてやりたかった。

「どうかしたか？」

ラナはアイシスの顔をのぞきこんだ。

「礼拝をさぼっちまったこと、後悔しているのか。ま、そりゃそうだよな。こんな寒いときに便器なんか磨かされたら、手が凍っちまう」

「違うよ、そんなじゃない」

いつもの調子でラナは軽口をたたいたが、アイシスはやはり浮かない顔だった。

無理して笑っているのが見て取れた。

ラナは黙ってアイシスの目を見た。

意思をこめた自分の目が、隠しごとを許さない強さを持っている

ことを知っていた。

同様に、アイシスの目の澄んだ輝きも、ラナに隠し事をさせないのだけれど。

「こんな顔してごめん、ラナ。本当に楽しい一日だったし、ぼくはすごくうれしい。ありがとう。ラナがこんなに今日のことを考えてくれていたなんて。でも。でもね……」

ラナは無言で先をうながした。

「でも、このまま終わってはくれなさそうな気がするんだ。なにか、ぼくたちにとって嬉しくないことが起こるような。望もうが、望むまいが」

アイシスがそれを言い終えるかどうかのときだった。例の男が、商人風の男がわめきつまろびつしながら駆けてきたのは。

そして彼らはティエラの町が燃えていることを知った。

それはもちろん、彼らにとって嬉しくないことで、彼らはそれを望んではいなかった。

アイシスの不安は、最悪なかたちで現実となった。

「おい、アイシス！」

無駄だろうとはわかっていたが、ラナはもう一度、あらん限りの大声でアイシスを呼んだ。

しかし、小さな背中が振り返ることはなかった。

ラナは膝に両手をつき、体中で息をついた。  
大きな声を出したせいでむせ返り、ひどく苦しかった。  
街の人がなにかを言ったが、ラナの耳には入らなかった。

ラナは一呼吸おくと、すぐにまたアイシスを追いかけた。  
銀色の、あまり長くない髪が揺れている。

ラナの心はどうしようもない不安に満たされた。

このままアイシスは戻ってこないのではないだろうか？

余計な雑念をはらうように、ラナは首を振った。

「ちくしょう！」

気持ちばかりが先に走り、足がそれについていけない。ひどくもどかしかった。

アイシスを守ってやれるのは俺だけなんだ。なにがあっても絶対にあいつを守りきると、九年前のあの日に誓ったじゃないか。  
それなのにいま、追いつくことさえできなくてどうする！

アイシスは夢中で走っていた。

無理をして走っているせいもあるだろうが、心臓がやけに強く脈打ち、痛いほどであった。

彼は走りながら幻影を見た。

切れ切れに浮かび上がってくるその幻影を、アイシスは失われた

記憶の一部ではないかと感じた。

とるに足りないことではあったが、アイシスは記憶喪失であった。

彼はずっと幼いころティエラに迎えられた。

それ以前のことは、おそらく喜びも悲しみもたくさん経験したのだろうが、すべてどこかに置き忘れてしまっていた。

そしてその幻影はアイシスの心に強く響いた。これは失われた過去の記憶に違いない。

「でもぼくは、ぼくはなにを思い出そうとしているんだ？ 火事、燃える、炎」

アイシスは首を振った。わからない。

「走る そうだ、ぼくは走っていた。でもひとりではなかった、大勢に囲まれて、一緒に。一緒に？ ああ、ぼくはだれかと手を繋いでいた。だれかの手を引いて……」

ほほ笑む人の口元が見える。

頭をなでられる感覚、熱い頬。人々のざわめき、もつれる足に、すなほこり。

もどかしかった。

薄ぼんやりとよみがえってくる記憶はどれもあいまいで、しつかりとした像をむすぶことはできなかった。

なにか確信をつくものが必要だった。



こげくさいにおいでアイシスは現実に引き戻された。

気づけば山頂はもう目の前だった。

そうきつくない勾配の坂を一息に駆け上がると、なまあたたかい風が顔をなでた。

ティエラはやはり燃えていた。町全体が赤だった。

ティエラは木でできた家がほとんどだったので、炎にとってはごくちそうであった。

生々しい色をした炎は、ごちそうを頬張りながら、ぱちぱちと歓声をあげていた。

「そんな……」

一瞬、アイシスの足がとまった。

彼が心から愛する町は、想像以上にはげしい勢いで燃えていた。

いまから消し止められるほど生易しい炎ではないことを、アイシスは全身で感じた。

驚きは困惑に、そして困惑は絶望になって彼を食いつぶすかと思われた。

しかしアイシスは強くかぶりを振ると、燃えさかる町に足を進めた。

こんなところでよくよしてどうする。

ぼくは十六歳で、大人だ。みんなを助けなければ。

そのときだった。炎を背に、こちらに歩いてくる人影が見えたのだ。

影の数はみつつ。どれも背が高いので大人の男性かと思われる。アイシスは目をこらしたが、その姿をよく見ることはできなかった。

しかし妙である。

影は炎にあせるようすでもなく、むしろ悠々とした足取りではないか。

逃げてきた町の人ではなさそうだ。

アイシスは突然不安にかられた。心がざわつく。いやな予感がする。

ゆっくりと影はこちらへ近づいてくる。

彼らは間違いなくアイシスに気づいているだろう。

不意に影がその姿を見せた。

月が雲の切れ間から顔を出したのだろうか、いまやお互いがお互いをはつきりと見て取れるようになった。

それは奇妙ないでたちだった。

まず男たちはみな全身黒づくめであった。袖口のゆるいローブらしき服である。

そしてなにより奇抜なのがその顔面、一様にほどこされた刺青であった。

その模様はひとりひとり異なるようであるが、色はやはり真っ黒で、真ん中の男にいたっては顔のほとんどが黒に染まっているではないか。

それを確認した瞬間アイシスは、

「うわあああああ！」

絶叫。

ぼくは知っている、あの男たちを。

そうだ、彼らはぼくが幼いころにも現れた 炎を背負って！

アイシスはついに思い出した。

ほほ笑んでいた父のこと、かたく握った弟の小さな手、爆ぜる炎と倒れる木々。

頬が熱かったのは涙のせいではなかったか？

あの日、九年前のあの日、ぼくはすべてを失ったんだ。

父も母も、故郷も故郷の人々も、平穏な日常も、弟も！

アイシスは口をおさえた。

そうでもしなければ飛び出すかというほどに心臓が暴れている。見えない手で胸を圧迫されているかのような痛みだ。

アイシスは息ができなくなってしまった。

いくら息を吸っても苦しくなるばかりで、喉は渴いていく一方だった。

意思とは関係なく涙がながれた。

多くの酸素を求めて、呼吸が早く、短くなっていく。

視界がぐらつく。世界が白いもやに包まれていくようであった。

アイシスはよろめき、後ずさりすると、木を背にして倒れこんだ。

男たちは感情のこもらない目でそのようすを見ていた。

うづくまるアイシスに抗う力はないように思われた。そう判断した男はアイシスに手を伸ばす。

ラナがようやくやくの思いで駆けつけたのは、ちょうどこのときだった。

「アイシス！」

叫ぶと同時に手近の石を拾い、軽くふりかぶって投げる。

ラナの放つ石つぶては、いまでもアイシスを捉えようとする男の手を鋭くはじいた。

男は痛みに顔をしかめ、脇をかためる男たちも突然の介入者におどろいて身をすくませた。

ラナはその一瞬を逃さず、アイシスと男たちのあいだに割って入った。

その頬は上気し、額からは大粒の汗がこぼれる。

大きく肩で息をしながら、ラナはかみつかんばかりに吼えた。

「何者だ、おまえら！ アイシスになにをした！？」

「邪魔な」

男は腫れた甲をおさえて舌打ちすると、一歩うつろへと下がった。心得たように脇のふたりが腰の剣に手をかける。

説明は不要ということだろう。

ラナはアイシスのようすが心配だったが、まずは目の前の男たちをどうにかしなければと気をひきしめる。

負ける気はさらさらなかった。

ラナの腕っ節は町で一番、けんかで膝をついた試しはなかった。だからといって彼は驕らない。常に全力で相手に挑む。

ラナは男たちを睨みつけながら、わずかに腰をかがめて手ごろな棒切れを拾った。

軽く手の中でもてあそんで掴みごこちを確かめる。武器としては十分に使いそうだ。

張りつめた空気が流れ、町が燃えるばちばちという音だけが小さく聞こえた。

男たちは同時に襲いかかってきた。

一方をよけ、一方を受ける。

はげしい衝撃で体勢をくずしたところを一閃、不恰な棒は男の背をしたたかに打ち、男は声をもらすこともなくどうと地面に倒れた。

すかさずそれを飛び越えて、先のひとりが切りかかってくる。

ラナは棒を両手に持って受け、刃は棒の半ばまで切りこんだ。とたんに男の表情がうるたえる。抜くに抜けなくなってしまったらしい。

「しめた！」

ラナは棒を捨てると男の手を拳で突いた。

肉体を使うけんか戦法こそラナの得意とするところ、男が棒もろとも剣を取り落としたところをもう一撃、さらに深くふところに飛びこんで、とどめの一発を腹部に見舞ってやった。

「おら、次はおまえの番だぜ！」

見たところ“頭”らしい男は、戦闘のようすを驚くでもなくただ眺めていたが、ここにきてようやく組んでいた腕を解いた。

ラナはすっかり伸びているふたりを、ちよいちよいと足で動かして場所をあげた。

「ままごとだな」

「あ？」ラナは眉をつりあげる。

「お飾りを倒して喜ぶようでは、所詮、子ども」

なんだと、と言おうとしたが声が出なかった。  
ラナは腹部に強烈な打撃をうけてよろめいた。男は間合いのずつと外にいるというのに、この一撃。いったいどうやって？  
まるで巨大な拳で殴られたかのようなようである。

酸いものがこみあげてくるのをなんとか飲み下し、顔をあげたところを今度は全身をちいさな竜巻に囲まれた。と、

「うあああつ！？」

鮮血が飛び散り、ラナはたまらず膝をついた。吹き荒れる風が千の刃となってラナの体を切り刻んだのだ。

山道に血はしたたり落ち、吸いこまれていく。

けた違いの強さだった。

ラナはかつてないほどに傷つき、打ちのめされていた。

死ぬ、と感じた。

そのときラナの脳裏をよぎったのはアイシスのことだった。

かわいそうなアイシス！ 俺が死んだら、泣いているあいつをだれがなぐさめてやるっていうんだ。

ラナはふり返った。

うづくまるアイシスは、とても苦しんでいるように見えた。

ラナは思わず手を伸ばしたが、彼はそんなことをしている場合ではなかったのだ。実際、命の危険はラナにこそ迫っていたのだから。

「死ね」

男は倒れた仲間から奪った剣を手にしていた。

無慈悲な刃は炎を映し、いまにもふり下ろされようとしていた。

ラナの体が大きく震えた。

一瞬、視界が闇におおわれた。

なるほどこれが死ぬということか、などと思ううちに闇は晴れ、

ラナは再び山道を見た。

どうやら生きているらしい。

しかし、どうしたことだろう、男たちの姿が消えているではないか。

冷たい刃も、まるで無感動な男の顔も、倒れた男たちも。

ラナは反射的にふり返り、アイシスがそこにいることを確かめて安堵のため息をついた。

それから前方に視線を戻すと、そこにはひとりの青年がいた。

金の髪に金の瞳の青年だった。すこし青ざめた、端正な顔立ち。



見たこともない男である。

肩を抱き、なかば引きずるようにしてもうひとり連れていく。

彼が敵か味方かさえもラナにはわからない。

とりあえずの危機は去ったように思えたが、ラナはさらに気を引き締め、アイシスをかばうようにして立ちあがった。

「座っている」青年が言った。「傷口が開く」

しかしラナは聞かなかった。青年を正面から睨みつける。

が、青年が連れてくる人物の顔を見るなりラナはすっとんきょうな声をあげてしまった。

「親父!？」

そつと地面におろされた人物にラナが駆け寄る。

間違いなくその男はラナの父親だった。見れば、体のあちこちに深い切り傷を負っている。

ラナは説明を求めて青年を見やった。

「山道に続く門のところで戦っておられた。ただひとりで」

青年は言葉少なくそう言つと、生きている、と独り言のように呟いた。

それから彼はアイシスに近づき（まるで足音をたてないこと）ラナは気づいた）、しばらくようすを診ていたが、

「過呼吸だな」

「かこきゆう？」

「発作だ」

おもむろにベルトから布袋をはずすと、中身をすべて出してしま  
い、青年はそれをアイシスの口にあてがった。  
なにをするものかとラナはあっけにとられてそれを見ている。

布袋はアイシスの激しい呼吸にあわせて縮み、膨らみしていたが、  
ややもすればしだいに動きがゆるやかになってきた。  
同時に苦しそうだったアイシスの表情もやわらいでいく。

「あんた……なに者だよ」

ラナはすっかり口が開いたままである。

青年は切れ長の瞳でラナを一瞥すると、すぐに逸らして

「安心していい」と言った。

言葉は素直にラナの体にしみこみ、ラナは二度目の安堵のため息  
をついた。

「それよりもきみは　平気なのか、その傷」

言われてラナはようやく思いたった。

体にきざまれた無数の切り傷からは、そうしているあいだにも血  
がとめどなく流れている。

「痛い」

そう言いつと同時にラナは意識を手放した。

## 第二話：兆し

### 『聖伝』第二話

アイシスはファルファラの森の小道を走っていた。冬が近く、森は金色に染まっている。

ファルファラの木の葉は落ちない。寒くなると黄金に光るのだ。

「兄さん待って」

アイシスは足をとめ、エザが追いつくのを待った。

吐く息が白い。彼らにつきそう従者たちは、鼻のさきを真っ赤にし、にこにこふたりを見守っている。

ふたりはかじかんだ小さな手をつないだ。

そつだ、いつもぼくたちはこうしていた。ふたり一緒に、手を繋いで。

そして帰ったら父さんが迎えてくれるんだ。お帰り、寒かったらう、こっちにおいで、って

アイシスは目を覚ました。白い天井、白い壁。見覚えのない景色だった。

夢だったらしい。

アイシスは目を閉じてゆるゆると息を吐いた。

あれはぼくの記憶だ、とアイシスは思った。九年間、ずっと忘れていた記憶。

「ラナ？」

ふと顔を横に向けるとラナがいた。

彼はベッド際でアイシスの手をにぎり、どうやらそのまま眠ってしまったっているようだった。

ラナは清潔で動きやすそうな服を着ていて、袖からのぞく腕にも足にも、にぎった手にも包帯が巻かれている。

小さな呼びかけが届いたのか、ラナの肩がびくりと動いた。ほんやりとしたようすのラナと目があう。

「アイシス？」

「うん」

「うわっ」

ラナはうわずった声をあげると同時にとびかかってきた。覆いかぶさるようにしてアイシスに抱きつく。

思わず抗議の声をあげそうになったが（「重い！」）、ラナの体が震えていることに気づいてアイシスは口を閉じた。

「よかった……」

いつも強気で、お兄さんぶりたがるラナが、これほどに弱々しい声を出すなんて。

アイシスはラナの背中をやさしく叩いてなだめる。

「いったい、これほどラナが心配するなんて、なにがあったのやら。考えてみたが思い出せず、落ちつきを取り戻したラナに話を聞くことにした。」

「どこまで覚えているんだ？」

「えっと。山を登りきったところまで、かな。だれかに会ったような気もするけれど」

「刺青の？」

アイシスは首をふった。

息ができなくて苦しくなったことは分かるけれど、それ以外はどうしても思い出せないという。記憶に霧のようなものがかかっている、それが邪魔をするのだ、と。

「そっか。……火事のことか？」

聞きにくそうにするラナに、覚えている、とアイシスは答えた。

覚悟はしているから聞かせて、とも。

ティエラの町はひどい燃えようだった。  
消し止めることなんて、だれができただろうか。

町はすっかり焼け落ちてしまっただろう、とアイシスは思った。  
そこに住む人たちも無事にはすむまい。

「じゃあ、正直に言う。町は真っ黒だ。なにひとつ残ってやしない、  
全部燃えちまった」

「……うん」

「で、町の人たちはみんな無事。ここ、となり街に避難している」

「……え？」

「信じられないような奇跡だろ？ あんな炎のなかでさ。何人かは  
怪我で入院しているけどさ、みんな元気だよ」

最高の誕生日プレゼントだな、と言って、ラナは目を丸くするア  
イススの頭をやさしく叩いた。

すると豪快な笑い声がして、アイシスは驚いて声のするほうを見  
やった。

笑っているのはラナの父親ハロルドで、いまのいまままで気づかなかったが、彼はアイシスのとなりのベッドに寝ていた。

「柄にもなく夢みがちなことを言うじゃねえか。誕生日プレゼントか、こいつはいいな」

「うるせえ！ 盗み聞きしてんじゃねえよ、寝とけ！」

ラナは顔を真っ赤にして怒鳴り返す。

「いや、しかしだ。これ以上の贈り物はないだろうよ。なあ、アイシス？ もちろん神父さまも元気だ。さっき帰っちゃったけどな、ずっとおまえについて目が覚めるのを待っていたんだぜ」

アイシスの目から、ぼろぼろと涙がこぼれ落ちた。

それがあまりにきれいだったので、ラナはしずくが落ちてしまうのももつたいたいなくすら思った。

「言つてを預かっているんだ」

そう言つとラナは、厳格な神父さまの声色を真似しながら、「朝礼を欠席するとは不遜、体が癒えたら病院中の便器をみがいて回るように！」とやった。

アイシスはようやく声を出して笑い、病室はやわらかな空気につつまれた。



それからハロルドも話に加わった。  
驚いたことに、火事から五日が経っているという。

とりわけ親しい人たちの現状を聞いてしまうと、話題はある青年のことに集中した。

「テイエラを襲ったのは、そうだな、二十人近くいたと思う。どんな手品を使ったかは知らねえが、いっぺんにあちこちが燃えだしてな。逃げようとしたところをバサリ、だ」

ベッドに起き上がったハロルドは、剣をふりおろすしぐさをして見せた。

なかなか、こう、人をひきつける話し方をするものだ。アイシスもロナもすっかり話に聞き入っている。

「こつちはけんかすらろくにしたことのない連中ばかりだ、敵うはずもねえ。剣に、炎に追われて逃げ惑っていた。あのままだったら町のやつらは全員……」

でもな、アイシス。おじさんはひとり倒してやったんだぜ」

アイシスはにっこり笑うとひかえめに拍手をした。ぶつぶつとラナが言う。

「俺はふたりだ」

「でもな、」ハロルドは話を続けた。「そのあとすぐ五人ぐらいに囲まれてしまったんだ。こりゃいけねえと思った。あの男が現れたのはちょうどそんなときだったよ」

男は抜き身の剣を持っていて、どうやら血に濡れているらしかった、とハロルドは言った。

見たこともない顔だったからな、これまた敵かと思ったわけだ。ところがどうだ、まばたきをしているうちに、男はその五人をすっかり倒してしまったのさ。あいた口がふさがらねえって、まさにあの時のことだ。

そんなふうにして、男は町を襲ったやつらを次々と倒していったよ。これはあとで知ったことだが、男はそうしながら町のやつらを避難させていたって話だ。

俺はしばらくあっけに取られてそのようすを見ていたが、そのときおまえらのことを思い出してな。

なぜだか分かんが、俺はアイシスが心配で仕方なかったんだよ。五人の男がとなり街へと向かった、と酒屋のおやじが言うから、俺はシャベルを持って走っていった。なるほど、山道にいつつの背が見える。

俺はその背に向かって叫んだ、『やい、待ちやがれ！』ってな（アイシスが思わずふきだした）。

半分は引きとめられたが、もう半分は先に進んでいつちまった。いかしちゃんらねえと思っただけ俺は必死に戦ったが、これがまた強くてな。

散々痛めつけられて、覚悟を決めたときにまた　あの男だよ。

金髪金目のさ、凄腕の剣士。

あっというまにその場を片づけちゃまった。

俺は男に、この先につれていってくれと頼んだ。

ハロルドは目を閉じ、ベッド際の棚に置かれていた水を、うまそ  
うに一息で飲み干した。

アイシスは彼ののどぼとけが動くのを見ながら、その青年につい  
て思いをめぐらせた。金髪金目の、凄腕の剣士

「俺も会ったよ。俺もその人に助けられたんだ」

「そうなの？」

ラナはうなずいた。

「おまえの発作も、その人がなんとかしてくれたみたいだった」

「そう……」

そういえば、苦しくてどうしようもなかったときに、優しい声を  
聞いたかもしれない、とアイシスは思った。

しかしあれは、男の声だっただろうか？ どこかで聞いたこと  
ある声だったような気もするけれど。

「おじさん、それで、その人はどこにいるの？」

「そうだな。お礼を言わねえと」

「それがなあ、いないんだ。ここの人の話じゃ、その男は俺たち三  
人を運んできてくれたらしいが、そのあとはティエラから避難して

きたやつらでござったがえしてな。

その喧騒が終わってみると、どこにも姿が見えなかったそうだ」

ちょうどそのとき、甲高い声がして三人は黙らざるをえなかった。

巡回中の女の人が（この部屋を担当してくれる看護婦さんだとあとで知った）、鬼のような形相でこちらに向かってくる。

「起きだしちゃだめって、言ったでしょう？ あなたたち、自分の怪我の程度を分かっているの？」

そう言うとき彼女はハロルドをベッドに押し倒し、ラナを引っぱって反対側のベッドに連れていき、布団を何重にもかぶせて身動きがとれないようにしてしまった。

その圧倒的な勢いにアイシスが驚いていると、女の方はふり向いてアイシスに手を伸ばした。

叩かれるかとアイシスは身構えたが、ぴたりと額に手を当てられただけで、その手はやさしい温度をしていた。

「熱はないわね。具合はどう？ 吐き気は？」

「ありません、ありがとうございます」

目を白黒させてアイシスが答えると、女の方はにっこりと笑って部屋を出ていった。

両脇のベッドに寝るやんちゃなふたりには、動かないようにと再度くぎをさしてから。

それから三人はおとなしく言いつけを守ってすこし眠り、目が覚めたころに食事がはこばれてきたので喜んで食べた。

アイシスには、実に五日ぶりの食事となるわけだ。

湯気のとつ料理を目の前にすると、アイシスのおなかがなさけない調子で音をたてた。

「食べ、食べ！ 食ったら怪我なんてすぐに治るぞ」

「親父なんて、意識が戻るなり『はらへった』だぜ。満腹になってようやく『いたい』だもんな」

「おまえも似たようなもんだろっが」

アイシスをはさんで言いあつふたりに、さきほどの看護婦がすこし困ったような顔で笑う。

「本当に元気な怪我人よねえ。いつもあんな感じ？」

「うん。すごく楽しいよ」

「でしようね」

そう言って看護婦はまたアイシスの額に手を当てた。

「もうすっかり下がったようね。あなた、すごい熱だったんだから」

「そう？ もう大丈夫だよ。ご飯もおいしかった、ありがとう」

いい子ね、と看護婦は言った。

それから看護婦は部屋を出ていき、いれかわるようにして神父さまが入ってきた。

神父さまは厳しいお人で、けわしい顔をしていることが多かったが、アイシスが起きているのを見たときばかりは顔をほころばせた。神父さまはアイシスの額にみずからの額を当て、神へささげる感謝の言葉をささやいた。

アイシスはとてもこそばゆく、うれしかった。

「言づては聞いたかね？」

「伝えておきましたよ」

アイシスは非難をこめてラナを睨んだが、すぐに笑いだした。

四人はときどき声をあげて笑いながら話していたが（神父さまも珍しく上機嫌である）、やがてアイシスがそわそわと落ち着かないそぶりを見せるようになった。

めざとくそれに気づいたのは神父さまだった。

「どうした、アイシス」

「いえ……あの」

「言いたいことがあるなら言ってみよ」

小便か、とラナが下世話な冗談を言い、ハロルドにしかられた。

「どうした？」

「あの、ぼく、思い出したみたいなんです　幼かったころのこと」

そう口にしたとたん、ハロルドと神父さまの表情がけわしくなったことにアイシスは気づいた。

ラナも真面目な顔をしたが、その比ではなかった。

「思い出したとは　アイシス、どこまで思い出したのだ」

「全部です、神父さま」

「全部というと」

「ええ、全部。家族のこと、故郷のこと……九年前の事件のことも」

ハロルドが短く息を吸った。

「それから、ぼく自身のことも。ぼくは、人間ではなかったんです  
ね」

ぼつりぼつりと、アイシスは記憶をたどるようにして話しはじめた。故郷のファニマのこと、金色に光るファルファラの森のこと、そこに住まう優しい人たちのこと。

「ぼくは耳の形がいびつで、病気のせいって聞いていたけれど」「アイシスは銀色の髪をかきあげた。隠されていた、とがった耳があらわになる。

「そうじゃなかった。ぼくはエルフなんだ」

「エルフだって?」

身を乗りだしたラナにアイシスはうなずいて見せた。

「でも、そんな……。だってエルフは伝説上の生き物だ、って」

「ううん。だれも見つけられないような森の奥で、ぼくたちはひっそりと穏やかに暮らしていたんだ。エルフはいまの世にも生きている　いや、生きていた」

ラナはあつけにとられていたが、そう言われてみれば思い当たるふしがあった。

アイシスの人並みはずれて高い運動神経も、彼がエルフであると考えれば納得できる。エルフは見目うるわしく、身体能力のたかい、神の子どもと記される種族だったからだ。

アイシスがときおり口ずさむ異国の言葉らしい歌は、エルフの国の歌であったか。

「父さんはエルフの王で、大きくなったらお父上さまのような王さ



まになるんですよ、と言われてぼくは育った。

母さんは病気がちで、遊んでもらうことはできなかったけれど寂しくはなかった。ひとつ下に弟がいて、ぼくたちはいつも一緒だったから。

やわらかな毎日で、ぼくはとても幸せだった。

大きくなっても、ぼくたちは毎年ファルファラの森を、家族そろって歩くんだろうって、そう 思っていたんだ、だけど」

神父さまがアイシスの手をとった。

アイシスは大粒の涙をこぼしていた。

よみがえった過去の記憶は、アイシスにとってけっして嬉しいものばかりではなかった。それは大きな悲しみをとまなうものだった。

「いまはもうよい。無理に話すことはない」

神父さまはローブの裾に手をやると、そこから小さく折りたたまれた一枚の紙を取り出した。

「これは……おまえがこの町にやってきてくれたとき、おまえとも にいたエルフがくれたものだよ」

それはアイシスたち家族四人が描かれた肖像画だった。裏には“12・23”の文字と、その下に短くなにかが書き添えられているが、かすれて読むことができなかった。

「ぼくの誕生日に描いてもらった絵だ」

「覚えているか」

「はい。これがあつたから、ぼくの誕生日がわかつたんですね」

アイシスはにこりと笑つてから、

「その絵を持っていた人は」

「……………」

神父さまは答えなかったが、その意味は十分アイシスに伝わつた。  
そのエルフはアイシスを守るために命を落としたのだ。

アイシスはうつむいて顔を覆い、深く息を吐いていたが、やがて  
決意したように顔をあげた。

九年前のあの日、悪夢として記憶の底にしまいこんでいたあの日  
のことを、アイシスはようやく話し始めるのだった。

### 第三話：痛みの記憶

#### 『聖伝』 第二話

その日、ファニマの空は雲にすっかりおおわれていた。  
風が強い。

ファルファラの木の葉がなん枚ももぎとられては飛んでいった。

アイシスは王の館（お城と呼ぶにはずっと規模が小さかった、とアイシスは言った）のベランダで頬杖をつき、なかば金色に染まった葉が飛んでいくのを惜しんでいたが、気づけば父親がとなりで同じように頬杖をついていた。

「風、すごいね」

「すごいね」

「アイシスも飛ばされちゃうんじゃないかな」

彼、ルキア王はそう言ってアイシスを抱き上げた。アイシスは足をばたつかせ、無邪気な笑い声をあげた。

ほほ笑ましい親子のようすに、それを見守る従者たちの顔もほころんだ。

季節は冬に向かっていて、いつもその季節になると後は体調を崩す。

このときも三日ほど前から臥せっていて、いまはエザがそばにつ

いているはずだった。

「ねえアイシス」ルキア王はアイシスを肩に乗せた。「アイシスは“運命”を信じる？」

「うんめい？」

聞きなれない単語にアイシスは言葉をくりかえした。

「人はね、生まれてから死ぬまでのことが、全部決められているっていうんだ。わかりやすく言うとね」

「そんなすごいことってあるの？」

「あると思うかどうかを聞いたんだけどなあ」

困ったように言って、ルキア王はあはは、と笑った。

父さんはどう思うの、とアイシスは尋ねた。

「私か。私は」

それから父親がなにを言ったのか、アイシスは忘れてしまった。

異変が起こったのは、気の早い太陽がかたむきはじめてころだっ

た。エルフのひとりが、一筋のけむりを見つけたのだ。  
危機を告げるのろしで、森の北にある物見やぐらからだった。

のろし拳がる、の一報は、館を混乱におとしいれた。  
ファニマはすっかり平和に慣れきっていて、この事態にうまく対応することができなかった。

ただひとり、名君といわれたルキア王だけがその指導力をいかになく発揮し、的確な指示をだしてエルフたちをまとめあげた。彼は、よくいるお飾りの王とは違う、本質的な存在だったのだ。

アイシスとエザの兄弟は、わけも分からぬまま大勢に囲まれ、かつ守られて館を出ることになった。

状況は把握できなくとも、おさな心に不安を感じ取ったのだろう、エザははざかりもせず泣いていた。アイシスは弟をなくさめてやりたく思ったが、気づけばアイシスも泣いていた。

ルキア王はそんなふたりに優しくほほ笑み、小さなふたつの頭をなでた。いとおしそうに、くり返しなでた。

それから后がふたりを抱きしめ、祈りの言葉を言いきらないうちに、あわただしくふたりは館を逃れ出た。攻め手はすぐそばまで迫ってきていたのだ。

忘れてはいけないよ。

東へ、東へと森を急ぐなか、父親の声を聞いたような気がしてアイシスはふり返った。

そして目に入ったのは館のあちこちで踊る赤い炎だった。王の館は燃えていた。アイシスはあぜんとして足を止めた。

「父さん！ 母さん！」

エザがひときわ大きく泣き出した。

アイシスは炎から目が放せないままエザの手をさがし、強く握りしめた。

忘れてはいけないよ。花はやがて枯れるけれど、次の年になればより美しい花を咲かせることを。

同じく炎に気づいた従者たちは、悲鳴をあげたり泣き声をもらしたりして、しばらくはそこから動くこともできなかった。

アイシスはもう一度エザの手を握りなおした。涙はぬぐわなかった。ぼろぼろとこぼれるに任せたまま、アイシスは歯を強く食いしばった。

「いっしょ」

そして叫んだ。

「いっしょ……いかなきゃ！ ぼくたちは、生きなきゃ！」

その声に勇気づけられて、逃げる一団はまた走りはじめた。  
エザもおえつをもらしながらも必死で走った。

しかし、一団のほとんどが女こどもに老人である。進みは遅かった。

炎に追いつかれるのは時間の問題に思われた。

わあっ、という喚声があがり、すぐにそれは悲鳴にかわった。一団のうしろのほうに、とうとう攻め手が追いついたらしい。得体のしれない敵にエルフは震えあがった。

「お早く、お早く！」

従者たちはふたりの王子をなんとかして救いたかった。

しかし、いつのときも時間は逃げるものに厳しく、追うものにはやさしい。

後方の悲鳴からしばらくすると、アイシスたちのところにも矢が数本撃ちこまれるまでに追いつかれてしまった。

逃げ惑うエルフたち。

いつしかつき従うエルフの数もぐつと減り、五十人もくだるかというほどであった。

そしてついにアイシスは敵の姿をはつきりと見た。燃える館を背に浮かびあがる影は、どれもみな威圧的で恐ろしかった。

黒いローブに黒のブーツ、乗っている馬も黒一色である。

まるで感情を見出せない顔には一面に刺青がほどこされている。

この人たちがすべてを奪ったんだ。

一瞬見えたその姿は、アイシスの心にふかく刻みこまれることとなった。

アイシスとエザは、それぞれ若い男に背負われることになった。それでもふたりは手を繋ぎたがったが、どう手を伸ばしてみても届きはしなかった。

男たちはとても速く駆けた。後の祈りを一身に背負っているかのような速さだった。

ついてこれないエルフたちは、みな残していくことになった。足の遅いものたちは、迫られては射殺され、追いつかれては刺し殺された。

男たちはふたりの王子をけっしてふり返らせてはならないと思った。

絶えず悲鳴が聞こえてくるので、アイシスとエザは耳をふさいでおくように言われた。

おとなしく従うと、男はすこし低めの優しい声で、エルフの歌を歌って聞かせてくれた。不思議とそれは閉じた耳にもよく聞こえた。

アイシスたちの心はすこし癒されたが、それも長くは続かなかつた。

四人の前に、やがて大きな谷が見えてきた。一本の細い橋がかかっている。



そのころになると、矢はひっきりなしに彼らを襲うまでになった。

エザを背負う男は、王子にしがみつかせておいたまま、器用に矢をつがえて橋に射かけた。

橋を支えるのは、それぞれよりあわせて強くした二本の縄のみである。そのうちの一本を集中的に彼は射た。

「どうして橋を落とそうとするの？」

アイシスは驚いて叫んだ。

「足止めをするんです。我々ならば、橋がなくとも跳んで越えることができませんからね」

エルフの弓矢は正確だ。橋は落ちた。

エザを背負う男は弓矢を捨て、さらに加速をつけてすばらしい踏みきりで向こう岸へと跳躍した。

まるで力モシカのように力強い跳躍であった。

すぐにアイシスを背負う男もそれを追う。足が地面にめりこむほどに強く大地を蹴り、加速する。

しかし、踏みきろうとしたそのときに悲劇が彼を襲った。

「あっ」

一本の矢が、はるか後方から彼の足を射抜いたのだ。

男はバランスを崩し、あわやアイシスを落としそうになったが、すんでのところまで立ち直り、彼は生きるために跳びあがった。

しかし、傷ついた足は言うことを聞かなかった。彼は向こう岸まで跳ぶことができず、背中のアイシスもろとも谷の底へと

「兄さん!!」

激しく落下していくなか、抱きしめられる感覚と、最愛の弟の声を感しながらアイシスは意識を手放した。

アイシスが話し終えたとき、あたりはもうすっかり暗くなっていた。

ラナもハロルドも神父さまも、しわぶきひとつたてずに聞きいていた。

「ぼくが覚えているのはここまでです」

神父さまは目を閉じた。

三人のなかで最初に口を開いたのはラナだった。

「そんな……だったらアイシスは、二度も故郷を火事で失ったっていうのかよ」

ハロルドがベッドから身を乗り出し、大きな手でアイシスの頭をなで、つらいな、と言った。

アイシスはもちろんつらくあったが、首を横にふった。胸が痛み、心は泣き続けたが、それでもアイシスは思い出すことができてよか

ったと思った。

父さんの笑顔、母さんのぬくもり、エザの小さな手、美しい故郷とあたたかなエルフたち、どれも忘れてはいけなかったんだ。たとえ結末がどれほど苦しいものでも。

「苦しみから逃げることはやめたのだな」

「……はい」

アイシスが答えると、神父さまは深くうなずいた。

はじめて気づいたが、神父さまも泣いていた。ラナも、ハロルドも泣いていた。

「それではわしらも真実を話そう。アイシス、おまえは修道院のまえに捨てられていた子だと教えていたが、もちろんそれは偽りだ。うそをつけてすまなかった。ハロルド、話してやりなさい」

「はい。そうだな、どう話せばいいか……。俺はあの日」

そうして今度はハロルドがゆっくりと話しはじめた。

「その日、俺は捨てられた町にいた。ひとりでな。かつて町には名前があり、たくさん笑顔がそこにはあったんだが、数年前にはやった疫病のせいで全部なくなってしまった。

それでも俺は毎年冬になると町を訪れることにしていた。リラのラナの母ちゃんだけだな、あいつの墓が町からすこし離れたと

ころにあるからな。

みんないなくなっちゃまったもんだから、寂しがるといけねえだろ、命日にあわせて一人でいつもいつてたんだ。まだラナは幼かったしなあ。

朝早くに起きだして町を出て、ずっと南のほうに向かった。

あいつの墓は森の近くにあって、すぐそばに川がある。

秋が近づくとそこら一面を黄色い花が覆ってな、リラはその花がすごく好きだった。だから墓はどうしてもそこに建ててやりたかったんだ。

俺は例年のように朝露のついた花を摘んで、あいつに贈ってやるうとしていた。

そのときだ。

ふと目に光が飛びこんできて、それは川を流れているようだった。

水面が朝日をうつすのかと思ったがそうじゃないらしい。

朝日を受けて光っていたのは、アイシス、おまえのその、銀の髪だったんだよ。おまえたちが落っこちちゃったっていう谷底には、川が流れていたのだからなあ。

人が流れていると気づいて、俺はあわてて川に飛びこんだ。

近づいてわかったが、流されてきたのがもうひとりいて、そいつはどうやら意識があるようだった。アイシスはすっかり気を失っていたけどなあ。

男から話を聞いて驚いたぜ。自分たちはエルフで、そっちは王子だって言うんだからな。

最初はてつきり、そいつは頭を打っておかしくなっちゃったもんだと思つたよ。だが男は真剣そのものだった。目が必死だった。

よく見ればそいつは体じゅう傷だらけで、とても危険な状態に見えた。

それで俺は、おい、病院にいこうぜって言つただけど、自分はいいから話を聞いてくれ、ってそいつは言つんだよ。

その気迫におされて、俺はうんうんと話を聞くことにした」

「『十と六の星月がめぐるとき』……」

詩を吟ずるかのように、神父さまがつぶやいた。

「『十と六の星月がめぐるとき、彼に光はふりそそぐ』。こうであつておつたよな、ハロルドよ？」

ええ、とハロルドは答えた。傷だらけの男がのこした言葉だといふ。

「王がそう言つたんだとさ。まったく意味が分からなかつたけどな。とにかく王子を頼みます、守ってさしあげてくださいと、そいつはずっとくり返し言い続けたよ。それから例の肖像画をくれたんだ」

「それで、その人は」アイシスは言葉をつまらせて、「死んでしまつたんだね。多くの人と同じように、ぼくを生かすために」

ラナはアイシスを見た。

アイシスはときどき言葉をつまらせたが、けっして声は震えていなかった。それがとても気にいった。

「だけどな、アイシス。こんなこと言っても気休めにだってなりやしないだろうけど、そいつ、笑ってたんだけ。すごく満足そうに、自分にできるなかで最高のことをした、って」

アイシスはうなずき、自分も笑って見せた。九年前、アイシスを守るために命をかけた、若い男の笑顔にこたえるために。

だれもがなんらかの犠牲のうえに生きている、だからこそ生を喜ばねばならない、と神父さまが含蓄のある言葉をつぶやいた。

「その、『十と六の星月がめぐるとき』だが」神父さまはアイシスを見つめた。「わしはつまりアイシスの十六の誕生日がこれに当たるのではと考えていた」

アイシスはかるくうなずいた。

現に、アイシスが十六歳の誕生日をむかえた日にティエラは襲われ、アイシス自身も危害をうける寸前であった。この考えは正しいとみて間違いはなさそうに思えた。

「しかし、どうも後半が解せん。『彼』というのがアイシスだとしても、『光』とは？」

「町が燃える炎のことだった、とか？」

ハロルドが答えるが、神父さまはいまいち納得がいかないようだ。

「あのさ、じゃあ、あの人のことじゃねえの？俺たちを助けてく

れた、金髪金目の。あの容姿、光って形容されてもおかしくないぜ」

「ああ、なるほど」

アイシスとハロルドはうなずいたが、神父さまは首をひねった。彼はあの青年に会っていないのだ。

しかし、けつきよく確証のある意味を見つけることはできなかった。

空には星が輝いている。神父さまは三人が見送ると言うのを断って病院をあとにした。

近くの宿屋が、ティエラの町民のために好意で部屋を貸してくれているのだという。

「おまえが元気だと知ったら、修道院のみんなは喜ぶよ」

アイシスは深々とお辞儀をした。

それから三人はご飯を食べ、ひそひそと話を続けた（例の看護婦に、もう寝るようにと叱られたからだ）。

ラナとハロルドは、アイシスの過去について聞きたいようすだったが、彼らはアイシスが話したからがないのなら、とすすんで話題をふらなかつた。それはありがたいことだった。

つらいことを思い出したくないというより、アイシスはもう話し疲れていたし、すこし気になることがあったからだ。

「金髪金目の剣士のことだけけれど」

昼間、自分たちを助けてくれたその人物の話聞いたとき、アイシスはなにかに惹かれていたのを感じた。

お礼を言いたいのはもちろんだったが、それ以上に「会わなきゃ」という気持ちに駆られていた。誕生日にそうであったように、これもまた心がそう告げているのだった。

「ぼく、その人に会いたいんだ。どうしても会いたい」

ラナとハロルドは顔を見あわせた。

「そうか。助けてもらったんだし、お礼を言わなきゃな。」

そうだな、この街から伸びる道はよつつある。ティエラには戻らんだろうな。だとしても選択肢はみつつ、どこへいったかなんて

「南だよ」アイシスは断言した。「南の道をいったんだと思う」

どうして、とラナが言う。アイシスは首をふり、そんな気がする、とだけ言った。

アイシスは、その女の子のような見た目もあって、どうしても弱で頼りないとされていたが、昼からのこのようすはなんだろう。

どうして、声も力強くはつきりとした意思を感じさせる。

十六歳の誕生日をむかえたことで、そんなにも変わるのだろうか  
とラナは二年前の自分を思い出してみた。

「大してなにも変わらなかったのになあ」



「だつ、なんで親父がそれを言うんだよ！俺の考えを読んだのか？」

親子は同じことを考えていたらしい。アイシスはこの展開についていけず、目を白黒させた。

実際、アイシスは変わった。アイシスは彼の心がどこにあつて、なにを叫んでいるのかを、薄ぼんやりと理解できるようになった。それはとても心強いことだった。

そのときアイシスの脳裏をある人物の姿がよぎった。

人物、とっていいのだろうか、誕生日の朝に見た幽霊のことだ。

光というならまさにあの人だ、とアイシスは思った。

その夜、アイシスは夢を見た。あの朝に見た幽霊がそこにいた。アイシスは驚かなかつた、なんとなくそうなりそうなおぼろげな予感があつた。

我を求めよ。

幽霊が言った。こごちよく耳になじむ声だ。鈴の音のような軽やかさがある。

ときは満ちた。王よ、我を求めよ

「どづいづこと？ 王ってぼくのこと？」

幽霊は問いかけには答えてくれなかった。

彼女はすこしばかり宙に浮いていて、やっぱり生きた人ではないのだとアイシスは思った。

しかし恐怖心はまっなくなかった。それ以上に彼女は美しかった。

金の薄布をまとっており、髪にも体にもきらびやかな装具をつけている。

しかしなによりも美しいのは彼女の瞳だった。白く透きとおるような肌に、黒一点の瞳。その大きな瞳がアイシスを見つめている。

アイシスは赤くなった。

幽霊はにこりと笑い、細い腕をあげた。

重ねてつけられた細い腕輪が、しゃらり、とずずしい音をたてた。あるほうをさした指は白く、よく磨かれた象牙の飾り物のようであった。

南へ

アイシスは理解した。確信をもってうなずき、そして目を覚ました。

ときは満ちたのだ。アイシスは旅立たねばならない。

## 第四話：運命の呼ぶ声

### 『聖伝』 第四話

目を覚ましたとき、アイシスはすこし期待した。あの幽霊にまた会えるかもない。

しかし、今朝、彼女はアイシスの名を呼ばなかった。しかたない、とアイシスは思った。

看護婦はしょっちゅう部屋に入ってきてはラナに注意したり、ハロルドの布団をなおしたり、アイシスの熱を計ったりした。

この不思議な三人組が気に入ったのか。それとも単に暇なだけなのかかもしれない。

アイシスは彼女がいないすきを見計らい、ハロルドのベッドにラナを呼び寄せた。

「あの剣士に会いに行くよ」

おやおや、とハロルドが言った。

「それはけっこうだが、おまえ、どうするんだ？　ほんとうに南の道をいくのか？」

アイシスはうなずいた。

アイシスは夢を見た。そして美しい幽霊は、彼にいくように告げたのだ。

答えはもう決まっていた。

ラナは口をなけば開けたまま、どこか勇敢な顔つきをした親友を見つめた。

その視線に気づいたアイシスは、すこし困ったように笑った。いつものアイシスだった。

「そうだなあ。南の道をいけば　ノトの街だな。一本道だし、半日もあれば着くだろう。しかし帰るころにはずいぶんと暗いぞ、気をつけないと」

「あ、違うんだ、おじさん。ぼくは」アイシスはあわててハロルドの言葉をさえぎった。「ぼくは、帰らない」

病室が静まりかえった。

窓をたたく風の音だけが小さく響く。

かたかた、かたかた、と。

「帰らないって、おまえ　」

ラナが言った。

「どづいづことだよ」

「まだ、よくわからない……会ってから考えるつもりだけど、ぼくは彼についていつてみたい、と思う」

「ついていくつたつて、そんな素性の知れないやつに？ それより町はどうするんだよ。修道院のやつらは？」

「帰らないつて、じゃあ、俺たちはどうするんだよ！」

「ラナ、落ち着け。アイシスも、もうすこし詳しく話してくれねえか。いきなりそう言われちゃ頭がついていかねえよ」

「ごめんなさい」

アイシスは顔を真っ赤にして謝った。

アイシスはすこし首をひねり、頭のなかでよく考えながら、順を追ってふたりに説明した。

それはとても難しい作業だった。

アイシスが聞いたのは心の声で、それは言葉にするには複雑すぎた。

「信じられないかもしれないけれど、ぼくは幽霊を見たんだ。誕生日の朝に。彼女は とてもきれいな女の人だったんだけど今朝もぼくの夢に出てきて、『南へ』って言ったんだ。ねえ、ぼくはこれを運命だと思う。

『十と六の星月がめぐったとき』、ぼくの運命は明らかになったんだ。

ぼくは彼と出会った。そう、例の剣士だよ。

ぼくは彼に会わなきゃいけないって思うんだ。強くそう思う。

この気持ちはとても説明できそうにないんだ。

ねえ、これが運命ってことじゃないのかなあ。

ぼくは確かめたいんだ。だって、父さんはぼくに、運命を信じるかって聞いたんだよ」

でも、とラナが口をはさんだ。

「だからって、帰ってこない必要はねえじゃんか。会って、確かめて、戻ってきたらいいじゃねえか。なあ、テイエラは燃えたよ。でもみんな生きている。またみんなで暮らせるんだぜ」

それからラナはかすれた声で、「運命って、なんだよそれ」と言っただ。

アイシスはうつむいた。

しばらくだれも口を聞かなかった。

ハロルドはなにか考えているようだったし、ラナは一点をにらんだままで、アイシスは目を閉じて心に問いかけていた。

これでいいのかな、ぼくは。ぼくはいくべきなのかな、たくさんものを捨てても。

心は肯定も否定もしなかった。

「運命か。考えたこともなかったが、あるのかもしれないなあ。リラの墓の近くでおまえに出会えたのも、運命だったのかねえ」

ハロルドが言って、アイシスは顔をあげた。  
ハロルドはほほ笑んでいた。

「俺はいいと思うぞ。いってこいよ」

「おじさん」

「今生の別れってわけじゃないんだろ」

ハロルドはアイシスの頭を大きな手で包みこんだ。  
「ごつごつとした手は、記憶にある父親のものとはずいぶんと違っ  
たが（ルキア王の手は絹のようにすべらかだった）、アイシスの気  
持ちはずいぶんとおだやかになった。」

「ただ、忘れるなよ。おれたちはいつでもおまえのことを想ってい  
て、おまえの帰りを待っている」

アイシスは大きくうなずいた。

うかがうようにラナを見ると、彼はやはり一点をにらんだままで、  
アイシスを見ようともしなかった。アイシスは悲しかった。

しばらくして食事が運ばれてきた。

手際よく食事の準備をしながら、けんかでもしたの、と看護婦は  
アイシスに耳打ちした。

アイシスは困ったように笑い、あいまいに首をひねってみせた。

わずかな小遣いに、神父さまからもらった肖像画、それからラナにもらった銀の短剣。

アイシスの荷物は少なかった。

それらとすこしの小物とを布袋に入れて腰にさげ、短剣はひもで結わえて腰帯にくくりつけた。

アイシスは病室の窓枠に手をかけた。

心配性の看護婦の目をぬすんで出ていくためには、それが一番いい方法だとハロルドが言ったからだ。

「なあ、アイシス。俺はおまえを息子だと思っているよ。父親がふたりいたら迷惑か？」

アイシスはとびきりの笑顔で首を横にふった。「最高だよ」

ラナはなにも言わなかった。目もあわせようとはしなかった。

いま、やっぱりいくのをやめる、と言ったら、ラナは喜ぶだろうか。

うん、それでいい、一緒にティエラを立ち直らせようぜ。

顔一面の笑みを浮かべるラナが、アイシスには簡単に想像できた。アイシスの気持ちは揺れた。



我を求めよ。

夢で聞いた声がしたような気がして、アイシスは病室を見回した。  
あの幽霊はいなかった。

ふと、腰にさげた短剣に手をやると、それは手のなかでずっしりと重たかった。

その重みがアイシスの迷いを打ち消した。

「じゃあ、ぼくいくね」

「ああ」

ハロルドがうなずく。アイシスはラナを見た。ラナもアイシスを見た。

「ラナ」

親友の言葉がほしかった。九年間、ずっとそばで支え続けてくれた親友に、アイシスは祝福してほしかった。

ラナは口を開いた。しかし、祝福の言葉が発せられることはなかった。

ラナはまた目をそらしてしまった。

アイシスの胸は痛んだ。

ラナの悲しみも、理不尽だと思っ気持ちもよくわかる。

運命は、そのさなかにいる本人にしか語りかけてはくれないから。

「手紙を書くよ、ラナ。また絶対、会おうね」

アイシスはとびきりの笑顔でほほ笑んで見せると、かるやかに窓枠を蹴り、そのまま三階の病室から飛び降りた。

「あら？」

しばらくして、見回りにやってきた看護婦が、アイシスの姿が見えないのを不審がった。

「銀の髪のはうやは？」

「小便だよ」

そう言って、ハロルドは豪快に笑った。

ラナは窓のほうばかり見ている。ハロルドはそれに気づいていたが、なにも言わなかった。

いま、彼の息子たちは、大きな成長を求められているのだ。

胸の痛みも、苦しみもたくさんあるだろう。しかし、それなくしてどう大きくなれるだろう。

ハロルドは心の声を聞くことはできなかったが、たくさん心と

真剣に向き合ってきたので、世界の流れをなんとなく知ることができた。

「なあ、ラナ」と彼はさりげなく、「あいつにあいつの運命があるように、おまえにもおまえの運命があるかもしれないぜ。どうだ、ティエラを元通りにすることがそうだと思うか。それともこうか、アイシスのそばに居ることか？」

ラナは答えなかった。ただ、窓の向こうをじっと見つめていた。

太陽は中天にさしかかっている。

アイシスは、大通りを歩きながら、そういえばここをひとりで歩くのは初めてだったかと考えていた。

となり街へはたびたび訪れていたが、いつだつてとなりにはラナがいた。そしていつだつてラナは笑っていた。

アイシスが笑っているときはもちろん、泣いているときも、怒っているときも、ラナはとなりで笑っていた。

そうするといつのまにか、憤りや涙はどこかへ言ってしまった、かわりに元気がわいてくるのだ。

ラナが訪ねてきたときに、小石で窓を打って合図をするのはいつからだっただか。

あの音が聞こえた朝は、それがどんなに小さな音でもアイシスは起きることができた。

窓にこまかい傷がつくので神父さまにはよく怒られたが、アイシスはあの音が好きだった。

やがてアイシスは街の外に出た。

この先にいったことはなかったので、立ち話をしている男の人に道をたずねた。

教えられたほうを見ると、なるほど、太い道が一本まっすぐに伸びている。

これでは迷う心配もないだろう。アイシスは極度の方向音痴だった。

親切な男の人に礼を言い、アイシスは道をいそいだ。

迷う心配がなくなったので、アイシスは自由に考えごとをした。

もちろん、頭に浮かぶのはラナのことばかりだった。

ティエラの町にきたばかりのころを、アイシスはよく覚えている。

アイシスは修道院に預けられた。

妻を亡くしているハロルドは、ひとり息子のラナを育てるので手がいっぱいだったからだ。

修道院にはアイシスのほかにもいくらか子どもが預けられていた。彼らは新しい顔ぶれに興味をもち、積極的に話しかけたが、アイシスは一言も口をきかなかった。

彼にまつわる話を聞いていた神父さまは、彼が人間の言葉を理解できないのだと勘違いしたが、そうではなかった。

アイシスは不安と必死に戦っていたのだった。

まわりの人はもちろん、自分がだれかさえもわからないという不安。

おさないアイシスには荷が重すぎた。

ラナは毎日修道院に遊びにきた。アイシスはやはりラナにも口をきかなかった。

ほかの子どもたちは、しゃべらないアイシスとしだいに距離を置くようになったが、ラナは違った。

彼はいつも笑っていた。

神父さまに頼んで外出の許可をもらうと、ラナはいつもアイシスのある場所へとつれていった。

そこは見渡すかぎりの草原で、ただひとつ、大きな木が中心あたりに生えていた。

ラナはアイシスの手をひいて木の根に座らせると、なにも言わずに昼寝を始めるのだった。

あつというまに寝息をたてはじめる少年を、アイシスは驚いて見つめたものだった。

日が暮れるとまたアイシスの手を引いて修道院に帰り、次の日に

なるとまた彼は修道院にやってくる。  
そんな日がずっと続いた。

ラナは行き帰りの道では積極的に話しかけた。「おまえ、アイシスっていうんだな。俺はラナだ、よろしくな」だとか、「おまえ、声が出ないんだってな。やっぱり、つらいのか？」だとか。

しかし、その草原では彼はなにも話さなかった。

ある日、いつものようにラナが昼寝を始めると、アイシスはその木に登ってみることにした。

下からは空を仰ぐこともできないほどに茂った葉を見ていると、どうしてもその上へいつてみたくなつたのだ。

ラナを起こさないように気をつけながら、アイシスは一步一步登っていった。

幹には足をかけるのにちょうどいいこぶがいくつもあつたし、アイシスの身は軽かつたので、大きな木もわりとたやすく登ることができた。

気がつけばずいぶん高いところまでできていたようだ。

アイシスはてきとうな枝を見つけて腰をおろした。

あらためて周りを見渡してみると、地上にいたときとはまるで違う景色がそこに広がっていた。

「わあっ」アイシスは思わず声をあげた。「きれい……」

北を見れば幾重もの丘が連なっており、南に視線を転じれば、大小さまざまな山が、折り重なるようにかまえている。その景色は優しく、美しく、そして壮大だった。アイシスは気づけば知らない歌を口ずさんでいた。

ラナは、心地よい音階にうつすらとあけていた目を閉じ、今度こそ本当に昼寝を始めるのだった。

アイシスの足が止まった。

あのとき、閉ざされたアイシスの心を、また開いてくれたのはラナだった。

ラナがいなければアイシスはもっと長く孤独でいたままだっとうし、いまのようにうまく笑うこともできなかっただろう。

感謝、という言葉では表しきれそうにもない。

アイシスにはラナが必要だった。ラナのいない日々は想像したこともなかった。

しかしいま、アイシスはひとりだ。

「ラナ」

小さく呼んでみたが、もちろん返事などあるはずもない。ひとりで歩く道は、やけに広く感じた。

ラナはきつと怒っているだろう。  
もう口をきいてくれないかもしれない。

しかしアイシスは運命を追求しなければならない。

アイシスは首をふって湿った気持ちをふりはらった。  
ラナが気を悪くするのはしかたのないことだ。口をきいてくれな  
くたっていい。

そのときは、今度はぼくがラナのそばにいる番だ。

しばらくいくと右手に飾り気のない看板を見つけた。『ノト』と  
だけ書かれている。

空を見上げると、太陽がちょうど沈みきったところだった。

「あら？」

夕食を運んできた看護婦が、また不審気な声を出した。

「銀の髪の毛のぼつやと　栗色の髪の毛のぼつやは？」

ハロルドは優しくほほ笑んだ。「連れションだよ」

日がしずむと暗くなるのは早い。



もつすぐ星が見られるだろうと、ハロルドは窓の外を眺めて思った。

気づかないうちに鼻歌がもれる。  
ハロルド親子は音痴だ。

## 第五話：剣士の瞳

### 『聖伝』 第五話

ノトはずいぶん大きな街だった。大通りの広さはティエラの三倍はあるだろう。

通りの両端には店が建ち並んでいて、人の動きにあわせて、果物の甘いかおりや焼いた肉の食欲をそそるにおいなんかがただよってきた。

空はすっかり暗くなってきたが、まだまだ通りは活気に満ちていた。

すぐ近くでストールを巻いた婦人がリボンを買っていたので、宿の場所を教えてもらうことにした。

街中を歩いてまわるよりも、宿を一軒ずつ訪ねたほうがよほどいい。

おおくの街でそうあるように、ここでも宿はひとつの場所にかたまっていて、大通りをずっと進んだ先にその場所はあるという。

「それよりお嬢さん、どうかしら、この紫のリボンは。お嬢さんの髪はとても珍しい色をしているねえ、このリボンはきつとお似合いになるよ」

まいったな、とアイシスは言っつて、「ぼくはお嬢さんじゃありませんよ」とだけ答えておいた。

宿の場所はすぐに見つかった。どれもけっこう立派な建物で、三軒が並んでいた。

「いらっしやい。宿泊かい？」

「いえ、人を探しているんですけれど」

アイシスは受付に座るおじさんに、かの剣士の、聞いた限りすべての特徴を話した。

「髪も目も燃えるような金色で、背が高く、くすんだ白色のコートを着ていて、あとは……そうだ、髪は背中まで伸びていて、それから」

ひとつひとつ、指を折って数えながらアイシスは説明したが、おじさんは途中でそれを遮った。

「残念だけど、うちにそんな人は泊まっちゃいないよ。他じゃないかなあ。それで、お兄さんは泊まっていくのかい」

二軒目の宿でも同じ反応だった。

最後の望みをかけて三軒目をたずねるも、またもアイシスの説明は途中でさえぎられてしまった。

もしかして彼はもういつてしまったのだろうか。

それとも、そもそもこの方向が間違っていたのだろうか。

「ちょっとお兄さん、お待ちよ」

お礼を言って宿をあとにしようとすると、受付のおばさんが身を乗り出してアイシスを呼び止めた。

「そういう容姿の人ならうちに泊まっていращいませよ。五日ほど前からだったかしらねえ。いま名前を見てあげるから、ちょっとお待ちよ」

アイシスの心は躍った。やはり間違えてはいなかったのだ。

おばさんは、ソーセージのように張った指で、器用に帳簿をめくってみせた。

顔を近づけたり離したり、そうしてしばらく帳簿とにらめっこをしていたが、やがてひとりの名前を教えてくれた。

「えっと、お名前は『キース』だわね」

「キース……」

「いまは外出中だけど、もうすぐ帰ってくるんじゃないかしら。ここにきてから、彼いつもそつだもの。しばらく待っておおきよ。そこにかけていてくれてかまわないから」

アイシスは内心とても緊張していたが、つとめて笑ってありがとう、と言った。

宿はなかなか繁盛しているらしい。

受付の前にはたくさんテーブルと椅子が並んでいて、アイシスはそのうちのひとつに腰をかけたが、しばらくもするとほとんどの席が人で埋まった。

ちょうど食事時だし、出かけていた宿泊客が帰ってくる時間帯でもあるのだろう。

ちょっとした喫茶になっていろいろらしいそこは、コーヒーを手にした人たちの談笑する声でにぎやかだった。

入り口の扉が開けられるたび、アイシスはばね仕掛けの人形のように勢いよくふりかえった。

しかし金髪金目の青年の姿は見えなかった。

受付のおばさんは、部屋の鍵を渡すなり食堂に案内するなりして、ひとりひとりに愛想をふりまいていた。

アイシスは彼の外見的特徴しか知らなかったが、会えばそうとわかるはずだ、という根拠のない確信があった。

そして、六度目だろうか、木の扉がきしむ音にふりかえると、彼がそこに立っていた。

すらりと伸びた四肢はしかし細すぎず、コートを羽織っていても筋肉が動くのを感じることができる。

金色の髪は無造作にくくられていて、すこし長めの前髪の下で、同じく金色の瞳がすどく光っている。

切れ長の目は、アイシスをまっすぐ見つめていた。

アイシスはハロルドの言葉を思い出した。血濡れの剣を持った凄腕の剣士。

青年は腰にひとふりの剣をさげていて、あれが、と思うとアイシスの鼓動がはやくなった。

「おかえりなさい。キースさん」受付のおばさんは手に鍵をぶらさげて、「お客さんよ。その、銀の髪の」

キースというその青年はテーブルのあいだをぬうように進んできた。

アイシスは立ちあがって口を開いたが、それよりも先にキースが短くうながした。

「部屋へ」

それからキースは受付にいき、軽く頭をさげると鍵を受け取った。そのままふり返りもせず階段をさつさとのぼって行ってしまつものだから、アイシスは慌ててあとを追った。

階段を三段ほどのぼってから、アイシスは受付に向き直ると、おばさんにぺこりとお辞儀をした。

おばさんは丸い顔をほころばせて手をふった。

キースは部屋に入ると脱いだコートを外套かけに吊るし、湯をわかした。

アイシスがどうするべきか迷ったままにいるうちに、彼はいい香りのする茶を用意してくれた。

「かけて」

キースはアイシスに布張りのソファをすすめ、自分もその向かいに座った。

ちょうどいい熱さでいれられた茶は、一口飲むと香りが口のなかで広がり、アイシスの昂った気持ちをずいぶんと落ち着かせてくれた。

半分ほどを一息に飲んでしまってからアイシスは息をつき、改めて口を開いた。

「いきなり押しかけてすみません。ぼくはアイシスといいます。テイエラの町に住んでいました」

その、テイエラのことですが、とアイシスは言葉を続けた。

「町を救ってくれてありがとうございます。町民はみんな無事であなたのおかげだって、そう聞きました。それから、ぼく自身も助けてもらったって。ほんとうにありがとうございます」

アイシスは立ちあがって頭をさげた。キースは茶のカップを置いた。

「お礼を言う必要も、頭をさげる必要もない。心に従ったまでだ」

アイシスは驚いた。彼もまた、心の声を聞ける人物なのだ。

そう知ると、アイシスは確かめたくなった。

自分がそうであったように、キースも自分に対してなにかを感じたのかどうか。

そんなアイシスの気持ちを讀んだかのように、キースは口を開いた。

「このところ、ずっと私は運命の言葉を聞いていたから、きみに出会う日は近いと思っていた」

「運命の言葉って、運命って、ぼくたちが出会うということですか？」

キースはうなずいた。

「そう思っている。すくなくとも私は」

「ぼくもです」すかさずアイシスは答えた。「ぼくもそう感じていました。キースさんの話を聞かされたときに、ぼく、なぜだかどうしても会わなきゃならないような気がして。

変なやつと思われるかもしれないけれど、ぼくは幽霊を見て、その幽霊もあなたに会いに行くように言って」



そこまでまくしたてて、アイシスは顔が真っ赤になった。キースがわずかに笑ったからだ。

口の端に浮かんだ一瞬の笑みだったがアイシスは見逃さなかった。そこに嫌味な感情はふくまれていないように思えたが、アイシスは恥ずかしく思って小さくなった。

「恥ずかしく思うことはない。きみの言うことは理解できる」

またしてもアイシスは気持ちを読まれたように感じた。

「それよりも、まだ私は名乗っていなかったな」

「あ、でも受付のおばさんに教えてもらって」

「偽名だ」

「偽名？」

「ああ。私の名前はネットレト。ネットレト・ファウス。ネットレトと呼んでくれていい」

アイシスは目を丸くした。偽名をつかうといったら犯罪者か、ならんかの理由で世間から逃げている人と思えなかったからだ。

キースあらため ネットレトは、アイシスの表情でそれと悟ったのか、名は人の本質だ、とだけつけ加えた。

ネットレトはまったくつかめない人物だった。

彼は口数が少なく、必要以上のことを話さない。

しかしその目は鋭く、こちらの考えはすべて読まれているかのようである。

また、彼にはまるで隙がなかった。

もしもいま、アイシスが手に持っているカップをネットレトに投げつけたなら（そんなことは決してしないけれど）、彼は中身の茶さえもかぶることなく避けてしまうのではないか。

そう感じさせるだけの威圧感をネットレトは持っていた。

ふと部屋のなかの緊張感が増した。

なにがあつたのかとアイシスはネットレトを見たが、彼はドアのほうを睨んでいた。

かと思うと立ち上がり、おもむろに手をノブにかけると、勢いよくドアを押し開けた。

「うわっ」

廊下からすっとんきょうな声がして、それを聞いたアイシスもすっとんきょうな声をあげた。

「ラナ？」

「……あのときの」

ラナは突然開かれたドアにすっかり肝を抜かれたらしい。

ネットレトとドアとを交互に見ていたが、ふと部屋のなかにアイシスを見つけると飛びあがった。

「アイシス！」

「ラナっ、ど、どうして？」

ネットレトが半歩身を引くのと、満面の笑みでラナが部屋に飛びこんでくるのは同時だった。

突然のことにアイシスは目を白黒させた。

つい半日ほど前に、悲壮の思いでしばらくの別れを決意したばかりである。

大きすぎる喜びと驚きとが同時におしよせて、アイシスは声を出すことさえできなかった。

そんなふたりをよそに、ネットレトは新しいカップをひとつ用意し、茶をみつついれ直した。

「いや、驚いたなあ。ノックしようと思ったら、いきなりドアが開くんだもんよ」

そう言ってラナはだははと笑った。ハロルドとよく似た豪快な笑い方だ。

「でもラナ、どうしてここに」

「なんだよ、きちやいけなかったかよ」

ラナはそう言ったが、その顔を見ればいつもの軽口であることはすぐにわかった。

親父が助言してくれたんだ、とラナは言った。

「おまえの運命はなんだと思う、ってな。俺はよく考えてみたけど、運命なんて難しいことはわからなかった。だから自分で決めただ。俺はおまえのそばにいるよ。運命とか、そんなのは関係なく」

「ラナ」

アイシスの顔が華やいだ。

しかしそのときアイシスは大事なことを思い出した。ネトレトのことだ。

彼はふたりの会話を聞いているのか、それともまるで聞いていないのか、判別しがたい表情でいた。

「ご、ごめんなさい！ ぼくたち、自分のことばかりで……」

「ああ」

「こちらはラナ、ぼくの無二の親友です。あなたのことは、ラナとラナのお父さんから聞いたんです」

ラナはにかつと笑うと、日に灼けた右手をさしだして元気よく「よろしく！」とやった。ネットレトはその手をにぎり返した。

「あのときはいろいろありすぎて、お礼も言えなくて悪かった。あんたがいてくれなきゃ、俺たちどうなっていたかわかんねえ。ありがとう！」

アイシスはあわててラナの袖をひいた。「あんた、じゃないよ。ネットレトだよ」

「いい。堅苦しい雰囲気は好きじゃないから楽にしてくれ。きみも」

「あ、はい、わかりました」

「言ったそばから堅苦しくやってどうするんだよ」

ラナがいたずらっぽく笑い、アイシスは困ってしまつて笑うに笑えなくなつてしまった。

とにかく、ラナが加わつたことで部屋は格段ににぎやかになった。ラナはよくも悪くも愉快な少年で、彼がいるだけで場は盛りあがるのだ。

相変わらずネットレトは無口だったが、アイシスはすこし饒舌になった。

ほんのすこしの時間であったが、一度離れてみたことで、あらた

めてラナのとなりの居心地のよさを感じた。

「ところで、俺ずっと気になっていたんだけどさ」とラナが切り出した。

「俺を助けてくれたときのことだよ。なにが起こったのかわからなかったんだけど、三人の男たち、消えたよな。あれってネットレトがやったんだろっ?」

アイシスもラナも気づかなかったが、ネットレトの表情が、ほんのわずかばかり険しくなった。

いきなり核心を、と彼は心のなかでつぶやいた。

「ああ、そうだ」

「やっぱり！　すごいよな、どうやったんだよ」

「あれは」とネットレトは言って、「魔法だ」

ふたりは、使い古された言い方をするなら、鳩が豆鉄砲をくらったような、そんな顔になった。

まほう。

聞いたことはあるが、ラナにとってエルフの存在がそうであったように、それは伝説上の話だった。

おさない子どもを寝かしつけるために読んで聞かせる、勇者だと

か王子だとかの冒険譚に出てくるだけの言葉だった。

しかしラナには思い当たるふしがあった。

あのとき、あの山道で、男に受けた風の傷。間合いのずっと外から打たれた拳。

にわかには信じがたかったが、あれが魔法でなくてなんだというのだろう。

「魔法って、魔法使いの？」

「まあ、そうだ」

「げっ。そんなのありかよ。じゃあ、あんたは魔法使いなんだ？」

「まあ、そうだ」

うわっ、とラナは、悲鳴とも歓声ともつかない声をあげた。

アイシスはラナのようにそれらしい現象を見なかったので、やはり信じられないでいた。

しかし、その正体はわからなかったが、どこか引っかかるものを心に感じた。

「アイシス」

「へ？ あ、はいっ」

「きみは幽霊を見たと言っていたが、それこそ魔法の正体だ。こん

なに早くなるとは思わなかったが 見せよう、私の“力”を「

瞬間、部屋の空気ががらりと変わった。アイシスは体の奥がざわつくのを感じた。

となりのラナを見やると、ネットレトのようすにすっかり釘づけだ。

ネットレトはうすく口を開くと、小さな、しかしはっきりとした声でつぶやいた。

「呪われた王が、呪われた汝に命ずる。すべてを呑む力を我が右手に宿せ」

がたがたと窓が揺れた。

テーブルの上で、みつつのカップが耳障りな音をたてている。

アイシスは息を飲んだ。

ネットレトの全身が、黒い靄のようなもので覆われたかのように見えた。

それから彼は、まるで円のはじめと終わりをつなぐかのように、よりはっきりとした声でこう締めくくった。

「ヴァネッサ」



そのときだった。

まるで巨大な風柱がそこに出現したかのようで、ネトレトの金色の髪は舞い、服は風をはらんで波打った。

アイシスは思わず腕で顔を覆い、目をつぶった。

ようやくおさまったので目を開けてみれば、なんと人影がひとつ増えていた。

ふたりは声も出なかった。

それは全身を黒い衣で包んだ女の人だった。肌がおそろしく白い。唇だけがやけに赤く、官能的で、弓形にきゅっと曲げられている。

腕に、首に、足に金の装身具をつけており、髪はどう結わえてあるのか、見たこともない形にまとめあげられていた。

すこしくすんだ黄色の飾りをいくつも髪にさしこんであって、不可侵の黒さをもつ髪に、それはよく似合った。

彼女はネトレトの背にもたれかかり、白く伸びた腕を彼の胸元にたらしめていた。

その美しいようすといったらない。まるで、この世のものではないような。

アイシスはその感覚に覚えがあった。

久しいな、エルフの王よ。

「え？」

「え？」

先はアイシスの声で、あとはラナの声だ。ラナは驚いてアイシスを見た。

「えっと、ごめんなさい、どこかでお会いしましたっけ」

黒い女の人は、口元に手をあてて愉快そうに笑った。鈴の音のようない笑い声だった。

「おい、アイシス」

困惑した調子で、ラナがアイシスの肩をつかんだ。

「おまえ、なにひとりで話しているんだよ」

「え？ ……ええ？」

女の人は、またころころと笑った。

ほんに、可愛らしいわらしどもよな。

「しばらく黙っていてくれないか、ヴァネッサ。話がややこしくなる」

すっと目を細めると、女の人はネットレトに顔を寄せ、その通った

あごに指をすべらせると浮きあがった。ネットレトはため息をついた。案の定、ラナは変な声をあげた。

「うわっ！ な、なんだよあれ！」

対してアイシスは冷静だった。

彼女を見るにつれ、心に引っかかっていたものの正体がわかりはじめていた。

彼女は、とてもよく似ていたのだ。誕生日の朝にアイシスと呼んだ、あの幽霊に。

## 第六話：精霊の名と抱擁と

### 『聖伝』第六話

ラナの首は忙しかった。

彼は黒衣の女の人を見（驚きに口をなかば開けて）、アイシスを見（ようすを伺うように）、ネトレトを見てから（説明を求めるように）また女の人を見た。

何度まばたきしても、彼女はやはり浮いている。彼女のまとう衣は、風もないのにそよそよと揺らいでいた。

ラナがあまりにころころと表情をかえるので、アイシスは思わず笑ってしまった。

「なんだよ、あれ！ う、浮いてるっ」

あれ、とな。女人に向かってそれは失敬ぞ。

「げっ！ こっちくるな！」

女の方は身をくねらせると、花卉が風に舞うかのような優雅さで、ふわりとラナの前に顔をつきだした。ネトレトはため息をついた。

彼は苦勞して、怯えるラナとそれをからかう女の人とを落ち着かせ、わりとよく通る心地のいい声で話しはじめた。

「驚かせてすまない。彼女の名はヴァネッサ。アイシス、きみは幽霊を見たと言ったね」

アイシスはうなずいた。

「きみが見た幽霊と彼女とは同じ存在だよ」

うわっ、とラナが身をのけぞらせた。

アイシスの恐怖心は、世離れたその美しさに抑えこまれていたが、ラナの場合はそうでもないらしい。

ヴァネッサはそんな彼の怖がりようが面白くてしかたないようだ。

「おそらく、きみたちは精霊の存在を知らなかったのだろうな」

「本のなかの話だと……。精霊も、魔法も」

ネトレトは首をふった。「どちらもいまの世に生きている。国によつては日常に溶けこんでさえいる」

彼は、世界には数多くの精霊が住んでいて、彼女たちは どの精霊も女性の姿をしているのだということ すすんで人前に姿を現すことはまずないのだと言った。

ただ、主と決めた人物に呼ばれたときだけ現れ、その力を貸すのだという。

「精霊についての詳しい話はいずれ。とにかく、魔法も精霊も存在するということとは理解してくれたね」

「理解するもなにも」とようやくすこし落ち着いたらしいラナが、  
「信じるしかねえや。実際この目で見ちまったんだから」

ならいい、とネットレトは言った。

「ラナは先に“魔法使い”といったが、魔法とはそもそも精霊の力を借りているだけのものだ。そういう力を持つ者のことを正しくは魔導師と呼ぶんだがね。

私も、私自身に力はないが、このヴァネッサを呼び、彼女の力をあやつることはできる。あのととき、山道で男たちが消えたのはこ  
ういうわけだ。彼女は 呑むんだよ」

「のむ？」

ネットレトはうなずいた。

「呑むんだ。すべてを、魂すら残さず」

ヴァネッサがほほ、と笑った。

アイシスは突然おそろしくなった。

となりを見れば、ラナも同じ気持ちでいるようで、髪と同じ栗色をした目にまた恐怖の色が浮かんでいる。

そのような目で見ると。わらわは鬼ではない。そんなんでも呑むわけではないよ。

「そ、そうですね。ごめんなさい」アイシスは顔を真っ赤にして、

なぜか、よろしく願います、とつけ加えた。

「おい、おまえさつきから変だぞ。だれと会話しているんだよ」

「え？」

アイシスとラナは、お互いに目を丸くして顔を見合わせた。

それも私の言いたかったことなんだが、とネトレトが口をはさんだ。

「ヴァネツサの声はだれにでも聞こえるというわけではない。精霊の声を聞けるのは、精霊とともに生きるものだけだ」

とたん、アイシスは身がざわつくのを感じた。

夢で見た神々しく美しい幽霊の姿が脳裏をよぎった。

心が大きな声で叫んだ。

そうか！ そうか！ 彼女は幽霊ではなかった、精霊だった。

ぼくはエルフで、精霊とともに生きているのだ。

気づかなかっただけで、彼女はいつもぼくとともにいた。

言葉ではなく、心で理解することがアイシスにはできた。

たくさんの物事が、一本の線につながれていくような気がした。

『十と六の星月がめぐるとき、彼に光はふりそそぐ』。

光とはかの精霊のことだった。それをルキア王は知っていたのだ。

アイシスは精霊の加護を受けて生まれた王子だったのだ。

だから彼は二度も襲われた。彼の力を知り、それをどうにかしようとするものたちによって。

ネトレトに惹かれたのは、彼のそばにいる精霊を感じられたからに違いない。

いくつものつながりをアイシスは見出したが、するとまた新しい疑問がふつふつとわいてきた。

アイシスはそれをすべてネトレトに説明してもらいたかったが、彼が口を開くよりもさきに、ラナのすばらしく気の抜けた声があった。

「アイシス……おまえ、実はエルフで、エルフの王子で、しかも魔法使いだったのか？」

彼は夢を見ているような声で、すげえ、と言った。

それから三人は食事をとることにした。

もっと聞きたいというアイシスの声を、腹の音がさえぎったからだ。

「あ、悪い」

音の主は、あまり悪びれずに謝ると、がははと豪快に笑った。食事にしよう、とネトレトが言った。



ふたりが気づいたときにはヴァネッサの姿が見えなかった。かえった、とネットレトは言う。

「彼女らには彼女らの住む世界があるし、そこそこをつなぐのは、けっこう骨が折れる作業なんだ」

ネットレトは抽象的に説明してみせた。おかげでアイシスたちはずんなりとそれを理解できた。

三人は階段をおりて食堂に向かった。

受付の前を通ったが、あのおばさんの姿はなく、代わりにひしゃげた（といつては失礼だが）おじさんが座ったまま居眠りをしているようだった。

おばさんとおじさんとは、足して二でわるべきだな、とラナは思った。

出された食事はけっこうな量があったが、三人は残すことなくすべて平らげた。

アイシスはあまり食べないほうであったが、そのぶんラナがよく手伝ってくれるし、ネットレトもよく食べた。

ただ、彼がごく自然にピーマンを皿のわきによけたのには驚いた。

アイシスの視線に気づくと、ネットレトはすこしばつが悪そうに、「苦手なんだ」と言った。

そこでラナの出番となったのだが、ふたりはなんとなく嬉しかった。まるで隙を見せないネットレトにも、弱い部分があることを知っ

たからだ。

気づかないうちにふたりが感じていた壁は、それですいぶんと小さくなった。

食事が終わるとコーヒーが運ばれてきたが、アイシスもラナも口をつけなかった。

アイシスは砂糖を山ほど入れれば飲めたのだが、すこし気恥ずかしかったので飲まなかった。

代金はネットレトがはらった。

それで三人はそうそうに部屋に戻り、アイシスは話の続きをせがんだ。

かまわない、とネットレトは快く引き受けてくれた。

「ただし、理解することは大切だが、頭で考える必要はない。まずは言葉の響きを理解するように。そうするといずれ頭も理解する」

ふたりはうなずいたが、これはなかなか難しいことだった。

言葉の意味は頭で理解できるが、響きを理解するのは心の役目だった。

そして、これはあとから教えられることだが、精霊とともに暮らすためには心をつまく働かせてやる必要があるのだ。

ネットレトはアイシスのもつ魔導師としての可能性を広げるため、気づかれないうちにも努力をしていたというわけだ。

「まず、精霊の話をしよう。彼女らの存在については聞いてくれる

な、それは多くの学者が研究しても見出せない答えのひとつだから。ただ私が知っているのは、精霊には六の特性があつて、水と火、風と地、それから光と闇とにわけられる。彼女らの力はその特性によるものだ。ここまではわかるか」

「とてもわかりやすいよ」とアイシスは言った。

「魔術とは、精霊のもつ力のことだ。水の精霊は水をまとうし、火の精霊は火を噴く。それが魔術だ。人は精霊を呼び、彼女らに命令して魔術を使うが、つまりこれが魔法だ。

魔法はつまり、魔を使う方法ということで、論理に従うものではない。心に従うものだ。すこし難しいが？」

「なんとなく」とラナはもみあげの髪をいじりながら（これは考え事をするときの彼の癖だ）、「響きはわかるよ。意味はわからねえけど」

「上出来だ」とネットレトは言った。

「精霊を　こういう言い方はあまり好まないが　使役するには心の自立が必要だ。心が自立していて、意思が強くなければ精霊は言うことを聞いてくれないものだ」

「意思の強さが精霊の　つまり魔法の強さにつながるということ？」

「そういうことだ。逆に、意志が弱いまま精霊を使役しようとする　と、心が精霊に食われる」

食われたらどうなるんだ、とラナがこわこわといった調子でたずねた。

「心がなければ体はただの肉の器だ。やがて枯れる」

すっかりふたりの顔が青ざめてしまったのを見て、ネットレトは釘をさすようにこう言った。

「生半可な気持ちで“魔法使い”にはなれないということだ。それから、今日はもう遅い。休むことも大切だ」

有無を言わせない口調で、ネットレトは話をきりあげた。

寝場所をどうしようか、とアイシスは言った。

部屋にベッドはひとつしかなく、あとはあまり上等でないソファがひとつあるばかりだ。

別の部屋をとろうかとも考えたが、気づけば日付もかわるころで、受付のおじさんもおばさんも眠ってしまったことだろう。

「ベッドとソファを使えばいい」とネットレトは言った。「私は立つたままでも休めるから」

それはできない、とアイシスもラナも反対した。

突然おしかけたのは自分たちなのに、寝場所まで取ることはとて

もできなかった。

しかし、彼ら以上にネトレトは頑固だった。  
きみたちは客なのだから、と彼は言い張った。

そこで三人は妥協点を見つけなければならなかった。

結局、アイシスとラナのふたりがベッドで眠り、ネトレトはソファを使うことになった。

それでもアイシスは気が引けたが、気にする必要はないとネトレトは言うし、事実彼は無理をしているようではなかった。

アイシスはお礼を言うつとベッドにもぐりこんだが、さきに体を伸ばしていたラナは、驚いたことにもう寝息をたてていた。

「疲れていたんだね」

アイシスは言い、ネトレトはソファに座って足を組んだ。

「見たところ、怪我也治りきつてはいないようだ」

「うん」

アイシスは親友の寝顔をまじまじと見た。

一年中日に灼けた肌、栗色のかたい髪、まつすぐに並んだ短いまつげ。

ずっと以前、草原に連れ出してくれたときに見た寝顔とまるで変わっていないように見えた。

「いい親友をもっているんだな、きみは」

アイシスはほほ笑んだ。ラナがほめられるとアイシスも嬉しかった。

「おやすみなさい」

そしてアイシスは夢を見る。

そこはなにもない空間で、色さえもなかった。

自分と、彼女だけがそこにいて、息づいて色を放っているのはそれしかなかった。

「あなたは幽霊じゃなかったんだ」

アイシスは彼女にほほ笑みかけた。彼女もほほ笑みを返した。

「精霊だったんだ。そして、ぼくたちは共にいたんだね」

王よ、我はいつもそなたを見ていた。そなたが王として目覚めるのを、ずっと待っておった。

「『十と六の星月がめぐるとき』、つまりぼくは十六歳になって、王として認められたの?」

彼女はうなずいた。

それがそなたらエルフのしきたりだから。

「父さんはこうなることを知っていたんだね」

彼女は遠い景色を見るときのように目を細めた。

前王とはよく話をしたものだ。

それからふたりはたくさんのお話を話した。それは言葉によるものではなかった。

アイシスは自然と、心で精霊と言葉を交わしていた。

じきに夜が明ける。

アイシスはうなずいた。

「最後にひとつだけ聞いてもいいかな。あなたの名前を」

彼女はふわりと浮きあがり、アイシスにそっと近づいた。

触れられていないはずなのに、アイシスは抱きしめられたような温かさを感じた。

ユフィ。

そう言って彼女はまた体を離れた。

我が名はユフィロスレジア。王よ、我が名を呼び、我を求めよ。

アイシスは目を覚ました。窓から入る光ですっかり部屋のなかは明るかった。

ラナはまだ眠っていて、ネットレトは起きて湯をわかしているところだった。

「おはよう」

アイシスが言うと、ネットレトも控えめな挨拶を返した。

茶の香りが部屋に満ちるころ、ようやくラナが起き上がった。

彼はひとつ伸びをすると、眠りから覚めたばかりとは思えない元気で「おはよう！」と言った。

アイシスは声を出して笑った。

朝食もネットレトが会計をすませた。

アイシスはとても申し訳なく思ったが、やはり彼は気にするなと言いつし、アイシスたちの財布はとても軽かった。

「金のことなら気にするな。少し前に寄った街でいくら稼いだし、なくなればまた稼げばいい」

聞けば、彼はその腕っ節を生かし、用心棒だの傭兵だの、ときに



は魔物を狩るだのして金を稼ぎ、そうしながら旅をしているのだという。

魔物がいることは聞いていたが見たことはなかったし、ティエラはその被害に遭ったこともなかったためにアイシスは驚いた。

そして三人は宿を出た。

受付には例のおばさんが座っていて、ネットレトが鍵を預けにいくと、いつもの笑顔がさらに度を増し、頬が少女のように赤らむものだった。

「そりゃネットレトはいい男だけれど」とラナがアイシスに耳打ちした。「あのおばさんは守備範囲外だろう」

「ラナ！」

しい、とやってアイシスはラナをたしなめた。

女の人は、年齢の問題になるときどきすごく恐ろしいのだ。

どうする、とネットレトが言ったのは宿の前だった。

「私はもうすこしここに泊まるが、アイシス、私に会いに行くよう告げたまきの幽霊は、いまどう言っている」

ネットレトも軽口をたたくのか、とふたりはすこし感心した。

ラナはアイシスを見た。この先どうするか、ネットレトに会ってから考えるとアイシスは言ったが、やはり彼についていくのだろうか。ラナの脳裏を一瞬ティエラの町が、父親の顔がよぎったが、彼はアイシスについていくと決めた。答えを出すのはアイシスだ。

「そのことについて幽霊はなにも言わなかったけど、ぼくはネットレトについていきたい」

アイシスはきつぱりと迷いなくそう言った。

ネットレトはうなずき、わかった、とだけ答えた。

「なら、私は図書館にいくが」

「げっ」

信じられない、といった顔つきで、ラナが声をあげた。

ラナは勉強というものがとにかく嫌いで、文字が並んでいるのを見るのさえ苦痛なのだ。

図書館はティエラにもあったが、彼がそこを訪れたのは利用のしかたを教わるためのただ一度だけだった。

「ぼくもいく」

「げっ、まじかよ」

アイシスは自分のことをもつとよく知りたかった。

幼いころの記憶は戻ったが、追って深くまで思い出そうとすると、やはり完全ではないようだった。

ところどころに靄がかかっていて、それがアイシスの邪魔をするのだった。

それからもうひとつ、彼にはどうしても知りたいことがあった。黒ずくめの男たちのことだ。

アイシスは彼らに二度も襲われている。

彼らはなに者で、なんの目的があってアイシスを狙うのか。

図書館にその答えがあるとは思わなかったが、それにつながる情報をアイシスは得たかった。

「俺はごめんだね。好きに観光でもしておくよ」

苦いものを飲み下したときのような顔でラナが言い、夕方に戻ることを約束して、アイシスたちは宿の前で別れることにした。

## 第七話：黒の騎士団

### 『聖伝』 第七話

空は機嫌よく晴れていて、大通りは商売の準備をする人たちの活気にあふれていた。

いまの時間帯なら、きつとテイエラにいたころだと朝の礼拝をしているのだろう。

修道院のとなりには聖堂があつて、朝の礼拝がおこなわれるのだが、アイシスはそこが好きだった。

入り口の大きな扉の正面には聖人の像があつて、いつだったか、神父さまがあればキグナディウスさまだと教えてくれた。

あの聖堂も燃えたのかと思うと胸が苦しかった。

図書館に向かう道すがら、アイシスは今朝に見た夢の話をした。

「ぼくは彼女とたくさん話をしたんだ。彼女は代々のエルフ王に仕えていて、父さんのことも話してくれた」

そうか、とネットレトは言った。

そのときアイシスは、ひとつ気になっていたことを思い出した。

「ねえ、ネットレト」

「ああ」

「ネットレトは、ぼくがどういった存在かって聞いても驚かないの？  
その、エルフだっていうこと」

「ああ」

ネットレトはふと目線をあげた。  
わかりやすい言葉を探しているようだった。

「私はもともときみがそうだと エルフの王となる人だと知っていたから。なぜかっていうとヴァネッサは闇の精霊で、闇は光に惹かれるからだ。」

光の精霊はエルフ王にしか使役できない」

続けて彼が言うには、彼の故郷では数こそ少なかったが数人のエルフが人とともに暮らしていたという。アイシスは驚いた、自分  
はなんと狭い世界に生きていたのかと。

彼は魔法も、精霊も、記憶を取り戻すまではエルフの存在さえも  
伝説だと思っていたのだから。

「彼女は名前を覚えてくれた。ユフィロスレジアと言っていたよ」

「それはいいことだ。彼女がきみを認めたということだ」

そうしているうちに図書館についた。テイエラにあった、一見すれば民家と変わらない建物とはまるで違った。

三階建てで造りも古く、しっかりとしており、いかにもラナが近  
寄りなさそうだとアイシスは苦笑した。

本は驚くほどたくさんあった。

司書のおばさんは優しく、どれでも好きなものを見ていいからね、借りたいときは私にお言い、と言ってくれた。

アイシスはお礼を言い、適当な本を抜き出してぱらぱらとやった。すこし古びた紙のにおいがして、アイシスは思わずうつとりとした。

彼は本を読むほうではなかったが、この独特のにおいは嫌いじゃなかった。

「ここからは別行動としよう」とネットレトは言った。

アイシスはうなずき、昼前にここで、と約束をするとネットレトはさっさと本を探しにいつてしまった。

彼はこの街にきてからずっと図書館に通っているのだ。どういった本を読み、なにを調べているのかを聞いてもうまくはぐらかされてしまったが。

アイシスはまず、エルフ語で書かれた本を手にとってみた。なぜなら彼はエルフだ。そして幼いころはエルフ語のなかで育ってきた。

しかしいまこうして問題なく暮らせているのは、アイシスがふたつの言葉を習っていたからだ。

もうひとつというのはすなわち共通語で、これは人間が話す言葉

だった。

よほど森の奥深くに住んでいるエルフでない限り、彼らはエルフ語と共通語とを習うのだった。

期待して開いた本を、しかしアイシスは読むことができなかった。それもしかたのないことだ。なぜなら、アイシスは九年ものあいだ、その言葉をすっかり忘れていたのだから。

それに当時の彼はまだ幼く、すべてのエルフ語を知っていたわけでもなかった。

ときどき意味のわかる単語を見つけたが、とても読めるまでにはいたらなかった。

アイシスは残念に思いながら本を戻した。

エルフ語はたしか、それは美しい響きの言葉だったはずだ。

アイシスがいま口にできるエルフ語は、気づかないうちに歌っていたあの歌しかなかった。

しかしその歌詞の意味もいまではわからないのだ。

それからアイシスはしばらく、たくさんある棚のあいだを縫うように歩いてまわって楽しんだ。

図書館にはあまり人がおらず、いても気難しい顔をして本とにらめっこしているような人ばかりであった。

赤だの青だの色とりどりの本が並ぶのを見ると、ふと気になる題名を見つけてアイシスは足を止めた。

背表紙には『黒の騎士団』と書かれている。

アイシスはなにげなく本を棚から抜き出したが、思わず驚きの声をあげそうになった。

表紙には複雑な模様が描かれていて、それがあの憎むべき男たちに施されていた刺青ととてもよく似ていたからだ。

アイシスは確信し、その厚みのある本を手に閲覧席に腰をおろした。

すこし離れた席にはネットレトが座っていたが（彼はおそろしく分厚い本を読んでいて、ほかにも二冊の本が彼のそばで読まれる番を待っていた）、とても真剣な顔つきをしていたので声はかけなかった。

彼はやはり髪をひとつにくくっていて、しっかりと太い首が見えていた。

アイシスは決意を固めると、どっしりとした本を読み始めた。

黒の騎士団は、もとはふつつの宗教団体であった、とその本には書かれていた。

『 彼らは破の神ゼイノスを崇拜している。彼らをまとめているのは“あの方”と呼ばれる人物であるが、その姿を見た者はもちろん、名前を聞いた者もない。』

黒の騎士団はぜひぶんと昔から活動しているが、当初からいまにいたるまで指導者はいつも“あの方”と呼ばれている。おそらく指導者は世襲されるのだらう。』



アイシスはページをめくった。知らないうちに眉間にしわが寄っていた。

まさか宗教団体であったなんて。

破の神ゼイノスのことは神父さまに教わっていたが、彼は新たな命のために古い樹を切る神だ。樹を切るときに彼はいつも涙を流し、その涙が地に染みて命が芽吹くのだ。

それを崇める団体が、どうして罪もない町を焼き払ったりなどしよう。

『彼らが黒の騎士団と呼ばれる所以はそのいでたちにある。彼らはいつも黒いローブをまとっている。そして顔には刺青をいれていて、その模様が複雑になるにつれて団体内での階位が高いことを表す。彼らのなかには黒の騎士団とは無関係であると装って、日常生活に紛れている者もいるが、そういう者は刺青を顔ではなく右肩から胸にかけて施す』

アイシスの脳裏には、九年前の山道がいまやありありと浮かんでいた。

炎を背に立つ男たち。炎風に揺れる黒のローブ、そして奇妙な顔の刺青。

子を探して狂ったように叫ぶ母と、母を求めて泣きわめく子の姿を、あの日アイシスはいつたいたいどれだけ目にしたことだろう。

アイシスの鼓動が速くなった。ひとつ心臓が動くたび、アイシスの体も震えた。

いけない、と思ったときには遅かった。  
視界はかすみ、体が揺れた。

呼吸がおそろしく速くなり、息が苦しくなった。  
座っていることも困難になり、アイシスは机に突っ伏した。

苦しさに涙があふれて止まらなかった。耳鳴りがした。世界にひとり取り残されたかのような気持ちがあった。

「落ち着いて」

ふと優しい声があった。

必死の思いで目を開けると、白い霧の向こうに金色の光が見える。

ユフイ？

アイシスは声を出そうとしたが叶わなかった。

光の正体はネットレトだった。

アイシスの異変にすばやく気づいたネットレトは、腰の布袋をとって中身を出してしまい、それをアイシスの鼻と口とにあてがった。アイシスの乾いた唇が動いたが、言葉を聞き取ることはできなかった。

ネットレトはアイシスを椅子から抱き下ろし、膝の上に頭を置いてやって寝かせた。

アイシスは涙に濡れた目をすこし開けたが、すぐにまた閉じた。

その場に居合わせた数人が、なにがあったのかとこちらをうかがっている。

「大変！」という金切り声が聞こえたかと思うと、司書のおばさんが走ってやってくるではないか。

「お医者さまを呼ばなきゃ！　ねえどうしたの、なにがあったの？　この子、病気なの？」

「心配はいりません。こうしていれば落ち着きますから」

事実、ネットレトがそう言っているうちにアイシスの呼吸はしだいに落ち着きを取り戻していた。

それより人払いを頼めませんか、とネットレトは言った。それから風通しのいい場所に連れていきたいんですが。

おばさんは使命感を目にうなずき、ぼつてりと太った体を揺らして人を遠ざげにかかった。

やがて人を払い終えたおばさんが、ネットレトを外に案内してくれた。

ネットレトはアイシスの肩を抱き、膝を抱えて持ち上げる。小柄なアイシスはとても軽かった。

うつすらとアイシスの目が開く。

「大丈夫だ」

真っ赤になったアイシスの顔を見て、ネトレトの胸は痛んだ。

案内されたのは中庭で、一面に芝生が敷き詰められていた。そこにアイシスをそつと寝かすと、わりとすぐに彼は回復し、話せるまでになった。

「ありがとう」

まずアイシスはそう言った。それから彼は、「ぼく、病気なの？」

「病気といえば病気だが、きみが心配しているような類の病気ではないよ」

ネトレトはつとめて優しくそう言った。アイシスはまだ不安げな顔つきを拭えない。

「どうしてぼくは、こんなふうになるのかなあ」

「それは、きみにはつらい思い出があって、きみはそのつらさと戦っているからだ。戦いには痛みが伴う」

ネトレトはうまく答えた。アイシスは小さくうなずいた。

アイシスはぐっしょりと汗をかいており、ネトレトは額にはりついた一束の髪を指でどかしてやった。

ネトレトはまるで笑わない人だった。

アイシスが彼をノトに訪ねたあの日、わずかに一瞬口の端をあげて見せただけにすぎない。

しかし彼の心がとても優しいことをアイシスは感じた。

「すこし眠るといい」

心地よい声の響きにアイシスは目を閉じた。

アイシスがすっかり眠ってしまつたと、ネトレトは彼をおぶつて宿へ帰ることにした。

汗でしめつた服を着たままでいたら、この寒さだ、アイシスは風邪をひいてしまうだろう。

ネトレトは手早く本を直し、そのときアイシスが読んでいたのだろう本が目に入った。

背表紙には『黒の騎士団』と書かれている。発作の原因はこれだったか。

宿に帰ると、アイシスを負って両手がふさがっているネトレトのために、受付のおばさんが部屋の鍵を開けてくれた。

ネトレトはお礼を言い、体を拭けるものを借りられないか頼んでみた。

おばさんは愛想よくうなずくと、清潔そうなタオルを三枚も貸してくれた。タオルからは太陽のかおりがした。

まだラナは帰ってきていないようだった。

じきにアイシスが目を覚ましたので、ネトレトは予備の下着を貸し与えると部屋を出ていった。飾りのない麻のシャツだった。

「タオルを借りたから、それでよく体を拭くといい」

アイシスは申し訳ないやら恥ずかしいやらで顔が真っ赤になった。あんな泣き顔を見られてしまうなんて。ネトレトとはまだ出会って間もないというのに。

それに、彼には迷惑ばかりかけている。アイシスは大きくため息をついた。

ネトレトに借りたシャツだけではすこし肌寒かったので、アイシスは体に毛布を巻きつけた。

ネトレトはコートを貸そうと言ったが、残念なことにアイシスの背は低い。引きずってしまうのは目に見えていて、それは癪だし恥ずかしいのでアイシスは丁寧に断った。

そうしているあいだにネトレトが洗い桶を借りてくれたので、宿の裏で汗に濡れた衣服を洗った。

ときおり冷たい風が吹きつけてアイシスは体を震わせたが、洗った衣服を干してしまい、風に揺られているのを見るのはなんだか心地がよかった。

「気分はどうだ」

いつの間にかネットレトがうしろに立っていた。

アイシスは大きく伸びをすると、気恥ずかしさにすこし顔を赤くしてふり向いた。

「すっかり元気だよ。あなたには助けられてばかりだ、ありがとう」

「ならいい」

ネットレトは宿の外壁に背中をもたせかけた。そしてアイシスの発作について教えてくれた。

その発作はひどく興奮したときや、大きなショックを受けたときに起こるとのこと。

息ができないように感じるが、実は苦しいのは息を吸いすぎているせいだということ。

それを治めるためには、紙袋や布袋で鼻と口を覆ってやる必要があるということ。

「苦しいだろうが、落ち着いて対処すれば早く治まる」

「ありがとう。まずはあまり気を昂らせないことだね」

「そうだな」

アイシスは無邪気に笑い、その笑顔がネットレトには痛々しかった。

まだ日が高いうちにラナも帰ってきた。

ネトレトはあらかじめラナに昼ごはんの代金を渡していたが、どうやら彼は違うことにそれを使ってしまったようだ。

彼はごそごそと懐をまさぐっていたが、小さな袋を取り出すとアイシスに差し出した。

「こんなもの見つけたぜ。おまえの好きな砂糖菓子」

アイシスは喜びの歓声をあげた。

「これ、となり街でも時々しか手に入らないもんな」

「ありがとう、ラナ！ ねえ、みんなと一緒に食べようよ」

アイシスは弾むようにして椅子から立ち上がり、やかんを取って湯をわかし始めた。

ネトレトは驚いたようすでラナを見ていた。

この少年は、親友を喜ばせるために昼ごはんも食べずにいたというのか。

ネトレトの視線に気づき、なんだよ、とラナはすこし困ったように笑った。

「俺もけっこう好きなんだよ、あれ。ちょっと甘いけどな」

「そうか」



「なあ。ネットレトはさ、寂しかったりしないのか？」

ネットレトのとなりに腰をおろしながら、すこし遠慮がちにラナが言った。

ネットレトは答えず、ただその面を見た。

「その、気を悪くさせたらごめん。ずっと旅をしているんだろう？  
ひとりだね」

「慣れている」

「そっか」

あの、いい香りのするお茶ってどこにあるの。  
アイシスがそう言うのが聞こえて、ネットレトは腰をあげた。ラナはその後ろ姿を見つめていた。

「……あまい」

砂糖菓子はネットレトの好みにあわなかったらしい。彼は一口噛むと同時に固まった。

「ぼくは好きだけどなあ」

「でもまあ、食べすぎるなよ。体に悪いぞ」

仲のいいふたりは兄弟のようにも見えた。  
茶を飲むネットレトの脳裏を一瞬過去の思い出がよぎる。

寂しかったりしないのか？ ラナの問いかけがまた聞こえたよう  
な気がしたが、ネットレトは小さく首をふった。

慣れている。彼は孤独にすっかり慣れてしまっていた。  
どれだけの時間、ひとりで道を歩いたか。

アイシスに出会うことは旅の目的のひとつであった。  
いつか出会うと思っていたエルフの少年は、しかしネットレトの想  
像とはおおきく違ってとても陽気だった。  
そのことは彼をすこし困惑させた。

しかし、それは彼にとって嬉しい困惑だった 彼自身がまだ気  
づいていなくても。

## 第八話：言霊

### 『聖伝』第八話

次の日、その次の日と、三人はだいたい同じような二日をすごした。

ラナは目的もなくノトの街をうろつき歩き、アイシスとネットレトは図書館でそれぞれ本を読んだ。

アイシスは二日かけて『黒の騎士団』の本を読んだが、いくぶんか気持ちの昂りを抑制できるようになっていたので、もう発作が起きることはなかった。

本にはたくさんのお話が書かれていたが、そのほとんどが推測にすぎなかった。なにしろ黒の騎士団には謎が多かった。

ひとつ明らかになったのは、最近彼らの動きが活発化しているという、あまり嬉しくない事実だった。

しかしアイシスは当面の敵を知ることができた。これは心強いことだった。

「昼前にここを発つ」

ネットレトは短くそう言うと、ふたりを街の大通りへと連れていった。

彼が向かったのは武具屋だった。そして彼は好きな剣を選ぶように言い、ふたりはおおいに驚いた。

「なにが起こるとも知れないのに」とネットレトはそんなふたりにこそ驚き、「丸腰で山道を歩かせられるわけがないだろう」

「でも、ぼくはラナにもらった短剣があるけど」

ネットレトは肩をすくめて見せた。

たしかにそれはすばらしい短剣だが、有事の際に役立つとは思わない、と。

アイシスは気が進まなかったが、あきらめて剣を選ぶことにした。ラナも同じように乗り気ではないようだった。

「俺はこんな危なっかしいのより、体を使うほうが好きだな」

しかし結局はふたりとも剣を持つことになる。

そうしないとこの先に連れてはいけないと、最終宣告にも似た注意を受けたからだ。

「血は流れる。問題はそれが自分のものか、敵のものかだ」

そう言うネットレトの横顔は、すこし翳って見えた。

彼はいままでにどれだけ命を奪ったのだろう。しかしそれは仕方のないことだったに違いない。殺さなければ殺される、そういう環境を彼は旅してきたのだから。

なんの心配もいらぬ生活を送り、そのうえ剣を持ちたくないな

どと駄々をこねた自分を、アイシスはひどく愚かに思った。

そう思ったら素直に謝るのがアイシスにもラナにも言える美德だった。

ふたりは謝り、その素直さは（顔には出さなかったが）多少ネットをまごつかせた。

アイシスは、細身で軽く、飾りらしい飾りといえば持ち手の尻に埋めこまれた石ひとつしかない剣を選んだ。

石の色は青く、それはアイシスの瞳の色とよく似ていた。

ラナはすこし幅の広い剣を選び、そちらにはまるで飾り気がなかった。

しかしそれはラナにとってもよく似合うのだった。

ネットが代金を払っているうちに、店の主人が剣をそれぞれの腰帯に結わえてくれた。

「最近によく剣が売れてね」と主人は言った。

「複雑な気持ちだよ。なにしろ物騒になったからね、街に住んでいるながら剣を佩いている人も多いのさ」

主人はすこし悲しそうにほほ笑み、でもこいつはきつときみらをよく守ってくれるよ、と言った。

三人は主人に礼を言い、ノトの街をあとにした。

どこに向かうの、とたずねると、北西、とだけネットレトは答えた。北西にはタリファという大きな街があるらしい。ネットレトはその図書館にいつてみたいのだからと言う。

「でも、図書館ばかりいつて、ネットレトはなにを調べているの？」

ネットレトは目をつぶり、すこし首を捻った。

アイシスは答えを待ったが、彼は答えなかった。

「なんかさあ」

ノトで買ってきた昼ごはんを食べながら、ラナがアイシスに耳打ちした。

「ネットレトって、本当になにも話さないよな。そりゃ、助けてもらったし悪いやつじゃないとは思っけど、信用していいもんなのか？」

すこし離れた木の下に立ち、腕を組んで考え事をしているふうなネットレトを見、アイシスはよく考えてみた。

たしかにラナの言う通りではある。

出会ったばかりの男に、しかもその素性も旅の目的もよく知らないままついていくなんて、はたから見れば信じられないものと映るかもしれない。

しかしアイシスはネットレトを信じようと思っていた。

信じてもいい、そう告げる声を聞いたからだ。それに、彼自身ネットレトのことがどうやら好きなようだったから。

「彼はきつと……いつか、話してくれるよ」

そうか、とラナは言った。

「おまえがそう思うなら反対しないよ。俺はおまえについていくつて決めたんだから」

乾いた肉をはさんだ、なかなか美味しいサンドウィッチを食べてしまつと、そろそろいこうかとネットレトが声をかけた。

彼はごはんを食べたのだろうか。たしかに読めない人物ではある。

歩きながら、ふたりはネットレトに精霊やら魔法やらの話をせがんだ。

つい三日ほど前までそれは本の中の話だったが、いま、彼らはその夢物語のなかにいた。それはとても心が躍ることだった。

生半可な気持ちでいると命を落とすとネットレトは言ったが、ティエラを出てから危なげなことはなにもなかったし、それになにより彼らは若かった。

若さとはときに人を盲目にさせる。

ネットレトはすこし眉をひそめたがなにも言わなかった。いずれ分かるときがくるだろう。

「なにを話せばいいか」

「ぼくは、魔法の話が聞きたいな。ぼくは魔法を空想の話だと思っ

ていたけど、そうでない地域もあるんでしょう？ ネットレトの故郷とかでは？」

「ああ。私はユリシアで生まれ育ったが、あの国の人たちは魔法の存在を現実として知っていた」

「ユリシアって、エヴァノンの北にある国だろ」

ネットレトはうなずいた。ティエラの町からもあまり出たことのないアイシスとラナだ、もちろん彼らの住むエヴァノン国の外の世界を見たことはない。

彼らにとつての世界はとても狭いものだった。

それに、ティエラはとても小さな町で観光の見所もなく、まともな宿さえない閉鎖的な町だった。

「じゃあ、ユリシアのやつらはだれでも魔法を使うのか？ 日常生活のなかで？」

ラナは魔法で火をおこして料理をしたり、魔法の風で洗濯物を空に舞いあげてすっかり乾かしてしまったりするんだらうと話したが、ネットレトは首を横にふった。

「そういうことはない。ユリシアでも魔法は貴重なものだ」

それからネットレトは、世界にはみつつの魔法学校があると言い、ふたたりを驚かせた。

ならネットレトもそこに通っていたのかと聞くと、彼はまた首をふった。



「独学かよ」

「まあ、そうなる」

ラナがすこし掠れた口笛を吹いてネットレトを賞賛した。

「魔法学校はユリシアにふたつある。あとひとつはローハーという小さな島国にある。毎年百人ほどの生徒がそれぞれ入学するらしいが、卒業できるのは一割にも満たないと聞く。つまり、三校をあわせても年間に生まれる“魔法使い”は三十人に届かないということだ」

そう説明されて、魔法使いがいかに貴重な存在であるかをふたりは知ったが、それ以上に感じるのはネットレトの魔法に関する才能のことだ。

特別な学校に通っても会得するのが難しい魔法を、彼はどのようにして学んだのか。そのきっかけはなんだったのか。

聞いてみたが、予想していたとおり答えはなかった。

「そもそも学校自体がおかしいんだ。精霊を使役できるようになれば、卒業後は高給官僚への道が待っている。だから学費はおそろしく高いし、それで生徒のほとんどは金持ちの子どもに限られるんだ」

「それで、途中で諦めちゃう人が多いのかな」

「諦めるといっつか、諦めざるをえないんだ。精霊の声が聞ける人は少ない」

ラナは羨望の目でアイシスを見た。

「おまえって実はすごいやつだったんだな」

「やだな、やめてよ」

アイシスは困りきって苦笑した。

アイシスとラナは、飢えた獣のように魔法のことを知りたがった。夢物語のようなネトレトの話は、彼らの好奇心をあますことなくすぐった。

「なあ、アイシスは精霊の声を聞けるんだろう？ 魔法使いになれるんだろう？」

「鍛錬しだいで」

「鍛錬って？ 鍛錬ってどうするの？」

ネトレトは鋭い目でアイシスを見た。その眼光にアイシスは少し身じろいだ。

「きみは本気でユフィロスレジアを使役したいと思うのか」

「もちろん」

「なぜ」

「なぜって……」

思いがけないネットレトの追求にアイシスはまごついた。

「魔法はすばらしい力だが、薬にも毒にもなる。強力な力と引き換えに日常を奪われた者もいる。」

きみはすでにたくさんのものを失ったが、魔法の力を手に入れることで、さらに大切なものを失うことになるかもしれない。その覚悟がきみにはあるのか」

アイシスの青い瞳が不安に揺れた。

アイシスはラナを見た。ラナもアイシスを見た。

ラナを失ってしまうことをアイシスは考えた。しかし考えられなかった。

だがその覚悟があるのかとネットレトは言う。

ラナはそんなようすのアイシスを見ていたが、口を大きくあけてにかつと笑った。

「なんて顔してんだよ」ラナはアイシスの肩をたたいた。「おまえなら大丈夫だよ」

「ラナ」

アイシスはうなずいた。

ぼくは大丈夫だ。ぼくはなにかを失うために力を欲するんじゃない、失われるものを守るために力を欲するんだから。

「あります」とアイシスは言った。

「覚悟はあります。ぼくは強くなりたい。もう二度となにも失わな  
いたために」

「そうか」

きみがそう答えるのはわかっていた、とネットレトは言った。

だがきみの決意を試す必要があったんだ。先にも言ったが、生半  
可な気持ちではいけないんだ、と。

「さあ、精霊を使役するための知識を教えよう」

独学なのは勘弁してほしい、と前置きしてからネットレトは話しは  
じめた。

「まず精霊を呼ばなければならない。私は以前、彼女らには彼女ら  
の住む世界があると言ったが、それはまあ都合のいい言い方で、実  
際はこの世界に彼女らも暮らしている。」

ただ、私たち命あるものとのあいだには薄い膜のような壁があっ  
て、向こう側では時間の流れが違うんだ。その壁を越えさせてやる  
ことを、精霊を呼ぶと言うんだ。わかるか」

アイシスとラナはうなずいた。

「学者たちはやはり都合がいいように、精霊たちの世界を“白の世  
界”と呼んだり、彼女らを呼ぶことを“扉を開く”と言ったりする  
が、そんな詩的な表現は実際どうでもいいんだ。」

大切なのは彼女らと心を通わせることだ。すべてを預け、信頼する。そして圧倒的な意思をもって彼女らに命令しなければいけない」

「でも、ぼくは彼女に　ユフィに命令だなんてできるかどうか」

アイシスは美しいユフィロスレジアを思い出した。見ただけで肌が感じる、彼女の高貴さ。

それに彼女には凜とした威圧感があった。彼女の言うことに従いこそすれ、逆に彼女を従わせることなど、アイシスには考えられなかった。

ぼくはそんなにえらい人ではないし、とアイシスは言った。

「しかしユフィロスレジアはきみを認めている。彼女はきみに名前を教えたのだろう」

アイシスはうなずいた。

「自信をもつといい。それはあまりないことなのだから」

アイシスはすこし考えたが、やはりうなずいた。

「それでいい。まずは気の持ちようが大切だから。あとは時間の助けと。」

さて、どこまで話したか。精霊を呼ぶところまでだったかな。精霊を呼ぶにはある言葉が必要だ。私がヴァネッサを呼んだときのことを？」

「なんか言っていたよな。呪われたなんたら、って。あれは呪文か

「？」

「そんなところかな。正しくは言霊と言う。そもそも言葉には力が宿るものだ」

決意を口に出してみると勇気がわくだろう。あれも言霊の力だ、とネットレトは言った。

「魔法学校では、一律して同じ言葉で精霊を呼ばせているらしい。『聖なる風の力と加護とを我に授けたまえ、ウィンディーネ』といったふうだね。呼ぶための言葉を探すのも、難しい人にとっては難しいから」

「ウィンディーネっていうのは、やっぱり精霊の名前なの？」

「ああ」

「じゃあ、最後は絶対に名前を呼ぶんだね」

「名はそのものの本質だからな」

そういえば、ユフィは夢のなかで言ったっけ。王よ、我が名を呼び、我を求めよ、と。

「それで、ぼくはなんと言えはいんだろう。ユフィを呼ぶために？」

「それは私にもわからない」

「学校ではなんて？」

ネトレトは首をかしげた。

「私はさっき言った　あれは風の精霊を呼ぶためのものだが  
言葉しか知らないし、そもそも魔法学校ではユフィロスレジアを使  
役するための授業は行われていないはずだ」

「どうして？」

「数多くの精霊がいるが、光と闇の精霊だけはただひとりしかいな  
いからだ。そしてユフィロスレジアは光の精霊だ。」

彼女たちは他の精霊とは違い、その力は他の追隨を許さない。光  
のユフィロスレジアと闇のヴァネッサとは対の存在で、彼女らは超  
越種と呼ばれている」

「超越種……」

ラナがつぶやくように言った。

「なんか、とんでもないことだなあ」

なかばあくび混じりに言いながら、ラナは大きく伸びをした。

アイシスは道のずっと先に大きな門があるのを見つけた。三人は  
タリファの街に着いたのだった。

## 第九話：憎ったらしいやつ

### 『聖伝』第九話

街に着いて、まず三人は宿を探した。

宿は街の中心近くにあり、すぐに見つけることができた。

やはりいくつかの宿がかたまって建っていて、ネットレトはそのなかでも小さすぎず、大きすぎない宿を選んだ。

「きみたちはどうする、部屋をわけるか、わけないか」

「え？ ネットレトは違う部屋に泊まるの？」

アイシスは驚いたが、ネットレトもまた驚いたようだった。

ひとりの旅に慣れきっている彼には、だれかと同じ部屋で寝るといふのは落ち着かないことだった。

アイシスはできれば三人ですごしたかったが、結局はラナとふたり同じ部屋をとり、ネットレトはとなりの部屋に宿泊することになった。

「うわっ、見るよアイシス、でっけえベッド！」

部屋に入るなりラナは喜びの歓声をあげ、奥にあるベッドに荷物ごと倒れこんだ。



ばふ、と鈍い音がして、太陽のにおいとたくさんほこりが部屋に舞った。

「ちょっと、そんなにはしゃいだら下に響いちゃうよ。布団も傷んじゃうよ」

「親父みたいなこと言うなよ。いいじゃねえか、ちょっとぐらい。実はおまえもやりたいんだろ？」

ほらほら、とラナは突っ立つアイシスを手招きする。

にやにやと笑うラナに、アイシスはすこし呆れた顔をしていたが、ため息をつくと一転して笑顔になり、もうひとつのベッドに彼も飛びこんだ。

「うわーっ、ふかふか！」

「だろ？ 気持ちいいだろ？ 飛びこみたくなるだろ？」

「うんうん、最高っ」

ふたりはそうしてしばらく布団とたわむれていたが、満足するととなりの部屋のドアをたたいた。

入ってくれと言われてドアを開けると、ネットレトは窓際に立っていた。

「やっぱりベッドでは遊ばないのか、と言うラナに彼は不思議そうな顔をした。」

ネットレトは抜き身の剣を持っていて、それを窓からの光にかざしていた。

夕日の赤い光が剣に反射してアイシスの目を射る。真っ赤に染まった剣は、すくなくならずアイシスの心を震えさせた。ネットレトはすぐに剣を鞘に収めた。

「すこし出かけるが」

刃こぼれが気になるから磨ぎ屋にいくという。

アイシスとラナは顔を見合わせ、タリファの街を見てまわることにした。

「すぐに暗くなるから気をつけて」とネットレトは言った。

家々に取りつけられた外灯に灯がともされはじめた。青い闇がしんみりと染みていくタリファの街に、ぽつりと光の花が咲く。

ある者は店じまいをし、あるものは店の支度をはじめめる。

アイシスたちはなにを買ってもなく、ただ街の通りを歩き続けた。歩きながらたくさんのお話をした。

思えばティエラの火事からは十日、町を出てからはまだ五日しか経っていないのだ。

それはアイシスが経験したなかで最も長く、最も早くすぎさった五日間だった。

「親父の怪我は治ったかな」とラナが言った。

「おじさん、とても力強い人だからね」とアイシスが答えた。

ハロルドはアイシスたちを守るために傷を負ったのだ。

アイシスの胸は痛んだが、ハロルドはこう言った。そいつ、笑ってたんだぜ。すごく満足そうに、自分にできるなかで最高のことをした、って。

九年前にアイシスを守って命を落としたエルフは、彼を守ることができた喜びのなかで死んだという。

そしておじさんも笑っていた、ぼくは自分を責めなくてもいいのだろうか。

もしもアイシスがこう言うのを聞いたら、ハロルドはきつとげんこつをひとつかまして言うに違いない。

おまえは俺の息子だって言っただろう、俺の息子は細かいことを気にしないものなんだ、こいつを見るよ、ラナをさ。

「親父、言ってたぜ。アイシスの帰る場所は俺が作る、ってさ。焼けた土の熱が取れて、またあの場所に入れるようになったら、またきつとたくさんの家を建てるんだって」

「修道院も、聖堂もまた建つかない」

「建つよ」とラナが言った。「だって、みんな生きてるんだぜ」

タリファは夜の香りに包まれた。

薄絹を着た女の人の一群が、アイシスとラナを見てくすくす笑いながら通りすぎた。

ふたりは（なぜか）顔を真っ赤にし、さつさと宿に引き上げるとにした。

先に帰っていたネットレトも交え、三人は少し遅い夕ごはんを食べた。

その夜の主役は胡椒をきかせた焼いた肉で、ラナはとても喜んだ。ラナは肉類がとても好きだった。それに対してアイシスは野菜類のほうが体にあうようで、そういった肉料理が出るといつも半分はラナの胃におさまる。

今回もアイシスは肉を半分に切り分け、ラナのお皿にうつしたが、彼はそれが冷めてしまう前にすべて食べきり、ネットレトを驚かせた。

「いつもこうなんだよ」とアイシスが苦笑しながら言った。「よく噛まないんだ、ラナは」

「噛んでるって。歯がすごいんだって」

「いいことだ。アイシスも見習わないとな」

「えーっ」

その日も食後にやはりコーヒーが出たが、アイシスは砂糖を山ほど盛ってそれを飲んだ。

ネットレトは目を丸くしたがなにも言わなかった。

食事をすませると、ラナは湯屋の話をした。さきほど通りを歩いているときに見つけたのだ。

アイシスもラナも湯屋を見たことも入ったこともなかった。

冬のあいだは、二日に一度濡れたタオルで体を拭き、三日に一度は髪を洗う。夏だと毎日だ。

彼らはそうして体を洗ってきたし、それが普通だと思っていたから、湯屋では湯をはった大きな水槽につかって体をあたためるのだというネトレトの説明にとっても興味をもった。

彼らは湯をはる風習を持たない。

金持ちの家庭だと、大きめの桶に湯をはって体を流す場合もあるが、それでも脛のあたりまでしか湯をためない。

「ネトレトは湯屋にいったことがあるの？」

「いや。人に聞いた話だ」

「その人は入ったんだ」

「らしいな」

わあ、とアイシスは目を輝かせた。

「どんなだつて言つてた？」

「そうだな。部屋のなかは湯気でくもっていて、中央には石でできた水槽があって、舟のように大きい、と。そこにたつぷりの湯がはられていて、つかると肩のあたりまで沈むそうだ」

「すごいー！」

アイシスは手を打った。アイシスは夏にする水浴びが好きだったが、冬にする湯浴びとは！ きつと体は芯からあたたまることだろう。

冬に、急いで体をぬぐうときの寒さをアイシスは思った。

「いつてきたらどうだ」

「いいの？」

ああ、とネットレトはうなずいた。

「ネットレトは？ いかないのか？」

「私はいい」

アイシスは残念そうな顔をしたが、ラナはふくみのある顔でうなずいた。あとでふたりきりになってしまうと、ラナはアイシスにこう言うのだった。

「ありや恥ずかしいんだよ。ネットレトはさ、裸を見られるのが恥ずかしいんだ」

「うわっ、なんてことを言うんだよ」

ラナはにやにやと笑い、アイシスはその背中を叩いた。

ふたりは並んで湯屋に向かった。

場所は覚えていなくてもすぐにわかる。幾筋もの湯気が夜の空に昇っているからだ。

ほんに、可愛らしいのう。

ひとりになったはずの部屋で、色気のある声がする。ヴァネッサだった。

ネットレトはため息をついた。

「またか。私は呼んでいないはずだが」

おや、我が君。おぬしが本当に“出てくるな”と言うなら、わらわはそれに従うぞ。

「……………」

ヴァネッサはころころと笑うと、ネットレトの背中にもたれかかるようにし、肩に両手を乗せた。

耳に顔を近づけると、秘め事を告げるかのように小さな声で、

弱い男よな。孤独に耐え切れんのだろう。

「黙ってくれ」

仰せのままに。

ヴァネッサはからかうように笑うと、すっと浮きあがってネットレトの正面に降り立った。

ネットレトの表情は暗かった。ヴァネッサはその表情に見覚えがあった。

久しぶりに見る人間らしい顔だ、とヴァネッサは思った。

もともとネットレトは表情の乏しい男だった。

ヴァネッサが彼に出会ったのは（というのはすこし語弊のある言い方だが）彼がまだ子どもころだったが、当時からネットレトの表情は薄かった。

それがこのところ酷くなっている、とヴァネッサは思っていた。

まるで鉄製の仮面をかぶっているかのような。

怒りも、驚きも、悲しみの気配も、ネットレトはほんのわずかしかな顔に出さない。それなのにどうして

なぜそんなに辛そうな顔をする。

主よ。

ネットレト。

「……わからない」



ネットレトは座っているソファに深く体を沈みこませた。  
金色の長い髪をわし掴みにし、目を閉じる。

「わからないんだ、彼らのことが。なぜ、ああも素直に笑えるのか」  
それからネットレトは、本当に苦しそうに、歯を食いしばりながらうめいた。

「エルフ王と共にいけば救われると。だが私は、ひとりのほうがよかった。孤独のほうが」

ヴァネッサはなにも言わなかった。ネットレトの姿はとても小さく見えた。

ネットレトが願えば、ヴァネッサは彼に触れられるのに。触れられたなら、その震える肩を抱いてやれるのに。

我を求めよ。ヴァネッサはそう言いたかったが、口を開くことはできなかった。

彼を苦しめているのは、わらわ。

ヴァネッサは美しい形をした唇を噛み、やがて消えた。ネットレトはそのまますこし眠った。

「すっげえ!」

「ちょっと、こんなところまでぐらいい静かにしてよ」

湯屋に着いてからというものの、ラナはすごいすごいと叫びとおし

で、脱衣所でも彼はご機嫌だった。  
服を脱ぐ人着る人、みんな丸い目でラナを見ている。

対してアイシスは不機嫌だった。といってもアイシスはラナに腹をたてているのではない。

不機嫌の原因は受付の若い男にあった。

「女に間違われたからって、そんなに拗ねるなよ。初めてのことでもあるまいし」

「もうラナなんか知らない」

ラナは豪快に笑ってアイシスの肩を叩いた。アイシスはため息をつき、そして諦めた。

諦めてしまうとラナの笑いが伝染し、ばかばかしいと思いながらアイシスは声を出して笑った。

ラナは脱いだ服を丸めると、適当なかごに放り投げてしまった。アイシスは苦笑すると、それを拾いあげると畳みなおした。ラナの無鉄砲なところをこうしてアイシスが補う。

ラナはアイシスの父親気分でいることもあったが、ときにアイシスはラナの母親気分になることがあった。

「アイシス！ はやくこいよ、すごいぞー！」

「はいはい」

水槽があるらしい部屋からは湯気がただよってきていて、それに

混じってラナのはしゃぐ声も聞こえる。  
アイシスは足早に声を追った。

一時間後、全身を真っ赤にしたふたりは脱衣所でぐったりとしていた。

普段湯につかる習慣のないふたりは、熱い湯にすっかりのぼせてしまったのだ。

「なんだかすごくクラクラするね」

「天井が回って気持ちわりい……」

服を着る気力もなく、腰にタオルを巻いたままで寝転んでいると、脱衣所に突然大きな笑い声が聞こえた。

アイシスが驚いて顔をあげると、例の受付の男が腰に手をあてて笑っていた。

「湯にあたったのか？ 情けねえったら」

そう言って男は、うつ伏せになっているラナを見下ろした。

男は茹でだこのように赤くなったラナを冷たい目で一瞥した。

「そこ、どいてくれる。掃除すんだ、営業時間はもう終わり。もう他の客はみんな帰ったんだぜ」

「けっ。気の短いやつ」

ラナが口を尖らせると、男は持っていた桶を逆さまにした。

中に入っていたのは冷たい水で、ラナは頭からそれをかぶることになった。

「げっ！」ラナは飛びあがった。「冷てえ！ なにしやがる！」

「掃除だつってんだろ。どけよ」

「だからって水ぶっかけることねえだろ！」

「一度注意したろ」

「ちよつとちよつとちよつと！ 待ってよふたりとも！」

アイシスは慌ててふたりのあいだに割って入った。

ラナは男に噛みつきそうな顔をしていて、アイシスは彼を抑えるのに必死だった。男はそんなアイシスを鼻先で笑った。

「おや？ お嬢さんここは男湯だぜ」

「だからぼくは女じゃないって、」

「冗談だよ。女にそんなものついてるはずないだろ」

そう言う男が指をさす先をたどり、腰のタオルが落ちているのを確認したアイシスは、

「ぎゃあうし」

湯屋が揺れんばかりの大声で叫んだ。

## 第十話：タリファの金持ち

### 『聖伝』第十話

その朝、食卓を囲む三人はやけに静かだった。ネトレトはいつもと変わりなかったが、あとのふたりが妙なのだ。

いつもなら笑顔で話題をふるはずのラナも、それにうまくのるアイシスも、今朝に限ってはおとなしい。

ネトレトは不審に思ったがなにも言わなかった。目覚めのわるい朝もあるだろう。

昨夜彼らは湯屋にいった。湯につかるといふ慣れないことをしたために、よく寝つけなかったのかもしれない。

「があーっ！ いま思い出しても腹がたっ！」

とラナが吼えたのは部屋に戻る途中だった。

驚いたネトレトが訳を聞くと、どうも湯屋に嫌味な男がいたらしい。

「言うことがいちいち癪に障るんだ、あれほど頭にくるやつ初めてだ！」

「アイシスもそれで怒っているのか」

「いや、アイシスは落ちこんでるんだよ。見られたから」

「ラナっ」

やれやれ、といったようすでネットレトはため息をついた。

三人は身支度すると街に出た。それぞれ必要なものを買ったためだ。アイシスもラナもじきにいつもの元気さを取り戻した。彼らはよくも悪くも単純なのだ。

市場には目新しいものがたくさん並んでいて、ふたりはあちこちを覗いて楽しんだ。

「うわっ、見るよ。すげえきれいな色のガラス玉だ」

「本当、すごく透き通った色だね」

ふたりは青色のガラス玉を手に使っていた。それを覗きこむアイシスの目も、同じ色をしていた。

海の色だな、とネットレトは言った。

「海って、あの海か？」

「きみがどの海を言っているのか分からないが、おそらくその海だ」

「水がいっぱいの？」

「そっだ。見たことがないのか」

ラナはうなずき、アイシスもガラス玉を手にしたままうなずいた。

ネトレトは感心した。彼らは、山と野原とに囲まれたあの小さな町で、外の世界にまるで触れることなく暮らしてきたらしい。

そんな閉鎖的な彼らが、いま見たこともない世界に足を踏み入れている。会って間もないこの自分だけを頼りにして。

なんと無防備なことか。

ネトレトは呆れるやら、驚くやら。

アイシスとラナと一緒にいると、どうもネトレトは忙しい。

「それで、買うのかい？」

ガラス玉を売っている老婆がアイシスに声をかけた。

アイシスは一瞬きよとしたが、すぐに顔を赤くしてガラス玉を置いた。

「ごめんなさい、つい見惚れちゃって」

「買わないのかい。もったいないね、これはただのガラス玉じゃないんだよ。この地方のお守りさ」

「でも、ぼく……」

「いいんじゃないか。お守りはそれなりに力を持っているものだよ」

アイシスの言葉を遮ったネトレトは、老婆に値段を聞くとさっさと支払いをすませてしまった。



ネットレトだけに小さな笑い声が聞こえて、ヴァネッサの気配が首元をなでた。

ネットレトは昨夜のことを思い出し、すこし気恥ずかしかった。甘やかしすぎかなと独り言ち、ネットレトは肩をすくめた。

そうしているとちょうど乾物屋の前を通りがかかったので、ネットレトは干し肉をいくつか買い求めた。

旅の途中で食べる食料が底をつきかけていたためだ。

アイシスはほかに干した果物をすこし買った。アイシスは甘党だ。「その苺ね、とてもおいしいわよ。そのままでもいいけれど、口に入れてから牛乳と混ぜるのが私のお気に入りなの」

すこし太った婦人がアイシスに話しかけた。彼女も客のひとりらしい。

婦人はしばらく乾燥苺について話していたが、そのうちにこんなことを言った。

「それより、聞いた？　またお金持ちが襲われたそうよ。今度はアルバさんのお宅」

どうやら彼女は三人をタリファの住人と勘違いしているらしい。

話を聞いてみると、数週間ほど前から強盗事件が頻発しているのだという。

狙われるのはいつも金持ちの家で、この短い期間にタリファの富豪のほとんどが涙をのむ目に遭ったのだそう。

ネトレトは黙ってその話を聞いていたが、うわさ話に満足して婦人がいつてしまうと小さく呟いた。

「いいことを聞いたな」

「え？」

「稼ぎどきだ」

言うなりネトレトはさっさと乾物屋を出て行ってしまい、ふたりは慌ててあとを追った。

ネトレトはまず磨ぎ屋にいつて剣を受けとった。

それから彼が向かったのは、いわゆる高級住宅街だった。

宿は宿でかたまるし、豪邸は豪邸でかたまるらしい。

三人のまわりには宿をもこえようかという大きな家ばかりが建っていた。道もきれいに掃き清められている。

「こんなところになんの用があるんだ」

ラナが訝しげに問うが、ネトレトは答えなかった。すぐにわかる、という。

特になにをするでもなく三人は広い道路を歩いてまわったが、ややもしないうちに声をかけられて足を止めた。ふり返ると彼らを呼んだのは初老の男性で、背が低く、小綺麗な格好をしている。

「失礼。旅のお方とお見受けするが」

「そうです」とネトレトが答えた。

「突然で申し訳ありませんが、私の主人に会ってくださいませんか。最近このあたりでは強盗が盛んでして、主人はそれをたいへん気に病んでおられるのです。次に襲われるのは自分かもしれない、と」

「それで用心棒を雇おうというわけですか」

「話のわかるお方だ」

アイシスとラナは顔を見合わせた。

ネトレトの言う“稼ぎどき”とはこういうことだったのか。

自分たちがよけいな口をはさんでも始まらないので、ふたりはおとなしく成り行きを見守ることにした。

ネトレトは明確な応答をし、それは初老の男性にいい印象を与えた。

旅人は腕に自信のある者が多いが、同時に礼儀知らずも多いのだ。しかし、話してみるとどうもこの若者は他と違うらしい。

「いじつ」

初老の男性の案内で、三人は一軒の豪邸へと向かった。すこし先に立って歩くネトレトの背中を、アイシスもラナも尊敬の眼差しで見ている。

三人はただっ広い部屋に通された。

応接間だろうか、部屋は数々の装飾品であふれ返っている。そのひとつひとつもあまり趣味がいいものとは言えず、ただ豪華さを誇るためのものにはしか見えなかった。

「好きじゃねえな」

「ラナ、そんなこと言ったら失礼だよ」

そう言って咎めるアイシス自身もこの部屋は気に入らないらしい。すこしうんざりとした顔でいる。

唯一いつもの表情を崩さないのはやはりネトレトだった。

「やあ、よくきてくれたね」

朗らかに部屋に入ってきたのは、この家の主人だろう。がっしりとした体格をしているが、しかしどうもたるんで見える。引き締まった体でないことは一目でわかる。

たっぷりと口ひげをたくわえていて、それを触るのがどうも彼の

癖らしかった。

初老の男性があらかじめ説明してくれたとおりだと、彼は湯屋を経営する富豪で、名前をハラデイという。

「はじめましてハラデイさん。呼んでいただきありがとうございます。キースといいます」

「え？」とラナ。アイシスは慌てて彼を小突いた。

ラナはネットレトの偽名を知らないのだ。

ラナはよく事情がのみこめないようであったが、なにも追及しなかった。

「あ、アイシスといいます」

ネットレトの視線を感じてアイシスも名乗った。

とっさにいい偽名を思いつかなかったし、そもそもアイシスは名を知られることにあまり抵抗感がなかったのだ。

もう一度ラナを小突くと、すこしくぐもった声で、ラナです、とやった。

「うむ。三人ともいい面構えをしておられる。さぞかしその剣はよくうなるのでしょうか」

ハラデイは彼らが腰に佩く剣に目をやった。

話はすべてネットレトが進めてくれたので、アイシスたちは手持ち無沙汰で部屋中に視線をめぐらせていた。

しかしすぐに飽きてやめてしまった。  
豪勢なだけで意味のないものは、とても見られたものではないの  
だ。

アイシスははやく帰りたと思った。

昼食を、というハラデイの誘いを丁寧に断り、三人は一度宿に戻  
った。

「彼を気に入らなかったようだな」

ネトレトはそう言ってコートを脱いだ。ラナはソファに身を沈め  
てふてくされている。

「まるで好きになれねえや。なんだよ、あの趣味」

「そうだね」

あまり人を悪く言わないアイシスが、珍しく同意してうなずいた。

エルフは純朴な美しさを好む。

あのように見栄ばかりを気にした装飾は生理的に受けつけないよ  
うだった。

ふたりはハラデイ邸の雰囲気ですっかり疲れていて、ネトレトの  
声がいつもより尖っていることに気がつかなかった。

「なら用心棒は私ひとりでいい」

「って、なんで？」

「その態度ではハラデイの信用をすぐに失うことになるからだ」と  
ネットレトは言った。

ラナはむっとして言い返した。

「だって、いけ好かねえぜ、あいつ。豪華さばかり誇ってさ、強盗にでもなんにでも、すこしお灸をすえられたらいいってもんだ」

すこし言いすぎでは、とアイシスは思ったが、否定もしなかった。

「だったら昼食は強盗にでも食わしてもらうか」とネットレトは言った。

彼の鋭い語気に、ようやくふたりは気がついた。

驚いて顔をあげる。ネットレトはすこし呆れているようだった。

「この金はほとんどこうして稼いだものだからな。もとはあいつた富豪の持ち金だ。いけ好かない連中の金で飯を食うのは癪じゃないか」

「あ……」

「嫌いだなんだと言って生きていけるのは子どもものうちだけだ。そ

して子どもなら保護者のもとに帰れ」

ふたりは呆気にとられ、声も出せずにネットレトの背中を見送った。彼は自分の部屋に戻ったらしい。すぐ近くでドアの閉まる音がした。

ネットレトの、すこしでも感情のこもった声を聞くのは、このときが初めてだった。

「ラナ」

「……………」

「ねえ、ラナってば」

ラナは答えなかった。ソファに沈みこんだままである。

「やっぱり、ぼくたちが悪かったんだよ。謝りにいこう？」

「……………」

アイシスは肩を落とした。

ラナの性格をよく知っているだけに、彼が怒るのも理解できる。

ラナは金持ちを毛嫌いしていた。それも、その財力をひけらかすような金持ちは特に。

ハラデイはまさにその種類といえた。



ラナの母親は流行り病で命を落としたのだが、倒れるまではとある富豪の家で働いていた。

彼女はその家のためにとても尽くしたが、しかし富豪は、彼女が流行り病にかかったと知るなり見放した。

それどころか小屋を建てると、強制的に彼女やほかの患者をそこに隔離させてしまったのだ。

ハロルドは彼女につきつきりで仕事ができず、ろくに治療を受けさせてやることもできないまま妻を死なせてしまった。

ラナはそれを近くで見っていた。幼いがゆえに、なにもできず。

「ラナの気持ちも、わかるよ」

仕方なくアイシスはそう言うと、静かに部屋を出た。

ラナはさらに深くソファに体を沈みこませた。

ネットレトの部屋のドアをたたけば、どうぞと声がする。いつもと同じ声だ。

部屋に入ると、ネットレトは剣の具合をたしかめていた。

抜き身の刃を手にしているとき、ネットレトの目はその刃ほどに鋭い。

アイシスはすこし怖気づいたが、首をふって気合を入れなおした。

「あの、ネットレト。さっきは……ごめんなさい。ぼくたちはとてもわがままだった」

返事の代わりにかちりという音がした。

ネットレトは真剣な顔で鞘におさめた剣を見ていたが、ふと顔をあげてアイシスを見た。

アイシスはもう一度ごめんなさい、と言った。

「それで、どうする。用心棒の件」

「一緒にいく。役にたてるかどうかはわからないけれど」

そう言うてから、アイシスはすこし上目遣いにネットレトをうかがった。

「……ラナのことだけど、わかってあげてほしいんだ。ぼくも聞いた話でしかないんだけど、昔ラナの家はある金持ちとすこし揉めたみたいで。直接そのせいでは言えないけど、やっぱりそのこともあって、ラナのおばさんは亡くなっちゃったんだ。

それでラナはさっき、あんなふうだったんだよ」

「そうか」

アイシスはまた怒られやしないかとおどおどしている。

「きみたちは不思議だな。お互いのためになら自分が傷つくことも平気なようだ」とネットレトは言った。

アイシスは顔をあげた。ネトレトの声が、すこし弱々しかったからだ。

アイシスは驚いていたが、しかしネトレトのほうがり驚いたようすだった。

彼がすこしうるたえているのをアイシスは見てとれた。

「平気じゃないよ」と言っただけアイシスは笑った。

「だってぼくはなるたけ傷つきたくないもの。でもラナには笑っていてほしい。その気持ちのほうが強いかどうかだよ」

すこし間をおいて、そしていつもより小さな声で、そうかとネトレトは言った。

「きつと、ぼくたちはネトレトに対してもそう思うよ」

ネトレトの目が丸くなった。アイシスは笑っていた。

「だってぼくもラナも、あなたのことが好きだもの」

重ねてアイシスは、お昼ごはんを食べにいこう、と言う。

ネトレトはやや気おされながら、ああ、と答えた。

アイシスは笑顔をすこし曇らせ、「ラナは下りてこないかもしれない」と言った。

そしてラナは昼ごはんの席に現れなかった。

## 第十一話：剣を教えてください

### 『聖伝』 第十一話

結局、夕ごはんのときもラナは姿を見せなかった。

「強情なんだよ」とアイシスはすこし困った顔で笑った。

「ラナも、自分がわがままを言っているってわかってはいると思う。でも、気持ちの整理がまだできていないんじゃないかな」

「ごはんをすませると、アイシスは食堂の若い女に頼んでトレイを借りた。

代金を払い、二人前の食事を乗せる。

あとでトレイ返しにきます、と愛想よく言うと、アイシスはそれを持って部屋に戻った。ネトレトも追って部屋に戻る。

テーブルの上には分厚い本が三冊積み重ねられている。

昼間、図書館で借りてきたものだ。

ネトレトは椅子に座って大きく息を吐くと、一番上の本にまず手を伸ばした。

部屋に戻るとランプには灯が入れられていた。宿の人が入れてまわってくれたに違いない。

ラナはベッドに突っ伏していた。

アイシスは苦笑する。本当に強情なんだから。

「ラナ、おなか空いたでしょ。ごはんもらってきたよ」

「……………」

「ラナったら、冷めちゃうよ」

「いらねえ。強盗に食わせてもらっただ」

アイシスはあはは、と笑った。まったく、ここまできたら笑うしかない。

強情っぱりで融通がきかず、頑固で口の悪いこの親友が、アイシスは大好きだった。

「なんで笑っただよ」

「おかしいからだよ」

ラナはベッドに起きあがり、むっと唇を尖らせた。

同時に腹の虫が鳴る。

仕方ない、ラナは昼からなにも口にしていないのだから。

ラナの唇がさらに尖り、アイシスはまた声を出して笑った。

「ほら、素直なのはお腹だけだね。かわいそうだね、お腹は。あん

な哀れな声で訴えているのに、口がわがままだから」

「うるせえや」

「ラナ」とアイシスはトレイをテーブルに置いた。「ラナの気持ちもわかるよ。でも食べなきゃ。それに、これはぼくのお小遣いで買ったんだ」

ラナは顔をあげてアイシスを見た。アイシスはうなずく。

こういう嘘なら、たまには許してもらっていいだろう。

ラナはおとなしく椅子につき、二人前の料理をあつという間にたいらげた。

食べ終えるなり盛大にかましたげっぷに、アイシスはまた笑った。

次の日、起きるなりラナはとなりの部屋に飛びこみ、大声でネットに謝り、自分も用心棒をさせてくれと頼んだ。

ネットはすでに目を覚ましていたが、その声にはすっかり呆気にとられてしまったようで、続いて入ってきたアイシスは苦笑するしかなかった。

朝ごはんは賑やかだった。明るい食卓は、考えてみれば丸一日ぶりである。

アイシスはラナの強情をからかい、ラナはそのたびに困ったり、ふてくされたりと騒がしかった。

「それで、また図書館に？」

「ああ」

ラナはなにかば畏怖の表情をすら浮かべている。

ネットレトは手早く髪をまとめた。本を読むときの邪魔になるからだという。

「よくやるよ。アイシスはどうするんだ？」

「ぼくは、またタリファをつろつろしようかな」

「じゃあ俺も」

アイシスは実を言うと図書館にいきたかった。魔法のことを詳しく調べたかったのだ。

ティエラの図書館にも、魔法やらエルフの本やらがあったのかな。

アイシスはまるで図書館に寄りつかなかったことを後悔した。

いまのアイシスに図書館はとても魅力的だったが、しかし今日はラナと一緒にいたかった。

ネットレトは日が沈む前に門の前で、と言った。

というのは例の高級住宅街の近くにある立派な門のことで、どうも富裕層とそうでない民との居住区をわけているらしかった。

ラナはすこし嫌な顔をしたがなにも言わなかった。

「ハラデイは時刻にこいと言っていたからな。遅れないでくれ」

三人は約束してそれぞれタリファの街へと出かけていった。

遅れないでくれ、というネットレトの言葉に緊張したのだろうか、アイシスとラナのふたりはずいぶん早くから待ち合わせ場所にいた。

日は半ば傾いているが、まだ周りは明るい。

門にもたれていると、ときどき馬車が砂ぼこりをあげて門をくぐっていった。

御車の窓にはいずれもカーテンがかかっていたが、物好きの富豪だろうか、それをそつと開けてふたりを見やる者もいた。

「アイシスの髪が光るから、宝石かなにかだと勘違いしていやがるんじゃないか」

ラナが軽口をたたいていると、そこにネットレトがやってきた。

「待たせたかな。いこうか」

ハラデイは三人を見ると手を打って歓迎し、すぐ警備につくようにと言った。

彼のそばには屈強な体つきの男がふたり控えていて、彼らもまた雇われた用心棒だろうと見受けられた。



アイシスたちは正面の大門ではなく、使用人たちが通る小さな門を任された。

「こりゃ出番はなさそうだな」とラナがあくび混じりに言う。

「でも、仮に出番があったって、ぼくはなにができるだろう」

アイシスは剣を手の中でもてあそびながらため息をついた。

けんかつ早い性格で、町でもわんぱくとして知られていたラナは、殴り合いのけんかをしてはよく傷をつくっていたがアイシスは違った。

アイシスは神父さまの教えを学ぶ敬謙な少年で、暴力とはまるで関わりがなかった。

手の中で剣はずっしりと重かった。

「ユフィを呼ぶ言霊もわからないし、ぼくはまったくの無力だよ」

「もやしっ子アイシス、だな」

にやにやとラナが言うのは昔アイシスにつけられたあだ名で、細くて色白のアイシスは、まさに“もやしっ子”だった。

アイシスは抗議の意をこめて唇をとがらせた。

「なあ、ネットレト。あんたはなんでそんなに強いんだよ？ 親父が驚いていたぜ」

「なあ」

ネットレトはとぼけた。  
「なんで、と聞かれても、事実答えようがなかった。彼は強くなる  
しかなかったのだから。  
しいて答えるなら生きるため、とでもいうところか。」

「戦っていくうちに強くなったの？」

「そういうことだ」

「じゃあ、ネットレトも最初はぼくみたいだった？」

「だろうな」

アイシスはしばらくぼんやりとしゃがんだままでいたが、ふいに  
立ち上がると背筋をしゃんと伸ばした。

「ぼくに剣を教えてくださいませんか？」

「剣を？」

アイシスはうなずいた。

「ぼくはどうも自信が持てないんだ。やっぱりぼくは“もやしっ子  
”で、ユフィを使役するなんてとてもできそうにないって。だから、  
ちよっとでも自信をつけるために、ぼくはまず強くなりたいんだ」

不安げなアイシスの瞳に、ネトレトは幼かった自分の姿を重ねていた。  
強くなりたいと切に願い、がむしゃらに剣を振るったころの自分を。

「……ああ、わかった」

「わ、本当？」

「本当だ。我流の剣でもいいなら」

「やった！」

「げっ、ずるいぞアイシスだけなんて」

慌ててラナも立ち上がった。喜ぶアイシスを押しつける。

「俺も、俺にも教えてくれ！俺、剣なんて使ったことないし、俺も強くなりたい！」

ふたりの真っ直ぐな姿に、ふとネトレトの口元が優しく笑った。アイシスの青い目がくりくりと動く。

「笑った」

「え？」

「ネットレト、いま笑ったよ。ほんのすこしだけど。初めて会った日以来だよ、ネットレトが笑ってくれたの」

ネットレトは手で唇を押さえた。

口がなかば開いている。なかば信じられないといったようすだった。

「笑ったか」

ひとり言のように小さな声で、ネットレトはつぶやいた。

アイシスはその手を取り、両手で包みこんだ。

ネットレトの手は大きく、よく剣をにぎるからだろうか、ずいぶん  
と固い。

アイシスはその手から孤独を感じた。

彼はずっとひとりで戦っていたんだ。ひとりで、だれと笑いあう  
こともなく。

「笑ったよ。笑ったらもつと素敵だったよ、ネットレト。」

ねえ、ネットレトがいつも気を張っていて、それでうまく笑えない  
のなら、ぼくはやっぱり強くなりたいよ。そしたらすこしはあなたの  
気も休まるでしょう?」

アイシスは握ったネットレトの手をぶんぶんと振り、ネットレトは言  
葉もなくされるがままにしていた。

ラナは豪快に笑うと自分の手を重ね、さらに勢いをつけて手を振  
った。

「言い出したら聞かねえぞ、俺たちは。だって俺たちはまだまだわ

がままだからな」

「困った子どもたちだな」

ネットレトは本当に困った顔をした。

手が振り回されて首が揺れる。しかし不愉快ではなかった。

すっかり明るくなってしまつまで警護は続いたが、盗賊は姿を見せなかった。

使用人がやってきて、休むようにというハラデイの言葉を伝えると、用心棒の多くは屋敷の中へと向かった。きつと抱えこみで雇われているのだろう。

アイシスたち三人はそれに背を向けると宿に帰った。

アイシスとラナのふたりはすっかり疲れていて、とにかく眠くて仕方なかった。

好きなだけ休むといい、というネットレトの言葉に甘えて、ふたりは日が傾きはじめるまで眠った。

そして驚くことに、ふたりは腹の虫の声で目を覚ますのだった。

がむしゃらにごはんを食べ、またハラデイ邸の警備をする。そんな日が六日ほど続いた。

とても充実した日々だ、とアイシスは思った。  
警護についているあいだ、ふたりは約束どおりネットレトに剣の手  
ほどきを受けていたからだ。

ネットレトはどこからか木でできたおもちゃの剣を持ってきた。  
聞けば使用人に借りたという。

ラナはある女使用人がネットレトに送る、熱い視線のことを思い出  
して苦笑いした。

毎日会う使用人と彼らはすっかり顔見知りになっていた。  
そして三人はどうしてか使用人たちに人気があった。

しかし、女の関心はもっぱらアイシスやネットレトに向けられてい  
て、ラナに話しかけてくれるのは男ばかりだった。

彼らはみな豪快に笑う人種で、そういう友達をラナは喜んだが、  
やはり女の黄色い歓声を浴びるふたりがうらやましくもあった。

「基本の動きはこう、上から下へ、ななめに、こう」

そう言ってネットレトは木の剣で見本を見せてくれた。

流れるような動きを、アイシスとラナは見よう見まねで追いか  
ける。

剣のうごきは空気にはつ印を書くようで、しばらくするとふたり  
はその動きに慣れた。

「いい調子だ。合わせて足を踏みこむ。ああ、そうだラナ。大きく  
も小さくも、加減しなごらな」

ネットレトはとてもいい先生だった。彼はふたりをよく励まし、褒め、ときに叱咤した。

ふたりがある程度剣に馴染んできたのを見ると、ネットレトは的確に次の段階へとうつった。

「次は相手の攻撃をよく防ぐことだ。剣筋を避けてやるのもいいし、真正面から受け止めるのもいい。そのどちらかを状況に応じて選ぶんだ」

ネットレトはふたりに向かい合うように言い、片方ずつ攻撃、防御と決めて練習させた。

まず、アイシスが攻める。

ゆっくりでいいからさっきの動きどおりに、とネットレトが助言する。

アイシスはうなずき、ときに踏みこみながらばつを書いた。

ラナはそれを避け、かつ受けながら後退する。しばらくすると攻め手を交代させる。

ややもそのようすを見ると、アイシスとラナの動きに根本的な違いがあることにネットレトは気づいた。

ラナは度重なるけんかで養った勘を元にして動いているが、アイシスはラナの動作を見てから動いている。

そうしても避けるのに十分な間をもたせるだけの反射神経と運動神経がアイシスにはあった。

エルフが平和的な種族でよかった、とネットレットはつくづく思った。

ネットレットは攻撃と防御とを繰り返させて、繰り返させながらすこしずつ剣の動きを速めさせた。

そうしてすごした六日間だった。強盗は現れなかったし、他の豪邸が襲われたという話も聞かなかった。

アイシスとラナは毎日汗だくになって剣を振り、ときどき湯屋にいった体を流した。

例の口の悪い男には会わなかった。

七日目。ふとアイシスが目を覚ますと、まだ日は中天に昇りきっていないかった。

まだ眠りについてから数時間ほどしか経っていないようだ。すっかり昼夜逆転の生活になっていた。

不意に物音がしたので部屋から顔を出してみると、本を手にしたネットレットが出かけるところだった。

「すまない、起こしたか」

「ううん。なんだか、勝手に目が覚めたんだよ」

図書館にいくの、とアイシスは聞いた。ネットレットはうなずく。



彼はいつ眠っているのだろう。

「休まなきゃだめだよ。無理していちゃ、倒れるよ」

そう言っただけでアイシスは大口を開けてあくびをした。眠気で舌がうまくまわらない。

ネットトはかすかにほほ笑んだようだったが、目をしばたかせていたアイシスは気づかなかった。

「大丈夫だ。もう目当ての本にはすべて目を通したし、タリファの街も発つていいころかな」

そして次の日彼らは事実タリファをあとにすることになる。

その夜、七度目の警備についたとき、ついに強盗がハラディ邸を襲ったのだ。

## 第十二話：盗賊退治！

### 『聖伝』第十二話

「なあ、これいつまで続けるんだよ」とラナが言った。

その日もふたりは向き合って、攻めては防ぎを繰り返していた。気づけば辺りはすっかり暗くなっている。

アイシスもラナも地面に座りこみ、剣を投げ出し、肩で息をしていた。

「そつだな。息があがらなくなったら」

ネトレトの言葉に、ふたりはぴたりと息を止めた。しかしすぐに咳きこみ、涙目になって抗議した。

「何時間も動き回ったらそりゃ息もあがるって」

「ぼくも疲れた……」

やれやれ、といったようすでネトレトは木剣のひとつを取り上げた。

一、二度軽く振り下ろす。鋭く空気が切れる小気味よい音がした。

「無駄な動きが多いから疲れる。流れに逆らってはいけない」

じゃあ見本を見せてくれよ、とラナが言うと、予想外にネットレトはうなずいた。

手にしていた剣をラナに放る。

慌ててそれを受け取り、ラナは立ち上がった。

「自由にごうぞ」

「自由について言われてもなあ。第一、あんた剣すら持ってねえし」

「流れの存在を示すだけだからな」

ネットレトは両手をだらりと下げていて、まるで気が入っているようすがない。

ラナは意気こんでいる自分がすこしばかばかしくなったが、ばかばかしいでに本気で打ちこんでみることにした。

「怪我しても知らねえからな！」

ネットレトはすこし眉をあげた。

ラナが獣のように吼えて打ちかかる。

しかしネットレトは動じない。まばたきもせず、振り下ろされる剣を見ている。

当たる。

ラナはそう思った。すると迷いから手の力がわずかに抜けた。

先にああ言ったものの、ラナは根の優しい少年だった。

「手を抜いたな」

すこし気の抜けた声で言うと、ネトレトは動きの鈍った剣を軽く手ではたいた。筋をずらされ、ラナは体勢を崩した。

「だって、あまりに避けようとしなからさ」

「動作を見破られるような避け方はしない。もう一度、今度は本気できてごらん。当たらないから」

むっとしてラナは構え直した。

「本当に、今度こそ知らないからな！」

しかし当たらなかつた。ネトレトの言うとおりだった。

彼は動くそぶりすら見せないのに、振り下ろしてみるとそこにはいないのだった。

わずかに体をずらしている。

アイシスは感嘆のため息をもらした。

ラナは躍起になって踏みこむが、そうすればそうするほど剣の動きは鈍るばかり。

ぐっと突き出された剣を避けると、ネトレトはその腕をつかんだ。

「うわっ」

軽く引っぱられただけでラナは体勢を崩し、前につんのめった。倒れないうちにネトレットがそれを受け止める。

「流れに乗れば、すこしの動きで危機を避けられるし相手を崩すこともできる。わかったか？」

すっかり汗をかいてしまったラナは、肩で息をつきながらこう言った。

「速すぎて流れもなにもわかるかよ」

ネトレットは困ったように口を開いた。

が、なにも言わずにまた閉じた。

かと思うとラナの体を離し（ラナは結局前につんのめった）、剣を腰から鞘ごと抜き取った。

アイシスがまばたきするうちに彼は方向を転じ、いましも塀を乗り越えてきた黒い人影を鞘で打った。

鈍い音がする。

「な、なんだっていうんだ？」

ラナがすつとんきょうな声をあげる。

倒れたままのラナを助け起こしながら、強盗のようだな、とネトレットが言った。

まるで本の題名を読み上げるかのような、淡々とした口調である。アイシスもラナもあんどりと口を開けた。

そうしているうちに、ばらばらといくつかの人影が塀を乗り越えてやってきた。

座りこんでいたアイシスは慌てて立ち上がり、木の剣を拾う。

人影は合計で五つあった。

「雇われ用心棒かよ」

人影のひとつが毒を吐いた。

ふと、正面にある大門のほうで騒がしい声が聞こえた。どうやら強盗は同時に多方向から攻めてきたらしい。

「相手は三人だ、さっさと伏せちまえ！」  
おつっという荒々しい声と同時に、影はいつせいに襲いかかってきた。

アイシスは極度の緊張で声も出なかった。  
うまく剣すら構えられずにいると、力強く尻を叩かれた。

「うえっ」

「白けた顔するなよ。おまえはすごい魔法使いになるんだろっ」

ラナだった。彼はにやりと笑うと、強盗を迎え撃ちにかかった。

ネットレトは剣を地面に刺し、鞘を手にとった。

アイシスはうなずく。こんなに心強い仲間がいるんだ、怯えることはなにもない。

アイシスはひとりの強盗と向き合った。

ずっと雲に隠れていた月が顔を出し、強盗の顔もアイシスの顔も光に照らされた。

強盗は布で顔を覆っていたが、どうやらアイシスとそう年の違わなさそうな男だった。

男はなにも言わずに斬りかかってきた。

手には抜き身の剣を持っている。

月を映すその剣の光に、アイシスは身をぶるりと震わせた。

しかし、落ち着いてみるとなんとということはない、剣筋はよく見え、避けるのにアイシスはまるで苦労しなかった。

半歩下がり、半歩右に体をずらし、アイシスは見事に男の攻撃を避ける。

いける、と思うと体が軽くなった。

対して男は焦りはじめた。

急いた男の無謀な一撃を、アイシスは木の剣で軽くいなした。

男の足がよろける。

そこを横に回りこんで一閃、背中をどつと打たれた男は呆気なく倒れた。

「お見事」

荒い息のアイシスが顔をあげると、ネトレトが地面から剣を抜いているところだった。彼とラナの足もとには、それぞれふたりの男が倒れている。

ラナはにつこり笑うと拳を突き出した。アイシスもすこし疲れた顔で笑うと拳を突き出した。

もしも神父さまがこのようすを見たらどうなるだろう。

アイシスはきつと一ヶ月のあいだ毎日便器をみがくはめになるに違いない。

そのとき、夜の闇を切り裂くような、鋭い笛の音が響いた。

三人は音のほうに顔を向ける。

すると、それに答えるかのようにまた別のほうからも笛が鳴った。

いくつかの笛の音が重なり、やがて途切れた。

「なかなか頭を使う盗賊のようだな」

ネトレトがそう言うのと同時に、わあっという喊声があがった。

乱れた足音や、おそらくは使用人だろう、甲高い悲鳴も聞こえる。



響く笛の音は三つ、つまり強盗は四方向から攻めてきたというわけだ。

あいにく、アイシスたちの守る門への攻撃は失敗したが、ほかはどうやらうまく制圧したらしい。

強盗たちは頭がよかった。

はなから騒いで攻め立てるのではなく、まず一番厄介そうな用心棒たちを襲って黙らせてしまい、それからことさら騒ぎ立てて本体に乗りこんだのだ。屋敷の者たちは、頼りとしている守りが潰されたことにはまるで気づいておらず、夢にも思わなかった事態に混乱は広がった。

「いっしょ」

三人はあつという間に騒がしくなった屋敷へと走った。

ある者は逃げ、ある者は防ぎ戦っていたが、そこはやはり戦い慣れない使用人のことだ、すぐに気を失って倒されるのだった。

アイシスたちは騒がしいほうへと走った。

屋敷はめっぼう広かったが、ついに廊下で盗賊の一団と鉢合わせた。

全員揃っているわけではないのだろうが、それでも盗賊は二十人

をくだらなかつた。

全員布で顔を覆っており、手に手に物騒な武器を持っている。

盗賊たちの中央には寝間着姿のハラデイがいた。

彼は縄をかけられて震え上がっている。

「おまえら！ その嫌みつたらしい金持ちのおっさんを放せ！」

「すこし正直すぎやしないか」

アイシスとネットレトは呆れて肩を落とした。

しかし盗賊たちはラナの言いようにはからかわれたと感じたのか、  
一気に色めきたって身構えた。

「そついや笛の音がひとつ足りなかつたね。だれか失敗しやがつたか」

ハラデイの首根を捕まえている男が言った。

どうやら彼が盗賊の首領らしい。

なにかがひっかかり、アイシスは首をひねった。

しかしそれについて考えている暇はなかつた。一団の半分ほどが、  
いつせいに襲いかかってきたのだ。

アイシスとラナのふたりは木の剣で、ネットレトは素手でそれを迎  
え撃った。

広いといっても所詮は廊下、集団で戦うには分が悪かつた。

運よく一対一の形に持ちこめることとなったアイシスたちは、順調に男たちを昏倒させた。

二十人を超えていた盗賊の数が、みるみるうちに減っていく。ハラデイの顔に赤みが差した。

「いいぞっ！ 旅の方々、その調子でみんなやってしまえ！」

すると、首領らしい男が目を吊り上げてハラデイに食いかかった。

「おまえは黙ってるっての」

「ひいっ」

ハラデイは情けない悲鳴をあげる。

顔はまたすっかり青ざめ、歯をがたがたと鳴らし、涙を流して座りこんでいる。

「それでいい。おまえには宝物庫の鍵を開けるっていう大仕事が残っているんだ」

男はからかうように言い、ハラデイの口ひげをもてあそんだ。

それから彼はとなりの男にハラデイを託し、剣を抜き払って前に進み出た。

「どいてろクソガキ。俺がやってやんよ」

彼は仲間をさえ口汚くののしると、抜き身の剣を月に光らせなが

ら三人の前に立った。

しかし実力は十分にあるのだろう、アイシスたちを相手に攻めあぐねていた盗賊たちは、安堵の色を浮かべてうしろにさがった。

「だれからだ、ああ？ おまえか、いがぐり野郎」

「なっ、いがぐりって、もしかしくなくても俺のことか！」

ラナは憤慨したが、アイシスはこの状況にも関わらずすこしふき出してしまった。

言われてみれば確かに、赤茶けて方々にはねたラナの髪は、いがぐりに見えなくもない。

笑うなとラナが吼え、アイシスは真っ赤になって謝った。

「は、お仲間にも笑われてちゃザマあねえ」

「黙れ！ 憎まれ口利けねえようにしてやる！」

男の口車に誘われるようにしてラナは踏みこんだ。

両手で剣を握りしめ、大きく振りかぶる。

二度、三度と矢のように振り下ろされた剣筋は、しかしどれも男をかすりもしなかった。

男は乾いた笑い声をあげた。

「見た目どおり、太刀筋もばか丸出し。力ばかりで、なんの捻りもねえ」

男はラナの剣筋に沿わせるようにして剣を合わせると、そのまま

軽く横にいなし、体勢が崩れたラナを蹴り飛ばした。ラナは廊下の壁にいやというほど叩きつけられた。

頭が割れんばかりに痛んだが、しかし彼は壁に手をついて立ち上がった。

男は口笛を吹いた。

「へえ、頑丈なんだ」

男は剣を構える。ゆつくりと、体のしびれに抗いながら構えなおすラナに、非情にも男は突きかかる。

鋭い剣がラナの体を貫くかと思われたその直前、木の剣が割りこんで男の邪魔をした。

アイシスだった。

これまでにない真剣な顔をしている。

男の顔の隠されていない部分、目だけがにやりと笑つのが見えた。

「嬢ちゃんもやるのかい」

「え」

アイシスはその言葉に覚えがあった。

そしてそのとき、先に男が話したときにひっかかったものの理由がわかった。アイシスはその声を聞いたことがあったのだ。

「湯屋の」

しかしアイシスはその先を言うことができなかった。目にも留まらぬ速さでくるりと身を回転させた男は、その勢いを足に乗せて、強烈な蹴りをアイシスの腹に見舞ったのだ。

アイシスの手から木剣がすべり落ち、風に吹かれる木の葉のように彼は飛んだ。

あやうく背中から落ちるところだったが、寸でのところで抱きとめられた。

ネットレトだ。

アイシスは咳きこみながらネットレトを見上げた。

彼の表情はいつもと変わらなかった。アイシスは安心した。

最後は色男か、と男が言った。

ネットレトは肩をすくめて見せる。

とたんに空気が張りつめ、かと思うと彼は地面を蹴り、同時に男もまた飛ぶようにして攻めかかってきた。

短い気合の声をあげ、男が鋭い突きを繰り返す。

ネットレトはそれを間一髪で避け、腕をつかむとそのまま捻り上げた。

男は苦悶の表情を浮かべたが、すぐに手を払ってふりほどき、ふり向きざまにネットレトの手に斬りつけた。

ネットレトはすばやく手を引く。

ここまでが、アイシスがまばたきを一度、呼吸を二度するあいだに行われた。

なんとという速さだろう。アイシスは息をのんだ。

「やるね。あとのふたりとは違うみたいだ」

「しいて言うなら私のほうがずっと髪が長い」

「ほざけ」

男は笑ったようだったが、目は笑っていなかった。

今度は男がネットレトの口車に乗せられる番だった。

乱れた気持ちで斬りつけた剣はたやすくかわされてしまった。

歯噛みして男は剣を振るが、精彩を欠いたその剣は、ネットレトにはまるで当たらない。

ネットレトは避けながら剣の腹を強く打った。

男の剣を持つ手が痺れる。ネットレトは拳を固めてその手を打つ。

男の手から剣が離れ、慌ててもう一度手を伸ばすも掴んだのは空気だった。

剣はネットレトの手にあった。

ネットレトは表情を変えない。

足を払われて男はなすすべなく倒れた。

すかさず気丈に顔をあげるが、その目先に剣が突きつけられた。

「諦める」

男は突きつけられた自分の剣を見、それからネットレトを見た。そしてため息をつくくと、小さく笑って顔の布を取った。あっ、とアイシスが声をあげる。

「やっぱり、きみは湯屋の！」

「げっ、目つきの悪い変態野郎！」とラナも言う。

「目つきに関しちゃ否定しねえが、変態ってなんだよ」  
男は観念したのか、むしろくつろいだように座りこんでいる。

「だって、見たろ。アイシスの」

「ちょ、ラナ、もう！」

男は乾いた声で笑った。  
大きく肩で息をついている。白い顔に、大粒の汗が光った。

「で、どうする色男？ 俺を役所につきだすか」

「さあ。まずは彼を自由にしろ」

男はうなずくと、仲間に命じてハラデイの縄を解かせた。

男が敗れたのを見て、盗賊たちはすっかり戦意を失ったようだ。



まるで抵抗のようすを見せず、おとなしくその言葉に従った。

ハラデイは震える足でよろよろとこちらに向かってきた。

「おお、旅のお方。あなたがたを雇って本当によかった、助かった。謝礼金をはずむよ、いくら必要かね」

ハラデイは手をもみ、すぐるようにしてネットレトに近づいた。

男はそんなハラデイのようすを、汚いものを見るかのような目で睨みつけていた。

「そりゃあ、金は腐るほどあるだろうよ。湯屋は大繁盛だもんな」

吐き捨てるような男の言葉に思うところがあつたのか。

ネットレトは剣を下げはしなかったが、男が話すままに任せておいた。

打ち震えていたハラデイは、男を避けてけつしてそちらに顔を向けずにいたのだが、その言葉には目を見開いた。

「お、おまえは……リグル！ きさま、盗賊にまで落ちぶれたか！」

「けつ、強盗はどつちだ。湯屋が繁盛するのを見るなり、金に物言わせてぶんどりやがって」

「黙れ！ ファサのじじいに運営を任せておつては、こつもつまくいかなかったらうて」

そう言い放つと、ハラデイはネットレトに向き直った。

「いや、すみませんな。こいつはリグルといって、湯屋で雇ってやっておるのですがな、どうも我が強くて。まさか、強盗を引き連れて自分の雇い主の屋敷を襲うとは」

「雇い主だと、ふざけんな！ ファサじいから全部奪ったくせによ」

リグルが身を乗り出して喚く。

ネトレトがとっさに剣を引かなければ、彼の顔には深い刺し傷ができたことだろう。

ネトレトはため息をついた。

「どつやら訳ありらしいな」

ハラディ邸の夜が明けていく。

## 第十三話：素直な言葉

### 『聖伝』第十三話

リグルとハラディの睨み合いが続く。ネットレトは剣をひいた。

「奪ったとは奇妙な言い草だな。金を出して買ったではないか」

「ふざけんな。じいさんの家族を人質にしゃがって、やり口が汚えつてんだよ」

「これはこれは、人質だと？」

ハラディはわざとらしくため息をつくと三人に向き直った。  
リグルとの言い合いに見切りをつけたらしい。

「すみませんな、お三方。見苦しいところを。こやつめ、すっかり頭がのぼせ上がっておるようだ。そうそうに役所へ連れていってもらえませんか。そのあとで報酬をお渡ししましょう。」

あなた方は金が入るし、私は悪党が捕まって安心だ。お互いよい具合に運びましたな」

「そうでしょうか」とネットレトが言った。

「ひとり不服そうですが？」

リグルはその声に勇気づけられて、きつとハラディを見据えた。

射るような眼光にハラデイの身がすくむ。

ハラデイは掠れた声で無理に笑った。

「リグルのことですか。こやつは強盗ですぞ？ 構ってなどおれませんか」

「しかし私は彼の話にいささか興味がありました」

ネトレトは無言を言わせない口調でそう言い切った。ハラデイがぐっと口を閉じる。

「続きを？」

「恩を売る気かよ」

「話したくないなら私は構わないが」

けっ、とリグルは唾を吐いた。そして話しはじめた。

「ファサじいっていう老いぼれがいてさ、湯屋の構想はそいつが提案したんだ。設備も、商売の仕方も、全部あのじいさんが考えた。寝る間も惜しんでさ。」

幸い、おもしろいと言って出資をしてくれるやつがいたんだが、この腐れ金持ちは見向きもしなかった。

それで、少ない金でどうにか商売を始めたんだが、珍しさもあって湯屋は繁盛してさ、ファサじいの暮らしもすこしは楽になったん

だ。なのにこいつが」

リグルは恨みのこもった目でハラデイを睨み据えた。短く悲鳴をあげ、ハラデイが後ずさりする。

情けないことに、彼はネットレトの背後へと逃げこんだ。

「こいつが全部奪ったんだ。じいさんも湯屋を守ろうと必死だったよ、なんせ生活がかかっているからね。」

だがこいつはじいさんの孫の学校を潰すと脅した。ばかみたいに可愛がっている孫が、ばかみたいに大切にしている学校を、友達を失うっていうんだ。

ファサじいは抵抗できなかった。それで、不当に安い値段でこの野郎が湯屋を買収したんだ」

「それで、恨みを晴らすために屋敷を襲ったのか」

リグルはうなずいた。

「じいさんは寝こんじまってよ、働けもしねえ。俺はじいさんの作った湯屋が好きだったから離れたくなかった。」

だがよ、どんどん湯屋は変わっていった。利益ばかり優先するようになってきやがったのさ。もう、そんなのを見ているのは我慢できなかつたんだよ！」

リグルは固く握った拳で床をなぐった。

その振動にハラデイが身を奮わせる。

アイシスはリグルの辛さを思っただけで切なくなつた。胸が痛んだ。

リグルが彼の言う“ファサじい”を慕っていることはよく伝わった。

ラナは壁に激しくぶつかってせいで頭から血が出ていたが、その顔に怒りは見えなかった。

彼もアイシスと同じ気持ちでいるのだ。

「だが、屋敷を襲ったところでどうにもならないだろう」

「全部奪ってやりたかったんだよ。こいつがファサじいから湯屋を奪ったみたいに、こいつが大切にしている汚い金を、全部」

そこまで言ってしまうと、リグルは大きいため息をついた。諦めの色が顔に出ている。

彼は額の汗を拭くと、自嘲的な笑みを浮かべてネットレトを見上げた。

「言わせてくれてありがとな。もういいよ、十分だ。役所にでもなんでも連れていけよ」

ネットレトは答えず、背後にいるハラデイをうかがった。

脂汗に顔をてからせたハラデイは、はやくしてくれ、と彼にせがんだ。

「ネットレト」ラナが口を挟んだ。「本当に連れていくのかよ」

「連れていかないと云うのか」

「だってよ、いまの話聞いたろ」

リグルは驚いたようにラナを見た。

ラナはそれに気づくと顔をそらしたが、俺は反対だ、ときっぱり言い張った。

「ぼくも。ぼくも反対だよ」

「嬢ちゃん……」

だからそれはやめてよ、とアイシスは顔を真っ赤にして抗議した。

しんみりとした空気が流れるなか、ハラデイがまるで場にそぐわない声で喚いた。

「おまえたち、なにを言っているんだ。どうかしている！ そいつは強盗だぞ、私を襲ったんだぞ？ 四の五の言わず、さっさと役所へ連れていけ！」

「ハラデイさん」

ネットレトは喚くハラデイに向き直った。それだけで彼は黙りこんだ。

そうさせるだけの威圧感をネットレトは発していた。

ハラデイだけでなく、その場にいたただれもが口を閉ざした。

「どうやら私の連れ合いは、彼を役所には連れていきたくないようです。しかしあなたは連れていけと言う。

取引きをしませんか。彼はあなたにとって、世間的にあまり

よろしくない事実を知っているようだ。彼が役所でそれを話したら、あなたもなんらかの罪に問われるに違いない。せつかく得た金と権力を失いたくはないでしょう?」

柔らかな口調とは裏腹に、彼の目は氷のように冷たかった。

ハラデイは震え上がった。

「そ、それはそうだが、それで私にどうしろと言う、言うのだ」

「なかつたことにするんです。今夜、強盗はここを襲わなかつた。あなたは傷つけられなかつたし、なにも盗られなかつた。盗賊の頭の顔も見なかつた。

そして、我々の報酬も払ってくれなくてよろしい。なんなら、そうだな、その金で“ファサじい”に見舞いの品でも買うといい」

ハラデイは壊れたおもちゃのように何度もうなずいた。

ネトレトは釘をさすようにもう一度鋭くハラデイを見据えると、すつと力を抜いて息をついた。

そして今度はリグルに向き直り、彼から奪った剣を差し出した。

「と、いうことだが」

「あんだ恐ろしいよ」

リグルは笑いながら剣を受け取った。

「ありがとな」



それからリグルはてきぱきと動いた。

彼は盗賊たちをまとめあげ、気を失った者や傷ついた者たちを屋敷から運び出した。

彼らは玄人ではなく、ただの悪友たちだという。

それから同じく気を失った用心棒たちを運び、ひとまとめにして必要のある者には治療を施した。

「殺しちゃいねえだろうな」

「ばか言うなよ、いがぐり。俺は悪さをしたくて強盗をしていたわけじゃねえ」

からかわれてラナはまた憤慨したが、事実彼らはだれも傷つけようとはしていなかった。

もちろん、用心棒は役目を果たすために戦おうとする。

必然的にどちらかが怪我を負うことになったが、しかし盗賊が受けた傷は深くとも、盗賊が彼らに与えた傷はどれも軽いものばかりだった。

加えて彼は、これまで数件やらかした強盗について、なにも盗っていないという。

「今日のための目くらまし、それと俺らの予行演習だよ。それに、金持ち野郎の高い鼻をちよっぴり折ってやりたかったっていうのもある」

「襲われた富豪はみんな泣きを見たって聞いたぜ」

「うわさ好きのマダムのことには信憑性もクソもねえもんだ」

リグルはそう言って笑った。なんともすっきりした性格の人物ではないか。

アイシスは顔見知りの使用人を探し、彼らに協力してもらいながら屋敷中の混乱を収めるのにつとめた。

幸い、役所に助けを求めにいった者はおらず、周囲の豪邸に騒ぎが飛び火することもなく、ややもすれば混乱はすっかり収まった。

「大丈夫？」

一仕事やり終えると、アイシスはラナのもとへと向かった。

ラナのそばには盗賊のひとりがついていて、彼は濡らした布でラナの傷を押さえていた。

「大したことねえよ」

「でも」

「平気だって。俺の言葉を信じるよ」

アイシスはにっこりと笑った。

「おい、おまえら先に引き上げな」

澄んだ声がして、見上げるとリグルが立っていた。

ラナの眉間にしわが寄る。

ラナの怪我の世話をしていた盗賊は、彼に一度向き直ると、ペコりと頭を下げてから走って行ってしまった。

リグルはその背中を見ていたが、やがて蚊が鳴くように小さな声でこう言った。

「悪かったな、その傷」

「あ？ なんだって」

そのあまりに小さな声に、ラナは眉を寄せて聞き返した。

「悪かったつつつてんだよ」

今度はラナの耳にもしつかりと声が届いたが、ラナはにやにや笑うと聞こえなかったな、と言った。

「てめっ、嘘つけ！ 気持ち悪い顔で笑いやがって、聞こえたらうが！」

「聞こえてねえって言うているだろ。なんだよ、ちゃんと謝れよ」

「聞こえてやがんじゃないやねえか！」

リグルは顔を赤くし、肩を怒らせるとそのまま屋敷を出ていった。アイシスたち三人は顔を見合わせ、にっこりと笑い合つと（ネット

レトもわずかに口の端をあげた)、まだ震えているハラデイを残して屋敷をあとにした。

もう二度とここにくることはないだろう、と思いながら。

その夜、アイシスはなかなか寝つけなかった。初めての实战に、いま思い出しても体が震える思いがする。

ラナはまるで無頓着に眠っていた。

天下泰平の寝顔だ。しかしいびきがうるさい。

アイシスは困ったように笑うと起きあがり、毛布を体にまきつけると遠慮がちにネトレトの部屋のドアを叩いた。

はたしてすぐに返事があった。

はつきりとした声に、やはり彼は起きていたのだろうとアイシスは思った。

「入るよ」

ネトレトは窓枠に手をかけて立っていた。月の光が彼の横顔を白く照らす。

「空を見ていたの？」

「ああ」

しかしそれは嘘だろう、とアイシスは思った。

ネットレトはもっと、なんと言えればいいか、ずっと深い顔をしていた。

星のような、現世のものを見る目とはまるで違うように思えた。

「眠れないのか」

ネットレトはこちらに向き直った。アイシスはうなずく。

「はじめて、ああして人と向き合ったんだ。木の剣だったけど、とても怖かった。いつかぼくは、本物の剣を持って、血を流しながらだれかと戦うんだろうか」

ネットレトは答えなかった。

「ねえ、ネットレトはどうだったの？ 初めてだれかと戦ったとき、怖かった？」

「ああ」とネットレトは言った。「怖かったよ。震えて、夜もうまく眠れなかった」

それから彼はやかに湯を沸かした。

「アイシスは大丈夫だ」

なにがどう、といったふうには彼は言わなかったが、しかしアイシスはずいぶんと安心した。

やがて彼が用意してくれた茶はやはりいい香りを放ち、それを飲んで部屋に戻ると、不思議とアイシスはぐっすりと眠れたのだった。

一番寝坊したのはアイシスだった。

彼が起きると部屋にラナの姿はなく、念のためとなりの部屋を覗いてみたがそこには彼もネットレトもいなかった。

さてはと思つて食堂に向かうと、やはりふたりはそこにいた。

アイシスの姿を見つけたラナが、口に物を頬張ったままで手を上げる。

「すまない。きみはまだ起きそうになかったから」

「腹が減つてどうしようもなくてさ」

アイシスもすぐに注文し、三人は遅めの朝ごはんを食べた。

ラナは二人前をぺろりとたいらげた。

「そろそろタリファを出ようか」とネットレトが言った。

「ん、もうここの図書館はいいのか？」

ラナの言葉にネットレトはうなづく。

図書館なんかについての間に通っていたんだよ、とラナは驚いた。

ネットレトはこともなげに、きみたちが眠っている間にと答える。

「じゃあ、あんたはいつ眠っていたんだ」

ネトレトは肩をすくめた。さあね、ということらしい。  
ラナは眉を下げた。ずいぶんと情けない顔になった。

「相変わらず掴めねえやつ」

アイシスは声を出して笑った。

あれ、と声を出したのはアイシスだった。

西の道の門のところに、ちいさな人影がひとつ見える。  
ラナにもネトレトにも、それは小さな黒い点としか見えなかった  
が、アイシスは目を丸くするところ言った。

「リグルだ」

やがて近づいていくにつれて、あとのふたりにもリグルの姿がは  
つきりと見えるようになった。

彼は腕を組み、門の大きな柱に背をもたせかけている。  
漆黒ともいうべき髪が風に揺れている。その髪の色はヴァネッサ  
を思い出させた。

リグルは実にこじんまりとした格好をしていた。  
小さな布袋を肩にかついでいる。

三人がずいぶんと近づいてくると、リグルはしゃきりと背筋を伸

ばした。彼はなかなか背が高い。

「なんだ、もう一回謝りにきたのか」

ラナが軽口をたたいたが、リグルは答えなかった。真剣な表情をしている。

「ぼくたちを待っていたの？」

「ああ」

「なんでアイシスには返事するんだよ」

ラナはすこしふてくされた。

「でも、よくわかったね。今日、しかもこの方角にくるって」

「勘だよ。俺は昔から勘がいいんだ」

リグルは笑ってこうつけ加えた。「だから連れていけば役にたつぜ、いろいろと」

アイシスはきよとんとした。

となりのラナも、一瞬目を丸くしたが、すぐに気を取り直して喚いた。

「ああ？ いきなりなにを言い出すんだ。連れていく、だ？ 素性の知れない強盗なんて連れていけるか」



そう言つと彼は、犬を追い払うときのよつに手の甲でしっしつとやつた。

しかしリグルは動じない。ラナの挑発にも乗らない。

「なあ、おまえら旅してんだろ？ 俺も連れていけよ。ハラデイの糞野郎はああ言ったけどさ、すっかり身元がばれた俺に、絶対なにか嫌がらせをしてくるぜ。この街にも住みにくくなる。

それに、なにか大きいことをしてみたいと思つていたところだね、ちようどいい。連れていけよ」

アイシスはネットレトを見た。

「さあ、どうだか」と彼は答えた。

ラナはやはり喚いている。彼はどうもリグルが気に入らないらしい。

思えばふたりは会つたたびに激しい口論を繰り返している。

その息もつかせぬ言葉のやりあいに、実は気が合うのではとアイシスはときどき思うのだけれど。

「だいたいな、連れていけつてなんだよ。えらそうなんだよ、おまえはいつも。それで口が達者で、無駄なことばっかり言つてやがるんだ」

「おまえはちよつと黙つてろつて」

「いいや黙らないね。黙るのはおまえだ、余計なことと言わなくていいんだよ。」

一緒にいきたくや一緒にいきたいって、そう言えばいいだけの話なんだ」

アイシスはちょっと驚いてラナを見た。リゲルも驚いたようで、黒くてつりあがった目を丸くしている。

ラナはそれらの視線に耐えられなかったようだ。顔を赤くして叫んだ。

「だから、どうなんだよ！ さっさと見えよ、言わないなら帰れよ！」

リゲルはすこし呆気に取られていたが、やがて垂らしていた手をぐっと握った。

素直で、くすぐったくなるようなその言葉を言うにはとても勇気が必要だったが、それでも彼は言った。

この街は刺激がどうも少なく、リゲルはもっと新しい世界を知りたかった。

それになにより、この三人組に惹かれたからだ。

孤児となった自分を育ててくれた恩人には、ファサにはもう別れの言葉を告げてある。

迷いはない。

「……一緒に、いきたい」

アイシスは満面の笑みでリグルを歓迎した。  
ネトレトは感心したようすでラナを見、そのラナはそっぽを向いたままにか小声で悪態をついていた。

冷たい風が四人に吹きつける。  
しかしリグルを加えてさらに騒がしさが増した四人は、それをも  
のともしなかった。

## 第十四話：生々しい死

### 『聖伝』第十四話

ネットレトは地図を睨んでいた。

タリファを出てから四日が過ぎていた。

彼の見る限り、太い一本道はなにに邪魔されることもなく伸びているはずだったが、彼らの目の前には大きな森が立ちはだかっていた。

「おかしいな、森の表記はないんだが」

「地図が古かったんだろ」

かもしれない、とネットレトはあいまいに答え、地図をしまった。

それよりも問題はこの先をどうするかだった。

道はまっすぐ森に向かって伸びていて、それ以外は草原だ。

森はずっと横に広がっていて、入らずにおこうとすればかなり迂回する必要があった。

そうすれば地図に書いてある道からは大きくはずれる。

「どうしよう」とアイシスが言った。

「面倒くさいな。ただの森だろう？ 道がそう続いているなら、このままいってしまおうぜ」

ラナが大きく伸びをしながら言い、異論が出なかったので一行はそのまま森に入ることにした。

ただの森ではない、とネットレトは思った。

この地図が書かれたのは三年前のことだ。三年でこれだけの森が育つだろうか、育つはずがない。

だとしたらこれは、なんらかの意思のもとに作られた森だ。地の精霊の力を借りれば、できない話でもあるまい。

しかしネットレトはなにも言わなかった。彼には思うところがあった。

そうして四人は薄暗い森へと足を踏み入れた。

木は方々に枝を伸ばし、太陽の光を遮ってしまうほどだった。

時間はまだ午前中で、世界のあらゆるものが太陽の恩恵を受けているはずだったが、アイシスたち四人に温もりは届かなかった。

「さ、寒い」

リグルが震えた。

アイシスとラナはタリファの街でコートを購入していたが、リグルはどうやら持って出てこなかったらしい。

服をぴったりと体にはりつけて震えている。

「旅に出るくせに上着の準備もなしかよ。はあ、ばかったらばか」

「うるせえつての、いがぐり。おまえのコートを貸しやがれ」

「こら、なにしゃがる！ 引っぱるなつて、こらー！」

放っておいたらつかみ合いのけんかに発展するだろうふたりのあいだに、アイシスが割って入った。

「ほら、ふたりともけんかしないの。森にはたくさんの動物がいるのに、驚かせちゃうじゃないか」

ラナもリグルも不服そうに顔をそむけたが、アイシスはそんなふたりを見るのが楽しかった。

旅の仲間にリグルが加わり、三人は改めて自己紹介をしたのだが、リグルはどうあってもラナを名前では呼ばなかった。

いがぐり、といういたずらなあだ名が、彼はよほど気に入ったらしい。

そしてラナはそれをとても嫌がった。

実際、リグルはラナが嫌がるからこそそうやって彼を呼ぶのだが。

そしてリグルはときどき、アイシスたちも困ったあだ名で呼ぶのだった。

「嬢ちゃんはさ」

「だから、ぼくは男だってば！」

リゲルはにやつと笑うと視線を下に落とした。

アイシスもその視線を追う。そして顔を真っ赤にして悲鳴をあげた。

「どこ見ているんだっ」

「確認だよ。そう照れるなよ」

リゲルは大のいじわる好きだった。

そして手強いことに、彼はずいぶんと頭がきれた。

タリファの人たちは彼に散々泣かされたことだろう、とアイシスは街の人たちをかわいそうに思った。

「それで、ぼくがなに？」

「そうそう。アイシスはときどきすげえ説教くせえのなって言おうと思ったの」

「なっ」

アイシスの声が森中に響いた。

「だれのせいだと思っっているんだ！」

その声に驚き、たくさんの鳥がいつせいに木から飛び立った。

「あっはっは、しかしさっきのは傑作だったな」

「もう勘弁してよ」

アイシスは情けない声を出した。リグルは上機嫌で笑っている。

四人は昼ごはんをとっているところだった。

「ごはんの時間を決めるのは、いつからかラナの腹時計となっていた。

そして彼の腹はほぼ正確に毎日同じ時刻に鳴るのだった。

「それよりも、ぼくちよつと気になることがあるんだ。さっきからね、こつ、胸がざわつくというか」

アイシスは不安げに胸元をさすった。

例えるならば、生のをよく噛みもせず飲みこんでしまったときのような。

ねっとりはりつくような不安と、なんとも言いがたい気味の悪さ。

「ユフィロスレジアが訴えているんだろう」

「ユフィが？」



「ああ」

「ヴァネッサも訴えている？」

「ああ」

リゲルはこのやり取りを不思議そうな顔つきで見ている。  
ユフィロスレジアもヴァネッサも、彼にははじめて聞く単語でし  
かなかつた。

「おふたりさん、すこし話に割って入るけどね、いったい何話を話  
しているってんだよ」

そこでアイシスはすべてを話すことになった。

精霊の話、自分の種族の話、薄気味悪い黒の騎士団の話。

リゲルは口がうまいが聞くのもうまく、アイシスはネットレトとの  
出会いにいたるまでをすっかり話してしまった。

自分はエルフだとアイシスが言うのと、さすがにリゲルは驚き、に  
わかには信じられないようだったが、彼が尖った耳を見せると深  
い顔をしてうなずいた。

「へえ、どつりでその容姿なわけ。エルフは神に愛された子、って  
ね、学校じゃこう教わったよ。たしかに神に愛されそうな顔してら

「からかってばかりのくせに」

リグルはあははと笑った。裏のない笑い声だった。

「それにしても驚いたね。どうもあんたらは不思議な集まりのようだ。三人のうち、ふたりがその超越種とやらの使い手で、ひとりが救いようのないばか」

「そのひとりってのはおまえか」とラナ。

「ばか。三人のうち、って言ったろ。俺は入ってないの。だからばか」

「ああもう！ ああ言えばこう言うっ！」

「こう言えばそう言う」

歌うようにリグルが言い、ラナはさらに憤慨して頭をかきむしった。

「ばかは置いていて。それってすごいことじゃねえ？ 超越種はたったのふたつ、つまりその使役者も世界にふたりしかいないわけだ」

「まあ、そうなる」

「それが出会って、こうして旅してるってんだぜ。こりゃ奇跡だろ。それとも運命だったのかね」

「運命……」

アイシスは呟いた。

アイシスは“運命”を信じる？

父親の声が聞こえたような気がした。

父さんは、全部わかっていたのかな。ネットレトに出会い、旅に出ることも。

まさかね。

アイシスは首をふった。

未来を読む人なんていない。聖なる水鏡でさえも、その片鱗をほんのわずか、おぼろげに見せてくれるだけなのだから。

「で、その精霊さんがたが揃って騒いでいるというわけだ」

「まあ、そうだな」

「嫌な予感しかしないというわけだね」

リグルは空を見上げた。しかし見えなかった。頭上を覆うのは葉の生い茂った枝ばかりだ。

幽霊でも出てきそうな雰囲気だね、とリグルが冗談ともつかぬ口調で呟いた。

不意に大きな声が聞こえたのは、食事を終えた一行が腰をあげたのとほぼ同時だった。

四人の表情がきりりと引き締まった。  
ネトレトとリグルは腰の剣に手をそえた。

静まり返った空間を風が吹きぬける。葉がこすれてざわざわと鳴った。

「また聞こえた！」

獣が吼えるような声だ。

アイシスは声のほうをふり向く。なにもいない。

「いったいなんなんだよ、あの気持ち悪い声」

「魔物かも」とリグルが言った。

ネトレトはちらりと彼を見た。しかしなにも言わず、また視線を四方にめぐらせた。

アイシスもラナも、リグルの言葉にすっかり青ざめてしまった。

彼らは魔物を見たことがない。

しかし、話に聞くに、魔物はみな一様に恐ろしい姿をしていて、筋力がすさまじく、目にも留まらぬ速さで襲いかかるといふ。

彼らは鋭い牙を持ち、獲物の首元にぶすりとやって、抵抗できないように弱らせたらあとは生きたまま食ってしまうのだとか。

「敵を過小評価するのも、過大評価するのもいけない」

静かな声でネトレトが言い、ふたりは夢から覚めたような心地がした。

アイシスはまた心を読まれたような気がした。

今度はリグルが彼をちらりと見たが、やはり彼もなにも言わなかった。

「くるぞ」

リグルが言うと同時に、ラナの正面の木が音をたてて倒れた。

ラナは思わず後ずさりする。

ひときわ大きな吼え声が聞こえ、ついに声の正体が姿を現した。

「で、でけえ……」

それは一目見ると熊のような、しかしその二倍は優に超えるかという大きさをした生き物だった。

体は一面見るからに固そうな毛に覆われており、異様なぎらつきを見せる目は赤い。

二本の足でしっかりと立っており、前足と言うべきか手と言うべきか、とにかく鋭い爪が光っていた。

アイシスとラナが生まれてはじめて目にする魔物だった。

魔物は四人の姿を見つけるとまた大きく吼えた。

開かれた口に、堂々とした四本の牙が見える。舌は滴るように赤

く、血の色を連想させた。

「グーズだ」とネトレトは言った。「人喰らいの種類だな」

「げっ」

人喰らいだつて、とラナが叫ぼうとしたときだった。

グーズは地を蹴り、その巨体からは想像もできない速さでラナに襲いかかった。

ラナは避けきれず、グーズの体当たりを受けて吹き飛んだ。

「ラナ！」

「よそ見はするな。ラナを信じろ」

ネトレトが落ち着いた声音で注意する。

アイシスは慌てて視線を戻した。

そうだ、ラナを信じろ。

実際、ラナは腹に大きな衝撃を受けたが、木を背にしてすぐに立ち上がることができた。

元来ラナは丈夫なのだ。

「グーズは速いぞ。それに力も強い。血のにおいに貪欲だ」

丸太のように太い腕をしならせグーズが襲いかかるが、ネトレトはまるで子猫と戯れるようにそれを避け、しかも冷静に説明してくれるというはなれ技を披露した。

しかしネットレトは反撃にできなかった。ただひらりひらりと身をかわすだけだ。

グーズは反転し、今度はリグルに狙いを定めた。

「きやがったなデカブツ」

リグルの声は震えていなかった。しっかりとした、落ち着いた声だ。

彼は剣を抜いた。

薄暗い中で、リグルの持つ細身の剣が妖しく光る。

アイシスは見とれた。剣と、剣を持つリグルの妖艶さに。

グーズは四つ足で突進してきたが、リグルはそれを驚くべき跳躍でかわした。

高く飛びあがった彼の頭は、木々の天蓋に届くかとすら思えた。

そのうえ彼の剣は、飛びあがりながら立派に仕事をしていた。グーズはしたたかに鼻先を斬りつけられていたのだ。

頑丈な毛も鼻は覆っておらず、剥き出しの肌は破れ、鮮血が飛んだ。

グーズは悲しげに吼え、頭からどつと倒れた。

倒れた先にアイシスがいた。

グーズの目が鋭く光り、アイシスはたじろいだ。

我を求めよ。

「ユファイ？」

我が名を呼び、我を求めよ。

だけど、とアイシスは思う。

だけど、名を呼ぶのは最後ではなかったか。

言霊が必要なんだ。

ユファイを呼ぶためには、エルフの王となるためには、言霊が

「光よ」

なかばうつとりとしたような声で、アイシスが呟いた。

その青い目はグーズを見ていないのか、焦点があっていないように見える。

「光よ……すべてを照らし、愛し……包みこむ力を、我に……」

不意にアイシスは首をふった。

ぼんやりとしていた表情が輝きを取り戻す。

唇はまだうつすらと開いていたが、目ははっきりと焦点をあわせ、



グーズを捉えた。

鼻から血をしたたらせ、息を荒げた恐ろしい魔物。それが目の前にいるのだ。

「うわあっ！」

アイシスはうわずった声をあげ、同時にラナとリグルは目を覚ましたかのように体を奮わせた。

彼らはすっかり見入っていたのだ。アイシスの、あまりに神々しい姿に。

彼らの目にアイシスは光っているようにさえ見えた。

正気を取り戻したふたりは、アイシスが剣もかまえずにいる姿を見て驚いた。

グーズはもう彼の鼻先にまで迫っている。

「アイシス！」

ラナが叫んだ。

アイシスは口を開けたが恐ろしさに声も出なかった。

グーズが吼え、アイシスは思わず腕で顔を覆う。

もうだめだ、そう思って固く目を閉じた。

しかし次に聞こえたのはラナの悲鳴でもグーズの雄叫びでもなく、なにか大きなものが倒れる音だった。

アイシスはおそろおそろ目を開き、腕をどける。すると手を伸ばせば届くほどの位置に、巨大なグーズの顔があった。

「わあああつ！」

「大丈夫だ、落ち着け」

ふわりと風が舞って、ネトレトの声がした。かと思つとアイシスの視界は真っ暗になった。

なにが起こつたかとアイシスは慌てふためいたが、なんとということはない、ネトレトが彼の目を手で覆ってしまっただけのことだ。

「……………ネトレト？」

「心配ない。もう動かない」

「……………」

アイシスがもう叫びださないのを確認すると、ネトレトはそつと手をどけた。

アイシスはゆっくりと視線をあげ、倒れているグーズを見た。

グーズの目は見開かれたままだったが、もう赤い光を宿してはいなかった。それはまったくの空洞にも見えた。

「死んでいる……………の？」

ネトレトは答えなかった。

おもむろに立ち上がると手を差し出し、アイシスを助け起こした。  
すこしふらついたがアイシスはうまく立つことができた。  
呆けたように立っているラナとリグルにもネットレトは声をかける。

「いこう」

アイシスもラナも、しばらくグーズから目を逸らすことができなかった。

こつも生々しい死を、彼らははじめて目にしたので。

彼らの知る死はいつも、遠い記憶にある歌声の向こう側にあったり、ゆっくりと訪れる病の死であったりしたから。

リグルもしばらくグーズを見ていたが、やがてくるりと背を向けた。

## 第十五話：光の精霊

### 『聖伝』第十五話

風が冷たさを増したようだ。日が暮れはじめたのだらうとネットトは考えた。

アイシスとラナのふたりは、うつむきがちで、口数もずっと少なかった。

ラナの腹時計さえもなりを潜め、飯にしようぜ、と言ったのはリグルだった。

「あんだ、わざとだね」

干し肉をかじりながら、リグルが囁いた。

ネットトは眉をあげたがなにも言わなかった。

「あのふたり、まるで世間ずれしちやいないようだ。細っこいあいつらの精神を鍛えるために、わざと目の前で殺したろ」

「それだけの理由ではないが」

リグルは軽くあごをあげた。続けて、と促すのだ。

「言霊を見つけるいい機会だと思った」

「ことだま？」

「精霊の話をしたろう。彼女らを呼ぶための力となる言葉だ」

ふうん、とリグルは言った。

彼は頭がいい。理解が早かった。

「じゃあ、ともかく、あなたの目論見は当たったわけだね。言霊を見つけるといふのは？」

「わかったのか」

「光よ、っていうやつだろ。小さい声だったから全部は聞き取れなかったけど」

ネットレトは感心した。まさかそこまで理解するとは思わなかったからだ。

言霊は、そうと知らない人物が聞けば、ただの言葉と変わらない。さきほどのアイシスの詠唱も、ただのひとり言と思われて当然だったのだが。

「にしても、ちょっと酷だったんじゃない？」

リグルの視線の先には、食事もあり喉を通らないらしいふたりの姿があった。

「いずれ通る道だ」とネットレトは言い、すこし鋭い目で、「きみは

平気なようだな」

リグルは目を閉じ、口の片端をきゅっとつりあげて立ち上がると、軽快な足取りでアイシスたちのもとに向かった。

並んで座るふたりの背中を強めに叩き、そのあいだに割ってはい

る。  
声は聞き取れなかったが、またいつものいじわるでも言っているの

だろう。  
ラナが口をひん曲げ、アイシスはいつもより控えめだったが楽しそうに笑った。

リグルの助けもあって、ふたりはしだいに元気を取り戻した。  
それに、ふたりはとても努力した。彼らは、ラナはともかくとして、生半可な気持ちで旅を始めたわけではないのだ。

アイシスは運命を追求したかった。

運命を信じるか、と問うた彼の父親に、アイシスは胸を張って答えたかった。そのためにネトレトといくことを選んだ。

彼はまだ、自分を真に突き動かすものの正体に気づいていないのだが。

それはともかく、旅には覚悟が必要だった。血を流すことも、血が流れることもあるだろう。

強くならなくては、とアイシスは思った。

「それで」と、アイシスが十分に回復するのを待ってからネットレトが切り出した。

「きみは無意識に言葉を口走ったわけだが。覚えているか」

「……と、思う」

アイシスはいまいに返した。

実際、あのときは夢中で、それこそ夢を見ているような心地であったから、自分がなにか特別なことを言ったらしいことはわかっても、その内容まではよく思い出せなかった。

アイシスは素直にそう話した。

「焦ることはない」

ネットレトは静かに諭した。

アイシスはうなずく。しかしもどかしかった。ユフィを呼び出せると思ったのに。しかし直前で夢は覚めてしまった。

夢のままではいけないんだ、とアイシスは思った。

はつきりと、自分の意思をもって呼ばなきや。

「でも、あのときは驚いたぜ。おまえが光って見えたんだ、なんだか神がかってさえ見えたよ」

「光って？ 光……」

ラナの言葉にアイシスは眉をぴくりと動かした。  
心になにかが響いた。

光、という言葉をアイシスは何度も口の中でころがす。  
光、光の精霊ユフィロスレジア。

アイシスは目を閉じ、足を止めた。それに気づいてラナたちも歩  
みを止める。

「どうした」

「しっ」

ラナの肩を掴んだのはネットレトだった。ひどく真剣な顔をしてい  
る。

彼の視線の先で、アイシスはしっかりと目を閉じている。

彼が見るに、アイシスはとても落ち着いているようだった。くつ  
ろいでいて、幸せであるようにすら見えた。

「なんなんだ」

「ばか。見てりゃわかるよ」

「おまえ、さっきからばかばかばかばか」

「光よ」



騒がしくなりはじめたふたりが、ぴたりと口を閉ざした。そうさせるに十分な高貴さで、アイシスが静かに言葉をつむぎ始めた。

「すべてを照らし、愛し、包みこむ力を我に」

ネットレトがわずかに身を乗り出す。

風が起こり、アイシスを中心に渦巻きはじめた。木の葉が舞い上がり、または舞い落ち、アイシスのまわりを踊るように跳ねる。

アイシスは閉じていた目をゆっくりと開けた。青い瞳が、炎のように一瞬揺らめいて見える。

「ユフィロスレジア」

とたん、舞っていた木の葉が天に吹き上げられた。すさまじい突風に、ラナもネットレトもリグルも腕で顔を覆う。

ラナは必死に薄目を開け、アイシスを見た。アイシスはまぎれもなく光っていた。突風に木の天蓋は穴が開いてしまっていたが、そこから射しこむ光とは訳が違つうように見えた。

「アイシス、アイシス！」

ラナは叫んだが、風にかき消されてしまったようだ。  
アイシスは焦点の定まらない目で中空を見上げていた。

アイシスには見えていた。それは光の精霊が見せる幻影だった。  
彼女と共に生きた、歴代のエルフ王たちの姿。

まずアイシスは父親の姿を見た。

ルキア王はほほ笑んでいて、それはとても優しく、美しかった。

「父さん」

ルキア王はにっこりと笑み、うなずいた。そして消えた。

次に現れたのはルキア王の父、ヨセフ王のようであった。

アイシスは祖父の顔を見たことはなかったが、彼もやはり美しく、  
気高かった。

そうして次々に王が現れ、かつ消えていった。

彼らはアイシスにほほ笑みかけ、または力強くうなずいて見せた。

アイシスは嬉しかった。彼らの中に自分もいるのだ。

とても長いような一瞬の時間がすぎさり、そしてアイシスは最後  
に見た、腰まである長い銀の髪を揺らす、青い瞳の澄んだ青年を  
。

「え」

そしてアイシスの意識は現実へと引き戻された。

そこは薄暗い森で、ルキア王の姿も、多くの祖先の姿もどこにもなかった。

静かに落ちていく数枚の木の葉と呆けたような顔のラナ、真剣な眼差しのネトレトと、口をなけば開けたリグル。

そして彼らとアイシスのあいだには光り輝く存在がいた。

「やっと会えた、ユファイ」

アイシスはにことほほ笑み、彼女もまたそれに答えた。

アイシスがついにユファイロスレジアを呼び出した、その瞬間だった。

ユファイロスレジアは宙に浮かび、眩い光を放ちながらアイシスと向き合っていた。

リグルは体の震えが止まらなかった。

彼は精霊を見るのが初めてだったし、それになにより彼女はとても美しかった。

「これが、超越種……」

ユフィロスレジアはその声にふり向くと、リグルに優しくほほ笑みかけた。リグルは体が縮みこむ思いがした。

やっと我が名を呼んだな、王よ。この時を待ち望んだぞ。

「ぼくも」

ふたりは言葉らしい言葉を話さなかった。

口に出さなくともアイシスにはユフィロスレジアの思いが伝わってきたし、ユフィロスレジアにもまたアイシスの思いが伝わった。

ふたりは心でつながっているのだ。アイシスはそのことを強く感じた。

「おい」とリグルが小声でラナに耳打ちした。

「なんでふたりとも喋らねえの」

「知らん。もしかしたら精霊がなにか話しているのかも」

「だったら俺らにも聞こえんだろ」

ラナはここぞとばかりに知識をひけらかしてみせた。

「頭悪いな。精霊の声は、精霊と共に生きるやつにしか聞こえねえんだぜ」

「は？ 頭悪いのはおまえでしょ。なにからかおうとしてんの。だつてさっき、あの精霊の話す声、普通に聞こえたぜ」

ラナは思わず目を見開いた。この口ばかり達者な男は、ユフィロスレジアの声を聞いたという。

ネットレトの言葉が確かなら、彼にも精霊を扱っ資格があるということだ。

ラナはなにかを言いかけたが、どさりとなにかが倒れる音がして口を閉じた。

ふり返ればアイシスが倒れているではないか。

すぐさまネットレトが駆け寄り、アイシスを抱き起こした。

「ア、アイシス!？」

「心配ない。すこし疲れただけだろう」

アイシスの顔は青ざめていて、額には大粒の汗が光っていた。

短い距離を全力で駆けたあとのように、浅く速い呼吸を繰り返している。

ユフィロスレジアはそのようすを見ていたが、ふとネットレトに目を留めると鈴の音のような声で言った。

闇遣いか。

ネットレトは顔をあげた。

ユフィロスレジアは深い笑みをたたえていて、慈愛の目で彼を見た。

王を頼むぞ。

「ああ」

おまえも自分の身を大切にせよ。

「……………」

そしてユフィロスレジアは消えた。ラナがうおっ、と声をあげた。

アイシスが目を覚ますと、一番に目に飛びこんできたのは、心配そうに顔を曇らせたラナだった。

「うわっ、アイシス？」

「うん……………」

「大丈夫なのか」

アイシスはこっくりうなずいた。  
まだすこし頭がうまく回っていないようで、体はひどく重たく感じたのだが、苦しい辛いということはない。

上半身を起こそうとするとラナが手伝ってくれ、アイシスは気恥ずかしさにすこし顔を赤くした。

「大丈夫だつてば、ラナ。ごめんね、心配かけたかな」

「うん、いや、大丈夫ならいい。うん」

実のところ、ラナはすこし不安だったのだ。アイシスが垣間見せる神々しさに、まるで別人になってしまったのではないかとすら感じて。

一緒に野を駆け草原を跳ねた親友が、ずっと遠くにいつてしまうのではないか。

しかしアイシスは変わっていなかった。

すぐに顔を赤くするところも、すぐに謝るところも、そして申し訳なさそうな笑顔も全部。

「お目覚めだね」とリグル。

彼は手に布を持っていて、冷水につけられたのだろうそれはひんやりと冷たく、アイシスの火照った頬にとても気持ちよかった。

聞けば近くの小川にひたしてきたのだという。彼の優しさにアイシスは感謝した。

「気分はどうだい」

「うーん、寝起きの感じ」

リグルはさっぱりとした声で笑った。あはは、違いねえ。

アイシスが平気だと言い張るので、四人はまた森を進むことにした。

アイシスはすこし興奮気味で、ユフィロスレジアと交わした会話などを話して聞かせた。

しかし、ふとした瞬間にアイシスの顔の華やきが消え、口を閉ざし、すこし陰鬱ともとれる表情を見せた。  
引きこまれるようにラナが尋ねる。

「どうかしたのか」

「うん。ちょっと、気になることがあって」

ラナは無言で先をうながした。

気づけばネットレトもリグルも神妙な顔つきでアイシスをうかがっている。

アイシスはすこし考え、ひとつずつ言葉を選びながら丁寧に話した。

「ユフィを呼んだとき、まあぼくは無我夢中だったんだけど、言葉が完成したときにね、たくさんの人の幻影を見たんだ。たぶん、ユフィがこれまでに仕えたエルフの王さまたちだと思うんだよ、父さんの顔も見えたし。」

それでね、父さんからおじいちゃん、きつとそのまたおじいちゃんっていうふうに遡って幻影が見えたんだけど」

アイシスは信じられないといったふうには首をふった。



「最後に現れた青年が、まるでぼくにそっくりだったんだ。一瞬しか見えなかったけれど、毎日のように見る顔だもの、間違えようがないよ。」

「ずいぶんと大人びていたようだけど、それに髪もずっと長かったけど、あれはぼくだった」

「ただ似ていただけとかじゃなくて？」とリグル。

アイシスは眉根を寄せて、しかしきつぱりとした声で「違つと思つ」と言った。

「アイシスがそう思うならそうなんだろう」

ネットレトが静かに口を開いた。

「しかし、気に病んでいても仕方がない。きみが答えを知るべきならば、いずれわかる時がくる」

アイシスは重々しくうなずいた。

そしてその“時”はいずれやってくるだろう、と思った。それはそう遠くない日のことだろう、とも。

耳を傾けなくても、心が饒舌に語るときだつてあるのだ。

「ところで、間違いつてなにさ」

なにげなくリグルが放り投げた疑問に、ネットレトは息を飲んだ。目を大きく見開いたが、しかし気取られないように取り繕い、平

常と変わらない声で言う。

「きみは精霊の声が聞けるのか」

「そうみたいだね」

アイシスもラナも、ネトレトの心の動きにはまるで気づかなかつた。彼にはそれを押し隠せるだけの力も経験もあったからだ。しかしリグルの目は聡かった。

彼にはネトレトが見せたわずかな動揺も、それを抑えつける努力も、すべてが手に取るように見えていた。

「ユフィロスレジアだっけ、彼女はあんたに闇遣いかって呼びかけたね」

「ああ。私は闇の精霊を扱うから」

「ふうん。そういうのを闇遣いっていうんだね。もっとこう、物騒なものかと思っていたよ」

ネトレトは言葉を失った。

リグルは目を細めてその表情を見ていたが、なにも言わずにさっさと歩き出した。

アイシスもラナもこのやり取りの意味をまるで理解できずにいたが、なんとなく、なにも追及せずにおくことにした。

答えを知るべきならば、いずれわかる時がくる。アイシスはそう自分に言い聞かせた。

すっかり日が暮れてしまったようで、わずかな光さえも森に射しこんではこなくなつた。

一行は足を止め、野宿の準備を始めた。

魔物の声らしいうなりを聞くことはあつても、あれからあのおぞましい姿を見ることはなかつた。

しかし用心は必要だと、ネトレトは木の上で寝ることを強いた。

これにラナは辟易したが、アイシスとリグルはけっこう気に入つたようだった。

ネトレトは草についての知識が豊富で、眠りにつく前に食べられる草をいろいろと教えてくれた。

アイシスたち三人はそこらじゅうを飛び跳ね、適当な草を摘んでネトレトに見せた。

「んあ」

問題ないと言われ、星型の葉を噛んだりグルは、とたんに間の抜けた声を出した。

香草の一種だったのだろう、わずかに草独特の苦味がしたかと思つと、すぐに爽快な香りが口に広がつた。

口の中だけに夏が訪れたかのようにだった。

「は、鼻から抜ける」

「これはすごく酸っぱいや」とアイシスは顔をしかめる。

そうして三人は草の味を楽しんだ。

ネトレトは木の幹にもたれながらそのようすをながめた。

リグルはラナの口に星型の葉をねじこみ、ラナはさきほどのリグルとまるで同じ反応をした（「んあ」）。それを見て楽しそうに笑うアイシス。

アイシスもラナも、無邪気で純粹で、おそろしく単純なようだった。

リグルは彼らと年は変わらないように見える。笑う顔も裏表がなく、とても素直だ。

しかし時折見せるあの鋭く探るような表情はなんだろう。

ネトレトは気づかないうちにリグルを視線で追っていたようだ。

それを感じてふり向いたリグルは、にやりと口の片端だけをあげて笑った。

## 第十六話：「ティエラに帰れ」

### 『聖伝』第十六話

もう三日も森をさまよっていた。

最初のうちは、草が払われた道を歩いていたのだが、いつの間にかそれも姿を消していた。獣道さえ見当たらない。

しかし四人は不思議と不安を感じなかった。心地のいい声が呼ぶのを聞いたからだ。

誘われるようにして一行は森を進んだ。

魔物には二度遭遇した。

それぞれ異なる姿をしていたが、どれもグーズの一種だとネットトは言った。両方彼が仕留めた。

布の端で剣を拭うさまからアイシスは目が放せなかった。

魔物の血はねつとりとっているようで、布はすぐに使い物にならなくなった。

真に恐れるべきは、まるで果肉を刺すごとく魔物を貫く刃より、彼の人の心の冷静さではないか。

「日、沈んだのかな」

アイシスはだれに言うともなく呟いた。

アイシスはいささか疲れていた。

地面はどこも湿っていて、足を踏みこむたびに粘土質の土が絡みついた。歩くだけで一苦労だった。

瞬発的な力において、アイシスは絶対の自信があったが、どうも持久力はないらしい。

ともすれば彼は四人のなかでも遅れがちだった。

そういうとき、いち早くそれに気づくのはいつもリグルだった。彼はアイシスが少しでも足を止めれば一緒に止まり、そうでなくても時々ふり向いては声をかけるのだった。

「なあ、すこし休まねえか」

リグルの提案で四人は思い思いの場所に腰をおろした。

アイシスは濡れていない木の根に座り、大きく息をついた。

「大丈夫か」

すこし心配そうな顔で、ラナが干し果物を差し出した。

アイシスは汗を拭う。にこりと笑い、それを受け取る。

ラナは頑丈だ。これほど歩きとおしてもまるで疲れを見せない。それはネットレトも同様だった。彼は旅なれているから。

リグルはすこし疲れたようすを見せているが、それでも自分ほどではない。

アイシスは恥ずかしく思いながら乾燥した苺をかじった。

甘みが口の中に広がる。しばらく舌の上で転がしていると、すと疲れが抜けていくような気がした。

「歩くのが速すぎるか」とネットレトが言った。

強がって首をふるうとするアイシスに、ネットレトが重ねて言った。

「正直に言ってくれ。無理をされるほうが困る」

「じゃあ、もうすこしゆっくりめでお願いしたいな」

ネットレトはうなずいた。

アイシスを疲れさせる原因はもうひとつあった。

恐怖だ。

この森には魔物が多いのだろうか、地うなりのような轟きが、昼夜をかまわず聞こえてくるのだ。

ラナが森をいこうと提案したときに反対しておけばよかった。

アイシスは後悔したが、いまさらどうにもなるまい。

しかし彼が恐れているのは、魔物に襲われることというわけではなかった。

もちろん魔物は怖い、しかしネトレトの存在は彼を大いに安心させてくれた。

ではなにが、というと、彼は自分の剣がいつか血に濡れるだろうことを恐れているのだ。

それは仕方のないことだと彼は何度も心に言い聞かせているが、それでもやはり体が震えた。

ネトレトはそんなアイシスの気持ちに気づいていた。

すっかり寒くなった。

風がない。鳥の鳴き声もなかった。

「不気味だな」とラナが言った。

「嵐の前の、なんとやら」

リグルが歌うように言い、アイシスとラナはすばやく辺りを見回した。

しかし怪しい影は見当たらず、ラナは胸を撫で下ろした。

そう、ラナだけは。

「あっ」

アイシスは違った。



エルフの研ぎ澄まされた目が、木々の向こうで揺らめく黒い姿を捉えたのだ。

彼の耳には大きな足が木の葉を踏む音すら聞こえた。

「どっ、どっした」

ラナの声はすっかり上ずっている。

アイシスは一点を震える指でさした。

「たぶん、魔物だ。あっちの方向にいる！」

「こっちにもな」

「え」

アイシスはリグルの声にふり返った。

彼は不適な笑みを浮かべ、やはり一点を指さしていた。

その先には確かに影が見える。しかしずいぶんと遠い。リグルにはあれが見えるというのか。

「囲まれたか」

ネトレトは腰の剣に手をかけた。しゃらり、と涼やかな音とともに光る刃が抜かれる。リグルもそれに習った。

アイシスとラナは青い顔を見合わせたが、うなずくと彼らに習って剣を抜いた。

ついにそのときがやってきたのだ。アイシスもいまは覚悟を決めた。

ネットレトは気取られないようそつと横目で彼の顔をうかがった。

姿を現したのは、やはりグーズだという。

最初に見たグーズより大きさは劣る。しかし問題はその数だった。

らんらんと光る赤い目は合計で十四。つまりアイシスたちは七体もの魔物に囲まれているということだった。

「抜いたね」

顔つきとは裏腹に、リグルの声は鋭かった。

肘でわき腹をつつかれ、ラナはむつと眉根を寄せる。

アイシスにしてもラナにしても、本物の剣を抜いてみたのはこれが初めてだった。店で馴染み具合を確認したときを別にすれば。

剣は手の中でずしりと重かった。

汗がにじむ。

気を抜けばずりと剣が落ちてしまいそうだ。

「一体ずつ受け持ったとして、残りは三体。色男、お願いできる」

「ああ」

ネットレトはこともなげにうなずいた。

もう逃げられない。リゲルの言葉が決定打だった。

アイシスは剣をしつかりと構えたまま足場を固めた。粘り気のある土がすこし心もとない。

すばやく視線をめぐらせ、木の根元に乾いた地面を見つけた。存外冷静である。

「慌てるな。きみたちの動きはなかなかよかった。怪我に気をつけて」

では出発、とでも続けそうな口調だった。

ネトレトは言い終えるや否や、自ら赤い光目がけて跳びこんだ。とたんに鋭い声が響く。

アイシスは耳を塞ぎたくなるのをぐつと堪えた。

「いくぞ！」

「うん！」

アイシスとラナは呼吸を合わせて地面を蹴った。

そのグーズはアイシスより頭ふたつ分ほど大きかった。

二本足で立ち、体つきは細いが、やはり固そうな毛で覆われている。

アイシスは一瞬で魔物の全身を観察した。前例がある、狙うべきは毛のない部分だ。

目、鼻先、口元、そして腹まわり。

アイシスはその四点に神経を集中させた。

グーズがのそりと腕を上げる。振り下ろす速さはその比ではなかった。

刃のような爪が襲いかかる。

アイシスは身をかがめ、かろうじてそれを避けた。

どくりと心臓が脈打つのを感ずる。

アイシスの五感は今までになく研ぎ澄まされていた。

身をかがめた反動を用い、アイシスは一跳びでグーズの間合いに入った。

勢いを殺さないよう、そのまま剣を横に薙ぐ。

確かな手ごたえがあり、切ない声が響いた。

「斬った……」

アイシスはしっかりとその感覚を手に感じた。ずいぶん重い感覚だった。

一瞬、アイシスは我を忘れた。

目を見開き、剣から糸を引いて滴る血を見る。

「なにやってんだ！」

鋭いリグルの声が飛んだ。

アイシスがふり向くと、腹から血を流したグーズが、腕を高々と振りかぶっているところだった。

慌てて体勢を立て直そうと足を踏ん張る。

しかし力は湿った土に吸い取られ、アイシスは足を絡ませて逆によろめいてしまった。

アイシスの青い瞳が揺れる。そのときだった。

「伏せる！」

反射的にアイシスは身をかがめた。

背中を焼くような痛みが走った。思わずアイシスは声をあげたが、さらに大きな声がそれをかき消した。

顔をあげると、腕を深々と刺し貫かれたグーズがよろめくところだった。

「ラナっ」

グーズに深手を与えたラナは、よろけるグーズの鼻目がけて強烈な拳を二度、続けて見舞った。

グーズの目から赤い光が消え、どうと音をたてて倒れた。どうやら気を失ったらしい。

「ラナ！」

「じゃ、ねえよこのほか！ 死ぬところだったぞ！」

「う、ごめんなさい」

ラナの剣幕にアイシスは目を丸くした。

ラナの顔には血がついていた。グーズの血だろう。

あたりは血特有の生臭いにおいで満ちている。

アイシスはラナにすがりつきたくなった。怖いことがあったとき（アイシスはとても怖がりの泣き虫だった）、幼いアイシスはいつもそうしてラナを頼った。

しかしアイシスは耐えた。

もう十六歳、大人だ。それにぼくはエルフの王になったんだぞ。

すぐにリグルが駆け寄ってきた。アイシスの背中を見て、すこしやられたね、と言った。

はっとしてアイシスが背中に手を伸ばすと、ぬるりとした感覚があった。

爪がわずかに掠ったらしい。

しかし、ラナの助けがなければ、掠るところの話ではなかったはずだ。

ラナは先に対峙したグーズも気を失わせるに止めていた。あごを突き上げたのだという。

戦う決意はできたものの、命を奪う覚悟と勇気が彼にはまだなかった。

ネットレトは痙攣するグーズを見下ろしていたが、おもむろに剣を持ち上げると、なんのためらいもなくグーズの脳天に突き立てた。

「あ………！」

アイシスが悲鳴に似た声をあげた。

「な……なにを」しぼりだすようにしてラナが言う。「なにをするんだよ！ そいつ、まだ生きて」

「だからこうしているんだ」

感情のこもらない声で言うと、ネットレトはアイシスの目の前に倒れるグーズの頭も刺し貫いた。

アイシスは声が出ない。がたがたと全身を震わせている。

両の目から涙がこぼれ、みるみるうちに広がる血だまりに音をたてて落ちた。

リグルは腕を組み、険しい顔でなりゆきを見ている。

「なんでだよ。なんで殺すんだよ！ 気絶してたら、襲ってこなかったら？ いまのうちに逃げてしまえば、殺す必要なんてなかったじゃねえかよ！」

ネトレトは答えず、がなりたてるラナに視線もくれず、静かに剣の血をぬぐった。

丁寧に時間をかけて拭き取ってしまうと、目を閉じて鞘に戻す。

「なにか言えよ、言ってくれよ……。俺、あんたがわからなくなりそうだよ。怖いよ」

ラナの目からも涙が流れた。

力なく崩れ、ぬかるんだ地面に膝をつく。

それを見ていたネトレトは、アイシスたちがこれまでに聞いたこともないような冷たい声で言い放った。

「甘いんだ」

アイシスは息をのんだ。肌にさつと泡がたった。

「殺す必要はなかった？　いま殺しておかなければ、やつらは再び襲ってくる。そして今度こそアイシスの背中を貫くぞ。それを守るだけの力がラナ、きみにはあるのか？」

ぎり、とラナが歯を食いしばる音が、リグルにまで聞こえた。

歯が欠けるぞ、とリグルは場違いな心配をしたが口にはしない。できるはずもなかった。

「動かないアイシスを抱いて、あのととき止めをさしておけばと嘆いても遅いんだ」



「黙れ！」

「いや、黙らない。ラナ、聞くんだ」

耳をふさぐラナの手を、ネトレトが優しく、しかし抵抗しきれない力で取り上げる。

ネトレトはそのまま話を続けた。

「いいか、アイシスも聞け。

許すためには力がある。

命を、たとえ魔物の命であつてさえも大切にするきみたちの気持ちは素晴らしい。しかし、命を許した魔物は近隣の村を襲つかも出来ない。それを防ぐに足る力をもって始めて命を許すことができる。

力もないのにたやすく許そうとするな。安易な気持ちでかけた情けが悲劇を生むんだ！」

アイシスもラナも、弾かれたように顔をあげた。

ふたりの顔は涙で濡れていたが、いまは驚きのほうが大きかった。

ネトレトが声を荒げた。いつも冷静で言葉の少ない彼が。

ネトレトの息はわずかにあがつていたが、彼は目を閉じて大きく息を吸い、時間をかけて吐き出した。

掴んでいたラナの手を離す。ラナはもう耳を塞ごうとはしなかった。

「すこし考えるときがきたようだ。とりあえずここを離れよう」

そう言うとネットレトは背を向けた。

いまだ呆気に取られたようすでいるふたりの背中を、リグルが強く叩いた。涙はいつの間にか止まっている。

「立ちな。立てるだろ、あんたらはあんたらが思っている以上に強いんだよ」

ふたりはのろのろと立ち上がった。

「あちらさんは逆のようだ」

リグルの言葉をふたりは聞いていなかった。

全身が痺れたように、うまく力が入らない。  
剣を拾い上げ、血を拭ってくれたのはリグルだった。

いつもよりずっと時間をかけて四人は歩き出したのだが、その場を離れるとき、ネットレトはちらりと一体のグーズに目をやった。  
リグルが戦ったグーズだ。しかしすぐに目をそらした。

見事に喉笛を貫かれ、グーズは息絶えていた。

一行はゆつくりと進み、血のおいがすっかり届かなくなつてしまふ場所までくると足を止めた。

ネトレトは三人に腰をおろすように言い、彼自身は木の幹に背をもたせかけた。

「すこしは落ち着いたか」

アイシスもラナも、まだ顔色は悪かったが素直にうなずいた。

ネトレトはリグルにも目を向ける。リグルは顔の前で手をひらひらと振った。

「アイシス、ラナ。簡潔に言う、どちらかを選びなさい。旅を続けるか、ティエラに戻るか」

ふたりは声もなく顔をあげた。

ティエラ。それはどこか懐かしい響きにも聞こえた。

ようやくのことでアイシスが声をしぼりだす。

「なんで……」

「覚悟が足りないからだ」

ネトレトはすっぱりと言い放った。

「命を奪い、奪われる覚悟。正直、これしきのことでは涙を流していい、この先が思いやられる。思えば、きみたちが剣を持ちながら

なかったときに、もっと厳しく言っておくべきだったんだ。すまなかった」

ネトレトに謝られると、ふたりはひどく心苦しかった。その声には諦めの色がうかがえたからだ。

ネトレトの顔は、聞き分けの悪い子どもを前にしたようなようすさえ見えた。

「アイシス。きみはユフィロスレジアの声に従って、運命を追求するためにここまで来たね。しかし運命はここで二手にわかれているようだ。私はきみと出会い、きみと共にいくことが運命だと思っていたが、それもここまでなのかもしれない。選ぶのはきみだ。どちらもきみの運命だよ」

「運命……」

「テイエラに戻るなら責任をもって送り届ける。半月も歩き通せば帰れるだろう。だが、もしもこの先へいきたいと望むなら、今度こそ覚悟を決めてもらう。」

いいか、きみはユフィロスレジアを使役する覚悟をし、そして見事彼女を呼び出した。それは素晴らしいことだ。しかしいま私が問う覚悟はまた違う種類のものだ。わかるな」

いまや三人とも心を奪われたようにネトレトを見守り、その一言一句に耳を傾け、息をするのも忘れていようだった。

彼の唇が伸びたりすばまったりするのを食い入るように見つめている。

「ふたつの覚悟が必要だ。先にも言った、命を奪い奪われる覚悟。」

そしてもうひとつ、命を預ける覚悟だ。私はきみたちに、そしてきみたちは私に。

このどちらか片方にでも不安を感じるようなら帰れ。そのときは、私の運命はきみたちと共になかったということだ。

ラナ

ラナはびくりと体を奮わせた。

「きみは私のことを恐ろしいと言ったね。それは仕方のないことなのかもしれない」

ネトレトは大きく息をついた。

「私は十のころから血を浴びて生きてきた」

ふと、一番悲愴な顔をしているのは彼かもしれない、とアイシスは思った。

ネトレトの目はやはり鋭かったが、その奥にアイシスはなにかを見た。

ふ、と息を吐き、ネトレトは唇の端をわずかにゆがめた。

それから彼は太い木の向こう側に回り、ゆっくりと腰をおろした。

「よく考えてくれ」

重く、長い時間の始まりだった。

## 第十七話：王の選択

『聖伝』第十七話

アイシスはそっと背中への傷に手を触れた。すこし疼くが、痛みはもうない。

ラナのおかげで助かった。

『甘いんだ。殺す必要はなかった？ いま殺しておかなければ、やつらは再び襲ってくる。そして今度こそアイシスの背中を貫くぞ』。

ネトレトの言葉が耳にこびりついて離れない。

どれだけの時間が経っただろうか。

アイシスは両膝を抱え、ラナはあぐらをかき、リグルは木の根に腰かけて足を遊ばせている。ネトレトの姿は見えない。

だれも口を開かなかった。

「アイシスは“運命”を信じる？」

父親の声を聞いた気がして、アイシスは顔をあげた。

しかしそこは陰鬱な森で、真面目な顔つきをしたラナとリグルの

姿しか見えない。

アイシスはあごを膝の上に乗せた。

運命。

これまで旅をしてきて、運命はあるのだということをアイシスは肌で感じた。

ネトレトのとなりは居心地がよかった。心も彼のとなりを喜んだし、運命は彼と共にあるとアイシスは思っていた。

しかしいま、運命はアイシスの目の前でふたつにわかれている。

アイシスは戸惑った。

運命とはひとつしかなく、最初から最後まで決められているものだと思っていたからだ。

しかし実際のところ、ときに運命は選ぶことができ、そして彼がまだ気づいていないことではあるが、それに反発することさえできるのだ。

アイシスはそのまま眠りについた。ラナも気づけば眠っていた。ふたりとも食事をとらなかつた。深く深く考えるうちに、優しき意識を引き抜かれていった。

リグルはずっと俯いていたが、ふたりから規則正しい寝息が聞こえてくるとそっと立ち上がった。

「なあ」

リグルの呼びかけにネトレトは眉をあげた。  
「ここいいか、と断ってから、返事も待たずとなりに腰をおろす。」

「あんだ、なにを求めているんだ」

「さあ」

ネトレトはうそぶく。視線は合わさない。

リグルは彼の整った横顔を見ていたが、その表情からはなにも読み取れなかった。

「故郷に帰るって、本当に言い出したらどうする」

「送り届けるまでだ」

「なんでもっと先に言っておかなかったんだい」

「考えが浅かった。それに、浮かれていたんだね。彼らが加わることで、自分の旅に意味がひとつ増える気がして」

「ふうん」

ふたりはしばらく黙りこんだ。

次に口を開いたのはネトレトだった。

ネトレトは短い言葉で、的確に、とても重要なことを尋ねた。



「きみは何者だ」

どうせまともな答えは返ってくるまい。しかしリグルは予想外の返事をした。

「気になる？」

「まあな」

へえ、と抜けた声を出すと、リグルは正面に顔を向けた。

今度はネットレトが彼の横顔を見守った。

そう高くはないが、すつと通った鼻筋や、赤みのない頬や、よく挑発的に曲げられる薄い唇なんかを。

「俺にはね、片親しかいないんだ。ずっとおふくろとふたりきり。でも、そのおふくろも俺が十一のときに死んでしまったね、それからしばらく一人旅。あんたほどじゃないけどね、すこしばかり血なまぐさい経験もしたよ」

「それで、ああも抵抗なく」

ネットレトはみなまで言わなかったが聡いリグルには十分に通じた。

「そういうことだね。それでさ、いろいろとあってノトの街にたどり着いたの。ま、こっそり荷馬車に乗りこんでいたのがばれて、振り落とされちまっただけなんだけどね。」

とにかく腹が減ったから、食い物を盗もうと思って。それで忍び

こんだのがファサじいの家だった。見つかって、逆にとつちめられちまったんだよ、この俺が。あの細い腕したクソじじいにさ」

あはは、トリグルは笑った。なんだ、これ。すっかり昔語りじゃないか。

「それで、あんたはなにを求めているの」

「さあ」

「死にたいって、思っているの」

ネトレトは眉をあげた。金色の瞳が揺らいだ。

リグルはすこし困ったような顔で笑った。

「あんたの顔、とても寂しそうなもの。明るい明日を祈るやつ顔じゃないぜ、それ」

ネトレトがすっかり言葉を失っていると、リグルが静かに言った。安心しなよ、いがぐりも嬢ちゃんも、まるつきり気づいていないから。

ようやくの思いでネトレトは尋ねた。

「きみは何者なんだ」

リグルは首をかしげ、ついに答えなかった。

アイシスは夢を見た。やはり彼女はそこにいた。すこし憂えた笑みを浮かべて。

「ユフィ」

王。私に答えを求めなよ。

「まいったな」

ユフィロスレジアにはすっかりアイシスの心が見えているのだった。

なにもない空間で、アイシスは膝を抱えて座った。

いい香りの風をふわりとひきつれ、ユフィロスレジアがそのなりに並ぶ。

「恥ずかしいな。ぼくはまた泣いてしまったよ」

ユフィロスレジアは口元に手をあてて笑った。

腕輪がぶつかりあって涼やかな音をたて、アイシスの心はふと軽くなった。

前の王は嘆いておったよ。どうも我が子らは上品すぎる、と。

「父さんが？」

ユフィロスレジアはにっこりと笑った。

おまえは小さいころから泣き虫だったね。転んでは泣き、愛鳥が死んだと言っては泣き。

「そうだったっけ」

アイシスは顔を赤らめて笑った。

やっと笑ったな。

「うん」

もう目覚めるときか。

「そうみたい」

アイシスはすっと立ち上がった。ためらいや迷いのない動作だった。

ユフィロスレジアは再び舞い上がり、アイシスの正面に立つ。

王はまだなにも知らぬ。そしてときに知ることは辛い。

「ユフィ。それでもユフィは最初からわかっているんでしょう。ぼくの出す答えのこと」

王も、わかっておられた。

アイシスは目を覚ました。

ラナはあくらをかいたまま眠っていた。  
すこし離れたところで、リグルが丸くなっている。上質な毛並の  
黒猫のように見えた。  
ネトレトはやはり木の向こうにいるようだが、おそらく起きてい  
るだろう。

アイシスはふたりが起き上がるのを辛抱強く待った。

先にリグルが目を覚ました。

リグルは起き上がると大きく伸びをし、体についた木の葉のくず  
なんかを払った。

「おはよう」

「おはよう」

アイシスもにこりと笑って挨拶を返す。

「いい顔をしてるね」とリグルは言った。

しばらくしてラナも目を覚ました。

彼の寝方は相当首に負担がかかるものだったと見える、起きるな  
りラナは顔をしかめて「痛たたた」と情けない声を出した。  
それで朝からリグルに笑われるはめになった。

呼ぶとネットレトはすぐにやってきた。  
すこし顔色が悪い。まるで眠っていないかのようにだった。

「答えが出たのか」

アイシスはうなずいた。ラナも首の調子を気にしながらうなずく。  
聞こう、とネットレトが言った。

アイシスはなにも言わなかった。剣を取り、鞘を払った。  
迷いのない動作にだれもが呆気にとられる。

アイシスはおもむろに刃を腕にあてがうと、さっと鋭く引いた。

ラナが短く声をあげる。

腕がちりりと痛み、一本の線が走り、赤く滲んだかと思うとそれはすぐにこぼれ出てきた。

「な、なにをするんだ!」

我に返ったらしいラナが、慌ててアイシスの腕を掴み、止血しようとする。

しかしアイシスは優しくその手を払った。ラナは目を丸くしてアイシスを見る。

「夢でユフィは、ぼくは『まだ知らない』んだと言った。

薄々勘付いていたけれど、どうもぼくには、やらなきゃいけないことがあるみたいだ。それがなにかまだ分からないけど、ネットレトといけば分かる気がする。どうしてだか聞かないでね、そう思うのは仕方ないことなんだもの。」

そしてぼくは確かめたい、ぼくのすべきことを。だって、ぼくのためにたくさん血が流されたんだ。そのことから目を背け続けてきたけれど」

アイシスは剣をそつと腕にあてた。赤すぎる血が剣を這う。

「これはぼくの決意だ。これまでに流された、家族や仲間たちの血にぼくは誓う。

血が流れることに臆しない。ぼくはもう立ち止まらない。命を賭して、なすべきことをなしとげる！」

リグルはアイシスの横顔を見た。幼い顔立ちの彼が、ぐつと大人びて見えた。

ラナもまた親友の堂々とした立ち振る舞いに見とれていた。

精霊の力を借りずに、アイシスが王としての威厳を垣間見せた瞬間だった。

「でも、やっぱり、できる限り血が流れるのを見たくはないんだ。だれのものであれ。だからそのために強くなる。強くなって、許すための力を手に入れる」

アイシスが見せた威厳は露が地面に吸われるようにして消え、彼はすこしおどおどしながら言葉を続けた。

やっぱり甘いつて思っかな、と言ってネットレトのようすをうかがう。

ネットレトはなにも言わなかった。しかし、一度大きくうなずいた。

アイシスの胸は晴れた。

ネトレトは次にラナを見た。

「俺はさ」言葉をかみ締めるように力をこめながらラナは言った。  
「俺は、そんな大層なことは言えねえや。俺は王サマじゃねえし、魔法使いでもねえ、ただのけんかつ早いやつだ。だけど仲間は絶対に守る、守りたいって思う。俺は守るための力が欲しいよ」

ラナは強く握った拳を見た。

この広い世界で、ラナの拳はともちっばけで頼りなかった。

「ネトレトともさ、ここまで一緒にきたんだ、短くてもいるんなことがあったんだ、はいさようならって訳にはいかねえよ。それに、えらい物騒な旅じゃねえか。

俺はさ、あんたのこと仲間だっと思ってている。正直、怖いと思っ  
たよ。でも、それ以上に俺はあんたのことが好きなんだ」

予想しなかった言葉に、ネトレトは目をすこし見開いた。

ラナは照れくさそうに笑った。

ラナは不器用だったが、その分言葉はとても真っ直ぐに響いた。

「あんたおそろしく強いから笑われそうだけどさ、俺はあんたを守れるようになりたい。もちろん、アイシスもだ」

「おい、俺の名前がねえよ」

「うるせえな、黙れ」



「あれ、俺は守ってくれねえの？　なら帰れ」

「なんでだ！　おまえが帰れ！」

リグルはにたにたと笑い、ラナは憤慨してまたいつもの口論が始まった。

ネトレトはすこし呆気を取られてそれを見ていたが、やがて頬をわずかにゆるめた。

「なら、ふたりともティエラに送り届ける必要はないと、そういうことだな？」

「当然！」

ふたりは声をそろえて答えた。

「相当な覚悟のうえだと思っていいな？」

「もちろん！」

示し合わせたようにふたりの声が重なる。

ネトレトは目を閉じた。湿っぽい土のかおりがする。

正直、彼らがここまでしっかりとした答えをくれるとは思っていなかった。

前向きに成長することを知っている子どもたちだ、と思った。

大切なもののためなら、痛みを恐れない。なかなか頼もしいではないか。

「では改めて」

ネットレトの言葉に、アイシスが続く。

「いじうー」

四人の顔はそれぞれが晴れやかだった。

アイシスはもう旅の“客人”ではなかった。ネットレトの旅について知っているわけではないのだ。

彼は旅の仲間の一員としての自覚を持った。

ラナもまた同じだった。

守られるだけでは気がすまない。

アイシスを、ネットレトを、それからちよつと癩に障るが、リグルを守りたい。

ラナの真つ直ぐな目に、ネットレトは完璧な存在に見えた。

だれの助けも必要とはしなさそうな。

しかし数時間後、彼はまさにネットレトを救うことになる。

まだだれもそのことを知らず、前よりもすこし顔を引き締めさせ、しかしやはり陽気に森を進んでいた。

気づかないうちに、優しい声の誘うほうへと。

リゲルは異変に気づいた。

風の音だけではない、なにかが聞こえる。

おそろしい魔物の唸り声とはまるで違う、もっと耳に心地いいなにか。

顔をあげると、ネトレトも感じているのか、すこし顔が緊張している。

ふたりは自然と目を合わせたが、どちらも不思議そうな顔をするばかりだった。

歩くにつれ、そのなにかは存在を大きく現しはじめた。

それは声だった。

四人が四人ともいまや不思議なその声を聞くことができた。

ネトレトは身を奮わせた。彼が震えるのは滅多にないことだ。

しかし彼は恐怖に震えたのではない。もっと別のものが心を強く打った。

これ以上進んではいけないと思った。

叫ぼうとした。

しかしできなかった。

森はついに隠していた牙をむいたのだ。気づいたときには遅かった。

『ネトレト』

ネトレトの体がひととき大きく震えた。

かすかに笑いを含んだ優しい声。いま、耳元にはつきり聞こえた。

『おかえり、ネトレト』

一行はついにすこし開けた場所に出た。

ちよつとした広場とも呼べそうなその中央には、ほかとは比べ物にならない太さの木が鎮座していた。

悠々としたその姿には威圧感すら覚える。

その部分だけ木の天蓋はなく、巨木は空へと大きく伸び上がっていた。

しばらくぶりに浴びる日光に四人は目を細め、あるいは腕で目を覆う。

強い光にようやく目が慣れたころ、彼らは森にいなかった。

たったひとりで、それぞれの心が波打つ場所に彼らは立っていた。

森がしかける甘くて優しい畏が、四人をねっとり包みこんだ。

「おう、なにぼさつとしているんだ。もう夕飯だぞ」

ラナは父親の声にびくりと肩を震わせた。  
真っ赤な夕日がいまにも沈もうとしていた。

ハロルドは目をくりくりさせて動かない息子を不審に思ったのか、  
もう一度野太い声で「夕飯だぞ」と言った。

ラナはもう一度肩を震わせた。  
俺はなにをしていたんだっけ。  
汗でじっとりとした服が肌にはりつく。

唐突に彼は思い出した。

そっだ、俺は親父に体術を教わっていたんだっけ。毎日の稽古が  
終わったところだっけ。

すこしなにかが引つかかったが、ラナは気にしないことにした。  
腹の虫が元気よく声をあげたからだ。

「腹減った！」

いい香りは家の外にまでただよっていて、ラナは我慢できずに走  
り出した。

うしろでハロルドが豪快に笑っている。そうそう、男はそうでな  
くちゃ。元気が一番、食べることは大切なことだ。

「おかえりなさい、ラナ。今日もすっかり泥んこね」

「うん。ただいま　母ちゃん」

やはりなにかが引つかかる。

ラナは母親の顔を見上げた。ラナの汗を拭ってやりながら、リラはにっこりと笑った。

それを見るとラナの心の靄はすっかり消し飛んでしまった。

「よし、食うか」

ハロルドが力強く宣言した。

## 第十八話：優しい罇

### 『聖伝』第十八話

食卓はいつものように賑やかだった。

幼いながらにラナはよく食べ、ハロルドはもっとよく食べた。リラはそんな夫と息子を見ているだけで幸せそうだった。

ラナも幸せだった。しかし、なぜだかそわそわした。訳もなくふり返ったり、スプーンをいじくりまわしたり。

「どうした、なんだかかようすが変だぞ」

ハロルドが大きな手でわしゃりとラナの頭をなでた。ラナは首を傾げる。

「稽古に疲れたのか？ まだまだ体力が足りねえな」

「そんなんじゃないやねえや！ もっと厳しくたって構うかよ」

ハロルドは愉快そうに笑った。

笑いながらラナの頭をなで、ラナの細い首がかくかくと揺れた。

「頼もしいな。おまえは強くなるぞ、ラナ。」

男は強くなくちゃならん、大切なものを守るためにな」

なにげなく放たれた一言が、ラナのなかで音をたてて弾けた。

強くなる　大切なものを守るために。

そつだ、俺は誓ったじゃねえか、俺の拳に。  
仲間は絶対に守る、と。守るために強くなるのだと。

ラナは手を強く握ってあたりを見回した。

ここは、どこだ。

心臓がどくりと脈打った。

これは過去だ、まやかした。

心の弱い部分が、失ってしまった大好きなものを描き出しているのだ。

ラナは洗い物をする母親の背中を見た。

彼女は　そつだ、もういないのだ。



「どうしたの？ ごはん、足りなかった？」

洗い物の手は止めず、ふり返ってリラはほほ笑んだ。

鏡があれば、きっとそこに映る自分はひどい顔をしているに違いない、とラナは思った。

全身の血がざわざわと波打つ。

「違う、だろ」

「え？」

「あんだ、違うだろ。俺の母さんはもう」

ラナはうつむき、ぎりりと歯をくいしばった。

「もう、死んだんだ」

弾けるようなリラの笑い声にラナは顔をあげた。  
そして心底ぎよっとした。

彼女は崩れはじめていた。

服が、皮膚が、彼女の存在が泡立ち、溶けだしていく。

ラナはばね仕掛けの人形よろしく立ち上がった。  
椅子が倒れ、派手な音がする。

「いやね、ラナったら。ひどい冗談を言うわ。あなたのお母さんはここにいないじゃない」

リラは笑った、のだらう。しかし顔はもはや顔でなかった。目も鼻も口も溶けはじめていた。

全身に醜い瘤のようなものが浮き上がり、垂れ落ちていく。

その異形な物体は、ラナの記憶にある母親の声で笑い続けた。

「うあ……」

ラナは吐き気を催してよろめいた。

母親だった物体が、一步一步近づいてくる。

「加減でも悪いの？ 青い顔して。お熱を測ろうかしら。好きな果物をむいてあげるわ」

ぶくぶくと泡立った腕が差し出される。

ラナは抵抗できなかった。

こんな姿をしていても、懐かしい声は耳によく馴染むのだ。

流行り病で、幼いころに死別した母親。

十分に甘えることもできず、逝ってしまった母親。

ラナは目を閉じた。

大好きな黄色い花に囲まれて、ほほ笑む母親の姿がありありと浮

かんだ。

しかしその背後にラナは銀の髪を見る。

小さく、か弱く、たやすく折れてしまいそうなその子どもは、手を目に押し当てて泣いている。

「アイシス」

守らなければ。

ラナは頭の奥が痛くなるほどに目を閉じた。  
熱いものが頬を伝い、初めて泣いていることに気づいた。

「どうしたの？ どこか痛むの、ねえ？」

頬をそっと包まれる。

ラナは目を閉じたまま手を伸ばしてテーブルの上を探った。  
洗い忘れられたフォークに指先が触れる。

ひやりと冷たいそれを、ラナは強く握りしめた。

「ラナ、なんとか言ってちょうだい。どこが具合悪いの？ お母さんわからないわ」

「ごめんな」

絞り出した声は震えていた。しかし恥ずかしいとは思わなかった。

ラナは今一度フォークを握り直すと、高々と振り上げた。

「ごめんな。俺、守ってやりたいやつがいるんだ。だから俺いくよ。でも、旅が終わったら絶対会いに行く。黄色い花持ってさ」

刹那、腕を振り下ろす。

確かな感触。

ラナはけっして目を開けなかったが、強い光をまぶたに感じた。目を閉じたときの闇さえ打ち砕く光。

すべてが真っ白になり、ようやく落ち着いたころ、ラナは涙に濡れた目を開けた。

ラナは巨大な木の前で倒れていた。

「げっ。なんだこれ」

ラナはうわずった声をあげて起き上がった。全身に白い粉が薄く積もっているではないか。

見れば、粉は木から振ってくるようだった。

そのさまはどこか幻想的で、ラナはしばし見とれた。むせ返るような甘ったるいにおいが立ちこめている。

ラナは首をふると立ち上がった。

三人はすぐに見つかった。彼らはラナのすぐ近くに倒れていた。ラナは涙を乱雑に拭くと、一番近くにいたネットレトを助け起こした。

「おい！　しっかりしろ！」

彼は深く眠っているようだった。まぶたの奥で瞳が動いている。

そして驚いたことに、ネットレトは涙を流していた。

彼もまた優しい過去に囚われているのだ、ラナはすぐに気づいた。

ネットレトにかかった粉を払ってやり、次にアイシスを起こした。やはり彼も泣いていた。

ラナはいたたまれなくなった。

「おい、アイシス！　起きろよ、目を覚ませよ！」

力強く揺さぶってみるも、アイシスは人形のように力なくされることがまま。

まさか、このまま目覚めないというのだろうか。

ラナの頭を絶望的な考えがよぎったとき、小さな呻き声が聞こえた。

見ればリグルが起き上がっているではないか。

ラナはアイシスをそっと寝かすとリグルに駆け寄った。

「なあおい、一体なんだっていうんだよ！」

「ちくしょう、知るか」

ラナの声にリグルははっとしたようだったが、すぐに顔を背けた。しかしラナには見えていた、リグルの涙が。

ラナはなにも言わなかった。

からかうようなことではない。恥ずかしいことではないのだ。

「おまえも過去の幻を見たんだな」

リグルはラナを睨みつけた。鼻がすこし赤い。

「みたいだな」と彼は呟いた。

リグルはすばやく視線をめぐらせた。

頭がおそろしい速さで回転する。

堂々とそびえ立つ巨木。

意識が幻に囚われてしまう前に、あの木が妖しく光のをリグルは見た。

あの幻影はその木にあるとみて間違いなさそうだ。

次に地面に目をやった。

一面が白い粉に覆われていて、ところどころ不自然に盛り上がっている。

リグルはそのうちのひとつに手をやり、粉をそっと払った。

「わお」

粉に覆われていたのは ちよつとした予感があったのだが  
頭蓋骨だった。

ぞくりと体が震えるのを感じながら、リグルは口笛を吹く。

「おい。とにかくここから離れるぜ。こいつのお仲間になりたくないやあな」

リグルは頭蓋骨をラナに放ってよこした。

そうとも知らず受け取ったラナは、それが骨だとわかるなり絶叫をあげた。

あわれ、頭蓋骨は二度も放り投げられることになる。

「なんだよ、いまのっ！」

「見りゃわかんだろ。頭蓋骨」

「そ、それはわかるけど、なんだってこんなところに」

「吼えるならここを離れてからにしろ。かわいいアイシスを骨にしたくないならな」

よっこらせ、と場にそぐわず抜けた気合をいれ、リグルはネットトを持ち上げにかかった。

しかし彼はずいぶんと背が高い。加えてなかなかの筋肉質である。ネットトの腕をつかんだまま、リグルはわずかに目を見開いて固まった。

たまらずラナが声をかける。

「俺がネットトを運ぶ。おまえはアイシスを担げ」

リグルは一瞬、夢から覚めたばかりのような顔つきを見せて。しかしすぐに唇の片端を持ち上げると、人を小ばかにしたような例の笑みを浮かべた。

「了解」



ふたりは可能な限りの速さで走った。方向もなく、がむしゃらに走った。

とにかく怪しい魅力を放つ巨木から離れなければ、そればかり考えて走った。

白い粉がまるで積もっていない場所までくると、ふたりはようやく足を止めた。

無心で走ったせいで、張り出した枝でこさえたのだろう擦り傷がたくさんあった。

ラナはネットレトをおろして大きく息をついた。  
目を覚まさないかと窺うが、起きる気配はない。彼は涙を流し続けていた。

「あれも魔物なのか」

「さあな」

「さっきの白骨も、幻を見ているうちにあんなっちゃまったのか」

「さあな」

気のない返事はわざとではないらしかった。

リグルはどこか上の空で、すこし塞いでいるようにも見えた。

彼にも失ってしまった大切なものがあるに違いない。

触れてはならない部分だと察したラナは、文句も言わずに黙りこんだ。

あまりのことにリグルはうまく頭を働かせられずにいた。さきほど“視た”ものが衝撃的すぎたのだ。

だれにも言わず、秘めていたことだが、リグルには不思議な力が備わっていた。

他人の考えていることがわかるのだ。

調子のいい悪いはあったが、顔を見ればどのような感情を抱えているかぐらいは“見える”。

そして、その力でリグルは覗いてしまったのだ。

もちろん、彼にそのような気はなかった。

担ぎ上げようと腕を掴んだ瞬間に、それは拒みよのない勢いをもってリグルの脳内に流れこんできた。

リグルはゆるゆると息を吐き出した。

すっかり吐ききってしまったと、リグルは視線を横にずらした。頬を濡らし続けるネットレットがそこにいた。

視たくなかった、知りたくなかった。どうせならネットレットの口から聞いたかった。

崩れることのない壁で守られたネットレットの心が、幻に囚われてすっかり無防備だったためにリグルは視てしまったのだ。

彼の辛すぎる過去を、二度も彼を襲った悲劇を。

リグルはもう一度大きく息を吐き、頭を抱えこんでうなだれた。

「なあ、どうしたんだよ。どこか具合でも悪いのかよ」

「ぴんぴんしてらあ」

「じゃあ、なんだよ。さつきからため息ばっかつきやがってさ。アイシスたちのことが心配かよ」

返事がないことを肯定の意にとったのか、ラナはいやに明るく言葉が続けた。

「大丈夫だ。じきにアイシスもネットレットも目を覚ますって。それでさっさとこの森を出よう」

「は。どっから出てくる自信だよ。おまえは単純でいいね」

ラナは憤慨し（「人が元気づけてやっているのに、なんだー！」）、叫んでいたのでリグルの呟きに気づかなかった。

「いっそ、目を覚まさないほうが幸せなのかもね」

リグルは近くに落ちていた枝を指でもてあそんだ。

中まで湿りきっていた枝は、すぐにほぐれて地面に落とされた。

ふたりは簡単に昼食をすませ、落ち着いてから再び歩き始めた。会話らしい会話もなく、ひたすらに森を歩いた。

革靴の下で土がぬめる。あまり心地いいものではない。

「気が滅入るな」

ひとり言のようにラナが呟いた。

ネットレトを負う背中中は温かいが、足の裏はひんやりと冷たかった。

「おい。気をつけるよ、負は負を引き寄せるぜ」

「はあ？」

ラナは間抜けな声を出してふり返った。

「どついつ意味だよ」

「後ろ向きな言葉を吐いてちゃ悪いことしか起きねえってこと。それくらいわかれよ、ばか」

「勉強になつたけど、本当におまえは一言多いな」

ラナは怒るのもばかしくなつてため息をついた。

リグルはそれを気にも留めずにきよろきよろとしていたが、不意にその顔に緊張が走った。

「嫌な予感」

ラナは足を止めた。

「おまえこそ言つなよ。それに、おまえが言つと、なぜかしらいつも現実になるんだから」

「言つたろ。勘が鋭いんだ」

悪い方向にばかり働く勘なんて、とラナは軽口をたたいた。

しかし彼が言い切らないうちに、またしてもリグルの言葉は真実となる。

ばきばきと不吉な音がして、ふたりの右側の木がなぎ倒された。

ラナとリゲルの目が一様に丸くなり、恐怖の色を帯びる。

それは森で最初に出会ったのと同じ、いやそれ以上に巨大なグーズだった。

加えてやつらは二頭いた。

ラナとリゲルは顔を見合わせた。震える声でラナが言う。

「……おまえだ」

「……いや、おまえだ」

「おまえが悪いことしか起きねえとか言うつから」

「その前に気が滅入るって言ったおまえのせいだ」

手前のグーズが雄叫びをあげた。つられるようにして後ろのグーズも続く。

逃げられるはずがない。頼れる男はラナの背中で昏々と眠り続けている。

ふたりは意を決し、それぞれアイシスとネットレトを地面におろした。

腰の剣に手をかける。

先に戦った、人とそう大きさの変わらない魔物とは威圧感が桁外れに違う。

人間相手のけんかが通用するとはまるで思えなかった。

手が震える。

くそ、とラナは悪態をついた。

鼓膜を震わす叫び声をあげながら、グーズはラナとリグルに襲いかかった。

気圧されじとふたりも吼えた。

その声に己を奮い立たせ、ラナは地面を蹴った。

それからのことを、正直ラナはあまりよく覚えていない。

とにかく夢中だった。

せっかくネットレトに教わった基本もすっかり忘れ、ただただ剣を振るった。

そのうち幾筋かはグーズを掠め、あるいはその肉を裂いたかもしれない。

しかしそれ以上にラナは傷だらけだった。

満身創痍とはこのことか。

それでも彼はけっして怯まなかった。  
自分の血が跳ねるのを恐れずに立ち向かった。

ラナの心はかつてないほどに燃えていたが、しかし体が音を上げてしまった。

四度、背から木に叩きつけられたとき、ラナは胃に入っていたわずかなものをすべて吐き出してしまった。

ラナは咳きこみ、忌々しそくに唾を吐いた。  
口内を歯で食い破ってしまったらしく、血が混ざっていた。

気丈にも彼は立ち上がるつもりだったが、足が言うことを聞かなかった。

膝から力が抜ける。

ラナは剣を突いた。  
柔らかな土に剣は思ったよりずっと深く突き刺さった。

リグルはどうしているかな、とラナは思った。  
あの野郎、生きていやがるだろうな。

ラナの額は裂け、あふれ出す血は両目に入って視界がとても悪かった。

かすむ目でリグルを探すと、グーズを相手にすばしっこく動き回



る姿が見えた。

おや、元気じゃねえか。

ラナは状況も忘れてにことほほ笑んだ。

グーズの丸太のような腕は、そんな彼を容赦なく襲った。

背筋が寒くなるのを感じてリグルはふり返った。

彼も全身に傷を負っていたが、ほとんどがそう深くないものだった。

グーズは斬りつけられたばかりの目を押さえ、苦悶の声をあげている。

その隙についてラナの無事を確かめようとしたのだが、ふり返ったまま彼は凍りついた。

赤く染まった地面に、力なく倒れ伏すラナの姿。

顔を近づけたグーズはにおいでも嗅いでいるのか。

と思えば顔を離して距離を取り、グーズは太く短い足をあげた。踏み潰す気らしい。

「やめろ！ おい ラナ！ このクソったれが！」

リグルは向きを変え、いまにも足を下ろそうとするグーズに突進した。

いや、しようとした。

それはあまりに無謀な行為だったのだ。

三步といかないうちに彼は横なぎに飛ばされた。

傷つけられた怒りを目に宿したグーズが、彼を放っておくわけがなかった。

したたかに体を木にぶつけたリグルは、遠のく意識を必死で繋ぎとめながらよろめき立った。

「ちくしょう……!!」

木を支えにしながら立つリグルの背後には、情けを知らない魔物が迫っていた。

その細い体を裂いてしまおうと鋭い爪を鳴らす。

卑しく開かれた赤い口からよだれが垂れる。

それと同時に二頭のグーズは炎に包まれた。

「え」

漆黒の瞳がこぼれ落ちそうなほどに見開かれる。

リグルはまるで状況が飲みこめなかった。  
突然の出来事に眩暈すら覚える。

何度目をこらしてもグーズは燃えていた。  
熱から逃れようと腕を振り回すが、炎はまるで生きているかのようだった。まわりついてグーズを離さない。

リグルの手から剣がすべり落ちた。

そのとき、けたけたとまるで場にそぐわない笑い声が聞こえた。

リグルは反射的に声のほうへと顔を向けた。しかしだれもいない。

「ここだよ。上だ」

謎の声が呼んだ。

リグルは言われるままに視線をあげる。

一本の木の枝に、珍妙な格好の子どもが腰をかけていた。  
なにも履いていない足を退屈げに揺らしている。

リグルはくらくらする頭をどうにかするので精一杯だった。

## 第十九話：リビィ＝ミソィ

### 『聖伝』第十九話

まるで夢を見ているかのようだった。

もしかすると自分はもう死んだのかもしれない、あの子どもは天使なのかもしれないとすら思った。

リグルらしからぬ、まるであり得ない想像だった。

それに子どもは天使とは言いがたい格好をしていた。

一見ぼろのような布を一枚体に巻きつけており、足にはなにも履いていない。

異様に細く、白い四肢。

さらに奇妙なのが顔部分だ。子どもは不思議な被り物をしていて、被り物は花を模しているらしいが、それがまた大きい。

顔はほとんど見えず、ただ口がわずかに見えるばかりだ。

その口が大きく弓状に曲げられた。

「なにがなんやら、という顔だな」

「そのとおり。まるで状況についていけやしない。説明してくれる」

「おやおや、ずいぶんと尊大なやつだ」

そんなリグルの態度を、しかし子どもはけっこう楽しんでいるようにも見える。

くつくつと喉を鳴らして子どもは笑った。

「きみたちが現れるのを、ぼくは気が遠くなるほど前から待っていた。そういうことだ」

まるで意味がわかりやしねえ、とリグルは鼻を鳴らした。子どもはそんな彼のようにすを気にも留めていないようだ。

怪しい笑みはそのままに、子どもは枝の上で立ちあがった。なにも言わずにそのままリグルに背を向ける。

傷ひとつない白いふくらはぎが、湿気に満ちた森ではひどく眩しかった。

「待ちなよ。あんた、いったい何者なの」

子どもはゆっくりとふり向いた。

大きな口がかぱりと開き、小さくて尖った歯が並んでいるのが見えた。

「リヒイ＝ミヒイ。見守る者」

その言葉を残し、子どもはすっかり消えてしまった。リグルは我が目を疑った。

子どもの乗っていた枝から、はらりはらりと幾枚かの葉が落ちた。

「さて、どうしたもんかね」

わざとのんきに言ってみせ、リグルは肩をすくめた。

ともかく一番助けを必要としているのはラナだろう。

リグルは痛む体を引きずって歩いた。

ラナの傷は酷かった。

グーズの爪は鋭い。しかし見る限り致命傷になるようなものはなさそうだった。

リグルは胸を撫で下ろした。

実はここに、ひとつの奇跡が起きていた。

ぬかるんだ地面は一行にひどい嫌がらせをしたが、そのぬかるみがラナを救っていたのだ。

グーズが最後に腕を振り下ろしたとき、もしも地面が固かったなら。

叩きつけられたラナの骨は砕け、ひとたまりもなかっただろう。

しかし彼の立つ地面は非常に柔らかかった。

ラナは水っぽい地面に半ば埋もれるようにして倒れていた。  
ぬかるんだ土が、グーズから受けた衝撃を和らげてくれたのだ。

しかし、それはともかくラナが満身に傷を負っていることに変わりはない。リグルはできうる限りの止血法を施した。手ごろな布を裂ききると、自らの服の裾を破いて使った。

夢中で傷口の手当てをし、いざ終わってみると、ラナはきれいに布でくるまれた毛虫のようになっていた。

リグルは思わず声をあげて笑った。笑うと全身から力が抜けた。

感覚が麻痺しているのだろうか、痛みもなく、たいへん心地よい。

リグルは満足げにため息をつくと、あとはどうにでもなれ、と心地よさに身を任せて深い眠りについた。

そのわずか数分後に、まるで約束していたかのようにアイシスとネットレトが目を覚ます。

森の毒はついに抜けたらしい。

ネットレトは目を開けたが、しかしまだ頭がはつきりしていないようだった。黄金の目に、いつものような鋭気は見られない。

ゆるゆると自分の頬に手を伸ばし、そしてネットレトはようやく表



情を取り戻した。

彼は驚きに目を丸くした。

頬が濡れている　泣いていたというのか。

すぐにネトレトは起き上がった。身震いして辺りをうかがう。

まず、ぼおとした表情で仰向けになるアイシスを見、次にラナとリグルを見た。

なんと、ラナもリグルもすっかり朱に染まっているではないか。

ネトレトの頭はここにきてようやく働き始めた。

彼は珍しく狼狽した声をあげ、飛ぶようにしてふたりに駆け寄った。

「ラナ、リグルっ」

返事はない。

しかし規則正しい息遣いが聞こえる。

ネトレトはひとまず安堵のため息をついた。

落ち着いて見てみると、適当でないにせよラナは一応の手当てを受けていた。

彼を助けたのはリグルに違いない。

彼自身も浅くない傷を受けているというのに、自分のことにはまるで関心を持っていないようだった。見ると、リグルは堂々とした寝顔である。

ネトレトは自然とほほ笑んでいた。

どうやら長く眠っていたらしい自分を、このふたりが何者かから守ってくれたのだらうことは容易に想像できる。

ネトレトは手際よくリグルの傷を手当てし、ラナの包帯も巻きなおした。

彼の左腕はひどく腫れていて、手ごろな杖を見つけて支えにしてやる必要があった。

そうしているとようやくアイシスも起き上がった。ネトレトと目が合うと、アイシスは小さく首をかしげたが、彼のそばで眠るふたりを見た途端に鋭い悲鳴をあげた。

「ど、どうしたの！　なんでこんなことに？　ぼくたちは一体どうしちゃったの？」

「私もいま気がついたばかりで分からないんだ」

「ふたりは？　ふたりは無事」

「落ち着くんだ」

ネトレトはアイシスの両肩に手を置いた。

ネトレト自身も混乱している。

アイシスの気持ちはわかるが、しかし騒ぎ立ててしまえば見える事実も見逃してしまうのだ。

アイシスは顔を真っ赤にし、小さい声で謝った。謝ると同時に目から涙がこぼれ落ちた。

「でも、でも、とにかくふたりは無事なんだよね」

「ああ」

肩を震わせるアイシスをなだめながら、ネトレトの頭は慌しく働いた。

あたりを包む異様な臭気、そして黒焦げの“なにか”。

なにが起こったのかを、ネトレトはおおよそ正しく理解できた。しかしどのようにして起こったのか、それはまるで検討がつかなかった。

まさか、リグルが精霊を呼び出したのだろうか。

ネトレトはリグルの寝顔を見た。

薄い唇の端に、わずかな笑みが見えるような気がした。

アイシスが落ち着くにはもうすこし時間が必要だった。ネトレトはその間に考えをまとめあげた。

ラナとリグルはグーズに襲われた。そして立ち向かったのだが敵わなかった。

これはまず間違いないだろう。

しかしここからが分からない。

状況から考えてみるに、例の“なにか”は燃えつきってしまったグーズの残骸と思われる。

しかし、どうしてグーズは燃えたのか。

自然と発火？ まさか。

第一、骨も残さず魔物を焼ききってしまうような炎だ、まずこの世の炎ではあるまい。

考えられる可能性はひとつしかない、火の精霊サルマンの力が使われたのだ。そしておそらく使役したのは、リゲル。

彼は精霊の声を聞いたのだから、可能性がないわけではない。

ネトレトは一応の答えを導き出した。

リゲルが目覚めたら答えあわせをしよう。

そうしていると、アイシスが小さい声で

「ごめんね」と言った。

「もう、大丈夫。取り乱してごめん」

「ああ」

「こんなふうにして時間を食うべきじゃなかった。はやく森を抜けて、お医者さまに診てもらわなくちゃ」

そこでネトレトはラナを、アイシスはリグルを背負っていくことになった。

ネトレトは最初、ふたりとも背負っていくと言ったが、そして彼にはそうできるだけの力があつたが、アイシスは頑固に反対した。

「ぼくも背負う」

意思のこもった口調だつた。

どうも主張を変える気はないらしい。

そう判断したネトレトは、なにも言わずにアイシスとリグルの荷物も担ぎあげると、楽々とラナを負って歩き始めた。

アイシスも慌ててリグルを背負う。

傷口が開かないように、ずいぶんと気を遣いながら。

「あれ」

リグルは軽かつた。背こそアイシスより高いものの、線でいうなら彼のほうがアイシスよりも細く見える。

思ったよりも簡単に、アイシスはリグルを背負うことができた。

しかし、背負ってみるとなにか不思議な気持ちがある。アイシスは小さく声をあげた。

「どうかしたか」

アイシスは首をかしげてやや迷い、なんでもない、とだけ短く答

えた。

ふたりはほとんど会話をせずに歩いた。

けっこうな早足で彼らは歩き、それでネットレトはしょっちゅうふり返ってはアイシスの疲れ具合を確かめた。

二時間も歩けばアイシスの顔は真っ赤になったが、すこしの遅れも見せずに踏ん張った。

彼は彼なりに精一杯の努力をし、成長している。ネットレトは内心舌を巻いた。

何時間歩いただろうか、彼らはずいに森を出た。

忌々しく、恐ろしい森。

ゆるやかな丘を登りきってしまうとネットレトはふり返った。

黒々とした緑が広がり、耳をすませば轟々と音が聞こえてきそうである。

この森を忘れることはできまい、とネットレトは思った。そして二度とふり返ることはなかった。

あたりはすっかり暗かった。

まだ明るければなあ、とアイシスは残念がった。彼らはもう五日ほど太陽を拝んでいない。

なだらかな丘が続いていた。

傾きをそう感じさせない道を、黙々と歩き続ける。

月の位置を見るに、どうやら北に進んでいるらしいことしかふたりは分からなかった。暗さに道さえおぼつかない。

「ふう、今日は、はあ、よく、歩くんだね、はあ」

アイシスの息はすっかりあがっている。

ネトレトは彼を休ませてやりたかったが、しかし辺りに身を隠せそうな場所はない。

草原のまん中で野宿などだれができよう。それはまるで現実を知らない行為だ。盗賊や魔物に進んで身を差し出すようなものだから。アイシスは小さく跳ね、ずり落ちてきたリグルの体を支え直した。そうしてみつつ目の、すこしばかり他より高い丘を登りきったとき、アイシスは喜びの声をあげた。

「ネトレト、光が見える！」

彼らの視線の先で、小さな光が群れになって揺れている。

村でもあるのだろうか。それにしては規模が小さいようだが。

ネトレトの疑問はすぐに解消される。

近づいて分かったことだが、それはテントの一群だった。どうやら雑技団の野営地に出くわしたようだ。

おぼつかなかったアイシスの足取りも軽くなる。

ラナとリグルがようやく治療を受けられるのだ、そう思うと嬉しかった。

「雑技団っていったら、踊りや手品をして見せる人たち？」

「そうだ」

「歌も歌うかな」

「かもしれない」

野営地は木の柵で囲まれていて、唯一の入り口は男たちに守られていた。

彼らは早いうちからアイシスたちに気づいており、ひどく警戒していた。

旅人が野営地を訪れ、しばらくの停泊を求めることは珍しくない。しかしこの場所、この時間である。

見たところ旅人は腰の剣以外に武器らしいものを持っていないではないか。それはこの辺りを旅するにはあまりに無防備で、そのぶん余計に怪しく思えた。

「止まれ、そこにくるのは何者だ！」

厳しい誰何の声に、アイシスは驚いて身をすくめた。

彼にとっては藪から棒である。



目を丸くしてネットレトをうかがう。

ネットレトはさらりとした表情で、やはり落ち着いている。

「怒っているよ」

「彼らは怯えているんだ。仕方ない」

ネットレトはすこし声を張りあげ、旅の者だが怪我人がいるので手当てだけでも頼めないだろうか、と叫んだ。怪しむようなら怪我人以外は野営地に入らないから、と。

男たちは顔を見合わせ、相談しているようだったが、しばらくするとふたりほどが駆けてきた。

アイシスは緊張に体を硬くする。

「恐れるな」ネットレトが静かに囁いた。「妙な表情を見せれば疑われる」

男たちはラナとリグルのようすを見ていたが、やがて野営地に入ってもいいと告げた。

ただし剣は四本とも彼らの手に預けられることとなった。

ラナとリグルはすぐに医者のあるテントへと運ばれた。

雑技団にも様々あるが、ここに野営する雑技団はなかなか大掛かりでひやひやさせる舞台をするらしい。

したがって団員の怪我也多く、ために外傷系の医術に関しては、

そこらの街よりも秀でているという。

一行を案内してくれた団員がそう教えてくれた。アイシスは安堵の笑みを浮かべた。

「この子たちのことはうちの医者さま方に任せておきな。腕は確かだよ。きみたちはこの夜を楽しむといい、こんなに大きな野营地も珍しいだろう？」

アイシスとネットレトは礼を言ってテントをあとにした。

野营地はアイシスが見たこともない世界だった。

彼は一歩いくたび忙しくなく首を動かさず、目新しいものを見ては感嘆の声をあげた。

ひとつの大きな車輪に座部がついたもの、アイシスの背丈ほどはあろうかという布の玉、それから檻に入った熊や虎といった動物なんか特にアイシスの気を惹いた。

「ネットレトはこういう野营地が初めてじゃないんだ」

「まあな」

大して物珍しがるようすもないネットレトを、アイシスはまじまじと見つめた。

旅をするというのは、たかさんの世界を知ることなんだな。ネットレトはこれまでにどんな世界を歩いてきたのだろう。

そんなことを考えているアイシスの耳に、ふと涼やかな鈴の音が聞こえてきた。それに女の人の歌声もする。

「だれかが歌っているみたいだよ」

そう言つと、アイシスはさっさと声を追って行ってしまった。

このところ、ずっとアイシスは気が詰まる思いばかりしていたはずだ。今日ぐらい好きにさせてやってもいいだろう。

ネットレトはなにも言わず、アイシスの姿を見失わないようあとについていった。

アイシスはひとつのテントに入った。

小さく歌を口ずさんでいるのは少女だろうか。

鈴の音はしゃんしゃんと規則正しく鳴っている。

すこし気がとがめたが、好奇心が勝ってアイシスはテントを覗いた。

すると、そう明るくないランプの灯の中で、赤毛の少女が舞っているではないか。

鈴はどうやら彼女の腕輪についていて、彼女が踊るのに合わせて音が鳴るらしかった。

舞台の稽古でもしているのだろう。

少女の美しい顔立ちはまだ大人にはなりきつておらず、しかし芽生えたばかりだろつ色気もほのかに漂わせており、体の線がとても艶めかしい。

音楽はなく、聞こえるのは少女が口ずさむ歌と、鈴の音と、足を踏み鳴らす軽やかな音だけである。

彼女の舞は優雅で、しかし切れがあり、見る者の目を惹きつけてやまない魅力があった。

もっと近くで見たい。アイシスは誘われるようにしてテントに足を踏み入れた。

しかし、夢見心地でいたせいだろう、そばにあった箱の山にぶつかり、山は派手な音をたてて倒れてしまった。

アイシスの顔が青ざめ、そして真っ赤になる。

「だれ？」

歌声から一転、少女の声はにわかには鋭さを帯びた。アイシスはしどろもどろに答える。

「ご、ごめんなさい！ ぼく、アイシスっていいいます。あなたの邪魔をするつもりはなかったんだけど、あまりにきれいだったから、近くで見えてみたくなって」

「それで結局邪魔をしちゃったわけね」

少女は腰に手をあて、怒ったらしい顔をしていたが、声にはからかうような調子があった。

「とにかくこつちへいらっしやいよ。顔も見えないんじゃない、怒る気にもなれないわ」

アイシスはおずおずと少女に近づいた。

少女はどうも勝気な性格に思われる。

近づいたとたん一発ばかり、なんてこともあるだろうとアイシスは覚悟した。しかしそれは杞憂に終わった。

「あらまあ、ずいぶんとかわいい坊やね。見ない顔だわ」

「旅の途中なんです。さっき、この野営地に着いて」

坊や、と言われたのが気に障ったが、アイシスは反論しなかった。

「へえ。旅人って鬚面のおやじばかりだと思っていたわ」

「冗談なのか本気なのか、アイシスはどう答えるべきか迷ってしまった。

「それで、そつちの人は。アイシス坊にだけ挨拶させておくのはずるんじゃない？」

まさか矛先が自分に向くとは思っておらず、ネットレトはやれやれと肩を落とした。

しかしそう言われてしまったては出向かないわけにいくまい。

観念したネットレトは、さっさとテントに入ってアイシスの横に並んだ。

少女は強気な笑みを浮かべていたが、しかしネットレトの顔を見た  
とたんにはっと息を飲んで固まってしまった。  
アイシスはその変わりように目を丸くする。

「知り合いなの？」

「いや」

アイシスはネットレトを見、また少女に視線を戻すが、やはり少女  
は固まったままだった。

どうしたの、とアイシスが声をかける。それをきっかけに、少女  
が金切り声をあげた。

「す、すごいわ！ あなた、な、名前はなんとおっしゃいますの」

「ネットレト」

さすがのネットレトも気圧されたかのようにである。彼は偽名を名乗  
ることすら忘れ、反射的に呟いた。

「ネットレトさま！ お名前も素敵だね。本当に信じられないくらい  
に素敵、完璧よ！」

少女は頬を赤く染めあげて叫んだ。まるで蜂の巣を突いたかのよ  
うな賑やかさである。

アイシスもネットレトもすっかり閉口した。

それでも少女はおかまいなしで、早口でネットレトを褒め称えた。

やれ憂えた目が色っぽいだの、やれ薄い唇が知性的だの、果ては  
腰まである髪が神秘的とまで言う。

「ねえ、ネトレトさま、あなた恋人はいらっしゃる？」

とどめに彼女が放った言葉に、ネトレトは答えることすらできないのだった。

少女の質問責めは止まらなかった。

出身地は、家族構成は、ペットはなにを飼っていて、いつから旅をしているのか。

最初こそ目を白黒させていたネトレトだったが、徐々に落ちつきを取り戻し、質問をうまくかわして明確な答えを教えなかった。

少女はしかし満足したようで、年配の団員が就寝をうながしにくるまでお喋りは止まらなかった。

「今夜は野営地に泊まっていかれるんですね」

「ああ」

「やった！じゃあ、明日はきつと見にいらしてください、通し稽古をするんです」

そう言うつと少女はアイシスにも手を振り、軽やかな足取りでテントを出ていった。

すこし癖のある赤毛が揺れていくのを見ながら、アイシスがぼつりと呟いた。

「すごいなあ。ネットをこつも困らせるなんて」

ネットはどつしたものと眉をしかめた。



## 第二十話：舞姫

### 『聖伝』第二十話

アイシスたちは野営地のなかでも大きめのテントに通された。客人は盛大にもてなすのが彼ら雑技団の流儀と見える。

中には柔らかなベッドがずらりと並んでおり、その心地よさにアイシスはうっとりした。

湿っていて安定の悪い木の上とは比べ物にならない上質の寝床だ。

眠りにつく前に、ふたりは医者がいるテントを訪ねた。

ラナもリグルも眠ったままだったが、心配することはない、と医者が言った。

「よく眠ればそれだけよく回復するものさ。それにこの軟膏は切り傷にとてもいい」

医者は髪の毛の少なくなった頭を気にしながら、人のいい笑みを浮かべた。

テントに戻り、ベッドにもぐりこむ。

布団を鼻元まで引きあげると、よく干されたいいにおいがした。

しかしアイシスは眠れなかった。

首を動かす、となりのネットレトを見やる。

右側を下にして眠るのが彼の常らしく、アイシスから彼の顔はうかがえなかった。

「起きている？」

小さく呼びかけると、ネットレトの背中が答えた。

「ああ」

「眠れないの？」

今度は返事がなかった。

アイシスは視線を正面に戻した。天井の骨組みが見える。

「ネットレトも見たの？ あの森で」

アイシスは返事を待った。

しばらく沈黙が流れたが、やがて小さくああ、と聞こえた。

「あれはなんだったのかな。それに、どうして僕たちは長く眠ったのだろう。ラナたちは先に目を覚ましていたんだよね」

「そのようだな」

ネットレトが大きく息を吸い、ゆっくりと時間をかけて吐き出す音が聞こえた。

アイシスはまたちらりと目を向ける。

彼の背中にもうなにも語らなかつた。

アイシスも目を閉じた。

今日はなにも夢を見たくないな、と思った。

森で見た夢はあまりに甘く、懐かしく、気がつけばアイシスの目にはまた涙が浮かんでいた。

翌朝、ふたりは派手で耳障りな音で目を覚ました。

なにごとかと思いい TENT から顔を出してみると、恰幅のいい女性が鍋をうち叩いているではないか。

手に玉じゃくしを持っていて、「ごはんごはんだと叫んで回っている。

アイシスとネットレトが顔を見合わせていると、昨夜テントに案内してくれた団員がやってきて、彼らを食事の場へと誘った。

そこはとても大きなテントだったが、多すぎる人でごった返していた。みな団員なのだろうか、若い者から年寄りまで、さまざまである。

しかし彼らは一様に笑い、楽しそうに話しながら朝ごはんを食べているのだった。

アイシスは修道院での生活を思い出した。

神父さまが一緒だと子どもたちは静かに食事をするのだが、大人

の目がないおやつ時間なんかには、こんなふうには笑い声が絶えないのだ。

「ちょっとみんな静かにしな！」

さきほどの女性が、鍋を二度三度と鳴らして叫んだ。

話し声はしだいに小さくなり、なんだどうしたとテント中の視線が女性に集まった。

「昨日は時間が遅かったから紹介できなかったが、昨夜から野営地に仲間が加わったんだよ。若く見目好い旅の御仁さ。

ほらあんたたち、こっちおいで！」

にこにこ笑って女性はアイシスたちに手招きし、ふたりはテントの入り口で狼狽した。

テント中の視線が、いまやアイシスとネットレトに注がれている。

中央のほうで、きゃあと嬉しげな歓声があがった。見れば昨夜の少女である。

「そら、いきなよ」

彼らを誘った若い団員に背を押され、ふたりは恰幅のいい女性のもとへと進んだ。

ひゅうと口笛が吹き鳴らされたが、どうやら団員たちはみな客人に好意的なようだった。

「ようこそいらっしやい。あんたたち、名前は？」

「キ……ネットレトです」

「あ、アイシスです」

「よし、みんなも聞きな！ ネットレトに、アイシスだ。あとふたり若いのがいるんだけどね、怪我をされていていまは眠っている。みんな仲良くするんだよ！」

おうつ、とテントの中は大きな声に包まれた。

ふたりはぎこちなく頭をさげたが、その肩を女性の大きな手が力強くつかんだ。

そして彼女は驚くべきことを言った。

「さて、あなたたちにはどの演目をやらしてもらおうかね」

「うちの決まりなんだよ」

ハタと名乗る若い団員が言った。

「客は歓迎する。宿泊料もいらない。ただ、一緒にぼくたち“花移り座”の舞台に立ってもらおうのさ」

「変わった決まりなんだね」

アイシスが素直にそう言うと、ハタは笑った。

「確かにね。なかなかないだろう？ 雑技団の舞台に出るなんてさ」

「でも、どうしてそんなことを」

楽しいからさ、と八塔は答えた。

「なんせ、物騒なご時世だろ。旅なんて危なっかしくてさ、旅人はみんな神経をすり減らしている。だからさ、ここで浮世離れた経験をしてもらってさ、楽しんでもらうんだ。

実際、けっこうこの制度は評判なんだよ」

それからアイシスたちは野営地の中心部へと誘われた。

朝ごはんを食べたところよりも大きなテントがそこにあり、これが見世物小屋だという。

「通し稽古はここでするから、きみたちも見学していくといい。自分に合った演目が見つかるかもしれないし。

なに、難しく考えなくていいんだよ。舞台の端で玉を投げたり、熊の檻の扉を開けたり、そんなことだっていいんだから」

そう言うと八塔はふたりを残していってしまい、「ぼくの演目も見てください」「、やがて稽古が始まった。

テントの中央には半円形の舞台があり、そこを中心になだらかな勾配の足場が組まれている。

後ろの観客にも見えやすいようにという配慮だ。アイシスとネットは足場の隅に腰をかけた。

アイシスはこれほどの規模の公演を見たのは初めてだった。となり街で見る小さな舞台とはまるで違う。

観客を惹きこんで放さない疾走感と、その迫力。

団員たちは宙を舞い、手と手を取り合って踊り、そして見事に獣を操って見せた。

大きな熊は、ハタの指示に従って台の上で片足立ちを披露した。アイシスは喜んで拍手を送った。

出番が終わってしまうとハタは彼らに加わった。

そしていまの演目は難しいだの、あれは失敗すると骨を折るだのと物騒な説明をしてくれるのだった。

「次がうちの目玉だよ」

ふと賑やかな音楽が止み、どこか怪しげな静寂が舞台に流れる。かと思うと太鼓の音が鳴り響き、薄衣をたなびかせて歩み出てきたのは昨夜の少女だった。

「あ、ネトレト。昨日の」

「ああ」

「あれ、きみたちアージェエさんを知っているの？」

アイシスは軽くうなずいた。少女の名はアージェエというのか。

そして昨夜のできごとを話す。

ネトレトは苦りきっていたが、アイシスはそんな彼のようすがすこしおかしかった。

「そうか、そいつはいい。ねえネットレトさん、あの人はさ、まったく男に興味がないって人なんだよ。そのアージエさんをそこまで言わせるんだから、きみってすごいよ」

ネットレトは肩をすくめた。

そうしているうちにアージエは舞台の片端に立てられた高い足場に登りきった。

そこでしなりとポーズをとると、一転して気合の入った表情に切り替え、円状の銀に光る輪を手にとった。

輪には太い綱が巻きつけられていて、もう一端はテントの天井に伸びている。

なにをするのかと見ていると、なんとアージエは迷わず足場を踏み切ったではないか。

あっとアイシスが声をあげる。

彼女は輪に体をくぐらせるようにして座っており、小さな体は振り子のようにテントを横切った。

「わっ、危ない、危ないよ」

「大丈夫だって。見てな、もつとすごいから」

はたから見ても揺れる速さはけっこうなものだ。

アージエはしかし、ほほ笑みを浮かべてすらいるようだ。

しばらくテントの端から端へと体を揺らせていたが、すこし速さが落ちついてくると、舞台の中心部に垂れ下がる綱を手を取った。

その綱に、彼女を支えるほうの綱を、うまい具合に絡みつけてい



く。

アージェの体は綱の周りをくるくると舞い、ある程度まで降りてくると彼女はするりと輪から手を離れた。

音もなく軽やかに舞台に降り立つアージェ。

うつむいていた顔をゆっくりとあげ、満面の笑みを浮かべる。

テントの中は彼女を讃える共演者らの拍手と歓声で埋まった。

「すごいなあ。ねえネットレト、すごいよ」

「そうだな」

「ラナやりグルにも見せてあげたいなあ」

アイシスはすっかり身を乗り出している。

ハタは満足げにうなずき、アージェさんの本領は踊りのほうなんだよ、と言った。

なるほど、再び賑やかに奏でられる音楽にあわせ、アージェは無心に踊っている。

指の先まで魅せるその舞に、アイシスはすっかり釘づけになった。

そうして通し稽古は終わった。

大成功だ、と言ってハタは大きく手を打った。

「それで、演目は決めた？」

三人は昼ごはんを食べていた。野菜がたっぷり入ったスープだ。

ネトレトは静かに首をふる。

「ぼく、いいの見つけたよ」

おや、とハタはアイシスをうながす。

「大きな玉に乗っていたでしょう、ぼくはあれがやりたいな」

「それはまた難しいのを選んだね。きみは身軽そうだけれど、できるかな」

ハタは楽しそうにほほ笑んだ。

「ねえ、ネトレトは剣が得意なんだから、剣を使った演目をしてみたらどう」

「剣か」

そういえば、とネトレトは思い出した。たしか炎に包まれた剣で舞う演目があったはずだ。

しかし舞は、とネトレトが言うと、ハタが素敵な提案をしてくれた。

「あれはどちらかという舞の要素が強いからね。ネトレトさんは剣技を見せてくれたらいい。布を巻いた杭を立ててさ、炎の剣でそれを斬ってまわるのはどうだろう。炎が燃え移って幻想的だと思うよ。それに、旅に生きる本物の剣を見てみたい」

ではそれで、とネトレトはうなずいた。

ネットレトが食事を終えたあとを見てみると、見事にニンジンだけが残されていた。

ハタはふたりを小さな小屋へと連れていった。

物置小屋になっているのだろう、中に入ったかと思うと、ハタは大きな玉を転がして出てきた。

「実際の玉乗りでもこれを使うんだよ。ほら、アイシスくん、ために乗ってみるかい。ぼくが支えてあげるから」

言いながらハタは玉の周りに短い杭を打った。これで動きが固定される。

アイシスはハタの肩とテントの骨組みとを支えにして玉に登った。

揺れ具合を確認すると、すくりと上で立ってみせる。ハタは感心して声をあげた。

「すごいなあ。まさか一度乗っただけで立ってしまうとはね。さあ、降りられるかい」

「大丈夫、それよりちよつとこのまま動いてみたいな。ハタさん、杭を抜いてもらってもいい？」

ハタは驚き、それはできないと言った。ちやんと練習をしてからじゃないと怪我をするよ、慣れと勘が必要なんだから、と。

「彼なら平気だ」とネットレトが言った。

「おそろしく身軽だから。怪我の保障は私がするから、抜いてやっ

てくれないか」

ハタはなお心配そうにしていたが、アイシスがどうしてもとせがむので杭を抜いた。

とたんに玉が不安定に動く。しかしアイシスは両手を広げ、玉の上で見事につりあいをとった。

ハタの目が丸くなる。

アイシスは得意そうな笑顔を浮かべ、なんとそのまま前進し始めた。

「すごい、野営地の端まで見えるよ」

アイシスは高い視界にすっかり興奮しているようだった。

彼のおそるべき反射速度が小さな傾きを即座に捉え、並外れた運動能力でそれにあわせて的確に動く。

平地に立つのと変わりないようすのアイシスに、ハタはすっかり呆気にとられてしまった。

しばらく玉を転がして楽しんだアイシスは、こともなげに玉の上から飛び降りた。

「最高の気分だったよ！」

「よかったな」

「うん！」

アイシスは頬を上気させている。  
うちに入ればいいのにと、ハタは冗談ともつかぬ口調で言っ  
つた。

次はネットレトの番だった。

ハタは八本の杭を正方形になるように打ちこみ、その中央に  
ネットレトを立たせた。

「これを使って」

ハタから渡された剣には布が巻いてあり、つんと油のおいが  
た。炎の剣の正体はこういうわけだ。

同じように油を染ませた布を、ハタは杭にも巻きつけた。

「こうすれば、剣で撫でてやれば簡単に炎が移るはずだよ。最初  
だし、油は少なめにしているからね、そう危なくはないと思うけれど  
気をつけて」

そう言っ  
てハタはネットレトの持つ剣に火をつけた。  
舞台上見たときよりもずっと控えめな炎が揺れる。

アイシスとハタはすこし下がり、彼が自由に動くのを見ること  
にした。

ネットレトは物珍しそうに燃える剣を見ていたが、やがて慣れた手  
つきで杭に斬りかかった。

ネトレトにそのような意識はないのだろうか、アイシスには彼もまた舞っているように見えた。

彼に操られる剣は、流れるような線を描いて見る者を魅了した。

やがて八本の杭すべてに炎が移り、ふたりはネトレトに拍手を送った。

ネトレトは燃える杭をまじまじと見ていたが、ふとなにを思ったか腕を振りあげた。

剣に巻きついていた布がはずれ、宙に飛ぶ。一見すると、炎が踊っているようでもあった。

ハタはあつと声をあげたが、次の瞬間には布は細かく切り刻まれて地面に落ちていた。

小さくなった炎がぱらぱらと降る。

そのさまは本当に幻想的であった。

ネトレトは続けて杭の布をも切り裂いた。目にも留まらぬ早業である。

アイシスとハタが息をのんで見守るうちに、炎は小さくなってネトレトの足元で揺れていた。

「す、すい」

しぼり出すような声は、アイシスのものでもハタのものでもなかった。

ふたりがふり返ると、髪より赤いかという顔をして立っているのはアージエではないか。

ネットレトはくすぶる炎を踏み、すっかり消してしまっただから杭の中から出てきた。

「すごい！まさに神業だわ、ネットレトさまっただらそんなこともできるのね！」

ネットレトは慌てて剣を後ろ手に持った。アージエが飛びついてきたからである。

まったく、彼の判断が遅れていたら、アージエは体に深い傷を負っていたかもしれない。

それも構わずアージエは賞賛の言葉を並び立てている。

ネットレトはすっかり閉口し、生暖かく見守るふたりに助けを求めたのだった。

## 第二十一話：精霊たちの戦い

### 『聖伝』第二十一話

アイシスは医者へのテントを訪れた。彼の見舞いに気づかず、ラナもリゲルも眠り続けている。

アイシスはラナのベッドのそばに腰をおろした。幾分か頬に赤みが戻ったように見える。

「若いからかな、ふたりとも順調に回復しているよ」

それから、きみは友達想いだね、と医者は言った。

ネトレトには悪いことをしたかな、とアイシスは思った。いまごろ彼はアージエの質問責めにあっているだろう。

どうもアイシスには彼女を止められそうにもなく、ごゆっくり、とその場を抜け出してきたのだった。

それからアイシスは野営地を歩いてまわった。今日はどうやら移動しないらしい。そこで団員たちが稽古していた。



あるいは覗き、あるいは参加しながらアイシスは半日を楽しんだ。

ネットレトがようやく戻ってきたのは夕ごはんが始まるころで、彼の顔には憔悴の色が見えた。

雑技団はゆつくりと旅の道を進んだ。

移動は三日に一度だけで、残りの二日は稽古に精を出す。アイシスたちは次の街までこの一団の世話になることにした。

そうと知ったアージエは喜び、暇を見つけてはネットレトを探し回った。

これにはさすがのネットレトもすっかり辟易し、彼女の声を聞くだけで物陰に隠れる始末だった。

「アージエもよくやるよね」

二度目の移動の最中、アイシスは大きな袋を抱えて笑った。団員の舞台衣装が入っているのだ、ネットレトは骨組みの一部を持っている。

「よっぽどネットレトのことが好きみたい」

「よく分からないな」

ネットレトは空とぼけた。

よく晴れている。一団は陽気を楽しみながら歩いた。熊も虎も檻のなかで居眠りをしている。

のどかだった。

しかし平穩は、突然の悲鳴によって打ち壊された。

「なんだ？」

ハタが不安そうな顔をして辺りをうかがう。

声は後ろのほうから聞こえてきたようだった。

アイシスとネットレトは荷物を放り出すと、言葉も交わさないうまま走り出した。

まるで矢のような速さだ。

ハタは驚いて声をあげたが、すでにはるか後方へと駆けていくふたりには聞こえなかった。

隊列はすっかり崩れていた。

アイシスたちとは逆に、団員たちは慌てふためいて前へと逃げ惑っていた。

そのうちのひとりが  
「強盗だ！」と叫ぶのをアイシスは聞いた。

ふたりはすぐに一団の最後部に着いた。

強盗ではない。

アイシスの全身がざわりと色めきたった。

彼らの前に立っているのは、間違いない、黒の騎士団だった。

アイシスの鼓動が早くなった。

心臓が脈打ち、血液が全身に流れるさままで感じ取れてしまいそ  
うだ。

アイシスはうつむき、胸元を手で押さえた。

しかしネトレトの気遣う視線を感じると顔をあげ、大丈夫だとい  
うように何度も小さくうなずいた。

黒のローブが風に揺れる。

太陽も薄い雲に隠されてしまったようだ。

ネトレトはふと視線を落とした。

草の上に、慌てた団員が落としたのだろう荷物がいくつか散らば  
っている。運がいいな、と彼はつぶやいた。

彼ら四人が預けた剣も、運び手を失って転がっているではないか。

ネトレトは牽制の目つきを騎士団に向けたまま、そっとかがんで剣を拾った。アイシスの剣も拾う。

差し出すと、アイシスもやはり視線は騎士団に向けたままで、しかししつかりと受け取った。

軽く見ても、男たちの数は三十をくだらない。  
全員が馬に乗り、馬もまた真つ黒だった。

その毛並はとても美しかったが、しかしアイシスの目には不気味にしか映らなかった。

「王は闇遣いに会われたのだな」

騎士団の中央に立ち、すこし前に出た男が言った。  
静かで、突き放すような、とても冷たい声だ。

「あの方”のおっしゃる通りだ。運命はその道を辿っている」

「ぼくは自分の意思でここにいるんだ。“あの方”なんて関係ない」  
アイシスの声はすこし震えていたが、しかしその語気は強かった。

「きみたちは一体なにがしたいんだ。なぜぼくを狙うんだ。どうしてファニマを、ティエラを燃やし、ぼくの大切な家族と仲間を殺したんだ！」

「落ち着きなさい」

ネトレトの声も静かだ。しかし人を安心させる優しさがある。

ネトレトはアイシスをかばうようにしてすこし前に出た。

「アイシスを攫いにきたのか？ それともこれは、ただの強盗行為か？ どちらにせよ、お引取り願うが」

男はなにも答えなかった。ただ馬をさがらせて列に戻った。それが合図だったのだろうか、三十人を超える男たちが、馬を駆けさせてふたりに襲いかかった。

不気味にも彼らは喚声のひとつもあげようとしない。

アイシスの呼吸が急激に速くなった。

視界が白んでいく。

構えていた剣を取り落とし、アイシスはよろめいた。しかし不思議と意識ははっきりとしていた。

アイシスは精霊の声を聞いた。彼のすべきことはひとつだ。

「光よ」

土ぼこりをあげる馬のひづめが間近に迫る。

「すべてを照らし、愛し、包みこむ力を我に」

アイシスはゆっくりと右手をあげた。

雲が切れ、光が筋となって彼に降り注ぐ。

アイシスの瞳の中で、青い炎が揺れて燃えあがった。

「ユフィロスレジア」

旋風が巻き起こる。

突然のことに馬は驚き、前足をあげていなないた。

ある馬は体の向きを転じてアイシスを避け、ある馬は背中の中の男ごとごとと倒れる。

にわか騒がしくなった騎士団を尻目に、すべてを超越する精霊ユフィロスレジアが、アイシスのかたわらに降りたつた。

懐かしいかな、黒ずくめのその姿。まったく憎憎しい。

ユフィロスレジアはアイシスの頬に顔を寄せた。

なんなりと、王。

アイシスはうなずいた。

男はそのようすを見ていたが、おおと感嘆の声をあげて手を打った。

「まさか、もうユフィロスレジアを使役できるとは。“あの方”にお教えせねば。必ずお喜びになる」

男はそばに控えるふたりの男に目配せした。  
ふたりはうなずくと馬を進める。

「聖なる風の力と加護とを我に授けたまえ　ウインディーネ」  
「あまねく大地を焦がし奮わせる炎よ　サルマン」

「魔導師か」

ネトレトは剣を鞘に直した。精霊にどうして剣で立ち向かおう。

しかしユフィロスレジアは彼に顔を向けると、小さく首をふった。

しばし待たれよ。

「……………」

ネトレトはうなずいた。

アイシスの力を見るいい機会だ。

しかし彼は万一のときに備え、そつと言霊をつぶやくと“扉”を開けた。

命ぜよ、王。なにを願う。

アイシスはなにも言わず、騎士団の魔導師が呼び出した精霊を指さした。

任せよ。

ユフィロスレジアは涼やかな風を残すとアイシスのそばから飛び去った。

光を撒き散らしながら、風と火の精霊に挑みかかる。

ウィンディーネは白、サルマンは赤の衣に身を包んでいた。彼女らもまた非常に美しかったが、ユフィロスレジアやヴァネッサに比べるとどうも劣って見える。

それに彼女らはあまり装身具をつけていなかった。

しかしアイシスはそのときにようやく気づいたのだが、ユフィロスレジアは夢で見たときよりもずっと質素な格好ではないか。

鈴のような音を鳴らす腕輪も、髪を飾る金具も見当たらない。

それでもやはり彼女は気高く美しくあったが。



ユフィロスレジアはウィンディーネに襲いかかった。二度、三度と彼女らはぶつかりあったが、しかし勝敗はつかなかった。

ウィンディーネの赤い唇が言葉をつむぐ。

すると風が巻き起こり、ユフィロスレジアを激しく襲った。

体の均衡を崩され、宙空でユフィロスレジアがよろめく。

「ユファイ！」

アイシスは強く念じた。

心の強さが魔法の強さ。

ネトレトの言葉がよみがえった。

アイシスの思いに後押しされたのか、ユフィロスレジアは顔をあげてウィンディーネを見すえた。

煌々と光が散る。

かと思うとユフィロスレジアはかっと口を開け、それに合わせて集約した光が、打たれた球のようにウィンディーネを直撃した。

まぶしい光が目を射る。

ウィンディーネは金切り声をあげたかと思うと、それこそ風のようにして消えてしまった。

彼女を使役していた魔導師が崩れ落ちる。

「や、やっつけたの？」

「まだだ。気を抜くな、アイシス」

ネトレトの言葉が終わらないうちに、ユフィロスレジアは燃え盛る炎に包まれた。サルマンだ。

ユフィロスレジアがウィンディーネと戦っているあいだに彼女は詠唱し、おそろしい業火を呼び出していたのだ。

「ユフィ！」

アイシスが叫ぶ。

とたんに彼をひどい眩暈が襲った。

頭に手をやるが、立っていることすらできない。

ユフィロスレジアは打ち負かされたのだ。炎が消えたあとに彼女の姿はなかった。

精霊の敗北は使役者にも多大な痛手を与える。

ときに命さえ落としかねないのだ。

アイシスは膝をついた。酷い頭痛がする。

大粒の汗が流れ落ち、精霊を使役することで心にかかる負担の大きさをアイシスは学んだ。

サルマンの炎は草原にまで伸びた。

まるで生きているかのような炎は、アイシスたちを避けて地面を這い進んだ。

その行く先には雑技団の姿があった。

彼らはすこし離れた場所で戦況を見守っていたのだ。

アイシスが目を見開く。

心でユフィロスレジアに呼びかけるが返事はなかった。

団員たちが悲鳴をあげる。

「ヴァネッサ」

ネトレトが右手を横に払った。

漆黒の精霊は矢のように放たれた。

アイシスは喘ぎながらそのようすを目で追った。

ヴァネッサは地面に沿うように飛んだ。

そしてなんと、彼女の通ったあとを見れば、炎はあとかたもなく消えているではないか。

ヴァネッサが旋回するころには炎はすっかり静まっていた。

方向を転じると、今度はサルマンに向けて一直線に飛ぶ。

そのときアイシスは目を疑った。  
ヴァネッサのまとう衣が伸びたのだ。

他に染まることを知らない黒の衣が伸びる。

ヴァネッサは口を開けた。

腕を振り、両腕を交差させる。

黒い袖が揺れてサルマンを捕らえた、かに見えた。

アイシスは状況を理解できずにいた。

サルマンは消えてしまったのだ。悲鳴ひとつあげることなく。

美味。

ヴァネッサは宙に浮いたままにやりと口の端をあげた。

それを見るなり黒の騎士団は叫び、惑いながら逃げ出した。

ヴァネッサはそれを追った。そして黒の衣がまた伸びた。

それはまるで闇が辺りを染めていくかのようだった。

そしてその闇に捕まったら最後、人も馬もすっかり消えてしまっ

のだ。

アイシスは声をあげることができなかった。

震えながらネットレトを見上げる。彼はいつもと変わらないように見えた。

目の前の惨状さえなければ、風の向きを探っているようにすら見えなかったかもしれない。

それほどにネットレトは静かな顔をしていた。

アイシスは意識を手放した。

アイシスが目を覚ましたのはテントの中だった。

灯りがともされている。日はもう沈んだのだろうか。

顔だけを動かして辺りを見回すと、となりのベッドではラナが眠っていた。その奥にはリグルも見える。

アイシスは朝の出来事を思い出した。

そうだ、黒の騎士団に襲われたんだっけ。

そしてぼくはユフィを呼び出して　　そうだ、ユフィは？

アイシスは身を起こした。

炎に包まれ、炎とともに消えてしまったユフィロスレジア。

彼女は無事なのだろうか。

「ユフィ、ユフィ」

案ずるな。

「ユフィ、よかった。無事なんだね」

彼女の姿は見えなかったが、しかし声はアイシスの耳元で確かに響いた。

心配はいらぬ、とユフィロスレジアは言った。

我々精霊は死なぬ。闇に吞まれば消滅するがな。

「闇……」

アイシスはヴァネッサのことを思い出した。

圧倒的な力だった。

彼女はすべて吞んでしまったのだろうか、黒の騎士団の、あの人数を。

王が心を痛める必要はない。

「うん……」

テントの中に人が入ってきて、アイシスはユフィロスレジアとの会話を打ち切った。

ハタだった。

彼の顔は、アイシスが起きているのを見るとぱっと明るくなった。

「よかった。アイシスくん、目を覚ましたんだね」

「うん。ごめんね、心配をかけたかな」

「なにを言うんだ。きみたちは恩人だ、黒の騎士団から守ってくれたんだから。みんな騒いでいて、よくようすは見えなかったんだけどね。心からお礼を言うよ」

そう言われるとアイシスは心苦しかった。

騎士団が狙っていたのはアイシスなのだ。

幸い、雑技団に被害は出なかったが、彼らを恐怖に震え上がらせたのは自分の責任なのだ。

ハタはそんなアイシスの心情には気づいていないようで、明るく言葉を続けた。

「あれから丸一日が経ったんだ。ずっと歩きとおしだったよ」「本当？ 一日中ぼくは寝ていたの？」

「うん。そしてアイシスくんが眠っているあいだにぼくたちは街に着いたというわけだ。」

「ここはマーニヤの街のすぐ外なんだよ」

アイシスの体はまるで元気だったので、彼は立ち上がってテントを出た。

大小さまざまなテントが建てられている。

北のほうを振り仰ぐと、なるほど、たくさんの灯りが見える。  
あれがマーニヤのようだ。

「ネットレトは」

「それが、見当たらないんだ。ぼくも探しているんだけど」

アイシスはテントの前でハタと別れた。  
見つかったら教えてくれ、団長が彼を呼んでいるから、とハタは  
言い、アイシスは手をふって答えた。

アイシスは無心に歩いた。

こうしていればネットレトの居場所にたどり着くような気がした。

ふと足を止める。

テントとテントのあいだに荷物が置かれていて、そこに隠れるようにしてネットレトが座りこんでいた。

アイシスは彼に声をかけようとしたが、ほかの人影を認めて口を



閉じた。

ヴァネッサだ。

うつむくネトレトの頬に手を添えている。

アイシスはすこしの物音もたてなかったが、ヴァネッサはおもむろに立ち上がるとアイシスに向き直った。

エルフの王よ、なに用か。

「ネトレトに……ただ、とても会いたかったんだ」  
アイシスはふたりに近づいた。

ネトレトはあぐらをかき、腕を組んでいる。

「眠っているの？」

ああ。

アイシスはすこし驚いた。

彼の眠る姿を見るのはこれが初めてだった。

規則正しく上下するネトレトの肩の上で、長い金の髪が揺れる。

すこし、寝かせてやってくれぬか。

アイシスはうなずいた。

しばらく沈黙が続いた。  
口を開いたのはヴァネッサだった。

この男の心は疲弊しきつておる。

わらわは、超越種は諸刃の刃だ。強大な力を誇るが、それゆえ使役者の負担も大きい。

王も長く眠つたらう。

「うん。すごく疲れた。ぼくでこうなんだから、ネトレトはもっと辛いだろうね。あんなにすごい力を使って」

この力は、いまのおぬしの比ではない。おぬしはまだユフイロスレジアの完全なるすがたを見てはおらぬからの。

「え？」

あれはもっと美しいぞ。そして強い。火の精霊になど負けるものではないわ。

王よ、我らの姿は強さによって変わるのじゃ。力があればあるほど我らは美しく輝く。いまのわらわを見よ、ずいぶんとみすぼらしいではないか。

そう言ってヴァネッサは自嘲気味に笑った。

言われてみれば、なるほど、彼女の姿も先日に見たときよりは幾分か華美さに欠けるようだ。

それだけネトレトの心が疲れていることなのだろうか。

のう、王よ。

「うん」

ネットレトを、守ってやってはくれまいか。

アイシスが答える前に、ヴァネッサは消えてしまった。

アイシスの耳には最後に彼女が言ったことが引っかかっていた。  
彼女はこう言ったのだ。

ネットレトを、守ってやってはくれまいか　　わらわから。

## 第二十二話・その子ども、最強

### 『聖伝』第二十二話

ネットレトを、守ってやってはくれまいか　　わらわから。

ヴァネッサは確かにそう言った。

アイシスは考えた。

どつという意味だろう。

ヴァネッサはネットレトに使役される精霊で、その服従は絶対のはずだ。

その彼女からネットレトを守るとは。彼女はネットレトをけっして裏切らないはずなのに。

まるで答えの見えない問いだった。アイシスはすこし考えることを中断した。

ネットレトをベッドに運ばなければ。

覗きこんで見た彼の顔は青く、休息が必要に見えた。

しかしアイシスが手を伸ばしたとたん、目を覚ました彼にアイシスは腕を捻りあげられてしまった。

驚くやら痛いやらで、アイシスは声も出ない。  
そうと知るとネトレトはすぐに腕を放し、アイシスに謝った。

「すまなかった。つい、きみと知らずに」

「大丈夫だよ」

アイシスはすこし涙目になりながら笑った。

ネトレトは一体、どんなに過酷で孤独な旅をしてきたのだろう。  
彼は眠っているわずかな時さえ警戒を怠らないようだった。

「あ、ネトレトさん」

小走りでハタがやってくる。

探したよ、と彼は言った。

「団長が呼んでいますよ。たぶん、公演が終わってからのことを聞  
きたいんじゃないかな。公演は明後日だよ」

「ありがとう。すぐにいく」

ネトレト、とアイシスは声をかけた。

やはり彼の顔は青い。

アイシスは心配だった。ヴァネッサの言葉のせいもある。

ネトレトの辛さはアイシスの比でない、ということをヴァネッサ  
は言った。

それほどの疲れを抱えながら、彼は気丈に普段どおりふるまおうとする。

「休まなきゃだめだよ」

ネットレトは眉をあげた。唇の端に笑みが浮かんだ。

「大丈夫だ。ありがとう」

そしてネットレトは団長の待つテントへと向かった。

「アイシス」

ひとりになったアイシスが手持ち無沙汰でいると、ふとうしろから呼び止められた。

ふり返るとアージエがいた。

「こんばんは、と言ってアイシスはほほ笑む。

「もう平気なの。あなた、ずっと眠っていたんでしょ」

「うん。大丈夫だよ」

「よかったわ」

アージエはにっこりと笑った。

彼女はとても美しい。

少女のはつらつとした美しさと、大人の女の怪しい色気を兼ね備

えている。

アイシスの顔がすこし赤くなった。

ネットトさまは、とアージェエは訊いた。

団長に呼ばれていってしまったことを説明すると、アージェエはあからさまに残念そうな顔をしたが、すぐに機嫌をとり直して「お友達がお目覚めよ」と言った。

アイシスは飛び上がりそうなほど喜んだ。

アージェエにお礼を言うと、すばらしい速さで医者の特ントへと向かった。

「リグル！」

テントに飛びこむのと、アイシスが叫ぶのとは同時だった。

リグルは上半身を起こし、医者となにやら話していたようだったが、アイシスの姿を見るとにやりといつもものように笑ってみせた。

「よう、嬢ちゃん。情報が早いんだね」

リグルの憎まれ口も気にならない。

アイシスはリグルに抱きついた。

医者が慌て、これ、と叱る。それをリグルは手で制した。

痛いよ、と言いながらも彼は楽しそうに笑っていた。

「ラナはまだ眠っているんだね」

「みたいだな」

「リグルも、本当に長く眠っていたんだよ。心配したんだから」

「寝不足だったんだよ」

久しぶりに交わすリグルとの会話は楽しかった。

リグルは本当に頭がいい、とアイシスは思う。

こちらがなにか言っていると、リグルはとても小気味よい応えを返してくれるのだ。

切れ味のいい包丁で、とんとんと野菜を刻むかのようだった。

アイシスはリグルが眠ってしまったからのできごとを話した。

森を抜け、雑技団に会い、その野営地に泊まらせてもらったことを。

アイシスが話すたびにリグルは、ほう、とか、へえ、とかいい具合に相槌を打った。

「それでね、今度の公演でぼくたちも舞台に立つんだよ。なんでっ



て、それが宿泊料の代わりなんだよ」

「ふうん。おもしろいね」

「でしょう。それでね、おもしろいっていったらもうひとつ、アージェっていう女の子がネットレトのことをね……」

「私はどうした」

アイシスはばねが弾かれたようにふり返った。テントの入り口にネットレトが立っている。

リグルは声をあげて笑った。

彼はネットレトがいることに気づいていたのだ。

いじわるな彼はアイシスに教えてやらなかったのだが。

「えっと、あの、アージェとのがね、おもしろかったから」

「おもしろくないよ」

ネットレトはアイシスのとなりに腰をおろした。

アイシスは顔を真っ赤にした。

「俺はその話、興味あるけどね。色恋沙汰って、ばかばかしくて笑えるじゃないか。どうせ、言い寄られたんだろ」

ネットレトは肩をすくめる。

「どうでもいいって顔だね。あんた女に興味がないの。それともなに、忘れられない人でもいるのかね」

「それよりも聞きたいことがあつてね」

アイシスは会話をそわそわしながら聞いていたが、どうやらこの話はこれで終わりのようだ。

ネットレトはきっぱりと話題を打ち切ってしまった。

「話してくれないか。私たちが眠っていたあいだに森で起こったことを」

そしてリゲルは静かに話し始める。

アイシスは口をなかば開けたまま話に聞き入った。

唇が乾いてくると、ときどき思い出したようにぺろりとやって湿らせる。

リゲルの話は壮烈だった。

グーズとの戦いを語るときなど、アイシスは両手に力を入れすぎて、ついにしびれてしまったほどだ。

「それでね、俺もいがぐりもやられちまって、とてもじゃないけど敵わねえって、そう思ったときだったよ。

信じられないけどさ、突然グーズが炎に包まれたんだ」

ネットレトはやはりと心中うなずいた。

彼が聞きたいのはその先だった。  
しかしリグルの口から話されたのは、彼がまるで予想もしていなかった事実だった。

「なんだなんだと思っっているうちにグーズは消し炭になりやがった。そんな炎をさ、だれが操っていたと思う。」

子どもだったよ。本当に小さくてさ、細っこくて、足が真っ白の子ども」

「子ども？」

そんなまさか、とアイシスが呟く。

あの森にはたくさんの魔物がいたはずだ。そんな危険な場所に子どもがいるだなんて考えられない。

しかも、その子どもがグーズを倒してしまったなんて。

「俺も驚いたよ。でも事実だ。夢を見ていたんじゃない、だって俺はそのときのことをはっきりと覚えているからね。」

子どもは珍妙な格好をしていて、花を真似た被り物をしていた。それで顔はほとんど見えないんだ。

子どもなのか、おやじなのか分からない口調で話すやつでね、最後にやつは名乗ったんだ、リビィ＝ミビィと」

「リビィ＝ミビィ……!!」

ネットレトが驚いたような声を出した。

アイシスとリグルはその声に驚いた。

「なんだ、あんた知り合いかよ」

「いや」

ネトレトはわずかに動揺しているようだった。だっただらなんだよ、とリグルが追求する。

「リグル。きみはとんでもない人物に会ったな。彼は、リヒィ＝ミヒィは“最強の魔導師”だ」

話し手はそこでネトレトに代わった。

ほとんどが本で読んだ知識にすぎないが、とネトレトは言った。

「リヒィ＝ミヒィは超越種以外の精霊をすべて使役できるといいますなわち火、水、土、風だね。」

なかでも火の精霊サルマンにかけては秀逸で、彼は火の絶対者だ。

絶対者、という言葉聞くのは初めてだったかな」

アイシスとリグルはおとなしくうなずいた。

「火、水、土、風の精霊はそれぞれ大勢いる。人の数だけいるとも言われているが、それぞれの属性のなかで最も強い力を持つ精霊、

それが絶対種だ。その絶対種の使役者こそが絶対者、これでわかるか」

「じゃあ、火の絶対者は一番強いサルマンを使役できるっていうこと？」

「そういうことだ。そして彼の力は絶対者でありながら、超越者超越種を使役する、つまり私たちのことだが、それも凌ぐという」

「つまり、はんばないってことだね」とリグル。

「彼にまつわる伝説はいくつも残っている。あるときは街を救い、あるときは滅ぼす。

どこまでが真実なのか分からないが、その力の強大なことは推して測れるというものだ。ゆえに彼は最強の魔導師と呼ばれている。

しかし、まさか子どもの姿をしているとは。彼はね、リヒイ＝ミヒイは二千年近くを生きているんだよ」

ええっ、とアイシスはとんきょうな声をあげた。

リグルも細めていた目を見開き、ぱちぱちとまばたきしている。

「おい、ネットレト、いくらなんでもそれはねえよ。だって、どんなに長寿のエルフや魔族だって、生きて二百年だろうっ」

「ああ。だから私もはや伝説の話だと思っていた。

彼が初めて歴史に名を表したのは千八百年も昔、エルフによって

書かれた最初の書物によるんだ。

その書物にはリヒイ＝ミヒイを謳う歌が載せられているんだが、それが百年ほど前から歌い継がれてきたものだとも書かれている。

つまり、千九百年前、すでに彼は存在していたというわけだ」

「おいおい、うそだろ」

リゲルは片手で顔を覆った。信じられない事態に直面したときの彼の癖だ。

「うそか本当かは分からない。もしかすると、リヒイ＝ミヒイというのは号のようなもので、火の絶対者が代々継いでいくものなのかもしれない。

なにしろ彼には謎が多すぎるんだ。近年の記録には、彼の姿を見た者すらいなというんだから。なにかしらの事件を彼の仕業とするのは、働いた力の圧倒的な強さをもって推測するしかない、とね。

古い文献には彼の姿についての記述があっただが、どれもばらばらなんだ。

おそろしく大きな男だとか、獣のような毛に覆われた姿だとか。

しかしそういえば、妙な頭の形をした子ども、という記載もあったな」

「妙な頭、ってというのは、つまり被り物のことを指すと」

ネットレトはうなずいた。

「なにしろきみはとても貴重な体験をしたな。本を書けば学者がきみのもとに押し寄せるぞ。しかし、どうしてリビィ＝ミビィは私たちを助けてくれたのだろうか」

三人は首をひねったが、答えらしい答えを見つけることはできなかった。

翌日はまた通し稽古を行った。

リグルも見ていく、とアイシスは誘ったが、彼はマーニヤの街へと出かけていった。

帰ってくる、彼は嬉しそうにコートを掲げて見せた。

よほど寒かったのだろう。

黒一色のコートはリグルによく似合った。

アイシスもネットレトも準備は完璧だった。

あとは明日に迫った公演を待つばかりだ。

雑技団の野営地が珍しいのか、マーニヤの子どもたちが幾人が覗きにきている。

アイシスはテントの前に腰をおろしてそのようすを見ていた。自然と口元に笑みが浮かぶ。

そのとなりにリグルが腰をおろした。

「あれ。包帯取っちゃって平気なの」

「平気。あんなのまどろっこしいだけだった」

ネットレトは、トリグルが問う。

彼はアージエに追いまわされているはずだ。

そう答えると、リグルは愉快そうに笑った。

「アージエって、あの赤毛の子だろ。えらく別嬪じゃないか」

「うん。アージエは舞っているときもつときれいだよ。でも、ネットレトは苦手みたいだね」

「苦手、とはまた違うと思うけどな。あの子を見ると、きっと、思い出すんだらうよ」

アイシスは首をかしげた。リグルはにかつと笑うと、アイシスの頭をなでた。

「明日だろ、本番。楽しみにしてるよ」

アイシスもにっこり笑った。

しかしふと目に寂しげな色が浮かぶ。

「ラナは、まだ目を覚まさないかな」

「……………」



日がゆっくりと暮れていく。

次の日、朝から野営地はとんでもない騒ぎだった。

マーニヤ中の子どもという子ども全員が押し寄せたのではないかとアイシスは思った。

右を見ても左を見ても子ども、子ども子ども子どもである。

そしてそれを目で追い、なにかあったらすぐに駆け出さんと臨戦態勢で構える母親たち。

父親はのんきなもので、男同士集まってはなにか談笑している。

とにかくすごい賑わいだった。

「いまさらながら緊張してきたなあ」

用意された衣装に袖を通しながら、アイシスは情けない声を出した。

アイシスの服装はたくさん色に彩られており、全体的に丸々とした線をしている。

袖はきゅっと絞られており、全身鏡の前に立ってみると、いつか見た道化師そのもののように見えた。

「緊張することはない。普段どおりにやればいい」

対するネトレトはフリルのついた白のシャツに赤い革のベストと  
いういでたち。

さながら童話に出てくる、竜と戦う騎士のような姿だ。

似合うなあ、とアイシスは感嘆の声をもらした。

「きゃあ！ 素敵っ、想像にぴったりだわ！ さすがネトレトさま」

「着替え中だよ」

甲高い声をあげながらテントに飛びこんできたのは、もはやお決  
まり、アージエ嬢だ。

ネトレトは怒る気力もないようで、ゆるゆるとため息をついた。

彼には申し訳ないとおもいながら、アイシスは声を出して笑った。

「いきましよう。舞台が始まるわ」

アージエはぐいぐいとネトレトの腕を引っばる。

なかば引きずられるようにして彼はテントを出ていった。アイシ  
スもあとに続く。

客席にいるよ、トリグルは言った。前のほうの席を団長が用意し  
てくれたからね、と。

アイシスは舞台裏からちらりと客席をうかがった。

そして、見なければよかったと後悔する。

客席は大勢の人で埋まっていた。立ち見の客もいる。それでも入りきららないのか、外がなにやら騒がしい。

アイシスの緊張は高まった。

リグルの姿は見えなかった。

「さあ、いよいよ本番だよ。アイシスとネットレトのふたりと一緒に、最初で最後の舞台だ。」

あなたたち、すっかり楽しむんだよ。楽しまなきゃ、宿泊料を別に払ってもらうことになるよ。」

団長（アイシスが驚いたことに、それは例の鍋をうち叩くおぼさなんだ）が腰に手をあてて言う。

楽しむよ、とアイシスは答えた。

事実、心臓はもう元気よく飛び跳ねている。

心地よい緊張感。

わくわくを止めることはできそうにない。

ただひとつ残念なのは、客席にラナがないことだ、とアイシスは思った。

アイシスが上手に玉乗りするのを見れば、ラナはきつと喜ぶだろうに。

「よし、それじゃあいっておいでー！」

団長が手を打ち、同時に音楽が鳴り響いた。  
わっと観客が歓声をあげる。

楽しい舞台の始まりだ。

## 第二十三話：大曲芸会

### 『聖伝』第二十三話

アイシスはそわそわしていた。観客の興奮がうつってしまったようだ。

人が舞い、金楽器が鳴らされるたびに観客は喜び、どよめき、手を打った。

団長は舞台袖に立ち、

「いっておいで！」と出演者の尻を力強く叩いては送り出している。

出番が近づき、アイシスは団長の近くに並んだ。

団長がにやりと笑い、手をふりあげる。

「優しめをお願いっ」

団長は豪快に笑い（女版ハロルドだ、とアイシスは思った）、アイシスの尻をばしりとやった。

まるで手加減のない叩きっぷりに、アイシスの緊張は吹き飛んだ。

「お」

開演直前になってようやく客席にすべりこんだリグルは、小さく

囁いた。

「アイシスが出てくるぜ」

演目は先に聞いている。

アイシスは玉に乗るのだという。

舞台の上にはふたつの大きな玉が登場し、うちひとつには若い女が乗っていて、彼女はもうひとつの玉を長い棒でたくみに操っていた。

しかしアイシスの姿はない。

ばらばらと人影が走り出てきたが、その中にもやはりアイシスはいない。

走ってきた四人の団員らは一枚の布を手をしている。それぞれが隅を持ち、四方に広がって立つ。布は引っぱられてよく伸びた。

なにが始まるのかと観客の期待が高まる。

そのとき、舞台の袖から色鮮やかな衣装に身を包んだ少年が飛び出してきた。

アイシスだ。

リグルが歓声をあげる。

しかし彼の声は観客にかき消されてアイシスには届かなかった。

アイシスは両手と両足で交互に跳ね上がり、まるで水車のようにして舞台の中央へと進んだ。

観客が拍手を送る。

アイシスはひととき大きく跳ぶと、男たちが張る布の中央に跳び乗った。

「うわっ」

リグルの右の席からすつとんきょうな声が聞こえる。

それもそのはず、アイシスの体は高く宙へと浮き上がり、そのまま玉の上に着地してしまっただけだから。

さすがに玉は大きく揺れた。アイシスも揺れた。どこからか悲鳴があがる。

しかしアイシスは両手を広げ、全神経を集中させるとつりあいを取った。

背筋を伸ばし、手を高くあげる。

客席は割れんばかりの歓声に埋まった。

「やった」

アイシスは頬を上気させる。

相棒の女団員は、玉の上で均衡を取りながら親指を立てた。アイシスも親指を立てて笑みを返す。

アイシスは客席に視線を走らせた。  
大人も子どもも、みんないい表情をしている。

アイシスはリグルを見つけた。

リグルも親指を立てた。アイシスはうなずく。

リグルはそのまま、親指をくいと右に向けた。

アイシスはそれを視線で追う。

「  
ラナ」

そこに満面の笑みを浮かべる親友の姿をアイシスは見た。

ラナは包帯を巻いたままの腕を元気よくふった。

声は聞こえなかったが、すっかり色味を取り戻した唇が

「こけるなよ」と言うように動くのが見えた。

アイシスは最高の笑顔で答えた。

ふたりは見事に演目をこなした。

息を合わせて玉を操り、前後左右にすれ違ったり、競うように転がせたりした。

そして彼らは玉から飛び降り、玉を押し転がして手をふりながら舞台を降りていった。

観客は惜しめない賞賛の拍手を彼らに送った。



舞台は順調に進んだ。

ネトレトの出番は最後に近かったので、彼はテントの外にいた。演目を終えた八々が興奮気味の動物を檻に誘導している。

そのとき、草を踏みしめる音がして、ネトレトは声をかけられるよりわずかに早くふり返った。

アージエだった。

彼女の演目はもうすぐだというのに、ひどく沈痛な面持ちをしている。

「ネトレトさま

「ああ

「この公演が終わったら、雑技団を去ってしまうの？」

「ああ

アージエが顔をあげた。目に涙が光っている。

ネトレトは驚いた。

彼女のお熱っぷりは、一種の流行に似たものだと思っていたからだ。

しかし彼女は真剣だった。  
彼と離れたくないと、心から思っていた。

「もうすこしいられないの？ だって、あたしたちはまだ半月も一緒にいないんですよ」

「マーニヤにはしばらく滞在するが、そのあとはまた旅に出る」

「じゃあ、あたしも旅に連れて行ってください！」

ネトレトは静かに首をふった。

それはできないのだ。

アージエは雑技団の舞子だ。身を守る術などもっていようはずがない。

そんな彼女を連れていくことはできなかった。

彼女が危険な目に遭うことは必至である。

それに、彼らの旅は色恋沙汰を持ちこめるようなのんきなものではないのだ。

「だったら、あなたたちが雑技団にいればいいわ！ 旅の目的地はないでしょう。あたしたちも旅をしながら公演するんですもの、雑技団にいるのも、あなたたちが四人で旅をするのも同じでしょう」

しかしネトレトは首をふる。

アージエは知らないのだ。

「彼らがどれほど過酷な運命にあるかを。彼らの背後にはいつも危険が迫っていることを。」

彼らは危険とともに歩き、食事をし、そして眠っているのだ。

踊ることしか知らない十九の少女がそれを知る由もなかった。

「アージエ！ 出番よ！」

団員のひとりがアージエを呼んだ。

しかしアージエはうつむき、唇を噛んで動かない。

「アージエ」

ネトレトは落ち着いた声で言った。

「旅をしている者同士、また会う機会もあるかもしれない。そのほうが面白くはないか。明日に希望が持てはしないか。きみがそこまで言ってくれるのは嬉しいよ」

アージエは顔をあげた。両頬が濡れて光っている。

ネトレトはその涙を拭ってやりたく思ったがやめておいた。ときに優しさは相手を傷つけることになる。

「アージエったら！」

もう一度、すこし苛々したような声がアージエを呼ぶ。

アージエはなにも言わずに身を翻し、テントへと駆けていった。

ネトレトはゆっくりと息を吐き、彼もまたテントへと向かった。

客席は大盛り上がりだった。

ラナはアイシスの見せた玉乗りに興奮冷めやらず、といったよう  
すだ。

リグルはすこしうんざりしながら、しかし彼の騒ぐさまを邪魔立  
てはしなかった。

ふと、観客の興奮を誘っていた音楽が止んだ。  
静寂が逆に耳を射る。

そして颯爽とアージエが現れた。

その美しさに、観客は息をのむ。  
あれはネトレトの、トリグルは内心にやりとしたが、どうもよう  
すがおかしい。

彼女の心はひどく揺れているではないか。

どうも嫌な予感がする。

そう思ったのはリグルだけではなかったようで、ネトレトもまた、  
彼女を心配して舞台袖に控えていた。

アージエは黙々と演目をこなした。  
はつらつとした笑顔も輝いていた。

彼女は揺れる銀の輪に乗りながら観客に手をふった。  
観客は彼女の演技に酔いしれる。

揺れる速度が落ちてくると、アージエは舞台の中心に垂れる綱を  
手に取った。

規則正しかった振り子の動きが変わり、がくりとアージエの体が  
揺れる。

しかしアージエは慌てず綱をうまく絡めていく、はずだった。

「あっ」

演目の前にネットレトと交わした会話がいけなかった。  
彼女の頭は彼のことと埋めつくされており、手にうまく力が入ら  
なかったのだ。

一度掴んだ綱を手放してしまい、アージエを乗せた輪は不規則に  
揺れた。

そして最悪の事態が起こった。  
アージエはなんと、輪から手を離してしまったのだ。

小さな体が、なんの支えもなく落ちていく。

観客も団員も、動くことすらできなかった。

金縛りにあったように、アージエの赤毛が揺れるのを見ている。

しかしそのとき恐ろしい速さで舞台袖から飛び出てきたひとつの光があった。

アージエはこれまでと目をつぶっていたが、落ちてみればなんとも柔らかで心地すらいい衝撃ではないか。

痛みに頭もおかしくなったかしらと、ゆっくりと目を開ける。

「ネットレトさま……?」

光の正体はネットレトだった。

彼は際どいところで間に合ったのだ。

アージエの落下地点に足から滑りこんだネットレトは、彼女の軽い体を抱きとめ、そのままの勢いで反対側の舞台袖まで滑っていった。

団員たちはようやく夢から覚めたようで、困惑の声をあげながらふたりに走り寄った。

そのとき、静まり返っていた客席が、わっという歓声に包まれた。どうやら観客はいまの演技のひとつだと思ったようだった。

爆発的な拍手が聞こえる。

ネットレトはアージエをおろすと立ちあがった。

「ネットレトさま……」

団員のひとりが、彼女に大丈夫かとたずねる。

アージエはまだ頭がはつきりしていなかったようだが、その声を聞くと目を大きく見開いた。

「あたし、こんなことじゃいけないわ」

そして力強く立ちあがる。

「踊るわ、あたし」

団員の制止も聞かず、アージエは薄衣をなびかせながら舞台へと戻った。

観客の声援が彼女を包む。

音楽隊はどうすればいいのかと混乱していたようだったが、彼女の姿を認めると予定通りに舞の曲を奏ではじめた。

アージエは完璧に踊った。踊りながら泣いた。

いくつかの演目が続いた。

観客の興奮は、アージエの演目で最高潮にまで高められていた。

そのとき、ふとテント内の灯りがわずかな数を残して消えてしまった。

ほの暗い闇がテントを包む。

観客たちはなにかの手違いかとどよめいたが、そうではなかった。ネトレトの出番がやってきたのだ。

ネトレトは炎の剣を持って粛々と舞台の中央に進んだ。揺れる炎が、彫りの深い彼の横顔を妖しく照らし出す。

ネトレトは用意された杭の真ん中に立った。

剣を垂直に立てる。

観客が、ほうとため息をついた。炎の薄明かりに照らされて、ネトレトは非常に美しかった。

ネトレトが剣をふりはじめると、妖艶な美しさは壮絶な美しさへと変わった。

炎はあつというまに八本の杭に燃え移った。

彼の一闪一闪に観客は息をのむ。

燃え盛る炎の中心で、ネトレトは腕を高くふりあげた。小さな炎



が宙に舞う。

かと思つと、それはさらに細かな炎となつて闇に弾けとんだ。

「うわっ！　なんだ、いまの！」

ラナが驚きの声をあげた。まるで火薬が破裂したかのようなのである。炎が粉となつて散つていくさまは妖しくも幻想的だった。

ネトレトは効果的に間を置くと、今度は杭の炎にも斬つてかかった。

彼が向き合つた炎はどれも、一瞬の間をも置かずに粉となり、飛んでいく。

あつという間のできごとだった。

すべての炎を散らしてしまうと、ネトレトは剣を鞘に戻し、落ちて着いた足取りで舞台袖に消えていった。

観客はやや静まり、次の瞬間に割れんばかりの拍手を送った。

テント内に灯りが戻つても、しばらく拍手は止みそうになかった。

舞台は大成功に終わった。

すべての演目が終わると、登場順に出演者たちが舞台に登つて手をふった。

アイシスはラナとリグルに向けて大きく手をふった。ラナも大きくふり返す。

ネットレトはアージエとともに登場した。

アージエはネットレトの腕にしがみついている、リグルは「いいぞ！」と叫んだ。

ネットレトは苦りきった顔をしていたが、リグルの野次が聞こえたのだろうか、困ったようにすこし笑顔を見せた。

「いや、最高の気分だよ！」

団長が言った。

客席のほうでは、名残惜しそうな観客がゆっくりと会場をあとにしているところだ。

テントの外で、興奮冷めやらぬといった表情の団員たちが団長の言葉を待っている。

「みんな、よくやってくれた。あたしも舞台袖で魅入っちゃったよ。すばらしい出来だ」

ぱちぱちと拍手が起こった。

「アイシス、ネットレト！ ちょっとこっちにきな」

呼ばれてふたりは前が出る。

団長は彼らを団員らに向き直らせると、その肩を力強く叩いた。

「あなたたちのお蔭で、いままでにならないような最高の舞台ができたよ。」

あなたたちは本当によくやってくれた。宿泊料としては十分だ、釣りも出してやりたいくらいさ。

それから、ネットレト。うちの大切な娘を守ってくれてありがとう。本当に、感謝している」

すると、わっと声があがった。アージエだ。周りもはばかりらずに泣いている。

両手で涙を拭うのだが、まるで拭いきれる量ではなかった。

ぼろぼろと大粒の雫がこぼれ落ちる。

団長はやれやれといったふうには笑うと、アージエにも前にくるように言った。

「ほら、アージエ。あなたからもお礼を言っただよ」

アージエは更に大きくわっと泣くと、がむしゃらにネットレトの首に抱きついた。

ネットレトは慌て、どうしていいかわからない。

どっと団員たちがふたりを離した。

団長が嬉しそくに笑い、ネットレトの手を掴むとアージエの背に回させた。

「いまだけはこうしてやんな」

ネットレトは困ったようだったが、胸元でしゃくりあげる小さな赤い頭を、ぎこちなくなでてやるのだった。

「今日一番の拍手は、アージエ、ネットレト、あんたたちのものだよ」

そして団長は鍋を取り出し、かんかんとうち鳴らした。

「ほら、息子ども、娘ども！ 片づけだよ！」

おうつ、と声があがる。

団員たちの笑顔はどれもみな輝いていた。泣いている者もいる。アイシスもちよっぴり泣きたくなった。

必死にこらえて顔を真っ赤にしていると、団長に頭をわしわしとなでられた。

「あんたも“花移り座”の息子だからね。また会おう、いつだって歓迎するよ」

アイシスは結局声を出して泣いてしまった。

観客席にいたラナとリゲルが合流した。

アイシスはラナに飛びつき、ラナは涙まみれのアイシスの顔を見て笑った（「ぶっさいくな面！」）。

四人は団長に何度もお礼を言った。

ラナとリゲルは医者にもお礼を言おうとどこかへ走っていった。まいった。

団員らが片づけに動き回っているのを見ながら、団長は言った。

「あなたたちがいなくなると寂しくなるよ。せつかく馴染んできたところだったのにねえ、アイシス？」

「うん。明日から団長さんが叩く鍋の音で朝が迎えられないんだって思うと、とても寂しいよ」

言うねえ、と団長は笑った。

「あなたたちは、本当に不思議な魅力をもった男たちだね。あなたなんて、アージェの婿になっちまえばいいのにさ」

「それは」

ネトレトは苦りきって答えた。

団長はにっこりほほ笑んだ。

「あなた、ずいぶんいい顔をするようになったね。え？ 笑うってことは、感情を顔に出すってことは、ずいぶんと気持ちのいいことじゃないかい」

それから三人は握手を交わした。

別れ際に、団長はこんなことを言った。

「そついや、あんたたち剣比べって知ってるかい。剣の腕を競い合う大会でね、毎年この時期マーニヤの風物詩なんだ。

アイシスのほうは知らないけどさ、ネットレト、あんたの剣技はすごいじゃないか。一度、出てみたらどうだい。もしも優勝なんてしちまったら、たんまりと賞金がもらえるよ」

「剣比べ」

アイシスとネットレトは顔を見合わせた。

なんともまあ、面白そうな響きではないか。

## 第二十四話・見えてくる真実

### 『聖伝』第二十四話

「うわっ、広い街だなあ」

マーニヤの街は貿易の中継点のひとつである。多くの商人が行き来するため物流が盛んで、そうなると当然人も集まる。

大通りは馬車が四台は並べられようという広さだ。

ラナは素直に感嘆の声をあげた。

野営地で最後の夜をすごしたあと、四人はマーニヤに入った。

アージエがその端正な顔をひどく歪めて泣いていたさまをアイシスは思い出した。

一行との別れの宴でも、彼女はずっと泣いていた。そしてネットレトから離れようとしなかった。

ラナが興味津々にうかがい、リグルが茶々をいれるので、ネットレトはすっかり仏頂面だった。

「あ、飯！」

ラナが嬉しそうな声をあげた。

「ええ、もうお腹空いたの？ 昨日あれだけ食べたじゃない」

「ばか言え、俺は何日眠っていたかと思っっているんだ。どれだけ飯を食い逃したか計算もできねえや」

それくらい数えりやわかるだろ、とリグルが呆れた声を出す。

とにかく、目を覚ましたラナの食欲と叫びたならなかった。

仕方ない、彼は眠っているあいだ、申し訳ばかりに流しこまれるスープをしか口にしていなかったのだから。

早い朝ごはんをとっていると（ラナは三人分の食事を注文した）、ふとネットレトが眉をあげた。

彼の視線のさきには一枚の貼り紙。

リグルはその先を目で追い、そこに書かれた文字を読みあげた。

「 剣比べ開催 ” ? なんだそりゃ 」

そこでアイシスは団長に聞いた話を伝えた。

剣比べとは、文字通り剣の腕を競い合う大会で、毎年この時期にマーニヤで行われているということ、そして優勝者には賞金が渡されるということ。



リグルはあごに手をあてて聞いていたが、アイシスが話し終わるとぽんと手を打った。

「そりゃあ、出ないわけにはいかないね」

「リグルはだめだよ。まだ怪我が治っちゃいないんだから」

「それに、おまえごとくもすぐに出てもすぐに負けるって」

横からラナが軽口を挟む。

リグルは横目でちらりと彼をみたが、ふいと視線をそらすと鼻で笑った。

「あれ？ だれだったかな。その“ごとき”に蹴られて顔面鼻血だらけになったばか者は」

「この野郎！」

音を鳴らして椅子から立ちあがるラナを、アイシスが慌てて押し止める。リグルに口で敵うはずがないのだ。

まあまあ、となだめると、ラナはふてくされながらも食事に戻った。

「俺は出るよ。面白そうじゃない。祭りには参加するのが俺の主義でね。アイシスはどうなの」

「え、ぼく？　ぼくはいいよ。だって、ぼくこそすぐに負けちゃうから」

「いいんじゃないか」

ニンジンをわきにどけながら、ネトレトが言った。

「出れば。出場者は腕に覚えのある者ばかりだろう、いい経験になる」

「でも」

「実戦の前に、こういった試合で戦い慣れておくことは大切だ。それに、黒の騎士団は強いぞ。そこらの傭兵と大差ない」

アイシスの表情が険しくなった。

黒の騎士団。

数日前に襲われたとき、アイシスは彼らに太刀打ちできなかった。ネトレトの助けがなければどうなっていたことか。

「わかった。ぼく、やってみる」

「なに？　じゃあ俺も！」

「ラナはだめだってば。左腕、まだ動かしちゃだめなんでしょう」

「動かさなきゃいい話だ」

結局、ラナは主張を変えなかった。

食事を終えてしまうと、彼らは貼り紙に書かれてあったとおり、受付をすませるために役所へと向かった。

役所には大勢の人がいた。

どれも屈強な体つきをした、強面ぞろいである。

アイシスはすっかり怖気づき、ラナの服の裾を引っぱった。

「ねえ、みんな怖い顔ばかりだよ」

「あっちのお兄さんのほうがよっぽど怖いぞ」

ラナが指さしているのはリグルだった。

リグルは唇の右端だけをつりあげ、下から覗きこむようにしてラナを睨みつけた。

「な、なんだよ」

「いやあ」リグルは目を細める。

「おまえ、よっぽど俺のこと好きだね」

「なっ」

ラナの怒声が役所に響く。

ネトレトはため息をつきながら、係員の指示どおり書類に記入した。

「あなたも剣比べに出るの？」

声をかけられたのはそんな時だった。

ネトレトは顔をあげる。そこには見知った顔が立っていた。

「アージエ」

「えへへ、やっぱりここにいた」

ネトレトは少なからず驚いた声を出した。

剣比べが開催されているあいだ、雑技団もマーニャに滞在することになった、と彼女は説明した。移動続きだった団員の疲れを癒すために、団長が特別に提案したのだ、と。

アージエの姿に役所内はざわついた。  
なにしろ彼女の赤毛は目立つ。

雑技団の舞子じゃないか、とだれかが言ったのを皮切りに、屈強

な男たちがどつと彼女のもとに押し寄せた。

「ちよ、ちよつと」

「いや、見たぜ、昨日の公演！」

「ありやすごかったよなあ」

アージエを囲む男たちの輪から、ネットレトはそそくさと逃げ出した。

それを見つけてアージエが叫ぶ。

しかしネットレトはお構いなしだった。書類を提出し、受付のはんこをもらつた。

それではどうぞ、と渡された四枚の紙には、それぞれアイシスたちの名前と、出場する組名が書かれていた。

「健闘を祈ります」

「どうも」

四人は揃って役所をあとにし、今度は置いてきぼりをくらったアージエの怒声が響くのだった。

「賞金は金貨五十枚か。これはすげえな」

業物も買えるぜ、トリグルが言う。

リグルとネットレトは宿の一室にいた。

ネットレトが稼いだ金も少なくなり、部屋をふたつ以上とる余裕がなかったのだ。

剣比べの開催は五日後で、マーニヤにはそれまで滞在していなければならぬ。

アイシスとラナが同室になるのは当然の流れで、リグルも否やを唱えなかった。

「ネットレトはどの組にでるの」

「緑」

ふうん、とリグルは言った。

「俺は白だ。あっちのふたりはどうなのかね」

そのふたりはというと、こちらもとなりの部屋で組の確認をし合っていた。

「俺は赤だ。アイシスは」

「ぼくは黄色。じゃあ、決勝にまでいかない限りはあたらないな」

「そつだな」

受付でもらった紙の説明によると、どうやら参加者たちは赤、白、

黄、緑の四組に分けられて、そこで勝ちあがった者同士がそれぞれ戦うようになっていっているらしい。

なにしろ参加希望者が多いのだ。

金貨といったら、一枚で銀貨三十枚の価値になる。

一般市民が一度にこれだけの大金を手に入れられる機会など、まず見当たらないだろう。

説明では、赤と白、それから黄と緑の優勝者らでまず準決勝を戦い、その勝者らによって決勝戦が行われるという。

昼ごはんの席で四人はそれぞれの組を知り、そしてアイシスは嫌そうな声をあげるのだった。

順当にいけば、まずネットレトと戦うのはアイシスということになる。

対するラナとリグルは嬉しそうだった。

「公衆の面前で鼻血を出させるのはしのびないね、なんちゃって」

「ほざけ。返り討ちにしてやる」

すでに戦いは始まっているかのようだった。

アイシスは苦笑いするしかなかった。

剣比べまでの五日間を、四人はそれぞれ自由にすごした。

ネトレトは相も変わらずの図書館通い、残る三人はマーニヤの観光である。

一緒に歩くときもあれば、それぞれ別に動くときもあった。

ときどきアージェエやハタも彼らに加わった。

アージェエは行く先々で人々の注目を集めた。

「ネトレトさまったら、今日もまた図書館？ つまらないの」

「それで、なんでおまえがここにいるんだよ」

ラナはため息をついた。

アージェエは我がもの顔でソファに座り、くつろいでいる。

「だって、暇なんだもの。雨だし」

「だったら野営地で雑技団のやつらと遊んでるっての」

「あら酷い。あなただって、アイシスがいなくて寂しいくせに」

図星だった。ラナはぐつと言葉を詰まらせた。

アイシスはネトレトについて図書館にいつている。

宿の部屋はわりと広く、ひとりですごすには事実味気ないと思っ  
ていたのだ。



「ねえ、ネットレトさまは図書館でなにを調べているの」

「さあな」

教えてくれたっていいじゃない、と言ってアージエはクッションを投げつけた。

ラナはわけもなくそれを避け、雨が窓を叩くさまを見た。

教えたくても、知らないのだから仕方ない。

ネットレトはすこしずつ変わっている、とラナは思っていた。ほんのすこし、心を開いてくれたような。

しかしやはり彼の秘密主義は変わらなかった。

彼は自分のことについて、まるでなにも話そうとしないのだ。

「あれ」

そしてラナはふと気づいた。もうひとりの秘密主義者がいることに。

となりの部屋で、あの口の悪い男はなにをしているのだろう。

思い返せば、リグルが自分のことを語ったことなんてあったらどうか。

ネットレトが部屋に戻ると、リグルは小さな短剣をもてあそんでいた。

「おかえり」

「ああ」ネットレトはすこし言いよどんでから「ただいま」

こんな挨拶を返したのはいつ以来だろうか。ネットレトはすこし気恥ずかしかった。

ネットレトはコートを外套かけに吊るした。

リグルの短剣に目をやる。

細かな装飾が施されていて、美しい。小さいながらも存在感が十分といった感じだ。

視線を感じたのか、リグルは短剣をちらりと持ちあげてみせる。

「買ったんだ。もらった小遣いを貯めてさ」

「貯めてって、それは昼食分だろう」

「趣味なんだ」

「やれやれ、とネットレトは呆れた。

いつだったか、彼が過去に買い集めた短剣やタガールの類を見せて

もらったことがある。

しかし、いくら短剣を集めるのが趣味とはいえ、昼ごはんを我慢  
までするとは。

そういえば、リグルはどことなく顔色が悪いように思える。

「武具集めもいいが、体調を崩すぞ」

「平気だよ、ちょっとぐらい」

リグルは短剣の刃をそつとなでた。

白く輝く刃には指のあとすら残らない。

沈黙が続いた。

雨だけがさらさらと静かに音をたてている。

ふと、リグルが口を開いた。

「ねえ」

ネトレトは静かに視線を向ける。

リグルは彼のほうを向いてはおらず、やはり短剣を眺めていた。  
切っ先に白い指を添えている。

力の加減を誤ったのか、添えた指先から赤い血が流れた。  
ネトレトは眉間にしわを寄せる。

「俺さ」

リグルは血が流れたことにはまるで関心がないようだった。

リグルの漆黒の目がネトレトを捉える。

「“視”ちまっただ。あなたの過去」

ネトレトは眉をあげた。

リグルは真剣な顔つきをしている。すこし、その顔は痛々しげでもあった。

ネトレトは言葉もない。

そしてリグルはゆっくりと口を開く。

「俺もね。あなたと同じなんだ。俺も、自分の母親を殺した」

さらさらと、雨の音が聞こえた。さらさら、さらさらと。

「腹減ったなあ」

「また？」

アイシスは呆れた声を出した。図書館から帰ってくるなりこうだ。

ラナは眉をしかめ、大きな手で腹回りをさすった。

「素直なんだよ。俺の腹は」

まるでそれに答えるかのように、ラナの腹の虫が鳴いた。  
アイシスは笑い声をあげる。

「あたしもお腹すいたなあ」

「はあ？ おまえ、ここで食っていく気？」

当然、というようにアージェはうなずいた。今度はラナが呆れた  
声を出す。

「おまえな。いくらネットレトが好きとはいえ、ここまでつきまとう  
とあれだぞ、変質者」

「失敬ね！」

叫ぶなりアージェはクッションを投げる。

実はこのクッション、空を飛ぶのは本日六度目である。

しかしラナはそれをすべて避け、クッションはまた壁にぶつかっ  
て落ちた。

いそいそとそれを拾いあげ、アージェは七度目に備える。

「恋する乙女は強いのだよ」

「はは、とアイシスは笑った。

そしてふたりを促し、食堂へいこうと誘った。

三人は連れだってとなりの部屋のドアを叩いた。しかし返事がない。

図書館からは一緒に帰ってきたのだから、リグルはおらずともネトレットは確実にいるはずだ。

「ネトレット？」

アイシスはもう一度ドアを叩いた。

三人が顔を見合わせていると、ドアが開いた。リグルだ。

「あれ、アージエもいんの」

「こんばんはあ」

アージエはにつこり笑うとひらひらと手をふった。

「まあいいや、とリグルは言う。

「俺ら、ちょっと用事があるからさ。先に食べててよ。はい、金」

リグルはアイシスに六枚の銀貨を渡した。

そして三人がなにも言わないうちに、またドアを閉めてしまった。

三人はまた顔を見合わせた。

「仕方ないな。先に食うか」

えーっ、と声をあげたのはアージェだ。

「ネットレトさまは？」

「用事があるって言うていたろ。ほれ、いくぞ」

ラナはアージェの腕を取り、ぐいぐいと引っばって行ってしまった。

ラナは感じていたのだ。

いつも余裕ついたらしい笑みを浮かべているリゲルが、さきほどはすこし強張った笑顔でいたことを。

## 第二十五話：血の争い

### 『聖伝』第二十五話

部屋の空気はかつてないほどに重く苦しかった。

濡れた窓の外では、煌々と月が照っているのに。

部屋の中だけまるで異次元のような雰囲気さえあった。

すこし前に灯りをもって宿の者が入ってきたが、異様な沈黙に怖気づき、一言もしゃべらずに仕事をすませるとさっさと出ていってしまった。

口を開いたのはネットレトだった。

「訳を、教えてもらおうか」

リグルは重々しくうなずいた。

そして森での出来事をすべて話した。

森の大樹に惑わされ、意識を失ったネットレトを運ぼうとし、その腕を掴んだときに“視”えてしまったのだと。

そのつもりはなかったが、無防備になった心は自然と自分に話しかけたのだと。



ネットレトは一言も口を挟まずにそれを聞いていた。

「そのとき見えた光景は、きっとあんたが木に見せさせられているものと同じだって、あんたの過去だって、すぐにわかった。泣き叫ぶ少年はあんたにそっくりだったからな」

「そうか」

ネットレトは深く息を吐き出した。眉根を寄せ、目を閉じている。彼は左手で目を覆い、膝にひじをついた。

リグルはそんな彼のようすをじっと見ていた。

言って、よかったのだろうか。

ふとネットレトが顔をあげた。

「きみの父親は、ずいぶんと優秀な悟りだったようだな」

「気づいていたのか」

今度はリグルが言葉を失う番だった。

アイシスやラナがこの場にいれば、きっと首をひねったに違いない。

ネットレトはうなずいた。

「きみの目は黒いが、ときどき紫に揺れて見える。紫の瞳は魔族の証だ。」

最初から気づいていた。きみが　半魔だと」

知っていて同行を許したのか、トリグルは掠れた声で言った。

半魔。その存在はあまり世間に知られていない。

なぜなら、彼らのほとんどが大人になるのを待たずして消滅、もしくは死んでしまうからだ。

半魔とは片親が魔族の者のことを指す。

大概の場合は魔族の父親と、人間の母親をもつことになる。

成長するにつれ、半魔の中を流れる魔族の血と人間の血は争いを起こす。

大抵の場合、勝つのは魔族の血だ。そして半魔は完全なる魔族となる。

まれに完全な人間となる半魔もいるが、とにかく消滅とはこういうことだ。

そして血の争いに決着がつかない場合、ほとんどの半魔は死んでしまうのだ。

「私は過去に、半魔の女性に会ったから。偏見はない」

「そっか。それはありがたいな」

リグルは乾いた笑い声をあげた。

彼はネトレトのとなりのソファに腰をおろした。  
片手で顔全体を覆う。

「なあ。また俺の昔語り、聞いてくれる」

ネトレトは静かにうなずいた。

月は雨雲に隠れてしまったらしい。

薄っぺらな窓に、ネトレトとリグルの姿がぼんやりと映し出された。

あんたが言うように、俺の親父は悟りだ、とリグルは言った。

親父はけっこうな力をもった魔族で、地位もそこそこ高かった。  
あんたは知っているだろうけど、力のある魔族は人の姿を擬すことが  
ができる。

親父はね、けっこういい男だったんだよ。俺が言うのもなんだけど  
ね、あはは。

人の姿を持つ魔族は、魔物とはまるで違う。

豊かな感情に高い知性、煩惱だつてある。もちろん、恋もする。

魔族はさ、みんながみんな人を喰らうってわけじゃないんだぜ。

魔物は別としてさ。

親父はどうしてもって時以外はだれも傷つけなかった。

そしておふくろに出会った。森で遭難したおふくろにね。

ふたりは恋に落ちたんだ。種族なんて関係なくね。そして俺が生まれた。

半魔はすぐに死ぬっていわれてるらしいけど、俺はなぜだか、なかなか死ななかつたんだ。だが、じきに血の争いが始まるだろうってね。

おふくろはそんな俺を不憫に思ったんだろう、せめて死ぬまでに少しでも多くものを見せてやりたいって言ってね、親父のもとを離れて旅に出たんだ。

親父はそれを止めなかったよ。

力は力を、魔は魔を呼ぶからね。親父の近くにいちや、俺の中を流れる魔族の血が、必要以上に騒ぎ出すんじゃないかって、そう考えたんだね。

いつそずっと近くにいて、俺を魔族にしてしまえばよかったのに、親父はそれをしなかった。

おふくろと旅をするのは楽しかったよ。もちろん、辛いこともあったけどね。

なにしろ女と子どもの旅だ、危険は喜んで寄ってくる。でも、力を合わせてなんとか全部乗り切った。

そうして俺は、たくさんの美しい花や、木や、動物なんかを見せ

てもらったんだ。

俺は嬉しかった。なにより、おふくろのその気持ちかさ。

でも、悲劇は起こるべくして起こるんだ。

十年前、俺が十一のとき、ついに血の争いが始まったんだ。

一気にそこまで話し終えると、リグルは大きくため息をついた。背中を折り曲げ、足の間顔に顔を沈めてしまう。両手で長い黒髪をかきむしった。

「血の争いってというのはね、言ってみりや精神の戦いみたいなもんでさ。

やっぱり、魔族の血って残忍性が高いんだよ。血を見ると心が浮きたつんだ。それに対抗する人間の血はさ、やっぱり善行をよしとするんだよ。

理性と本能の争いみたいなもんだ。血が見たい、いやそれは道徳に背く、ってね。

ひと月近く、俺は狂ったように暴れ、苦しんだ。自分で自分の肉を食い破ってね。

おふくろは俺のようすがおかしくなってますぐに山奥の小屋へと連れていってくれたからね、他人に危害は加えていないはずだよ。でも、気づいたら俺の両手は血に染まっていた。

他人には危害を加えなかった。

「でもね、俺は引き換えにおふくろを殺しちゃったんだ」

リゲルの声は震えていた。平常の彼のようすとはまるで違う。

彼の姿は小さく、弱々しかった。

感情をすべて顕わにし、強がることもなく、素直な言葉が流れ出るに任せている。

ネトレトは彼の曲げられた背中を見た。浮き出た背骨も肩甲骨も震えて見える。

「あれほど見たいと望んでいた血だよ。だけど、そうと気づいた瞬間、俺は胃の中のを全部ぶちまけた。といっても、一ヶ月近くなにも口にしていなかったからね。出るのは酸っぱい胃液ばかりだったよ。」

そして血の争いは終わった。

笑えるよね、それを終わらせたのはおふくろの血なんだよ。おふくろの血が、負けかけていた人間の心を奮い立たせたんだ。

人間としてただひとり、半端な俺の存在を認めてくれて、愛してくれたおふくろの、さ。

そうして　　すぐに死ぬると思ったのにね　　俺はいまもまだ生きています。

「まだ、生きてるんだ」

音もなく立ちあがったネトレトが、震えるリゲルをそっと抱きしめた。

リゲルははっと顔から手を離した。

「こうすれば、顔は見えないから」

ネトレトは静かに言った。リゲルの目が見開かれる。

揺れる紫の瞳から、大粒の涙がこぼれ落ちた。

リゲルは顔をしわくちやにして泣いた。

ずっと堪えていた感情に、獣のような声で唸りながら泣いた。

ネトレトはなにも言わなかった。なにも言わずに、震えるリゲルの頭をただ優しくなでた。

リゲルが泣き止み、真っ赤に腫らした顔をすこし恥ずかしそうに上げるまで、ずっと。

「食った食った」

ラナは満足げに腹を打った。ぼん、と小気味よい音がする。

「食べすぎよ。そんなだったら太るわよ」

「動くからいいの」

ラナは口を尖らせた。

三人はゆっくり食事をとったのだが、しかしネットレトもリグルも降りてはこなかった。

すっかり時間も遅い。

食堂には、気づけば彼ら以外に客がいなかった。

どうも気まずい。三人は話し合ってもなく立ちあがった。

「ほら、おまえはもう帰れ」

「えーっ、ネットレトさまに会いたいっ」

「わがまま言うなって。どうせ明日の剣比べで会えるだろ」

えーっ、とアージエは抗議する。

しかしラナは聞かなかった。宿を出て、なかば強引に彼女を野営地に送る。

道すがら、アージエはいろいろな話をした。

団長は女だてらに腕っ節が強く、一度なんかは興奮して暴れ出した熊を気絶させたこともあるとか、“花移り座”には、幼いころ両親に売られてやってきたとか、そういったことを一点の曇りもない明るい声で。

「ネットレトさまはね、父さんに似ているの」



アージエはそう言って笑った。

「父さんの顔なんてほとんど覚えていないのにね、初めてネットレトさまを見たとき思ったの。この人、絶対父さんに似てる！って。まさか、父さんがあんなに格好いいわけないけどね。」

なんだろう、あの表情かな。いつも、どこか寂しげな」

すこし前を歩いていたアージエは、くるりとふたりに向き直った。

「ここでいいわ、ありがとう」

「ああ」とラナ。「変質者とか言って、その、悪かったな」

アージエはにっこりと笑った。

そしてふたりに拳を突き出すと、元気な声で言った。

「明日、がんばりなさいよ！ 一回戦で負けたりなんかしたら、大声で笑ってやるんだから！」

言ってる、とラナが軽口で返す。

アージエは笑いながら野営地に向かって走っていった。ひとつにまとめられた赤毛が揺れる。

アイシスはラナのわき腹を小突いた。  
なんだよ、とラナは言う。

「素直に謝れるようになっただねえ」

「ばか。俺はいつも素直だったの」

そう言つとラナは向きを転じ、さつさとマーニヤの街へと戻っていった。

アイシスは声をあげて笑い、アージエの背中に手をふるると、ラナのあとを追って走った。

宿に戻ると、アイシスたちはもう一度となりの部屋を訪ねた。今度はネットレトが出た。

「じはんは食べたの？」

アイシスが聞くと、ネットレトは首をふった。「もう、眠ってしまったからね」

「大丈夫なの？」

「ああ」

アイシスはネットレトに釣りを渡した。

やはりラナは二人前を食べたので、余ったのはわずかに銅貨が四枚だけだった。

「明日は剣比べだからな。今日はきみたちももうおやすみ」

「うん、わかった」

「楽しみだなあ」

おやすみ、と挨拶を交わし、アイシスとラナは部屋に戻った。

雨はもうすっかりあがっている。

アイシスは窓際に立って空を見あげた。

アージエを送ったときには見えなかった月が、いまはすっかり姿を現している。分厚い雨雲は切れ切れになって流れていってしまっ  
たらしい。

「明日は晴れるかな」

しかしアイシスの問いに返事はなかった。

ふり返ればベッドに大の字になってラナは眠っている。

まったく、まるで王さまだ。

アイシスは苦笑すると、布団をそつとラナにかけてやった。

翌朝、マーニヤは熱気に包まれていた。一年で最も街が賑やかに  
なるときがきたのだ。

剣比べの第一日目がついに幕を開ける。

「くう、緊張して飯が喉を通らねえ」

「ばかか。しっかり一人前食べてから」

リグルが鼻を鳴らす。

「そう言うおまえは全然食べていないじゃねえか。なんだか目も赤いし、どうせ緊張で眠れなかつたんだろっ」

「だれかのいびきが、ばかみたいに大きくてね。壁を通してまで聞こえてくるから、それで眠れなかつたんだ」

ラナはきょとんとした。そうなのか、という顔である。

ラナは嫌味に気づいていない。

自分がいびきをかいていることすら知っているかどうか。

「アイシスは大変だね、同じ部屋でさ。昨日は寝れたかい」

「ぼくは慣れているから」

苦笑するアイシスと、いじわるな笑みを浮かべるリグルとをラナは交互に見ていたが、やがてすっとなきような声をあげた。

「え、俺のことだったの？」

役所でもらった紙を持ち、四人は剣比べの会場へと向かった。紙には簡単な地図が描かれていて、街の中心部に大きく丸で印がつけられている。

そうして四人が到着したのは大きな広場で、どうやら普段は露店がずらりと並んでいるらしい。

百近い露店が建ち並ぶさまはマーニヤ有数の観光地だったが、このときばかりは露店も店をたたんでしまっている。

受付で紙を渡すと、引き換えにそれぞれの組の色をした布を手渡された。

それを右腕に巻くのだという。

アイシスはざっと視線を巡らせ、黄色の布を巻いた人たちを見つけては観察した。

そのうちの一人などは髪をすっかり剃りあげてしまっており、みるからに恐ろしい顔つきをしているではないか。

彼と当たりませんように、とアイシスは心中で強く願った。

広場には四つの舞台が建てられていた。

それぞれを覆うテントなどはないので、観客は見ようと思えば四つの試合を同時に見られるわけだ。

しばらく一行は物珍しげに会場を歩き回ったが、出場者はそれぞれの舞台に集まるようにと大きく触れ回る声が聞こえ、では健闘を、とうなずきあって四人はそれぞれに別れた。

ネトレトはうかがうような視線をリグルに向けた。  
リグルは聴くもそれに気づくと、にやりといつものように笑って  
見せた。

アイシスの心臓は大きく音をたてて跳ねた。

あまりに大きく跳ねるので、その音が聞こえやしないかとアイシ  
スは胸に手を当て、周りをうかがった。

当然、聞こえているはずがない。

だれかがアイシスの鼓動に気づく代わりに、アイシスは例のきれ  
いに剃られた頭の男を見つけた。  
げ、と顔がゆがむ。

「それでは対戦相手を発表します。受付でお配りした布をご覧ください  
さい、数字が書かれているはずですよ」

アイシスは布を見た。なるほど、小さく数字が見える。

アイシスの番号は十六だった。

「順に番号を言いますので、呼ばれた方から前においでください。  
それでは一の方」

係りの男はてきぱきと数字を読みあげていく。

二の方、はい、三の方、はい。

数字が大きくなるにつれてアイシスの鼓動が高まる。  
気持ちを落ち着けようと目を閉じ、アイシスはかかとをそろえて  
とんとんと地面を打った。

「十六の方」

「はいっ」

アイシスは目を開け、しまった、と口に手を当てた。

男たちはそろってアイシスにふり向き、あちこちで失笑がもれる。

「元気のいい返事をありがとうございます。こちらへどうぞ」

男たちはどつと声をあげて笑った。

アイシスは顔を真っ赤にして前に進んだ。

係りに誘導された位置に立ち、十六の数字を引き当てたもうひとり  
はだれかと顔をあげる。

「おや。こんなお嬢さんも参加するとはねえ」

真っ赤だったアイシスの顔が真っ青になった。

アイシスのとなりに立ったのは、あの恐ろしい顔の男だったのだ。

「よろしく、お嬢さん」

アイシスは怒ることでもできなかった。  
笑っていた男たちは、哀れみの目でアイシスを見た。



## 第二十六話：剣比べ！

### 『聖伝』第二十六話

「いいですか。出場者の皆さんには、まず黒のローブに着替えていただきます。四組分しかありませんから、順に着替えていただくこととなります。」

そして、使っていたのはこちら、木製の剣になります。全面に白い粉をまぶしてありますので、これが触ればローブには白い線が付きまます。この線を先に三本つけられた方が負け、つけた方が勝ちになります。よろしいですか」

係りの男は声を大にして説明したが、果たしてアイシスは全部きちんと聞けたのだろうか。

アイシスは丸刈りの対戦相手にすっかり気をのまれてしまっていた。握った拳が震える。

やってみる、だなんて安易に答えるんじゃないかと、とアイシスは後悔した。

しかしあとの祭りとはこのことだ。もうどうすることもできない。アイシスはくじ運の悪さを呪った。

説明がすんでしまうと、さっそく試合が始まった。

しかしアイシスはそれに目をくれようともしなかった。

頭の中で、アイシスは強面の男にいやというほど痛めつけられていた。

彼の想像の中では、男は恐ろしく力が強いうえに動きも素早く、アイシスはまるでついていけないのだった。

恐れることはない。

アイシスははっとした。いま、たしかにユフィロスレジアの声が聞こえた。

そう思うと、今度はしゃらんと彼女の腕輪がこすれる音がした。

アイシスはほっと息をつく。

恐怖が完全に拭かれたわけではないが、ユフィロスレジアの声はアイシスを大いに勇気づけた。

アイシスは思った。

ぼくはユフィロスレジアに認められたんだ、彼女はぼくに名前を教えてくださいましたぞ。

彼女のためにも、こんなことではいけないじゃないか。

「お嬢さん、そろそろ着替えにいくぜ」

肩をつかまれ、ふり返ると対戦相手の男が立っていた。

完全な恐怖から覚めると、すっかりアイシスを女だと思いこんでいるらしい男にむくむくと怒りが湧きあがってきた。

しかしアイシスはにっこりと笑った。  
まずは言葉より、態度で示してやるうというのだ。

係りに渡されるロープはどれも大きく、アイシスはがっかりした。  
アイシスは、その年頃の少年にしては、ずいぶんと背が低いのだ。

やむを得ず一番小さなロープを選ぶと、裾や袖を動きやすいように紐で縛った。

アイシスと丸刈りの男は木の剣を手渡され、最後の説明を受けた。

「故意に顔を狙うなど、卑劣な行為をしてはいけません。過去にひとりでしたが、股間を蹴りあげるなんて絶対にいけませんよ。徒手空拳での突きや蹴りも違反です。この大会は剣の腕を競うものだから」

アイシスと男がうなずくを見ると、係りはふたりに握手するよ  
うに言った。

正々堂々と戦うことをそうして誓わせるのだ。

「棄権するならいまだせ、お嬢さん」

「まさか」

アイシスはむっとし、できれば握った手に思い切り力をこめてやりたかったが、そうしてしまうと逆に握りつぶされてしまいそうな

気がしたのでやめておいた。

「それでは十六組目の登場です。ゴードン・ストロング対、アイス・ローズクランツ！」

「さあいつて！」

背中を押され、まるぶようにしてアイシスは舞台に駆けあがった。

丸刈り、もといゴードンはすでに舞台で待っている。

観客の中には、アイシスの姿を見て悲鳴をあげる者すらいた。立派な体格をしたゴードンの対戦相手に、アイシスはあまりに不釣り合いに見えたのだろう。

しかしアイシスはもう動じなかった。

心臓はやはり飛び跳ねていたが、彼には最強の精霊がついている。ゴードンは、その美しさを見たことすらないのだ。

「試合、開始！」

わっという喚声がアイシスを包んだ。

「大人しくしてな。優しくしてやるぜ」

アイシスは思い切り舌を出してやった。彼なりの、精一杯の抗議と挑発だった。

ゴードンは安易にもこれに乗った。きれいに刈られた頭に、うっすらと血管が浮かびあがる。

「後悔するなよ！」

「そっちが！」

ゴードンは剣を両手でつかんで喚きかかった。彼が持つと、立派な剣もちっばけなおもちゃに見える。

獣のような声をあげながら、ゴードンは剣を振り下ろした。

アイシスは地面を蹴ると、そのまま足から滑ってゴードンの股の下をくぐり抜けてしまった。

ゴードンにはアイシスが突然消えてしまったかのように見えた。眉間にしわを寄せ、振り下ろした剣の先を見る。

「ローズ克蘭ツ、一本先取です！」

アイシスはその隙を逃さなかった。

ゴードンの背後に回ったアイシスは、そのまま背中に大きく斜めに斬りつけた。一筋の白線がゴードンの背中に刻まれる。

審判がアイシスの得点を告げると、観客は喜んで手を叩いた。

「このっ、くそがき……！」

怒りに任せてゴードンが剣をふる。

なんとも直線的で、単純な剣筋だろう。

落ち着いてみれば、アイシスがそれをかわすことなど造作ないことだった。

想像の中で猛威をふるっていたゴードンは、いま、アイシスの目の前でひいひいと肩で息をしている。

彼の右腕には二本目の白線が引かれていた。

「この野郎、女のくせに！」

「三本目、取りました！ ローズ克蘭ツの勝利です！」

拍手が巻き起こる。

最後の一線はゴードンの腹を堂々と斜めに描かれた。ゴードンは腹を押さえて尻をつく。

アイシスはにっこりと笑い、彼を助け起こすために手を差し伸べた。

呆然とするゴードンに、アイシスはきっぱりと言い放った。

「残念ながら、ぼくは男だ」

アイシスは初戦を見事に突破した。しかも、無傷で。観客はまさかの彼の剣技を喜び囃した。

一日目は各組で四十八の試合が行われる。出場者の多さもその数から推して測れるというものだ。

出番が終わったアイシスは、他の三人のようすを見に行くことにした。

まず彼は白組を覗いた。

そこではリグルの試合が行われるはずだったが、アイシスがいつてみたときにはリグルはちょうど布を係りの男に返しているところだった。

聞けば、ちょうど試合が終わったところだと言う。

「まあ、当然ながら三対ゼロだな。アイシスはどうよ」

「ぼくも!」

「へえ、やるじゃん」

ふたりは揃って赤組の舞台へと向かった。きよろきよろとしていると、逆にラナのほうからふたりを見つけて駆け寄ってきた。

「よ。おまえら、もう終わったのか」

「うん。ぼく勝ったよ、ラナ！」

そうか、すごいな。ラナは嬉しそうに笑った。

アイシスは彼の左腕に目を留め、心配そうに顔を歪ませた。

ラナはその顔を見ると、包帯が巻かれたままの左腕を元気よくふって見せた。

「大丈夫、心配いらねえって。動かしても痛くねえし、俺の利き腕は右だからな」

「負けたときの言い訳にすんじゃねえよ？」とリグル。

「わかっているって、ばか」

二十五番の方、という声が聞こえ、ラナは着替えのために用意された小さなテントへと向かった。

アイシスはその背に手をふり、彼の登場を待つことにした。

「初日の試合も折り返し地点、それでは二十五組目の登場です。ラナ・リーファス！」

アイシスはぱちぱちと拍手を送った。

リグルは片手を口元に沿え、大きな声で「負ける」とやった。



ラナの対戦相手は、なんとというか、ちんちくりんな男であった。背が低く、その分横幅がずっと広いのだ。

なんとも動きにくそうな、とアイシスは思ったが、まさに彼は速さに自信がないようで、ラナとの戦いはもっぱら力勝負となった。

これはラナも望むところであった。

腕力にかけて、ラナはハロルド以外に負けたためしかなかったのだ。

なかなか力の拮抗した試合であった。

ラナの怪力をアイシスは知っていたが、しかし片腕だけだともうまく力が出せないようだった。

男には白い線がふたつついてはいたが、ラナにもまた二本の線が引かれていた。

「あーあ」とリグルが言った。「本当に負けるかも」

アイシスはぎゅっと手を握った。

そんなことはない。ラナはいつだってぼくを守ってくれた。どんなときでも頼れる親友だったし、これからもそうなんだ。

「ラナ！ がんばれ！」

まさかアイシスの声援が聞こえたのだろうか、ラナは力強く地を蹴った。

鈍い音がして剣と剣とがぶつかりあう。かと思うと、一方が粉と成って砕けた。

男は青ざめ、半分を残して折れてしまった剣を見た。衝撃で手がぶるぶると震えている。

ラナは頬を上気させ、大きく肩で息をついていたが、白い歯を見せてにやりと笑った。

突きつけた剣先を、男の丸い鼻先にちょこんと当てる。

「勝者、リーファス！ 接戦を制しました！」

どつと観客がわきあがる。折れた剣先を奪い合う者すらいた。人はいつも強いものに憧れるのだ。

ラナは声援に照れて頭をかいていたが、観客の中にアイシスを見つけると、ぐつと右腕を突き出して見せた。

アイシスも拍手の手を止めて腕を突き出した。

着替え終わったラナも加え、三人はネットレトの試合を見に行くことにした。

緑組の舞台のそばで、ネットレトは腕を組んでいた。そのとなりにアイシエの姿も見える。

三人に気づくと、アージエは大きく手をふった。

「ネットレトはもう終わったの？」

「いや。四十二番だからな、まだまだ最後のほうだ」

「じゃあ、お昼ごはんを食べにいこうよ」

そこで五人は一度人ごみを離れた。

見れば、広場のあちこちに露店が建っていて、そのどれもがいいおいを漂わせているではないか。商売上手な、トリグルは舌を巻いた。

五人はいくつかの露店を見て回り、それぞれ好きなものを買った。

「それで、どうだった。きみたちはもう試合がすんだんだろう」

適当な場所を見つけて腰をおろし、ネットレトが言った。

「勝ったぜ！ 危なかったけどな、三対二で」

「本当、見ているこつちが冷や冷やしたよ。なあ嬢ちゃん。俺らは無傷での快勝だったもんな」

「嬢ちゃんはやめてってば。でも、ラナの勝ちっぷりはすごかったよ。相手の剣を折っちゃったんだから」

三人の報告に、ネットレトは満足げにうなずいた。

「はやくネットレトさまの試合を見たいわ」

我慢しきれない、といったふうにアージエが体を揺らした。

「このアージエ、誠心誠意ネットレトさまを応援しますからね」

「いや、試合中にあまり大声を出されると困るんだが」

アイシスたち三人は声を出して笑い、アージエはちょっとむくれて見せた。

ネットレトの試合は日が傾きだしたところに行われた。

舞台上立つネットレトを、審判がキース・コートと紹介すると、アイシスを除く三人はみな一様に首をかしげた。

「審判、ネットレトの名前を間違えていやがるぜ」

「違うんだ、ラナ。あれはネットレトがいつも使う偽名なんだよ」

「偽名？」

「うん。あまり本名を知られたくないみたい。名前は人の本質だから、って言っていた」

ふっん、とラナはうなずいた。

試合はネトレトの対戦相手の、まさにひとり相撲であった。

気合十分の声をあげて斬りかかる男の剣を、ネトレトは危なげなく払い、払っては踏みこんで男の胸を斬った。それがただ静かに三度繰り返し返されただけなのだ。

男は腹に引かれた三本の線を見、ネトレトを見て、啞然としたようすであった。

ネトレトの攻撃は落ち着き払っており、それでいて圧倒的だった。観客は騒ぐことを忘れたかのように固まっていたが、舞台上でネトレトと男とが握手を交わすと、ようやく爆発的な歓声が起こった。ラナのとなりではアージエも爆発的にはしゃいであり、彼女を静めさせるのにラナはずいぶん手こずった。

「お疲れさまです！」

着替え終えて四人のもとへやってきたネトレトに、アージエは黄色い声をあげて飛びついた。

「お疲れさまだって？」とリグルが鼻を鳴らす。「見るよ。息のひとつだってあがっちゃいけないぜ」

そうしているうちに、各組ともで四十八の試合が終わり、ここに剣比べの一日目は幕を下ろすこととなった。

そこでアイシスたちはもう一度それぞれ出場した舞台へと集まり、明日の説明を受けた。どうやら二日目は、午前の試合を勝ち抜ければ、午後にも三戦目を行うらしい。

明日のいまごろには、勝ち残っている人数は各組十二名になっています、と説明されると、出場者たちはざわざわと声をあげた。この大人数の中から、ぐっと少ない人数に絞られるのだ。

彼らは手強そうな人物を見つけてはそのようすをうかがったが、だれもアイシスには関心を払わなかった。しかしアイシスはもう気にしなかった。

二日目もアイシスたちは順当に勝ち進んだ。

これまでの三試合をあわせて、アイシスが受けた傷は二本、リグルは一本、そしてネットレットは揺るがない無傷だった。

心配なのはラナだった。

彼は初戦で二本、二試合目こそ無傷で勝利したが、三試合目ではまた二本の白線をいただいた。やはり怪我のせいで本調子ではないのだ。

このまま出場し続けて平気なものかとアイシスは気を揉んだ。

「大丈夫だって」

しかしラナは豪快に笑って見せ、アイシスがどれほど言っても頑として棄権するを拒んだ。

剣比べの二日目が終わわり、四百近かった出場者は四十八人にまで絞られた。

八割を超える倍率を乗り越えた猛者たちは、舞台の作り替えが進む広場の一画に集められた。

三日目からはひとつの舞台で試合が行われるのだ。いままで分散されていた観客の視線が、ただ一箇所に集まる。

緊張と興奮は倍加すると思われた。

「明日は三試合を行ってもらいます。まず、各組で残られた十二人六組で試合をしていただき、さらに残られた六人三組で戦っていただきます。どちらも赤、白、黄、緑の順に行います。ここから少しややこしくなるので、よくお聞きください」

アイシスは身を乗り出した。しかし周りはどれも背の高い男たちばかりだ。

つま先で立つアイシスに気づき、肩車してやるうか、とリグルが軽口を叩いた。

「えー、二試合を終えて各組三人になりましたら、その中から各ひとりずつを選んでいただきます。いいですか、三試合目は六組の試合が行われますが、それぞれ色の組み合わせとしては赤赤、赤白、白白、黄黄、黄緑、緑緑になります。よろしいですか」

「はじめて同色組以外の相手との試合が行われるってわけだね」とリグルが口を挟む。

「そのとおりです。そして三試合目におきましては、ただ相手に勝てばいいというわけにいかなくなります。この場合におきましては、いかに少ない白線で勝つかが争点になってきます」

それから説明されたことをアイシスもラナも真剣に聞き、考えたが、どうもよく分からなかった。

そこで解散後にリグルが要点をかいつまんで説明してくれた。

「たとえば赤組で説明するとき、赤同士の試合で、いがぐりが二対三で勝つとするだろう。本来ならいがぐりは勝ち決定、準々決勝に進めるわけ。だけど、もしもここでもうひとりの赤組が、つまり白のやつと対戦したやつがだね、一本も取られることなく勝ったでしょう。そいつといがぐりの白線の数はゼロ対三、つまり、試合には勝ったものの、結局いがぐりは負け犬に降格、ご愁傷さまというわけだ」

「説明のふしぶしに悪意を感じるけど、まあ、一応分かった」ラナは腕を組んで重々しくうなずき「つまり、負けなきやいい話だ」

「本当に理解してんのかね」

リグルはわざとらしく肩をすくめて手をあげた。まさにお手上げ、というわけだ。

「よし、食つぞー！」

ラナは右腕をふりあげ、意気揚々と宿へと向かった。

アイシスはちらりとちらりとネットレトをうかがった。もしかすると、明日の第三試合で彼と当たるかもしれないのだ。

心臓は飛び跳ねなかった。きゆう、とすっかり縮こまってしまったようだ。



## 第二十七話：雪辱戦

### 『聖伝』第二十七話

大がかりな祭り“剣比べ”もついに三日目、折り返し地点を迎えた。

ここからはまさしく真の剣豪の争いである。

観客の熱気も期待も前日までの比ではなかった。

「おみごと！ 勝者、リーファス！」

「すばらしい剣技でクロツブズ、準々決勝進出！」

「ローズ克蘭ツ、強い！ 一対三で勝利！」

「すごい！ コート、全試合無傷で突破です！」

四人はふたつの試合を勝ちで飾った。

試合を終えたばかりのネットレトに、アイシスが片手を差し出す。ネットレトはすこし迷ってから、力強く手を打ち合わせた。

日がすっかり中天に昇りきってしまうころ、出場者は十二人にま

でしぼられた。

どれもみな精悍な顔つきの男たちである。そのなかに自分もいることが、アイシスにはいまだよく信じられなかった。

ほんの数ヶ月前までアイシスの心はなにも語らず、彼もまた心に語りかけず、そして彼は自分の運命をすら知らなかったのだ。

いま、アイシスは運命を知っている。

生と死の神キグナディウスに額づいていた少年は、いまや剣を片手に運命を生きているのだ。

「まったくじれったいな」

ラナは両手を頭のうしろで組んでばやいた。準々決勝の説明を受けたあとのことである。

十二人の男たちは舞台上に集められ、そこでくじを引いた。

対戦相手の抽選だというのだが、しかし結果は教えてもらえなかった。試合開始直前にお呼びしますので、と司会者は言う。

そうして彼らには昼ごはんを楽しむ時間が与えられたが、出場者のほとんどがそれどころではなかった。

いつ、だれと戦うことになるのか。

そればかり考えてしまっても落ち着かないのだ。

アイシスもそんなうちのひとりだった。

「うう、次の試合、ネットトとだったらどうしよう」

アイシスは情けない声を出した。しゃがみこみ、顔を覆う。  
おや、といった顔でネットレトが言った。

「いやか」

「いやっていうか、怖いんだよ。絶対に勝てないもの」

「私はアイシスに期待しているがね」

アイシスは顔をあげた。

期待している、あのネットレトが。

アイシスの頬が嬉しさと恥ずかしさで赤らんだ。

「いた、いた！　おーい！」

声のするほうに顔を向けてみれば、大きく手をふるアージェの姿があった。すこし後ろでハタが小さく手をふる。

人ごみをかき分けかき分け合流すると、アージェがなにやら手にしていた大きな包みを差し出した。

「はい。アージェ作、必勝祈願お弁当よ。ネットレトさまの分しかないけど」

「そりゃ結構。勝手にやってな」

「ちょ、ちょっと。つれないわね、リグルったら」

予想外の反応に、慌ててアージエは言い足した。もちろん四人分作ってきたわよ、と。

リグルはそんな彼女を見、小ばかにしたように鼻を鳴らす。

「ふうん。別にいいけど、ちゃんと食えるもの作ってきたの。それ食って腹壊して途中棄権、なんて洒落にならないからね」

「あなたって本当に失礼ね！」

べえ、とアージエは舌を出すと、ネトレトの腕に自分の腕を絡ませた。

ネトレトはもはやなにをかいわんやといった顔である。

六人は人の少ない場所を見つけて座りこんだ。

では、とそろって弁当に口をつけるが、これがなかなかおいしいいや、非常においしかった。

日ごろ小食のアイシスでさえ、一人前をぺろりとたいらげていたのだから驚きだ。

「すごいな。アージエ、とてもおいしいよ。これなら本当に勝てそうな気がする」

「ふふ、ありがとう」

六人は休憩の時間一杯いろいろなことを話した。

午前中の試合のことだったり、勝ち残った他の出場者のことだったり。

楽しく会話を続けながら、ハタはちらりとリグルのようすをうかがった。

彼はラナの発言に鼻を白ませていたが、聡く視線に気づくと片眉をあげた。なんだよ、というのである。

ハタはそのときこそなにも言わなかったが、そろそろ、と腰をあげるとそつとリグルに近寄った。

「ねえ、リグルくん。きみ具合でも悪いの」

「……………」

リグルは答えない。ハタは言葉を続けた。

「アージエさんが心配していたんだ。きみの食欲がないって。あの弁当もね、なんとかきみに食べてほしくて作ったんだと思うよ。素直じゃない人だから、ああ言っていたけどね」

だけどきみ、やっぱりあまり食べてはくれなかったね。そう言っ  
てハタは残念そうに眉をしかめた。  
ふっん、とリグルは鼻を鳴らす。

「意外とよく見てるんだ」

アージエは気づいていた。アージエだけが気づいていたのだ、リ

グルの体調の変化に。

なぜ他の三人は気づかなかったのか。

それはひとえに彼らが浮かれていたからだ。

いつもよく気を配っているはずのネットレトでさえ、少なからず心を浮き立たせていた。

彼はアイシスたちの成長を見るのが楽しかったのだ。心は彼らの試合に向けられていた。

平気だよ、とりグルは言った。朝にすこし食いすぎてね。

そして彼は、次にハタが口を開くのを待たずに舞台へと走っていった。

午後の一組目が試合を始めた。

ラナは左腕の包帯の具合を確認しているし、ネットレトはロープに着替えて試合を見ている。

アイシスはそわそわと落ち着かなかった。どうも背中がむずがゆい。

アイシスはリグルのとなりに立った。

彼は腕を組み、壁にもたれて目を閉じていたが、アイシスが横に並ぶと片目を開けてようすをうかがった。

アイシスは後ろで手を組み、ぽん、ぽんと壁に尻をぶつけた。視線は舞台のあたりをただよっている。  
リグルはにやりと笑った。

「緊張してるね」

「そりゃあ、もちろん」

ぽん、ぽん。

「緊張がとけるまじない、教えてやるうか」

本当、とアイシスの顔が明るくなる。

リグルはうなずくと、俺が指示したとおりにやってみな、と言った。

「まず、両手を握って頭の上に」

「はい」

「次に三回まわって」

アイシスは言われたとおりにする。

なにが始まるんだ、と周囲の視線が彼に集まった。

「まわったら両手をぱっと開いて、大きい声で『あう！』だ」

「あう！」

リグルは腹を抱えて笑い転げた。  
舞台袖に集められていた出場者たちも、アイシスの間抜けな姿を見てどつと笑い声をあげた。

アイシスの顔が、みるみるうちに真っ赤になる。からかわれたのだ。  
耳がじんじんと熱くなった。

「リグル！」

「あはは、ひでえやアイシス、まさか本当にやるとは」

リグルはおかしくてたまらない、といったようすだ。ひいひいと苦しそうにして震えている。

そんな彼をアイシスはぼかぼかどやったが、気づけば本当に緊張がほぐれているではないか。

まさか、はなからそれを狙っていたのか。

アイシスは深読みしたが、いまだ笑いが止まらないようすのリグルは案外なにも考えていなかったりする。

そうしているうちに準々決勝も二組が終わった。

三試合目の組み合わせが発表される。

「続きましては」と司会者が叫ぶ。



「赤と白の対戦になります。ラナ・リーファス、リグル・クロツプズ、どうぞ舞台へ！」

「えっ」

アイシスは驚いた。

となりのリグルは、ひゅうと口笛を鳴らす。

「きた。俺、いい予感してたんだ」

促されるまま舞台にのぼり、ラナとリグルは向かい合った。

「うわっ、ついに」と叫んだのはハタだろう。

ラナはひどく真面目な顔をしていた。

彼はこのときをずっと待っていた。タリファで喫した敗北を、いまここで挽回せんと闘志を燃やしていたのだ。

実を言うと左手はずいぶんと痛んだのだが、ラナは負けん気の強い少年だった。

リグルには彼の考えていることが手に取るようにわかった。

ラナは単純なのだ。純粹で、まっすぐで、救いようのないばかり、とリグルは思っている。

それをわかったうえでリグルは笑った。挑発的な笑みだ。

彼もまた負けん気の強い少年だった。いや、その強さはラナをずっと上回る。

負けず嫌いを見つけると、完膚なきまで打ちのめす。  
彼にはそういういやな趣味があり、そしてそれを実行するだけの  
力があつた。

「よしつ、雪辱戦だ！」

「じゃあたりフアで俺に負けたことは認めるんだね」

うるせえや、とラナが吼える。

審判からふたりに剣が手渡された。

「先に言っておくが、すこしでも手加減してみろ、許さねえぞ」

リグルはラナの左腕に目をやった。

そして、ふん、と鼻を鳴らした。

やっぱりばかだ、とリグルは思う。

こいつは気づいていないのだろうか、自分の成長ぶりに。片腕と  
はいえ、いまの彼を相手に手加減などできるわけがないのに。

「それでは試合、開始！」

審判の宣言が終わるか終わらないかのうちにリグルは地面を蹴っ  
ていた。

速い。

一瞬で間合いを詰めると、体をひねり、勢いを倍化させて剣を大きくふった。ラナの左腕のほうだ。

反射的に剣で受ける、しかし押しきられてしまった。不意をつかれたとはいえ、怪力自慢のラナが、である。

呆然とするラナの右手から剣が弾き飛ばされ、彼の胸元には白い線が残された。

「弱点は利用するもんだ。だれが手加減なんかするか、狙わせてもらうよ」

ラナの顔を汗が伝う。体が大きくぶるりと震えた。背筋がぞくぞくする、武者震いというやつだ。

ラナは歯をむいて笑った。

「そこなくっちゃよ」

リゲルの力は本物だった。速さ、腕力、勘、センスのすべてが彼には備わっていた。

その中でも、戦いのセンスにおいてはだれも彼には敵うまい。

それはまさに天賦の才、リグルは剣を愛し剣に愛されるべくして生まれてきたのだ。

激しい打ち合いが続く。

怒涛の攻撃に、ラナは必死で喰らいついた。

それはとても泥臭い、まるで華麗とはいいがたいようすだったが、ラナはまるで気にしなかった。それが彼の戦い方なのだから。

汗にまみれ、土ぼこりをかぶってけんかに明け暮れたラナ。

リグルが才能の人だとしたら、ラナはまさに努力の人といえる。

二本目の白線は左肩に。

狙う、といったリグルの言葉は嘘でなかった。

ラナはすっかり汗だくになっていた。

寒い風が吹くなか、彼のまわりだけが熱気で白く霞んでいるほどだ。

しかしラナの心は喜びの声をあげていた。

楽しいのだ。

リグルと剣を交わすと胸が高鳴るのだ。

圧倒的に不利な立場にありながら、しかしラナは笑みを浮かべて

いた。

だれが見ても攻勢をかけているのはリグルで、彼の一方的な試合に見えた。

ところがどうだ、リグルの顔は真っ青ではないか。

試合開始時からすこし白かった顔が、いまや土色を通りこしてすっかり青ざめている。

彼は大きく肩で息をしており、息をするたび体は不安定に揺れた。

尋常でないように、しかし観客は気づかない。

興奮が彼らを盲目にしている。

「おい」

ラナは狼狽の声をあげた。

「なんて顔だよ。おまえ、なんか無理しているんじゃないのか」

「黙れよ」

ぜえ、とリグルの喉が鳴る。

しかし彼はその顔色からは想像もつかないような鋭い突きをくりだした。

黙れと言われなくても黙らざるをえない。ラナは夢中で剣先を払った。

払われた剣を、リグルはすかさず横に薙ぐ。  
そのままの勢いでリグルはラナの横をとおりすぎた。

ラナの背中をくすぐったさが這う。

やられたか。

すれ違いざまに振るわれた剣筋を、ラナは避けきることができな  
かったようだ。

完全なる敗北。しかしラナの心は晴れていた。  
妙にすがすがしい。

声をかけようとラナはリグルをふり返った。そして言葉を失った。

彼がふり向いたまさにそのとき、リグルは剣を取り落とし、膝か  
ら崩れ落ちたのだ。

「おい！」

ラナも剣を放り出した。

観客の熱気は夢が覚めるようにして消え、喚声は悲鳴に変わった。

このままでは頭を打ってしまおう。

ラナは必死に右手を伸ばした。リグルの背後から脇に手を滑りこませ、胸元をしっかりと掴んで抱きとめる。

意識を失ったリグルの首が、がくりと大きく揺れた。

まさに間一髪。

うなだれるリグルの鼻先と地面とのあいだには、本当にわずかな隙間しか残されていなかった。

「リグルくん！」

ハタが身を乗り出して叫ぶ。

ばらばらと幾人かが舞台に走りこんできた。

大会の関係者だろうか、彼らはラナの手からリグルを奪って抱えあげた。

ラナは目を見開き、呆然としている。

口をなかば開け、固まったまま動かない右腕を見つめていた。

リグルはすぐに病院へと運ばれた。

彼の唇にはまるで色がなかった。

「ねえっ、リグルどうしたの」

アイシスの声は震えている。彼は軽い錯乱状態に陥っていた。

ラナは不安定な足取りで舞台から降りてきたが、アイシスの顔を見るとはっと色を改めた。

「なあ、あいつどこいったんだ」

「えっ」

病院だよ、とアイシスは言った。さっき、ラナの目の前で運ばれていったじゃない。

「そうか」

ラナはもう一度右手を見た。

「俺、いくわ」

言うなりラナは走り出した。

かと思うと前につんのめりながら急停止し、観客のひとりに病院の場所を尋ねる。

そして今度こそラナは駆けて行ってしまった。  
その背中には一本の線がうっすらと光っている。



アイシスは不安げにラナの姿を見送っていたが、ぽんと優しく肩を叩かれた。

ネトレトだった。

「私たちは私たちに課せられた役割を果たそう」

アイシスはうなずいた。

リゲルのことは任せたよ。

いましも角を曲がっていった、ラナのたくましい背中にアイシスは呟いた。

## 第二十八話：リゲル、彼の真実

### 『聖伝』第二十八話

観客はすっかり困惑していた。  
仕方ない、出場者が突然昏倒したのだから。

さまざまな憶測が飛び交ったが、そのなかでこんなことを言う者がいた。

「対戦相手のリーファスが毒を仕込んだのさ。賭けてもいいいぜ」

しかし男は言い終えないうちに、右頬をいやというほど殴られた。

目に涙を浮かべ、拳を握っていたのはアージェだった。

不意に、しかも細腕の女にぶたれたのだから、男は驚いて声も出ない。

「次にそんなこと言ったらね」アージェの声は怒りに震えていた。

「その口、二度ときけなくしてやるんだから」

「落ち着こう、アージェさん」

ハタがそつとアージエの両肩に手を置く。

「ぼくはリグルくんのようすを見に病院へいくよ。アージエさんは応援を続けて」

「あたしもいくわ」

「だめだよ。そしたらだれがアイシスくんやネットレトさんの勝利を見届けるのさ」

言葉を詰まらせたアージエを見て、ハタは言葉を続けた。

「アージエさんはこの場を楽しんで。そのほうがリグルくんは喜ぶよ。彼はきつと、大丈夫」

いい報告を待っているよ。そうやってハタはいつてしまった。

アージエはその背中を見送っていたが、やがてくるりと舞台に向き直った。

自分より、もっと心配に心を悩ませている人たちがいるはずだ。彼女の役割は、そんな彼らを精一杯元気づけてあげることではないか。

舞台のうえでは司会者らが混乱の鎮火につとめており、その甲斐あって、観客のどよめきも静まりつつあった。

頃あいを見はかり、司会者は次の組み合わせを発表する。

キース・コート。

ネトレトの偽名が高らかに呼ばれると、アージェはひときわ大きな歓声をあげた。

病室は清潔に整えられていて、ラナはどうも自分の存在を場違いに感じた。ベッドにも机にも触れてはならないような気がした。汗は引き、興奮はすっかり冷めている。

ベッドに横たわるリグルの顔は白い。

しかし、倒れた直後に比べると、幾分か唇にも色味が戻ったように見える。

かけられた柔らかそうな布団は規則正しく上下していたが、しかしリグルは起きているだろう、とラナは思った。

「なあ」

返事はない。

しかし、彼はどうも言葉の続きを待っているようにラナには思えた。

「おまえってさ」

歯切れ悪く言うと、ラナは右手を強く握った。どうも言い出しづらいのだ。

「おまえって、本当は……」

「あ、ラナくん！」

呼ばれてラナは肩を震わせた。

病室の入り口に、息をきらせたハタが立っている。

彼は大股で部屋に入ると、心配そうにリグルの顔を覗きこんだ。  
どうだ、というようにラナをうかがう。

「よく眠っているよ」

ラナは窓の外に目を向け、ぼつりと呟いた。

日が暮れるころ、試合を終えたアイシスたちが病院に駆けつけた。

アイシスはラナを見、ラナはアイシスを見て、声をそろえて  
「どうだった」とやった。

ベッドを覗くと、リグルは静かに寝息をたてていた。

顔色はずっとよくなっていて、それを確かめるとアイシスはほつ  
と胸をなでおろした。

「それで、そっちはどうだったんだよ」

アイシスは試合用のローブを着たままだったが、にこりと笑うと  
ラナの目の前で回って見せた。

黒いローブには一本の白い線も見当たらない。

「勝ったよ。準決勝進出」

そう言ってアイシスは拳を突き出した。  
にやりと笑い、ラナも拳を合わせる。

「じゃあ、明日はネットレトとか」

「そういうこと」

アイシスは眉尻をさげ、情けない顔で笑った。

若い看護婦が入ってきて、その子についてはまるで心配いらない、  
倒れたのは貧血と栄養不足のせいだから、と言った。

栄養不足と聞いてアージエが顔をしかめる。

「辛くて食事もとれなかったのね、かわいそうに。この子、いつも  
酷いのかしら」

「え？ なにが」

看護婦に問いかけられて、アージエは首をひねった。  
酷いとは、いったいなんのことだろうか。

「リグルに持病とかあるの？」

「え、どうなんだろう。ないと思うけどなあ」

今度はアージエに問いかけられてアイシスが首をひねる。  
看護婦はそんな彼らをこそ見て首をひねった。

「持病って、そんなことじゃないわよ。あたしが言っているのはあれよ、女の子の、月のもの」

「ああ」

アージエはぼんと手を打った。

アイシスは相変わらずさっぱりといった顔だが。

「あれのことね。リグルは、さあ、どうなのかしら。  
それにしても本当、毎月いやになっちゃっわ、女の辛い宿命……  
え？」

「え？」

「え？」

アイシスとハタもアージエに続いた。  
病室内、え？の合唱である。

ラナとネットレトはなににも言わない。

「い、いま、なんて言ったの。アージェ、いま女の……って」

そこでアイシスたちはすっかり言葉を失い、そろってベッドに目をやった。

看護婦は腰に手を当て、ため息をつきながら言い放った。

「呆れた。あなたたち、まさか彼女のこと男だっと思っていただけ？」

男女三人の、悲鳴にも似た叫び声が響いた。

アイシスは丸い目をさらに丸くしてリグルを見つめた。  
使い古された言い方をするなら、それこそ穴が開くほどに。

「お、おっ、おんっ」

ハタは新種のにわとりのようになっていた。アージェは言葉もないようだ。

ラナはベッド脇の椅子に座り、やや背中を丸めたまま微動だにしないかった。



アイシスは彼に詰め寄る。

「ラ、ラナ、なんで驚かないの。もしかして、ラナ、知っていたの」  
「いや……」

アイシスの質問は彼をひどく狼狽させた。  
ラナは視線を泳がせていたが、小さくぽつりとこつこつ答えた。

「さっき、試合のときに気づいた」

どうして、とアイシスが言うより早く、ハタがあつと声をあげた。  
試合のとき、ちょうどリグルが倒れたときだ、ラナはリグルを後ろから抱きとめたではないか。

「もしかしてラナくん、触っぶあ」

しかしハタが皆まで言いきってしまわないうちに、ラナがその口をしっかりと挟んだ。

押さえつけられてハの字に尖った唇を動かし、ハタはもそもそとなにごとか喚いた。しかしうまく話せない。

「それ以上は絶対に言つな」

「うにゅ」

ラナの凄みに圧倒され、ハタは大人しくうなずいた。それを見てようやくラナは彼を解放する。

乾いた笑い声が出たのはそんなときだった。見れば、笑っているのはリグルではないか。

「いがぐり、正直に言えよ。おまえ、俺の胸触つたる」

「んなっ！」

普段の彼からは考えられないほどに高い声を出し、ラナは顔を真っ赤に染めた。耳の先まで赤色だ。

アイシスはまずその変わりように驚いた。

ラナの顔を大粒の汗がたらたらと流れる。

「お、おまつ、おまえ、違う、あれはだな」

「言い訳はなしだぜ。どう責任とってくれるってんだ。え？」

「せ、責任つたって、おまえっ」

リグルはあはは、と笑い声をあげた。澄んだ声だった。

「冗談に決まってるんだろ。やっぱりばかだな、おまえ」

それからふっと視線を落とし、気をつけていなければ聞こえない

ほど小さな声で、こんな形でばれるなんてな、と言った。

リゲルはベッドに起き上がり、アイシスたちは神妙な顔つきでそれぞれ椅子に座った。

ネトレトは腕を組み、壁にもたれて立った。

「ま、ばれちまったもんは仕方ねえ。俺は女だ、リゲルは偽名。おまえら全員だまされてたってわけだよ、お疲れさま」

リゲルは喉をくつくつと鳴らして笑った。  
ふとネトレトに顔を向ける。

「色男は気づいてたの」

「ああ」とネトレトは静かにうなずき、

「見目や所作はともかく、剣の扱い方を見ればわかる」

「えーっ」アイシスが驚きと非難の声をあげる。

「教えてくれたってよかったのに」

「本人に隠そうとする意思があつたからな」

「そっか」

アイシスは大人しく引き下がる。

「それで、きみの本当の名前はなんていうんだよ」とハタ。

「リジエアラ・スー。らしくないだろ」

いい名前じゃないか、と言ったのは意外にもネットレトだった。

「リズは美しいや細いといった意味、シエアラは月だ エルフ語だがね。リジエアラは、訳すと三日月といったところかな」

「ネットレトはエルフの言葉がわかるの？」

「ある程度は」

アイシスは驚き、感心した。

「三日月、ねえ」リグルは小さく呟いた。

「悪くないね」

「でも、どうして性別を偽ったりしたの？ いつもそうしてきたの？」

アージエが矢継ぎ早に質問する。

彼らはリグルに聞きたいことがたくさんあったが、一番気になるのはそこだった。どうして、なぜ男としてふるまったのか。しかしリグルは鼻で笑い飛ばした。

「説明するには三日三晩は必要だね。だから割愛」

納得いかない顔だったが、アージェは追求しなかった。きつと、話したくないのだ。

リグルは顔に笑みを浮かべたまま、だれに聞かせるふうでもなく静かに言った。

「俺は、女じゃだめだったんだ。女だからだめだったんだ」

リグルの横顔にはふと深いかげりが見えた。見たこともないその表情に一同は黙りこむ。

リグルはぱつと笑ってみせると、両手を顔の前であわせた。

「なあ、これからも俺のことは男として扱ってくれねえか。難しい話じゃねえだろ。いままでどおりにしてくれりゃいいだけなんだから。頼むよ、このとおり」

アイシスたちはうなずくほかなかった。

宿に戻り、部屋に入るとアイシスはベッドに倒れこんだ。

一日の疲労がどつと押し寄せてきたのだ。

まるで予想だにしていなかったリグルの告白。

アイシスはいまだに信じられずにいた。

ただの貧血だから、と言ってリグルは彼らと宿に帰ってきた。  
いまごろ、となりの部屋でネットレトとなにを話しているのだろうか。

「ねえ、ラナ。驚いたね」

「ん」

ラナはどこか上の空だ。  
彼もすっかり疲れきっていた。

口を開けば憎まれ口ばかりの、あのいけ好かないやつが女だったなんて。

いくら秘密主義者にしても、そんな秘密を抱えているとは思ってもしなかった。

「まさかネットレトも女じゃねえだろうな」

ベッドに仰向けになり、ラナが呟く。彼もまた徹底した秘密主義者ではないか。

アイシスは身を起こすと、心配そうにラナをうかがった。

「なに言っているの、ラナ。可愛いそうに、よっぽど疲れているんだね」

あのネットレトが女なはずないでしょう、と言ってアイシスは思い出した。

明日のことだ。

アイシスは明日、ついにあの舞台でネットレトと戦わなければいけないのだ。

彼は結局、一太刀も浴びることなく準決勝に進んだ。恐れるなど言われても無理がある。

しかし、もう逃げ出さないという勇氣は、いまのアイシスにはしっかりと備わっていた。

ふたりは気づけば眠っていた。

疲れた体を夢のない眠りが包んでいく。

翌朝ラナは、食べ損ねた夕ごはん分もきっちり朝ごはんを取り返したのだった。

「さあ、いよいよ剣比べも四日目。泣いても笑っても今日が見納め、最終日でございます。みなさま、今日の戦いをしかと目に焼きつけてくださいー!」

おうつ、と観客は拳を突き上げて答える。

あふれかえる熱気に、マーニヤの街が揺れだしそうだ。

「それでは四百人の中を勝ち抜いた、四人の勇者を紹介いたします。みなさまご注目！」

リグルは準々決勝で勝利をあげたのだが、しかもゼロ対三という好成績だったのだが、決勝進出を辞退した。

また倒れでもしたら、なあ、とリグルは言葉尻を濁し、ラナは真っ赤にした顔を泣き出しそうに歪めるのだった。

赤、白の組を勝ち抜いた人物の紹介が終わった。  
次はアイシスの番だ。

アイシスは剣を振りながら舞台へとあがった。観客の注目が彼に集まる。

わっと歓声があがった。ラナやリグルの姿も見える。

「黄組を勝ち抜きましたのは、アイシス・ローズ克蘭ツ！  
弱冠十六歳、この愛くるしい容姿からは想像もつかないすさまじい剣技で観客を酔わせ、見事にここまで駒を進めてきました。目にも留まらぬ速さと、珍しい銀の髪とで、まるで光のように舞台を駆け巡ります。」

みなさま、アイシス・ローズ克蘭ツにいま一度大きな拍手を！」

何百という手が一斉に打ち鳴らされる。

司会者の口の、すべらかなこと。

これでは過大評価だ、とアイシスは顔を赤らめた。



歓声が静まるのを待ち、最後に登場したのはもちろんネットレットだ。彼は四人のなかで一番の歓声と拍手をさらった。

「さあ、最後の四強はこの方、緑組をまさに支配しましたキース・コート！」

「きゃあつ、ネットレットさま！」

「ばか、キースだって」

慌ててラナがアージエを小突く。

「彼の剣を扱うさまは、まさに剣舞！ 冷静なこと氷の如し、その突きの鋭さ稲妻の如し。」

そしておそろしいかな、彼は一筋の傷も許さず堂々の準決勝進出です。無傷でここまで勝ち抜いた人物は、長い剣比べの歴史で彼ただひとり。美しく気高いキース・コートの名は、永遠にマーニャで謳われることでしょう。

彼の伝説は最後まで続くのか、みなさま大きな拍手をお願いいたします！」

舞台上の四人は、耳を振るわせる拍手と声援のなか、それぞれ握手をかわした。

アイシスは握手をかわすとき、ネットレットの目をしっかりと正面から見据えた。そしてにこりと笑い、うなずいた。

彼のようにネットレットは喜んだ。  
いい顔だ。

彼の口にもまた笑みが浮かんだ。

司会者ももはや興奮の渦に巻きこまれていく。

彼は見事に決まった己の口上につつとりし、拳を高々と突き上げると叫んだ。

「この四人による最強最高の余興、一瞬たりとも目が離せません！  
それではここに、剣比べ最終日、開幕でしゅ！」

「あ、噛んだっ」

## 第二十九話：歓声、涙、最後の夜

### 『聖伝』第二十九話

アイシスはゆっくりと目を開いた。

彼は静寂の中にいたが、視界がはつきりしてくるにつれて、騒がしさも耳に戻ってきた。

“無”だった自分に世界が染みこんでくる感覚。なんとも心地いい。

舞台の上では赤と白の優勝者らが準決勝を争っていた。お互いにまるで引けをとらない。

打ちかかつては避け、避けては突いてのせめぎあいであった。

どちらかが危つくなると観客は悲鳴をあげたり、やれいけと熱い声を送ったりと賑やかだ。

「恐れはなくなったようだな」

ネトレトは腕を組み、舞台に目をやったままだ。

アイシスは彼の横顔をうかがい、それからまた舞台に視線を戻すとはは、と笑った。

「もちろん怖いけど、必要以上に深く考えなくてもすむようになったかな」

「十分だ」

成長につながる、というネットレトの読みは見事に当たった。

アイシスには圧倒的に経験値が足りなかった。そして相手と向き合う勇気も。

この大会は、世間知らずのアイシスにそれらを与えてくれる、とてもいいきっかけになったわけだ。

アイシスは胸に手を当てた。

心臓はばかみたいに飛び跳ねている。しかしユフィロスレジアは彼と共にいる。

聞こうと思えば、ぼくはいつだって彼女の涼やかな声を聞くことができるんだ。

「さあ、出番だ」

ネットレトに背中を叩かれる。

爆発的に打ち鳴らされた拍手が舞台上のふたりを称えている。その中でふたりはがちりと握手を交わした。試合が終わったのだ。アイシスはうなずいた。

司会者の口上も、歓声すらも聞こえない。

舞台の上にはアイシスがいて、そして向かいにはネットレトがいる。アイシスにとって重要なことはそれだけだった。

剣を手にして対峙すると、改めてネットレトが与える威圧感のすさまじさに気づかされる。

彼の迷いのない目で見られると、まるで肉食獣に射すくめられたかのような気持ちすら感じてしまうのだ。

アイシスは圧倒された。口の中が異様に乾く。

「それでは準決勝二組目、開始！」

じり、とアイシスは間合いをうかがった。

ネットレトは動かない。剣を右手に持ち、先を軽く上にあげている。構えているような気配はない。それでいてまるで隙がないのだ。

アイシスは剣を持つ両手を握りなおした。汗で手のひらが湿る。

一撃目はアイシスから仕掛けた。

一瞬の呼吸を見、彼はまさに光のごとく駆け、ネットレトのふとこ

るに飛びこんだ、つもりだった。

しかしネットレトはそれをさせなかった。彼は最低限の動きでアイシスの突進を避けた。

わっと観客が湧く。

一度打ちこんでしまえば、あとはもう目にも留まらぬ剣の応酬だった。

アイシスの反射神経は異常なまでに研ぎ澄まされ、ネットレトのおそるべき攻撃にもよく耐えた。

防戦一方だったが、傷はまだついていない。

そのようすに観客はため息すら漏らしたが、しかしまだずいぶんと体が硬い、とネットレトは見た。

ネットレトに対する過大評価が、やはりまだアイシスの体を強ばらせてしまっているのだ。

動くか、とネットレトは思った。

「うっ」

観客が甲高い悲鳴をあげた。やや体を引いて放ったネットレトの閃が、アイシスの右肩をどうと襲ったのだ。

アイシスの目はそれをしっかりと見たのだが、しかし体の反応がわずかに遅れた。

木の剣はアイシスの薄い肉に食いこみ、しびれた手は剣を取り落

とし、肩をおさえてアイシスは膝をついた。

ネトレトはそのようすを見下ろしていたが、すつと屈むと剣を拾い上げてアイシスに渡し、手を取って助け起こした。

「まだだろう。きみの力はこんな程度じゃないはずだ」

「……………」

「恐れてもいい。しかし迷うな」

迷い、とアイシスは呟いた。

ネトレトの言葉はすんなりと耳に馴染んだ。

言葉だけではのぼせたアイシスの頭には届かなかった。ただろうが、焼けるような右肩の痛みが意識を引き戻してくれたのだ。

アイシスはしっかりと両足で立った。左手で右肩を押さえる。

大丈夫ですか、と審判が駆け寄ってきたが、アイシスはしばらくそれに気づかなかった。それほどにネトレトの言葉をよく吟味していたのだ。

「大丈夫ですか？」

「えっ、あ、はいっ」

アイシスははっとして右肩から手を離した。

審判は彼を気遣い、しつこいほどに肩の具合を尋ねたが、アイシスは辛抱強く試合の続きをと訴えた。

ネットレトの言葉に心が震えている。恐れてもいい、しかし迷うな。

ようやく試合の再開が宣言された。

審判は巻き添えを食わないようにとふたりから離れる。

アイシスは体の正面に剣を構えた。

揺れることのない剣先の向こうで、吸いこまれそうに青い瞳が燃えている。

ネットレトは内心すこし驚いた。

たった一言で、どうだ、彼はすっかり“男”の顔をしているではないか。

いや、あれは王の顔なのかもしれない。

力強く、しかし美しく、その姿を見ただけで平伏してしまいたくなるその高貴さ。

いまのアイシスの姿には、その片鱗が伺えはしないだろうか。

「ネットレト」

「ああ」



「ありがとう」

ネットレトはふと口元を緩めた。

「ああ」

アイシスは持てる力をすべて出し切った。

全神経でネットレトを見、全筋肉で彼に応えた。

ネットレトは圧倒的だった。

彼の攻撃はアイシスに息をする暇さえ許さない。

彼は右手で剣を薙ぎ、アイシスが受けたと思えばすかさず左手で持ち替え、突いてくるのだ。

厄介なことに彼は両利きで、左手を効果的に使うのがとても巧かった。

ネットレトの剣は嵐のように激しく、しかし舞のように優雅でもあった。

観客は声をあげることすら忘れて試合を見守った。

人は、海や砂漠のような、どこまでも大きくて神秘的なものを見ると黙りこんでしまうものなのだ。

拍手は惜しむことなくふたりに降り注いだ。勝者も敗者も関係なかった。

アイシスは大粒の汗を光らせ、薄い胸板を上下させていたが、ネットレトが手を差し出すとにっこりと笑った。

柔らかくて、すこし頼りげのない笑顔。

しかしその表情にどこか力強さが芽生えたことを、ネットレトは鋭く見抜いた。

激しく、繊細で、美しい試合だった。

観客は彼らの一閃一閃を心に刻みつけた。

鳴り止まない拍手、暖かな声援、そしてネットレトの笑顔。

感極まったアイシスは、舞台に立っているにも関わらず泣き出してしまった。

試合はネットレトの完全勝利だった。

結局、彼のロープは一度も白い粉を浴びることなく剣比べを乗り切った。

文句のつけようもない力で彼は優勝を果たしたのだ。

決勝戦についてはいまさら述べる必要もないだろう。なにしろあつという間のことだったのだから。

観客らの心には、銀の少年との試合のほづが、よほどか強く残ったことに違いない。

「すげえ」

ラナはあんぐりと口を開けた。

テーブルの上には金貨が山ほど積まれている。

準決勝まで進んだアイシスの分も含めると、得た賞金はなんと金貨五十五枚にもものぼった。傭兵の数人なら三ヶ月は雇ってしまえる額である。

まばゆい光を放つ金貨を組み合わせ、リグルは器用にも小さな塔を作っている。

金で遊ぶなんて不謹慎だ、とラナは意外な真面目さで注意したが、リグルは鼻を鳴らすばかりで相手にしなかった。

「これだけあれば当分稼がなくても平気だね」

「むしろ邪魔だよ、この量は」

確かにリグルの言うとおりだった。

それでなくとも金貨は重い。そのうえ、ぶつかり合つとちやりちやりと耳障りな音が鳴るのだ。

これは予想もしない事態だった。

宝箱にでも入れて埋めるか、とラナが軽口を叩いた。

大量の金貨は五つの袋に分けられた。

そのうちのひとつをネットレトから受け取り、アイシスはわあと驚きの声をあげた。袋は見た目よりもずつと重かった。

「これだけを稼ごうとしたら、いったいどれだけの時間がかかるのかな」

「腕のたつ傭兵で一ヶ月、そうでなければ二、三ヶ月はかかる」

「うわっ」

アイシスは袋を取り落としそうになった。

残ったひとつの袋はハタに託された。

雑技団の人々に、平等にわけてくれとネットレトは言う。

ハタは目を丸くし、こんな額は受け取れない、と頑なに拒んだ。

「きみたちはラナとリグルを救ってくれたじゃないか。いくら金を払っても、とても足りることじゃない」

ネットレトは一步も譲らない。

ついにハタも折れ、ならばこの金で宴をしよう、という話で話がついた。

ハタは団員のいくらかを集め、金貨を与えて買出しに走らせた。それでも使いきれぬ額ではないので、いくらかは雑技団のこれか

らの資金とし、いくらかは銀貨に換えて小遣いとして配った。

団員は喜んで街へ繰り出した。それぞれ買い物を楽しもうというのだ。

アージエは渡された銀貨四枚を見つめていたが、ぎゅっと握りしめるとネトレトの袖を引いた。

「どうした」

「お願いがあるんです。あたしに贈り物をしてくれませんか」

ネトレトは目を丸くした。選んでくれるだけでいい、支払いはこのお金で十分に済ませられるからとアージエは言う。

正直、彼女の女心はネトレトの理解を超えるところにあっただが（彼は合理的な性格なのだ）、真剣な顔で頼まれてしまったは無下に断ることもできず、ふたりは連れ立って出かけていった。

「けなげだね」とその背中を見送るリグルが言った。

別れのときが近い。

宴は盛大に行われた。

公演用の舞台は宴会場と化した。肉も酒も、なんでもござれだ。テントの中は食べ物といいにおいと人の笑い声に満ちていた。

団員たちは心地よく酔った。

酔うと彼らは立ちあがり、手を取り合って歌い始めた。

アイシスは喜んで手を叩いた。

初めて口にする酒に、すっかり顔が赤くなっている。

「ほら、アイシスくんも！」

ハタがにつこりと笑ってアイシスの手を引く。

すしおぼつかない足取りで、アイシスは輪に飛びこんだ。

団員たちがやんややんやと囃すので、気分にかかせてアイシスは歌を披露した。エルフの歌だ。

歌詞の意味を解する者はネトレト以外にいなかったが、もちろん彼とてすべてをうまく理解できるわけではなかったが、とにかくアイシスの歌は聴く人すべてを魅了した。

澄み切った少年の声に、語りかけるような優しい音階。

ラナは両手を打ち叩くと、アイシスを追って輪の中に踊り入った。

ネトレトは足場に腰かけ、ゆっくりと酒を飲んでいた。

これほど心が休まったのは、いったいいつの時以来だろうか。

気づかないうちにほほ笑んでいて、彼はそのことに驚いた。

すると、どっかと音がしてとなり人が座った。団長だった。

「優勝おめでとう。いい夜をありがとうね」

いえ、とネットレトは答えた。

団長が杯を掲げ、ネットレトはそれに自分の杯をかちりと当てる。

「あんたはいい出会いをしたね」

「本当に」

団長は目を細めて舞台を見た。

そのうえではラナと団員とが逆立ちをしたままぶつかかりあっていた。どうやら倒れたほうが負け、というお遊びらしい。

わっと見物人が声をあげ、団員は大きく前に倒れた。

「純粹で、まっすぐな子どもたちです。あまりに無垢で、怖くなってしまう」

団長はネットレトの横顔を見た。

まっすぐなまっつげがきれいに並んだ、切れ長の瞳。

団長はふふ、と笑った。

「あたしから見たら、あんたも子どもだけだね」

ふ、とネットレトは小さくほほ笑む。

「急いで大人になんてならなくていいんだよ。ゆっくり成長すればいい。母ちゃんに甘えたければまた“花移り座”にいらっしやい。あたしはいつでもあんたを歓迎するよ」

ふたりは握手を交わした。

団長の手は大きく、豆だらけで、とても温かった。

アージエさんはぼくが幸せにするぞ、とハタが力強く宣言するのが聞こえた。

夜がすっかり更けたころには団員のほとんどが寝静まり、アイシスとラナもそれに混じって寝息をたてていた。

どの寝顔を見ても、うつすら笑みが見えるようだ。

彼らはいったいどんな夢を見ているのだろう。

風邪をひかないよう、ひとりひとりに毛布をかけてやりながらアージエは思った。

彼女の首には銀のロケットが光っている。  
ネットレトに選んでもらったものだ。

ロケットには少しばかりのものを入れることができたので、アージエは彼がいつも佩いている剣から、ひとつの小さな石をもらった。赤色に輝くその石は、アージエのロケットの中でころころと揺れて音を鳴らした。

「意外と甲斐甲斐しいよね、あんた」



ふり返ってみればリグルである。  
彼は深緑の瓶を持っていて、うっすらと酒のおいがる。

「意外と、は余計じゃない」

「そつでもないよ」

あはは、とリグルは笑った。

直接瓶に口をつけ、傾けて喉に流しこむ。

アージェはそのようすをじっと眺めていたが、ふと優しい声で言  
った。

「ねえ、あなたって素敵よね」

リグルは瓶を口から離し、片眉をあげる。

「気持ち悪。なに、いきなり」

「言ってみただけだよ」

そう言っつて背を向けてしまうと、アージェはまた毛布を配りにか  
かった。

「あんたもなかなかいい女だよ」

アージェはふり返るとにっこり笑った。

翌朝、アイシスは目を覚まして驚いた。世界が揺れているではないか。

どうやら酒が体に合わなかったらしい、アイシスは頭の痛みに顔をしかめた。

ラナは彼の太もを枕にして眠っていた。

アイシスは苦笑いしたが、驚いたことに、そのとなりでリグルが眠っているではないか。

彼のそばには酒の空瓶が三本転がっていて、小さな肩がゆるやかに上下している。

上半身を起こしたまま、起きる気配のない頭をふたつ太ももに乗せ、どうしたものかとアイシスは痛む頭を悩ませた。

「それじゃあ、今度こそお別れだね」

四人は野営地の前に並んで立った。

団長のうしろには全団員が控えている。

彼らの多くは涙を流しながら笑っていた。ハタにいたっては大泣きである。

アージエは泣いていなかった。

「これからどこへいくんだい」

「北へ向かいます」とネットレットが答えた。

それから団員らは一列に並び、四人はそのひとりずつと固い握手を交わした。

アイシスは共に玉乗りを練習した女団員と抱き合った。

「あなたと一緒にできてよかったわ。お元気で」

「あなたも」

アージエはネットレットの手を握り、ロケットを指で弾くところこり笑った。

「大切にします」

「ああ」

すると彼女の顔がくしゃりと歪み、かと思うとあっという間に大粒の涙がこぼれ落ちた。

「やっぱり我慢なんてできない」

アージエはわあわあと声をあげて泣いた。リグルはにやにやして

いる。

最後に四人は団長からの熱い抱擁を受けた。

たつぷりとした胸と、それ以上に貫禄のある腹とに、リグルを除く三人はひどく狼狽した。

そんな彼らを見て団長は愉快そうに笑い、餞別だ、と言って四人との尻をばしりとやった。

アイシスは背骨まで震えあがる心地がした。

そして一行はマーニヤを去った。

アイシスとラナは何度もふり返り、リグルは一度だけふり返って手を振った。ネットレトは前だけを見ていた。

四人の背中が小さくなり、すっかり見えなくなってしまうまで“花移り座”は手を振り続けた。

吹きすさぶ冷たい風も、彼らを凍えさせることはできなかった。

## 第三十話：花肥やし

### 『聖伝』 第三十話

一行は舗装された道を歩いていった。

ときどき荷馬車がゆっくりと彼らを追い抜いていった。かぼりかぼりとひづめの音が聞こえる。

四人には時間の流れがひどく緩やかに感じられた。

このところ、彼らは忙しすぎたのだ。

北からの風は冷たかったが、よく太陽が照っているおかげでそう寒さを感じなかった。

アイシスたちは他愛もないことを話し、笑いながら歩いていった。

「元気だよね」

追いつ追われつしながら、アイシスとラナはずっと前へと駆けていく。

リグルは頭の後ろで手を組んだ。

「十七、八のときってああだっけ」

「さあな」

ネトレトから見れば、彼らは年の割にどうも幼く思えるのだが。

「あんたはどんな十八歳だったの」

ネトレトは肩をすくめて見せた。

そうしてすぐに十日ほどがすぎた。

彼らは毎日歩き続け、二度小さな町を訪れ、三度魔物に遭遇した。

その魔物というのは犬ほどの大きさだったが、動きが恐ろしく素早いのだった。

ネトレトさえ手を噛まれてしまい、アイシスたち三人はそれ以上に傷を負った。しかし旅の妨げにはならなかった。

そのうちすっかり野宿にも慣れた。  
体を休める場所を探すのは、ずば抜けて目のいいアイシスの仕事となった。

その日、太陽が傾きはじめていたので、アイシスはいつものように目をこらして辺りをうかがった。

手を目にかざして眩しい夕日を避ける。

やがて前方を見据えて「あれ」と小さく声を出した。

「どつした」

「森が見えるよ。林かな」

このところずっと草原ばかりが続いていた。ために夜は交代で見張りを置かねばならず、ゆっくりと眠ることができずにいた。

木があるならばありがたいと、一行はアイシスが指さす方へと向きを変える。

数時間も歩くと、彼らは見事に手入れされた木の群れの前に着いた。

「これは」とリグルが意外そうな声をあげた。「どつかの金持ちの別荘らしいね」

木々の向こうには大きな門が見えた。

さらにその向こうに、立派なレンガ造りの建物が見える。

部屋を借りられないか聞いてみようぜ、とラナが言い、四人は門へと近づいた。

すぐに使用人が出てくる。

ネットレトは旅の途中であることを話し、一晩の滞在を乞うた。

男はうなずき、奥さまのご意見を伺ってくるから、と言って建物へと向かった。四人は彼の帰りを門の外で待つ。しばらくして戻ってきた男は門を開け、一行を屋敷へと招き入れたのだった。

ずいぶんと広い庭だった。

あちこちに花壇が作られており、どれも手入れが行き届いている。花たちはそろって胸を張り、アイシスたち四人を迎えているようだった。

聞けば、屋敷の主人であるご夫人が、娘を喜ばせるために整えさせているのだそうだ。

「お体の弱いお嬢さまに、都会の空気は毒でございますから。それに比べてここはいいところですよ」

使用人の男は誇らしげだった。

アイシスは彼の話の話を聞きながらうしろをついて歩いていたが、ふと人影に気づいて目をやった。

見ると、ひとりの少年が腰をかがめて土をいじっていた。

使用人はアイシスの視線に気づいたようだ。

「彼がこの屋敷の花を育てているのです。彼が愛でれば花はよく咲



きますので、屋敷では彼を花肥やしと呼んでいます」

「花肥やし」

「はい。あいにく彼には名前がございませんので、みなそのように呼んでおります」

アイシスはもう一度少年に目を向けた。

こちらに背を向け、少年はせつせと仕事に打ちこんでいる。

土で汚れたズボンから、日に灼けた足が二本きれいに伸びていた。

四人は思っていた以上の歓迎を受けた。

屋敷の夫人はわざわざ玄関先まで迎えをよこし、一行はすぐに夫人のいる客室へと通された。

「よくいらっしやいました。旅の道中、さぞお疲れでしょう」

ネトレトは深々と頭をさげ、三人はそれに習った。

ネトレトが頭をさげたまま突然の訪問を詫びると、夫人はよく通る声で顔をあげるようにと言った。

「お気になさらずとも、部屋はたくさん空いております。この屋敷はわたくしたち家族ふたりには広すぎますからね。

それよりも旅のお話を聞かせていただきたいわ。きっと娘も喜びます。娘は体が弱く、あまり世間を知りませんから」

挨拶を終えると、四人はそれぞれ一室ずつを与えられた。

それから彼らは体を拭い、土ぼこりなんかをすっかり落とし、まっぴらから、用意された服に袖を通した。

使用人が部屋のドアを叩き、夕食の準備ができましたと誘いにきたのは、それらをすっかり済ませてしまふころだった。

飾り気の多い服に身を包むのは、なんだかとても気恥ずかしい。アイシスは顔を赤らめ、袖のフリルを引っぱってみた。

傑作なのはラナだった。

男くさい彼の顔に、真っ白のリボンはどう見ても似合わないのだ。

あまりラナらしくはないね、とアイシスはあいまいに感想を述べたが、リグルなどは正直にも指をさして彼を笑った。

当のリグル本人は、これがなかなか様になっている。

いつもの彼は長い前髪を無造作に垂らしているのだが、いまはすべて後ろにまとめて束ねてあり、それがとても服装と合っているのだ。

案内された部屋には長い机が置かれており、アイシスたち四人は上客として迎えられた。

向かいには夫人と、例の娘だろう、頬の赤みが抜け切らない少女が座っている。

上品な空気にアイシスはどうも緊張しっぱなしだったが、この屋敷は嫌みつたらしいふうでもなく、金持ち嫌いのラナも女主人には好感を抱いた。

それに、料理はとてもおいしかった。

リゲルは普段の爪をすっかり隠しており、余所行きの声で、おもしろおかしく冒険譚を語って聞かせた。

「あの」

食事を終えてしまうと、アイシスはおずおずと口を開いた。

「こちらの庭を世話している、花肥やしという少年のことですが」

「ああ」と夫人は言い、「彼がなにか失礼でも」

「いえ。すこし、気になって。この屋敷の花はとても幸せそうで、どんな人が育てているのかと」

そう言っていたけると花肥やしも喜びます、と夫人は言った。

そうして四人はそれぞれの部屋に戻ったのだが、月も雲に隠れようかというころ、静かにアイシスの部屋をおとなう人物がいた。

小さくドアを叩く音がしてアイシスは身を起こした。

だれだろう。

ラナなら前触れなくドアを開けるはずだから、リグルあたりだろうか。

はい、と応えて次の言葉を待つ。しかしドアは沈黙したままだ。訝しく思いながらドアを開ける。そしてアイシスは凍りついてしまった。

青い瞳がくりくりと揺れる。

小さな口は力なく開けられていて、言葉も出ないといったようすだ。

頬に赤みがさす。

アイシスは何度か口を動かし、どうにか声を出そうとした。しかしうまく言葉にならない。

ようやく絞り出した声は掠れ、奮え、泣いているかのようなだった。

「エザ………?」

なんと久しぶりに呼ぶ名だろう。

エザ、とアイシスはもう一度声に出した。

「エザなの？」

問われて訪問者はこくりとうなずく。

かと思うと、アイシスと同じ色をした彼の目から、ぼろぼろと大粒の涙がこぼれだした。

アイシスも気づけば泣いていた。

声もあげず、ただ信じられない奇跡に心が奮え、感情がこぼれだすかのように涙を流し続けた。

澄んだ涙は彼の細いあごを通り、毛足の長いじゅうたんにぼつりと落ちては吸いこまれた。

青い瞳、すこし癖のある黒髪、小さな鼻に、厚みのある唇。

長い時間が経っていようとも、アイシスが彼の姿を見て気づかないはずがあるだろうか。

記憶にあるよりもずいぶん大人びた顔をした、死んだはずの弟がいま目の前に立っていた。

その夜、エルフの兄弟はどれほどの涙を流しただろうか。

なにも言わず、ただ信じられないというように互いを見つめ、ずいぶん時間が経った。

気がつけばアイシスはエザをしつかりと抱きしめていて、エザは懐かしい兄の背に手を回してしがみついた。

「やっぱり兄さんだった……！」

そう言うと、エザは声をあげて泣き出した。

エザを部屋に招きいれ、ソファに座らせる。

エザはまだ苦しそうにしゃくりあげていたが、すこしは落ち着いたようだ。

アイシスは気持ちがいびんと昂ぶっていた。もしかすると自分は夢を見ているのではないだろうかとすら思った。

それほど信じられないのだ、再び弟に会える日がくるなんて。

お茶をいれようか、と思った。

ネットレトに習い、そうすれば、きっと心は落ち着くだろう。

しかしあいにく部屋には水場がなく、アイシスはうろつろつとしばらく歩き回ってからソファに身を沈めた。

知らず、深い息がもれる。  
となりのソファを見ると、やはりエザがしゃくりあげている。

エザがいる。

エザが生きている。

アイシスは叫びだしたくなるのを必死でこらえた。

エザは死んだと思っていた。

長く失われていた、九年前の記憶。

あの日、あの悪夢のような日に、エザは崖の向こうへと渡ることができたが、しかしあの状況だ。

無事に遠くまで逃げ延びられようとは思えなかった。どう希望的に見ても、だ。

その弟が生きていた。

そしてふたりは再び巡りあったのだ。

「本当に、エザだよね」

エザはうなずく。

「生きて、いたんだね」

もう一度、エザはうなずく。

ようやく落ち着いたと思っていたが、しかし彼はまた嗚咽をはじ

めた。

そうだ、とアイシスは思い出した。

ぼくは泣き虫だったが、エザはそれに輪をかけた、極上の泣き虫だったじゃないか。

変わらない、やはりエザだ。

アイシスは笑った。笑いながら、その目にもまた涙が浮かんだ。

しばらくアイシスはエザが泣きたいように泣かせておいた。

ときどきその肩を抱いたり、背中をさすったりした。

そうすることで、現実にはエザはここにいるのだと、アイシスもしだいに理解できていくのであった。

「ごめんなさい」とエザは言った。

「いきなり、こんな。それに、泣いてばかりで」

「謝ることはないよ」

アイシスはすっかり兄の声だった。

「落ち着いた？」

エザは深くうなずき、顔をあげると泣きはらした目でにこりと笑



った。

もう二度と見られないと思っていた笑顔。  
アイシスの胸がきゅっと音をたてた。

「あの日、ぼくはエザが 死んでしまったと。そう思っていた」  
「ぼくも。ぼくも兄さんはきつと、って。まさかこんなところで出会えるなんて」

エザはゆっくりと話し始めた。  
兄弟が離れ離れになってしまった九年前のあの日から、これまでに彼がたどった出来事たちを。

あの日、とエザは切り出した。

あの日、兄さんたちが崖に落ちてしまってから、ぼくたちはただふたりで逃げたんだ。  
もう命はないと思いつながら、それでもあの時の若いエルフは諦めずに走ってくれた。

死に物狂いで駆けてから、ふと思いついたみたいにふり返ってみたら、なんと、追っ手がひとりもいないんだ。  
近づいてくる気配すらない。

なぜだかはわからない、でもそうしてぼくたちは助かったんだ。

それでもやはり、いつ追っ手がくるとも分からないから、ぼくたちはやっぱり道を急いだ。

へとへとになって、もう一步も動けなくなるまで。

ぼくたちは見たこともない森にいて、暗いし寂しいし、とても不安だった。

なにか化け物でも出るんじゃないかって、そう思った。

そして恐ろしいことが起きたんだけど、現れたのは化け物なんかじゃなかったんだ。

六人の、ひげで顔をいっぱいにした男たちだった。

彼らは人攫いだったんだ、そして疲れきったぼくたちは格好の餌食だった。

505

そこで彼と　ぼくの命を救ってくれた恩人なのに　あの若いエルフとぼくとは引き離されてしまった。

ぼくは“商品”として男たちの荷物に加えられたんだよ。

それから彼がどうなったのかは……分からない。

ぼくはただただ怖くて、ずっと泣き通しだった。

泣いているうちに売られてしまった。

そしてこの家に来たんだ。

人攫いの男たちはとても怖くて、おまえは一生この家で働き続けるんだって言われて、ぼくはうなずくしかなかった。

唯一の救いは、ここ奥さまもお嬢さまも、本当に優しくてぼくにもよくしてくれたっていうこと。

お嬢さまとは年も近かったから、ぼくは簡単な仕事をしながらお嬢さまの遊び相手として毎日をすごすことになった。

でもぼくはやっぱり泣いてばかりだった。

ついこのあいだまで、ぼくは兄さんと父さんと、母さんの笑顔と一緒にいたはずなのに。

すごく辛くて、全部うそだと思いたくなって、ぼくは記憶をなくしてしまつたふりをすることにした。

そうすればなにも聞かれないし、なにも答えなくていいから。

ぼくは名前まで封じこめてしまつて、しばらくは名無しの泣き虫ですごした。

やがて庭の手入れの仕事をもらつと、だれかがぼくのことを“花肥やし”って呼ぶようになって。

それから十年近く、ぼくは花肥やしとして生きてきた。

そして、これからもずっとそうなんだろうって。

この別荘に住み始めたのは、実は最近のことなんだ。

以前はずっと東のほうに住んでいたんだけど、お嬢さまの体の具合が悪くなつて、空気のいいところへ、と奥さまが移住を決められたんだ。

三ヶ月ぐらい前のことだよ。

旅の人が屋敷に泊まつていくことは、特に珍しくもなかったよ。

だからぼくも、兄さんたちがきたときもあまり注意を払わなかったんだけど、兄さんたちを出迎えてくれた使用人さんがいたでしょう、彼がぼくに教えてくれたんだ。

世にも珍しい、銀の髪をした少年がいたよとね。

それを聞いた瞬間、ぼくは兄さんしかいないって思った。

心臓がばかみたいに波打つて、仕事なんて手につかなくなっちゃった。

奥さまもお嬢さまもとても優しいけれど、ぼくはやっぱり召使いだから、本当はこんなところきてはならないんだよ。

でも、がまんできなかつた。だから夜を待つて、こっそり会いにきたんだ。

エザは一気に話し終わると、息を深く吐いて目を閉じた。

アイシスは彼の話聞き、彼の恐ろしい経験に胸を痛め、悲しくなった。

泣き虫で、寂しがり屋で、いつも自分のうしろをついてきてばかりだった弟。

楽しかった記憶を抱きながら、召使いとして働かなければならぬい苦しみ。

アイシスのとなりにはラナがいてくれたが、エザにはだれもいなかった。

エザの目には涙が光っていたが、彼は小さな手でそれを拭うとにっこりと笑ってみせた。

「ぼくは、ずっと逃げていたんだ。たくさんの死から。でも、兄さんとこうして奇跡のように出会えたことで、きちんと向き合うことができた」

「うん」

強くなったものだ。

アイシスは弟を誇りに思った。

兄弟は時間が経つのも忘れて話しこんだ。

九年という辛く長い期間を埋めようとするかのように。

気づけば窓の外は明るくなり始めていた。

いけない、とエザが言い、彼は慌てて立ちあがった。

「屋敷のみんながもうすぐ起きだしちゃうや。ぼくは帰らないと」

アイシスも立ちあがった。

ふたりはもう一度、お互いの存在を確かめるかのように抱き合っ  
た。

「ねえ、ぼくは門近くの小屋で暮らしているんです。夕方からだっ  
たらそこにいるから、よかったら訪ねてきてくれないかな。ぼく、  
上手にタルトが焼けるんだよ」

きっと、とアイシスが約束すると、エザはそっと部屋から出てい  
ってしまった。

彼の背中がドアの向こうに隠れてしまうと、やはり夢だったので  
はないか、という気持ちになる。

アイシスは頬を思い切りつねってみた。

どっちら夢ではなさそうだった。

## 第三十一話：おとつと

### 『聖伝』第三十一話

アイシスは軽く眠った。

そして、幼い自分とエザとが手を取り走る夢を見た。

ファルファラの木は、夢のなかでも夢かと思うほどに美しく、黄金に輝くのだった。

目が覚めると泣いていた。

アイシスは鏡を見、苦りきってため息をつく。くりくりと大きな目は、昨夜からの涙ですっかり腫れてしまっているではないか。まったく、これではユフィロスレジアにまた笑われてしまう。

アイシスが着替えていると、なんの前触れもなくドアが開けられた。

アイシスは小さく悲鳴をあげてシャツをかぶる。

入ってきたのは、やはりというか、ラナだった。

「おはようっ！」

苦笑しながら挨拶を返す。ラナは朝から元気いっぱいだ。

「ラナ、部屋に入る前はまずドアを叩いてからって」

叱られた本人はきよんとしている。

細やかな礼儀だとか、そういうことが、ラナにはすこし欠けている。

そういう不器用なところは彼の魅力でもあったのだが。

そうしていると、朝ごはんの準備ができたと使用人が告げにきた。すぐに、と答えて部屋を出ると、ネットレトもリグルもすでに用意を終えていた。

そろったところで、アイシスはこの屋敷にあと数日の滞在をお願いしたいんだけど、と切り出した。

「俺はかまわないけど、どうしてだ」

「うん……まだ信じられないんだけど、ぼく、弟に会ったんだ」

「弟？」

リグルが訝しげな声をあげた。アイシスに弟がいたことは、彼にとって初耳だった。

そこでアイシスはすべてを話した。



九年前の事件で、弟とは生き別れてしまったこと。あの状況から考えて、彼の命は絶望的だと諦めていたこと。しかし昨夜、月とともにアイシスの部屋を訪れたのは、間違いなく最愛の弟であったこと。

「へえ、あの“花肥やし”がアイシスの弟」

「うん。本当の名前はエザっていうんだけど、彼は記憶をなくしたふりをしていただけだって。そのほうが、彼にとって都合がよかったから」

言いながら、アイシスの胸が詰まった。エザの涙が甦る。

なら夫人にはきみから言うといい、とネットレトは言ったが、しかしアイシスがそう願うことはなかった。

夫人のほうから、もう数日泊まっていかれては、と申し出てきたのだ。

「娘もわたくしも、クロツブズさんの語るお話にすっかり夢中になつてしまったものだから。よろしければ、もうすこし長く聞かせていただけないかしら」

「ご夫人が望まれるなら」とリグルは恭しく礼をした。

ラナは鼻を白ませたが、しかしリグルが見せる笑みはとても品がよかった。

夫人がいつてしまうと、リグルはいつものように口の右端をあげてこう言うのだった。

「俺、あの手のマダムに気に入られるのって得意なんだよ」

なるほど、頭のきれいな彼はおもしろく会話を広げることができし、合間に上手なお世辞をはさみ、女性を喜ばせることだってできる。

それに、余所行きを意識したときの彼の声といったら、これがないでもなく甘ったるいのだ。

耳元で囁かれてしまつては、女性はきつと髓までとろけることだらう。

マーニヤで看護婦はああ言つたが、実際、リグルが自白しない限りは、彼の本当の性別など分かりそうにもない。

とにかく、そんな彼の功績もあつて、アイシスたちはしばらく快適な寢床を借りることができたのだった。

夕方に、とエザは言つたが、朝ごはんを終えてしまうとアイシスはすぐに小屋を訪ねた。

いてもたつてもいられなくなったのだ。彼はずっとそわそわと落ち着きがなかつた。

しかしエザの姿は小屋に見えなかった。  
小屋にいた使用人が、花肥やしなら中庭にいと優しく教えてくれたので、アイシスはすぐに足を向けた。

中庭は花であふれていた。

アイシスはすぐに弟の小さな背中を見つけることができた。  
彼は花壇のそばにしゃがみこみ、土のようすを見ているようだった。

「エザ」

呼びかけるとエザは飛び上がった。  
文字通り飛び上がったのだ、彼はしゃがんだままだったけれど。

「に、兄さん、驚かせないでよ」

「いめん」

兄弟は笑いあった。

エザの笑顔を見てみると、彼が生きていたという喜びが、アイシスの心にじわじわと染みこんでいく。  
アイシスは弟と並んでしゃがみこみ、彼の仕事を手伝ったりして一日をすごすことにした。

「兄さんはどうして旅をしているの」

「どうしてと言われるとなあ」アイシスはすこし考えこんだ。

それから言葉を選びながら、

「ぼくにはたぶん、なんらかの“すべきこと”があるんだ。それを探しに」

エザは理解できなかったのだろうか、あいまいにうなずいた。

「旅の仲間はともいい人たちばかりだよ。毎日賑やかで、笑いが絶えなくて」

よかった、と言ってエザはほほ笑んだ。

アイシスの顔が翳る。

「ごめんね。あのとき、きみを守ってあげられなくて」

エザはゆっくりと首をふる。

ふたりはしばらく口をきかなかった。

並んで座り、花が風に揺れるさまをただ眺めていた。

そんな兄弟の姿を、すこし離れた場所からラナが見ていた。

ネットレトは部屋で地図を広げていた。リグルが遊びにきている。

「このまま北に向かうの」

「そのつもりだ」

「じゃあ、山を越えなきゃね」

「ああ」

リグルは短剣をもてあそんでいる。

ときどき窓からの光を当てて刃に反射させていたが、いたずら心が働いたのだろうか、地図と睨めっこするネットレトの目元に光を向けた。

眩しさに目をしばたかせ、ばかなことはやめろ、と言うのを聞くと満足したようだ。

リグルは刃を折りたたんで短剣をなおした。

「山を越えたらユリシア国でしょ。俺、いったことないな」

返事はない。

リグルはちらりとネットレトを見やった。

彼は地図に顔を向けていたが、どうも真剣に見ているようではな  
いらしい。

「ねえ。俺たちはどこに向かって進んでいるの」

「思うままに」

「なんのためにいくの」

ネットレトは肩をすくめた。

「あなたはどうして旅をしてきたのさ。どうしていつも図書館で調べ物をするんだ」

ネットレトはやはり答えなかった。

「きみが答えを知るべきならば、いずれわかる時がくる””って?」

「まあ、そういうことだ」

リグルは大げさにため息をついた。

ソファから立ちあがり、ゆるゆると体を伸ばす。それから彼は、思いついたような調子で言った。

「なあ、ネットレト。分かってもらえないのと、分かってもらおうとしないのとは、大きく違うんだぜ」

それじゃマダムの相手でもしてくるかな。

飄々と言って、リグルは部屋を出ていってしまった。

ネットは地図から顔を離さなかった。

しかし、リグルの足音がすっかり遠ざかってしまってから、彼にしては珍しいことに、ぼつりとひとり言を呟いた。

「分かってもらおうとしない、か。そのとおりかもしれないな」

どうするつもり、と聞いたのはリグルだった。

「もう四日が経つんだよ。兄弟は奇跡の再会を果たし、喜んだ。結構じゃないか。でも、そろそろ次の動作を選ぶべきだよ」

アイシスは神妙にうなずいた。

それは彼自身も考えていたことなのだ。

いつまでもこの世話になっているわけにはいかない。  
アイシスは選択を迫られた。

「ぼくはそろそろ発たなきやならない」

その夜、いつものようにエザを小屋に訪ね、アイシスは言った。  
エザは青い目を揺らし、悲しげな顔をしたが、そう、と小さく呟いた。

「そうだよ。ずっとここになんて、いられないもの」

「エザ。ぼくはまた旅に出る。とても危険な旅だ」

「うん」

「明朝、食事の席で夫人たちに礼と、別れを告げる。そのあとすぐに屋敷をでていく」

エザは返事をしなかった。ただわずかにうなずいた。

アイシスはエザのそばを離れたくなかった。

四日間、彼らはほとんどの時間を共にすごしたが、しかし九年の時間は埋めようがなかった。

話は尽きず、エザの笑顔も見足りなかった。

本当なら、無理を言っても連れていきたい、そばで笑っていてほしい。

しかし決めるのはエザだ。

エザは売られて屋敷に置かれている身だ。

もちろん、九年間彼は夫人と娘のために身を惜しんで働いたので、役目は十分に果たされていることだろう。

アイシスはあえて自分の気持ちはなにも言わなかった。



その日兄弟が交わした会話はそれだけだった。

部屋に戻るとアイシスはベッドに突っ伏し、しかし目は開いたまままで考え事にふけた。

エザ。大切な弟。

いまとなつては、肉親は彼ただひとりである。

小さな物音にはっと顔をあげれば、心配そうな顔をしたラナが立っていた。

アイシスは困ったように笑った。

「ドア、叩いた？」

「いいや」

やっぱり、とアイシスは軽くふきだす。

ラナはベッドに腰かけた。

「どっつするんだ」

「ぼくは、なににもできないよ。選ぶのはエザだもの」

「そっか」

テイエラを発つたときのことをラナは思い出した。  
あのときもアイシスは、ひどく寂しそうな顔をしながら、しかし  
なにも言わずに去っていった。

あのとき決断したのはラナだった。いま、その役目を負うのはエ  
ザだ。

彼はどんな答えを出すのだろうか。

沈黙の夜は長い。

アイシスは思いつめたようすで枕に顔をうずめ、一言も話さない。  
ラナはそんな親友を、慰めるでも勇気づけるでもなく見守った。

今日ここを出ます、と聞いたときの夫人の顔は見ものだった。

彼女はあからさまに失望し、それから自分がそんな顔をしたこと  
に驚いているようだった。

「急なんですね」

申し訳ありません、とネットレトが頭をさげた。

朝ごはんの席で、夫人も娘もとても明るかった。

風変わりな四人の旅人とすごす、最後の時間を懸命に楽しんでい  
るかのようだった。

リゲルの饒舌にも拍車がかかった。  
彼はどうやらこの親子をなかなか気に入ったようだった。

服はそのまま夫人からの贈り物としていただくことになった。  
アイシスたちはお礼を言ったが、しかしラナはそう嬉しそうでもなかった。

部屋を清め、荷物をまとめる。

すっかり準備が整ってしまつと、四人は玄関に立った。  
夫人と娘がそろつてそれを見送る。

「お世話になりました。よくしていただいた恩は忘れません」  
「こちらこそ、珍しいお話をたくさん聞けて楽しかったですわ」

リゲルと夫人は握手をかわした。あとの三人もそれに続いた。

アイシスは胸を高鳴らせながら視線をめくらせたが、しかし弟の姿は見えなかった。

最後まで彼は弟の姿を求めたが、くせのある黒い髪はついぞ見当たらなかった。

彼は四人を見送ることさえしなかったのだった。

「なあ、元気出せよな」

一路北へと向かいながら、ラナが言った。  
アイシスは大仰に目を丸くする。

「やだな、ぼくは元気だよ」

それから、エザのことは仕方ないよ、と言った。彼がそう決めたんだから。

事実、アイシスはあまり落ちこんでいなかった。

もちろん、エザと離れたくはなかった。しかし、この危険だらけの旅に彼が同行するのも不安だった。

彼を守ってやるだけの力は、九年前にせよいまにせよ、まだ自分にはないとアイシスは負い目に思っていたから。

どちらかといえば、リグルのほうに沈みがちに思われた。

彼はすこし遅れて歩いており、アイシスもラナもそれに気づくよ  
うすまなかったのだが。

「あの親子とずいぶん気があったようだな」

ただネットレトだけが気づいていたようで、彼はさりげなくリグルに歩調をあわせた。

リグルはちらとネトレトを見、また視線を前に戻す。

「まあ、ね。いい人たちだった」

「ああ」

しばらくの間。

リグルは手を頭の後ろで組んだ。

ひゅうひゅうと口笛を吹く。

でたらめな音階が、冷たい風に流れていく。

ネトレトは黙って彼が吹くままに耳を傾けていたが、やがてそれがぴたりと止んだ。

「あの人、ちょっとばかり似ているんだよ」

リグルは具体的に言おうとしなかったが、しかしネトレトには理解できた。

彼は、あの夫人に母親を重ねていたのだ。

抗いようのない、恐るべき血の力によって殺めてしまった母親を。

「私も稀に、あの年代の女性に　母の姿を見ることが、ある」

リグルは片眉をあげてネットレトを見た。

ネットレトもリグルのほうを見たが、目が合うとすぐにまたそらしてしまった。

リグルは口元に笑みを浮かべたが、それはいつもの“にやり”ではなかった。

日が中天にかかった。

四人は足を止め、思い思いの場所に腰をおろして昼ごはんをとった。

干し肉をかじるのは久しぶりだ。

豪華な食事を食べたあとでも、干からびた肉をおいしいと思う自分にアイシスは安心した。

おおい、という声が聞こえたような気がした。

アイシスは背筋を伸ばした。そんな彼の横を風が通りすぎた。いまのは風のうなりであったか。

ため息をひとつつくと、アイシスはまた干し肉に視線を落とした。

「おおいー」

しかし彼の背筋は二度伸びた。

今度は確信を持ってアイシスは立ちあがった。  
風の流れてきたほうを見やる。

「エザ」

「おおい、兄さん！」

「エザ！」

なんだなんだとあとの三人が成りゆきを見つめる中で、アイシスとエザはひしと抱き合った。

彼はやってきた、彼は決断したのだ。

一度諦めていたことだったので、アイシスの喜びようといったらなかった。エザの顔にも笑みがあふれていた。

泣き虫な彼の目には涙さえ光っている。

「ぼく、昨夜兄さんに言われたときから決めていたんだ。もう離れたくない、一緒にいくつて。奥さまもお嬢さまも、ぼくのために悲しんでくれて、それから祝福してくれた。

ぼくはね、兄さん、朝から全部の花に別れを告げてきたんだよ」

アイシスは弟の髪をくしゃりと撫でた。そして声をあげて笑った。

「あれ、置いてきてよかったね」

リグルの呟きに、ネットレトがうなずいて答えた。

いまごろ夫人は気づいているだろうか。彼らに貸し与えた部屋の  
一室に、小さな袋がひとつ置かれていることに。

中に入っているのは、剣比で得た賞金の一部だ。

宿のお礼を、と言っても受け取るうとしなかった夫人に、それは  
彼らからの第一級の心配りだった。

数日分の宿泊料としてはあまりに多いその金貨は、エザという少  
年と出会わせてくれたことへの感謝ということにしておこつ。  
ふたりはそう思った。



## 第三十二話：復讐のときを待つ男

### 『聖伝』 第三十二話

エザが旅の仲間に加わった。それはアイシスにとって大きなことだった。

なぜならエザは、アイシスに兄としての自覚を芽生えさせてくれたからだ。

兄として、強い男としてふるまおうとすると、アイシスはこれまでいかに自分が守られてきたかに気づくのだった。それは歩く速さだったり、荷物の重さだったり。

「あらためて紹介するね。こちらはエザ、ぼくのひとつ下の弟です」

「あ、あの、よろしくお願いします」

緊張のためか、エザの顔は赤い。なるほど、兄弟はそろって赤面癖らしい。

リグルが囁して手を叩き、エザは恐縮したようすで頭をさげた。

「エザ、こちらはラナ。ぼくの大親友で、彼のお父さんは命の恩人なんだ」

「よろしく！」

エザは小さく会釈した。

どうも長い使用人生活のせいで、必要以上に礼儀正しくしてしま  
うらしい。

ラナはそんなエザの背中を叩き、大きい手ですこし乱雑な、彼流  
の握手をかわした。

エザは彼の右手が硬いことに驚いた。

ラナは非常な努力家で、強くなるために剣の稽古を欠かさないの  
だ。

「アイシスは俺にとっちゃ手のかかる弟みたいなものだからよ、つ  
まりお前も俺の弟っていうわけだ。なんなら兄さんって呼んでくれ  
ていいんだぜ」

「ちょっとラナ。手のかかる、は余計でしょう。ぼくなんか時々、  
きみのお母さんになったような気がしたりさえするんだよ。つまり  
エザにとっては甥っ子になるわけだ」

エザは目を白黒させている。

気を取り直して、とアイシスはリグルの紹介にうつった。

「こちらはリグル。彼は」

「元盗賊で、恐ろしい肉食獣のような性格をしたやつだ。気をつけ  
たほうがいいぞ」

「えっ」

ちょうど握手をかわしていたエザは、正直にもラナの言葉に怯え、  
リグルの顔をうかがった。

リグルは口の右端だけをつりあげた。

どうやらこの状況を面白がっているらしい。

「怖がらなくてもいいよ。俺、草食動物は襲わない、心優しい肉食  
獣だから」

「えっと、あの、はい」

これまたラナに続き、彼流の挨拶といったところだろうか。  
エザはすっかり気をのまれてしまったようだ。

妖艶にほほ笑んでみせるリグルを見て、アイシスはネットレトに囁  
いた。

「じゃあ、ぼくたちは肉食動物ってことなの」

耳聡いリグルは鼻を鳴らす。

「残念だけど、嬢ちゃんは草食動物だよ。ただね、あんたはいじめ  
てくださいって顔してるからさ、いじめないわけにはいかないんだ

「よ」

「そんな顔してないっ」

「無自覚って怖いよね」

アイシスは肩を怒らせたが、やがて諦めた。彼にはまったく敵わないのだ。

「最後に、こちらはネットレト。この旅の指揮をとってくれるのは彼だよ。とても物識りで、おそろしく強いんだ」

ネットレトとエザは静かに握手を交わしたが、リグルが横から茶々をいれた。

「ねえ、色男もなにか面白いこと言いなよ」

「そのほうがエザの緊張もほぐれるぞ」

ラナまで珍しく同調する。

ネットレトは困ったように眉根を寄せたが、結局なにも言わなかった。

それもやはり、彼流なのだ。

とにかく個性的な顔ぶれだった。

そして不思議な魅力がある人物ばかりだった。

エザの胸は、これから始まる毎日への期待でときめいた。

旅慣れていないエザが加わったことで、歩みはすこし遅くなった。

それに、寒さは日々増している。

山のほうから吹いてくる風はとても冷たく、アイシスたちは歯を鳴らしてコートの前を合わせた。

なかでもアイシスは寒さに弱かった。

暖かな気候のティエラでも、彼の寒がりはなかなか知られていたものだ。

対してネトレトはそう凍えたようすもない。

彼はもともと北の国ユリシアの出身で、これくらいの寒さには免疫があったのだ。

「さ、寒い」

アイシスは身を奮わせた。

五人は寂れた教会にいた。

ぼつりと草原に建つその教会は、時代に忘れていかれたかのよう

だった。

それを見つけたときアイシスは大喜びした。あの教会なら、野宿する彼らをすこしは風から守ってくれるだろうと。

しかしその考えはすこし甘かった。

ぼろぼろに崩れ落ちた壁からは、ところかまわずすきま風が吹きこんでくるのだから。

唯一助かったのは、鍋や皿といったいくつかの備品が残っており、おかげで彼らは湯をわかすことができたことぐらいだろう。

大した具材はなかったが、それでも久しぶりに飲むスープは彼らの体を芯からよく温めてくれた。

「寒いのが、苦手だね」とリグル。

アイシスはスープの器を両手に包みこんでうなずいた。すっぽりと毛布をかぶっている。

でもそれは困ったね、とリグルは言った。

「これから山越えしなきゃならないのに」

「えーっ」

アイシスはネットレトに地図を広げてもらった。

ネットレトは現在地の辺りを指で示してくれたのだが、なるほど、

その北には山々が群れになっている。

ツィード山脈と呼ばれるその山群は、二列に連なつて東西に伸びており、それが北のユリシアと南のエヴァノンの国境になっている。地図で見てもとげとげしく、険しそうなその山並みに、アイシスはすっかり気が滅入ってしまった。

そもそも、山らしい山を登ったことがないのだ。一応、エルフの国フアニマは険しい山々のなかに潜んでいたのだが。

「おいおい、お兄ちゃん。情けない声出すんじゃないよ」

アイシスははっとした。背筋が伸びた。

エザを見る。

彼は地図を見ながらなにをかネットレトと話していたが、楽しそうに笑っているではないか。

それなのに、兄がそんなことでどうする。

「や、ぼくは平気だよ」

うん、とうなずくアイシスを見て、これは使えるね、トリグルが呟いたのはここだけの話だ。

「いま、私たちはここにいるわけだが」

ネトレトはそう言って地図を指差した。そのまますっと細い指を北にすべらす。

「ここに大きな湖がある」

「げっ。いやいや、大きすぎだろう」

地図の上に広がる湖は、まさに彼らの行く手を阻むかのようだった。

ネトレトは湖のちょうど対岸辺りを指差す。

「ツィード山脈は険しくてな、この辺りからでないと登れないんだ」

「湖を大きく迂回しなきゃならないってことだね」

ネトレトはうなずいて地図をたたんだ。

面倒だね、とリグルが言う。

「どうにか湖を渡れないのかな」

しかしその声にはだれも答えなかった。

アイシスたち三人は答えようがなかったし、唯一答えを持っていそうなネトレトはというと、険しい顔で剣を引っ掴み、立ちあがってしまったからだ。

それを受けてリグルまで剣を引き寄せたものだから、アイシスは



すっかり呆気に取られてしまった。  
エザは顔を青くしている。

一体、なにが起こるといふのか。

「おい、ネットレト」

「しっ」

ネットレトは入り口を睨み据えている。

風が吹いた。五人の髪がさらさらと揺れる。

ふと風が勢いを増し、アイシスは思わず目を覆った。

そして腕をどけて驚いた。なんと目の前には見たこともない男が立っているではないか。

アイシスは反射的にエザの前に立った。

ラナがうわずった声をあげる。

「だ、だれだよこいつ！」

男はラナのほうに顔を向けると、ゆっくりと首をかしげた。

「それはこっちの台詞ですよ。ここは僕の住居なのに」

「住居？」

訝しげな声をあげるラナをよそに、男はネットレットを見、それからリグルを見た。

「とにかく、物騒なものを置いてくれませんか。僕に害意はありませんから」

「だったらあなたも“扉”を閉じたらどうだ。精霊を控えさせて害意はないと言われても、それはあまり信用ならない」

男は驚いたように目を丸くしたが、困ったよう笑うと右手をあげた。すると、まばゆく輝く精霊が姿を現したではないか。

アイシスはその精霊に見覚えがあった。

白の衣に身を包んだ、涼やかな目元の精霊。

「ウィンディーネ」

「ご存知ですか」

アイシスはこくりとうなずいた。黒の騎士団にも、ウィンディーネを使役する魔導師がいたはずだ。

しかし男のそばに控える彼女は、かつて会ったウィンディーネとは比べ物にならないほどに美しかった。

力は美しさに比例する、というヴァネッサの言葉がよみがえる。

だとしたら、この男の力はどれほどのものなのか。

アイシスの顔に緊張の色がさした。

「エヴァノンは魔法に関する知識が遅れていると聞いていましたが、そういうわけでもないようですね」

そう言うと男はウインディーネに何事かを囁き、精霊は身を震わせるとあつという間に消えてしまった。

エザが短く叫ぶ。

彼は精霊を見るのが初めてなのだ。

「彼女は白の世界に帰しました。これであなた方も剣を置いてくれますね。それでは改めてお聞きしますが、あなた方はいったい、何者です？」

一行と男とは順に名乗りあつた。

男はハイネといった。そしてハイネは驚いたことに、ネトレトの偽名を見破った。

風の精霊は心の震えに敏感だから、とハイネは言った。

「厄介だな」

「秘密を抱える人にとってはね」

ハイネはたれ気味の目を細めて笑った。

ネトレトはなにも答えなかったし、本名を教えもしなかった。それでアイシスたちは彼をしばらくのあいだ偽名で呼ばなければならなくなった。

エザはすっかり混乱していた。

彼は魔法やら精霊やら、そういったことはまるで無縁の世界で生きてきたから。

そこでアイシスたちは彼にわかりやすくそれらを説明してやる必要があった。

「ところで、ハイネさんはどうしてこんなところで暮らしているの」

こんなに寒いのに、と言ってアイシスは体を震わせる。

ハイネは声を出して軽く笑った。

「待っているんですよ」

「なにを？」

復讐のときを、とハイネは言った。

優しげなその顔に、それはなんとも物騒で不釣合いな言葉だった。

「聞いてくれますか、僕のばかな過ちを」

そこでアイシスたちはハイネを中心に、半円を描くようにして座った。

「僕は、大切な人をあの湖に奪われてしまったんですよ」

ハイネは才気あふれる、優秀な若者だった。

ユリシアの首都トゥーデールには魔法学校があり、彼はそこを主席で卒業した。

彼には美しい幼馴染がいて、彼女もまた魔法学校を卒業したばかりの新米魔導師だった。

彼らはよきライバルで、恋人だった。

見事魔法を会得し、学校を卒業したふたりには、高級官僚の道が約束されていた。

ふたりはじきに宮廷魔導師として召集されることになっていた。それは大変な誉れだ。

若いふたりは自信と喜びに胸をいっぱいにしていた。

そんなふたりがエヴァノンにやってきたのは、王宮での仕事が始まるすこし前のことだ。

働き始めては自由に時間もとれまい。

そう考えて、ふたりはすこしばかり旅を楽しむことにしたのだ。

国境付近にある湖は、星が美しいことで有名だった。

夜、空に満点の星が輝くと、それが湖にもきれいに映るのだ。

湖畔に立つと、まるで自分の体が星空に浮かび上がったかのような錯覚を抱くという。

それをハイネは恋人に見せたかった。

湖には魔物が住んでおり、ときどき人を攫うのだという話は聞いていたが、自分と恋人の身を守るだけの力があると、ハイネは自負していた。

彼らはあまりにも世間知らずで、若かった。

ふたりは宝石にも似た夜空を堪能した。

三日も彼らは飽きることなく星空を眺めた。

それでは明日、日が昇ったらユリシアへ帰ろう。

そう考えたふたりは、忘れ去られた教会で最後の一夜をすごした。

ハイネは幸せだった。しかし、朝目覚めてみると、となりで寝ていたはずの恋人の姿がなかった。

彼女は湖の魔物に攫われたのだ。惑わされ、強い力で湖の底へとそれを決定づけるように、ほとりには彼女のお気に入りだった靴が脱ぎ捨てられていた。

ハイネは狂ったように叫び、湖へと潜った。

しかし恋人を見つけることも、彼女を攫った魔物を見つけることもできなかった。

湖は怪しい力をもって彼をこばみ、彼は長く潜っていることすらできなかった。

しかしハイネはあくる日も湖に潜り続けた。恋人を、そして恋人の敵を探して。

そうして十余年の月日が流れたのだ。

「湖の魔物は、どうも頭がいいんですよ。

おそらく、正面から対峙すれば、僕はやつを倒すことができる。

それを向こうも分かっているんですね、姿を現そうとしない。ただ自分の背に籠り、僕が入るのを阻止しているんです。

話してみるまで気づきませんでした。もう、十幾年が経っているんですね。恋人をみすみす奪われてしまった罪悪感に囚われて、どうしても僕はここを離れられないんですよ」

「十年も」

はあ、と感心したようにラナが声をあげた。  
入れこみやすい性格の彼は、ハイネにすっかり同情しているよう  
だった。

「その年月が長いのか、短いのか、正直いまの僕には分かりません。  
大切な人を失ってしまっただけでは、時間なんてまるで意味を持たない  
んです」

しっぽりとした静寂が教会を包んだ。

ふと、ハイネが困ったように笑った。

「湖に潜りながら、僕は毎日精神を鍛えました。もっと強い精霊を  
使役するために。力は力と呼ぶ、いつか僕の力で魔物を引きずり出  
してやれるんじゃないかと思ひまして。

そうして僕は風の絶対者にまで上りつめたんですが、どうやらま  
だ力が足りないようです」

「絶対者」

それで、とアイシスはうなずいた。

彼の精霊の美しさといったら、それはもう輝いて見えるほどだっ  
たのだから。

「絶対者ってなに」とラナ。

「すごいやつのことだよ」「」



ふうん、と彼はリグルの説明に納得したようだった。  
それを見てリグルが笑う（「やっぱりばかだ」）。

ふと、ラナが明るい声を出した。

「なあ、その魔物退治、手伝ってやることできるんじゃないか。だって、超越者っていうのもすごいんだろう。そんなのがふたりもいたら、その魔物だって出てくるんじゃないかねえの」

「ラナ」

ネトレトが遮ったが、ラナはお構いなしだった。

彼には警戒心というものがあまりなく、対してネトレトには警戒心がありすぎるのだ。

超越者という言葉は、軽々しく口にすべきではない。ネトレトはそう考えている。

ハイネはラナの言葉に大いに驚いた。

「超越者？ この中に超越者がいるんですか」

ラナが大きくうなずき、アイシスとネトレトとを指さした。

ネトレトは肩を落としてため息をつき、仕方がないので白状した。  
自分は闇の、そしてアイシスは光の精霊の使役者であると。

ハイネはさらに驚いた。

超越種と呼ばれる二大精霊が、どれほどの力を持っているか。そして彼女らを使役するために、どれほどの精神力が必要か。

魔法学校で学んだ彼には、それがよく分かっていたからだ。

しかしアイシスもネットレトも若い。超越者としてはあまりに若かった。

知的好奇心もあり、彼はふたりにどうしても精霊を見せてほしいとせがみ、その熱意に負けたのだらう、ふたりはそれぞれユフィロスレジアとヴァネッサとを呼び出すはめになった。

そなたが風の絶対者か。

ヴァネッサに呼びかけられると、ハイネは平伏しそうな勢いだっ

た。彼は涙さえ流して超越種を拝み、この十余年でこれほどに嬉しいことは初めてだ、と喜んだ。

アイシスは驚いてユフィロスレジアを仰いだ。

「ユフィって、すごい人だったんだ」

長く生きておるだけだ。

「へえ、精霊も軽口を叩くんだね」とリゲル。

精霊の声を聞けないラナは、すこし疎外感を覚えてむくれていた。どつやらエザにも精霊の声は聞こえるらしいのだ。

彼は口を半ば開けたまま精霊を見つめ、またそれと親しげに話す兄を見つめ、感嘆のため息を漏らすのだった。

## 第三十三話・男の拳、女の腿

### 『聖伝』第三十三話

ユフィロスレジアとヴァネッサの姿が消えてしまっても、ハイネは彼女らのいた空間を見つめていた。

そうやってしばらく彼は感極まったようすでいたが、気を取り直すとふたりに深く礼を述べた。

「ありがとうございます。授業なんかで話を聞かされたときに、僕は彼女らに焦がれたものです。しかし、本当に美しかった」

アイシスは照れて顔を赤くした。

しかし、ユフィロスレジアはまだ完全な姿を見せてはいないのだ。もっと努力しなければならぬ、とアイシスは思った。

「しかし、間違えというのは」

ハイネの眩きには困惑の色が見えた。

ネットレトは、威嚇するようにすうと目を細めると、それを防ぐために旅をしているんです、と静かに言った。

アイシスたちには彼らの話す内容がまるで理解できない。聞いたところでネットレトは答えをかわしてしまっただろう。

そう思いつつ尋ねてみると、ネットレトはなんでもないかのように「闇遣いは死を背負って生きている」とだけ言った。

「その話はあとだ」

アイシスはもっと詳しく聞きたかったが、しかしネットレトはきっぱりと話を打ち切った。

「それで、どうするのさ。魔物退治、するの、しないの」とリグル。

「ぜひ、お力を貸していただきたい」

ハイネは熱く訴えた。なにも戦いに手を出す必要はない、ただ皆から魔物を引きずり出す手助けだけをしてほしいのだと。

アイシスたちの視線はネットレトに集まった。

彼は目を閉じ、腕を組んでいる。

「あなた方は旅をしておられるのでしょうか。そして、この広い湖に立ち往生しておられるのでは？ 僕はここを迂回せず、うまく突っ切る道を知っています。」

引き換えにといっただけなんです、力を貸していただければ、僕がその道を案内しますよ」

こう言われては断る理由もなかった。言ってみれば、ハイネと魔物の戦いを見物していればいいだけなのだから。

ネトレトの承諾を受けてハイネは喜んだ。十年強の思いが、ついに叶うときがきたのだ。

彼は小躍りし、五人を教会の外へと誘った。

「この地において、ただ凍えているだけでは勿体ないですよ。空をご覧なさい」

言われるままに空を仰ぎ、しばしアイシスたちは絶句した。

いましも降り注ぐかという星の数である。

そして視線を落としてみても、湖に星はきらめくのだった。

幻想的、としかいいようのない光景である。

「大切な人を攫った湖なのに、どうしても、憎みきることはできないんです」

ハイネの心と美しい景色とに、エザは静かに涙を流した。

風が草を揺らす音だけが聞こえる。

静かで脆い夜だった。

翌日、ハイネはすぐにでも湖へと誘ったが、リグルが鋭くそれを制した。

「いまのあなたに平常心があるとは思えないけど」

そして彼の言うことは正しかった。

ハイネの心は勇み、急いていた。

長年追い続けてきた恋人の敵を、ようやく討てるといっているのだからそれも仕方ない。

しかし、力ある魔術師といえど、魔法の源ともいうべき心を惑わされては、その能力はひどく鈍る。

いまのハイネには、冷静な心を取り戻すための時間が必要だった。ハイネもよく魔法を学んできた人物なので、リグルに指摘されると大人しくそれに従った。

手持ち無沙汰になってしまうと、彼らの視線は自然とネットレトに集まった。

なにかを訴える視線とは、言葉にせずとも伝わるものだ。

ネットレトは閉じていた目を静かに開いた。

「外にいこう」

いい天気だった。冷たく吹きすさぶ風も、珍しく今日は大人しい。

ハインには残ってもらい、五人は教会を出た。

方々に草が生えている。

しばらく進み、手ごろな石を見つけてネットレトは腰かけた。アイシスたちは彼を囲む。

ネットレトはゆっくり息を吐き出すと、やがて静かに話し始めた。

「超越種において、光の精霊は主を代え、いつもこの世にあり続けるが、闇の精霊はそうではない。彼女はほんの気まぐれに、それこそ数百年に一度の割合で現れ、使役者を“選ぶ”。

闇の精霊の使役者には、自らの意思でなれるものではないのだ。彼らは精霊に選ばれる。そして、忌まわしい思いをこめてこう呼ばれるんだ、闇遣いと」

ネットレトは苦いものを噛むかのような顔で、しかし一言一言に重みを含め、語った。

彼の顔は険しく、額にはしわが寄っていた。



「闇遣いが忌み嫌われる理由はふたつある。ひとつは、魂すら残さず呑んでしまうその恐ろしい力のため。そしてもうひとつは、彼らの死亡時における“放出”のためだ」

「ほづしゅっ?」

エザがとんきょうな声をあげる。

ネトレトはうなずき、放出、ともう一度言った。

「つまり、彼らが生前ヴァネッサに吞ませたものが、息絶えると同時に吐き出されるのだ。

もちろん、原型を留めているわけではない。その思念とでもいったところかな。吞まれた者の恨みや悲しみなど、そういった負の感情やらが、力となって暴発する。それが“放出”だ」

放出が起こるとどうなるの。

アイシスが、おそろおそろといったふうに関口を開く。

ネトレトは土くれを手にとると、片手で粉々に砕いてしまった。

すつと通った指の間から、細かい砂がこぼれ落ちる。四人はその意味を悟った。

「じゃあ、ネトレトが言っていた、それを防ぐためについてというのは」

「ああ。過去の記録でただひとり、放出を起こすことなく命を終えた闇遣いがいた。私はなぜ彼だけが静かに死ぬことができたのか、それをずっと調べているんだ」

ついにアイシスたちは彼の図書館通いのわけを知った。

彼があればと真剣に、寝る間も惜しんで本を読み続けたのは、つまりは自らの死への準備だったということだ。

ふん、と鼻を鳴らしたのはリグルだった。

「それで、その理由がわかったらどうするつもりなのさ」

ネトレトは答えない。

リグルの声に刺すような鋭さが加わった。

「ときおり見せる、あの表情の理由はそういうわけ。」

あなた、死ぬつもりでしょ。

あなたの旅の終着に、希望もなにもないんだね。待っているのは平穏な死だけ、というわけだ」

「そんな」

エザが悲鳴のような声をあげた。

四人はネトレトの顔をうかがったが、いつもよりすこし険しい顔

をしたまま、彼はなにも話そうとしない。

そんなことが、あるだろうか。

アイシスは思った。

そんなに悲しいことが、あつていいのだろうか、死ぬために旅をするなんて。

彼はなにも悪くないのに。

ただ、どうしてか選ばれてしまった、それだけなのに。

孤独と血とに染まりながら、ネトレトは死だけを求めてさ迷い続けてきたというのか。

「否定、しろよ」

黙りこくるネトレトの胸倉を、ラナが強く掴んでねじ上げた。

ネトレトの首が大きく揺れる。

「ラナさんっ」

「止めるんじゃないよ」

狼狽の声をあげるエザを、静かに、しかしぴしゃりとリグルが制した。

エザは青い顔でリグルを見、それから憤怒の形相をしたラナと、  
されるがままのネットレトを見た。

「否定しろよ、ネットレト。全部あの野郎のまちがった勘ぐりだろう、  
そう言えよ」

ネットレトは目を閉じていたが、やがて観念したようにゆっくりと  
首を振った。

「彼の言うことは、事実だ」

とたん、強く固められたラナの拳がうなった。  
血管が浮き出るほど力がこめられた拳が、迷うことなくネットレト  
の左頬を撃つ。

アイシスが息をのみ、エザが悲鳴をあげた。

まるで遠慮のない殴り方だったので、ネットレトの体は大きく揺れ  
た。しかし彼は右足を踏ん張り、どうにか堪えた。

口の端に血が滲んでいる。

ネットレトは手の甲でそれを拭った。視線は地面に落としたままだ。

ラナは拳を固めたまま、そんな彼のようすを見下ろした。

「ふざけるなよ。あんたの背負うものの重さは、そりゃ恐ろしいものだろうけどさ。俺は想像もできねえけどさ。でも、だからって、軽々しく死を選ぶなよ！」

気がおさまらないのか、ラナはもう一度右の拳を振りかぶった。ネットレトの顔面に、鍛えられた腕が一直線に伸びる。

しかしネットレトはもう無抵抗に殴られはしなかった。

岩も砕くかという勢いの突きを避けると、今度は彼がラナの右頬に拳を見舞ったのだ。

ラナは目を見開き、一瞬なにが起こったのかも理解できずにいたようだったが、痛みを感じるよりも先にどうと地面に倒れた。

痺れる頬に手をやり、なかば呆気にとられてラナはネットレトを見上げた。

彼を殴り飛ばせるのは、父親のハロルドただひとりであったからだ。

太陽を背に負っていたので、ネットレトの顔をうかがうことはできなかった。

「軽々しく、だと」

ネットレトは静かに口を開いた。

「私なんの考えもなしに、なんの苦悩もなしに死を探しているとも思うか。」

私はたった二十そこらの人間だ、まだまだ浅い。

だから　　生きたい」

その言葉はアイシスの心に強く響いた。まっすぐに彼の心を打った。

生きたい。

だれもが当然抱く感情なのに、それをなぜネットレトはこつも重々しく、わがままを言うかのような顔で口にしなければならぬのか。

「きみたちと行動を共にするようになってから、その気持ちはさらに大きくなった。

楽しいんだね。」

きみたちは本当に、人の心にも遠慮なしで入ってくるから、それは恐ろしくもあり、心地よくもあった。なにかが変わるかと思った。しかし、だめなんだ。

私は　　闇遣いは　　生きているだけで罪なんだ。周囲の人々を不幸にする、呪われた存在なんだ」

ぐおお、とラナが吼えた。獣も尾を巻いて逃げるかとすら思わせるような、野太く怒りに満ちた声だった。

彼は土を蹴って立ちあがるとネットレトの胸倉を引っつかみ、そのまま彼もろとも勢いよく倒れこんだ。

ネットレトは背中を地面に打ちつけられて顔をしかめる。

ラナはその胸元にかじりつき、顔を押し当てて震えていた。

泣いて、いる。

ネットレトは眉をあげた。

「あんたは助けしてくれたじゃないか、アイシスを、俺を　リグルを。アージエもだ、みんなあんたが助けた。俺たちの笑顔はあんたが作ったんだ。なのに、なんだ。呪われた存在？　勘違いもほどほどにしるよ!」

「ラナ……」

「死ぬための旅だって？　一緒に歩く、俺たちをばかにしているのかよ。俺たちは、あんたを死なせるために旅の仲間をしているわけじゃねえんだよ。あんたと一緒に笑いたいから、そばにいるんだよ」

アイシスたち三人は声を出すこともできなかった。ただ成り行き

を見守っている。

ラナの姿は弱々しかった。

なのになぜ、その彼に組み敷かれるネットレトのほうで、ずっと打ちひしがれたかのように見えるのだろう。

ラナは顔をあげた。すっかり涙で濡れ、どろどろになった顔を。

「あんたは俺の憧れなんだ、英雄なんだよ。強くて、かつこよくてさ。あんたのようになりたいんだ。」

こんなふうに使われてもさ、生きてるだけで罪って、まだそう思うかよ。自分なんて必要じゃないって、そう思うかよ」「

しばらくだれも口を開かなかった。

アイシスは震えるラナの背中を優しくなでた。それに促されたのか、ラナはうつむいたまま、ネットレトの上から体をどけた。

そのまま背を向けて歩き出す。アイシスは黙ってそれを追った。

エザは倒れたままのネットレトをふり向きふり向きしていたが、慌ててふたりについていった。

ネットレトとリグルだけが残った。

静かな時間が流れる。風だけが動き、音をたてる。

どこことなく、心地のいい空間だった。



「膝をお貸ししやしょうか」

リグルが言い、ネトレトはうす目を開けて彼を見た。彼はいたずらっぽい笑みを浮かべている。

「野郎のよりは、やわらかくて気持ちいいはずだぜ」

「……ああ」

頭を乗せてみれば、たしかにリグルの腿は存外やわらかい。やはり彼は女なのだ、どう繕ったとしても。

ネトレトは目を閉じた。

火照った体に冷たい風がいい。心はひどく落ち着いていた。リグルの細い指が、額に張りついたネトレトの髪を払う。

「どんな感じ。思いを口にしてみて、さ」

疲れた、とネトレトは言った。おそろしく疲れた、と。

だろうね。そう言ってリグルは笑う。

「心を開くって、けっこうな労働だからね。特にあなたの心は長く閉じこもっていたようで、どうも運動不足らしい。筋肉痛にもなる

だろうよ  
「

そのまま彼らは日が沈んでしまつまでそうしていた。

すっかり暗くなつてしまつと、アイシスが毛布とスプーンとを持って現れた。

彼はネットレトが膝枕されているさまを見て驚いたようだったが、すぐになつこりと笑つた。

星が三人を照らしていた。

光は平等に降り注ぐ、心を病んだ男にも、女にも。

翌日、ラナは不機嫌だつた。目を腫れあがらせ、口を尖らせている。

といつても、これは単に気恥ずかしいだけなのだ。長いつきあいのアイシスにはわかる。

ネットレトはそんな彼の前に立つた。

「謝りはしない  
「

ラナは視線を合わさない。

「しかし、ありがとう  
「

ネトレトは頭をさげた。

ラナの尖った目が丸くなる。

彼は驚いたようにネトレトを見たが、やがてにやりと笑った。

「俺が殴って倒れなかったやつって、親父以外だとあんたが初めてだよ」

ネトレトはすこし眉をあげたが、やがて困ったような笑みを浮かべた。

「私の拳を受けて意識を飛ばさなかったのも、きみが初めてだ」

リグルがいつものように茶々を入れる。

「おふたりとも頑丈なことだね、まさに筋肉ばか。筋肉ばかり鍛えてちや脳に栄養もいかねえぞ」

「うるせえよ。おまえは口にはっかり栄養を集めやがって。それに、アイシスみたたくひよろっこいよりは、俺たちぐらいがちょうどいいんだよ」

うわっ、とアイシスが声をあげた。

「酷い飛び火だなあ」

明るい笑い声が響いた。

やはりネットレトはあまり笑みを見せなかったが、しかし彼の顔はどこか晴れやかにも見えた。

ではいこう、と言ったのはネットレトだった。ついにハイネの悲願が叶えられるときがきたのだ。

ハイネは重々しくうなずいた。もう気は逸っていないようだ。

「お願いします」

エザもいくの、とアイシスは尋ねた。

彼はまだ、魔法やら魔物やら、そういったものに免疫がない。

聞くに、湖の魔物は恐ろしそうではないか。エザが怖がるのは当然だろうと思われた。

しかし、エザは自分もいくと言って聞かなかった。

「ぼくも強くならなきゃって、思ったんだ」

アイシスはすこし心配に思ったが、しかし弟のその言葉を嬉しくも思った。

六人は昼前に教会を出た。

口数も少なく、一路湖を目指す。

夜にあれほど輝いて見せた湖は、うすぐらい空模様の下でどこか不気味だ。

湖畔に立ち、ハイネはアイシスとネットレトに目配せした。  
ふたりはうなずき、静かに詠唱を始める。

「光よ。すべてを照らし、愛し、包みこむ力を我に　ユフィロス  
レジア」

「呪われた王が、呪われた汝に命ずる。すべてを呑む力を我が右手  
に宿せ　ヴァネッサ」

とたんに激しい風が巻き起こり、エザは顔を覆う。

圧倒的な力を放ち、超越種が並んで降りたつた。ハイネもそれを  
受けて詠唱する。

彼の言霊は魔法学校で習うはずのものとは違っていた。

「風よ、歌うをやめよ。千の矢となり、我が敵を射よ　ウィンデ  
イーネ」

ウィンディーネが召喚され、三種の精霊が集う。

そのさまは美しく、見事で、思わずラナは目を細めた。

彼女らの声が聞ければいいのに、と彼は心から残念に思った。

揃いも揃ったり。

ヴァネッサが口に手を当て、ほほ、と笑う。

では、ひとつ釣りに興じるとしよう。

言っなり踊るようにしてヴァネッサが湖に飛びこみ、ユフィロス  
レジア、ウィンディーネの順でそれに続いた。

ヴァネッサはこの状況をすこし楽しんですらいるようだ。

「釣り、ねえ」

リグルが腕を組んで笑い声をもらった。

「またとない高級な餌だけどね。使役者にはない冗談の才能が、  
ヴァネッサにはあるようだ」

ネットレトはそっぽを向いて肩をすくめた。

## 第三十四話・雪

### 『聖伝』第三十四話

精霊がこぞって湖に飛びこんでから、もうけっこうな時間が経つ。エザは水際にしゃがみこんで水面を見つめていたが、あぶくのひとつすら浮いてこない。

「もしかして、ユフィロスレジアさんたち、溺れちゃったんじゃない？」

まさか、と言ってハイネが笑った。

「彼女らはそういう次元の存在ではないですよ。魔物は、湖のずつと奥底に潜んでいるんです」

それからしばらく、水面は変化を見せなかった。

ネットレトは腕を組み、じつとそのようすを眺めていたが、やがてうっすらと唇を開いた。

「くる」

短い言葉と同時に、湖の奥に、火薬が爆発したかのような光が満

ちた。

水に道筋を曲げられながら、光は地上にもあふれ出す。

一行が思わず目を覆うのと、湖の水面が大きく盛り上がるのとはほぼ同時であった。

あ、とアイシスが声を漏らす。

「ユファイ！」

眩い光を放っているのはユフィロスレジアであった。ヴァネッサとウィンディーネも舞い上がり、ふわりとほほ笑む。

長く水に潜っていたというのに、彼女らには水滴のひとつもついていないようだ。

まさに次元が違う、とアイシスは思った。

「お出ましたね」

リグルが言い、六人は視線をまた湖に戻した。

すると、水面に浮かぶようにして、なにやら奇妙な生き物が漂っているではないか。

一見すると人間のようでもあったが、その顔や首筋は青い鱗で覆われている。



また、下半身がこれまた異様で、なんと足がないのだ。見るからにぬめぬめしい、ざらりとした鱗に一面覆われており、薄くやわらかげなひれが揺れ、その姿はまさに魚である。

「人魚だ」とネットレトが言った。

人魚。ハイネは聞いたことがあった。湖や沼に住む魔物の一種だ。昔、魔法学校に通っていたときに習った。美しく若い女を好み、怪しげな歌声で惑わしては、水に沈めて食らってしまうのだという。幼女のやわらかな肉を好み、ある村では村中の娘が食われた、などという恐ろしい記録も残っている。

しかし実際に見るのはもちろん彼も初めてだった。ごくろり、と唾を飲みこむ。

「大物が釣れたようだね」

精霊たちを見上げ、リグルが軽口を叩いた。ヴァネッサがおかしそうに身をくねらせて笑う。

面白いわらしよ。さて、我が君。わらわはどうすればよいか。

「あとは彼に任せる。ありがとう」

ネットレトが言うと、ヴァネッサは彼の頬に顔を寄せ、そして消えた。

アイシスもユフィロスレジアにうなずいて見せ、彼女もまた姿を

消した。

残ったのはハイネが使役するウィンディーネだけだ。

「弔い合戦の始まり、つてか」

リグルが言い、ラナは緊迫した面持ちで拳を握った。

ハイネは優しげな顔をした男性であった。

しかしいま、彼は圧倒的な怒りで満ち、顔は憤怒に燃えていた。

小麦色の長い髪は逆立ち、揺らめいている。

そのそばにウィンディーネが寄り添った。

美しい、絶対種。

復讐のためだけに力を鍛え、ようやくの思いでハイネが手に入れた精霊だ。

「ウィンディーネ」とハイネは言った。「存分にいこう」

御意。

答えると同時にウィンディーネが舞い上がる。

すると、彼女のまわりに渦状の風がいくつも巻き起こった。

きゅるりきゅるりと、風が空気を裂く音が聞こえる。

「いけ！」

ハイネの命令にあわせ、風の渦が人魚を襲った。

風は鋭い刃となって人魚の皮膚を千切る。人魚はこの世のものは思えないような声で叫んだ。

耳が痛くなるような、甲高い声だ。

エザは体がしびれるのを感じながら耳をふさいだ。しかしそれで防ぎきれるような声ではない。

「一種の超音波だな。離れておきなさい」

眉間にしわを寄せたネットレトが、アイシスたちを押して湖から遠ざけた。

ハイネによる攻撃は続く。

意識を集中しているのか、目を閉じていたハイネは、きつと目を開くと人魚を見据えた。強い意思が目に宿っているのがわかる。

ウィンディーネはそれに応え、さらに大きな渦を巻き起こした。今度は人魚全体を包みこんでしまおうというのだ。

巨大な渦にのまれ、緑の血を散らせて人魚は叫んだ。

おぞましい、ぞっとするような声だ。

「くそつたれが、どの種族でもばかは声ばかり大きいようだね」

リグルが顔をしかめて罵った。

ラナは大人しく耳をふさいでいる。そうなのか、という顔である。

狂ったように叫びながら、人魚は体をくねらせた。風の渦からのがれようと必死にもがく。

「うあ」

エザの顔は真っ青になっていた。

よろめき、倒れそうになったところをアイシスが支える。

「兄さん」

「エザも、強くなるんでしょう」

はっとエザは息を飲み、青ざめたまま、しかしゆっくりとつなずいた。

ついに人魚が渦から逃れ出た。

無数についた傷口から血を滴らせ、大きく口を開ける。轟くような声とともに、人魚はハインに襲いかかった。

水が巻き上がり、つぶてのように小さく固まると、ハインを目がけて矢のような速さで飛んだ。

しかしハイネは動じない。静かに右手を振るう。するとウィンディーネが風を呼び出し、小さく分散したそれは水のつぶてに当たって砕けた。

すべての攻撃が砕かれてしまうと、今度は人魚自らハイネに食いかかった。

鋭い牙をむき出しにし、踊りかかる。

「裂け！」

ウィンディーネがかつと口を開く。

すさまじい旋風が巻き起こった。

風の矢は人魚の顔面を貫いた。鱗を散らせ、人魚が苦しみの声をあげる。

ハイネは容赦なく攻撃を続けた。二連の風の刃が、十字を描いて人魚を切り裂く。

追従を許さない強さだ。

これが絶対者の強さだった。そこらの魔物が敵う相手ではないのだ。

湖の防壁さえなければ、ハイネはもっと早くに恋人の敵を討てていたことだろう。

断末魔の声をあげ、人魚はいくつかの肉片となって湖に落ちた。

そのおぞましさにエザは胃の中のものごみ上げてくる思いをしたが、なんとか堪えた。

顔の色をなくしながらも、戦いから目を離さない兄。彼がいなければ、エザはきつと目を背けていたに違いない。

すこしねっとりとした、緑色の血が湖に落ち、しぶきを上げる。かと思えば、それは肉片とともにすつと消えてなくなってしまう。まるで水に溶けたかのようにだ。

「還ったようだな」

ネトレトが呟いた。

鱗だけが、忘れ去られたように散らばっている。戦いが終わったのだ。

「本当にありがとうございました」

五人を前にし、改めてハイネは礼を述べた。

「あなた方がいなければ、奴を誘い出すのに、僕はあとどれだけの時間を要したことが。失ったものは戻りませんが、すこしは僕の間もすみませした」

ハイネは六枚の鱗を拾った。

青いそれは、光の加減によって緑に見えたり、赤に見えたりもする。

みるからに固そうで、剣すら弾くかと思われるその鱗に、ウィンディーネの力をもってハイネが穴を開けた。革紐を取り出し、器用に穴を通す。

ハイネはそれを五人に差し出した。

「こういうものは魔除けになります。どうぞ、お持ちください。旅の幸運を祈って」

アイシスとエザは首にかけ、リグルは右の手首に巻きつけた。

ネトレトは腰紐に結えていた別のお守りにうまく取りつけ、ラナは礼を言ってから財布にしまった。ラナは装身具をつけるのが苦手なのだ。

ハイネも同じものを首にかけた。

さあ、約束どおり道をお教えしましょう。

夜を待ち、ハイネは言った。星の明かりが進む先を示してくれるのだと言う。

一行は古びた教会に別れを告げた。

道は細く、またアイシスたちの目には道とすらわからないほどに危うく、頼りないものだった。

「僕のうしろについて、決して横にそれないでください。湖に足を奪われますよ」

空にも湖にも、無数の星がきらめいている。

ハイネはその中を縫うようにして歩いた。

迷いのない足取りだ。

彼がここですごした時間の長さを、アイシスはその足取りに見た。

足もとの泥はぬめり、あまり心地のいいものではなかったが、星の中を歩くような感覚は不思議で、幻想的だった。

ときおり、どこかで獣が高く鳴く声が聞こえた。

険しいツィード山脈は、夜闇にぼんやりと浮かび上がって一行を待っている。

湖を真っ直ぐ突っ切るにはなかなか時間がかかった。

六人が対岸についたのは、夜も明けるかというところだった。



久しぶりの固い地面に、アイシスはほっとして息をつく。

「では、僕はここで」

疲れを見せず、ハイネは言った。

「案内してくれてありがとう。それで、ハイネさんはこれからどうするの」

アイシスの問いに、ハイネはすこし首を捻った。どうしましょうか、と冗談めかして言う。

「十余年ものあいだ、僕はかの魔物を倒すことばかり考えていましたからねえ。目標がなくなっただけ、実際、やりたいことなんてないですよ。」

でも、やはり僕はあの教会に住もうかな。どうも、僕はこの湖のそばを離れられそうにないんです」

ハイネはにこりと笑い、それから五人全員と順に握手を交わした。

「あなた方は皆、不思議な魅力をもった方たちでしたね。また、会いたいものです」

そして一行はハイネと別れた。

湖畔に立ち、ハイネはいつまでも手を振り続けた。

満点の星を見たくなったら、いつでもおいでください。僕はここ

で、あなた方を待っていますから。

五人はついに山へと足を踏み入れた。

その頂上を見るには、天高く仰ぎ見なければならぬかというほどの高さだ。

しかし、さすがは国境である、このような場所にもしつかりとした道がしつらえられているではないか。

五人は舗装された道に沿って歩いた。

風がひどく冷たい。吹けば、頬を張られたかのような痛みすら感じる。

アイシスは寒さに鼻を赤らめていたが、ふと震えるエザに目を留めた。

彼はコートを羽織っていない。

アイシスは荷物をいったんラナに預け、自分のコートを脱ぐとエザに被せてやった。

エザは驚いて兄を見た。アイシスはにこりと笑う。

「さすが、いい兄貴じゃねえか」

褒められて、アイシスは満更でもなさそうだ。鼻水をすすりながら、荷物を受け取った。

一行は山道を登り、ときに岩壁にぶち当たっては迂回しながら地道に進んだ。

標高があがるにつれ、寒さは増していく。

アイシスは歯をがたがたと鳴らした。

そんな彼の鼻先に、ぽつりとなにかが降ってきた。

「雨？」

うんざりした声でアイシスが言う。

しかし空を見上げた彼の目に映ったのは、やわらかく空を舞う白い綿だった。

アイシスの目が丸くなる。

「なに、これ」

彼の声に、四人も空を見上げる。

ちらりちらりと降ってくる綿は、そっと出されたラナの指のうえで溶けた。

「もしかしてこれ、雪じゃねえか」

「雪？ 雪って、あの、寒いところで降るっていつ」

「ラナがうなずく。うわあ、とアイシスが弾んだ声をあげた。顔がすっかり輝いている。」

「すごい！ 雪ってこんななんだ！」

両手を広げ、降ってくる雪をなんとか掴もうとするアイシス。

ラナにもその興奮がうつったようで、彼は口を開けて駆け回った。

雪がひとひら、ラナの口へと吸いこまれる。

「うわっ。おいアイシス、エザ、雪って甘いぞ！ 食ってみるよ！」

「エルフの兄弟は喜んでラナの真似をした。口を開け、はしゃぎながら走る。」

「荷物さえ放り出して騒ぐ三人を見て、リグルはわざとらしいため息をついた。」

「ばかじゃねえ。甘いわけあるかよ」

「腹でも壊しちまえ、と野次っていたリグルだったが、しばらくして雪の積もった場所に行くわすと、当然のようにかき集めて玉にし、ラナにぶつけるのだった。かくして雪合戦が始まった。」

存分に雪で遊んでしまうと、アイシスは背中から地面に倒れこんだ。

厚く積もった雪が、やさしくアイシスを受け止める。

風は相変わらず冷たく、雪はもっと冷たかったが、動き回って体は温かった。

その頭元からラナが忍び寄り、両手いっぱい盛った雪を、アイシスの顔に押しつける。アイシスは悲鳴をあげて飛び起きた。

ラナはその慌てように指をさして笑う。

しかしそんな彼の背後から近づく影があった。リグルだ。

彼はしっかりと丸めた雪の塊を、ラナの首筋に押しこんだ。

ラナは遠吠えする犬のような声で叫んだ。

背中に入りこんだ雪を振り払うことはできず、ラナはしばらく悶えて苦しんだ。

ネットレトは困ったように笑っていたが、頃合いを見、そろそろいくぞと促した。

雪のおかげで、アイシスたちは道を楽しく進むことができた。

そうしてツィード山脈での一日目が終わった。

彼らは適当な洞穴を見つけたのでそこで夜をすごし、目覚めてはまたひたすらに歩くのだった。

何度か魔物に出会った。

どれも熊のように大きなグーズで、ほとんどはネットレトが倒したが、アイシスたちが加勢することもあった。

エザは戦う術を知らず、いつもだれかのそばで固唾を飲んでいた。

そうしてどれだけの日がすぎただろうか、一行はついに山頂近くまでやってきた。

「うわっ、絶景！」

ラナが歓声をあげた。

下のほうを見下ろせば、降り積もった雪が朝日を受けて輝いている。

ただっ広く感じた湖も、山の上からではとても小さく見えた。ハインは今夜も湖畔で星を眺めるのだろうか。

その日もいつもと変わらないように思われた。

足が棒になるまで歩き、ときどき休み、雪を投げ、また歩く。

ラナとリグルは毎度のようにけんかをし、アイシスはそれをなだめ、エザが慌てる。ネットレトは腕を組んでそれを眺める。

しかし、変化は突然やってきた。あの人物が、一行の前に再び姿

を現したのだ。

「あれ」エザが抜けた声を出した。「人がいるよ」

エザの指さす方向に、四人は揃えて顔を向ける。

しかしその姿を見つげられたのはエルフのアイスと、まだネット以外には知られていないが、半魔であるリグルだけだった。

アイスは奇妙に思った。こんな、魔物もいるような辺鄙なところに、人がひとりでいるなんて。

しかもその人物はどうやら子どものようなのだ。背が低く、四肢が異様に白い。

寒さを感じないのだろうか、あまり厚いとは思えないぼろを一枚まとっているだけ。

そしてさらに怪しげなのが、その頭部だ。毛皮のようなものを被っていて、顔すら見えないという。

被り物？

アイシスははっとして手を打った。

「もしかして、あれは」

「ああ「すこし緊張した声色のリグルが言う、「リビィ＝ミビィだ」

リビィ＝ミビィは静かに立っていた。それでいて異様な威圧感を  
覚えさせる。

五人は言葉もなく、リビィ＝ミビィのもとへと進んだ。

毛皮と見えたものは、どうやら熊を模した被り物のようだった。

「丁寧にも目と鼻がついている。」

くりくりとした茶色の瞳はかわいらしくあったが、どうも場にそ  
ぐわない。

だれも言葉を発しなかった。

リビィ＝ミビィの口元は弓状に曲げられていて、どうやら笑って  
いるらしい。

口を開くのはどうもはばかられた。しかしアイシスは勇気を振り  
しぼって話しかけた。

「あの……。このあいだは助けてくれたみたいで、ありがとござ  
いました」



リヒイ＝ミヒイの口がさらに大きく曲げられた。

アイシスは身を固くする。いまの言葉が気に障ったのだろうか。しかしそうではないようだった。

「いいのだよ、エルフの王。別に好意があつてのことじゃない。きみたちを助けたのは、道を踏み外されては困るからだ。僕は余興を楽しまたいからな」

余興。どういう意味なのだろうか。

しかし聞くことはできなかった。リヒイ＝ミヒイの笑みがそれをさせないのだ。

知るべきときはいずれくる、そう言っているようにすら見えた。

「今日は忠告にきたのだ。きみたちはまた道を踏み外そうとしているぞ。気づかないのか、五人の中に死に神が紛れこんでいることに」

リヒイ＝ミヒイの言葉に冷やりとしたのはネトレトだった。

しかし、彼が指さしたのはまるで違う人物だった。

「え」

鼻先に指を突きつけられ、エザはうるたえた声を出した。  
リヒイ＝ミヒイは喉を鳴らして笑う。

「王の弟よ。きみはこの場にいるべきではない。」

僕は予言する、このままではきみのためにだれかが命を落とすと  
な」

## 第三十五話：谷底の向こうで

### 『聖伝』 第三十五話

エザは凍りついたかのように固まった。

命を落とす、この中のだれかが？

「理由を教えてやろう。 きみはお荷物なのだ。弱くて、なにもしかない」

「お荷物……」

「そうだ。きみが旅の仲間に加わったときは驚いた。  
ネトレト、きみは彼が役立たずだと気づいていたはずだ。なぜ同行を許した。きみにも情という名の毒が回ったか」

ネトレトは答えない。

まあいい、トリビィ＝ミビィは言い、またエザに向き直った。

「よく覚えておけ、さらなる強敵が現れたとき、きみを守ってだれかが死ぬ。」

エザは言葉を失った。

吼えたのはアイシスだった。

「そんなことはない！ エザだつて、いまはまだ戦えないけれど、努力しているんです。あなたになにがわかるんだ。

ぼくたちは義務でエザを守っているんじゃない、守りたいから守っているんだ！」

「兄さん」

リヒイ「ミヒイは愉快そうに笑った。甲高い声だ。

聞いていると、肌がぞわりと泡立つような。

「守りたいから守る、いいことを言うな。しかし、そんな戯言が通用するとは思わないことだ」

そう言うと、リヒイ「ミヒイは消えてしまった。五人は目を疑ったが、本当に消えてしまったのだ。

彼に対する謎は深まるばかりだった。

アイシスは生理的な恐怖に震えたが、しかしそれ以上に怒りが彼の中に渦巻いた。弟を侮辱されたのだ。

たしかに、リヒイ＝ミヒイの言うことも間違っていない。  
実際、エザを守りながら戦うということは、なかなか骨の折れる仕事だった。

しかし、エザは努力しているのだ。

彼なりに精一杯、兄やその友人たちの役にたとごとがんばっているのだ。

「気にしたらだめだよ」

アイシスは弟の肩を叩いた。

うつむくエザの目には元気がなかった。その表情はひどく痛々しかった。

彼も自覚しているのだ。しかし、心配そうに覗きこむアイシスを見て、弱々しくだがうなずいた。

リヒイ＝ミヒイは枝の上に座っていた。一行からずっと離れた場所だ。

しかし彼にはアイシスたちのようすが手に取るようにして見えた。声さえ聞くことができた。

風の精霊ウインディーネと、地の精霊ラジネの力を借りてのことだ。

リヒイ＝ミヒイはにやりと笑った。

「さあ、見せてもらおう。いつまでそんな甘ったるいことを言っているのかを」

おかしそうに笑うと、リヒィ＝ミヒィは足を振って枝を揺らした。地面も見えないような高い枝から、わずかに残った木の葉が落ちる。

落ちた木の葉を、黒いブーツが踏みつけた。

一行はやけに賑やかだった。ラナがやたらと冗談を言うのだ。アイシスはそれに笑い、ときおりエザを小突いてはラナのばかりに同意を求めた。

エザはそのたびに笑い声をあげるのだが、どうも顔から陰りが消えない。さきほどリヒィ＝ミヒィに言われた言葉が、よほど気になっ

ているとみえる。ラナの刹那的なはしゃぎようは彼を励まそうとしてのことだと、だれが見てもわかるほどだった。

ラナは父親のハロルドがいかに運動好きかを面白おかしく語って聞かせた。

「それでよ、親父はさ、鍛えだしたら飯を食うことすら忘れるんだよ。腹筋をし続けてハンバーグを食べ損ねたときなんて、けっこう本気で悲しんでいたな。いい年したおっさんのくせにさ、親父はハ

ンバーグが好きなんだぜ」

「おい」とリグル。

「一度なんて、走っていたら夢中になって、帰り道がわからなくなつたときすらあつたんだ。あのときは俺もおふくろも大変だったよ。日がすっかり暮れちまっても帰ってこないもんだから、ふたりして探しに出かけてさ。」

帰ってきたとき、なんと親父は大きな魚を三尾吊るしていたんだ」

「おい！」

二度目の呼びかけは言葉だけですまなかった。リグルは尖らせた拳で、遠慮なくラナの後頭部を殴ったのだ。

ラナは抜けた声を出し、それから火がついたように喚いた。

「なにしゃがる！ 人が気持ちよく話しているっていつのに」

「黙れって」

リグルは言い、目を細めて辺りを見回した。彼の真剣な表情を見て、ようやくラナも黙りこむ。

リグルはすつと息を吸った。

それからゆっくりと吐き出し、困まれたかもね、と言った。

「囲まれたって」

「悪いお兄さんたちのお出ましたよ」

リグルがそう言い切らないうちのことだった。木々の陰から、黒ずくめの男たちが飛び出してきたのは。

アイシスの目が見開かれた。黒の騎士団だ。彼らはまた襲ってきたのだ。

「あ、こいつらー！」

ラナにとってはティエラ以来の（まるで嬉しくない）再会である。

ざっと見たところ、手勢は二十人強といったところか。

アイシスたちはすっかり囲まれていた。エザを中心に、アイシスたちは背を向け合って立つ。

四人は次々に剣を抜いた。

「性懲りもなく出てきたな。黒の騎士団は、その数を減らすことが趣味なのか」

ネットレトがからかうように言った。男のひとりがそれに答える。

「きさまが闇遣いか。このあいだは我らの友をひどく痛めつけてく



れたらしいではないか。しかし、そのときの疲労は相当なはず。その闇の力をばかり使い続けることもできまい」

「かもな。だが生憎、私の本領はこちらでね」

言うなりネットレトは剣をつならせて切りかかった。

その瞬間、木の間から鋭く飛び出してきたなにかが、彼の顔面を襲った。

ネットレトはおそるべき反射でそれを避け、かつ剣を振るった。

真つ二つになって地面に落ちたのは、こちらも黒で統一された一本の矢だった。

「伏兵」

「今度は総勢五十余名だ。さあ、これをどう防ぐ」

それを合図に、黒の騎士団の静かな攻撃が始まった。

アイシスたちは必死に戦った。

ぶつかりあう剣の隙間を狙い、矢が飛んでくる。

アイシスはふたりの男を倒したが、しかしその数は減るところか、むしろ増える一方だった。

「おい、きりがねえぞ！」

リゲルが怒鳴る。

ち、と舌打ちし、ネットレトが詠唱を始めた。ヴァネッサを呼び出そうと言っただ。

「待って」

しかしアイシスがそれを制した。  
その青い目に宿る力の強さを認め、ネットレトはうなずく。

「光よ。すべてを照らし、愛し、包みこむ力を我に  
ユフィロス  
レジア」

眩い光が散り、敵も味方も一瞬我を忘れて中空を見上げた。  
すべてを超越する精霊の片割れ、ユフィロスレジアの姿がそこにある。

「ユフィ、お願い！」

承知。

ユフィロスレジアは縦横無尽に駆け回った。

彼女の放つ光は、ときに炎のように皮膚を焼き、ときに水のように喉を絞め、ときに風のように鋭い刃となり、ときに地を照らし優しく強く命を育んだ。

黒の騎士団の中にも魔導師がいたらしい、すぐに火のサルマンと地のラジネが二体ずつ現れた。

しかし、それもユフィロスレジアの敵ではない。

じわりじわりと追いつめ、弱らせたかと思うと、ユフィロスレジアは一息に四体の精霊を葬った。

「まさか、ここまでとは」

だれかが狼狽したような声をあげる。

騎士団の数は、見えるだけで二十ほど、全体でも三十に達するまいというほどにまで減った。

しかしアイシスの力はここで尽きた。彼にはまだユフィロスレジアを長く使役するだけの力がなかった。

アイシスは膝をつく、自分の体を抱えこむようにして強く抱いた。体が熱く、震えが止まらない。そんな彼を、ネトレトが抱えあげた。右手で剣を操りながら、残る左手でいとも簡単に。

「よくやった。この人数なら抜けられる、いくぞ」

言うなりネトレトは駆け出した。

彼の突進を阻める者はいなかった。

ひゅう、とリグルが口笛を吹き、感心したように声をあげる。

「さすがは色男。やるね」

リグルたちもエザを促し、斬りつしながら後を追おうとした。そのときだ。

「危ねえ！」

動きの鈍いエザを狙い、一本の矢が鋭く飛んできた。

エザは黒の騎士団の装いを見、すっかり震え上がってしまった。九年前のおぞましい記憶が甦ったのだ。

鋭い声に、エザは丸い目をさらに丸くして凍りついた。

迫りくる矢。

尖った鉄がエザの喉笛を貫かんとしたとき、日に灼けた腕が差し伸べられた。

「ラナさんっ」

鮮血が舞った。

矢はラナの左腕を深々と刺して止まった。

「ラナ」

「止まるな、大丈夫だ！」

動揺した声をあげるネットレトに、ラナは力強く答える。血が滴る手でエザの背中を叩くと、走れ、と鼓舞した。

エザは必死で走った。走りながら、情けなさとしりなさを涙があふれた。

包囲を突破してしまうと、ネットレトが今度は最後尾に立った。飛んでくる矢を払いながら、ラナたちを先へ急がせる。

囲まれてしまっただけではない、ろくに身動きもとれないままに殺されてしまうのが目に見えている。

どこか、戦いやすい場所を見つけてやる必要があった。

岩を乗り越え、川を渡って彼らは走った。黒の騎士団はしつこく追いかけてくる。

右手に岩壁、左手に谷底を見ながら一行は走った。

エザは疲労にあえいだ。汗が流れ落ちる。  
足元が不安定にふらついたが、しかし疲れきったエザはそれをう  
まく支えてやることができなかった。

「あつ」

「エザ！」

小さなエザの体が左に傾いた。となりを走っていたラナが手を伸  
ばす。

掴もうと思えば掴めたはずだ。しかしエザはそれをしなかった。  
血に濡れたラナの左手は空を掴み、エザは谷底へと落ちていった。

「エザ！」

「やべえぞ」

ラナとリグルは顔を青くしてエザが落ちていった方向を見る。

すぐにネットレトが駆けつけた。リグルが早口に事情を話す。

どうする、とリグルが言ったが、ネットレトは静かに指をさした。

「どつするもどつするも、道はひとつだ」

彼の指さす先では、ちょうどラナが谷底へと飛びこむところだった。

リグルの目が丸くなる。

ネトレトもアイシスを担いだままそれに続いた。

「おいおい、まじかよ」

リグルは谷底と後方とを交互に見比べた。土ぼこりが舞い、黒の騎士団が迫ってくる。

リグルは盛大にため息をつくとき、諦めたように剣を抱えて地面を蹴った。

張り巡らされた枝にぶつかり、その葉や折れ口に皮膚を破られながら、ラナは落ち続けた。

ラナは右腕で顔を覆い、目に枝が刺さるのを避けた。

すこし上のほうで騒がしい音がするので、どうやらネトレトたちもついてきているらしい。

そうしていったいどれほどの距離を落ちたのだろうか。不意にラナは地面に叩きつけられた。

しかしやわらかい。

続いてネトレトが着地する。

驚いてラナが起き上がると、ちょうど上からリグルが降ってきた。

「あ、悪い」

「おまえっ、わざとだろう！」

「んー、これってお約束だからね」

まるで悪びれないリグルにラナは憤慨した。その足元には金色の葉が厚く積もっている。

どうやらこれが衝撃を緩和してくれたらしい。それにしても美しい葉だった。

ラナはアイシスの言葉を思い出した。たしかファルファラの木、といったか。

冬になると黄金の葉をつけるという、エルフの里に生えていた木。

先に落ちていたエザは、体中を擦り傷だらけにしてうずくまっていた。

傷が痛むのか、と問えば小さく首をふる。だったらどうした、とラナが続ける。

「恥ずかしいんです」

エザは泣いていた。両手で顔を覆って、身を震わせながら。



リヒイ＝ミヒイの言葉がエザの胸に突き刺さった。  
自分は所詮、お荷物。

現にラナは、エザを守ろうとして傷ついた。いまだってそうだ。  
間抜けにも谷底へ落ちてしまった自分のために、たくさんの傷を  
こさえて彼らは後を追ってきてくれた。

たとえ自分が炎の中に落ちたとしても、彼らは助けようと追っ  
てくることだろう。

そう思うと、エザは弱い自分が恥ずかしくて情けなくてどうしよ  
うもなくなるのだった。

リグルはエザの小さな背中を見ていたが、ふと崖を見上げた。  
木々が茂っていて、上を見ることはできない。しかし追っ手の気  
配はなかった。

「おかげで振り切れたじゃないか。でも、こんなところでぐずぐず  
してちゃ、また囲まれちゃう。  
立ちな、エルフの坊や。泣いていたって、なにも変わりやしねえ  
んだよ」

エザはびくりと肩を震わせたが、小さくうなずくと立ち上がった。

それから彼らは静かに歩き続けた。  
幸い、黒の騎士団には会わなかった。

アイシスはネットレトの背ですっかり眠っているようだ、顔は青いが、息遣いは規則正しく聞こえてくる。

それよりも心配なのはラナだった。矢はあまりに深く刺さってしまっただので、下手に抜くこともできない。

彼の左腕は、このところどうも受難続きだ。

早く医者に診てもらわなければならないが、不幸なことにはここは山中、村のひとつもあるとは思えない。

一度道を引き返すべきか。ネットレトは考えた。

この山脈は二連になっていて、越えてしまつにはまだまだ時間がかかる。戻ったほうが早い。

しかし彼の思考は一本の矢によって中断させられた。

「黒の騎士団か！」

ラナが狼狽して叫ぶ。

しかしリグルは冷静だった。足元に刺さった矢を見、それを指さす。

「よく見るよ、こいつは黒くないぜ。黒の騎士団が射たやつじゃねえ」

「じゃあ、いつたいたれが」

ラナは矢をまじまじと見つめた。

白い羽飾りがついた、素朴だが美しいつくりの矢だ。

その答えは、すぐに自ら姿を現した。厳しい誰何の声が聞こえたのだ。

「おまえたちは何者だ！」

はっと四人は顔をあげる。声の主の姿は見えない。ネトレトが答えた。

「旅の者です。黒の騎士団に追われて谷底へ落ち、さまよっていました」

返事はなかったが、うるたえるようすが伝わってきた。黒の騎士団、という言葉に反応したのだろうか。

しばらくすると、木々の間から長身の男が四人姿を現した。

その美しいこと。

彼らはみな一様に髪が長く、腰のあたりにまで垂らしており、足は長く、肌は白いが健康的だった。

顔の造形が非常に整っており、こつも見目よい者が揃って現れると、どこか威圧感すら覚えてしまうのだった。

エザは息をのんだ。視線は彼らの耳に向けられていて、それはどれもゆるやかに尖っているではないか。

「あなた方は エルフ!」

## 第三十六話・麗しの王

### 『聖伝』第三十六話

エルフに守られ、五人は山道を歩いた。

エルフらの態度は、さきほどの鋭い声からは想像もつかないような恭しさである。

これにはわけがあった。

きっかけになったのはエザの一言だ。

「あなた方は　エルフ！　北の離れ里、風の峡谷というのは……まさかこのことだったの？」

後半はなかば呟くようにしてエザが言った。

「いかにも、我々はエルフだ。あなたは我ら種族になかなか詳しいようだが、いったい何者なのだ。我らの里の名を知っているとは」

ラナたちは黙って成り行きを見守ることにした。

エルフたちは旅人らに興味を示したようだったが、しかし警戒はまるで解いていない。

弓には新しい矢がつがえられていて、それは揺るぎなくラナたちを狙っていた。

僕たちはファニマの生き残りです、とエザが言った。苦いものを無理に飲みこむように、顔をしかめながら。

とたん、四人のエルフの顔にさっと緊張が走る。

九年前に突如滅びた、エルフの里。

美しい木々に囲まれた王の館は、黒の騎士団の急襲によって燃えた。

王は戦死、ふたりの王子も逃げる途中で命を落としたと聞く。

その悲劇は北のエルフたちもよく知るところだった。

「なんと！ にわかには信じがたいが、あなた方も我らの兄弟なのか。そしてまた、ファニマの悲劇を生き延びたとは」

「正確に言うと、エルフは兄とぼくとのふたりだけです」

エザは興奮していた。まさか、ここでエルフに出会えるなんて。

幼いころ、まだ父親が存命であったとき話に聞いたことがある。はるか北のほうにもエルフの里があり、風の峡谷と呼ばれるその里は、年中冷たい風が吹いているのだと。

そしてこれは兄弟も知らないことだったが、北に住むエルフは南

のエルフ王　つまりファニマの王だ　に恭順しており、その忠誠と尊敬の心は絶対であった。

ふたつの里は遠く離れていたが、南で代わりがあれば、北の首長は使者をやって盛大に祝う。  
そういう関係であった。

エルフの射手たちはエザを見、そしてアイシスを見た。

光り輝く銀の髪。

エルフたちはとたんにざわつき出した。  
まさか、と誰何したひとりが進み出て言う。

「銀髪の兄殿に、黒髪の弟殿。まさか、あなた方は」

「はい。僕の名前はエザ、そして兄の名前はアイシス。アイシス・ローズ克蘭ツです」

どこか凜とした声でエザが答える。

すると、とたんにエルフたちは弓矢を投げ出し、若き王の前に平伏した。

九年前の惨劇で、幼い命を散らしたと伝えられていたふたりの王子。それがいま、目の前にいる。

彼らの驚きよう、喜びようといったらなかつた。

一行はけっこうな距離を歩いた。しかし疲れは感じなかつた。目の前に広がる景色の美しさに、ただ息をのむばかりだつた。

エザは故郷の姿を思い出していた。

金色に輝くファルファラの木たち。よく兄さんとかけっこをしたつけ。そして、そんなぼくたちを見て、父さんと母さんが優しくほほ笑むんだ。

エルフの案内で一行は大きな館に着いた。

先に連絡がきていたらしい、多くのエルフが恭しく頭をさげて出迎えているではないか。

あまりの光景に、ラナはすっかり呆気に取られてしまった。

「エザ、おまえって偉いんだな」

言われてエザは、困つたように笑つた。ぼくが偉いんじゃないんですよ、と。

「ああ、ご立派になられて」

涼やかな声に、見ればひときわ背の高いエルフが立っていた。



彼の顔にはたくさんのしわが刻まれていたが、しかし美しいことに変わりはない。

むしろ、そのしわには威風さえ感じられた。

「すみませんが、あなたは」とエザ。

覚えてはおられますまい、と老エルフは前置きした。

「私は風の峡谷の首長をさせていただいております、エルフアントといえます。遠く昔、あなた方兄弟のお祖父さま、ヨセフ王の代からです。あなた方がお生まれになったときは、私、ファニマに祝いの言葉を述べに参りましたな」

「そうでしたか」

エザは懐かしむような目をしてみせた。

軽く言葉を交わすと、すぐにエルフアントはアイシスとラナとを医者のもとへと運ばせた。

アイシスはいまや、エルフの頂点に立つ王なのだ。その彼が、顔を青くして眠っている。

心配そうなエルフたちを見て、ネトレトは励ましの言葉をかけた。案ずることはない、疲れているだけだから。

それを聞いてようやくエルフたちは安堵のため息をついた。

「ラナさん」

エルフに案内され、治療に向かうラナにエザが声をかけた。いまにも泣き出しそうな顔をしている。

ラナはなにも言わず、小さな頭を右手でなでた。

エザはぼろぼろと涙をこぼした。

「ごめんなさい」

「言っなくて」

ラナはぐつと親指を立て、邪気のない顔で笑うと行ってしまった。エザは顔を真っ赤にして泣いた。

三人は立派な広間に通された。

お食事は、と問われて三人は空腹に気づいた。

太陽はもう傾きはじめているというのに、彼らはまだ昼ごはんも食べていないのだ。

すぐに料理が運ばれた。

素朴を好むエルフの食事に豪華さはない。たとえ首長が食べるにしてもだ。

しかし味は抜群によかった。

野菜は驚くほどに甘く、ネットレトでさえニンジンを食べられてしまったほどだ。

エルファントはファニマの話を聞きたがった。エザさまが辛くなければ話していただきたい、と。

エザはときどきつかえながら、しかしはっきりとした口調で悲劇を語った。

突然あがった炎、父ルキア王の壮絶な死。

恐ろしい追っ手たちと、命がけで自分たちを守ってくれた若いエルフ、そして兄を吸いこんでしまった深い崖のことを。

エルファントは一言も聞き漏らすまいといったようすで聞き入り、大粒の涙をこぼした。

「そうでしたか。前王は王子たちを守るために討ち死になさったのですな。あの方はとても美しく、優しく、聡明なお方であった。

エザさま、あなたさまにも前王の血は生きております。あなたさまの髪は、ルキアさまと同じ色をしておりますな」

エザは涙をこぼしてうなずいた。そして体を流れる父や母、多くの祖先から受け継いだ血に謝った。

兄さんに比べ、ぼくはとても非力で、弱い。

それで、とエルファントは言った。

「あなた方が谷底に落ち、我らの里へやってこられたのは、まさしく運命のお導き。エザさま。アイシヌさまと共にこの地に留まり、我らを導いてくださいますな」

「えっ」

エザは目を丸くした。エルファントの目は真剣だ。

「我らは南の王に仕える者。王はすなわち指針であります。その指針を失い、我らは十年弱のあいだ迷っておりました。黒の騎士団にあだ討ちを挑むべきか否か。

日々力をつけていくきやつらを、憎憎しく思いながらもどう動けばよいのか分からず、この日まで生きてきました。

しかし王は戻られた。我らには指導者が必要なのです」

「でも」

「エルファントさん」リグルが口を挟んだ。

「あんたの気持ちはわかるけどね、王子はいささか疲れているんだ。小難しい話をする前に、すこし休ませてやったほうがいいと思うけどね」

生意気な口の利き方だったが、エルファントはすこしも怒るようすを見せなかった。

それどころか自分の半分も生きていない若者に対し、その言葉を

受け入れて深く侘びを述べたのだ。リグルはその姿勢に感心した。

おかげで三人は堅苦しい空気から解放され、しばし風の峡谷を歩いて回れることになった。

すぐにラナが加わった。

彼の左腕は頑丈に巻かれ、首から吊り下げられていたが、底抜けの明るさはいつもどおりだった。

これしきの傷でへこたれるような、ラナは小さな器の男ではないのだ。

リグルはエルフの装身具が気に入ったようだ。

ぜひひとつ買い求めたいと彼は言ったが、エルフの里に店というものはない。

彼らの生活は物々交換が基本となっているのだ。

金物屋のように専門の知識を要するものは除くが、彼らは自分の手で野菜を育て、花を植え、糸を編む。

残念そうにするリグルに、ひとりの若いエルフ女が歩み寄った。

彼女は手に腕飾りを持っていた。美しい糸が編みこまれた腕飾りだ。

彼女はそれをリグルの腕に巻いてやり、にこりと笑った。

リグルは目を丸くする。

「これ、くれるの」

「はい」

その笑顔を見れば、彼女がなんの見返りも求めていないことがわかる。

純粋な好意にリグルはすこし面食らった。

エルフたちのもてなしはそれだけで終わらなかった。

彼らはそれぞれの家から果物や砂糖菓子を持ってきては四人に渡した。おかげで四人はすぐに両手をいっぱいにしてしまうのだった。

エルフの中にはエザの姿を見て涙ぐむ者も多くあり、彼らの中で王の存在がどれほど大きいものかを物語っていた。

「うわっ、甘そうな菓子」

渡された砂糖菓子のひとつをつまみ、ラナがすっとんきょうな声をあげた。

「アイシスのやつ、喜ぶぜ」

そのアイシスが目覚めたのは、月が空に昇るところであった。

彼は静かに目を開け、しばらく寝起き特有の定まらない目つきで辺りをうかがっていたが、ベッド際に立つ男の耳が尖っているのを

見て悲鳴に似た声をあげた。

アイシス起きる、の報を受けて四人が駆けつけるまで、アイシスは自分がまだ夢の世界にいるものと信じて疑わなかったようだ。まさか、このような場所でエルフに会えるなどとは思っていなかったからだ。

エザが精をこめて説明し、ようやくアイシスは落ち着いていた。

そうしたところでエルファントが挨拶にきた。

エルファントはやはり涙を流した。

アイシスのもとに額づき、最高の礼をしてみせる。

アイシスは慌てて立ちあがり、老エルフの顔をあげさせる。

「そんなことをしないでください。ぼくはまだまだ未熟で、あなたは長年首長を務めておられる、素晴らしい方なのだから」

謙虚な王の言葉はエルファントの胸に染みだ。

エルファントの脳裏を、赤ん坊のころのアイシスの姿がよぎった。母親の腕に抱かれていなければすぐに泣き出す赤ん坊で、よく乳母を困らせていた。

そのわがまま坊やが、こんなに成長して。

柔和で女性のように穏やかな顔をしているが、どうして、その瞳には強い意思を窺わせているではないか。

もうすこし年をとれば、きっと前王も顔負けの立派な王となる。エルファントはそう感じた。

夕ごはんは豪勢だった。酒も出された。アイシスはよく食べ、少しだけ飲んだ。

エルファントはにこにこそのようすを見ている。孫の成長ぶりを喜ぶ好々爺にも似た表情だった。

「この里はとても静かです。脇をツィード山脈に挟まれており、しかも周りは崖になっておりますからな。人が迷いこむことなど、ま

ずございません。」

王とそのお仲間さまには、この場所をご存知なかったのですな？」

「地図にも載っていませんからね。ある地域では、エルフは伝説上の種族とさえされていますし」

「そうもありません。我らは進んで人前に姿を現しませんからな」

エルファントは上品に笑った。目尻に小さなしわが寄る。



「しかし、谷底に落ちられたのは不幸中の幸いでしたな。こう言っ  
てはお怒りになれるやもしれませんが、我々にとっては奇跡です。  
おかげでこうして王にお目見えすることができたのですから」

エザのお手柄だよな、とラナが言った。エザは困ったように笑う。  
弟の手柄と聞き、目を輝かせるアイシスに、ただ疲れて足を踏み  
外したのだとは言えるわけがなかった。

「それで、王を襲った輩どもですが」エルファントの目つきが鋭く  
なった。

「すべて、討ち取りましてございます」

この言葉に、ネトレトは大いに驚いた。

平和主義で、歌と自然を愛し、争いごとにまるで無頓着なエルフ。  
その彼らが、あれだけの人数を殲滅せしめたというのである。

もはや我々も、詩を吟ずるばかりではいられなくなったのです、  
とエルファントが言った。

「エルフが戦い方を知らなかったのは昔の話です。ファニマの悲劇  
を受け、我らは変わったのです。風の峡谷に住むエルフの射手は四  
百人、どれも優れた技の持ち主ばかりです」

そこでエルファントは姿勢を正し、アイシスに向き直った。  
自然とアイシスの背筋も伸びる。

「王よ。我らは迷っております。どうすればよいのか分からないのです。指針も抛り所も、九年前に奪われてしまいました。決死の報復か、関わらずに生きるべきか、それすら決めかねていたずらに戦力を育てるばかりでございます。」

王、どうか我らを率いてください。あなたが一言“いけ”とおっしゃれば、我らは命も捨てて黒の騎士団と戦いましょう。」

「ちょっと待つてください」とアイシスは慌てて遮った。

「ぼくはここに留まることはできません。エルフのみんなに会えたことはとても嬉しいし、すこし体を休めさせてもらえればありがたい。でも、ここは通過点なんです。ぼくは旅を続けなくちゃならない、続けたいんです。」

きつぱりとした口調だった。

アイシスの青い目に炎が宿る。

ラナはそんな彼のようすに驚いた。これがあの“もやしっ子アイシス”なのか。

優柔不断で、すぐ目に涙を浮かべ、ラナの背に隠れる。

いつも不安げで、自信がなくて、頼りない。

アイシスはそんな少年だった。

だからラナはいつもそばにいて、彼を守ってやろうとした。

しかし、このさまはどうだ。

いまの彼は気高く、力強く、自分の進むべき道を知っている。

エルファントはしばらく口を開くことができなかった。

吸いこまれるような、アイシスの青い瞳。王の一族に見られる特徴のひとつだ。

その目がエルファントを見据えている、抗いがたい高貴さをたたえて。

「ぼくは運命を追求しなければならない。父は生前、ぼくに言ったんです。アイシスは運命を信じるかつて。その言葉はきっと、運命という漠然としたものを指しているんじゃないかと、ぼく自身の運命を意味しているんだと思うんです。

ぼくの運命、ぼくのすべきこと。そのために流れた血を無駄にするわけにはいかない。そのためにぼくはいくんです」

わかってくれますね。

アイシスの言葉に、エルファントはうなずくほかなかった。

エザはほとんど料理の残された皿を、じっと沈んだ目で見つめていた。

翌日、風の峡谷は賑やかな音楽に包まれた。宴が始まったのだ。

エルフたちが、王とその弟の思いがけない救命と再会とを、どれほど喜んでいたか。それは推して測れるというものだ。

それに彼らはまだアイシスの思いを知らず、新たに王が里を治めるのだと、信じて疑わなかったのだ。

「いいのかなあ」

アイシスは心苦しそうである。

宴に参加してしまえば、彼らの期待をさらにおおることは間違いない。

リグルは腰に手をあてて笑った。

「迷うことはないよ、王さま。楽しむときは精一杯楽しみな。ここを去ることを申し訳なく思っちゃいけない。あんたの民だろう。あんたの志を知れば悲しむだろうけど、涙を流してその勇気を称えらるだろうよ」

彼の言葉はアイシスの迷いをとてもよく打ち払ってくれた。

雨雲が風に吹かれて去るように、アイシスの心はさんさんと晴れた。

しかし、どうやらすこし晴れすぎてしまったようで、アイシスはのぼせてしまった。

次々に注がれる杯を断ることができず、つい飲み過ぎたのだ。

耳まで赤らめてアイシスは眠りこみ、大きな寝息をたて始めてしまった。

若い王の失態を、エルフたちがほほ笑ましい眼差しで見つめる。

「このお方はわかりませんな。昨夜、あれほどに強い目を見せられたかと思えば、いまはこのように泥酔なさる。

お強いのか、まだまだお若いのか」

「強くて、とんでもなく弱いんだよ。それがあの坊やの魅力だと思っけどね」

リグルは愉快そうに笑い、肩を揺すった。

## 第三十七話：前兆

### 『聖伝』第三十七話

時間は飛ぶように過ぎていった。

アイシスたちは美しい景色に心を癒され、エルフたちの美しい言葉に耳をゆだねて日々をすごした。

ときおり、吹く風が暖かく感じられるようになった。

そうして始めて気づいたことだが、彼らが風の峡谷にやってきてから、なんとすでに一ヶ月もの時が経っていた。

「そろそろ発つか」

腕を組んだネットレトが言った。

彼さえ時間の経過に気づかなかったのだ。それほどにエルフの里は居心地がよかった。

彼の提案に、だれも否やを唱えなかった。

ネットレトは行動力のある青年だ。

彼はさっそく、夕ごはんの席でエルファントにそのことを伝えた。

明日に発つ。突然の申し出に、老エルフは驚き惑った。

「いきなりですな。もっと長くおられてもよろしいのでは」

しかしネットレトは首をふった。

そう言っていただけるのはありがたいのですが、これ以上は鋭気を弱めます、と。

「そうですか。では、もう言いますまい。それで、どこに向かわれるのです」

エルファントの問いに、アイシスたちはネットレトの顔をうかがった。

行き先を決めるのはいつも彼で、アイシスたちはそれに従うのが好きだった。

「北へ。ユリシア国に入ります」

「ユリシア！」

エルファントの太い眉があがる。その声色で、彼がユリシアを快く思っていないことはすぐにわかった。

「北の大国、ユリシア。多くの知識、進んだ技術をもつ、世界を牽引する国だと聞いております。しかし、同様に悪い噂も聞きますぞ。ユリシアにおけるエルフが言っておりました。近年、人間の世が物騒なのは、どうもユリシアが関係しているらしいと」

ネトレトはうなずいた。

彼は十のころまで、ユリシアの首都トウーディールに住んでいた。そのころから不穏な話は聞こえていたのだ。

しかし、それでも彼はいくと言っつ。

「どうしてそこまでユリシアにこだわるのです」

ネトレトは答えなかった。

その夜、眠りについたアイシスを、そつと揺り起こす者がいた。

朝がきたかとアイシスはうす目を開ける。しかし、空には丸い月が輝いているではないか。

なにごとかと目を丸くするアイシスを、思いつめた表情でエザが覗きこんでいた。

彼はまた、静かに兄を訪ねたのだ。九年ぶりの再会を果たした、あの屋敷での夜と同じように。

エザはアイシスを夜の散歩に誘った。

宿直のエルフがあとをついてきたが、無理を言ってふたりきりにさせてもらった。

アイシスの胸はざわざわした。



「兄さん」

アイシスは小さくうなずき、先をうながす。

エザはひとつ大きく息をした。

「ぼくはここに残ろうと思う」

アイシスの喉が音をたてた。しかし声は出なかった。

目を見開いて弟を見る。

エザはうつむき、彼と目をあわせようとはしなかった。悔しそうに、唇を噛んで。

信じられない、いったいなにを言い出すのか。

そんな表情を浮かべる兄を、エザはすこし恨めしく思った。

すべてを超越する能力を持った、光の精霊ユフィロスレジア。

アイシスには彼女を呼び出し、使役する力がある。

九年前、ふたりは同じ速さで駆け、同じ高さを跳ぶことができた。

いまはもう違う。

兄はエルフの頂点にたつ王として歩き始めたが、弟は弟でしかなかった。

エザに超越種を使役できるだけの力はなかった。

「エザ、どうして」

「所詮、ぼくは“花肥やし”でしかないってことだよ」

つい、声が尖る。

アイシスの目はやはり見開かれていたが、その目が傷ついて揺れるようすをエザは見た。

しかしエザは謝ろうとは思えなかった。

兄さんがいけないんだ。兄さんは、ぼくの気持ちなんてわかりやしないんだ。

「エザ」

「もうエルファントさんには伝えてある。話はそれだけだよ。ごめんね、夜遅くに起こしちゃって」

エザ。

アイシスはもう一度呼びかけたが、しかしエザは背中を向けていつてしまった。

月明かりを受け、途方にくれて立ち尽くすアイシスを、物陰からリグルが見守っていた。

風の峡谷は悲しみに満ちていた。ついに王が去っていくという。

エルフたちは手に手に花を持ち、王とその仲間たちに手渡した。

身も埋もれんばかりの花の量に、アイシスたちは目を白黒させた。

その中にエザの姿はなかった。

「なあ、アイシス。エザはどこだよ。置いていっちまう　痛っ」

軽口を叩くラナの後頭部を、リグルが遠慮なくどついた。

驚きと痛みにもラナは声をあげる。

「おまえ、いつもいつもいつも頭ばかり殴りやがって！　頭悪くな  
ったらどうしてくれるんだよ」

「心配すんな、いま以上はねえよ」

ラナは憤慨してわめいたが、リグルはおかまいなしだった。

「なあ、嬢ちゃん」

アイシスはうつむいている。

曲がったその背中にリグルは話しかけた。

「弟くんの気持ちも、わかってやれな」

「聞いていたの？」

気だるげにアイシスは顔をあげ、リグルは困ったように頭をかいた。

悪かったな、盗み聞きするつもりじゃなかったんだが。

ラナとネットレトが首をひねったので、リグルはアイシスの代わりに説明してやることにした。

エザの苦しい胸の内と、彼が出した答えについて。

ラナの小鼻がひくひくと動いた。

「おい、本当かよ、アイシス」

アイシスは黙ってうなずいた。

昨夜、弟の心はひどく傷つき、悲しんでいた。

そして彼はいけないと言った。一緒にはいけない、ぼくはここに残る、と。

噛みしめたエザの唇が、真っ白になっていたことをアイシスは思い出した。

泣き虫の弟は、必死で涙をこらえていたのだ。

「それでいいのかよ」ラナはアイシスの肩をつかんだ。

「だめだろう。このままじゃだめだ、アイシス」

「おい。おまえが割りこむ話じゃねえよ」

リグルは眉をしかめ、ラナの腕を取った。

しかしラナは乱暴に彼の手を払ってしまった。意外な行動に、リグルは怒りも忘れて目を丸くする。

そうしているうちに、ラナは制止の声も待たずに走り出してしまった。

三人は彼の行動を訝しく思い、声も出ない。

ラナはすぐに戻ってきた。右手でエザを引っぱっている。

エザの顔は青く、悲しみに歪んでいた。

リグルはため息をついた。無理にでも連れていこうというのか。

「おまえな。熱血はいいが、自分の意見を押しつけ」

「違う。黙ってる」

ラナの口調は鋭い。またもやリグルはぼかんとした。

「エザが悩んで出した答えなら俺は反対しねえよ、寂しいけどな。ここはいいところだし、安心だ。」

でもな、兄弟がこんなふうに分れるのはだめだ。絶対にだめだ。ちゃんと言いたいこと言って、言わなきゃならねえこと言って、す

つきりしてからじゃないとだめだ」

「ラナさん」

背を押され、よろめくようにしてエザはアイシスの前に立った。

アイシスはひどく辛そうな顔をしている。

エザは兄が大好きだった。その兄が、自分のためにこんな顔をしている。

エザの顔がしわくちやになり、真っ赤に染まり、それからぼろぼろと涙をこぼした。

エルファントはそばに控えていたが、すぐにまわりのエルフを連れて遠くへとさがった。

「ぼくは、ぼくは、怖かったんだ。ぼくは本当にちっぽけで、頼りなくて。お荷物と言われても、なんにも反論できやしない。

このままそばにいたら、兄さんはいつか、ぼくのことを嫌いになるって、そう思った。それは絶対に、いやなんだ」

「エザ……」

「みなさんがぼくを守ってくれるのは、とても嬉しいしありがたいけど、でもそのたびにぼくは悲しくなった。いかに自分が弱いかつて、ありありと見せつけられているみたいで。

ぼくは怖かった、悲しかった。でもね、なによりぼくは、とても

悔しかったんだ。だって、ぼくは男なんだから」

言い切ると、わあんと声をあげて泣きだした。

アイシスは胸をぐつと詰まらせた。

ばかだなと叱ればいいのか、笑いとはせばいいのか、一緒になつて泣けばいいのか。

わからなくなって、どうしようもなくなって、アイシスはひどい顔になった。

自分よりもすこしだけ小さな弟の体を、気持ちをつつけるようにして抱く。

「エザが立派な男だって、ぼくは知っているよ。エザはだれより走るのが速かったよね。そしてだれよりも優しい。

そんな弟を誇りに思いこそすれ、嫌いになんて、なるはずないじゃないか」

まったく、本当によく泣く兄弟だ。

ネットレトはなかば感心しながらふたりを見守った。結局、アイシスも泣いていた。

彼らは弱い。しかし、それでいてとても強いのだ。

だって、そうだろう。彼らは男なのだから。

泣き止んだふたりの顔には、とびきりの笑みが浮かんでいた。

「すべてが終わったら会いに来てくれるよね」

エザが言い、アイシスはにっこりほほ笑んだ。

「もちろんだよ。それにまだ、エザの作ったタルトを食べていないし」

そうだった、とエザはとんきょうな声をあげる。

それからふたりは声をあわせて笑った。

旅装に着替えたアイシスたち四人を、エルフたちは揃って見送った。

エザとエルファントは並んでその先頭に立ち、いつまでも手をふり続けた。

アイシスもラナもリグルも、何度もふり返っては手を打ちふった。

やがて、金色の葉を茂らした枝に、四人の姿はかき消されてしまった。

エザはゆっくりと手をおろした。

口元がやわらかに笑っている。

「エルファントさん」



「なんでしょっ」

「ぼくに、弓を教えてもらえますか」

エルファントは目を細めて笑った。

「喜んで」

エザが離れ、旅の一行はまた四人に戻った。

また山登りが始まる。

あと一連、同じような山を越えればユリシアだ。

エルファントはユリシアをよく思っていないようだったが、アイシスはネットレトが決める行き先に文句を言うつもりはなかったし、それにつき従うのが先に繋がると感じていた。

ネットレトなら大丈夫、そう感じさせるものを彼は持っている。

エルファントの前では話さなかった、ユリシアに向かう理由。

いま問えば、しかし彼はきっと答えてくれるだろう。そう思える自信があった。

しかしアイシスは尋ねなかった。

答えはいずれやってくる、それを知るべきならば。

アイシスは大きな流れに身を任せる術を身につけ始めていた。

一連目よりもずいぶん短い日にちで、アイシスたちはツイード山脈を乗り切った。

魔物には何度も遭遇した。

アイシスやラナの剣も血にそまった。しかし彼らの心は清いままだった。

悲しむことをよく知っていたからだ。

鼻をつんと刺激する、おぞましい血のにおいに身をひたした夜など、アイシスは人知れずそっと短剣を抜いてみたりするのだった。

誕生日にラナがくれた、あの短剣だ。

アイシスは戦いの際、けっしてこれを使おうとはしなかった。

白く光る刃に曇りは一点も見えない。

その澄んだ輝きを見て、アイシスはほっと胸を撫で下ろすのだった。

「ついにユリシアか！」

ラナが大きく伸びをした。

山をおりてみれば、空気はもう春だった。

一面の草原に、小さな花がぼつりぼつり顔を覗かせている。

白に黄、ピンクに緑。アイシスの頬は華やいだ。

山からは一本の太い道が引かれていた。レンガできれいに舗装された道だ。

途中、幾筋かが細くわかれていったが、アイシスたちは迷わず広い道を歩き続けた。

下山したのは昼前だったが、ひとつ目の町に着いたのは、すっかり月が昇ってしまうころだった。

町は小さかったが、宿の設備はしっかり整っていた。山を登ったり下りたりしてきた人のためにあるのだろう。

すぐに四人は宿を取り、食事もそこそこに（ラナはもちろんしっかり食べたが）ベッドに入った。

「はあ、快適」

ベッドに飛びこみ、アイシスは間抜けな声をあげた。

柔らかい羽毛。マーニャ以来、宿のベッドは実に二ヶ月ぶりである。

部屋はあまり広くはなかったが、ひとりきりですぐすにはどうも味気がないように思われた。

アイシスはそわそわした。ここ最近、ひとりの夜はなかったから。

エザはなにをしているのだろう。アイシスは最愛の弟を想った。

思考はどんどん広がっていく。

風の峡谷のこと、リビィ＝ミビィのこと、黒の騎士団のこと、ユリシアのこと。

ラナのこと、リグルのこと、ネットレトのことも考えた。

ネットレト。

考えていると、なぜだか無性に会いたくなってしまった。

アイシスは気だるげに体を起こすと、毛布を全身に巻きつけて部屋を出た。

夜はまだ、冷える。

「びびぞ」

ドアを叩けば、すぐに澄んだ声が返ってきた。

アイシスはほっとする。

聞きようによれば、突き放すような冷たさを持つネットレトの声だが、どうしてこつも安心させられるのだろうか。

アイシスはドアを押し開けて部屋に入った。

呆れたことに、彼は本を読んでいた。いつのまに借りてきたといふのだろう。

アイシスが尋ねると、さっき、とこともなさげな返事がかえってくる。

「ネットレト、そんなじゃ体を壊すよ」

「そこまで柔じゃない」

「疲れはたまるものだよ。ねえ、すごく健康な人より、すこし病気がちの人のほうが長生きするんだって」

ネットレトはすこし眉をあげる。

アイシスはここぞとばかりに熱弁した。

体が弱いと、健康によく気を遣うでしょう。体が強いと、つい健康を自負しすぎて体調の変化にうとくなるんだ。それで、ある日突然しっぺい返しをくらうんだよ。

ネットレトは困ったように笑った。

「わかったよ。無理はしない」

「だったらいいよ」

ここに、実は眠れない男がもうひとりいた。ラナだ。

ラナはベッドの中でもぞもぞ体を動かしていたが、足をふりあげ、弾みをつけると起きあがった。

大股に歩き、アイシスが泊まる部屋へと入る。やはりドアは叩かない。

しかし部屋にアイシスの姿はなかった。

まさか、と思ってラナは衣装箆筒を開けた。長期滞在者用の、大きなものだ。

しかし、当然そこにもアイシスはいなかった。

そのとき、となりの部屋から笑い声が聞こえてきた。アイシスの声だ。

小さくネットレトが話す声も聞こえる。

そう、か。

ラナは箆筒の扉を閉めると、静かに部屋へ戻った。

翌日も、その翌日も彼らは広い道を歩き続けた。

エルフの里でわけてもらった砂糖菓子は、ほとんどアイシスが食べってしまった。

「そろそろ稼ぐべきかな」

金の入った袋をのぞき、ネットレトがつぶやいた。

剣比べの賞金は、あと金貨で十枚ほど。

それでも十分な額であったが、旅とはなにが起こるかわからないものなのだ。いつ大怪我を受けて動けなくなるかもしれない。

それに一行には大食漢がまぎれこんでいて、これがけっこうな出費につながるのだ、実は。

「俺、小さいころは大工の手伝いをして小遣いもらったりしていたんだ」

問題の男は、日に灼けた顔を崩してははは、と豪快に笑った。

大きい街に出たら、なにか仕事を探そう。

ネトレトが言い、三人はうなずいた。

「しかし、いい仕事がそう簡単に見つかるもんかねえ」とリグル。

「なかつたらなかつたで、まただれかさんが強盗事件を起こせばいいや」と返すのはラナ。

リグルは片眉をあげてラナを見た。

にやりと口が曲げられる。獲物を見つけたときの顔だ。

「いい案だね。そうしたら、もうひとり重要な役柄がいるね。お強い強盗にやられて、あわれにも顔面を鼻血で濡らす、役立たずの用心棒っていう役」

相変わらず、リグルの口はなめらかだ。

ラナもよせばいいのに、とアイシスは苦笑する。

案外、彼はリグルとのやり取りを楽しんでいるのかもしれない。そしてリグルも。

どんどん劣勢に追いこまれるラナを見て、アイシスは声をあげて笑った。

屈託のない笑い声。

ラナは顔をあげて親友を見た。

リグルの背中を叩き、なにごとか言いながらアイシスは笑っている。

変わった、とラナは思った。

その昔、いじめられっこだったアイシスにはラナしかいなかった。

ラナはアイシスの剣であり、盾であり、家であった。

アイシスはおどおどした子どもで、困ったような笑顔を見せることはあっても、無防備な笑顔はラナに対してしか向けられなかった。

ラナだけの笑顔だったのだ。

ラナは笑った。自嘲的な笑みだった。



## 第三十八話：ばか

『聖伝』 第三十八話

完璧に見えるものほど、崩れだしてしまうと脆いものだ。

はたから見てもわかるほどに、ラナはかりかりしていた。

アイシスの変化。

彼は大人になっていく、それは当然のことだ。少年から青年へ、子どもから男へ。

守られてばかりだった泣き虫のエルフは、いま、強い力をもった男へと変わろうとしていた。

ラナは動揺した。不安ばかりが募った。

置いていかれる。

精霊の声を、自分だけが聞けないという疎外感。

「なにをそうためこんでいるんだね」

はあ、とわざとらしくため息をつき、リグルはどっかと腰をおろした。

彼は抜き身の剣を手にしており、それは血に濡れている。いましがた魔物を倒したところなのだ。

リグルは布で丁寧に剣を拭い、ちらりとラナを見あげた。しかしラナは眉をしかめていて、なにも答えなかった。

リグルはまたため息をつく。

「おい、いがぐり」

返事はない。

「くり。いがぐりってば」

「うるせえな。人の名前ぐらいきちんと呼べよ」

「ラナ」

呼ばれてラナは目を丸くした。まさか、素直に言うことを聞かなくて。

あからさまに驚いたようすのラナを見て、リグルはふてくされた。

「なに、その顔。不細工。呼べって言ったのおまえだろ」

「まあ、そうだけど」

今度はラナがため息をついた。  
リグルの横に、乱暴ぎみに腰をおろす。

ほこりがたつだろう。そう言っつてリグルは彼を小突いた。

「それで、なんだよ」

「だから、なにをそんなにためこんだつて聞いたんだよ」

なんでもねえ、とラナはうそぶいた。

「あのな、忠告しといてやるよ。なにもねえつて言うなら、本当になにもねえような顔をしる。素直に顔にだけ喋らせておいてお口はだんまりなんて、卑怯者のすることだ」

ラナは口を尖らせたが言い返さなかった。  
言い返せなかったのだ。

リグルは立ちあがった。

悔しそつに草をにらむラナを見おろし、まったく不器用だね、と心の中で呟いて。

一行は森に沿い、西へ西へと進んでいった。

ラナの不機嫌はどつやらおさまったようつで、道のりは前のようつに

明るかった。

しかし、実際はそうでなかった。リグルだけが気づいていた。ラナの抱えた“もや”は、まだ晴れてくれないように。彼はいま、感情を押し殺しているだけなのだ。

抑えつけられた感情は、やがて暴発する。

リグルは小さく舌打ちした。

先日の問いかけは、ラナが口を開きやすいようにという道しるべだった。

話せばいい、話せばわかってやれる準備が、こちらにはできているのだから。

果たして、ラナはそのことに気づいているのだろうか。

純粹でひた向きで、前しか見えない不器用なラナに、繊細でちっぽけな悩み事なんて似合わない。

リグルの思いは、しかしラナには届かなかった。

ラナは結局、素直に悩みを打ち明けることができなかったのだ。

その日、ラナの口数は少なかった。

話しかけてやれば返事がかえってくるのだが、自分から言葉を発するということがない。

妙なことだった。彼はいつも会話の中心にいたから。

体調でも悪いのか、とアイシスは心配になった。

しつこいほどにつきまとい、そう問いただしたが、ラナはあいまいに笑って否定するばかりだった。

「どこへいくの？」

昼ごはんを終えたころのことだ。アイシスが慌てたような声を出した。

ふらりと立ちあがったラナが、おもむろに森へと足を進めたからだ。

「散歩」

「森に？」

背中を向けたまま、ラナがうなずく。

ぼくもいく、アイシスはそう言ったが、ラナは手をひらひらと振っていつてしまった。

こなくていい、こないでくれ。

力なく揺れる手が、そう言っているような気がしてアイシスは立ち尽くした。

「ちょっと、考え事。暗くなるまでには戻るから」

「……うん」

仕方なくアイシスはうなずいた。

そのようすを見ていたネットレトが眉をあげ、リグルをうかがう。彼の視線に気づき、リグルは苦々しげに首を捻った。

「いいんじゃない、あいつもガキじゃねえんだから」

アイシスは不安げな表情で腰をおろした。

ラナが歩いていったほうを見やる。木がつつそと茂って重くなるしい。

気持ちがどんよりと沈んだ。

しかしアイシスは待つことにした。暗くなるまでに戻る、ラナのその言葉を信じて。

彼が悪意ある嘘をついたためしなんて、これまでに一度だってなかったじゃないか。

ラナは無心に歩いた。

歩きながら木の根を蹴ったりした。しかし気が晴れようはずもない。

リグルが気を遣ってくれていることはわかっていた。

いま、正直に腹をわって話せば、きっと彼はいつものように茶化すこともなく真面目に聞いてくれるだろう。そう思った。

しかし、それだからこそ話せなかった。

一度そうやって弱みを見せてしまえば、もうリグルはいたずらな言葉を投げつけてこなくなるかもしれない。

ラナを気遣い、棘のある笑みを見せなくなるかもしれない。

あれほど憎らしいのに、腹立たしいのに、そう思うとラナは口が開けなくなってしまうのだった。

大きく息を吸い、時間をかけて吐き出す。

森の空気はしっとりとして湿っていた。

陰鬱げな見た目とは裏腹に、その懐にとびこんでみれば、これがなかなかいい心地の場所である。

森は春の気配に満ちていて、ラナの心はすこしだけ癒された。

ラナは真つ直ぐな性格だった。そして頑固だった。

一度思いこんでしまえば、なかなかその考えから抜け出すことができないのだった。

アイシスが離れていく、ラナはそう感じていた。

親友が、弟が、自分のもとから離れていく。

もう、ひとりぼっちではないアイシス。  
もう、助けの必要がないほどに強くなったアイシス。

ラナはいつだってアイシスのすこし前を、彼が道に迷わないようにして走ってきたはずだった。

しかし、いつのまにかアイシスはずっと先のほうを走っている。

あの日からそうだった、とラナは思った。ティエラが燃えた日のことだ。

あの日、夢中で駆けていくアイシスは光のように速く、どれほど足を回してみても、とても追いつけやしなかったではないか。

アイシスはその日から、すこしずつ遠くへと走っていつてしまったのだ。

もう、手は届かない。

いや、自分のちっぽけな手など、もはやアイシスには必要ですらないのかもしれない。

真つ直ぐな性格が災いした。

ラナは考えれば考えるほどに落ちこみ、厄介なことに彼はそのことに気づかなかった。

思考は落ちるところまで落ちてしまった。

これほどに思い悩んだことのなかったラナは、すっかり疲れてしまった。



脳が綿のよう、とはこのことだろうか。  
なにも考える気にならず、ラナは心が求めるまま眠りについた。

森の木が枝を伸ばし、柔らかな木陰を作ってくれる。  
小さくなった少年を、木はやさしく見守っていた。

ネトレトは剣を研いでいた。

このところ、戦いは激しくなる一方だったが手入れしてやる時間がなく、愛剣はすっかり光を失っていた。

細身であり飾りのついていない剣を、ネトレトは丹念に研いでいく。

しゅっしゅっ、と小気味よい音が静かに響いた。

リグルはといえば、これまで集めた短剣やタガーのたくいを広げ  
ては眺め、眺めては手にとってもてあそんでいた。

それらの刃は血を知らない。

臭いもので曇らせてやるのはいやだ、とリグルは言う。

彼のセンスのよさは、剣に留まるものではない。

そんな彼の選んだ品物だ、どれも見目良いものばかりであった。

アイシスは彼のとなりに座り、一緒になって眺めていたが、どう

もそわそわして落ち着きがない。

リグルはそれに気づいていたが、あえてなにも言わずにおいた。

「きれいだね。いつから集めているの」

「さあ。でもまあ、ほとんどはタリファで買ったものだよ。そういえば嬢ちゃんも、いいものひとつ持ってるよね。見せてくれる」

うん、とうなずいてアイシスは短剣を取り出した。ラナが買ってくれたものだ。

武骨な彼が選んだとは思えないほど、繊細で華奢なつくりが美しい代物である。

店の前で、彼はどれだけ悩んだことだろう。

一直線の眉を寄せ、日に灼けた顔をしかめて吟味するラナの姿を、リグルは容易に想像することができた。

ふ、と笑みが漏れる。

「大切にしなよ」

リグルから返された短剣を、アイシスは両手でしっかりと抱いた。そして不安に揺れる瞳を空に向けた。

太陽が赤い。もうじき沈んでしまっただろう。

アイシスは一度、大きく震えた。

空が急速に暗くなっていく。

アイシスを悲しませるような嘘を、ラナはついたことがない。  
しかしいま、空は闇に染まりはじめており、アイシスの心は苦し  
い。

まさか、なにかがあったのでは。

どうしてもラナが帰れなくなるような、不測の事態が。

「アイシス？」

その考えにいきつくなり、アイシスは立ちあがっていた。

おそろしい可能性に、どうしてももっと早く気づかなかつたんだろ  
う。

リグルが狼狽した声をあげたが構わなかった。  
わき目もふらず、森へと駆けていく。

木々の枝がすぐにその背を隠してしまい、リグルは大きいため息  
をついた。

「追おうか」とネットレト。

「いや」リグルは左手で顔を覆い、

「俺がいくよ」

ネトレトはうなずくと手短かに説明をした。アイシスの発作と、その対処法について。

聡いリグルはすぐに理解し、踏み鳴らすアイシスの足音を頼りにして走り始めた。

ネトレトは静かに立ちあがり、火を起こす。

傷つきやすく、しかし打たれ強い少年たちが、迷うことなく帰ってこられるように。

ラナは背を木にもたせかけ、割と行儀よく眠っていた。

疲れていたのだろうか、断片的な夢を見ながら。

どれも幼いころの記憶をたどるような夢で、いつもとなりではアイシスが笑っていた。

ラナはほほ笑み、目を開けた。

そして言葉を失った。なんと、すっかり暗くなっているではないか。

たしか自分は言ったはずだ、暗くなるまでには戻る、と。

「くそっ」

小さく罵り、ラナは飛びあがった。

枝にぶつかり、根に足をとられながら、きた道を一目散に駆け戻る。

いまごろアイシスはどうしているだろうか。

心配しているだろうか、それともリグルたちと談笑しているだろうか。

どっちだっていい。

ラナは必死の形相で走った。

なぜ気づかなかったのだろうか、どっちだっていいのだ。

アイシスが気にしていようとなかろうと、ラナは彼との約束を守りたかった。

アイシスが必要としていようとなかろうと、ラナにはアイシスが必要だったのだ。

「しめんな」

ラナの目に自嘲の涙が浮かぶ。

なんとばかばかしい。

一度目が覚めると、くよくよしていた自分が情けなく思えて仕方なかった。

そしてアイシスに申し訳なく思った。

やはり、彼は真っ直ぐな性格なのだ。

「アイシス、おい、待てって！」

リグルは声を枯らして叫んだが、しかしアイシスの足は止まらなかった。そして恐ろしく速かった。

とても追いつけるものではない。

リグルは半魔だ、そして魔族は身体能力に優れた種族だ。

彼の意味はどうあれ、やはりリグルは女であったが、しかしそうと感ぜさせないだけの力も素早さも持っていた。

だが、アイシスはどうだ。目を見張るようなあの速さといったら。

アイシスの行方を教えてくれるのは、ときおり思い出したようにちらちら光る銀色の髪、それしかなかった。

「おい、アイシス！」

アイシスの耳には届いていない。リグルの声も、乱れた自分の足音も。

彼の思うことはひとつ、ラナ、それだけだった。

ラナはどこにいるんだろう。なにをしているんだろう。

怪我をしてはいないか、まさか魔物に襲われはしていないだろうか。

なにを思い、なにを考えているのか。考え事の答えは見つかったのか。

ラナはまったく愚かであった。

アイシスはこれほどにラナを思い、必要としているのに、それを疑ってしまうなんて。

アイシスの呼吸が早まる。足がもつれ、よろめいては木にぶつかる。

それでもアイシスは進もうとした、その先に親友がいると感じて

リグルはずっと後方に引き離されていたが、突然アイシスの足が勢いをなくしたので、なんとか追いつくことができた。

息を荒げてアイシスに駆け寄る。

「大丈夫か、おい」

アイシスはもはや立っていることすら覚束なかった。

力が抜けた膝は折れ、胸を掻いて崩れ落ちる。

リグルは慌てて彼を抱きとめた。

顔が真っ赤だ、そして呼吸が短くて早い。大量の汗をかいている。ネトレトの説明どおりの症状だった。アイシスはまた過呼吸を起こしたのだ。

大切なものを失うかもしれないという恐怖。  
アイシスの心は悲鳴をあげていた。

「おい、なあ、嬢ちゃん。大丈夫だよ、あいつはすぐに戻るから、だから気を安くしな」

リゲルは腰帯から袋を抜き取り、中身を乱暴にぶちまけてしまうとアイシスの鼻と口とにあてがった。

アイシスの呼吸にあわせて袋も呼吸する。

閉じた目に涙を浮かべ、頬を真っ赤に染めたアイシスを見ていると、リゲルはいたたまれない気持ちでいっぱいになるのだった。

「大丈夫だよ」

ぼつてりと熱をもったアイシスのまぶたに触れる。額に汗が光っている。

アイシスはうす目を開け、すぐにまた閉じた。

息を荒げたラナが駆けつけたのはそんなときだった。

「アイシス」

リゲルがはつと顔をあげる。

「アイシスっ」



静かな森に、骨が骨を打つ鈍い音が響いた。  
ぱつと立ちあがったリグルが、渾身の力をこめてラナに殴りか  
つたのだ。

骨ばった右の拳にためらいはなかった。

ラナは頬から頭全体に強い衝撃を受けて倒れた。  
頬が痺れ、目がちかちかする。

歯で食い破ってしまったか、口内に血のにおいが広がる。

呆然としたようすで頬に手をあてるラナを、リグルは憤怒の形相  
で見おろした。

「見損なったよ。おまえはばかだが、なにがあっても大切なやつは  
傷つけないって、そういう男だと思っていた」

「……………」

ラナには言葉もない。ただ、横たわるアイシスをうつろに見つめ  
ている。

涙を流すアイシスは、どうしようもなく小さかった。

「それ以上ばかになるんじゃないよ。アイシスにはおまえが必要な  
んだよ、それくらいわかれよ。おまえにはおまえの、おまえにしか  
できない役目があるだろうが。」

アイシスは全然強くなかねえんだ、おまえが支えてやらなきゃ壊れるんだよ」

こんなことを、なんで俺が言わなきゃならねえんだ。リグルは忌々しそうに唾を吐いた。

「ごめん」

震える声でラナが言った。

アイシスに向けて言ったのが、それともリグルに対してか。

「ごめんな」

ラナはそっと手を伸ばし、アイシスの額にはりついた前髪を払ってやった。

髪が揺れ、尖った耳が見える。

神に愛された、エルフの証。

大きく損なわれてしまった一族の命と、まだ見えない“使命”。アイシスの抱えているものは大きく、彼のちっぽけで薄い背中にはあまりに不釣り合いだ。

それを助けてやれるのは、一番よく勇気づけてやれるのは、ほかならぬラナ、彼しかない。

ごめん。もう一度ラナが呟く。

アイシスの目は閉じられたままだったが、涙に濡れたまま、しかしうつすらと笑みを見せたように思えた。

発作が落ち着いたアイシスは、ラナが背負って歩いた。

リグルはすこし前に立ち、迷わないように気をつけながら森を進んだ。

やがて彼らは小さな炎を見た。

そばに腰をおろすネットレトの顔を、妖艶に照らし出している。

憔悴したようすのラナを見、ネットレトはいつもの声で言った。

「おかえり」

注意していなければ刺々しくも聞こえる、澄みきった声。ラナの胸がきゅうと狭くなった。

「ただいま」

声が掠れる、視界がにじむ。

背中のアイシスはひどく軽い。

月も星も声をひそめ、静かに光を放っている。そんな夜のことだ  
った。

### 第三十九話：魔物のお導き

#### 『聖伝』 第三十九話

アイシスは太陽がすっかり昇ってしまうところに目を覚まし、そうと気づいたラナは彼の前に土下座した。

勢いよくさげた頭が、地面にぶつかって鈍い音をたてる。

アイシスは慌てた。

「な、なんなの、いきなり。変だよ、どうして頭をさげるの、おかしいよ」

ラナは額を地面にすりつけたまま、本当に悪かった、約束を破るつもりはなかったが、気がつけば眠っていたのだと言って詫びた。

「本当にごめん！」

「いいよ、もういい。ラナになにもなかったなら、僕はそれで十分だよ」

アイシスはい、ラナの前にしゃがみこんだ。

肩を持ち、顔をあげさせる。

ラナは眉を寄せていた。心から申し訳なさそうにしている。

あまりに深刻なその顔に、アイシスは思わず笑ってしまった。  
ラナはうかがうように眉を持ち上げる。

「本当に、いいのか？ いま謝らせておかねえと、俺、もう謝らねえぞ」

「おい、アイシス。許してやる代わりに腹踊りさせるよ。いい余興になるぜ」とリグルが茶々を入れる。

それに手をふり、アイシスは声をあげて笑った。  
謝らないで。でも、もう寝坊しちゃだめだよ。

言葉どおり、ラナはもう謝らなかった。そしてもう疑わなかった、  
アイシスとの絆を。

立ちあがった彼は、憑き物が落ちたように清々しい顔をしていた。

ラナはすっかり明るさ取り戻し、いつものお調子者へと変身した。  
アイシスは笑っぱなしだし、リグルはからかったり、ばかにしたり。

ネトレトは穏やかだった。その顔に以前のような角が見られない  
ことに、三人は気づいている。

久しぶりの、賑やかでばかげた騒ぎっぷりだった。

ラナは手を打ちたたいて笑い、アイシスの肩に腕を回して揺さぶったりもした。

首を前後にふられ、困りながらもアイシスは楽しそうだった。

そんなだから気づかなかった。

天気の良い午後で、まるで害のなさそうな太陽にも目をくらまされていたのかもしれない。

彼らの左手に広がる森が突然叫び声をあげ、襲いかかってきたのは、四人の旅人にとってまるで予期しなできごとだった。

もちろん、森そのものが牙をむいたわけではない。

正確にいうと、森に潜んでいた魔物たちが、である。

一見すると猿のような、しかしそれにしてはずいぶんと大きく、それでいてすばしっこい魔物であった。

しかも大群である。

軽く見た限りでは、どれほどの数とも判断しがたいほどの。

四人は目を丸くし、それぞれ剣を抜いた。

しかし、もとより身構えていれば別にせよ、突然の事態に彼らは浮き足立っていた。

とつてい防ぎきれぬふうでもない。

ネトレトは意識を集中した。ヴァネッサを呼ぼうというのだ。

詠唱の時間ももどかしい。

彼は段階をすっぱ抜かしにし、力づくで扉をこじあげようとした。そのときだった。

「おやめなさい」

抑圧のない声が聞こえた。

その声に押さえつけるような凄みは感じられなかったが、ネトレトははっとして意識を引き戻した。

途端、四人と魔物とのあいだに、恐ろしく猛る炎の壁が現れた。魔物たちは動揺し、甲高い声をあげて立ちすくむ。

あっけにとられ、だれも口を開くことができない。

「それではどうぞ」とまた例の声が言う。

アイシスは身を震わせた。

弾かれたように顔をあげると、台本をこなすかのように自然と詠唱をはじめめる。



ネトレトは硬直して動かない。

光の精霊ユフィロスレジアが現れ、立ち向かい、あるいは逃げていく魔物たちを光の矢で射る。

あつというまに魔物の群れは姿を消し、同時に炎の壁も消えた。

ようやくのことで、アイシスたちは声のほうをふり返った。

立っていたのはずいぶんと長身の男だった。

まるで手入れされた気配のない髪は真っ白で、きのこのように盛りあがっている。

前髪は目の上で切りそろえられていて、鋭気のない目が細められている。

通った鼻筋に、深く浅く刻まれたしわ、薄い唇。

整った顔立ちは青白く、ともすれば生きた人とも思えないほどだ。

男は赤くてもっさりしたマントを羽織っており、どう見てもかびの生えていそうなそのマントは、春の陽気にどうも照れくさそうだった。

「なんだ、いまの」

だらしなく口を開け、ラナが言葉をもらす。

しかし男はなにも言わず、ぷいと顔をそむけると、大股で歩き出してしまった。

「お、おい、あんた！」

男はラナの言葉がまるで聞こえていないかのように足を進め、そのまま森に入ってしまった。

アイシスたちは顔を見合わせる。

それぞれ小さくうなずくと、だれからともなく男のあとを追って歩き始めた。

なんと好奇心をそそる男だろう。

木のあいだをすり抜けていくと、やや入りこんだところに小屋があった。

小さくて素朴で、なんの飾り気もない小屋だ。

正直に言ってしまうえば、すこし不恰好でさえあった。

男はこの中に入っていたのだろうか。

アイシスたちは隠れるようにして木の陰からよつすをつかがっていたが、小屋から大きな物音がしたので驚き飛びあがった。

かはは、と鼻につく笑い声が聞こえる。

「毎度懲りんやつだな。はやく起きたらどうだ、踏むぞ」

話の内容から察するに、あれはだれかが倒れた音だったのか。ぼそぼそと小さな声がなにをか言い返しているようだ。

四人はまた顔を見合わせた。

好奇心に後押しされてここまで来たものの、これからどうするべきか。

まさか、このままようすをうかがっているという訳にもいくまい。ならばどうする、押しかけるか。

しかし、彼らが考えているあいだに、答えは向こうからやってきた。

突然、小屋のドアが開いたのだ。

だれか出てくるかと四人の視線は入り口に向いたが、しかしだれも出てこない。

それどころか、ドアを開けたらしい人影すら見当たらないのだ。

そよとした空気が頬をうっすら撫でていく。

そんなところで固まっていないで、入ってきたまえ。

アイシスは声をあげそうになった。すぐ近くで耳慣れない声があったのだから。

慌てて辺りを見回すも、それらしい人物はいないようだ。するとまた声が投げかけられた。

怯えることはない、語っているのは大地だ。さあ、きたまえ。客は歓迎する。

「私は歓迎しません」

あとの声は、確かに小屋の中から聞こえた。無愛想な声だ。

大地が語るだって？

ラナは足をあげて目をこらしたが、もちろん地面に口など見当たらない。

四人はそれぞれ考えていたようだったが、やがて吸いこまれるようにして小屋へと足を踏みいれるのだった。

アイシスはあまりの光景にあんぐりと口をあけた。

本、本、本の山である。

まさに山なのだ、使い古された、一たとえとしての生半可な言い回しではない。

本に守られるようにして、ふたりの男が椅子にかけていた。

ひとりはゆるく波打つような小麦色の髪を腰まで垂らした男で、柔和そうな顔つきをしてほほ笑んでいる。

右目の下にある泣きぼくろが特徴的だ。

こぎれいな格好をしていて、組んだすらりと長い足と、そのうえに置いた手の指の細さに気品がある。

そしてもうひとりは先ほどの男だった。

「いったい、どうしたのだ。怪我でもしたかね」

足を組んだ男が言った。

さきほど彼らを誘った声と、まるで同じの柔らかな声。

垂れがちの目が細められる。

四人はすっかりあっけにとられていたが、気を取り直したリグルが口を開いた。

「なに、ここは病院なの。そうは見えないけど」

「病院といえば病院だ。それで、怪我でもしたのかね」

「しないよ」

それはいい、と男は言った。そして驚くべきことを口にした。

「すばらしき超越者がふたりもいるんだ、よもやこんなところで傷など負うまい。地位の低い魔物しか住まない、この森で」

ネットレトの眉がわずかにあがる。

どうして知っているのか、この男は。

ネットレトの顔つきが一気に険しさを増した。

あまりのことに薄れていた警戒心が、ここにきて目を覚ましたのだ。

「なにを言っているのかわかりませんが」

「隠すことはない。秘密なんて、ワタクシの前では無意味なものなのだから。そうだろう、闇遣いのネットレトくん」

はっと音をたててネットレトが息をのんだ。

男はにっこりと笑うと、アイシスたちを順に指さしてその名前を言い当てた。アイシスくん、ラナくん、リグルくんだね。

「なんで知っているの？」

目を輝かせてアイシスが問うと、男は満足げにうつぶ、と笑った。

「ワタクシはなんでもわかるのだ。なんせ世に誉れ高い“地読み”だからね」

「ちよみ」

「そう、地読み」

発音を教えて聞かせるようにして男が繰り返す。

ネトレトはその言葉に聞き覚えがあった。

地読み。首をひねり、どこかで繰り返したろう本のページに思いを凝らす。

「うるさいですマイケル。やるなら外でやってください」

ずっと無愛想を貫いていた白髪の男が、見かねたのかついに不機嫌な声を出した。

それにしても、マイケルだって？ アイシスは笑い出しそうになった。

優雅に足を組んだこの男に、陽気なその名前はまるで似合わないのだ。

「なんだ、ワタクシばかり羨望の眼差しを受けるから悔しいのか。まったく、小さい男だなジャックは」

ジャック！ アイシスは今度こそ笑ってしまった。

リグルも顔をひきつらせて笑う。

「偽名丸出しなんだけど」

「いったい、この男たちはなにものなのだろうか。」

そのとき、ずっと考えこんでいたネットレトが、驚きをにじませた声をあげた。

「地読み　かつて魔法学校を主席で卒業した、ハーデース・オルセロイか」

男　マイケルと呼ばれた　は目を丸くした。

驚きをあらわにし、ジャックらしき男をつかがう。  
ジャックは無表情だ。

うつたえるマイケルを見、ゆるゆると息をつく。  
呆れた、といったようすだ。

「余計なことを話すからです。この自慢しい」

「べ、別に自慢したわけではなく、実力のままを言っただけで」  
やはり、とネットレトはうなずいた。

ハーデース・オルセロイ。

魔法学校の文献に必ずその名を見る、高名な魔導師だ。

美貌の人で、魔法学校には主席で入学、そして卒業したという。



地の精霊ラジネを使役し、卒業まもなく絶対者の地位を手に入れた、と。

もちろん高級官僚として王城に仕えており、大地と会話できるという“地読み”の力でたくさん的事件を解決したのだが、ある出来事をきっかけに辞めてしまった。

その出来事というのが　。

「ではあなたは確かにハーデースさんですね。天才魔術師の死を期に首都を去っていったという、地の絶対者」

そう言いながら、ネトレトの視線はジャックに向けられていた。鋭い視線だ。

顔に浮かぶ、ほんのわずかな変化も見逃すまいという気迫。ジャックの面を、かすかではあるが動揺の色がよぎった。

「なあ、ネトレト。悪いけどぜんぜん意味がわからねえ。なにを言っているんだよ」とラナ。

ネトレトはラナの追求を手で制した。

あとで話すから、というのだ。仕方なくラナは黙った。

「私はかつて首都トウーディールのとなりの村に住んでいました。小さな村です。ノトといいますが、そこにまで天才魔術師の噂は聞

こえていました。

若白髪で長身で、無表情の男だと。精霊の力を経ずして奇跡を起こせる、唯一の魔術師である、と」

若白髪で長身、そして無表情。

それはまさに、いま彼らの目の前でくつろぐジャックそのものではないか。

とはいえ、彼はもう若いといえる年ではなさそうだったが。

「あなたは生きていたんですね。天才魔術師、ネロ・ウイグイー」

ジャックだった男は、面倒くさそうにため息をついた。

予想だにしていなかったネットレトの博識さに観念したのか、それともどうでもよくなったのか（おそらく後者だ）、白髪の男は黙りこくってなにも言わなくなってしまった。

ネットレトが指摘したとおり、彼らはマイケルとジャックという、いやに楽しげな名前の男ではなかった。

ネロとハーデース。

世間を驚かせた、ふたりの天才。

その彼らが、どうしてこんな森のはずれに暮らしているのか。ネロにいたっては、崖から飛び降りて命を絶ったという記録まで残っているというのに。

ネロは仏頂面で本をめくっている。

ためにハーデースがすべて説明することになった。

「まあ、嫌気がさしたのだね、ユリシアの傲慢な王様に。きらびやかな王城暮らしは悪くなかったし、ワタクシにはそちらのほうが相応しいと思うのだが、このネロのやつがそそのかすものでね」

「いわゆる世捨て人だ」とリグル。

「んん、すこし野暮な言い方だな。風流人と呼んでくれたまえよ」

ラナはいまにもくしゃみをやらかしそうな顔をした。ふにやりと鼻をしかめる。

気取ったハーデースの態度が、どうも彼には合わないらしい。

「どっちだっていいけど。それで、その風流人さん方は、こんなところだなにをしているのさ。まさか、字のごとく風に流れて日々をすごしているわけじゃないだろう」

リグルは部屋を見回した。

所狭しと積みあげられた本の塔。

ざっと見た限り、それらは風流人が好むような詩だの人物録だのというぬるいものではなさそうだった。

読める文字から読めない文字まで、どれも小難しい顔をしてびっしりと詰めこまれているようす。

「ああ」

ハーデースは手を打った。

「それには天才魔術師についてまず話してやらなければ」

「マイケル」ネロが本から顔をあげ、

「外でやってください」

威圧さえ感じさせる彼の不機嫌さに押され、ハーデースを先頭に五人は小屋の外へ出た。

ラナは眉を寄せ、またえらく短気なやつだな、と呟く。

「やつはいつもああなのだ。まあ、この三、四十年で、すこしはましになったのだがね」

「あれで」

ラナが素直な声をあげる。

ハーデースはかはは、と笑った。

「不器用な男なのだよ」

それからハーデースは彼らのこれまでについて語ってくれた。

十のころから魔道書に読みふけり、人と会話することも忘れて魔術の解明に打ちこんだ少年のこと。

十余年の歳月をかけ、ついに魔術を会得した少年、いや青年は、天才魔術師と呼ばれてもてはやされるようになったこと。

しかし当の本人はそのことを喜びもせず、逆に疎ましそうにしながらやはり本を読みふけていたということ。

「やつはどん欲に力を求めた。髪が真っ白になるまで本にかじりついてね。しかし、壊すための力じゃない、癒す力が彼には必要だったのだ。大事な人を救えなかった、癒してやる力がなかった、その悔しさがやつの原動力だからね」

ふうん、とリグルが鼻をならした。

「癒す力って、じゃあ、あんたたち本当に医者なの。さっき、怪我がどうのこうのって言ってたけど」

ワタクシは違うが、やつはね。ハーデースは言った。

しかし、とネットレトが口を挟む。

「いくら力のある魔導師でも、傷を癒すことはできないはずですよ。我々は傷つけ、奪うことしかできない」

「んん、そうだね、普通は。」

魔法というのはね、自由に見えてけっこう縛りがあるのだ。その縛りを解き、運命すら曲げてしまうのが魔術の力だよ。到底、会得しようとしたところでできたものじゃないがね」

つまり、やつは本物の天才なのだよ。ワタクシもまあ、それなりに天才だけどね。

そう言っつてハーデースはお茶目に片目をつぶつて見せた。

一行はその夜、小屋に泊まらせてもらつことにした。

ネロは露骨にいやそうな顔をしたが、ハーデースはなかなか上機嫌だった。

この男とふたりきりだと、どうも気が詰まるのだ。そう言っつてハーデースは笑い、ネロはよけいにむくれた。

聞けば、ふたりは御年五十もすぎるといふことだったが、はしゃいだりふて腐れたり、これがなかなか子どもくさい。

アイシスはなんだか嬉しくなつた。

夕ごはんはシチューだった。

ネトレトはニンジンを残した。

ネロはニンジンとブロッコリーを残した。

## 第四十話：ふたりの天才

### 『聖伝』 第四十話

ネトレトにとって、天才たちが住まうその小屋は、相当に魅力的だった。

まるでお目にかかったことのない本が、山と積まれているのだから。

聞けば、そのほとんどはネロのものらしい。

ネトレトは本を読ませてほしいと頼んだが、とりつくしまもなく断られてしまった。

「いやです」

すぐることさえ許さないような口調だ。ネロはネトレトに目もやろうとしない。

諦める、とハーデースが首をふった。

「やつが本に執着すること恋のごとし。独占欲の強いやつさ、このワタクシさえ読ませてもらえないのだから」

「ハーデースごときが読んで理解できる代物ではありません」

雰囲気こそ違うが、どうもこのふたりの関係はラナとリグルのそ

れに似ている。

アイシスにはそう思えてならなかった。

そう言われてしまったのは、ネットレトも言葉を次げなかった。

しかし引き下がるわけにはいかない。なにかがわかるかもしれない、貴重な機会なのだ。  
むざむざ見過ごしてなどいられない。

「では、本には触れませんから、私の質問に答えていただけませんか」

ようやくネロは視線を動かしてネットレトを見た。

目じりに小さく刻まれたしわが、彼が生きてきた時間の長さを感じさせる。

「闇遣いについてでしょう、どうせ」

「はっ」

「……………」

ネットレトは真っ直ぐにネロの視線を受け止める。ゆるぎない意思を感じさせる黄金の瞳。

「いいでしょう、とネロが言った。」



「ただし、面倒になってしまったらそれまでです。いいですか」

「もちろん」

「小難しい話になりそうだが、きみたちはどうする」とハーデース。

「聞きます」

アイシスが真っ先に口を開いた。

「ぼくも聞きます。ネットレトの抱えているものを、すこしでも分かちたいから」

「俺も」

ラナが続く。

リゲルは頭のうしろで手を組み、にやりと笑いながらうなずいた。

ネットレトの目が丸くなる。

ネロはまるで無頓着に、ではさっさと始めましょう、と言った。

まず、ネロはネットレトがどこまでを知っているか尋ねた。

“放出”の呪いと、それを回避したひとりの闇遣いがいたこと、それくらいです。ネットレトは申し訳なさそうに言った。

「一般の図書館でそれだけ調べられたなら上出来です。当然あなた

もご存知でしょうが、なにしろ闇遣いについての文献は少ないですから」

「ええ。たくさんの方の図書館に通いましたが、目当ての本に出会えたことはあまりありませんでした。おかげで関係ないことばかりに詳しくなる始末です」

物知りなのはいいことです、とネロ。

「それで、あなたはその、放出をどうすれば避けられるかを調べているというわけですね。回避しえたひとりの闇遣いを探して」

「はい」

「なら、私はその答えを知っています」

ネトレトは思わず体を揺らした。彼の座る椅子が音をたてる。

手にじんわりと汗がにじんだ。

本当ですか。平常の声を装うのに、彼は一苦労した。

「嘘は言いません」

「では、教えてもらえますか」

ネロが小さくうなずく。

「率直に言います。彼は、その闇遣いは、自らの魂を葬ったんです」

深い沈黙が訪れた。

やや間を空けてから、淡々としたネロの説明が続く。

「精霊を使役するには心の強さが必要。しかし彼は、どうやらヴァネッサに心を食われてしまったようなんです。

超越種の力というのは凄まじいですから、つまり諸刃のやいばというわけです。制御できなければ己の身を食わてしまう。」

激しく損なわれた心は体に留まる力も失せ、ふよふよ離れて浮き上がった、魂として。

これ、精霊化っていうんです。知っています？ 人だって精霊になれるんですよ。正しくは、精霊に近い存在に」

ネロの説明は続いた。

魂というのは思念のようなもので、消失はあっても死はないんです。そういう意味で精霊に近い。

輪廻転生、という言葉をご存知ですか。あれはつまり、肉体という宿り木に、魂が入っては抜けていく、そういうことを指すんです。

ある固体として生き、死んだらまた次の固体として生きる。魂はそうして生き続けるんです。

だが、ときどき道をそれる魂がある。

力に溺れた魔導師なんかにあるんです、稀に。精霊に惑わされて力を使いすぎ、心をいたずらに疲弊させて。

そうして道を外れた魂は、もう輪廻転生の流れに戻ることはできない。二度と肉体を手に入れることができない。

死んではいないが生きてもいない。

ただ、世界が終わるのをずっと膝をかかえて待つしかない。

「それが、精霊化」

アイシスの声は、すこし震えた。

だって、なんと恐ろしいことだろう。

死んではいないが、生きてもいないだって？ どれほど辛いか、どれほど孤独か。

「この闇遣いの話については、記録をもとにした私の推測です。しかし、限りなく事実に近いと思われます。

彼は精霊と化した。きつといまもどこかで、それまで自分が闇に葬ってきたものたちを抱き、座りこんでいることでしょう」

アイシスやラナの背中を冷たいものが走った。

リグルも身をぶるりと震わせた。

四人は小屋を出、ゆっくりと森を歩いていった。

雨が降ったらしい、地面がすこし湿っている。

風はすこし冷たかったが、ネロの話に体は火照っている。

「おい」

ラナがネットレトに声をかける。

ネットレトの顔はすこし青ざめているようにも見えた。

「おい」

「……ああ」

「ばかなこと考えちゃいねえだろうな」

信用されていないな。そう言ってネットレトはひっそり笑った。

「いくらなんでも、輪廻から外れるのはごめんだ。それに、もう殴られたくないからな」

言いながら左頬を押さえる。

ラナは一瞬きょとんとし、それから豪快に笑った。

ハイネと出会った湖のほとりで、彼はネットレトを思いきり殴ったのだ。

そういえば、とアイシスは思う。

あのころからネットレトは、ずいぶんと変わってきたような気がする。

いつも鍵をかけ、開く気配のなかった心の扉が、わずかに軋んでいるような。

ときおり見せる彼の柔らかな笑みは、扉から漏れ出るあたたかな光にも似る。

男という生き物は、ときに拳をぶつけあつことで前に進めるものなのかもしれない。

もしもし。

「げっ」

ラナが飛びあがった。ちょうど足の下から声が聞こえてきたのだ。

ハーデースだ。

二度目のこととはいえ、なにもない場所から声がするというのはどうも気味が悪い。

小屋に戻っておいで、いいものが見られる。

「いいもの？」

確かな学識のうえに生まれる奇跡さ。

四人は顔を見合わせた。

言われたとおり小屋に戻ると、床にしゃがみこんだネロが、チヨークでなにやら落書きをしているようだった。ところどころに数字のようなものが見える。

「おかえり」

ハーデースが優雅にほほ笑む。

彼が手で指し示した先には、一頭の小鹿が目をつるませて横たわっていた。

腹が赤く染まっている。

「どうやら群れからはぐれたらところを魔物が獣かに襲われたらしい。このままでは親のもとに帰れないからね」

「治療してあげるんだ」

アイシスの目が輝いた。

作業をすませてしまったらしいネロが立ちあがり、小鹿に手招きした。しかし小鹿は動かない。

ネロはむくれるとハーデースをふり返った。

「呼んでください」

はいはい、と今度はハーデースがしゃがみこむ。

彼は華奢な手を床にそえた。

目を閉じ、手に意識を集中させる。

きつと大地を通じて語りかけたのだ、小鹿は大人しく、傷が痛まないようにゆっくりと動き、ネロが書きこんだ模様の中心へと座った。

「四十年」

「え？」

ハーデースはにつこりと笑った。

「四十年かかったのだ、癒しの力を手に入れるのに。もちろん、万能というわけではない。治せない傷もある。」

しかし、やはりやつはすごいよ」

ほとんど口を開けないままに、ネロがなにごとかを唱える。ぶつぶつと、まるで題目のように。

それにあわせて床の文字がわずかに光ったり、揺れたりするのがアイシスには見てとれた。



それがあるとき、とりわけ強く見えた。  
すると次の瞬間、なんと文字が浮きあがったではないか。

白い光が小鹿を包む。

驚いた小鹿は跳ね起きた。本当に、元気よく跳ねたのだ。

腹についた痛々しい赤色は落ちていないが、しかし痛がるようすはない。

力強く二、三度その場で跳ねてみせると、開いた扉から出ていつてしまった。

四人は感じ入ってその方向を見ていた。

「すげえ」

珍しくリゲルが感嘆の声をもらした。

しかし彼らがどれほど賞賛の言葉を並べても（もちろん素直な気持ちで、だ）、ネロはまるで嬉しそうな顔をしなかった。  
むしろ鬱陶しそうに顔をしかめるのである。

十のころから本の虫となっていたとはいえ、ここまで偏屈になるものだろうか。

アイシスは苦い顔をして笑った。しかし嫌いではない。

結局アイシスたちは、ふたりの天才と五日ほどをともにすごした。彼らの知識量には目を見はるものがあり、その語りはアイシスたちを飽きさせなかった。

ネロはかなりの偏食家で、ジャガイモ以外の野菜にはまるで口をつけようとしなかった。ラナが呆れた声を出す。

「よくそんなで頭が回るよなあ」

かはは、と笑って答えたのはハーデースだった。

「こんなだから髪がこんなことになったのだ。この男は二十のなかばにして白髪頭だったからな」

ネロはぶすりとしたままにも言わない。

不思議なふたり組だった。

ネロは寡黙で、ハーデースは饒舌。

しかし魔法や魔術に関することとなると、ネロの口はおそろしく滑らかになるのだった。

ふたりとも、多くの女性をふり向かせてしまっただろう容貌をもちながら、中身はまったく珍妙である。

魅力的な人物だった。

彼らに出会えた偶然を、アイシスたちはたいそう喜んだ。

六日目の朝、四人は再び荷物を担いだ。天才たちに別れを告げる  
ときがきたのだ。

ネロはハーデースに連れ出され、しゅしゅといったようすで見送  
りに立った。

「きみたちはなかなか面白い四人組だったな」

「あなたたちこそ」

ハーデースとまとめるのはやめてください、とネロが文句をたれ  
た。

別れの挨拶を交わしているあいだ、ネロはずっと不機嫌にうつむ  
いていた。早く本が読みたくて仕方ないのだ。

しかしいよいよ旅立ちというとき、ようやく彼は口を開いた。

「精霊化に気をつけなさい。あなたたち超越者は、常に死となり  
あわせなのだと自覚しなさい。いたずらに力を使わないように。  
心をしっかり休ませることです、よく笑い、よく怒って」

言うなりネロはマントをひるがえし（彼はいつでもマントを羽織

っていた)、さつさと小屋に戻ってしまった。  
その背にネットレトは深々と頭をさげる。

お元気で、とハーデースは言った。

「もし、トゥーデールを訪れることがあれば、リフリジアという  
店を訪ねてみるといい。クッキーが美味しいから」

一行は手をふり、ふたりの天才と別れた。

さつきからラナがなにやら難しい顔をしている。

あごに手をやり、いかにも“考えています”といったようすで。

「なに、その顔。便秘？」

「おまえっ、はしたないぞ」

リグルはにやにやと笑っている。

ラナは大きくため息をついた。

「いい案がないか、考えているんだよ。ネロが言ったら、よく笑い  
なさいって」

それからラナは、思いついたように手を打った。

「ネットレト」

「ん」

「くすぐったいの、平気か」

ネットレトは一瞬目を丸くする。

しかしすぐに気を取り直し、なんでもないふうな顔をしてみせた。

「平気だ」

ふうん、とラナはうなずく。

しかし態度とは裏腹に、探るようにして近づいてくるではないか。

「だから、平気だと」

「なら構わねえじゃんか」

言うなりラナは、手をぱきぱきと鳴らしてネットレトに襲いかかった。

しかし大人しくつかまるネットレトではない。

彼はさらりと身をかわしてラナをよけた。

「アイシス、いけ!」

「ええっ、ぼくも参加するの?」

戸惑いながらもアイシスは楽しそうだ。

ふたりは協力してネットレトにつかみかかる。  
だが敵も手ごわいもので、なかなか捕まえることができない。

リグルは腕を組み、不適な笑みを浮かべて立っている。  
ラナは彼にちらと視線を投げかけた。

「よし、こうなったら奥の手だ。リグル！」

「お。ついに」

どうやらリグルは声がかかるのを待っていたらしい。  
彼は祭りには参加したい性格なのだ。

三人がかりとあつてはネットレトも逃げることができない。

直線的につつこんでくるラナをよけたかと思えば、すばしこい動きでアイシスが逃げ道を封じ、勘のいいリグルが先を読む。  
この連携はなかなかのものであった。

ついに捕まったネットレトは、うしろからラナの馬鹿力で押さえこまれてしまった。

「待てっ、こういうやり方はおかしいと思う」

しかしネットレトの言い分は聞き入れられなかった。

ラナは豪快に笑った。

「アイシス、リグル、存分にやっつけてしまえ！」

「うん！」

「おまえが指図してんじゃねえよ」

数分後、ネトレトは息も絶え絶えといったようすで草原に寝転がっていた。

不覚にも、目尻には涙が浮かんでいる、といっても生理的なものだが。

三人は腰に手をあて、満足げにそのようすを眺めている。

「ネロの、言った、言葉を、はあ、覚えて、いるか」

息を切らしてネトレトが言う。

ああ、とラナが答えた。

「だからくすぐりまわしたんじゃねえか、よく笑え、だろ」

「違う、その続きだ」

言うなりネトレトは跳ね起きた。

不意のできごとに、近くに立っていたリグルはあっけなくつかまつた。

「よく怒れ、と」

三人は結局、倍以上にはふくれあがった。たどろつ報復を受けることになった。

悲鳴とも笑い声ともつかない叫びが草原にこだまする。

「なにをやっているんだか」

数日後、草原を訪れたハーデースは苦笑した。大地が四人のようすを伝えてくれたのだ。

ハーデースの手の下で、大地はおおらかに笑った。

いまごろ、あの四人組はどの地を歩いているのだろうか。



## 第四十一話：金の髪の子どもたち

### 『聖伝』 第四十一話

ネトレトの顔は青かった。

彼がここまで動揺しているのを、アイシスはいまだ見たことがない。

目を見開き、眉を寄せ、どうすればいいのかを必死で考えている。

そう暑くもないのに汗がネトレトのあごを伝った。

話は数時間前にさかのぼる。

ネロたちと別れて何日が経っただろうか、陽気が増した草原を四人は歩いていった。

順調な旅だった。

魔物には何度も遭遇したが、すべて剣でなぎ払った。

ネロの忠告を受け、彼らはできうる限り精霊の力を借りずに戦うことを決めたのだ。

黒の騎士団に遭ったときもそうだった。

空はすっかり暗い。

旅の一行は野宿の準備をしているところだった。

黒の騎士団が通りかかったのは、ラナが火をおこそうと躍起になっている、ちょうどそのとき。

最初、彼らに気づいた黒の騎士団は大いに驚いたようだった。どうやら彼らは偶然この場を通っただけのようである。いままでのように、はなから彼らを狙ってやってきたわけではなさそうだった。

なら見逃せばいいのに、とラナは不平をもらしたが、もちろんそういうわけにはいかなかった。

黒の騎士団は、どうしてもアイシスを手に入れたいらしい。

すぐにいくつもの剣が抜かれ、あちこちで激しくぶつかりあった。アイシスたちはよく戦った。彼らの力は格段にあがっている。

間の抜けた声が聞こえたのは、黒の騎士団が劣勢に陥り始めたときだった。

「おまえ、ネットレトか？」

ネットレトの動きが止まる。

声のしたほうをふり向く。  
ひとりの男が、抜き身の剣を片手に彼を見つめていた。

「やはり！ エルフ王には連れがいると聞いていたが、まさかおまえだったとは」

したり顔でにやつくその男に、ネトレトは見覚えがあった。  
眉根を寄せて記憶をたどる。

そうと気づいたとき、ネトレトは短い悲鳴をあげた。

「おまえは……」

しかし遅かった。黒馬の背に飛び乗った男は、高笑いをあげながら駆けていく。

「はは、は！ ネトレトよ、よければおまえの兄弟に伝言を届けようか。ははは！」

「待て！」

鋭い制止も、もちろん聞き入れられるはずがない。

男を乗せた馬は土ぼこりをあげて小さくなっていく。

ヴァネッサを呼び出しても、もはや間に合わない。ネットレトは齒噛みした。

いったいなにごとだろう。アイシスたちは動揺した。その隙をつき、残された男たちも馬にすがりつく。

乗せ手を失った何頭かも連れ、黒の騎士団は去って行ってしまった。

ネットレトの顔は青かった。

彼がここまで動揺しているのを、アイシスはいまだ見たことがない。

目を見開き、眉を寄せ、どうすればいいのかを必死で考えている。

そう暑くもないのに汗がネットレトのあごを伝った。

「それで「やや間を置いてから、腰に手を当てたりグルが言う。」  
どういふこと。さっきの、知り合いなわけ」

「ああ」

ネットレトは小さくうなずいた。苦々しげに顔をゆがめている。

「昔、私が住んでいたノトの村、あの男もそこに住んでいた」

「げっ、同郷の人間が黒の騎士団になっちまっていたのか。それは戦いづらいな」

ラナが顔をしかめる。

「ばかだな、とリグルが言った。そんな単純なことじゃねえよ。ラナは首をひねる。」

「さっき、兄弟がどうか言ってたよね。同じ村で暮らしていたんだ、そりゃあんたの家族構成も知ってら。家族、狙われるよ」

「……ああ」

ラナは驚きの声をあげた。剣をなおし、ネットレトに掴みかかる。

「ああ、じゃねえよ！ まずいだろうが、あいつら馬で向かったんだぜ。止めにいかないと！」

ネットレトはうなだれている。

「どうしたよ、とラナが喚く。」

ネットレトは絞り出すように言った。

「合わせる顔が、ないんだ」

「……………」

「私は彼らから、両親を奪ってしまった。許してはもらえない」

ラナは掴んでいた胸倉を荒くふりはらった。目に怒りが宿っている。

「だからってあんた、みすみす家族を殺されてもいいのかよ。いまはそんなこと、関係ねえんじゃないかよ」

静かな声だった。しかし震えている。

ネトレトは答えなかった。

もういい、と言ってラナは走り出す。

「どこへ」

慌ててアイシスが声をかける。

ラナは答えた。決まっているだろ、ノトだよ。

しかし、しばらく走ってからラナは立ち止まり、叫んだ。

「ノトってどこだよ、ちくしょうー!」

ネットレトは動けない。

そんな彼の肩を、ぽんと優しく叩く手があった。リグルだ。

「今回はかりはいがぐりの言うとおりでよ。あんただって本当は、すぐにでも駆けつけたいんだらう。素直になりなよ」

ネットレトはすこし目を泳がせたが、短く息を吸うと地面を蹴った。一目散に東へと駆けていく。

三人は慌ててそれを追った。

彼らは三日三晩走り続けた。食事さえも走りながらとった。

そうしよう、と提案したのはアイシスだった。

体力のない彼は、すぐに全身を汗でぬらして喘いだが、けっして速度をゆるめようとはしなかった。

弟を守れなかった過去が、彼にはある。

訝しいことに、道に新しくつけられた蹄跡を見つけることはできなかった。

あの男たちは、まっすぐノトへと向かったわけではないのだろうか。

もしかすると、一度ひき返して“あの方”とやらに報告でもしているのかもしれない。

なににせよ、男たちがどうやら彼らの前を走っているわけではなさそうだ、ということだけが救いだっただ。

やがてネトレトにとって懐かしい光景が見えてきた。

幼いころに見た山の陰、森の形。

まるで変わらない。変わったのは彼自身だ。

「もうすこしだ」

太陽の光に照らされて、家々の窓が反射するのが見えた。

ネトレトの表情が締まる。

二度と帰ってくることはないと思っていた、帰ってきてはいけな  
いと誓った場所に、いま彼は立っている。

ノトの村は静かだった。人々の生活は穏やかそのものだ。

とりあえず、アイシスは胸をなでおろした。

なにか恐ろしいことがあった、というふうではなさそうだ。

「とにかく家へ急ぐつぜ」



村に入るなり口を開かなくなってしまったネットレトを、ラナがうなずく。

ネットレトは答えない。

「ここまでできたんだ、いくしかねえだろう。こうしているあいだにも、やつらがくるかもしれないねえっていうのに」

言われてようやくネットレトはうなずいた。重い足をひきずるようにして進む。

三人は彼に従った。

アイシスは落ちつきなく辺りを見回した。

「ここがネットレトの育った場所なのだ。なぜだかひどくそわそわした。」

彼はいったいどんな少年で、どんな毎日をすごしていたのか。

その毎日が、彼が闇遣いと知れてからどう変わってしまったのか。

そんなことを考えているうちに、やがて一軒の家の前でネットレトの足が止まった。

考えごとにふけていたアイシスは、気づかずネットレトの背にぶつかってしまふ。

「うわっぶ」

見事に鼻からつつこんでしまった。

悲しいかな、彼の鼻はネトレトの肩甲骨あたりにも届かない。

ネトレトの顔はひどく痛々しげに歪んでいる。

体がすっかり強ばってしまっているようだ。

見かねたリグルが声をかけた。

「俺がいこうか」

ネトレトは目を閉じた。

ゆるゆると息を吐く。重く、長い息だった。

「いや、いい」

ありがとう、とネトレトは言った。

そしてゆっくりドアに近づぐ。

リグルに押しやられ、アイシスとラナはすこし下がった。

固唾をのんで、ようすを見守る。

こつこつ、と乾いた音が鳴った。

しばらく間をおいて、はい、という声が聞こえる。少年の声だ。

アイシスの心臓がどきりと跳ねた。

「あれ、リリイが出てくれるの。まあいいけど、なにかあったら呼

びなよ」

軽やかな足音が向かってくる。

それに合わせて聞こえてくる、ちりり、とこれは鈴の音だろうか。

「どうしよう」「アイシスはラナの服を引っぱった。「緊張する」

「お、俺も」

小声でやり取りするふたりを見、リグルはばかにしたように鼻を鳴らした。

しかしその目は真剣な光をたたえてドアを見守っている。

静かにドアが開けられた。

顔を覗かせたのは、金の髪が目まぶしいひとりの少女だった。

愛らしい顔は、来客を歓迎するように輝いている。

しかし、ネトレトの姿を認めたとたん、大きな目を丸くして凍りついてしまった。

ネトレトは目を伏せがちにしている。

少女の手から、小さな鈴が滑り落ちた。床に落ち、耳につるさい音をたてる。

「リリイ？」

中から少年の声が聞こえた。不安げな声だ。

「リリイ、どうした。だれがきたの？」

少女、リリイは口を開いていたが、しかし声が発せられることはなかった。

ただネットレトを見つめている。肩は小刻みに震えていた。

よろめくように一歩うつろへさがったリリイの体を、ちょうど出てきた少年が抱きとめた。

「リリイ？」

少年もまた見事な金の髪をしていた。

首のあたりで短く揃えられた、美しい髪。

少年の視線がネットレトに移る。

とたん、少年の青い瞳が揺れた。

目を見開き、大きく息を飲む。

「おまえ……！」

声が震えている。体の底から絞り出したような声だった。

少年はひとつ深呼吸すると、リリイを家の中へとおしこんだ。

「リリイは中にいるんだ。いいね」

そうしてリリイが反論もできないうちに、ドアを閉めてしまった。静かな手つきだ。

しかし、ふり返った少年の怒りに満ちた形相といたらなかった。眉間に険しいしわが寄っている。

彼は歯を食いしばって拳を固めると、ふり向きざまにネットレトを殴りつけたのだ。

アイシスが悲鳴をあげる。

「なにしゃがる！」

ラナが吼える。

しかし返事はなかった。

少年は肩で息をしている。

大きくよるめきうなだれるネットレトを、青い炎のように揺れる瞳で睨み据えた。

「なんのつもりだ」

ネトレトは片手で口を押さえながら顔をあげ、軽く咳きこんだ。

「よくもまた、僕たちの前に姿を現せたものだ。いまさらなんの用があるっていうんだ！」

「……………」

「なんとか言えよ！」

言うなり少年は再びふりかぶった。

しかし、今度はその拳がふりおろされることはなかった。少年の震える腕は、ラナに掴まれてぴくりとも動かさなかったのだ。

ネトレトの前には、かばうように両手を広げたアイシスが立っている。

「なんですか、あなたたちは」

「兄弟げんかっつのは、あまり見ていて気持ちのいいものじゃないぜ」

腕を組み、鋭い目をしたリグルが言う。少年は忌々しげに舌を鳴らした。

「兄弟？ こいつが？」

違う。こいつはただの人殺しだ！ こいつは僕たち兄妹から両親を、リリイからは声をも奪ってしまったんだ！」

ネトレトは目を丸くした。

ふん、と少年は鼻を鳴らす。

「知らなかったろ。おまえが出ていってから、リリイは喋れなくなつたんだ。驚いたか、謝りたいか？ でも、リリイはもうそれに返事することもできないんだよ。」

わかつたら消えろ、二度と僕たちに顔を見せるな」

ネトレトはなにも言わない。

口を押さえた手の隙間から、血がぽたりと流れ落ちた。

少年はもう叫ばなかった。アイシスたちに背を向けると、荒々しくドアを閉めてしまったのだ。

人通りが少なくて幸いした。

大声に驚いて窓から顔を覗かせる人こそいたものの、大した騒ぎには発展しなかったのだ。

「とにかく、すこしここを離れようぜ」

すぐ近くに、まるで手入れされた形跡のない家が建っていた。

どうやら空き家らしい。

丈の長い草がからみつく塀に四人は腰をかけた。

ネトレトの目は虚ろだった。いつもの刺すような鋭気がまるで見られない。

アイシスたちは言葉をかけることができなかった。

もちろん、説明を求めることなどできるはずもない。

いままでで一番長く、重く、痛い沈黙が流れた。

呼吸の音さえはばかれる。

そんな空気に、邪曲に割りこむ声があった。

「感動の再会はもうすませたのか？」

同時に空気がわずかに縮こまり、かと思つと激しい勢いで弾け散



った。

目を開けていられないほどの爆風だ。

生暖かい風が頬を撫で、目をこらすと家が炎に包まれていた  
ネトレトの家が。

「そんなっ」

アイシスが狼狽の声をあげたとき、おそろしい速さで飛び出す光  
があった。

ネトレトだ。

渦巻いて猛る炎に、信じられない速さで突っこんでいく。

動揺に息を荒げ、リグルは空を睨んだ。

赤と白の衣をまとった、二体の精霊が見える　サルマンとウイ  
ンディーネだ。

先に遭遇したとき、たしか黒の騎士団に魔導師は含まれていなか  
った。

やつらは応援を呼びにいったのだ。

「ネトレト…!」

「待て、いくな!」

がむしゃらに後を追おうとするラナの首根を捕まえ、リグルが叫

ぶ。

なんで止めるんだよ、とラナが喚いた。

「ついていったところで役にたつかよ。頭を使え、無駄に動くな」

リグルの目は真剣だ。

一刻の猶予もない状況だ、すこしでも判断を誤れば死に繋がる。

「おまえは水を汲んでこい、そこらの男をかき集めて人手に加えろ！ アイシスはユフィロスレジアを呼んでくれ、早く！」

「お、おう！」

「わかった！」

言うなりリグルも行動に移った。  
大きな布を探し、水に浸すのだ。

聡い彼は、この火が消し止められるとは考えていない。彼はネットを信じたのだ。

ネットはきつと、炎の中から大切な家族を救い出してくる。

傷ついたらう彼の体をすぐに癒してやること、リグルはそれだけを考えていた。

しかし事態はそれ以上に厳しいものだったのだ。

## 第四十二話：業火をくぐり

『聖伝』 第四十二話

ネトレトは顔を覆うとドアを蹴破った。  
熱い風が襲いかかる、しかし彼は怯まない。

ヴァネツサを呼び出すことはできなかった。

彼女は地獄の業火をも呑む力を持っていたが、しかし周りをまきこんでしまう恐れも大いにあった。

家族を闇に吞ませるわけにはいかない。  
残された選択肢はひとつしかなかった。

熱風とけむりとに揉まれながらネトレトは進んだ。  
十五年ぶりに歩く廊下が、まさか炎に包まれていようとは夢にも思わなかったことだろう。

うなるような轟音に混じり、かすかに鈴の音が聞こえた。小さな音を頼りにネトレトは足を進める。

目はかすみ、皮膚は刺されるように痛む。  
しかし止まれない、もう二度と失うわけにはいかないのだ。

「ソウマ！ リリィ！」

必死に叫ぶ。口にすることを自ら戒めた、大切な弟の、妹の名前を。

「ソウマ……くっ」

けむりにむせ、ネットレトはよろめく。

ようやくの思いでたどりついたリビングで、兄妹は体を寄せあつて小さくなっていた。

ふたりはネットレトの姿を見、信じられないといったふうに目を見開く。

「兄、さん」

「手を貸せ、出るぞ！」

煤で汚れた頬を涙で濡らし、リリィが震える手を伸ばす。ネットレトはその細い腕をしっかりと掴んだ。

「早くソウマも！」

はっとソウマは息をのむ。  
青い目から一粒の涙がこぼれた。ゆっくりと、兄に手をさしだす  
そのときだった。

「うわあっ!」

これまでとはけた違いの突風が吹き、ソウマは顔を覆った。  
近づいた手が再び離れてしまう。

「ソウマ!」

風の勢いは恐ろしかった。  
炎で脆くなった屋根はまたたくまに引き剥がされていく。

ウィンディーネの仕業に違いない。

家具さえ吹き上げる突風に、ソウマの体が浮き上がった。  
ネトレトは身を乗り出して弟に手を伸ばしたが届かない。

そのとき、舞い上がった材木のいくつかが降ってきた。  
ネトレトははっと顔をあげ、咄嗟の判断でリリイに覆いかぶさっ  
た。

鈴の音が鳴る。

「ネットレト！」

外から見ていたアイシスは、予想外の展開にうろたえた。

ユフィロスレジアがサルマンを倒したと思ったとたん、今度は家が壊れていくではないか。

屋根が飛び、家具が飛んで、次に飛び出してきたのはなんとひとりの少年だった。

「おい、ありゃ弟くんだろ」

リゲルがうわずった声をあげる。

うおお、とラナが喚声をあげた。

「いまいくぞ！」

水のたっぷり入った桶を持ち、ラナは壊れた家へと駆けこんでいく。

それに引っぱられるかのようにして、彼が集めた男たちも続いた。

「俺は弟くんを追う、アイシスはあいつをやっちゃってくれ」

「任せて！」

アイシスはウィンディーネに意識を集中させた。

ラナが走ってきたとき、ネットレトは四つん這いになってうなだれていた。

その下でリリイが震えている。

彼は全身を火傷していたが、背中への傷のほつがひどく見えた。

折れた材木が辺りに散らばっていて、ところどころに血がついている。

ラナは絶句して口を開けたが、すぐに気を取り直すと桶の中身をぶちまけた。

燃えるように熱くなっていたネットレトの体に水が染みこんでいく。

空になった桶を放り出し、ラナはネットレトを担ぎあげた。

あとに続いてきた男がリリイを抱きかかえる。

彼らはくすぶる家の残骸から抜け出し、残った男たちは小さくなった火を消そうと奮闘を始めた。

リグルは忌々しげに舌を鳴らした。

ソウマは、静かに現れた黒の騎士団によって捕らえられていた。

「動くなよ」



「動けねえよ」

ソウマの首元には刃がそえられている。  
白く鋭い光を放つそれは、はやく獲物にかぶりつきたくて仕方ないといったようすだ。

お手上げ、といったようにリグルは肩をすくめた。

「物分かりのいい男のようだな。ひとつ、取引きといこう」

「アイシスだね」

「そのとおり」

男はにやりと笑った。

ちょうどそのとき、ウィンディーネをたおしたアイシスと、ネットたち兄妹を男の手に任せたラナとが駆けつけた。  
息を切らしてリグルに並ぶ。

銀色の髪を認め、おお、と男は声をあげた。

「これはエルフの王。お力拝見しました、さすがです」

アイシスは男を睨みつける。

反抗的な態度が気に入らなかったらしい、男は愉悦の表情を浮かべた。

「おい、嬢ちゃん。あいつら、あんたがあっちいけば弟くんを返してくれるってさ」

はっと息をのんだのはアイシスだけではなかった。ラナもだ。

「おまえら、それが目的で」

「いけよ」

吼えるラナの声を、リグルが静かに遮った。

アイシスは前を向いたままだ。リグルも彼を見ようとはしない。ラナだけが目を丸くしてリグルを見た。細められた目。いつもと変わりない。

「おまえ、なに血迷ったこと言っているんだ。いけって、おまえ、アイシスを見放すつもりかよ」

「じゃなきや弟くんは殺されるぜ。せつかくネットレトが命をかけて助けようとしたってのに、そりゃねえだろうが」

「でも、だからって！」

リグルは剣を抜いた。

目にも留まらない速さでそれをアイシスに突きつける。

「あのね、すこし黙ってて。俺はあいつらと話がしたいの。どうせおまえに剣を向けても黙らないだろうから、アイシスを人質に使うよ。悪いけど、本気だから」

アイシスは動かない。

細い首に、鋭い剣先が突きつけられる。

血迷ったか、とラナは思った。

リグルの目には、狂気の色さえ浮かんでいるように見えはしないか。

男は声をあげて笑った。仲間割れのようすが楽しくて仕方ないらしい。

「そういうわけで、取引きは成立だよ。弟くんをこっちに返し、アイシスは連れていきな。

でも、理由ぐらい教えてよ。あんたたちの望みはアイシスの命なの」

「すこし違うな」

男は答えた。

「“あの方”は銀髪のエルフを深く求めておられた、実に二千年ものあいだ。そしてついに出会ったのだ。

“あの方”の悲願が、もうすぐ実現する。王にはそれまで生きていただく。生きて、世界が支配されるさまをその目で見ていただくのだ」

「そりゃまた大層だね」

リグルは鼻でせせら笑った。ラナには彼の真意がまるでわからない。

「そういうわけだ。ほらアイシス、いきな」

アイシスはリグルの目を見た。紫に光る、リグルの目。リグルも真つ直ぐアイシスを見返した。

アイシスは小さくうなずき、歩き出す。リグルは剣を収めた。

「おい、ふざけるなよアイシス！」

ラナが後を追おうとする。

しかし背後に回りこんだリグルに腕を取られ、そのまま押し倒されてしまった。

鈍痛が走り、思わず呻き声をあげる。

「剣は置いていただく。もちろん、扉も閉じてからです」  
アイシスは大人しくそれに従った。

ユフィロスレジアを白の世界に帰し、腰帯から剣を解く。  
黒の騎士団は無防備となったアイシスを迎え入れ、男は満足げに  
うなずいた。

「さあ、いきましよう」

恭しくアイシスの手を取ると、背を向けて歩き出す。

「弟くんは置いていけよ」

男はふり返り、鼻で笑うとあごで指示を出した。

ソウマを捕らえていた男が、荒々しくその体を突き放す。

疲れきったソウマはどごと地面に倒れた。

「おい、冗談はほどほどにしろ！ 離せ！」

ラナはずっともがいている。しかし抵抗すればするほど関節が閉  
められて痛むのだ。

力では負けるはずがないのに、こつもつまく節をきめられると動  
きようがない。

黒の騎士団は、しかしまだ警戒を解いていないようだ。

後列につく男たちはラナたちを睨み据えながら撤退していく。

リグルは片手でラナの腕を掴み、もう片手をひらひらとふって見  
せた。

黒の騎士団がソウマから少しずつ離れていく。

頃は、いま。

「いくぞ」

リグルはラナの耳元で囁いた。

え、とラナが声をあげるよりも早く、彼は駆け出している。

電光石火とはこのことか、リグルはまたたくまにソウマの元へ駆け寄った。

取引きに従順とみえたりグルの裏切りに、黒の騎士団は乱れた。

アイシスを連れた一部の男を除き、予想外の行動をとったリグルに襲いかかる。

「お、おい」

「ぼさぼさしてんな！」

リグルはソウマの前に立ちただかり、ひとり剣を舞わして防ぎ戦っている。

ラナも慌てて走り出した。

走りながら彼は叫んだ。

「でも、こんなことしたらアイシスがどうなるか!」

「だからおまえは頭が悪いってんだ。どうにも、なるかよ!」

気合い一閃、リグルは競り合いが続いていた男をなぎ倒した。

はあ、と息をついて顔をあげる。

「あんたもだよ、お頭。せっかく援軍を率いてきたはいいけど、べらべら余計なことまで話してさ。」

教えてくれてありがとね。あんたたち、アイシスを殺せないんだろっ?」

怒りに血走る男の目が見開かれた。歯を食いしばり、憤怒の声をもらす。

「このくそがきが……切り刻んでくれる!」

男はアイシスを他に任せると、肩を怒らせて腰の剣を抜き払った。アイシスは腕を強く引かれて馬の背に押し上げられる。

「いけよ」

取り囲む男たちの剣を一身に引き受け、ラナが言う。

リグルはにやりと口を歪める。

「だから、おまえが指図するなつての」

そう言いながら、しかしリグルは駆け出した。怒りに満ちた黒騎士に走り寄る。

獣のような声をあげ、男は剣をふり下ろした。

しかし獲物はそこにいなかった。リグルは彼の背後にいたのだ。

「ねえ知ってる？ 悪役は捨て台詞を吐いたら最後」

男の意識はそこで永遠に切れてしまった。

リグルの剣が、一切の慈悲もなくその背を刺し貫いたのだ。

「こうなるんだよ」

音をたてて男が倒れるのを見届けようとせず、リグルは身を翻してアイシスのもとに駆けた。

こちらでも混乱が起こっていた。

アイシスに乗せた黒馬が、渋って動こうとしないのだ。

アイシスは静かに目を閉じている。



「言うことを聞け！ 進め、進まんか！」

アイシスの後ろに乗った男が、鞭をもって馬を打った。二度、三度。

しかし四度目はなかった。

ふり向いたアイシスがその手を掴んだのだ。

落ち着いた表情だったが、言葉をなくさせるだけの威圧感が彼にはあった。

「動物は素直なんだよ。それは罪じゃない」

「ひっ」

男はたじろいで身を引く。

その後頭部をなにかが直撃した。

鈍い音が鳴り、意識を飛ばした男は馬の背から落ちてしまう。

「よしっ、命中」

見れば、全員を昏倒させてしまったラナが、にやりと笑って親指を立てているではないか。

男のそばに落ちていたのはアイシスの剣だった。

アイシスは軽やかに馬から飛び降り、剣を拾う。ちよっどリゲル

も追いつくころだった。

六人にまで討ち取られ、黒の騎士団は逃げるほかなかった。

ソウマはラナが背負った。

彼はどうやら、すこし火傷を負った程度ですんだらしい。

しかし想像もしない恐ろしい出来事にまきこまれ、彼はすっかり震えあがってしまっていた。

「ネットレト、すっかり黒こげだったぜ」

「……………」

「それでもやっぱり、兄弟なんかじゃないっていつのか」

「……………」

ソウマは答えなかった。

それにしても酷いよなあ、とラナは言葉を続ける。

「リグルのやつ。前もってちょっと説明してくれりゃいいのに。だつたら俺、あんなに叫ぶ必要なかったのに」

「敵をだますにはまず味方から。それにおまえ、ばかだからすぐ顔

「出るだろ」

「だからってさあ。な、アイシスも余分に怖い思いしたろ」

同意を求められ、アイシスは苦笑した。

「まあ、もちろん怖かったけれど（そらみる、とラナが言う）。でもリグルの目を見たら信じられた、大丈夫だって」

「そらみる」

リグルが鼻で笑う。ラナは悔しそうに地団太を踏んだ。

火はすっかりおさまっていた。

小さな村で起きた、大きな事件だ。野次馬がたくさん集まっている。

そのうちのひとりに聞けば、リリイも怪我人も病院に運ばれたということだった。

答えてくれた男はラナの背にソウマを見つけ、話しかける。

「おい、ソウマ。面影があったが、あの怪我人、まさかネットレトじやないだろうな」

「……………」

ソウマは答えない。うつむいたまま、ぎゅっと眉根を寄せる。

男は顔を崩すと、こんなこと聞いて悪かったな、と言ってソウマの頭を軽く叩いた。

「違うよな、あいつがこの村に帰ってくるはずがないよな。」

母を殺して父を自殺に追いこみ、村を逃げていった男なんかが

アイシスの瞳が揺れる。

母を　殺した？

ラナも同じだった。

男の言葉に動揺し、なんにも言えなくなってしまった。

人殺し。

ソウマの言葉がよみがえる。

彼は、自分の両親を殺めてしまったというのか？

リグルは唇を噛んでうつむいた。

幻想の森で見た、ネトレトの記憶。

山道で、闇を前にして立ちすくむ少年。

ずっと隠されていたネトレトの過去が、すこしずつ明かされると

きがやってきたのだ。  
呪われた闇遣いの過去が。

## 第四十三話：ファウス家の悲劇

### 『聖伝』第四十三話

ソウマはラナに礼を言い、自分で歩くと申し出た。

彼の先導で病院へ向かう。

だれもが口を開くのをためらっていた。絡みつくような沈黙が続く。

小さな村だ、結局なにも話さないまま四人は病院についた。

ソウマの顔を見ると、年老いた医者がすぐに病室へ案内してくれた。

小さな病院の、小さな病室。窓際のベッドでリリイは眠っていた。

さしこむ夕日にシーツが染まっている。

「リリイ」

震える声で叫び、ソウマが駆け寄る。

リリイの顔は煤で汚れていたが、どうやら火傷は負わずにすんだらしい。

ソウマはほつと胸をなでおろし、安堵の笑みをつかべた。

アイシスは落ちつきなく辺りを見まわす。  
ネットレトの姿がない。

彼は案内してくれた老医者に声をかけた。

「あの、すみません。ネット……もうひとり、運びこまれた人は」  
アイシスは途中言葉を濁した。リグルに尻をつねられたのだ。  
その意味をアイシスはすぐに悟った。

どうやらこの村でネットレトの評判はよろしくないようなのだ。  
さきほどの野次馬の言葉が、それを決定的に物語っている。

「ああ、彼ね。彼は別室におるよ。だが……いまは見ないほうがいい、と思う」

治療中だから、と医者は言う。

しかしアイシスは無理を言い、ネットレトの居場所を教えてもらった。

いま、彼をひとりにする事なんてできない。その気持ちでいっぱいだった。

それでも医者は気が進まないようだったが、どうしてもと言って

引き下がらないアイシスに、ついに折れた。

「ついてきなさい」

アイシスがうなずき、ラナ、リグルがそれに従う。

ソウマはベッド際に座ってリリィの手を握ったままつつむいていた。

示された先のベッドにネットレトはうつ伏せていた。

酷い姿だった。

衣服は焼け、あるいは溶けて彼の体にはりついている。

黒こげ、というラナの言葉はあながち言いすぎでもなかったよう  
だ。

ふたりの医者がネットレトを囲み、残った服の切れ端を剥がして  
いた。

体を傷つけないようどれほど気を張っていても、溶けた服は深く  
絡みついてしまっている。

そういうのを剥がすたびにネットレトは小さく呻いた。

顔は反対側を向いていたが、くぐもった声に、歯を食いしばって  
いるのだからことがわかる。



「たいそうな火傷じゃ。だが、背中の傷などさらに酷いぞ。いったいなにが起こったんじゃ、え？」

リグルが小声で説明をする。

口のうまい彼のおかげで、ネトレトはたまたま通りがかった正義感の強い旅人、ということになった。

いまだきそんな若者もいるのだなあ、と医者は素直に感心し、なにごとかを呟きながらどこかへ立ち去った。

入れ替わるようにして、気がつけばソウマが立っていた。うわっ、とラナが驚いて身をのけぞらせる。

「生きて、いるんですか」

「おまえなあ、そんな言い方はないだろう。恩人だぜ？」

ソウマは顔をしかめる。眉間にしわが寄った。

「あいつはただ、罪滅ぼしのためだけに僕らを助けたんだ。恩人だなんて。あなただって、あいつがなにをしたか、ご存知なんですよ」

いや、とラナは首をふる。

「聞いちゃいない。話したくなったらネトレトのほうから話してくれるだろうからな」

「そんな……。黙っているなんて、やっぱり、どこまでも自分勝手

な人なんだ」

ついてきてください、とソウマは言った。あいつがどんな男か、教えますから。

ベッドは朱に染まっていた。

背中から流れる血と、服を引き剥がした傷口からの血とで。

アイシスは目が離せなかった。

しかし、彼が見ていたのは気の眩むような血溜まりではない。

青い瞳をひきつけていたのは、あらわになったネトレトの、右肩から腕、そして胸にかけて黒々とほどこされた刺青だった。

737

ソウマは三人を連れて病院の中庭へ出た。

こじんまりとした庭には芝生が敷かれており、アイシスたちは夕日を背に受けて座りこんだ。

「まずは、助けに来てくれてありがとうございます。」

名前もまだ言っていないませんでしたよね。僕はソウマ・ファウス、妹はリリイといいます。

僕たちには 兄がいました。学校での成績がよく、快活で友人の多い、自慢の兄でした。しかしそれは、十五年前までの話です」

僕の家では、とソウマは切り出した。

僕の家では茶の葉を育てていて、定期的に荷をつくっては北へひとつ山を越え、この国の首都トウーディールへ売りに出していました。自分で言うのもなんですが、そこそこのいい品質で、首都でもけっこう人気があったそうなんです。

葉を売りにいくときは兄弟も三人そろってついていき、すこしばかり観光して帰ってくるのが慣わしでした。

十五年前のあの時もそうでした。

その年、僕は病気がちで、よく熱を出していたんです。

両親は僕だけ置いていくのは可哀想だと言って、売りにいくのをずいぶんと先延ばししてくれました。

いま思えば、僕が熱さえ出さなければ、あんなことにはなっていなかったのかもしれない……。

とにかく、僕のせいで出荷がどんどん遅れたんですが、茶は消費物ですから長く置いておくわけにもいかず、僕はひとり親戚の家に預けられることになりました。

土産を買ってくるから、と言って両親と妹、そして兄とは出かけteいったのですが、どれだけ日数が経っても帰ってきません。

これはおかしいと思った親戚のひとりを探しに出かけたんですが、そうして変わり果てた四人の姿を見つけたんです。いえ、三人で

す。

母は、兄だった男の手によって殺され、骨さえ残っていませんでしたから。

「そんな、まさか」

「しかし事実です。父がこう言ったんです、ネトレトが殺した、ネトレトがあいつを消してしまったのだと。」

最初こそまともなことを喚いていましたが、やがて父は訳のわからない言葉しか話さなくなりました。気がふれてしまったんです。そしてすっかり自分をなくしてしまった父がとった行動は――

ソウマはがくりと首を落とした。目に涙が光っている。

「首を括ったんです。それを見つけたのは妹でした。」

妹はもともと口数の少ない子でしたが、事件をきっかけにまるで喋らなくなりました。しかし、父の死を見てからは、喋れなくなりました。宙に吊るされた姿を見て絶叫したのを最後に、あの子は声を出すことができなくなりました」

アイシスたちは言葉を失った。あまりに辛く、悲しく、恐ろしい過去に。

ソウマの話が真実であれば、彼がネトレトにとった態度も、放っ

た言葉も、どれも責めることができなくなってしまっ  
た。それほどに彼の語る話は重く濁っていた。

「それで」

ようやく、といったようにラナが声をふりしぼる。

「それで、ネットはとうしたんだ」

「逃げたんです」

冷たい声だった。青い瞳が憎しみに細められる。

「逃げたんです、あいつは。なんの弁解もせず、説明もしないで。」

父の叫びを聞いて、母を殺したのはあいつだと、村のだれもが知  
っていました。

しかし信じられずにいました。彼は優秀な模範生で、まだ九歳の  
子どもだったんですから。

だけど、あいつは村を逃げ出した、残された弟と妹を捨てて。

それが決定打でした、あいつがやったんだという。じゃなきゃ、  
逃げる必要なんてないじゃないですか。弁解だって、できたはずだ  
！」

声を荒げ、ソウマは力任せに地面を打った。噛みしめた歯が、ぎり、と音をたてる。

彼は目を閉じ、右手で顔を覆った。

リグルは胸が痛くなる。それは、兄と同じ癖ではないか。

どれほど憎んでいようと、彼らは悲しいほどによく似ている。

大きく息を吸い、ゆっくりと吐き出すところもネトレトに似ていた。

「どうです。あいつがどんな男か、わかったでしょう。

あなた方がどういう理由であいつと共にいるのかは知りませんが、関わらないほうがいいと思いますよ。母親を殺してしまうような男です、なにをしてくるか、わかったものじゃない」

ソウマは立ちあがった。ふう、とリグルが息をつく。

「だけどね、ソウマくん。自ら進んで母親を手にかけるようなやつ、いないと思うよ。きつとなにか、逃れられない理由があったんじゃないかな」

その言葉にソウマは答えなかった。ただ、唸るように小さくぼつりと呟いた。

「……あいつは生きていてだけで罪なんだ、周りの人を不幸にする」

そう言つとソウマはくるりと背を向け、今度こそいつてしまった。妹のいる病室に戻るのだろうか。

気づけばアイシスは泣いていた。

どうしようもない感情に、押し出されるようにして涙があふれた。となりでラナも泣いている。

まるで肩から吐き出すようにして、リグルがため息をついた。

「知るべきとき、とやらがきたのかもね。俺たちは真実を知らなく  
ちや」

アイシスとラナはうなずいた。

しかしとりあえずはネットレトの回復を待たなければなるまい。

再び彼の病室を訪れてみたが、どうやらようやくやく眠ったらしい。

アイシスはここに泊まれないかと聞いてみたが、今度はかりは断られてしまった。

仕方なく三人は病院を出、宿を探すことにした。

アイシスたちは四日と半分待った。ネットレトは六日目の昼に目を

覚ましたのだ。

ネットレトが眠り続けているあいだ、三人はあまり言葉をかわさなかつた。

それぞれが深い思いに身をゆだねていた。

アイシスはただひとつのことだけを考えていた。

病室で見た、あの刺青。

以前大きな街で　　そうだ、あの街もたしか名前をノトといった図書館にいき、アイシスは本を読んだ。黒の騎士団について書かれた本だ。

どれが真実で、どれが推測かもわからない不確かな情報でまとめられた本に、刺青の話が載っていた。

黒の騎士団は、顔に刺青をほどこすことで仲間を確認すること。一般の日常にまぎれこむ、いわゆる間諜の役をおう人物は、刺青を右肩から胸にかけていれるということ。

“あの方”へのゆるぎない忠誠を示す、黒の刺青。

他の色にけっして染まらず、逆に喰らいついては染めあげてしまふ、強い色。

ネットレトの右肩で、その色は血に混じることなくその存在を誇示していた。

アイシスは頭を抱える。



ネトレットが 黒の騎士団の一員だなんて。

うそだ、信じたくない、信じられない。彼はなんどもアイシスを救ってくれたではないか。

アイシスだけではない、ラナも、リグルもだ。

彼はすこしずつ笑ってくれるようになったではないか、話してくれるようになったではないか。

きつく閉じたアイシスの目から涙がこぼれ落ちる。

違う、うそだ。ネトレットは違う。

だって、黒の騎士団は雑技団を襲おうとしたんだぞ。ソウマを、リリイを殺そうとしたんだぞ。

そして ファニマを滅ぼし、たくさんの罪なきエルフを殺したんだ。

そんなやつらの、ネトレットが仲間なわけ、ない。

「大丈夫だって、ネトレットを信じる」

ラナがアイシスの肩を叩いた。

アイシスのはっと顔をあげる。

大丈夫、ネトレットを信じる。

ラナの言葉が意図するところと、アイシスの受け取った意味とはもちろん微妙にずれている。

しかしその言葉はアイシスの心に沁みだ。

そつだ、信じるんだ。

答えのない問いかけを、ひとりで続けていたとてなんになろう。

アイシスは力強くうなずいた。

大丈夫、ネットレトを信じよう。

彼はきつとすべて話してくれる。無駄に心を悩ませるのはやめにしよう。

その日からアイシスは、暗くなるまで外に出て作業を手伝った。燃えてしまったファウス家を、村の男衆が総出で片づけていたのだ。

すぐにラナとリグルも加わった。

煤となった木材を取り除き、使えそうなものだけを選び分ける。

焼け跡の地面はまだすこし熱を持っていた、ように感じた。

片づけには丸三日かった。

すっかりきれいになった家の跡地を、男たちは腰に手を当てて満足げに眺める。

仕事をやり終えた達成感が彼らにはあった。

しかし、彼らは次に現実を思い出す。ここに住む、ふたりのかわいそうな兄妹のことだ。

「あいつら、どうするつもりかな」

「リリーのやつは、あの衝撃でまだ起きあがることができないうんだって?」

「これ以上あいつらを不幸にさせちゃいけねえよ」

話し合いはすぐにまとまった。

村をあげて援助をし、ここにもう一度家を建てようというのだ。

ノトは人情にあふれた村だった。

それに、過去にファウス家をおそった悲劇もそれを手伝っていることは否めない。

男たちは三人に優しかった。

彼らにとって、アイシスたちは英雄だったのだ。

「あんたたち、通りすがりの旅人なんだろう。それなのに、ありがとうな、うちの村のやつらを助けてくれて」

「いえ」

アイシスは顔を真っ赤にする。

照れているのではない、申し訳ないのだ。

そもそも、襲われた原因はアイシスたちにある。

黒の騎士団の目的は、ソウマたちを盾に、アイシスを手に入れることだったのだから。

男たちの会話は、やがてネットレトの噂へと移った。

なにも知らない人の言葉というのは、ときにひどく残酷だ。

「入院している旅人さんってというのが、どうも昔この村に住んでいた子どもに似ているらしくてねえ。まさか本人じゃねえかって、みんなばかみたいなのを言っているのさ」

たくましい腕をした男が言った。それを皮切りにそれぞれが口を開き始める。

「そうそう。だが、そんなはずあるわけねえ。第一、ネットレトのやつが村に戻ってこれるはずがない」

「ああ。それに、旅人さんはえらく目つきの鋭い方らしいじゃないか。ネットレトは、まあ、愛らしい顔をした子どもだったからな、そうはなるまい」

「しかし中身は化け物だったよ」

「違いねえ」

アイシスたちはなにも言えなかった。真実はどこにあるのだろう。

ソウマの姿を見つけたのはそんなときだった。

彼は作業を終えた男たちに深々と頭をさげ、何度も礼を言った。

「全員にそれをすませてしまつと三人のもとにやってきて、あいつが起きたらしいですよ」と言った。

「お医者先生に頼まれたんです。動けるのが僕しかいないからつて聞いてもいないのに、言い訳のようなソウマの台詞だった。

アイシスたちは顔を見合わせ、うなずきあつのももどかしく病院へと駆け出した。

ネトレトはぼんやりと天井を見ていた。

三人が病室へ駆けこむと、ようすを見ていた老医者がしっとたしなめる。

ネトレトは体を起こそうとしたが、小さく呻いて顔をしかめた。ひどく痛むのだ。

無理をなさるな、と彼にシーツをかけてやり、医者は気をきかせて病室を出ていった。

「迷惑をかけた」

しばらくの沈黙のあと、呟くようにネトレトが言った。

「彼らも 無事だったようだな。さっきの医者が教えてくれた」

「あんたの弟たちだろう、よそよそしいね、彼らだなんて言い方は」  
リグルが言い、ネットレトは目を閉じる。  
わかってるよ、とリグルは言った。

「兄としてふるまうことを躊躇わせるような事件、あったんだろ。  
聞いたよ、全部。弟くんから」

ネットレトは目を閉じたままだった。そうか、と掠れた声で言う。

ねえ、ぜんぶ話してよ。アイシスは心のなかで訴えた。  
ぜんぶ言つてよ、教えてよ。

ねえ、ぼくはすこしわからなくなりそうだ。  
見たんだよ、右肩。  
黒い刺青あったよね、ぼく見たんだよ。

アイシスははっとした。気づけば三人が三人ともアイシスを見て  
いる。

「刺青つて、おまえ、なにを言っているんだ」とラナ。

彼の言葉で、アイシスはうっかりやらかしてしまったことを知っ  
た。

心で唱えていたつもりが、強く思いすぎたためだろうか、彼はす  
っかり声に出して言っていたのだ。

おそろおそろネットレトの顔をうかがう。

信じると決めたものの、答えを知るのは恐ろしかった。だって、彼の右肩にいれられた刺青は、禍々しいまでに黒く光っていたのだから。

ネトレトの顔に色はなかった。

目は見開かれ、口もなかば開いている。唇にも色がない。

彼をはじめ、しばらくはだれも言葉を発さなかった。

二時間ぐらいが経っただろうか、それともまだ一分とすぎているのかもしれない。

ネトレトは目を閉じた。ゆっくり、ゆっくり時間をかけて、息を吐く。

「近くに寄ってくれないか、あまり大きな声で言うことではないから。」

……すべてを話すよ、すべて、包み隠さず

## 第四十四話：彼の狂気

### 『聖伝』第四十四話

その年ごろの男の子にしては背が高く、すこしばかり大人びて頭がきれる、しかしそれ以外はいたって普通の、ネットレトはそんな少年だった。

勤勉で、家族思いで、愛想のいい。

もちろん彼の評判はすこぶるよろしい。

父親の飲み友達が酔って遊びにきたときは、ネットレトの前にかがみこみ、将来はうちのを嫁にどうだ、などと冗談とも本気ともつかぬ顔で言うほどに。

そんなときは必ず、弟のソウマが高い声をはりあげて反論した。

「違うもん！ 兄さんのお嫁さんには、僕がなるもん！」

五歳も年の離れたこの弟は、まだ嫁という言葉の意味もよくわかっていないのだ。

飲み友達は上機嫌に笑って言う。

ソウマ、嫁さんには女の子しかなれないんだぞ。



するとソウマは決まっつてこう言っつのだ、だつたらリリイがお嫁さんだもん。

「だが、リリイがネットレトの嫁になったら、おまえはひとりぼっちになるぞ」

「そんなのいやだつ」

ソウマはすっかり口を尖らせてしまつ。

ネットレトは困つたように笑い、弟に向き合つて背を曲げる。

「あまりからかわないでよ、おじさん。この子、拗ねんぼだから」

ソウマの眉間にはしわが寄つていて、ネットレトはそこにぴとりと指をあてた。

円をえがくように、くるくる、くるくると指を動かす。

くすぐつたさに、やがてソウマは笑い出した。もうしかめっ面ではない。

ファウス家は笑いの絶えない家庭だつた。

しかし、そんなものは一瞬にして壊れてしまつたのだ。

本当に一瞬で、あまりにも呆気なく。

ベッドに伏せるソウマの顔は赤かった。

このところ彼は調子が悪く、よく熱を出していた。

一家は茶の商人で、納入の期限は迫っている。

仕方なく両親はソウマを親戚にあずけ、ネトレトとリリイだけを連れて首都へ向かうことにした。

ネトレトは弟の手を取った。

「大人しくしているんだよ。おみやげ、買ってくるからね」

ソウマの手は熱をもっていて、それにかかる吐息も熱い。ネトレトの胸が痛む。

そんな兄にソウマはにこりと笑いかけ、いってらっしゃい、と言った。

これが、ネトレトが最後に見た弟の笑顔になった。

首都トゥーディールへいくには山をひとつ越えてやる必要があった。

山といってもなだらかなもので、実際はすこし傾斜のついた森のようなものだ。

子どもを連れて歩いたところで、通り抜けるのに半日とかからない。

一家は無事に商品を納め、一夜を首都ですごしてから帰途についた。

悲劇はこのときに起こった。彼らは山盗人に遭ったのだ。

一家は明るいうちに首都を出た。

しかし途中でリリイがぐずり、けっこうな時間をくってしまった。

気づけば森はうす暗く、なんとも不気味な色をたたえていた。

盗賊たちは手際がよかった。

まず、彼らは父親をしばりあげ、次にネットレトを拘束した。売り上げはいとも簡単に奪われてしまった。

火がついたようにリリイが泣き、母親は震えながら彼女を抱きしめた。

盗賊のひとりが、そんな彼女に目をつけた。

若く美しい母親。

泣き喚くりリイを引き剥がし、盗賊は彼女にいどみかかった。

ネトレトはなににもできなかつた。

母親が下種に犯されようというのに、身動きひとつできずに。

か細い悲鳴が森に響く。助けはこない。

ネトレトのなかで、なにかが弾けた瞬間だった。

気づけば彼の縄は解けていた。

長い距離を全力で走りぬけたあのように、息がすっかりあがっている。

賊の姿は見えない、影すら残っていないなかつた。

そして、母親の姿も。

なにが起こつたのかもわからず、呆然とネトレトは倒れていた。起きあがる力はなかつた。白濁した意識が薄れていく。

いったいどうしたというのか。

そういえば、黒く伸びていく美しい衣を見たような。

ネトレトは気を失った。

呪いが少年の体を蝕みはじめた。闇遣いの力はずいぶん解き放たれたのだ。

「ネットレトがやった！ ネットレトが呑んだんだ！」

搜索にきた親戚に助けられ、三人は病院に入った。

父親はすっかり気がふれていて、なにを問いかけられてもごう叫ぶばかりだった。

「ネットレトが殺したんだ、ネットレトがみんな殺した！ 醜い盗人どもも ああ 俺の妻も！」

村人たちは混乱した。  
まさか、ネットレトが？

信じられなかった。だって、彼は村で評判の模範生なのだ。  
彼が母親思いなことはだれもが知ることだった。

彼らはネットレトに説明を求めたが、ネットレトはなににも答えることができなかった。

わからないのだ。

ただ覚えているのは黒い衣の美しさだけ。

リリイも同様で、幼い彼女はかわいそうに、毎日泣き続けるばかり

りで一言もしゃべらなかつた。

ネットレトが幽霊を見たのは、父親が自殺した夜のことだった。

ベッドを抜け出したネットレトは、病院の中庭で膝をかかえていた。

わからない、なにもわからない。

それに なにも感じないのだ。母親の失踪を知っても、リリースの泣き声を聞いても、ソウマの涙を見ても、父親が死んでさえも、なにも。

悲しいとは、どういうことだったか。

涙すら流れない。どうすれば泣けるのだったろう、どうすれば。

己が心まで損なつたな。

静かな声がしてネットレトは顔をあげた。

見覚えのある、黒い衣。

夜闇に溶けそうな漆黒の衣を身にまとい、艶やかな女が目を細めていた。

彼女はなんと、浮いている。しかし、それでもネットレトは驚かなかつた。

「あなたは、だれだ」

わらわはヴァネッサ。そなたは我がいとしの君、なんなりと命ぜられよ。

「僕はあなたなんて知らない」

では知らねばならぬ。これは主の運命。そなたは闇遣いなのだ、選ばれし者。

そう言うと、ヴァネッサと名乗る女は消えてしまった。申し合わせたように、ネトレトは静かに立ちあがる。

その夜を境に、彼の姿はノトの村から消えてしまった。

二年の月日はあつというまにすぎた。

故郷から遠く離れた森に、ネトレトはいた。骨と皮ばかりの、目つきばかりが鋭く、異様な光をはなつこの少年を、よもや彼とわかる人物がいただろうか。

ネトレトは狂気に顔を歪ませ、手当たりしだいに魔物を殺し、血を浴び血を飲んで日々をすごした。

自分は母親を殺し、父親まで死なせてしまった。

そんな運命にだれがした。

憎い。

憎い憎い憎い憎い憎い憎い！

彼の中には憎しみの感情しかなかった。

どうにもならない思いを、彼は殺戮という行為で発散させようとした。

森には遭難者が落とされたのか、一振りの剣が落ちていた。

赤い石の装飾がついた、素朴で美しい剣だった。

ネトレトはそれを振るうことを迷わなかった。

魔物、獣、見境なく殺した。

ヴァネッサの力もいたずらに使った。

心がしだいに疲れていく、壊れていく。

彼に出会ったのはそんなときだった。

顔面を黒の刺青で覆った男。

彼は、血にまみれた少年にも臆することなく、それどころか手を差し伸べてさえくれたのだ。



気づけばネットレトはその手を取っていた。

それが意図するところもわからないまま、刺青を彫られる。

それはひどく痛む作業だったが、施されたその刺青は、彼に居場所と仲間とを与えてくれた。

男は言った。

「これでおまえも“黒の騎士団”の一員だ。我々は仲間なのだよ」

「仲間」

ノトの村人たちを、薄ぼんやりとネットレトは思い出す。

なにがあつた、いったいどうしたというんだ。

本当におまえが殺したのか、ネットレト。

おそろしい形相で追及してくる人々。肩をつかまれ、強く揺すぶられて。

仲間、という言葉は耳にくすぐったかった。

ネットレトは小さくうなずいた。

十二のときに人を殺めた。

そうしろと言われたから殺した。ためらいはなかったし、後悔も  
しなかった。

ただ、喉から血を流してけいれんする男を見、心底気持ち悪いと  
思っただけだ。

ネトレトはもはや、彼自身がそう意識していなくとも、“あの方  
”の忠実な僕であった。

命令に従い、なんの感情もなく殺す。

殺人のための剣をしこまれ、ネトレトはめきめき力をつけていっ  
た。

強くなれば褒められた、人を殺せば笑顔をくれた。

ネトレト少年は嬉しかった。

すべてを失ったネトレトは、黒の騎士団に唯一の居場所を見出し  
たのだ。

四年の歳月が流れた。ネトレトは立派な体躯の少年に成長して  
いた。

幼いころに入れられた刺青は、彼の体が大きくなるたびに痛み、  
血を流した。

しかしその刺青だけが彼の支えだった。

剣を振るっているうちはすべて忘れられる。

ヴァネッサのことも、闇遣いのことも、過去に置いてきた恐ろし

い事実も。

あるとき、ネトレトは若い女を殺した。

一息に刺し貫かれ、悲鳴をあげることもなく息絶えた彼女のそばに、少年が座りこんでいる。

彼女は母親だった。

目の前で母親を殺された少年は、叫びだすかと思えばそうもしない。

ただ目を見開き、なにが起こったのかわからないといった顔でネトレトを見あげている。

ネトレトはためらうことなく剣をふりおろした。

母親がつくる血溜まりに、少年の小さな体が倒れこみ、しぶきをあげる。

ネトレトはかがみこむと少年の服をつかみ、それで剣についた血をぬぐった。そのとき、まぶしい光がネトレトの目を射た。

ネトレトは顔をしかめ、その正体を見ようとする。

光っていたのは、少年が首からさげていた小さなお守りだった。細い鎖が日の光を反射させたのだらう。

ふとネットレトはお守りを手に取った。

見覚えがある。

木製の、安いものだ。たしか祭りの屋台で売っていた。

すこし追加で金を払えば、名前を彫りこんでもらえるという代物だ。

ネットレトはそれを買った、はずだ。

ふたつ、そのどちらにも名前を彫ってもらって。

なんと彫りこんでもらったのだったか。

「あああああああ！！　　うわあああああああああ！！！！」

ネットレトは絶叫した。

すぐに声が掠れてしまったが、それでも彼は叫び続けた。

やがて喉がやぶね、口の中は鉄くさいにおいに溢れた。

彼はついに悪夢から覚めた。

彼が過去に買い求めたお守りが、弟妹との思い出が、彼の精神を狂った軌道から呼び戻してくれたのだ。

ネトレトは頭を抱えた。自分は　　なんということをして！

これまでに殺めたたくさんの命の記憶が蘇り、ネトレトは悶絶して叫んだ。

幼い子ども、柔らかな笑みの老人、結婚したばかりの夫婦、初めての子どもを授かった母親。

彼らの幸せを、笑顔に満ちた未来を奪ったのは　　……

アイシスは静かに涙を流し続けた。

こぼれ落ちるのだ、勝手に。

止めようがない、もうどうすることもできない。

アイシスは責められない、頑なに口を閉ざしていたネトレトのことを。

これほどの思いを言葉にするには、いったいどれほどの勇気が必要だろう。

しかし、口に出さずに抱えこむには、それ以上の強い覚悟が必要なのだ。

「目が覚めたところでどう償えよう、できるはずがない。奪ったものは大きすぎた、そして私は弱すぎたのだ。

私は逃げ出した。黒の騎士団にいることはできない、という圧倒

的な恐怖だけがあった。集団を抜けることは裏切り、死に値する。私はかつての仲間を追われ、命を狙われることになった」

ネトレトはゆっくりと息をつき、しかし私は逃げ延びた、と言った。

「浅ましいことだ。多くの命を奪いながら、自分が死ぬのは怖いだなんて。

それでも、ただただ生きたかった。その執念で逃げおおせた私は、再びいわゆる“日常”に舞い戻ったのだ。

しかし問題があった。私は名をなくしていたのだ。刺青を彫る際にね、奪われてしまったんだよ。

世俗の名を捨て、黒の騎士団としての名を受ける。名はそのものの本質だ、それを奪われることで黒騎士たちは完全に支配される。

私もそうだった。しかし私は、名の支配からも逃げ出すことができた。かといってまた、ネトレトという名に戻るのも恐ろしかった、闇遣いの名だからね。そんなとき、これが目についた」

ネトレトは腰袋から木彫りのお守りを取り出した。細い鎖がついている。

お守りに彫られた名前を、ネトレトはそつと指でなぞった。

「キース・コート。私が　最後に殺めた、少年の名前だ」

ああ、とアイシスは声をもらした。ラナは声をあげて泣いていた。

リグルは泣いてこそいなかったが、目をすっかり赤くしてしまっている。

しかし、ネトレトはどうだ。

彼の目には光る涙が見えず、鼻も赤らんではない。

アイシスの視線に気づいたのか、ネトレトは眉尻をさげた。精悍な顔つきが、とたんに頼りなくなる。

「言つたろう。私の心は損なわれた、半分を闇に吞まれてしまったんだよ」

そして彼は、泣けないんだよ、と言ってひっそりと笑った。いまにも崩れてしまいそうなほほ笑みだった。

明るかった空はすっかり朱に染まっていた。病室は静かだ。

ネトレトは小さく呻いた。傷が痛むのだ。

すぐにリグルが医者を呼びに走った。

ネトレトは肩で息をしていたが、顔だけを動かしてアイシスを見た。

「すまない。私はかつて、きみの故郷を滅ぼした集団の一員だった。

いつか言わなければいけないと思っていた、しかし言えなかった。本当にすまない」

許してくれとは言わない、とネットレトは言った。許されていいことではない、と。

アイシスはゆっくり首をふる。

「それでも、ネットレトはもうひとりじゃないよ」

ネットレトは目を見開いた。ふ、と口元を緩める。

「ありがとう」

三人は病室を追い出されてしまった。

包帯を取り替えてやらねば、と駆けつけた老医者が言う。

彼はアイシスたちの涙に目ざとく気づき、訝しがるように首をひねった。

「どうしたね。なにか、悲しい話でも聞いたか」

「いえ」

ふむ、と医者はうなずいた。

それから彼は、ひとり言のようにこつ呟いた。



「昔、この村でおこった悲劇についてだがね、わしはよく覚えてい  
る。よく覚えているが、かの少年の心の優しさもよく知っているよ。  
だれも望んだことではないのだ、きつと」

アイシスははっと顔をあげたが、老医者は腰をたたきながら病室  
に入り、ドアを閉めてしまった。

三人は閉じられたドアの前に立ち尽くす。

しばらくして口を開いたのはリグルだった。

「宿に、戻ろうぜ」

治療が始まれば、ネットレトはきつと痛みをもらすだろう。  
そんな声を、彼はおそらく聞かれたくないと思うはずだ。

アイシスとラナはうなずき、静かに病院を出ていった。

その姿を、柱の影からソウマが見守っていた。

大粒の汗を光らせ、ネットレトは大きく息をついた。  
全身が焼けるように熱い。

包帯は傷口にはりつき、剥がすときひどく痛むのだ。

清潔な包帯に巻きなおす作業を、ネットレトは歯をくいしばって耐  
えた。

ていねいに塗られた軟膏はひやりと冷たく、気持ちいい。巻きなおされた白い包帯も悪くなかった。

小さな物音がして、目を動かすとソウマが立っていた。病室の入り口で、彼は足を踏んばるようにして立っている。

ネトレトはつい、笑みをこぼしそうになった。

またあの子は眉間にしわを寄せて。

ネトレトがなにも言わずにいると、やがてソウマは背を向けて歩いていってしまった。

しかし彼は、次の夜もやってきた。

次の夜も、その次の夜も。

そうして六日ほどが経っただろうか、ついにソウマは病室の中へと入ってきた。

夢でも見ているのだろうか、とネトレトは思う。

二度と会えぬと諦めていた、愛しい弟が目の前に。

ソウマはベッドのそばに仁王立ちになって構えた。なにも言わず、眉根を寄せてネトレトを見おろしている。

ネトレトも口を開かない。ただ、青い瞳を見つめ返す。

気詰まりなはずの沈黙が、なぜだか妙に心地よい。  
傷ついた心にじわりと沁みていくような。

「どういつつもりで」

やっとソウマが口を開いた。声が震えている。

彼は不本意そうに黙ると小さく喉を鳴らした。

それからまた、どういつつもりで、とやる。今度はしっかりとした声だった。

「戻ってきたんだよ。どういつつもりで僕たちを助けたんだ。それで許されるとでも思ったか？」

「いいや」

ネットレトは首をふる。

許されるはずがない、どれほど時間が経とうとも、どれほど涙を流しても。

「じゃあ、どうしてだよ」

ふう、とネットレトは息をつく。

どうして、か。改めて訊かれてしまつと、答えるのに勇気があるな。

しかし、ネットレトはもうひとりではなかった。

アイシスにラナ、そしてリゲル。

弱くて強い少年たちが、強くて弱い自分を支えてくれる、勇気を与えてくれる。

「家族だから」

なんだ、とネットレトは思う。口にしてみれば簡単なことではないか。

長く開いていなかった、幼いころ夢中になって読んだ本を見つけ  
たときのような、そんな感覚。

許してはもらえないだろう。

しかし逃げてはいけない、自分の気持ちに変わりはないのだから。  
弟を、妹を大切に思う気持ちは。

ネットレトは目を閉じた。

疲れたな、と言う。

「今日はたくさん話しすぎた。すこし、眠るよ」

本当に疲れていたのだらう、彼はすぐに寝息をたてはじめた。

アイシスたちがこの場にいたら、きっと驚いたことだらう。  
あのネットレトが、まるで警戒心もなく寝姿を見せるなんて。

ソウマは強く拳を握りしめた。手が震える。

しばらくそうして彼はうつむいていたが、やがて病室をあとにした。

## 第四十五話：さまざまな思い

### 『聖伝』第四十五話

ネトレトは順調に回復した。

半月も経つころにはすっかり歩けるまでになり、老医者をお大いに驚かせた。

魔導師は精霊の加護を受けている。なかなか打たれ強いのだ。

村人たちはネトレト 彼らにとっては通りすがりの旅人だったが 会いに会いたがったが、しかし老医者は面会を許さなかった。 どうしてだか彼は、旅の三人組とソウマ以外を病室に通そうとは思わなかったのだ。

「いい天気だね」

アイシスたちはネトレトを伴って中庭を歩いていた。

日差しもずいぶん暖かくなった。ときおり暑さを感じるほどだ。 ツイード山脈で見た幻想的な雪が、もつずっと昔のことのように思えた。

三人は毎日のように病院を訪れた。

ネットレトが動けるようになってからはこうして散歩をするのが日課となった。

四人はたくさんのお話を話したが、しかしネットレトの過去については一言も触れなかった。

彼らはとても穏やかで、沁みるような喜びを感じていた。

アイシスはときどき、夜になるとユフィロスレジアと話をした。

夢のなかで彼女と会うのは久しぶりのことだ。

最近はどうも野宿が多く、心を安らかにして夢を楽しむことがなかなかできなかったから。

いい顔をしている。

「うん」

アイシスはにっこりと笑った。ユフィロスレジアも涼しげな笑みを返す。

あの男と、ようやく向き合えたようだな。

「そうみたい」

どう思う。強い力を得たかわりに、彼は多くのものを失った。

どうだ、王は怖いか、力を求めるといふことが。

んん、とアイシスは首をひねる。

「怖くない、といえは嘘になるけど。でも、むしろぼくの気持ちはさらに固まったよ。やっぱり、強くなりたい。自分の弱さを受け入れるために強くなるんだ。

ネットレトも、きつとそう思っていたんじゃないかな」

ユフィロスレジアはアイシスの答えに満足したようだ。しゃらりと腕輪を鳴らして体を舞わせた。

夢のなかで見る彼女の姿はあいも変わらず美しい。  
はやくこの姿をみんなにも見せたいものだ、とアイシスは思った。

775

ソウマは毎夜ネットレトのもとを訪ねた。

彼はほとんど起きていたが、ときどき眠っていることもあった。  
ソウマはなにも言わない。病室の入り口に立ち、憎むべき男を睨むだけだ。

家族。

あの夜、ネットレトが言った言葉が耳にこびりついている。



彼がその言葉を口にしたとき、ソウマの顔はかっとなつた。彼は最初、それは怒りのせいだと思った。しかし、本当のところはどうなのだろう。

家族だから。

頭では必死に否定しようとするのに、心がその言葉を受け入れようとする。

喜ぼうとするのだ。

真実を知らなければならぬ、とソウマは思った。

いまなら聞ける気がする、いまなら話してくれる気がする。

そう考えて彼はネットレトのもとへ足を向けるのだが、次の一歩がどうしても踏み出せない。

そんなことが続いたある夜、いつものように病室を訪れると、そこにネットレトの姿はなかった。

ソウマの心臓が早鐘をうつ。

もしかして、彼はまたいつてしまったのではないか。なんにも言わず、また僕たちを置いて。

しかしそうではなかった。

白い入院着に身を包んだネットレトは、中庭に立って月を見あげていた。

長く伏せっていたせいだろう、すこし細くなった足首が裾からのぞいている。

「こっちにこないか」

ソウマは肩をふるわせた。気づかれている。

となりに立ちたい。

ソウマの心はそう訴えたが、足が動こうとはしなかった。

するとネットレトがふり返った。

青白い月の光が、彼の顔を照らし出す。

彼はひどく穏やかな顔をしていた。

笑みを浮かべているわけではないのに、とても柔らかな。

澄んだ黄金の目に誘われるようにして、ソウマは中庭に進み出た。

「……………」

ネットレトはなにも言わない。腕を組み、空を見あげている。ソウマも倣って顔をあげた。

美しい夜空だ。

幼いころ、兄弟はときどきこうして闇のなかに立ち、流れ星を期待して空を見あげたものだった。

ふとそんなことを思い出す。

この人は、どう思っているのだろう。同じことを、思い出しているのかな。

ソウマはちらりとネットレトに目をやったが、彼の表情からはなにも読み取れなかった。

静かで涼しい沈黙が続く。

ネットレトはソウマの言葉を待っているように思えた。

ソウマは大きく息をついた。真実を知る心を決めたのだ。

「本当のことを教えてよ。あの日のこと、ちゃんと説明して」

ああ、とネットレトは言った。もう逃げないよ、と。

もう恐ろしくはない、もう逃げ出したりしない。

彼もまた、過去をふり返る心を決めたのだった。そして静かに語り始めた。

「この言葉に聞き覚えはないかもしれないが、私は 闇遣いなんだ。

魔導師のことは知っているね、闇遣いは、つまり闇の魔導師なんだよ。

あの日、山で盗賊に襲われたとき、私はその力に目覚めてしまった。

私はどうやら、生まれたときから闇遣いとしての運命を負っていたらしい。どうしてかは知らないがね。その答えを求めることは、崖のうえから放られた小石が頭に当たり、どうして私に当たったんですかと問うようなものだ。だから聞かないでおいてほしい。

とにかく、私の力はそのとき目覚めた。というより、暴発したんだ、あまりの恐ろしさと怒りとに。制御できるような状態ではなかった」

ネトレトは右手を見た。包帯が巻かれている。

「私は母を救いたかった。しかし、結果として私は 母を、手にかけてしまった。理由はどうあれ、これは事実だ。抑制の効かない闇が、盗賊もろとも母まで呑みこんでしまったのだ。そして私の心の一部も」

「心の、一部」

思わずソウマが声をあげる。

ネットレトは重々しくうなずいた。

「ああ。悲しみとか、恐れだとかいう感情を、私は闇に持つていかれてしまった。動かなくなってしまうんだ、そういった感情が。私は泣けないし、だから素直に笑えない。」

当時は、心が欠けてしまった衝撃だろうね、しばらくなにも感じられなかった。母を殺してしまった事実も、父を死に追いやってしまったことも知りながら、なにも感じられずに。ただ、ここに居場所がなくなっただけを感じて村を出た。

なんの説明もなく姿を消して、おまえたちには本当に　いや「

ネットレトはかぶりをふった。苦々しげに眉根を寄せる。

「そんな軽々しい言葉ですまされることではない。おまえも聞きたくはないだろう。言葉など、ときにひどく頼りないものだ」

ネットレトは謝罪の言葉を口にはしなかったが、しかしソウマには伝わった。

彼は心から悔いている、ソウマはそう思った。

それに、彼が語る真実は意外なものだった。彼もまた悲劇の被害者であったのだ。

いや、一番の被害者は彼だったのかもしれない。

しかし、ソウマもまた許しの言葉を口にはしなかった。それこそ言う必要のないものだったからだ。

ネットレトは顔をあげ、月明かりに目を細めた。

「私はもう、長くない」

小さく息をのみ、ソウマはネットレトを見やる。

ネットレトはひっそりと笑った。

「心が損なわれていては、精霊を使役することなどできない。逆に魂を食われていくのみだ」

「なんで」

そんなふうには笑うんだ、という言葉は声にならなかった。

ネットレトは困ったように眉をさげ、手を伸ばす。

すこし体を硬くしたソウマの額に、ネットレトのすらりと長い指があてられる。

「ほら、また」

そう言ってネットレトは眉間のしわをほぐしてやる。

ソウマの耳に、幼かったころの兄の声がよみがえる。

この子、拗ねんぼだから。そう言って彼は笑ったはずだった。

あのとぎのような澄んだ笑い声を、もう彼はあげることができないというのか。

ソウマの瞳に涙があふれた。

こぼれそうになるところを、慌てて腕で乱暴に拭う。

ネットレトは指を離し、また夜空に視線を戻した。

「このまま、二度とおまえたちに会えないまま、私は死ぬのだと思っていた。本当はずっと、会いたかった。こう聞けばおまえは怒るかもしれないけれど」

冷えてきたな、と彼は言った。戻ろう、風邪をひく。

しかしソウマは動かなかった。

彼はもう隠すことなく涙を流し、嗚咽をもらしていた。

ネットレトは思わず腕を伸ばす、しかしためらった。抱きしめることなんて、いまさら許されるのだろうか。

彼ほどの人物が、実に間抜けな考えに囚われたものだ。

躊躇するネットレトの胸にソウマが飛びこんできた。  
ネットレトの目が見開かれる。

その夜、懐かしい兄の胸で、ソウマは十五年分の涙を流した。

「もう大丈夫だ」

それからまた半月が経ち、ネットレトは力強く宣言した。  
包帯も幾分か取れ、すこしは身軽になったようだ。

しかしアイシスは不安そうな声を出した。

「でも、もっとゆっくりするべきじゃないかな。無理はよくないよ」

「もう十分に休んだ。それに、急ぎたいことがある」

ネットレトが言うにはこうだった。

もしネットレトの家族の存在が黒の騎士団に知られてしまっていれば、ソウマとリリィの身はかなりの危険に晒されることとなる。  
しかし、いつまでもここに留まり、彼らを守ってやることもできない。

そこでネットレトは、ある人物に、しばらく彼らをかくまってもらえるよう頼んでみる、というのだ。



「そのある人物っていうのは」

「あの珍妙な天才たち？」

ラナの質問の続きをリグルが受けもった。

まさか、という顔でラナは彼を見たが、ネットレトはあっさりうなずいた。

「彼らしか頼れる人物はいない。ネロは言わずと知れた天才魔術師だし、ハーデースは地の絶対者だ。黒の騎士団もうかつに手を出せまい」

「でも、彼らがうなずいてくれるかどうか」とアイシス。

大丈夫じゃないの、と言うのはリグルだった。

「あの人たち、変わり者だけど情には厚いみたいだし」

「ああ。無理な願いだとはわかっているが、一度いって頼んでみようと思う」

「じゃあぼくたちも、とアイシスは言ったが、ネットレトはそれに首をふった。

「きみたちは先へ進んでいてくれないか。

ここを北にいけば、ユリシア国の首都トゥーディールがある。私はふたりを連れて天才たちのもとへ向かい、話がついたらすぐに追いかけるから。おそらく、半月ほどはかかるだろうが」

そこでネットレトの言葉は尻すぼみになり、小さな声はついに途切れてしまった。

どうしたのか、とアイシスは顔を曇らせる。

続きを何度か催促すると、ようやくのことでネットレトは、さも言いくそうにしてこう言った。

「その、できればの話なんだが、旅費を」

なるほどね、とリグルが笑い声をあげる。

「そついや残金もう危うかったよね。別荘のご夫人への心づけ、ちよつとばかり多すぎたかな」

わかったよ、とリグルは言った。お金のことは心配なさんな、それよりあந்தのほうが道中に気をつけな。

話がまとまると、すぐにネットレトはリリイの病室へと向かった。

リリイは彼を見るとにつこりとほほ笑み、鈴を鳴らした。

ネットレトはすこし複雑ながらも穏やかな笑みを返す。

病室にはソウマもいて、ネットレトは事情を詳しく説明した。

このままでは危険かもしれない、という言葉はふたりを少なからず怯えさせたが、ネットレトの話を聞くとしだいに落ち着きを取り戻

した。

「その人たち、本当に信用できる？」

「ああ」

「そう」

なら、いい。ソウマはそう言っていると、すこし声を小さくした。

「それで、ちゃんと迎えにきてくれるんだよね」

ネットレトは眉をあげる。リリイも驚いたようにソウマを見た。

ソウマの顔が、みるみるうちに赤くなる。

ネットレトの目が細くなった。

「ああ、約束する。すべてが終わったらすぐに迎えに行くよ」

それから彼は、手を伸ばしてソウマの額に触れた。

「しわ、寄っているぞ」

そうと決めればすばやく行動に移る。

これはネトレトだけでなく、ファウス家そろっての性質らしかった。

ソウマはその日のうちに荷物をまとめ（といってもほとんど燃えてしまったのだが）、翌日の朝には旅装まで調えたのだった。

もちろんリリイにも仕度させている。

そうして四人は一時二手に別れ、ネトレトは一路西へ、アイシスたちは北の大都市トウーデールへと向かうことになった。

「お世話になりました」

ネトレトは老医者に深々と頭をさげた。

医者は曲がっていた腰を伸ばし、満足そうに笑った。

そしてネトレトを手招き、耳を寄せさせるところで囁いた。

「おまえさんは、よくよく弟と妹とに愛されているらしいのう」

ネトレトは言葉もなくして老医者を見つめた。

この人は気づいていたというのか、自分の正体に。

母親を殺した、鬼の子どもと言われて蔑まれた自分に、そうとわかりながらも誠心誠意尽くしてくれたというのか。

村人の面会を許さなかったのはこういうわけだったのだ。

老医者はネットレトがあの子だと気づいていた。

そして、ネットレトが彼ら村人に負い目を感じていることも知っていたのだ。

ネットレトの胸が熱くなった。しかし涙を流すことはできない。

これは彼の背負う呪いのひとつだ。

しかし、彼は苦しくなかった。素直な言葉を口にするだけの勇気を手に入れたから。

「ありがとうございました」

そしてネットレトはノトの村をあとにする。そのためにはソウマとリリイがいる。

いい天気が続いている。

草原を歩く兄弟三人の姿は、どこか遠出を楽しむふうでもあった。

十五年ものあいだ堪え続けていたネットレトに与えられた、家族との束の間の安らぎだった。

アイシスたちは三人を見送っていたが、やがてずっと小さくなつてしまつたと北へ足を進めた。

しかし、すこしいつたところでラナが間の抜けた声をあげ、かと思つと一目散にまた村へと駆けていつてしまった。

アイシスはぽかんと口を開ける。

「忘れ物かな」

「おつむりをお忘れなんじゃないかな、母親のお腹に」

「もう、リグルったら。よっぽどラナのことが好きだね？」

いつか彼が言った台詞を思い出し、いたずら心が働いたアイシスは真似を試してみた。

意外な攻撃にリグルは驚いたようだったが、すぐに気を取り直し、思いきり顔をしかめると舌を出してべえ、とやった。

アイシスは声を出して笑った。

戻ってきたラナの手には、小さな花束が握られていた。

武骨な彼にどうも似合わないその花に、アイシスは一瞬怪訝な顔を浮かべる。

しかし、すぐに理由がわかった。十五年前、悲劇はこの先でおこつたのだ。

「ラナ」

彼の心の優しさに、アイシスは嬉しくなった。

ラナは照れくさいのか、買ってきた花束をアイシスに押しつける。

彼らは森にさしかかると、その中腹あたりに花を供えた。

やがてネットレトがそこを通ったとき、しなびているだろう花束を見て、彼はどんな顔をするだろうか。

## 第四十六話・運命が彼を呼ぶ

### 『聖伝』第四十六話

ラナは驚愕の声をあげた。

トウーデールの規模と見たら、それはもう半端じゃないのだ。

見あげるのに疲れてしまいそうな塔が建ち並び、馬車はせわしなく走り回り、そのすき間を縫うようにして人が歩く。

そしてその賑やかさの中央に、ユリシア国王の住まう王城が、堂々とした風情でたたずんでいるのだ。

三人は呆気にとられた。

「こりゃすごいね」とリグルが鼻を鳴らす。

「ど、どこを歩いたらいいのかな」

アイシスはすっかり落ちつきをなくしている。

普通に歩けばいいだろう、とリグルは笑うが、しかしどうやらラナも体が強ばっているようだった。

リグルは呆れてため息をついた。

「まったく、情けないね。田舎もの丸出しじゃないか」



たしかに彼らは田舎ものだ、それもかなりの。

そもそも国の発展具合からして違うのだ。

ユリシヤは国土が広く、海を渡った先の“西の大陸”にまで領地を持っている。

国境を挟んだ西隣には、商業の国シリアが広がり、そこを通じてユリシヤも盛んに貿易を行っている。

流通が盛んだと人が集まり、人が集まると知恵が進む。

そういうわけで、ユリシヤは突出した先進国だった。

「じゃあさっそく、手分けしていきますか」

手際よく宿を決めてしまってからリグルが言った。アイシスとラナは重々しくうなずく。

彼らには、旅費を稼ぐという重大な任務が与えられているのだ。

ラナは手伝いに毛の生えたような仕事しかしたことがなかったし、アイシスにいたってはまるでそういった経験がない。

初めての体験に緊張し、彼らの心はかわいた音をたてた。

とにかく職を探さねばならない。

タリファではつまい話が向こうから飛びこんできてくれたが、いつもそううまくいくとは限らない。

とりあえず、アイシスはあてもないまま街を歩いてみることにした。

暖かな日である。太陽もご機嫌だ。

アイシスはいい気分で大通りを歩いた。

ちょうどお昼時である、立ち並ぶ店は競うようにしていいにおいを放っている。

久しぶりに甘いものが食べたいな、とアイシスは思った。

風の峡谷でわけてもらった砂糖菓子、あれはおいしかったなあ。

エザはいまごろどうしているだろうか。

そこでアイシスはふと思い出した。

ハーデースが言っていなかっただろうか、トゥーデイルを訪れることがあったら、なんとかいう店を訪ねてみるといい、と。

クッキーがおいしいとのことだったが、店の名前はなんだったろう。

「ああっ、しまった！」

突然の大声に、アイシスは肩をびくりと震わせた。

まだ声変わりのすんでいない少年の声だ。

ふりかえると、そばかすで顔をいっぱいにした少年が、くせの強い髪をかきむしっているところだった。

片手に紙袋を抱えているのだが、その底が抜けてしまったらしい。大通りにはトマトやかぼちゃといった野菜が転がっている。

しかし、道を急ぐ人たちはだれも彼に気を配らなかつた。なにをしているんだか、という顔をして通りすぎていくばかりである。

アイシスはすこしむっとすると、駆け戻ってトマトを拾い上げた。

はい、と差し出すと、少年は驚いたように目を丸くする。

「ありがとう」

アイシスはにっこりと笑い、残った野菜たちを集めにかかった。

「助かったよ」

少年はアイシスと同じくらいの年ごろだった。

そばかすだらけの顔を崩し、困ったようにへへ、と笑う。

「時々パパに頼まれて買出しをするんだけど、しょっちゅうやらかすんだ。どうもぼくは、学習しないうえに懲りない性質みたい」

自虐的な口調に、アイシスは声をあげて笑った。

結局、野菜はとてもひとつの袋に入りきる量ではなかったのだから、たつに分け、そのうちのひとつをアイシスが持つてやることにした。

アイシスは少年に好感をもったが、少年もアイシスを気に入ったらしい。

彼は歩きながらよく喋った。

ぼくの家ではクッキーを焼いているんだ。

一番の人気商品はチョコチップなんだけど、最近はね、野菜を使ったクッキーもよく売れるんだよ。

パパが考えたんだ、野菜嫌いの偏食家にも喜んで食べてもらえるようにって。

少年は道を折れた。

大通りからすこしそれただけなのに、驚くほど静かだ。

しばらく歩くと少年は足を止めた。アイシスもそれにならう。

ここだよ、と少年が指さしたのは、すこし色褪せたレンガが趣のある、小さな店だった。

看板を見れば、控えめに“リフリジア”と書かれている。

アイシスは小さく声をあげた。

そうだ、たしかハーデースが言っていた店の名前もリフリジアだったよな。彼が勧めてくれたのはここだったのか。

偶然の出会いに感心しているアイシスに、少年が間のぬけた調子で話しかける。

「そういえば、まだ名前を聞いてなかったよね」

「ああ」アイシスは気をとりなおして

「ぼくはアイシスだよ」

いい名前だね、と少年はほほ笑む。

「ぼくの名前はネロ。さあ、お入りよアイシス。助けてくれたお礼にクッキーをごちそうさせてほしいな」

日が暮れるころ、三人は宿の食堂に集まった。

さて、と身を乗り出したリグルが切り出す。

「どうだった。いい仕事は見つかったの」

「俺は教会の仕事」

教会の仕事？ ラナの言葉にアイシスは首をひねったが、よく聞けば、教会を建てる手伝いをするとのことだった。

汗をかきながら角材を運ぶラナの姿は、どうしてこうも想像するにやすいのだろう。

よく似合う、と言ってアイシスは笑った。

「それで、嬢ちゃんは」

「嬢ちゃんじゃないけど、ぼくはクッキー屋さんのお手伝いをさせてもらおうよ」

大きな口を開け、リグルは愉快そうに笑った。適材適所、というやつだね。

「おまえはどうなんだよ」

「俺？」

リグルはにやりと笑う。

「俺はあれだよ、ちょっとした使用人」

そう言つと彼は、冗談めかして腰をおり、恭しく胸に手をそえて礼をした。

おふざけでやっているというのに、これがどうして、さまになるではないか。

なるほど、適材適所だ。アイシスはほうと感心した。

「でも、アイシスさ。まさかつまみ食いたさにその店を選んだんじゃないだろうな」

「まさか！」

いたずらっぽくラナが言い、アイシスは真っ赤になって否定した。

たしかに甘いものは好きだ、しかしそんな食い意地のはったやつだとは思われたくない。

自己の権威をたもつためにも、アイシスは昼間にあつたできごとを話した。

ネロというおっちょこちょいの少年。

彼を助けたアイシスが案内されたのは、リフリジアというかわいらしい店だった、と。

「ハーデースが言ってた店だよね」と聡いリグルがすぐに気づく。

「それにそいつの名前。偶然とは思えないな、なにか関係があるね。そのネロっていう子、アイシスと同年ぐらいなの？」

アイシスは首だけでうなづく。

ふうん、とリグルは鼻をならした。

「まあいいや。とにかく天才魔術師は死んだってことになってんだ、この街では。アイシス、うっかり口をすべらしたりするんじゃないよ」

「わかった」

アイシスだってばかではない。

ネロが生死を偽ってまで身を隠しているらしい以上、彼のことを口にはいけないことぐらい分かる。

食事をすませてしまつと三人は部屋へと戻つた。

宿代を浮かせるため、部屋はひとつしかとつていない。

ラナはちらりとリグルを見た。なんだよ、というふうにはリグルは片眉をあげる。

ラナは慌てて目をそらした。

なにも言われずとも、彼の気持ちぐらいリグルにはわかる。

ばかげている、と思つた。しかし仕方のないことだ。

布をきつく巻きつけた胸元に、リグルはそつと手をやった。

翌朝、アイシスを迎えてくれたのはテオだつた。

ネロの父親で、彼もまたそばかすだらけの顔をしている。繊細な指をしているが、ところどころにやけどの痕が見える。職人の手だ。

「じゃあ、アイシスくんには粉をわけてもらおうかな」

テオは量りを持ち出してきて、分量と、うまく量ることつとをアイシスに教えてくれた。

「急がなくていいよ。粉が舞い上がって、むせてしまつたらね」

「気をつけて。ぼくはいつもやらかすから」

「ネロは驚くほど不器用だからね」



テオは困ったように笑う。

アイシスはすぐリフリジアでの仕事に慣れた。

クッキーを焼くのはもっぱらテオの仕事で、アイシスはネロと一緒にその下準備をやったり、客の相手をしたり。

店はいつも甘ったるいにおいでいっぱい、アイシスにはとても居心地がよかった。

そうして数日がすぎた。

ラナの肌は日に日に黒く灼けていく。

作業が長引くのか、宿に帰らない夜もあったが、アイシスが過度に心配することはなかった。

いろいろな面で、彼らはすこしずつ成長している。

ある朝、アイシスはまだ辺りが暗いうちに起きだした。クッキー

屋の朝ははやいのだ。

街はまだ眠っている。

アイシスはリフリジアに向かって急いだが、ふとその足が止まった。

薄暗い大通りに、人影がぼつりと見えたのだ。

その姿はぼんやりとじていて定まらない。

あたりは指ですくえそうな靄で覆われていて、そのせいかとアイシスは思ったが、どうやらそうでもないらしい。

人影自体が揺れているのだ、それこそまるで幽霊のようだ。

アイシスは身が震えるのを感じた。

王！

鋭い声がして、アイシスのはたと息をのんだ。

「ユファイ？」

逃げよ！

ユフィロスレジアの声が耳をくすぐる。

しかしいつものような優雅さはそこになく、彼女が焦っていることがアイシスにはわかった。それも、かなり。

「逃げるって、いったい」

説明はあとだ。

「うわっ」

アイシスは体が引っぱられるのを感じてのけぞった。

ユフィロスレジアのしわざだろうか、しかし彼女の姿は見えない。はたから見れば、アイシスはひとりでのけぞっているようにしか思えないだろう。

「アイシス」

「……………！」

アイシスの肩がびくりと跳ねあがった。

若い男の声。

目を見開き、人影を見る。

いま、あの人はたしかにぼくの名前を呼んだ。でもどうして？

アイシスは目をこらす。

うしろへと引っぱる力に抵抗しながら、その人影をよく見ようとして。

目を細め、顔をしかめるアイシスがわずかに見たのは、薄ぼんやりとした闇に輝く銀の光だった。

すこし苛ついたようなユフィロスレジアの声が聞こえ、アイシスはついに抗いきれずによろめいた。

急かされるようにして道を引き返す。

そのときアイシスの耳に、こつこつ音がたしかに聞こえた。

「迎えにいくよ、必ず」

気づけば宿の一室にいた。

ラナとリグルの姿は見えない。

窓からさしこむ光は目に眩しくて、アイシスは慌てて飛び起きた。もう昼ではないか。すっかり遅刻である。

アイシスは戸惑いながらリフリジアへの道を走った。

ネロはきつと心配しているだろう、テオは呆れているかもしれない。

アイシスは朝方のことをぼんやりと思い出した。

たしか、ぼくは一番に起きだしたはずだ。

そして十分な余裕をもってリフリジアへ向かった。

なのに、そうだ、途中でユファイがぼくを宿へ連れ戻したんだ。なぜだったか、まるでわからない。

「ねえユファイ、どうしてぼくの邪魔をしたりしたのさ」

アイシスは不平をもらしたが、しかしユフィロスレジアの返事はなかった。

アイシスは息をきらして店に駆けこみ、驚いたようすのテオ親子に謝った。

「気にしないでいいよ」とテオは言った。

「もしかして怪我でもしたんじゃないかって、心配していたところだったんだ。なにもなくてよかったよ」

テオはアイシスを責めなかった。

それでよけいにアイシスは心苦しく思い、いつもよりもずっと張り切って仕事をこなした。

「ねえ、いったいどうしてなの」

一日を終え、宿に戻るなりアイシスはユフィロスレジアに呼びかけた。

彼女はまた返事をしないかと思っただが、やや間を置いてからこう言った。

覚えておらんのか。

その声はすこし戸惑っているようにも聞こえた。  
アイシスは首をひねる。

「どづいづこと？ なにかあったの」

.....。

「ユフィ？」

小さく空気が奮え、涼やかな音が鳴ったかと思うとユフィロスレ  
ジアが姿を現した。

光をまとって、彼女は今日も美しい。

しかしその表情はどこか憂えているようにも見えた。

アイシスの胸がざわつく。

「なにがあったの」

いつかこの日がくるとは思っていたが。

ユフィロスレジアは言いにくそうに言葉を詰まらせたが、アイシ  
スは辛抱強くその瞳をじっと見据えた。

彼女はしばらく迷っていたが、やがてふうとため息をつくときアイ  
シスに向き直った。

王よ。運命はついに、語りだしたのだ。

「運命が？」

そうだ。いまはまだわからぬかもしれないが、とにかく“あやつ”には気をつけよ。

「あやつ？」

今朝……といっても王は覚えておらぬのであったな、王の前に現れたやつのことだ。邪悪で、哀れな。

王はまだ、“あやつ”には敵わぬ。

アイシスは眉をしかめて首をふった。

彼女の言おうとしていることがまるでわからないのだ。

運命が語りだすとは、そして超越種をして恐れさせる“あやつ”とは。

闇遣いに聞くがいい。

「ネットレトに？」

ユフィロスレジアはひっそりと笑った。すこし疲れているようだ。

彼女はアイシスの問いに答えることなく消えてしまった。

それからはもう、アイシスがいくら呼びかけても答えてはくれなかった。

ユフィロスレジアの言葉は気になったが、はっきりした答えを聞けることもなく時間がすぎた。

アイシスはまるで知らないことだったが、精霊が使役者の命令もなしに動くということは、いわゆる規則違反なのだ。

ちょっとしたことにもかなりの力が必要になってくる。たとえばそれが、ひとりの少年を引っぱるというだけでも。

ユフィロスレジアはすこし疲れていた。

アイシスはもどかしかったが、おとなしく仕事を続けながらネットの帰りを待った。

それはなかなか充実した日々だった。

アイシスは客との会話を楽しんだ。

クッキーの焼き方も、少しずつだが覚え始めた。

いつかエザに会ったとき、彼がタルトを焼いてくれたらお返しにクッキーを作っただけよう。

そんな能天気なことを考えていたある日のことだった、リグルが包帯に血をにじませて帰ってきたのは。

「どづしたの、その傷っ」

声を裏返らせてアイシスが駆け寄る。



リグルは肩をすくめ、おどけてみせた。

「すこし転んだんだよ」

「そんなわけないじゃない」

アイシスは語気をあらげた。

リグルはすこし驚いたようだったが、すぐにいつもの陽気な顔に戻った。

手を打ちたたき、眉をあげる。

「怒るなよ。転んだってのは嘘だ、旦那に引つかかれたんだよ。マダムが俺にお熱だからさ」

リグルがからかっていることは明らかだ。

アイシスはため息をついた。

彼はいつだって真実を話そうとしない。

ここ数日、リグルは宿に戻らなかった。

彼が事前に言った説明を信じるならば、屋敷の娘が熱を出してしまい、その看病をするとのことだったが。

「どうして本当のことを言ってくれないの？ 純粹に、ただ心配しているだけなのに」

「こいつは俺たちを信頼しちゃいないんだ」

ラナが吐き棄てるように言った。

リグルは鋭い目で彼を睨む。

感情的な顔だった、まるで彼らしくもない。

しかし彼はなにも言わなかった。

ただ忌々しそくに舌を打ち、傷ついた体をベッドに沈ませた。

## 第四十七話：あやつ

### 『聖伝』第四十七話

ネトレトが帰ってきた。

彼の顔は晴れやかで、すべてがうまくいったらしいことはすぐに分かった。

「体の具合はどう」とアイシス。

「快調だ。動いてももう痛まないからね。背中of傷だけがどうも深かったが、ネロが癒してくれた。

それから、ふたりは大丈夫だ。快く許してくれたよ」

ネロはすこし渋ったがね。そう言ってネトレトは肩をすくめた。

「本当によかった。それで、兄弟水入らずの時間はどうだった」

「ああ」

ネトレトは目を細める。

「最後にはふたりとも笑顔を見せてくれた。それに、彼らはお守りを 幼いころに私が贈ったんだが  まだ持っていてくれたんだ。

驚いたよ」

そう言うネットレトは本当に嬉しそうだった。

彼は相変わらず笑わない人物だったが、一見冷めたようなその表情も、実はたくさん色にあふれているのだ。

しかし、とネットレトは言葉を続ける。

「なにがあつた。すこし刺々しいな」

彼の言うとおりだった。

リグルが傷を負って帰ってきた夜以来、三人はどこかぎくしゃくしていた。

というより、どうもリグルがおかしいのだ。

必要以上に黙し、なにか考えているようで、すこし近づきがたいようすさえ見せる。

顔をあわせれば始まるラナとの言い争いも、最近は鳴りをひそめていた。

「知らねえ。なんか、ひとりで機嫌悪くしていやがるんだ」

舌打ちまじりにラナが言う。

ラナにはリグルの態度がもどかしかった。

いっそ突っかかってきてくれたほうが、ラナにとっては気楽なの

に。

それより、アイシスが話あるって。そう言うとラナは音をたててソファに座った。

口を尖らせている。いい雰囲気ではない。

アイシスはすこし迷ったが、金色の瞳につながされて話を切り出した。

「えっと、うん。あのね、このあいだユフィとすこし話したんだけど、なんだか気になることを言っていたんだ」

「気になるとは？」

「まるで分からないんだけど、運命が語りだしたとか、まだ“あやつ”には敵わないだとか」

その言葉が終わらないうちに、ネットレトの顔がみるみる険しくなっていく。

彼がなにかの事情を知っているらしいことは確かだ。

今度はアイシスがネットレトをつながした。

「ユフィはネットレトに聞けって言っていたんだ。彼女の言葉の意味、わかるんだね」

ああ、とネットレトはうなずく。  
しほりだすような声だった。すこし掠れている。

三人の心は不安にちいさく波立った。  
ラナさえ不機嫌をおさめて彼の話を待っている。

「会ったのか」

「え？」

「ユフィロスレジアが言う“あやつ”という存在にだ」

ううん、と首をふるうとしてアイシスは思い出した。  
唐突に、雨が始まりの一滴を落とすようにして。

あの朝、張りつくような靄の向こうに、ぼくは人影を見たじゃないか。

朝日を受けて、彼の髪は銀色に輝いていた。あれが、“あやつ”。

「会った」

ネットレトの瞳が揺れる。

「それで」

「すこしだけ言葉をかわした」

「言葉を？　なんと」

「彼はぼくの名前を呼んで、それから　迎えにいくって」

「迎えに？」　ラナの鼻がぴくりと動いた。

「気味悪いな」

アイシスの体がぞわりと震えた。

思い出すだけで全身のうぶ毛が逆立つような、あの声が耳によみがえる。

それなのになぜ、どうして染みこむようにして懐かしいのだろうか。

「ねえ、ネットレトは知っているの。彼は何者なの？」

アイシスはさがりつくようにして答えを急ぐ。

運命が語りだした。

ユフィロスレジアの言葉を信じるならば、あの人影こそアイシスの旅の理由ではないだろうか。

アイシスの熱気におされ、ネットレトは静かに口を開いた。

「彼は　おそらくだが、“あの方”だ。アイシスはわかるね」

アイシスははっと息をのんだ。  
ラナとリグルは不仲も忘れて顔を見あわせ、首をひねる。

「あの方」というのは、黒の騎士団の教祖のような存在だ」

「じゃあ、そいつがティエラを燃やさせたり、アイシスの家族を…」

ネトレトは重々しくうなずく。  
「ただ、とラナが食い下がった。

「どうしてそんなやつがアイシスを狙うんだよ。アイシスは黒の騎士団となにも関係」

「あるんだ」

ネトレトの声は静かだった。  
「ラナはそれ以上言葉をつなぐことができず、ぼんやりと口を開いたままにいる。」

「うかがうようにして見たアイシスの顔は真っ青だった。」

「あるんだ」とネトレトはもう一度言う。

「アイシス。これから話すことはおそらくきみを傷つける。信じることができないかもしれない。しかし、これは事実なんだ。」



彼は、「あの方」は、きみなんだよ」

昔、と言ってネトレトは語り始めた。

昔、気が遠くなるほどずっと昔のことだ。

この世界、エルヴァニアにひとつの輝く命が生まれた。エルフの始祖、エレンディウスだ。

絶対神キグナディウスに愛された子、エレンディウスは聡明で、おそろしいほどに美しかった。

神は彼に続き、女エルフも創った。

ふたりの間にはたくさん命が生まれた、これが世界の始まりだ。

命が増えると世界は華やいだ。

しかし、同時に争いも起こるようになった。

エレンディウスには息子たちが争う理由がまるでわからなかった。

彼は生まれて何年もあいだ、幸せをしか知らなかったから。

始めて生まれた憎しみ、悲しみの感情に、彼は戸惑った。

身を焼くような苦々しい感情。

どうしても耐え切れなくなったエレンディウスは、ある日すべてを吐き出したんだ。自分の心に巢食う、負の感情すべてをね。

毒素を取り除いてしまったように、彼の心はまた晴れた。  
そしてまた、彼は“幸せ”な日々を送ったんだ。

「この話は知っているか」

「ああ」とラナ。

「授業で習ったよ。神話だと思っていただけ」

「まあ、そう思うだろう。きみたちはエルフも魔法も伝説のひとつと  
考えていたのだから」

それで、トリグルが口をはさむ。

「さっきの話と“あの方”とやらと、どう関係があるのさ」

ネットレトは小さくうなづく。

真正面からアイシスの目を見据えると、この話には続きがあるんだ、と言った。

「棄てられた負の感情は、やがて消えていくはずだった。欠けた心  
なんて、宿り木がなければ立派な魂としても生きられないからね。  
しかし、それは生きた。世界のあらゆる悲しみ、憎しみ、怒りた  
ちを取りこみ、日の光も射さない森で生き続けたんだ。」

時が経ち、やがてエレンディウスが永遠に眠ってしまったのちも、  
吐き出された感情だけが生きた。

そしてずっと探し続けた、自分の半身を。自分を棄てた、心の片  
割れを」

「ちょっと待てよ」

慌ててラナが口をはさむ。

アイシスはすっかり顔色を失っていて、支えていないと倒れてしまいきそうだった。

「話を聞いているとき、その片割れってというのがアイシスってふうに感じるんだけど」

「そのとおりだ」

「でもまさか」

否定しながら、しかしラナの言葉は弱々しかった。

「そんな大昔のこと。いくら種族が同じだからってアイシスには関係ないだろう」

「『輪廻転生』……そうということ?」

眉をしかめてリグルが言い、ラナの目は大きく見開かれる。

輪廻転生。ネロが言っていた言葉だ。

肉体という宿り木に、魂が入っては抜けていく。

それが本当なら、つまりアイシスは。

「そつだ。アイシス。きみはエルフの始祖、エレンディウスの魂を受け継ぐ者なんだ」

しばらくだれも口を利かなかつた。

あまりのことに、なにも言葉が浮かばないのだ。

そのときの空気は形容しがたい。

驚き、憧れ、そして恐れ。たくさんの感情が入り混じった目で、ラナはアイシスを見た。

青い目は見開かれ、震え、いまにも泣き出しそうだった。たまらなくなつて、ラナはアイシスの肩をつかんだ。

それに力づけられたのか、掠れた声でアイシスが言う。

「でも……とても信じられない、そんなこと。ぼくはそんな人物じゃないし……第一、そう断言する確証なんてどこにも」

ネトレトは目を伏せる。そう思つのも仕方ない、と。

次に目をあげたとき、ネトレトはまっすぐアイシスの髪を見つめた。わずかに癖のある、銀色の髪。

アイシスの喉が音をたてる。

「その髪だ」

「髪……」

「銀の髪をしたエルフ。私はエルフにまつわる文献を多く読んだが、この長い歴史で、それはただひとりしかいなかった。始祖エレンデイウス、彼だけだ。そしてアイシス、きみも」

「でもっ」

「なによりも、“あれ”がきみを迎えにいくと言ったことが証拠だ。魂は魂に惹かれる、否応なく」

アイシスはよろめいた。慌ててラナがその背を支える。ろくに肉のついていないアイシスの背は、薄い。

ラナは困惑しきっていたが、とにかくアイシスを休ませようと、彼をソファに座らせた。

アイシスは礼を返せないほどにうろたえていた。青の瞳が揺れている。

ネトレトの言葉を信じたくはなかった。

だって、そうだろう。

彼の言葉が真実だとしたら、アイシスは、自分の故郷を二度も滅ぼしたことになるのだ。

もちろん、アイシスが望んだことでなくても、“あれ”が元は自

分の一部であるとするれば、そう責められても仕方ない。

信じまいとする心の片隅で、しかしそうもあるうつという囁く声をアイシスは聞いた。

忘れたか、ユフィロスレジアをはじめて呼び出したとき、エルフの始めに銀の髪を見たではないか。

忘れたか、あの朝も靄の向こうで髪は銀色に光ったではないか。

忘れたか、幼いころ、父はこの銀髪をさらりと撫でて、優しくもどこか憂いをおびた笑顔を見せたではないか。

アイシスの目から涙がこぼれた。

一度流れると、それはもう止まらなかった。

「アイシス」

心配そうにしてラナがのぞきこむ。

ソファにうづくまるアイシスの正面に、視線をあわせるように屈みこむ。

しかしアイシスの顔は見えなかった。

小さな両手で顔を覆い、アイシスは震えている。

ラナはなにも言えず、親友の肩に手を置いた。

なんという、呪われた運命。

自分はまるで死に神ではないか。

負の感情で膨れあがった、かつては自分の一部だった“あれ”。再びひとつにならんと自分を求める彼は、そのためにたくさんの血を流したのだ。

アイシスは声をあげて泣き始めた。

最初は押し殺されてくぐもった声だったのが、しだいに大きくなっていく。

リグルは意味深い視線を投げかけ、その意味を悟ったネットレトはうなずき、静かに部屋を出た。

「本当なの」

宿を出、夜道をあてもなく歩きながらリグルが言う。

嘘など言う理由もない、とネットレトは答えた。

乾いた声でリグルが笑う。はは、そのとおりだね。

「それにしても驚きだね。あの嬢ちゃん、どれだけのものを背負っているっていうのさ」

「二千年にもわたる因縁だ、想像もつかない」

はあ、トリグルは大げさにため息をついた。

「なんとなくか、大変だね。こんなふうに言つと軽く聞こえるけどさ、本当に。」

アイシスといい、あんたといい、旅の一味は重圧を背負つたやつばかりだ」

きみもな、とネットレトが言う。

落ち着いていて、夜闇に心地よくなじむ声だった。

「なにがあつた。なにをそう恐れている」

リグルは目を丸くした。

いつもは細められている目を、これ以上ないほどくりくりと揺らして。

やがて気を取り直すと、腰に手を当てて大きく笑い声をあげた。

予想しなかつた反応に、ネットレトはすこし面喰らつてしまう。

「まいったね。色男も実は悟りじゃないの」

「まさか」

リグルは体を震わせて笑っている。

そのようすはどこか痛々しく、ネットレトは胸が苦しくなった。



彼はその笑顔の裏に、どれだけのものを抱えているのだろう。涙を隠して仏頂面でいるのと、涙を隠して笑顔でいるのとは、どれだけ疲れの大きさが違うのだろう。

「聞かないほうがよかったか」

「いや」

リグルはふと笑いやんだ。

口元に笑顔の余韻を残したまま、しっぽりとした声で言う。

「聞いてほしかったんだ、あんたに」

ネトレトは無言で先をうながす。

どこかで虫が鳴いているのが聞こえる。涼やかな声が、しばらくの沈黙を彩った。

ふう、とリグルは小さく息をつく。

「俺もあんたと同じなんだ。あいつらが、怖い。はは。剣の腕じゃ、まるで負ける気しないのにさ、どうしようもなく怖いんだ」

「わかるよ」

彼らが怖い。

アイシスもラナも、あまりに純粹だから。

彼らの笑顔を見てみると、閉じていた心がふと弛んでしまう。もうだれにも開かないと決めていた心が。

決意が揺らぐ、自分の存在すらも揺らぐ。

どうしようもなくそれは恐ろしい。

なのに、もっと近づきたいと思う。

もっとそばにいて、一緒に笑いあいたいと思う。

母親を手にかけてしまっただけから、だれも踏みこんでこないようにと線を引いた。

リグルは頭のいい人物であったから、自分を偽ることなど苦でもなかったし、うまくやることもできた。

彼はそんな気持ちもないのに笑ったり、怒ったりすることができ

る。しかし、アイシスたちの前ではどうも違うのだ。

心から笑いたくなる、心から怒りたくなる。

そう気づいたとき、リグルは知った。

彼らはその存在をして孤独の恐ろしさに気づかせるのだ。だから彼らが怖いのだ。

ひとりでいることがどれほど寂しく、辛いことが。仲間の存在はどれほど心強く、温かいが。

彼らと一緒にいると、それを切に感じてしまう。

自分の立っている場所が、どうしようもなく暗くて不安定に思えて、たまらなくなってしまう。

「どうしたらいいかわからねえんだ。俺はあいつらにまだ嘘をついている。半魔だつてこと、あいつらは知らないから。

これまでもずっと、たくさんのことを偽ってきた。そうやって平気な顔して人とつきあっても、なんの罪悪感も覚えなかった。

だけど、あいつらは違うんだ。俺はあいつらを騙していたくない」

リグルは両手で顔を覆った。

指のすきまから笑い声が漏れる。自嘲的な、ひっそりした声だった。

「すこし、言い争いをしたときがあつて。そのときさ、いがぐりに言われたんだ、こいつは俺たちを信頼していないって。

ぎくりとしたよ。嘘がばれそうで怖かった。もしもばれてしまったら、あいつらはどう思うんだろうって」

ふむ、とネトレトは小さく鼻を鳴らした。  
あごに手をやり、まじめな顔をしている。

かと思えば、やけに抜けた声でこう言った。

「なにも思わないんじゃないか」

「……………」

「なにも思わないと思う」

それから彼はこう言った。

怖いなら逃げろ、しかし逃げたくないなら戦え、と。

リグルは顔から手を離れた。口の右端がつりあがっている。  
いつもの顔だ、ネトレトの顔にも笑みが浮かんだ。

「分かつちやいるんだ。でも、背中を押してほしかった。ありがとう、  
もう大丈夫」

リグルは軽やかな足取りで一度くるりと回ってみせた。

ネトレトは大きくうなずき、空を見あげる。

いくつもの星が大小さまざまな光を放っていて、とても綺麗だ。  
澄んだ光が目にも染みる。

「だけど、いまは他に心配すべきことがあるね。嬢ちゃん、平気か

な  
」

ああ、とネットレトは言う。

薄くて小さなアイシスの背が、小刻みに震えているようすが思い出される。

しかし、彼にはラナがいる。ラナの武骨で大きな手が、アイシスの背中をしっかりと支えてくれる。

平気だ。

確信を持ち、ネットレトはうなずいた。

空気はしつとりと湿ってぬるくあったが、吹く風はなかなか冷たくて心地いい。

ふたりはしばらく夜道を散歩することにした。

エルフの王が、目を真っ赤に腫らしながら顔をあげてくれるまで。

## 第四十八話：魂の因縁

### 『聖伝』第四十八話

二時間ほど歩いただろうか。

ふたりはときどき言葉を交わし、しかしほとんどは黙したまま宿に戻った。

だがリゲルは満足だった。

心は落ち着き、先日までの苛々は雪が溶けるようにして消えてしまっていた。

音をたてないよう気を配りながらドアを開ける。  
灯りは最低限しかついておらず、部屋のなかは暗かった。

ラナはベッド際に座っていたが、ふたりが戻ってきたのに気づくと顔をあげた。

両頬にうつすらと白い筋が見える。彼はひどく感情移入しやすい性質なのだ。

「やっと眠ったよ」

囁くような声でラナが言う。

リグルはうなずき、ベッドで眠るアイシスをのぞきこんだ。

小さな肩がゆるやかに上下している。

アイシスの寝顔は穏やかだった。

もともと彼は、十六という年齢のわりにはおぼこに見えるが、眠っているときさらに幼く見えるではないか。

ときおり見せる、威厳に満ちた王の表情からは想像もつかないほどじつ。

ぼつてりと腫れたまぶたに、リグルはそつと触れてみる。

熱い。そうとう泣いたな、こいつ。

思わず笑みがこぼれる。

優しい笑みを口元にたたえたまま、よく耳をすませていなければ聞こえないほどの小さな声で、

「ごめんな」と言った。

蚊の鳴くような声であったが、部屋は静かだ、ラナの耳にはしっかりと聞こえた。

しかし彼はなにも言わなかった。口に出さずとも伝わることだけである。

「それにしてもおそろしいね、魂の因縁なんて。アイシスもたまったものじゃない」

相変わらずのひそひそ声で、リグル。ラナは神妙にうなずいた。

「運命は生まれながらに決まっているというけど、まさにそれだもんなあ」

そもそも、エルフというのは髪を大切にする種族だ。

長い髪にこそ精神が宿ると言われていて、実際、力あるものほど髪は美しく輝いているのだが。

しかし、アイシスは自分の髪を嫌っていた。

もちろん、エルフの記憶がなかったからといえればそれまでだが、アイシスはけっして髪を伸ばそうとはしなかったのだ。

彼は、心の奥底で気づいていたのかもしれない。

銀の髪の意味するところを、そしてそれが導く運命のことを。

「でもさ、じゃあ、いまのアイシスにはさ、負の感情っていうものがないの？」

リグルの問いかけに、ネトレトは首をひねる。

「さあ、どうだか。しかしもともと、心は切り離せるような代物ではないからな。どこかで“あれ”と繋がっていて、負を感じることもあるんじゃないか」

「ふうん。あんたはどうなの」



「私は」

ふう、とネットレトはため息をつき、目を伏せる。

「無理だ。闇に吞まれてしまったては、もう」

「そう」

リグルは大人しく引き下がったが、しかし納得はしていなかった。

あの森で、彼はたしかに泣いていた。

彼だって泣けるのだ。

力が暴発した際、吞まれてしまったというネットレトの心の一部分。どうにかして、それを取り戻すことはできないだろうか。

「はあ、頭変になりそう。アイシスっていったい、何者なんだよ」

冗談口調でラナが言い、短い髪をかきむしる。

実はエルフだって言われて、さらには王さまだって言われて、今度は始祖の生まれ変わりだって？

「でも」とリグルが言う。

「アイシスはアイシスだよ」

その声の響きになにか感じるところがあったのか、それともなんの考えもなしに言ったのか。

「リゲルもリゲルだって」

ラナが言い、リゲルは弾かれたばね人形のように彼を見た。

あまりに勢いよくふり向いたものだから、長い黒髪がむちのようになつてラナを打つ。

「痛っ」

不服そうな声があがったが、リゲルは謝ることもできなかつた。おおげさに顔を押しさえてみせるラナを、まじまじと見つめている。

実はラナ、ああ言ったのは単なる流れである。深い意味もなく、口をつくまま言っただけだ。

彼はやや思慮に欠ける人物であつたが、どうしてかこう、うまいぐあいに心を奮わせるときがある。

だれが気づいたろう、気を取り直し、またベッドに目を戻したりグルの顔が、いつもよりほんのすこし赤らんでいたことに。

暗い部屋はどこか心地いい。

翌朝、アイシスは一番に起きた。　　と思っただが、やはりというか、ネットレトはすでに起きていた。

彼は窓際に立ち、建ち並ぶ家々を眺めているようだった。

どこか荘厳な気配にアイシスが声をかけられずにいると、気配を感じたのだろうか、ふり返ったネットレトから挨拶を投げかけてきた。

「おはよう」

「おはよう」

いつもどおりの声が出た。アイシスは満足した。

ややもすればラナとリグルも起き出し（ラナはアイシスと同じベッドに寝ていた）、四人はそろって朝ごはんを食べた。

四人での食事は久しぶりである。

ラナはときどき心配そうなまなざしでアイシスを見たが、彼は特に変わったようすを見せなかった。

リグルの冗談に笑い、困ったように顔をしかめる。

ときどきラナの視線に気づくと、すこし照れたように口元をゆるめてみせた。

「昨日のことだけど」

食事を終えてしまうと、アイシスのほうから話を切り出した。

「取り乱してごめんね。まだちょっと信じたくはないけど、落ち着いたよ」

「そうか」

いい顔をしている、とネットレトは思う。

「それでその、“あの方” ううん、なんと呼んだらいいのかな」

「“あれ”、“あの”、とにかく彼に名前はない」

「そう。じゃあ……“あれ”がぼくを探していて、ひとつに戻りたがっているのは分かったけれど、仮にそうならどうなるの？ それ、むしろハッピーエンドじゃないの？」

ラナがぼんと手を打った。

「たしかに。負の感情っていったらすぐ悪いものに聞こえるけど、元はだれにだってあるんだ。一緒になっただって、なにも恐れることはねえんじゃない」

ふたりは顔を輝かせ、ネットレトをふり向く。

リグルも腕を組み、ちらりと片目を開けてようすをつかった。

しかし彼の表情は険しかった。

「残念だが、おそらくそうはいかないだろう。二千年ものあいだ、世界中の負の心を糧にして生きてきたんだ、“あれ”の力は強大だ。ひとつになれば、きっとアイシスの心が負ける」

というと。

リグルが絶妙な合いの手をいれ、先をうながす。

「つまり、わかりやすく陳腐な表現で言うと、乗っ取られるんだ。アイシスの体が」

ひゅつとアイシスが息をのむ気配がした。

小さな体を小さな手でかき抱く。

「すまない、怯えさせたかな。

しかし、ユフィロスレジアも言っていたろう。“いまはまだ”敵わない、と。いま対峙すれば、アイシスの心は食われる。それこそが“あれ”の目的だ、体を手に入れたいんだ」

ネットレトはこう説明した。

言ってみればあれこそ幽霊のようなものだから、動くにはなにかと不便なはずだ。

元はといえば、消えてしまっただけの当然の存在だったのだから。

「アイシスとひとつになれば、結果、超越種の力を手に入れることになる。強大な力だ。それを悪しき心が自由に使役するとなれば、どうだ」

「間違いなく、いまの生活は壊れるよね」

「ああ」

ネットレトの説明は、まるで学者が数式を解説しているかのようにわかりやすく、それでいて現実味がなかった。

つまりはこうだ、アイシスの体が“あれ”に奪われてしまえば、世界は崩壊する、と。

世界だなんて。

アイシスは気が遠くなる思いがした。

つい半年ほど前まで、アイシスはなにも知らない少年だった。気弱で、泣き虫で。

自分の正体など知らなかったし、もちろん運命の存在にも気づいていなかった。

それがどうだ、いまや自分の肩には世界の存亡がかかっていると。いう。

眩暈のひとつやふたつもあるつというものだ。

ラナは難しい顔をして腕を組んでいたが、なにを思ったか、手をあげると店員を呼び止めていくつかの料理を注文した。  
どれも甘いものばかりである。

「どづしたの？」

「うん」ラナは真面目な顔だ。

「とりあえず、食っとけ」

結局、なかば強引なラナのすすめで、アイシスは果物の甘煮やら盛り合わせやらをたらふく食べることとなった。

彼は父親の教えを守ったのだ。

戦うにはまず腹を満たせ、というのはハロルドの言葉である。

口のなか甘ったるいにおいでいっぱいになり、アイシスは目を白黒させた。

ネトレトは眉をしかめてそのようすを見ている。彼は辛党だ。

「まだ口がじゃりじゃりする」

大通りを歩きながら、アイシスは顔をしかめた。  
砂糖が口のおちこちに残っているらしい。

対するラナは、どこか満足げであった。  
彼はどこまでも単純なのだ。

四人は市場を歩いた。

おそろしく広く、そして長く続く店の列。

マーニヤの街も大したものであったが、トゥーディールはその比でなかった。

彼らはまずコートを売った。

これからだんだん暑くなってくるのだ、荷物にこそなれ、役にたちはすまい。

それから食料を買い、剣を研ぎに出した。

「そつえば」とリグル。

「昔語りをしてくれたときに言っていたよね、赤い石の装飾がついた、素朴な剣って。あんた、ずっと同じ剣使ってるの」

「まさか」

ネットレトは肩をすくめる。あれはとうに折れてしまっているよ、と。

「これで四本目が、五本目が。だが、気がつけばいつも似たものを買っているんだ。おぞましい、思い出したくもないはずなのに、どうも手に馴染むから」

そつ言つネットレトの顔は自嘲気味に歪んだが、彼は気づいていないのだろうか。



殺し、奪っただけだった彼の剣が、いつからか守るために振るわれていることに。

買い物が終わると四人は別行動にうつった。  
ネトレトは図書館へ、それにアイシスもついていく。

リグルは迷ったようだったが、観光するよ、と言って背を向けた。

「おい」

その背にラナが呼びかける。

「待てよ。俺、図書館って苦手なんだ」

リグルは一瞬足を止めたが、鼻を鳴らすとまた歩き始めてしまった。

聞こえなかったのかともう一度呼びかけながら、雑踏へとまぎれていくリグルの姿をラナが追う。

残されたふたりは思わず顔を見合わせた。

「なんやかんやで、仲いいよね」

「まったくだ」

ラナは背が高い。

人ごみから頭半分飛び出た彼の茶髪が、ひよこひよここと跳ねていくのが見えた。

予想はしていたが、図書館もそれは見事なものだった。

これでもかと並べられ、棚に押しこめられた本を見て、アイシスは呆気にとられる。

ラナはこなくてよかったな、これを見たらきつと卒倒しちゃう。

アイシスはくすりと笑い、目的の本を探しにかかった。

エルフの歴史を調べてみる気になったのだ。

“あれ”のことは怖かったが、なにも知らずにいるほうがもっと怖い。

伝承の本をいくつか読んでみたが、ネットレトが話してくれたとおりだった。

アイシスはエルフとしての知識があまりにも浅かった。

仕方もない、わずか七歳でエルフの世界と引き離されたのだから。

そんな彼にとって、先祖らの歩みの物語は面白く、興味深かった。

驚いたことに、父ルキアの代のことを詳しく書いた本もあった。

アイシスがついぞ見ることでできなかった、王としての父親の姿

がそこにある。

彼は偉大な王であった。

アイシスはうっかり涙ぐんだ。

本の最後はファニマの悲劇で締めくくられていた。

ふたりの王子を守るため、ルキア王は命を散らせた。

しかし、彼が身を賭して守ろうとした王子も、追っ手に攻めたてられて幼い命を奪われたのだと。

アイシスは首をふった。

それは間違いだ、だって、エザもぼくも生きているから。

不思議な気分だった。どうやらアイシスは、一部にはすでに亡き者として知られているらしい。

生きているのに死んだとされている、まったくおかしい気分だった。

彼はどういう思いで自分の生死を偽ったのだろう　赤いマントがかびくさい、仏頂面の天才は。

ネトレトが帰ってきた夕方、アイシスはテオとネロとに別れを告げた。

仲間が合流すれば、きつと街を出ることになると思う。

アイシスはもとよりそう説明していたので、突然の申し出にもテオは驚かなかった。しかしふたりともずいぶんと寂しかった。

「そうすぐに出発もしないでしょう？　ねえ、今度またリフリジアにおいでよ。ぼくがコーヒーを淹れるから、一緒にクッキーを食べよう。友達もみんな連れておいでよ」

そう言っつてネロはアイシスの手をとった。

その弾みでそばのかごを引っくり返し、中身のクッキーをぶちまけてしまったことは、まあ大したことでない。

リゲルはああ言っつたが、果たして彼らと天才魔術師の関係はどういうものなのか。

すこし気になったアイシスは、天才魔術師に関する文献を探してみた。

答えはすぐに見つかった。

彼に関する本は数多く残されていて、そのどれもに彼を支える家族の美しい愛情が記されていたのだ。

変人と陰口をたたかれることもあったネロを優しく見守ったのは、父親のガツポと、彼の弟テオであったと。

アイシスは思わず本を閉じた。胸が熱い。

テオは、あのそばかすだらけの優しい男は、夭折した（ことになっている）兄の名前を、我が子につけたというわけだ。

輝かしい名を受け継いだ若きネロは、どうしようもないほどにお

「ちょっとよいだったけれど。」

アイシスは伸びをした。

長く本を読んでいたので背中が痛い。

「昼食でもとるか」

ネットレトはすこし離れた場所で本を読んでいたが、アイシスが疲れはじめたのを見て声をかけた。

絶妙の間合いである。

アイシスは喜んで彼に従った。

図書館を出てすこし歩き、ふたりは適当なカフェを探した。

いいにおいをさせる店はいくつもあったが、アイシスはいいいことを思いついた。

「リフリジアにいかない？」

聞きなれない単語にネットレトは首をかしげる。

「ハーデースさんがお勧めしてくれた店だよ」

「そうか。しかし、クッキーの店だと言っていないかったか」

「うん、とてもおいしいんだ。ぼく、しばらく手伝いをさせてもら

っ  
ていて」

昼ごはんはクッキーというのは、とネットレトは内心思ったが、アイシスの笑顔はあまりに邪気がない。

わかった、とつい答えてしまう自分に、ネットレトはこっそり苦笑いするのだった。

まったく、穏やかでいて抗いがたい、と。

「うわあ、アイシス！ いらっしやい」

ふたりがドアを開けると、カウンターの向こうでネロが飛び跳ねた。

そばかすだらけの顔が喜びに染まる。

アイシスは彼がまたなにかをぶちまけるのではとひやひやしたが、幸いなにも起こらなかった。

「今日はお客としてきたんだ、お昼ごはんを食べに。」

こちらはネットレト、一緒に旅をしているんだよ。ネットレト、彼はネロ。彼の紹介でぼくはここにきたんだ」

「はじめまして」

まぶしい笑顔にすこし気圧されながら、ネットレトは差し出された手を握る。

ネロだった？ 彼の冴える頭はすばらしい速さで回転した。

そしてすぐに正しい答えを導き出した、彼は天才魔術師の甥っ子に違いない。

そもそも、リフリジアという店からなにか引っかけたのだ。記憶をたどってみれば、文献にはあのネロの生家だとあったよう  
な。

だとすれば、店の向かいにはもう一軒のリフリジアがあるはずだ。

奇しくも同じ名前を掲げるその酒場には、天才魔術師が唯一愛した女性がいる。

「どづしたの？」

考えにふけていたネットレトは、アイシスの声で我に返った。

目の前には焼きたてのトーストとオムレツが置かれている。

ネットレトはほっと息をついた。まさかクッキーが出てきたらどうしようと思っていたから。

「いや、すこし考え事を」

「ネットレトって、一度考え出したらのめりこむよね。すごく、難しい顔しているの」

アイシスはそう言って笑った。

そうだろうか。

ネットレトは困ったようにすこし笑った。

クッキーの甘ったるい香りに誘われたのかもしれない、それはいつもよりずっと柔らかかな笑顔だった。



## 第四十九話：ばかばっか

### 『聖伝』 第四十九話

食後に出されたクッキーはとてもおいしかった。

礼を言っけてリフリジアを出る。ネロはわざわざ店の外にまで出て彼らを見送った。

アイシスも大きく手をふり返す。

「ようやく気がすんで背を向けると、ひとりごとのようにアイシスは信じられないなあ」と言った。

「そうだな」

なにげないネットレトの返事に、アイシスは目を丸くする。

「え、どういう意味かわかったの」

「彼とその叔父が、あまりに似ていないからだろう」

「まいったなあ、とアイシスは言う。名前だけでそこまでわかったやうなんて。」

「ネロのお父さん、つまりネロの弟だけど ああ、もう。ややこしいな。とにかく、テオさんっていうんだけどね、これもやっぱり似ていないの、笑っちゃうくらいに。」

「テオさんはとっても人当たりがよくて明るいんだよ」

「兄弟であれほど似ないこともあるんだな。きみたちはよく似ていたが」

「そう？」アイシスは笑って、「ネットレトたちもね」

今度はネットレトが目を丸くする番だった。

アイシスはにやりと笑う。すこし、リグルっぽい。

「この辺とか」

そう言ってアイシスが指差したのは（ちょっと背伸びしたのは内緒だ）、眉間のあたり。

アイシスの指のさきで、寄せられたネットレトの眉はしわを作っていた。

ネットレトは思わず顔を崩す。

「すべてがうまくいったら、みんなに会いにいこうね。ソウマくとリリイさん、それからエザにも」

「ああ」

「ぼくは決めたよ。運命と、“あれ”と戦う」

「……ああ」

アイシスはにっこりと笑った。

はっとさせられるほどに翳りのない笑顔だ。

「魂は惹かれあつんだよね。だつたらぼくは、いつか必ず“あれ”と向き合わなければならぬ。逃げられない、運命からは。だから戦う、強くなるよ。ぼくは負けない、邪な心に支配なんてされてたまるものか」

心強いな、とネットレトは言った。本心からだ。

アイシスの成長には目を見張るものがある。

ユフィロスレジアも、呼び出すたびに美しさを増しつつある。

ネットレトは思った、きっと彼を守ってみせよう。

“あれ”と対峙しうるだけの力を身につけるまで、必ず。

そのためには闇遣いの力をどれだけ使ってもかまわない。

呪われた右腕であろうが、その気にさえなれば、きっと大切なものを守ることができるはず。

実は、ネトレトは“あれ”に会ったことがある。

彼が愚かにも黒の騎士団の一員として働いていたときのことだ。

そのときに彼は“あれ”の秘める野望を、銀髪の幼きエルフ王のことを知った。

そのときからふたりの超越者の運命は重なり、交わりあっていたのだ。

「『恐れてもいい、しかし迷うな』。ネトレトはこう言ったよね」

ネトレトはうなづく。

剣比べの準決勝で、戸惑いに体をすっかり固くさせていたアイシスに教えた助言だ。

「よしっ、俄然やる気ができちゃう。戦いは敵を知ることから。」

しばらく図書館に入浸りかなあ」

「エルフの伝承を読んでいるのか」

「うん。ぼく、知らないことだらけだから、ちょっと驚いたよ。ほかのことが書かれた本もあるんだ、不思議な気持ち」

そうか、とネトレト。

アイシスの顔は晴れ晴れとしている。  
漠然としていた旅の理由が、ようやく形となって現れたのだ。

待ち構えるものはあまりに強大であったが、しかしアイシスは若い。  
い。

若さは無謀にもつながるが、ときに恐るべき力を発揮もするのだ。  
それに、彼はもう“もやしっこアイシス”ではない。

アイシスはふと顔をあげた。

大通りはたくさんの人であふれ返っている。

いまごろあのふたりはどうしているだろう。  
仲良くやっているだろうか。

「おい」

ラナの声はすっかり不機嫌だ。

「おい」

しかしリグルは動じない。

膝を軽くおりまげて、鼻歌さえ歌いながらなにやら吟味している。そんな体勢で辛くないのだろうか。

「おいってば。いつまでそうしているんだよ」

「おいおいおいうるせえなあ。おまえはおいおいお化けか」

「なんだよそれっ」

リグルはにやにやと笑いながらふり返った。輝く短剣を手にしている。

どうやら彼は趣味の短剣集めにいそしんでいたらしい。

今回もいい品を見つけたようで、彼は上機嫌だった。

「いいのかよ、無駄遣いして」

「無駄？ ばか言わないでくれる。これのどこが無駄なのさ」

会計をすませ、大通りを歩くリグルの足取りは軽やかだ。

そつと鞘を抜き、刀身に太陽の光を映してみる。一点のくもりもない刃が白く光る。

こうなると、どうしてもやりたくなるいたずらがあった。

リグルは刀身を傾けると、うまい具合に反射光をラナの目元に当てた。

「うわっ。なにしやがる、眩しいってー！」

「げっ、危ねえよ、ばか」

ラナは目をつぶり、あろうことか短剣に手を伸ばしてきたのだ。

抜き身の刃である、触れれば皮膚は簡単に破れてしまうだろう。

彼の行動に慌て、リグルは短剣を鞘に戻した。

「本当にばかだね。怪我したいわけ」

「そんなわけあるか。おまえが避けてくれるのわかっていたからだ  
よ」

「……………」

ラナの言葉はときどき、どうしようもないくらいにまっすぐ胸に響く。

そのたびにリグルは困るのだ、もちろん、顔にはひとかけらだつて出しゃしないけれど。

「怪我をしたがっているのは、むしろおまえだろう。あの日、おまえ本当はなにしていたんだ」

あの日。

説明されるまでもない、リグルが傷を負って帰ってきた日のこと

だ。

リグルはすこし言いよどんだが、やがて口を開いた。

真実を聞けば、ラナは怒るだろう。

しかしもう嘘はつきたくなかった。

逃げたくない、だから戦うのだ、自身が築いてきた心の壁と。

「魔物を、倒しに」

「……なんでまた、そんな危険なことを」

「通っていた屋敷に、たまたま身を寄せている旅人がいて。そいつに持ちかけられたんだ、魔物討伐を手伝わないかって。金が必要だったし、ちようどいいいかなって」

「そういうことじゃねえ。なんでそんな危険なことを、黙ってひとりでやったんだって言っているんだ」

ラナの声は怒りに震えていた。

それがリグルには 嬉しかった。

彼がどれだけ自分を心配してくれているか、それがひしと感じられたから。

ごめん、それとも、ありがとう。



なんと言えはいいのか、リグルは迷った。  
しかし彼の口から出てきた言葉は、そのどちらでもなかった。

「ばか。おまえがついてきたところで、なんの役にもたつかよ」  
げっ、と声をあげてラナが憤慨する。

リグルは笑った。  
晴れた声だ、いじわるな響きがまるでない。

やっぱりこうでなくちゃ。

喚くラナをよそに、リグルは笑いながら大通りを歩いた。

それから、タワーディールには八日ほど滞在した。

アイシスとネットレトのふたりはそのほとんどを図書館ですごし、  
おそろしいとラナは顔をしかめたものだ。

ラナとリグルはといえば、いつものように下らない言い合いをし  
ながら街を観光して回った。

タワーディールにはたくさんのものがあった。  
珍しい品を取り扱う店や、軒先に並ぶ見たこともない食べ物、闘  
技場や賭博場なんかもあった。

その中でもラナの興味をかつさらったのは、首都が誇る一番の名所、ユリシア城だ。

王が住まう王城は壮大で、きらびやかで、美しい彫刻がほどこされた大理石の柱を見てみると、その影から女神でも出てきやしないかとすら思ってしまう。

そう素直に口に出すと、リグルにいやというほどからかわれてしまったが。

「そのなりでロマンチストかよ」

そうしてすぐに時間がすぎた。

いよいよ明日は街を発とうかという夜、食事を終えたリグルは、神妙な顔つきでこう切り出した。

「言わなきゃならないことがあるんだけど」

その言葉に、アイシスとラナのふたりは身構える。

いったいなにがあったというのか。

リグルはひとつ息を吐き、目を閉じた。

心のなかで小さくつぶやく　戦え。

「ずっと黙っていたけど、俺、半魔なんだ。と言っても、きつと意

味がわからないだろうね」

首をひねったふたりを見、リグルは慌ててつけ加える。

「手っ取り早く言っちゃうとね、俺の親父は人間じゃねえの。魔族なの。」

魔族って、わかる。魔物と同系列なんだけど、あんな獣じみた行動はしない、もっと理知的な存在なのね。姿も人間とは変わらない、決定的に違うのは耳の形と、瞳の色だけ」

説明するリグルの口調は穏やかだった。

その顔はどこか晴れやかですらあった。

アイシスとラナのふたりは、一言も口をはさむことなく彼の語り  
に耳を傾けている。

息をすることさえ遠慮しているようだ。

「驚いた？ 驚くよね、そりゃ。人間じゃないんだもの、ましてや魔族との混血だぜ。」

魔族っていや残忍非道と思われがちだが、みんながみんなそうじゃないことを俺は知ってる。でも、世間の認識は違うからね。俺の片親は魔族だ、なんておいそれと言えたものじゃない。

タリファにいたときも、俺はずっとこのことを隠し続けてきたよ。ファサじいにも言えやしなかった。

あんたたちにも打ち明ける気なんてさらさらなかったんだ、最初はね。旅に同行したのだから、ほんの暇つぶし程度のもりだった

し、途中で居心地のいい街を見つけたら、そこではいさよならといこうって考えていたから。

でも」

リグルはふと笑みを漏らした。

なんと優しい笑顔だろう。

アイシスの染みとおる澄んだ笑顔とも、ラナの引きこむ豪快な笑いとも、ネトレトの惹きつけるひっそりした笑みとも違う。

包みこむような、柔らかかで、温かい　女としての笑顔だった。

「あんたたち、わがままで図々しいんだよ。勝手に人の心にずけずけ入りこんできてさ。かなり迷惑、押しかけもいいところだよ。おかげで俺、気づいたらこんなどこまで一緒にきちちゃっててさ、笑えるよね。」

本当に、あんたたちといったら疲れるんだ。ばかだし、のろまだし、すぐ泣くし。

なのになんで、こつも楽しいのかな」

ラナの胸がきゅつと狭くなる。

リグルはいままで、いじわるな笑顔の下でなにを考えていたのだろう。

自分の出生にまつわる問題のせいで、心から他人と打ち解けることができなかったりグル。

彼が投げかけてくるいじわるな言葉は、実は仲良くしたいという彼なりの呼びかけだったのでないか。

「嘘をついているの、ばからしくなってきた。でもいまさら打ち明けるのも怖かった。やっぱり、魔族っていうのは忌み嫌われる存在だから」

「ばかじゃねえ」

不機嫌を丸出しにした声で、ラナ。

アイシスははっと息をのんで彼を見る。

リグルも彼にしては珍しく、不安を目に宿してラナをうかがった。

「おまえ、ばかだろう。いつも俺のことをばかばか言っけど、そのくせなにも分かってないねえ。」

俺たちはな、筋金入りのばかなんだよ（「ぼくもなの？」とアイシスが言う）。魔族がどうかそんなこと、考えられるほど頭よくないんだ。

俺たちがわかるのは、おまえがおまえだっただけだよ。それ

で十分だろうが」

「あ、うん、十分だ」

ラナに小突かれ、アイシスも同調する。ネットレトは優しい顔をしている。

リゲルは呆気にとられてしまった。

口がなかば開いている。

本当に、なんと疲れることが。

彼らの言うことだったらいつも突拍子もない、まるで予想のつかないものばかりだから。

弾けるようにふき出し、一度そうなってしまうと笑いが止まらなかつた。

「なに、それ。筋金入りのばかりで。本当にばか、こんなばか初めて見たよ」

「でも俺からしたらおまえもばかだつて」

「それはないでしょ。ねえ、色男」

「いや」とネットレトは肩をすくめて

「どちらもいい具合にはかだと思つ」

「ラナは大きく口を開けて笑った。

「じゃあ、あんたも？」

「ああ、私も」

ネットトは困ったように笑う。

「これはいい、とリグルは言った。

「旅の一行はばかばかり、か。まったく最低だよ。でも、最高にいかれているよね。」

リグルはすべてを打ち明けた。

「半魔のこと、血の争いのこと、不本意に奪ってしまった大切な命のこと。」

「俺ね、本当は魔族になってしまいたかったんだ。魔は魔を呼ぶからね、親父たちと一緒にいれば、きっと血の争いは魔族側の勝ちでことで穏便に終わっていたと思うんだよ。」

「だから、おふくろが俺を旅に連れ出そうとしてくれたとき、ものすごく反抗したんだ。親父と一緒にいるって、魔族として生きるって。」

「でも、親父はそれを許さなかった。どうしてかわかる？」

リグルは胸元に手を置いた。

ひっそりと、自嘲気味な笑みをもらす。

「俺が女だからだよ。女だから、力が弱いから、俺は親父に見捨てられた。いや、この言い方は悲観的かな。」

親父は俺を助けたかったんだと思う。

なかなか力のある人だったし、それに人間にもわりと友好的だったから、魔族のうちではけっこう憎まれていてさ。命を狙われることも頻繁にあったんだ。

その争いに巻きこみたくなかったんだね、きつと。

でも、当時はそうも思えなかった。役にたたないから、女だから捨てられたんだって、そう思ってたさ。

だから男になりたかった、どうしても」

きつく巻かれた布に押さえられ、まるで女性らしさを感じさせない胸元。

しかしリグルは、悲しいほどに女であった。

いくらそれを認めようとしなくても、鈍い痛みは毎月腹をおそうし、どれほど鍛えても男のように広い肩を手に入れることはできないのだ。

彼が性別を偽った理由も、いたずらに力を求める理由も、いまやすべてが明らかになった。

リグルの紫色の瞳に、突き放すような冷たさはもうない。



「俺は男になった。でも、どうしようもなく女でもある。どっちつかずの、中途半端な。」

「ただどね、あんたたちが気づかせてくれたんだ。それよりもなによりも、俺は俺。そうだろ？」

「ああ！」

「ラナは日に灼けた顔を崩し、力強く拳を突き出した。アイシスもそれに合わせる。」

「ネットレトも、と急かされて、慌てて彼も拳をそろえた。」

「リグルはにやりと笑う。」

「いたずら好きの、いじめっ子の顔だ。」

「やはりリグルにはその顔が一番似合う、とアイシスは思う。」

「彼は固めた拳にわざとらしく息を吐きかけると、勢いをこめて三人の拳に突き合わせた。」

「痛い、とアイシスが声をあげる。」

「しかし悲鳴はすぐ笑い声に変わった。」

「これでいい、これがいいのだ。」

不必要になつた防寒具を売り払い、いくらか身軽になつた一行は、ついにトウーデールを発つことにした。

最後に挨拶をしなければと言つて、リグルはしばらく奉公していた屋敷へと向かった。

彼にも意外に律儀な面があるものだ。

帰つてきた彼は、なんと両手にいっぱいお土産を持っているではないか。

品のいい服だったり、高そうな菓子折りだったり、おまけに手紙までついていた。

「マダムからだねえ」

リグルは目を細める。したり顔とはこのことだろう。

「おまえは本当にマダムが好きだな」と呆れ口調でラナが言つ。

頭が悪いな、とリグルは首をふつた。

「まるで違うね。俺が好きなんじゃない、マダムが俺を好きなんだよ」

「言ってる」

最後に四人はリフリジアに寄つた。

アイシスは買うと言い張ったが、テオは譲らず、たくさんのクッキーを旅人たちに贈った。

優しい顔をして、意外に頑固なところもあるものだ。

彼は代金を一銭たりとも受け取らなかった。

「旅の安全を祈って、ぼくたちからのお守り代わりだ」

あの兄にしてこの弟か、とネットレトは感心さえしてしまう。

丁寧にお礼を言い、四人は次の出会いを求めて旅の道へと戻った。

どこへいきたい、とネットレトはアイシスに問うた。

「ぼくが決めるの？」

「きみの心に従うのが一番だと思う。もはや運命の語り手はきみなのだから。それに、図書館はどの街にもあるしね」

うつん、と唸ってアイシスは首をひねる。

心に従って、か。ならば深く考える必要もないだろう。

「海を見たいな」

「海か」

アイシスはうなずく。彼は海を見たことがない。  
いいね、トリグルが言った。

ずいぶんと生ぬるくなった風が吹いている。  
冷たい水は、肌につきつと心地いいことだろう。

## 第五十話：新たな犠牲

### 『聖伝』 第五十話

一行は北東へと進んだ。

まるで夏に追いかけられるかのようにして、北の町へと移っていく。  
そうして時々、街に停泊しては旅費を稼いだ。

ノトの村以来、黒の騎士団はまるで姿を見せない。  
逆に不気味ですらあった。

「黒の騎士団の本拠地はユリシアにある」

ある夜、ネットレトはそう言った。

「私がああに集団に属していたとき、“あれ”は陽炎のように儚い姿をしていたんだ。動けるようすではなく、力もあまりないように思えた。

だから、戦うならば早いうちにと考えてユリシアにきたが……アイシスは“あれ”が、人の形をしていたと言ったね」

「うん。霧がかかっているのはっきりとは見えなかったけれど、たしかにそうだった」

まずいな、とネットレトは言う。

おそらく“あれ”は、彼が知るときよりもずっと自由に動けるま  
でになったのだろう。

もしかすると、魂の元ともいうべきアイシスが成長するにつれ、  
“あれ”もまた力をつけているのかもしれない。

「一度、できるかぎり“あれ”から離れたほうがいいかもしれない。  
私たちにはまだ、正面から戦うだけの力がないだろうからね」

「じゃあ、どうする」

地図を覗きこんで、リグル。

「いま、俺たちは嬢ちゃんの提案で海に向かっていているけど」

「なあおい、いっそ渡ってしまおうぜ、海」

ラナが身を乗り出した。

おかげで押しやられてしまったリグルが不平の声をあげる。

エルヴァニアはふたつの大きな大陸からなる。

東西に分断されたふたつの島を、その形から、西を『笑う大陸』、

東を『宿す大陸』と呼ぶこともあるのだが、いま、アイシスたちは西の笑う大陸にいる。

宿す大陸のことは学校で習いこそすれ、まさかその地に足を踏み入れようなどは、ラナは夢にも思ったことがなかった。彼は海すら見たことがないのだ。

「いま、私たちがいるのはここで　海を渡るならここ、カリスト口港にいかねければならない。商業の国、シリスの首都だね」

ネトレトはいちいち地図を指さしながら説明してくれた。

エルヴァニアには六つの国がある。

アイシスたちにとっては未開の地でいっぱいだ。

冒険心に胸がときめくのを、アイシスは抑えられずにいた。

「渡ろうぜ、海。面白そう！」

ラナもどうやら同じ気持ちのようだ。

地図を見ながらはしゃいでいる。

リグルは呆れた声を出した。

「ばか。旅行じゃないんだよ、面白そうだからって理由で決めていいわけないでしょ」

「おまえはわくわくしねえの？　あのなあ、わくわくって気持ちはすごいんだぜ、食い気さえしのぐんだ。」

それに、わくわくの先には絶対なにかあるんだよ。なあ、アイシス」

あはは、とアイシスは笑う。

食い気が基準とは、と思ってしまうが、実にラナらしい言い分だ。

確かに、わくわくという気持ちはすばらしい。

つまらない毎日も、その感情がすこし生まれるだけで、どれほど楽しいものになるだろうか。

「うん。ぼくもいきたいな、東の大陸」

げえ、とリグルが声をあげる。

反対しているわけではなく、単にラナの思い通りになったことが気に食わないのだ。

まったくひねくれ者である。

それはともかく、一行の当面の目的地はカリストロに決まった。

リグルはきちんと場をわきまえる人物なのだ。

はっきりとした目的地があると、妙に心強い。

四人の足は速まった。

太陽はさんさんと輝き、アイシスの機嫌はすこぶるよろしい。



燃えてしまった彼のふたつの故郷は、どちらも暖かい気候の土地だった。

寒空に舞う雪も幻想的だが、やはりアイシスは眩しい日差しが好きなようだ。

しかし、ひとつ彼には心苦しく思うことがあった。ユフィロスレジアのことだ。

“あれ”に出会った朝、彼女はアイシスを助けようと、ありったけの力を使ってまで彼を引き戻してくれた。しかしアイシスはそうとも知らず、彼女を責めてしまったのだ。

よほど疲れているのか、それともへそを曲げているのか、彼女は夢にもなかなか現れてくれなかった。

しかし、ある夜のことだ。

眠りについたアイシスの前に、ようやくユフィロスレジアが降りた。

アイシスは顔をほころばせる。

「ユフィ、よかった。会いたかったよ」

すまなかつたな。

「ううん。謝るのはぼくのほうだ、ユフィはぼくを助けてくれようとしたのに。本当にごめんね」

構わぬ。

素直なアイシスの言葉に照れたのだろうか。

ユフィロスレジアはくすぐったそうに身をよじらせると、すうと舞ってアイシスの頬に顔を寄せた。とたん、アイシスの顔が赤くなる。

どつやらこれは、精霊が見せる忠誠の印のようなのだが、どうも慣れてくれそうにない。

それよりも、王よ。ついに魂の源を知ったな。

「うん。まるで信じられそうにもないけどね、ぼくの前世が始祖だったなんて」

しかし、王はよく似ておられる、若き日のエレンディウスに。

「ユフィはそのころからエルフ王と生きてきたんだね」

ユフィロスレジアはにつこりほほ笑んでうなずいた。

しかし、その顔がさつと曇る。

“あやつ”が生まれたのは我のせいだ。争いに心を痛めるエレンディウスを、我はよく叱り、支えてやれなかった。

「そんな！ それは違う、絶対に違うよ。だれのせいでもない、だれも悪くない。ただ、すこし弱かっただけなんだ。痛みに向き合う勇気がなかっただけなんだ」

ユフィロスレジアは黒い瞳を揺らせた。アイシスの力強い言葉に驚いたようである。

彼の寝顔はふたりが初めて会った朝、彼が十六になったあの朝と、まるで変わらないように見えるのに。

ずっと昔、あるエルフ王の后が言っていたことを思い出す。子どもというのは、目を離れたすきにぐつと大きくなるものだ、と。

戦うことに、迷いはないようだな。

「うん。……って格好つけたところで、本当はすごく怖いけどね。でも、逃げ出さないだけの勇気は手に入れたもの」

よいことだ。

「ユフィ」

うむ。

「不届き者ですが、これからもよろしくお願いします」

光を撒き散らしながら、麗しの精霊はころころと笑った。

ある日のことだ。

太陽がすっかり沈んでしまつまで歩き続けた四人のもとに、珍しい来訪者が現れた。

リヒイニヒイだ。

「順調に進んでいるようだな」

リヒイニヒイはわずかに見える口元を歪ませた。

彼はその日もすっぱり被り物で頭を包んでしまっていたが、どうしてだろう、それも服もみな黒一色で決めている。

黒。あまり気のいい色ではない。

「まるで葬式だな」

そう言うラナの声には苦々しい響きがあった。

リヒイニヒイは手を打った。

我が意をえたり、というようすだ。

「そう、葬式さ。今日は訃報を知らせにきたのだ」

「訃報……!!」

四人の顔に、さつと動揺の色がはしった。

リヒィ≡ミヒィは満足げに笑う。彼らの反応を楽しんでいるのだ。

アイシスの胸はざわざした。足が震えるのを感じる。

「なに、俺たちを戸惑わせてからかうつもり」

リグルが気丈に言い返したが、しかしリヒィ≡ミヒィは乾いた声をあげて笑った。彼の強がりに気づいている。

リヒィ≡ミヒィはしばらく胸元をまさぐっていたが、やがてなにかを放つてよこした。

ラナが片手で掴んだそれは、彼の手の中で青色に光った。見覚えのある、蠱惑的な光。

そうと気づいたとき、ラナは悲鳴にも似た声をあげた。

「これ……人魚の!!」

「し」名答」

歌うようにリヒィニヒィは言う。

完全にからかっている。しかし、四人はそれに腹をたてている余裕もなかった。

すっかり青ざめ、ラナの手の中をのぞきこんでいる。

それは確かに人魚の鱗だった。

あれはまだ北風が冷たいころだ、星の美しい湖のそばで、アイスたちは六人でそのお守りを分かち合ったではないか。

アイシスの足から力が抜けた。

音もたてずに座りこむ。震える唇に赤みはない。

「エ、ザ」

ぼつり、まるでこぼれ落ちるようにしてアイシスの口から声もれた。

エザ。

たったひとりの肉親、愛すべき弟。

湖のほとりで、彼はこのお守りを嬉しそうに首にかけたはずだった。

いま、ラナが持っている同じものを。

残る三人もすっかり言葉を失い、ある瞳は鱗を、ある瞳はアイシスを見つめた。

風の峡谷が襲われたというのか？

まさか、若きエルフ王は、心安らく場所を三度奪われてしまったというのか？

「早とちりはいけないな。もうひとり、忘れていないか。湖に恋人を奪われた、哀れな絶対者を」

リグルがはつと息をのむ。

「ハイネ」

しかし、まさか。

彼は風の絶対者だ、現にアイシスたちも彼の強さを目の当たりにしている。

たとえ黒の騎士団が彼を襲ったとて、それなりの覚悟をもってしないと返り討ちにあうことだろう。

「絶対者だからこそ、力を持っていたからこそ彼は襲われたのだ。

彼を殺したのは“あれ”」

「まさか！」

ネトレトが狼狽の声をあげる。

「まさか、そんな。人ひとり しかもハイネほどの人物を殺めるほどの力が“あれ”に？」

“あれ”は数年前まで、姿を形成することすらままならないほどに」

「真に力ある者が、その力をひけらかすと思うか、ネトレトよ。きみはまだ使えるほうだと思っていたが、存外頭が悪いのだな」

ラナは人魚の鱗を握り締めた。

鱗は鋭い、力を加えると手の皮膚は破れてしまった。しかしラナは力を緩めない。

血がしたたる、それでよかった。

熱い痛みを感じていないと、頭がどうにかなってしまいそうだったのだ。

「受け入れよ、風の絶対者ハイネは死んだ。食われたのだ、“あれ”に。その体に宿る力を得るため、“あれ”はあの男の身を食らったのだ」



ああ、とアイシスは声をあげて突っ伏した。

ハイネの笑顔がよみがえる。

超越種を前にし、子どものように目を輝かせたハイネ。  
奪われた恋人の話を打ち明け、ひっそりと笑ってみせたハイネ。  
湖のほとりで、いつまでも待っていると聞いたハイネ。

また会いたいと言ってくれた彼に、しかしもうアイシスは会えないのだ、永遠に。

アイシスの胸元には、彼から贈られたお守りがいまも冷たく光っている。

信じられなかった、信じたくなかった。

しかし、そう思う心の片隅で、どこか安心している自分にアイシスは気がついた。

彼はこう思ったのだ、弟でなくてよかった、と。

そう知ったとき、アイシスは強烈な吐き気に襲われた。

なんと醜いことだろう。

アイシスはおぞましい考えに至った自分を恥じた。

ハイネの命と、エザの命の重さを比べることなんてできないのに、  
してはいけないのに。

「そう思うのも無理はないのだよ」

リヒイ＝ミヒイは彼の考えを読んだように言った。

その言葉にはっとしたのはアイシスだけでなかった。ラナたちも  
同じことを考えていたのだ。

彼らはみな一様に自身を呪った。

リヒイ＝ミヒイは口を歪めてそのようすを楽しんでいる。

いち早く気を取り直したのはリグルだった。

彼は建設的な考え方のできる人物なのだ。

「あれ”は絶対者の力を手にいれてしまったんだね」

「そうだ。王とまみえるその日のために、“あれ”はどん欲に力を  
欲している」

「じゃあ、ほかの絶対者たちも危ないんじゃないの。あんだだって」

「僕？ ありえない。“あれ”だって自分の力量ぐらいわかってい  
るさ。僕に挑みかかり、二千年もの時間を無駄にするようなばかは  
すまい。」

それよりもっと狙われそうな者を、ほかに知っているだろう」

リヒィニミヒィの喉が鳴った。

ちらと視線をネトレトに投げかける。

彼は気づいたようだった。

黄金の目を見開き、薄い唇で言葉をつむぐ。

「ハーデースか」

ネトレトは気の遠くなる思いがした。

天才たちの身が危ない。

彼らのような存在を、むざむざ失うわけにはいかない。

それに　自分本位の考えと言われても仕方ないが　いま、彼らの小屋には弟たちがいる。

もしも“あれ”が小屋を襲えば、危害はハーデースだけでなくネロにも、ソウマとリリィにも及ぶだろう。

ネトレトはリヒィニミヒィに向き直った。

「頼む、彼をどうか守ってやってくれないか。あなたにはそれだけの力があるはずだ」

「彼？　彼ら、の間違いではないか。きみは家族のことを思ってい

るのだろう」

「そのとおりだ。それでどう思われようと構わない、もう二度と失いたくないんだ。頼む」

リヒイ＝ミヒイは愉快そうに体を震わせた。楽しくて仕方ないのだ。

彼は気が遠くなるほどの時間を生きてきた。

そうしてずっと、このときを待っていたのだ。

ネットレトの願いにリグルが加勢する。

「ハーデースを助けるのは、あんたにとってもいいことじゃないの。残念ながらアイシスはまだ“あれ”に敵わない。そんな状態で“あれ”がハーデースまで食っちゃったら、もう抗いようがないじゃない。

余興を楽しみたいってあんたは言ったよね。そうになったら、アイシスはまるで手も出せないまま“あれ”にやられちゃうよ。そんな面白くないだろうが」

ほう、とリヒイ＝ミヒイは声をあげる。

リグルの達者にまわる口に感心したのだろう。

なるほど、と彼は言った。そういえばそうだ、それはつまらない。

リグルは気取られないよう、しかしほっと息をつく。

「しかし癩だな」

「癩？ なにが」

「僕がいいように働かされるみたいで。なにかそれなりの報酬をもらわねば」

金が、とはふたりとも思わない。

彼がそのようなものに執着するとは考えられなかったからだ。

はたしてその通りだった。

リヒィ＝ミヒィが所望するものは、彼らのまるで想像もしないものだった。

「髪。ネットレトのその、長い髪をもらおう」

あまりに予想外の要求に、ネットレトは思わず返事を忘れる。

ずっとうつむいていたアイシスとラナでさえ（彼らは不器用なのだ）顔をあげた。

「髪がもつ妖しい力を知らぬか。それがほしい。きみの金の髪は、消化できないあふれる感情で、さぞいい香りがすることだろう」

ネットレトは心底ぞっとした。  
リビィ＝ミビィは狂っている、そう思った。

しかし気おされてばかりもいられない。

ネットレトは腰の剣を抜くと、荒々しく髪を引っつかみ、ためらうことなく一息に切り落とした。

金の糸が幾筋か、指のあいだからすべり落ちた。

まるで隙間からさしこむ光のようである。その美しさにアイシスは息をのんだ。

「これでいいのか」

「十分だ」

突如風が巻き起こった。アイシスたちは咄嗟に目を覆う。

風はネットレトの手から髪をもぎ取り、うまい具合にまとめあげられたそれは、リビィ＝ミビィの小さな手にすっぽりとおさまった。

「約束する、地の絶対者の身は守るわ」

ネットレトは肩を震わせ、言葉を詰まらせる。

そんな彼のようすを見てリビィ＝ミビィは満足したらしい、高らかな笑い声をあげる。

「心配するな、その“おまけ”どもも守ってやるつ。  
彼らの身はぼくの秘密の場所に置いておく」

「頼む」ネットは頭をさげた。

「頼む」

リビィ＝ミビィは口の端をつりあげると、くるりと背を向けた。

再び風が巻き起こり、次に目を開いたときに彼の姿はなかった。

## 第五十一話：ひねた大人、ばかな子ども

### 『聖伝』第五十一話

鉛のような沈黙が続いた。

四人の心は不安で満たされていた。ついに“あれ”が動き始めたのだ。そして尊い命がひとつ奪われた。

アイシスたちはハイネの魂に祈りを捧げた。

星が光っている。

彼のとなりで見た星は、もっと美しく澄んだ輝きをしていた。

手を胸にあて、彼が迷わないことを祈りながら、アイシスは静かに涙を流した。

「すこし勿体ない気もするな」

リゲルが言った。

彼はいま、短くなったネットレトの髪の毛先を、短剣を使ってうまく切りそろえてやっているところだ。



彼の手先は見事な器用さで働いている。

「これですむなら感謝したいほどだ。それに、伸ばす理由はどうに失ってしまったから」

なかば眩くようなネットレトの言葉に、アイシスは耳ざとく反応した。

「伸ばす理由？」

「ああ」

ネットレトはすこし目を細めた。

「私の髪を、きれいだと褒めてくれた人がいた。七年ほど前、私がまだきみの年頃だったころだ」

小さく驚き、アイシスは耳をすませた。自然と背筋が伸びる。

ネットレトが、こつもすらりと過去を語ってくれるなんて。細められたネットレトの目は、まるで昔を懐かしむよう。

「それまでまるで髪などに無頓着だった私に、伸ばしてみてもどうかと彼女は言った。邪魔になるからと断ったのだが」

長い年月が経つたいまも、彼女の姿はすぐに思い描くことができる。

弾むような声も耳に残って離れない。

目を閉じれば、まるで彼女がとなりで話しかけているようにすら思える。

色褪せない笑顔で、彼女がこう言うのが聞こえた。

だったら私が毎朝結ってあげる、そうしたら邪魔じゃないでしょう？

「彼女は　アゼリアは、さして美しくもなかったが、健康的な声と笑顔とでとても魅力的だった。

彼女に出会ったのは、黒の騎士団を逃げ出したばかりのころだ。食べるものもなく森をさまよっていたところを、雑技団に拾われたのだ。彼女はそこの踊り子だった」

それで、とアイシスは思った。

彼は“花移り座”に身を置いていたとき、過去にも似た場所に行ったことがあると言っていたではないか。

「彼女の快活さは、私の損なわれた部分を補ってくれた。私は自分の罪も忘れて穏やかな日々浸った。

しかし、私のしてきたことは許されるべきことではなかったんだ。愚かにも彼女らに心を許したことで、私は新たな悲しみを生んでしまった」

「どう、なったんだ」とラナ。

ネトレトはひとつ小さく息をついた。  
短くなった毛が揺れる。

「あとで知ったことだが、アゼリアは半魔だった。血の争いも、どうやらうまく避けていたようだったのに。

しかし私が現れたことで事情が変わった。ヴァネッサの力に呼ばれたのだろう、雑技団は魔物に襲われたのだ。

彼女の中の魔族の血は、ぎりぎりの均衡をきつと保っていたのに私のせいで 目覚めてしまったのだ」

彼はその先を語らなかったが、アイシスたちは察することができた。

それからずっと髪を伸ばしてきたというのか、もう結ってくれる人はいないままに。

ネトレトがあればほどアージエに思いを寄せられながら、まるで動じなかった理由がいま分かった。

彼の心にはアゼリアが生きている。

しかし、現実の世に彼女はもういないのだ。

「私は途方にくれた、自分はなんと呪われた人間なのかと。すべてを手放してしまいたくすらなつた。しかし、そんなときに支えとなつてくれたのが、アイシス、きみなんだ」

「ぼく？」

「ああ。私は“あれ”の野望を知っていたからね。この呪われた力でもできることがあるとするならば、きみと共に戦い、きみを助けることぐらいだろうと」

アイシスの存在だけを頼りにネットレトは生きた。

しかし、その心は二度と開かれることがなかった。

最も人との繋がりを求めなくなる年頃に、彼はすべてをなくして孤独だつた。

そしてこれからもずっと、彼は心を閉ざして生き続ける、はずだつた、アイシスたちと出会うまでは。

「ネットレト」

「ああ」

「また、髪伸ばしてね。ぼくもネットレトの髪、好きだよ」

ネットレトの口元がほころぶ。

「ああ」

四人がともに生活をするようになってから、早いものでもう半年以上が経つ。

まったく、問題児ばかりの集団である。

大人になりきれない子どもに、急いで大人になりすぎた子ども。愛を求めながら心を閉ざす者がいれば、失う恐怖に息をつまらせる者もいた。

しかし彼らはすこしずつ、壁を乗り越えることに互いの距離を縮め、心の在り処を見つけられるようになった。

いま、彼らの笑顔はとても素直だ。

雨上がりにさす日の光のように、なにに邪魔をされることもなく真っ直ぐに届く。

アイシスたちは一歩一歩を踏みしめるようにして進んだ。  
ハイネの死が、改めて彼らに運命の大きさを教えてくれたのだ。

ともすれば竦んでしまいそうになる足を、歯を食いしばりながら  
アイシスは前へと押し出した。

世界を背負うに、その肩はあまりに弱々しい。  
しかし彼らの歩みは止まらなかった。

じつとりと張りつくような暑さだ。

ラナはツィード山脈で見た雪を懐かしく思った。

あまり水を飲みすぎると逆に体が鈍っていけない、とネットレトは  
注意したが、それでも喉の渇きは我慢できそうにない。

うだる暑さに、アイシスもすっかり体力を奪われていた。

そんなときだった。

突如、空気がひどく張りつめたのは。

異変にいち早く気づいたのはアイシスだった。

彼はまず、体の芯が凍えたように冷たくなったのを感じた。

暑さはとうに感じなくなっていて、異様な事態にアイシスはうろ  
たえて周囲を見回す。

残る三人は始めこそ彼のようすを訝しく思っていたが、すぐには彼らにも感じられるようになった。

大気を縮みこませるような威圧感。

肌を何千という針で突かれているような感覚すら覚える、まるで経験もしたことのないような。

くる。

アイシスの心がそう叫ぶのと、ユフィロスレジアの声とが重なった。

全身の毛が逆立つ。

足の先から、頭のとっぺんまでを細かな震えが伝う。

気温とはまるで関係のない汗が流れ、動きもしていないのに息があがる。

アイシスたちの心に、重くどろりとした感情が渦巻く。

圧倒的な恐怖そのものだ。

「ああ……」

ラナがかすれた声をだした。

栗色の瞳はこれまでにないほど見開かれ、一点を向いたまま動かない。

彼の視線の先には、揺れるひとつの人影があった。

穏やかにさえ見える揺れが、しだいに小さくなっていく。それと同時に影もまたはつきりとした形を見せはじめた。

四人は動くことも、声を出すこともできずにいた。

言葉に出さなくともわかる、目の前の人影こそがすべての元凶  
“あれ”だということは。

エルフの始祖エレンディウスの魂の片割れ、悪しき感情を糧に長い時を生き続けた恐ろしい存在。

いまやすっかり人の形をなした“あれ”の姿に、アイシスは乾いた声をもらした。

「……………ぼくだ」

深い海の色をした瞳は丸く、小ぶりながらも鼻筋は通って美しい。白い肌に、ほんのりと染まった頬。健康的に色づいた唇はふっくらと柔らかそうで、ゆるい曲線をえがいている。

見る者をはっとさせるような笑みをたたえる、その姿はまさにアイシスそのものだった。



違つのは、彼よりもすこし高い背と、腰より長く伸びた美しい銀の髪。

「ようやく向き合つことができた」

“あれ”がにっこりとほほ笑む。

どうしようもなく優しい笑みなのに、美しい姿なのに、どうしてこつも体が震えるのか。

アイシスの呼吸が早まる。

なにが怖いのか、という問題ではない。“あれ”そのものが恐怖なのだ。

うつとりと、夢を見ているかのように“あれ”は自分の両手を見つめる。体の調子を確かめているようだ。

ゆっくりとした動作も、見ようによれば優雅なのだろうが、四人の旅人にとっては恐ろしさを増長させる以外のなにものでもなかった。

「どれだけ待ったことか、このときを。アイシス、ぼくはきみをずっと思っていた。ずっと思っていた。気が遠くなるくらい、ずっと」

“あれ”は視線を手からアイシスへと移す。

それだけでアイシスの体は金縛りにあつたように動けなくなった。

「ねえ どうしてぼくを棄てたの？」

「あ……」

悲鳴をあげることすらできない。

鮮血が飛ぶのを、まるで他人事のようにさえ感じながらアイシスは見た。

右肩が熱い、燃えるようだ。

そう思うと同時に、アイシスの体は背中からどごとと地面に叩きつけられた。

一瞬のできごとだった。

なにが起こったのか、ラナたちはおろか、アイシス自身さえわかっていない。

「か、は」

アイシスの体が波打った。

右肩からは、目を見張る勢いで血が噴き出している。

“あれ”は風の刃を放ったのだ。

まるで詠唱するそぶりも見せず、動くこともなく。

アイシスを襲った刃は、ハイネのそれよりもずつと鋭利で力強かった。

あまりの痛みに、アイシスは声をあげることままならない。呼吸だけがどんどん早まっていく。

「ア、アイシスっ」

うわずった声をあげ、ラナが駆け寄る。

アイシスの目から涙がこぼれ落ちた。口をはくはくと動かし、苦しそくに喘ぐ。

ネトレトがすばやく詠唱を始めた。恐怖に打ち克とうと意識を集中する。

頭が痛むほどに高められた彼の意識は、しかし悲鳴によって打ち砕かれてしまった。

「ラナ！」

“あれ”の操る風が、鋭いつぶてとなってラナを襲ったのだ。

矢よりも早く飛ぶそれは、ラナの胸を直撃した。

大きな体はアイシスよりもずつと遠くへ弾き飛ばされ地に落ちた。

血が糸を引く。

ネトレトの集中は切れた。

一瞬、ほんの一瞬ラナのことを考えたために、開きかけた白の扉はまた閉じてしまった。

非情な敵はその隙を見逃さない。

アイシス、ラナに続き、今度はネトレトの血が飛んだ。

たった数分のできごとだった。

あまりのことに、リグルはまさか夢を見ているのではとすら思った。

張りつく暑さはもう感じない。

もはや立っているのは彼ひとりだけだった。

全身を小刻みに震わせ、立ちすくむリグル。

これほどの恐怖を彼は感じたことがなかった。

緑の草原が、三人の血で赤く染まっていく。

“あれ”は拡がっていく血だまりを目で追っていたが、ふと小さく呟いた。

「つまらない」

そう言つと背を返し、リグルにはまるで目もくれずに歩き出してしまった。

小さくなっていくその姿から、リグルは目を離すことができない。その背がすっかり消えて見えなくなってしまうまで、彼は三人のことすら考えることができなかったのだ。

雷に打たれたかのように、一度大きく体を奮わせる。

恐怖の呪縛が解けたのだ。

正気を取り戻したりグルは、まずアイシスの発作に対処した。あまりの痛みに、彼はまた過呼吸を引き起こしていた。

服の裾を裂き、やや乱暴な手つきで止血をほどこす。手が震えてどうしようもなかった。

「ちくしょう……ちくしょう！ おい、おまえら、死ぬんじゃないぞぞ！」

涼しげに揺れる草原は、いまや鉄が錆びたようなにおいで満ちている。

できうる限りの応急処置をすませてしまうと、リグルはよろめき

ながら立ち上がった。

ふらつく足を叩き、叱咤する。

しっかりしろよ、リグル。

彼は自分に言い聞かせた。動けるのは、こいつらを救えるのはおまえしかないんだよ。

リグルはおそろしく速く駆けた。

彼の持つ研ぎ澄まされた勘に従い、医者がいる町を求めて。

天から与えられた勘は彼を裏切らなかった。

走り疲れて目もかすむころ、リグルはほどほどに大きな町へと辿りついたのだ。

息はすっかりあがっており、喜びの声をあげることすらかなわな

い。  
汗と血とにまみれて飛びこんできた少年に、病院は一時騒然となった。

「頼む、助けてくれ！ 仲間が死にそうなんだ！」

医者たちは戸惑ったが、リグルの必死さが彼らを動かした。

いつもは余裕の笑みを浮かべているリグルだが、このときばかりはそうもいかない。

顔をひきつらせ、感情をあらわにして叫ぶ。頼む、助けてくれ、頼む。

慌しく医者がかき集められ、最低限の医療具だけを持つと、白衣をたなびかせて病院を走り出た。  
残った力をふりしぼり、リグルがそれを先導する。

ようやく三人のもとへ戻ったとき、医者たちはあまりのことに思わず体を固くした。

まさに惨劇である。

大量の血が飛び散り、強盗の一団が通りすぎたあとでさえもかきやというほど。

凄惨をきわめたその光景に、しかし医者たちが怯んだのはわずかな一瞬だけだった。

血が流れているのを見れば、どうにかそれ以上を食い止めるのが彼らの仕事なのだから。

気を失ったアイシスたちに、それぞれ汗に顔を光らせた医者たちがつく。

包帯を、あるいは添え木を取り出し、てきぱきと治療を進める。

リグルは大きく肩で息をついていたが、そのようすを見て安心したのだろう、ずるりと倒れこんでそのまま意識を飛ばしてしまった。

気がついたときにはベッドに横たわっていた。

うすく目を開けると、周りはすっかり暗くなっている。

リグルはがばと身を起こした。そして小さく呻く、頭が痛い。

それよりも三人はどうなったろう。

リグルは不安にやや顔を青くしながら立ち上がった。

三人はすぐに見つかった。

リグルが寝かされていた部屋のとおりにはアイシスとネットレットが、そのまたとなりにはラナが眠っていた。

医者たちはリグルが起き上がったのを見ると、まずはほっと胸を撫で下ろしたようで、それからすぐに質問責めが始まった。

「きみたちは旅人かい」

「いったいなにがあったというんだ」

「盗賊にでも遭ったかね、それとも魔物が出たのかね」



リグルは仲間たちの容態をはやく知りたかったが、ぐつとこらえて彼らの質問にまず答えた。

彼らは命の恩人なのだ、誠意を見せなければなるまい。

彼はよくまわる頭で、うまくごまかしも挟みながら説明をした。

自分たちは旅人で、エヴァノンからきた。

シリスを目指して歩いていたところを魔物に襲われ、あまりに急なことに応戦もままならなかったが、自分はひとりどうにか逃げ出したのだ、と。

医者たちはその説明に納得したようだ。

“あれ”の話を彼らにしたとてなにが伝わるう。

「それで、あいつらは」

医者はむずかしい顔をした。

ひどい傷だ、と言う。

「はばかりなく言おう。彼らの傷は深く、流した血は多い。正直、いつ息をしなくなってもおかしくはない」

リグルは拳を握りしめた。

爪が食いこみ、しびれて感覚がなくなってしまうまで。

落ちつけ落ちつけ。小さく呪文のように唱える。

彼は幼いころからずっとこうしてきたのだ。落ちつけ落ちつけ。

アイシスは大丈夫、これは間違いない。

“あれ”の目的はアイシスの命を奪うという短絡的なことではないのだから。

それに いや。

リグルは首をふった。なかば無理やりに思考を中断する。

彼がすべきことは、考えることではなかった。信じることだ。仲間を信じ、待つこと。

リグルはまた、ひとつの壁を乗り越えていた。

## 第五十二話…まわりくどい

### 『聖伝』 第五十二話

彼の思いは届いた。

空が明るむころ、ネトレトが目を覚ましたのだ。

さすが長く戦いに身をおいていた彼である、不意の攻撃にもとっさに身をかわしていたようだ。

彼の右手首から肘にかけては風の刃に裂かれていたが、避け方がうまかったようで、大して血も流れずにすんだ。

アイシスも翌日の夕方には意識を取り戻した。  
最初のリグルの読みどおり、“あれ”はアイシスを本気で襲ったわけではなかったらしい。

彼らはふたりとも、体よりも精神により大きな負担を受け、ために気を失っていたものとみられる。

医者が危惧しているのはラナだった。

彼は出血が激しかった。

唇に色はなく、唇も夜もかまわず、冷や汗をかいて彼はうなされ続けた。

しかし、彼の生命力はすばらしかった。

苦しみを経るうちに、彼はすこしずつ命の輝きを取り戻しつつあったのだ。

吐く息にはあいかわらず熱がこもっていたが、いまにも消え入りそうな弱々しさはそこになかった。

ある夜、リグルは彼のそばにっていた。

なにを考えるでもなく、ぼんやりと椅子に座って。

ときおり思い出したように立ち上がり、よく絞った布でラナの汗を拭いてやる。

そうしていると、医者の一ひりがふらりと病室へ入ってきた。小さく断ってからリグルのとなりに腰をおろす。

「彼には奇跡がおこったのかもしれない」

「奇跡？」

くすぐったいような言葉に、リグルは眉をあげる。

「そう。彼の左胸のところだけど、内出血の痕があるんだ。推測だけど、なにかが攻撃に当たって、その道筋を逸らしてくれたんじゃないかな。じゃなきゃ彼の傷はもっとひどくなっていたに違いない」

へえ、とリグルは感嘆の声をもらす。

医者というのは、ちよつとした傷跡からも過去を考察することができるのか。

ふとりグルの視線がラナの首元にとまった。

革のひもが見える。

たしか、彼は装身具を好まなかったはずだが。

指でたぐり、引き出してみる。

なんとということはない、それはただの革ひもだった。なんの飾りがついているということもない。

しかしリグルはそのひもの色合いに見覚えがあった。

「まさか」

自分の右腕に目をやる。

ハイネが作ってくれたお守りのひもと、ラナの首にかかるひもとはまるで同じように見えた。

だとしたら、彼を守ってくれたのは。

「ハイネ、あんた最高だよ。本当にありがとう」

リグルの目に涙が浮かんだ。

リヒイ「ミヒイから渡された、ハイネの遺品。

人魚の鱗に穴をうがち、革ひもを通しただけのお守りだ。

ラナは自分のものこそ腰袋にしまっていたが、ハイネが遺したほうのお守りは、どうやらずっと首にかけていたらしい。

彼は彼なりに、そうして風の絶対者を偲んでいたのだろう。

鼻がつんとするのを感じ、リグルは顔をあげた。

月が輝いている。

医者がいつてしまってから、彼は静かに一筋の涙を流した。美しく澄んだ涙だった。

「アイシス……」

傷口のもつ熱に朦朧としながら、ラナが呟く。彼はアイシスが心配で仕方ないらしい。

リグルは苦笑した。こんな状態になっても、他人の心配ができるだなんて。

どれだけお人好しだというのだろう。

「心配すんなって」

ベッドのうえに投げ出されたラナの手を取る。

よく鍛えられた大きなその手は、しっとり暖かくて太陽のようだとリグルは思った。

丸二日間、ラナは眠りっぱなしだった。

看病にはずっとリグルがついた。

彼の回復力は医者たちをして驚かせたが、目覚めると同時に放った言葉は彼らをさらに驚愕させた。

涙目で飛びつくアイシス（ラナの怪我をいたわり、一応控えめにはしたようだ）を首にぶらさげながら、ラナはこう言ったのだ。

「腹減った」

彼の注文どおり、すぐに食事が運ばれた。

得体のしれない旅人を相手に、ずいぶんと心の広い病院である。

ラナはそう思ったが、なんということはない、彼が知らないだけ

でリグルが先に治療費を支払っていただけのことだ。

相応以上の金額だ、用意された食事もなかなか豪華だった。

「はい、あーん」

からかい口調でリグルが言う。

アイシスはやや顔を赤らめながらも素直に口を開け、熱いスープを飲みこんだ。

右肩を動かせないアイシスのために、口元までリグルが食事を運んでやっているのだ。

最初こそ恥ずかしがっていたアイシスだが、リグルの助けは正直ありがたかった。

ぼかんとようすを見ているラナに気づき、リグルがにやりと笑う。

「なに、うらやましいわけ？」

「そんなわけあるか」

鼻をならし、ラナも湯気をたてるスープへと手を伸ばす。

しかし、胸の傷がひどく痛み、ラナは小さくうめき声をあげた。

ほんのわずか動いただけだというのにこれだ。



医者から言わせれば当然のこと、彼はたった数日前まで死のふちをさま迷っていたのだから。

「言わんこつちやない。強がりはやしな、動いたら痛むんだろつ」  
うるさい、と言おうとしてラナは口をつぐんだ。

リグルの声に、珍しくも心配そうな響きを聞いたからだ。

不承不承といったようすでラナは小さくうなずいた。  
ばかだね、とリグルがため息をつく。

「最初から素直に言えばいいのに。嬢ちゃん、そういうわけだからしばらく左手で食ってな」

「うん」

アイシスはにっこり笑う。  
なんだ、やっぱり仲良しじゃないか。

「ほれ、あーん」

ラナは顔をしかめ、小さく口を開ける。

リグルはまたため息をつくと、空いた手でラナの頭を軽くはたいた。

「あいてっ。なにするんだよ」

「あーんって言われたら、あーん、だろ。そんな仏頂面で飯が食えるだなんて思うなよ」

「げっ、俺も言うのか？」

「当然」

リゲルの表情は真剣そのもの。  
気迫さえ感じ、ラナはたじろいでしまう。

次が最後だよ。釘をさすように言い、リゲルがスプーンを突き出す。

「ほれほれ、あーん」

「……あ、あ ……つつ！ 熱いって、おい！」

戸惑うラナの声は悲鳴にかわり、リゲルは手を打って笑った。

熱々のスープをすくったスプーンは、赤面しながら開けられた口ではなく、その鼻先に当てられたのだ。

ラナは熱さに悶え、悶えたことで傷が痛んでよけいに呻いた。

「うわ、最高にいい反応」

「じゃ、ねえっ」

もはや大きい声をあげることすらできないようだ。目には涙が浮かんでいる。

「悪かったよ。でも、これってお約束だからさ、やらないわけにはいかなくて」

「やらなくていいって」

ラナは盛大にため息をついた。

リグルのいたずら好きには悲しいかな、もう慣れてしまって怒る気にもなれないのだ。

張り合いがない、とリグルは思ったが、そういえば彼は重傷者なのだ。

その後はおとなしく、いちいち食べやすいように冷ましてやりながらラナの口へとスプーンを運ぶのだった。

もっとも、ラナは最初のうち警戒して口を開こうとはしなかったのだが。

「まわりくどい友情だね」

「まったく」

アイシスとネットレトは顔を見合わせて苦笑した。

三人は順調に回復した。

ラナはさすがに無理だったが、アイシスとネットレトはもう歩き回ることもできた。

右腕は首から吊っておく必要があったが、それ以外はたいして不自由もない。

「なんだか小さい人を見たよ」

図書館から帰ってきたアイシスが言った。

話を聞いていた医者の一ひとりが、それはドワーフじゃないだろうかと教えてくれた。

「ドワーフ？」

「あれ、知らないかな。大地を愛する者たちだよ。地中に住まい、鉱石を掘って生計をたてている。」

彼らはシリスに多く住んでいるんだ、石の類がよく売れるからね。ここはもう国境に近いから、彼らの姿を見るのは珍しくないんだよ」

「大地を愛する者」

「そう。根はいいんだろうけど、ちょっとがさつなのが玉に傷かな」

アイシスは彼のようすを思い出した。  
背が低く、しかし肩幅は広く、枯れ枝のようからみあった鬚と  
眉毛。  
いかめしい顔だった。

そういえば、マーニヤでも彼によく似た人物を見たような。

剣比べでラナと対戦した“ちんちくりん”だ。  
もしかすると彼もドワーフだったのかもしれない。

アイシスはすっかり呆れてしまう。

彼の常識なんて、世界の前ではあまりにちっぽけで、その気になればどんどん姿を変えていってしまうものなのだ。

国境が近い、という医者言葉はアイシスたちを大いに奮わせた。

とにかく先へ進みたかった。

“あれ”の力はあまりに大きく、彼らには時間が必要だった。

海は不思議な魔力を秘めている。

もしかしたら“あれ”の干渉を阻んでくれるかもしれない。

ラナが満足に動けるようになると、四人はすぐに旅立った。  
医者たちは手をふって彼らを見送る。

そして四人はついに国境を越えた。シリスに入ったのだ。

さすがに商業大国といわれるだけのことはある。

文化的な発達はユリシアに劣るが、流通の量と速さといったらな  
い。

目まぐるしく通りすぎていく人の波に、四人はしばし気圧された。

アイシスはそのうちにちらほらとドワーフが混ざっていることに  
気づいた。

彼らの話す言葉はひどく訛っていて、とても聞きづらい。

ドワーフ同士の会話となれば、もはやなにを言っているのかすら  
わからなかった。

それもそのはず、彼らは仲間内だとドワーフ語を話すのだ。

それにしてもせわしない人たちである。

早足ですれ違つうちのひとりをつかまえて、なにをそんなに慌て  
るんですか、とアイシスは聞きたくなった。

ティエラでは、もっと時間はゆっくり丁寧に流れていったはずだ。

アイシスはそのころのことを懐かしく思った。

白くきらめく刃も精霊の光もそこにはなくて、あるのは柔らかな笑顔とか朝露に濡れる若葉だとか。

しかし戻りたいとは思わないのだった、不思議なことに。

四人はそろって剣を磨ぎに出し、ネットレトはシリスの地図を買い求めた。

アイシスは異国の菓子にばかり関心を持っていかれ、リグルに大笑いされてしまった。

道のりは順調だった。

ちょうどカリスト口方面へ向かうという荷馬車があり、いくらかの金を払ってアイシスたちはそれに乗せてもらうことにしたのだ。

馬車はちょっとした隊になっており、その隊長は期日がどうのと小うるさく、いつも不機嫌なのでアイシスはどうも好きになれなかった。

しかし彼の不機嫌は、ある日馬車の一団を襲った盗賊らをアイシスたちが蹴散らしてしまうと、一変にころりと直ってしまった。

「いやあ、めっぼう強いんだね。あんたがた、仕事を探している傭兵さんかね？」

「いえ、そういうわけでは」

「じゃあ魔物退治の剣士さんだね。ちょうど、カリストロのほうで恐ろしい噂を聞くからねえ」

隊長の早合点に、アイシスたちは首をかしげる。魔物退治だって？

聞けば、魔物や害獣を討伐することを生業とする者たちがいるらしい。

危険な仕事だ。

一流の剣士や、あるときは魔導師なんかがこの職業を選ぶこともあるという。

「それで、そのカリストロで噂になっている魔物というのは」

隊長はどうやら話好きの人物らしい。

ネトレットが問うと、嬉しそうに唇をしめらせて教えてくれた。

「俺も直接見たわけじゃないが、これがどうやら人の姿をしているらしい。しかし魔物だという、あまりに惨忍だからね。」

なんでも、子どもらを歌で惑わせとりこにし、夢うつつでいるところを生きながらに食ってしまうんだとか」

「人の姿を？　じゃあそれは魔族だ」



すかさずリグルが口をはさむ。

彼は魔族と魔物の違いについてひどく敏感だ。

彼は魔族を父にもつ半魔である、考えもなく生き物を苦しめるような下劣な存在と同じに見られたくないのだろう。

「魔族だか魔物だかよくわからないけどね。しかし、獣のような姿ならともかく、人型をしているだなんて、なんだかなあ。

けっきょく人間も魔族とやらとそう変わりないのかもしれないな。心の持ちようが違うだけでさ」

妙に考えさせられる言葉であった。

人間もけっきょく、魔族と同じ。

一番考えこんでしまったのはリグルだった。

しかし、彼のよく回る頭をもつてしても答えを出すことはできなかった。

太陽がいやというほど照りつけるので、荷馬車の中は蒸し風呂のように暑かった。

ほろは直射日光をさけてはくれるが、熱をどうもこもらせてしま  
うのだ。

アイシスたちはときどき馬車から飛び出しては木陰で休んだ。

ふと気になって、アイシスは腰袋から短剣を取り出した。  
鞘を引き抜く。涼しい音がした。

刃はまるで曇りもなく輝いている。

思えばこれが始まりだった。

「ねえ、ラナ」

「ん」

「ラナがこれをくれたのって、もしかしたら運命だったのかもね」

親友の言葉に、なんだなんだとラナは身をおこした。

「どうした、いきなり」

「だって、ぼくは刃物なんて手にしたことなかったのに。いまは  
こうして、剣を片手に戦いに身を投じている。

「ちょっとした予言というか、予兆というか」

「ああ」

「これを見るとね、安心するんだ。ぼくは間違っていないって、そ  
う思える」

ラナはなにも言えなかった。ただアイシスの面を見守る。

そのうちに出発をふれてまわる声が聞こえ、ふたりはまたむさ苦しい荷馬車へと戻った。

目的地に着いたことを、目でもなく耳でもなく、アイシスは鼻孔で知った。

潮のかおりだ、とネットレトが教えてくれた。海がすぐ近くにあるのだ。

アイシスは胸いっぱい空気を吸いこんでみた。

しょっぱいにおいが体に満ちると、なんともいえない勇気がわいてくる。

それでいて、同時になんだか寂しくもなった。

「うわっ、すげえ！ 向こうが見えねえ！」

ラナは海を見て大はしゃぎだ。アイシスも負けじと目を輝かせている。

海はどこまでも広く、雄大で、アイシスは立っている大地がぐらりと揺れるかのような衝動を感じた。

なんと力強いのだろう。

それに、誘いかけるように優しくもある。

ふたりは競うようにして海へと駆け寄った。

遠くで見れば青いのに、手にすくってみると怖いくらいに透明な水。

ラナは両手を丸めて海水をすくった。

太陽の光がめちゃくちゃに跳ねまわり、とても眩しい。

彼が手に顔を近づけるのを見、ネトレトは慌てて口を開いた。

「ラナ、海水は塩っから」

「しっ」

リグルがやんわりと制止する。紫の瞳はいたずらっぽく揺れている。

ネトレトは苦りきって、しかし大人しく黙ることにした、ラナには悪いと思いつながら。

結果、ラナは悲鳴にも似た叫びをあげることになる。

「辛いつ」

彼は口いっぱい海水を飲みこんだのだ。

海の水はおそろしく塩辛いということをし、ラナは初めて知ったの  
だった。

## 第五十三話・優しいおまじない

『聖伝』 第五十三話

海遊びには飽きることがなかった。

ちょうどいい季節だ、浜辺はたくさんの人で賑わっている。泳いだりもぐったり、だれもが体を疲れさせることに打ちこんでいた。

泳ぎ方を知らないアイスたちは、浅瀬でもっぱら水をかけあつた。

それでも十分に楽しめた。

泳ぎまわる人々が、海にきたらそうするべきとでもいうかのよう  
に、どこか真剣な目つきさえして遊んでいるのに対し、彼らはどこ  
までも無邪気そのものだった。

太陽の下で、ふたりはあまりに無垢だった。

「すばらしいね。どうしてああも楽しめるかな」

木陰に寝そべり、あくび混じりにリグルが言う。

空気はからりと乾いていて、影に入っていれば案外涼しい。ネットレトもとなりに腰をおろし、はしゃぐふたりを遠目に見守った。

「色男は泳がないの」

「私は」

ネットレトは静かに首をふる。

リグルは大きく伸びをした。

顔をしかめ、周りをはばかり、実に気持ちよさそうに。

まるで毛並のいい猫のようだ。

それから彼は背を丸め（それこそ猫よろしく）、眠るのかと問うよりもはやくに寝息をたて始めてしまった。

ネットレトは呆気にとられ、それから小さくため息をつく。

結局、アイシスとラナが遊びつかれてしまうのは太陽がすっかり傾いたところで、リグルはそれまで目を覚まさなかった。

「宿を探しにいいこうか」

すっかり灼けて赤くなったアイシスたちを見、ネットレトは思わず苦笑いしてしまった。

今夜、彼らは泣き目を見ることになるだろう。

街に入ると、海とはうってかわってせせこましい空気が流れていた。

道をいく人々はだれもみな駆け足だ。

この街に海があつてよかつたな、とアイシスは思った。だって、彼らには休息が必要に見えるもの。

しかし実際のところ、急ぎ足の人ほど海になど寄りはないのだ。彼らにとつては追いたてられる人生こそ活力あふれるもので、そうでない瞬間、たとえばぼんやりと海を眺めている時間なんかは、無意味で不安定なものにしか思えないのだろう。

四人は別々の部屋をとつた。

リグルが稼いでくれたおかげで、旅にすこし潤いが戻つたのだ。

夕ごはんを食べてしまうと、彼らはネットレトの部屋に集まつた。

「これからどうするの。すぐに海を渡る？」

濡らした布を顔に押し当て、アイシスが言う。

色素の薄い彼の肌は、痛々しいほどに赤く照りあがっている。

はい、とリグルが手をあげた。



「俺、気になることがあるんだ」

「道中で聞いた魔族のことか」

どこか重々しく彼はうなずく。

「歌で惑わせて子どもを食うって言うってたろ。なんか聞いたことあるんだよね、その悪い趣味の話。親父の命を狙うやつひとり的那种魔族がいたような」

「それで、どうしたいんだよ。そいつを倒しにいききたいのか」

リグルはあいまいに答えてみせる。うん、まあ。

彼にしては珍しいことだ。うまくやったら金も入るだろうし、と。

言い訳がましいその口ぶりに、したり顔でラナがうなずく。

「おまえ、親父さんのこと好きなんだな」

「はあ？」

「ばかじゃないの、とリグルは言った。ばか、ばか、と繰り返す。

「あれ、凶星か」

「しるせえっ」

「へえ、リグルくんだったらこれで案外寂しがり屋なんだな、うん」

「黙れ！」

アイシスは驚きに目を丸くしている。  
いつもとまるで立場が逆ではないか。

久しく味わっていなかった優越感に、ラナはすっかり満足しているようだ。

ぺらぺらと軽口を叩いていたが、これがいけなかった。

恥ずかしさに顔を赤くしたりリグルに腕をとられ、関節をきめられてしまったのだ。

「痛い！ 痛いつてリグル、折れる！」

ラナは必死に喚いたが、リグルはまるで聞く耳持たずといった顔だ。

その騒がしさといつたらならない。

結局、本当に折れるのではとネットレトが止めに入るまで、リグルは腕を放そうとしなかった。

せっかく彼の弱点を知れたものの、これではまるで追求できまい。ぐったりとうつ伏すラナを見て、アイシスは人知れず身を奮わせた。

翌日、行動派のネトレトがさっそく動いた。  
彼は貿易を束ねる富豪たちのもとを尋ねて回ったのだ。

頭のいい商人は、制度のいい製品を探すのと同じようにして、  
自分の名を高めようとする。

名が売れるということは、すなわち信頼へと繋がっていくからだ。

商売とは信頼のうえになりたつ。

信頼を得ることこそが金儲けへの第一歩ともいえよう。

彼が探していたのはそういう“きれいな”人物で、やはり大都市で  
ある、求めていた人材はすぐに見つかった。

「子攫いを倒してくれるとな？」

ネトレトは首をたれ、つつしんで答える。

「はい。私たちは旅の者ですが、これまでも多くの魔物を地に還  
して参りました。必ずお役にたてるかと」

しかし敵もさるものである。

彼は屈強な男たちを十人ばかり呼び集めた。  
屋敷で雇っている用心棒だという。

彼はこれをけしかけてネトレトに向かわせたが、しかしネトレト  
はいとも簡単に十をこえる人数を伸してしまった。

これには富豪も驚いた。  
すぐに多額の礼金を提示し、魔族討伐の命が下された。

討伐に成功すれば、ネトレトたちは金が手に入るし、富豪は英雄の名声を手に入れることができる。

利害はここに一致したのだ。

「と、いうわけだ」

こともなさに報告するネトレトに、アイシスは心底感服してしまつた。

さすが長らく旅に身を置いていただけあって、彼の処世術は相当のものであった。

金という目的が加わり、リグルは内心ほっと息をついた。

いくら戦いを経験したとて、魔族の強さ恐ろしさというのは手ごわいものだ。

それにわざわざ歯向かうのに、父親の敵だからという私的な理由だけでは、どうも心苦しくあったから。

彼のようなすを見てラナは口を開きかけたが、思い直したように首をふった。

また腕を締められてはたまったものじゃない。

しばらく四人は準備期間をおいた。敵についての情報を集めるのだ。

市場や海での聞きこみの結果、やがて大体の像が浮かびあがってきた。

「背が高く、海草がひつついたような髪、黒緑の服、青い肌、と。大人には聞こえない歌で子どもを惑わし、攫い、生きたまま食ってしまう。帰ってきた子どもはいない、かあ。気味わるいなあ」

うへえ、とラナは間抜けな声をあげた。リグルがわずかに口をゆがめる。

アイシスは正直滅入っていた。

子どもを攫われたという母親が泣き崩れる姿を、ここ数日で何度目にしたことだろう。

子どもたちは純粹で、無垢で、真っ白の幸せを楽しんでいたはずなのに。

話を聞くにつれ、敵を許すまじという思いは強まった。

聞いた話では、その魔族というのは陰気くさい森の奥地に住んでいるのだという。

子どもは夜のうちに誘い出されてしまうのだと。

森まで丸二日は歩くことになるう。

アイシスたちは割りと早く眠りについた。

控えめにドアを叩く音がする。

どうぞ、とネットレトが声をかけると、入ってきたのはリグルだった。

読みかけの本にしおりをはさみ、ネットレトはふり返る。

「どうした」

リグルはなかなか話し出さない。

このところ、どうも彼はいつもの調子を狂わせているようだ。その理由に、おそらくネットレトは気づいている。

「自分の生まれについて、か」

リグルは小さくうなずいた。

「だって、俺も半分は魔族なんだもの。魔族の悪い噂を聞くとび胸が痛い、心苦しいんだ。魔族だって悪いやつらばかりじゃない

って反発する気持ちと、あと、俺もそういう目で見られるんじゃないかっていう不安とで、なんだかごっちゃになっちゃって」

ネトレトは頭をかいた。短くなった髪が揺れる。

「きみは、私にはよく打ち明けてくれるんだな」

ふいと逸れてしまった話題に、すこしリグルはうるたえる。しかしすぐに気を取り直すと、ああ、と言って軽く笑った。

「あんたは　こう言つと怒るだろうけど　いつもどこか冷めているから、客観的な言葉をくれるだろう。俺はそういう方が落ち着くんだ」

「だが、私では足りない言葉もある。今夜はどうやら私の出番ではないようだよ」

リグルの足が、すこし迷う。

「恐れることはない」

目ざとく気づいたネトレトが、静かなうちにも優しさをこめた声で言う。

「信じるという強さを、きみはもう手に入れたはずだよ」

眉をさげ、情けない顔で笑うと、リグルはネトレトの部屋を出て

いった。

控えめにドアを叩く音がする。

なかば眠りかけていたアイシスは驚きの声をあげたが、リグルが入ってきたのを見ると、よけいに驚いたようだった。

リグルが彼を訪ねてきたことなど、これまでに幾度あっただろうか。

「どうしたの、なにかあったの」

「いや、特にどうってわけじゃないけど」

やはりリグルはすぐに本題に入ろうとはしなかった。

起こしたかな、悪いね。

そんなことを言いつつ椅子に腰掛けたりなどするリグルを、アイシスは辛抱強く見守る。

やがてリグルはため息をついた。

それから思い出したようにぼつり、ぼつりと話し始めた。

魔族の評判についての戸惑い、怒り、それから自分の正体に関する恐れのこと。



アイシスは黙って聞いていたが、彼がすっかり話してしまうと、とりわけ明るい声でこう言った。

「ねえ、リグル。十分後にきみの部屋に行くよ。いい？ 眠る準備をしていてね」

リグルは目を丸くしたが、いいから、と背を押されて部屋から追い出されてしまった。

「ちょっと待っていてね」

にっこりと笑い、ひらひらと手をふるアイシス。

リグルはまるでその意図を読めなかったが、仕方なく部屋に戻り、アイシスがくるのを待つことにした。

十分とすこしが経ってから、今度はアイシスがドアを叩いた。

「あ、そのままでもいいよ」

ベッドから起き上がろうとするリグルを、やんわりとアイシスが制止する。

彼は右手に深みのある皿を持っていて、うつすらと湯気がたっているようだった。

中に入っているのはお湯だろうか。

いったいなにが始まるというのだろう。リグルの好奇心が首をも

たげた。

アイシスは皿を枕元に置くと、なにかを取り出して湯の中で揉み始めた。

ややもすると、爽やかながらも柔らかな香りが部屋に満ちた。

「香草？」

「正解。どこにでも生えているものだからね、すぐに見つかったよ。故郷とこことはいろいろ違って見えるけれど、生きているものは結局同じみたい」

耳に弾むようなアイシスの声と、草の香りとが心地よい。

まるで夢を見ているような気分だ。

リグルはうつとりと目を細めた。

「神父さまがよくこうしてくれたんだ。ぼくが記憶をなくして間もないころだよ。おかげでぼくは、そう怖い夢を見ることもなくすごせたんだ」

すっかり香草を揉み解してしまうと、アイシスは湯から手を引いてはたはたふった。

小さな水しぶきが飛ぶ。

「リグルはきつと、すこし頭がよすぎるんだよ。考えすぎちゃって、

どうでもいいことに心を悩ませちゃうんだ。

ねえリグル、きみが言っていたことは、本当にどうでもいいことなんだよ。きみの出生がどうか、そんなことは。

だってリグルはリグルでしょう。そしてぼくたちはリグルが大好きだ。大切なことは結局それだけじゃないかなあ」

今日はゆっくりおやすみ。そう言ってアイシスは静かに部屋を出ていった。

香りが弱まったら、すこしだけ葉を揉んでやるといいよ。

でも過ぎるといけない、ちょっとばかり酔ったようになってしま  
うから。

アイシスの忠告は果たしてリグルに届いただろうか。

香草の誘いに身をまかせ、彼はすでに目を閉じていた。

翌朝、一番寝坊したのはリグルだった。これまでになかったこと  
だ。

起きてきた彼の顔つきはどこか晴ればれとしている。

ネットレトは訳知り顔でひとりうなずいた。

彼は知っていたのだ、アイシスの不思議なおまじないと、その効  
果のほどについて。

実は彼も、過去にこれのお世話になったことがあったのだ。

「ありがとうね、嬢ちゃん。おかげでよく眠れたよ」

「それはよかった。頭が回りすぎる夜があつたら、また声をかけていたずらっぽくアイシスが片目をつぶる。頼むよ、と言ってリゲルは笑った。

いつもよりしつかりと（ラナはいつものようにしつかりと）朝ごはんを食べ、それから四人はカリスト口の街を出た。今日は一日歩きとおしだ。

彼らの依頼主であるところの富豪は、わざわざ街の外れまで見送りをよこしてくれた。それに剣を打ちふって応え、アイシスたちは一路森へと足を進めた。

「なんだか勇者みたいだな、物語のなかの」

ラナは頬を高潮させた。

幼いころ母親が読んでくれた冒険譚に、彼はよく憧れたものだった。

しかし、彼の高揚した気分も、森に着いてからはすっかりしぼんでしまった。

恐怖のせいではない、その環境の悪さといったらもう、ひどいのだ。

土はぬめり、いやらしく光っている。

全体の空気はしっぽり湿っていて、雨降りの夕方のような、憂鬱な気持ちになってしまう。

木々はなにやら生臭いにおいを発していて、夏の日差しもうまく通してくれないのだった。

アイシスたちは悪路に心を悩ませていたが、そのなかでひとりリグルは別のことを考えていた。

どうもなにかが引っかかるのだ。

それを口にしてもアイシスたちの反応は薄かった。

「だって、矛盾してる。子どもたちは夜のうちに姿を消したんだろう、そして誰ひとり帰ってくることはなかった。

なのにだれが魔族の住む場所を知っているっていうのさ」

ネットレトの眉がびくりとした。

「畏か」

そちらに顔を向け、重々しくリグルがうなづく。

「ねえ、いがぐり。この森の情報を聞いてきたのっておまえだったよね。もしかするとそれ、魔族だったのかもしれないよ」

「げっ」

ラナが狼狽の声をあげる。

でも、まさかそんな。だってそいつ、教えてくれたやつは丸まる人間のかっこうをしていたんだぞ。

商売もしていたんだぞ、磯くさい魚を売ってさ。

人のよさそうな商人だったという。

ラナはいろいろと反論したが、そのうちリグルが遮るように指を突き出した。

「その人のよさそうな商人って、あれのこと」

「ん？」

言われて指されたほうを見やれば、なるほど、あの日地図を広げてまで森の場所を教えてくれた商人その人が、ゆったりとくつろぐようにして立っているではないか。

人好きのする笑顔を浮かべてこちらを見ている。

陰鬱なこの森に、その笑みと落ちつきはらったようすとは、どうも不釣り合いだった。

それが不気味さをかきたてる。

「あ、そうそう。わざわざ案内しにきてくれたのかな」

ラナの声にはどこか嬉しそうな響きすらあって、彼のお人好し具合にリグルは盛大なため息を送った。

「だから、さっき言ったでしょ。いまとなっちゃんもう確信の域だけど、あいつは魔族だよ。」

案内してくれるならば食卓にだね。俺たちはおいしい食材として、この森に招待されたというわけだよ。」

それでもラナはまだ信じられないようす。

あの男の目を見な、とリグルは言った。

「紫色をしているだろう。紫の瞳は魔族の証、逃れられない血の表れさ。」

そう言うリグルの目も紫に光っていた。爛々と、妖しい炎が揺れるかのようだ。

ラナの背筋がちよっぴりぞわりとした。

## 第五十四話：食卓の饗宴

### 『聖伝』 第五十四話

いらっしゃい、とその商人の体をした魔族が言った。

朗らかな声だ。

しかしいまの状況ではそれがいつそう不気味さをあおる。

「思っていたより早かったね。命は大切にしなきゃあ。

残された時間は少ない。若者よ、なにか望みはあるかね」

四人の表情がにわかに固まった。いつでも剣を引き抜けるように腰をかがめる。

だまされたことを知り、ラナはがっかりといったようだった。

こういう挑発に対応するのはリグルと相場が決まっている。

このときもそうだった。

「じゃあ、親玉のところに連れて行ってほしいね。俺たちはあんたみたいな三下じゃなく、もっと上のやつに用があるんだ。早いところぶちのめして、たんまり金をもらわなきゃ」

男の目がすうと細められた。紫の瞳に色味が増す。



にわかに威圧感が増し、アイシスはすこし身を引きそうになった。

男は笑ったが、しかし目は当然笑っていなかった。

「活きのいい子どもたちだ。よかろう、元よりそのつもりだ、ついできなさい」

しかし、と彼は言葉を続ける。

「ウガルグさまの前に出たら おまえの言う親玉だがね すこし口に気をつけることだな。でないとなんか命を縮めることになる」

「ご忠告ありがとうございます。覚えていられたらそうするよ」

リグルはふんと鼻を鳴らした。

四人は黙って森を歩いた。

靴底で泥がぬめる不快な音だけが辺りに響く。

ときどき鳥がけたたましい声をあげ、アイシスはそのたびに肩をびくりとやった。

奇妙な感じだった。

前を歩いているのは魔族で、自分たちを食ってしまおうというやからだ。

それなのにその足取りはゆったりとしていて、裕福な商人が、広い自宅へと客人を招いてくれるような、そんな好意的な雰囲気すらあった。

魔族の案内のもと、四人はやがて開けた場所に出た。

短めの草が茂っていて、その真ん中に沼がある。

よどんだ色をした水は、風に揺れることも億劫そうだ。

その上に人が立っていた。

背の高い男を中心に、両脇にもふたり。

アイシスは目を丸くした。彼らは水の上に立っているのだ。

まるでそこが地面だろうと沼だろうと関係ない、そういったふうな顔をして。

「つれてまいりました」

「じ苦勞」

ねぎらいの言葉をかけた長身の男こそがウガルグだろう。

風貌は先に聞いていたとおりである。

不健康そうな青い肌に、ぬめりとした黒緑のローブ。

髪はまるで無頓着に伸ばされていて、顔やら体にかまわずはりつ

いている。

大きな口が愉悦のかたちに歪められた。

その口のなかは恐ろしいほどに赤く、ちらちらと覗く舌はまるで小さな炎が揺れるかのようだった。

「よくきたな、勇敢な旅人たちよ」

低く、震えた声だった。

耳にねっとり絡みつく不気味な声である。

「我らを倒そうと目論む者どもを、これまでも多く森に誘っては喰らってきたが、おまえたちほど若いのは初めてだのう。その身はきつと美味しいことだろう」

「げつ。俺たちの肉は筋張っていて固いぜ」

挑発しているのかそれとも大真面目なのか、もちろん後者であるが、ラナが言った。

ウガルグは甲高い声で笑った。

「安心せよ、肉の固さで選り好みはせぬ。我らは肉を噛み、そこに宿る精神　つまり心を喰らうのだ。

限らない未来を背負う若い命ほど甘く、みずみずしいものだ。無謀にも魔族にたてつこうという哀れな勇敢さをもつ者ならばいっそう」

赤い舌が伸ばされ、色のない唇をぬるりと舐めた。

その気味の悪さにアイシスは肩を震わせる。

恐怖よりも生理的な嫌悪感が強かった。

「やっぱり、あんたあのウガルグだね。悪趣味は何年経っても変わらないようだ」

リグルだ。

冷たく落ち着いた声だった。

ウガルグの顔がぴくりと緊張する。

案内してくれた男が忌々しげに舌を鳴らした。

「はて。以前にもお目にかかったことがあったかな」

ウガルグは目を細め、舐めるようにしてリグルの全身を見回した。

刺すような視線の恐怖に、リグルは唇を噛んで耐える。

「ああ。俺は何度もあんたを見たよ。あんたが親父に挑みかかり、そのたびに敗れ去っては逃げていくみすばらしい様を」

ぶわりと風が吹いた。

自然の風ではない、ウガルグを中心に巻き起こった風だ。  
黒緑のローブが重たげに揺れた。

「聞き捨てならんことを言う。きさまのような小娘に見覚えがないが、さて、きさまの親父とは？」

「きつと耳に懐かしいだろうさ。俺の親父は針の森の大帝、偉大なる悟りの王ガントウーラだ」

「うわっ」

ラナは思わず声をあげた。風がその勢いを増したのだ。  
ただ吹きつけてくるのではなく、悪意をもって肌を刺すような。

ふと空気が和らいだような気がして目をあけると、ネトレトがすこし前に出て彼らを守ってくれていた。

ウガルグは怒りに震えていた。

大帝ガントウーラ。

その名前を聞いて身を震わせたのは彼だけではなかった。彼に従う三人の魔族も顔を歪めている。

悟りの力をもつ一族の長でありながら、不必要な殺戮をよしとし

ない魔族。

彼に賛同する魔族も少なくはなかったが、毛嫌いする者のほうが圧倒的に多かった。

ウガルグもそのうちのひとりだ。

彼にとって、人間は玩具のひとつでしかなかったのだから。

「憎憎しい名よ。だがしかし、ガントウーラには三十一の息子がいなかったと聞くが」

「三十一！」とアイシス。

「ちなみに長兄の次は二十八ツ子だぜ」

にやりと口をゆがめるリグルに、アイシスは言葉も返せなかった。

二十八ツ子だなんて、まるで想像もできない。いったい、どんな腹をした母親なのか。

「俺が三十二番目だ。最後の子にして唯一の女、リジェアラ・ガントウーラ・スーさ」

そう言うリグルの声は誇らしげに響いた。

彼はもう恐れていなかった。

自分の生まれも、その性別も。

だって、リグルはリグルなのだ。

リジエアラの名も、女の体も、男への憧れも、人間の血も、魔族の血も、悲しい過去も、全部ひっくるめてリグルなのだ。

ウガルグは顔面をゆがめて笑った。おかしくて仕方ないといったようにすだ。

「そうか、きさまは半魔だな。魔族が姓をもつものか。」

半魔の女、なんとも邪魔な子どもが生まれたものよ。男ならまだ使い物にもなるうに。

きさまはそれで、ガントウーラに棄てられたのだろう」

「違うね。親父は俺に、俺自身を見つげるための機会をくれたんだ。それに、使い物になるかならないかはあんたが決めることじゃない。戦いの結果がそれを決めるさ。」

試してみるかい、負け犬」

ぐおお、とウガルグが吼えた。

アイシスは思わず耳をふさぐ。

人魚の悲鳴を思い出す、体を芯から震わせるような声だ。

ウガルグの目は怒りに燃えていた。

髪は逆立ち、口は赤みを増している。

彼は地の底からとどろくような声でうなった。

「よかろう。ならば望みどおり試してやる。そしてきさまの身を喰らい、首だけを塩漬けにしてガントウーラのもとに送ってくれよう」

大地も震わせるかという呪いの言葉だ。

リグルは威圧感に押されそうになる体を必死で支えた。

だから悪趣味っていうんだ。軽口をたたくことで平常心を保とうとする。

「生の時間を奪うことは最高の娯楽。恐れは辛み、涙は蜜だ。

死の恐怖に身を打ち震わせ、我らの食卓をより華やかに飾ってくれよ」

その言葉を機に、四人と四人の戦いが始まった。

アイシスが対峙したのは一番小柄な男だった。

背格好は同じくらい。

口の端をゆがめ、下卑た笑みを浮かべている。

魔族に立ち向かうのは初めてのことだ。

半魔のリグルを見るに、その運動能力はエルフにもきつと劣るまい。



そう体格差がないことには安堵したが、かといって気が抜けようはずもない。

相手の力はまるで未知数なのだ。

「当り目だな」

男は笑った。

「おまえ、エルフだな。エルフの魂は格別にうまいと聞く」

「た、魂は食べるものじゃないっ」

アイシスは顔が赤くなるのを感じた。

手を出しあぐねている場合ではなかったのだ。

多くの先ある命を、その欲望のままに奪ってきた恐ろしい男。人間の皮をかぶってはいるが、その正体はまさしくけだものであった。

恐れと戸惑いを、より大きな怒りが鼓舞する。

アイシスの瞳に青い炎が宿った。

「もう子どもたちの笑い声を奪わせるものか。礼金もリゲルのお父さんのことも関係ない、ぼくはぼくの信念のときみたちを倒す！」

腰の剣を抜き払う。

すっかり手に馴染んだ柄は、握ると妙に心地よい。

リグルは認められたいがために力を欲した。

ではアイシスはどうか。

彼は守るために強くなることを決めた。

剣はいまこそ振るわれるべきなのだ。

裂帛の気合とともに、アイシスはぬかるんだ地面を蹴った。

男は武器を持っているようには見えない。

両手を横に垂らし、いたって気楽にかまえている。

しかしアイシスはためらわなかった。

怒りが彼を支配している。

気合一閃、アイシスは剣をななめにふりおろした。

鋭い刃は男の左肩をどつと打った、はずだった。

しかし剣は空を切った。

アイシスの体勢がくずれぬ。

「うわっ」

かと思うと、背中をいやというほど蹴り飛ばされた。

呼吸が詰まる。

突進した自らの勢いも相まって、アイシスは顔から地面へと倒れこんだ。

水っぽい土がべとりと顔にはりつく。

アイシスは跳ね起き、次の攻撃にそなえて剣をかまえた。

しかし敵の姿が見当たらない。

アイシスはすばやく視線をめくらせた。

その瞬間、左のわき腹が燃えるように熱くなった。

せつな遅れて焼ける痛みがアイシスを襲う。

唇を震わせて視線を落とすと、麻のシャツが血で赤く染まっ  
てい  
る。

ふつとアイシスは息を吐いた。

見えない敵に、見えない刃。

どう立ち向かえばいいのか。

「風の幻影だ、アイシス」

アイシスははっとした。ネトレトの声だ。

「目にはかり頼るな、心に従え。いまのきみなら可能なはずだ」

心に。気を落ちつけてみると風がうなるのが聞こえる。

彼も魔導師だったというのか。

アイシスは知らないことだったが、そもそも魔族のはじめはエルフだったのだ。

エルフのひとりが心を悪に囚われ、精霊を喰らったことから地に堕ちた、それが魔族の始祖である。

それから魔族は精霊を喰らうことで力をつけてきた。

風の絶対者ハイネを喰らい、その力を手に入れた“あれ”のように。

アイシスは目を閉じた。

よけいな雑音をさえぎり、心の声に耳をかたむける。

時折風が耳元で吼えた。また風の刃が襲ってきたのだ。

しかしアイシスはこれをよけた、目を閉じたまま、心が誘うほうへと体を動かして。

真つ暗になったアイシスの視界に、白いものがぼくと浮かび上がった。

最初は揺れる陽炎のものでしかなかった影が、しだいに人の形を作っていく。

縮れた黒髪からは二本の角が天高く伸びており、口は裂け、蛇のような舌がうごめいている。

「これは」

アイシスは息をのんだ。これこそかの敵の正体なのだ。

人の姿をした鬼。

魔に心を囚われた哀れなエルフ。

鬼は妖しい光を放つ剣を振りかぶり、この世のものとは思えない奇声をあげながらアイシスに斬りかかった。

その瞬間、アイシスはかっと目を見開く。

鬼はその迫力に思わずたじろいだ。

青い瞳。凜とした勇氣、守るべきものを背にした凄み。

それなのにどうして、こつも優しく柔らかくあるのだろう。

彼の体を刃が貫いた。

その身は荘厳な美しさに恐怖し、打ち震えている。

アイシスは力をこめて剣を引き抜いた。

血の糸が引き、すぐに切れた。

男はどつと地面に倒れる。アイシスは目を伏せた。

「命はだれのものでもない、きみたちが好きにしているものじゃないんだ。ぼくもそう」

アイシスはぽつりと呟いた。

すべてを守るに、ぼくはまだ弱すぎる。

彼の言葉の意味は、魔族の男に伝わっただろうか。

彼は怒りに燃え、剣を交えながらも悲しんでいた。

勝利をおさめたところで彼が手を打ち叩くはずもない。

男の白濁した意識は、やがて悪い夢から覚めるようにしてついに途切れた。

ラナは泥にまみれて拳を振るっていた。  
向かう相手は商人風の男である。

彼はもはや商人の服を脱ぎ捨て、ウガルグと同じ黒緑のローブを身にまとっていた。

人好きのする笑みはどこへやら、彼の顔はもはや殺戮を楽しむ悪魔そのものであった。

「くそっ」

ラナは舌を打った。

拳を振るうたびに血が飛び散る。

力は互角、いや動きの素早さと正確さでいえばラナのほうが勝っているように思えた。

しかし傷を受けるのは一方的にラナだった。

殴りかかっても攻撃をうまく防いでも、ラナの拳は傷ついた。

原因はかの敵の体にあった。

堅すぎるのだ。

まるで岩に拳を突き当てているような。

男は地の精霊ラジネの力を持っていた。  
大地の加護を受け、身を土壁の鎧で包んでいたのだ。

生身の拳でいくら打ちつけようと、傷ひとつつけようがなかった。

「なんなんだよこいつ、化け物か！」

「そうとも、化け物さ。いくらあがいても敵わん恐怖に打ちひしがれるがいい」

手の肉は破れ、皮はめくれ、酷いありさまである。

ラナは腰を落とし、足を風車のように回して男の脛を払った。

体勢を崩され、男が背をついたところに渾身のかかと落としを見舞う。

「いいいつー！」

ラナは言葉にならない悲鳴をあげた。

かかとから全身へ、稲妻が走ったようにして痛みが伝う。

生理的な涙が浮かんで視界が滲んだ。

しかし、そのときラナは見た。

男の体が、なんと小さく欠けたのだ。

ラナがかかたとを振り下ろしたその場所は、わずかにくぼんでいるようにも見える。



「割れた？」

ラナは首をひねった。

割れる体、恐ろしく堅い全身。

普段ゆっくりとしか動かない頭が、このときばかりはよく働いた。危機的状況が彼の可能性を開けてくれたのだ。

彼はひとつの答えを導き出した。

しかしその瞬間、みぞおちを体が折れ曲がるほどに強く殴りつけられた。

今度は声をあげることすらかなわなかった。

ラナの屈強な体がやすやすと吹き飛ばされる。

木に背を打ちつけられ、ラナはうめいた。

咳きこむと血の味がする。

しかしラナは怯まなかった。

猛然と身を起こすと男に突進する。

息をもつかせない蹴りの乱舞。

男はその猪突猛進さに呆れた。

勢いに追いやられはするものの、その攻撃はまるで意味をなさないことぐらい、ラナにだってもう分かってもいいものなのに。

受け身らしい受け身も取らないまま、男はラナの蹴りを全身に受けた。

ラナの顔に大粒の汗が光る。

男はにやりと笑った。しかし、ラナもまた、にやりと笑った。

「なに？」

強い一撃を受け、男は後ろへ大きくよろめいた。その足がずぶりと深く沈む。

男は目を丸くして背後をふり向いた。

沼だ。

彼は沼の淵へと追いやられていた。

ラナの猛襲の目的はここにあったのだ。

「まさかっ」

「そのまさかだ！」

短い気合とともに、ラナは全身をばねのように使い、男の胸をしっかりと蹴り飛ばした。

男は踏ん張ったが、逆にそれが仇となった。

悪い足場は彼の体重を支えきれず、彼もろとも沼へと崩れ落ちてしまったのだ。

おぞましい悲鳴が辺りを包む。

土と化した男の体は水に溶け、しだいに小さく、脆くなっていく。

なんとか沼から逃れようともがく男に、ラナは最後の一撃をお見舞いした。

傷ついた拳が男の体を打ち砕く。

断末魔の声は長く糸を引いたが、やがて途絶えた。

ラナは大きく息をつき、ゆっくりと立ち上がる。

全身が鉛のように重かった。

「やるなあ、俺。実はけっこう頭いいかも」

言うなり彼は、大の字になって地面に倒れこんだ。

## 第五十五話：勝て、リゲル。勝て。

### 『聖伝』 第五十五話

首はぼとりと落ちた。

まるで柵から果物が落ちるかのように呆気なく。

どنگりのように丸くなった目で、首はネトレトを見上げていた。

信じられない、と口が動く。

しかし声は出ない。

あつという間のできごとだった。

ネトレトの剣に迷いはなかった。

彼の振るう一閃のきらめきは、アイシスの目に焼きついて離れなかった。

鋭く、強く、孤独で、寂しい。

ネトレトは圧倒的だった。

彼の乗り越えてきたものは、およそアイシスたちの想像が及ばないほどに大きいのだ。

ネトレトはおもむろに膝を曲げると、見開かれたままの目をそっ

と閉じさせた。

首はしかし、まだ死の事実をのみこめずにようだ。  
彼が指を離してしまうと、すぐにまたまぶたが開かれてしまうのだ。

ネトレトは小さく息をついた。

ぞっとするほど冷たい吐息だった。

「奪うことからはなにも生まれない」

しみりと、眩くように彼は言う。

陰鬱な森に、一瞬の静寂がおとずれた。

ネトレトは辛抱づよく目が閉じるのを待ち、ついに首は生きることを諦めたようだ、観念したように目を閉じると砕けたように灰となって崩れてしまった。

アイシスが小さく悲鳴をあげる。

灰は迷うように漂っていたが、小さな風に乗ると、やがて木々の合間に飛んでいってしまった。  
魂が還ったのだ。

疲れきった魂は、しばらくの時を大地に抱かれて眠る。

「ほかはみんな決着がついたようだね」

一瞬たりともウガルグから目を離すことなく、リグルは気配だけで成り行きを悟った。

もとよりネットレトの心配はしていなかったが、アイシスとラナのふたりもうまく乗り切ったらしい。

残るは親玉、悪の根源ともいうべきウガルグただひとりだった。

「みんなは手を出さないでよ。これには俺の意地がかかっているんだから」

アイシスは黙ってうなづく。  
わき腹を押さえる手から、鮮やかな血が滴り落ちている。

リグルは抜き身の剣を握り直した。

うつすらと手に汗が滲む。  
しかし思っていたより心は落ち着いていた。

魔族。

忌み嫌われた存在、己の半身を流れる血の生まれ。

リグルはそれをいつも負い目に思っていた。

魔族の血を、いつもだれかに責められているようにさえ感じていたのだ。

いま、彼は真正面からそれに立ち向かおうとしている。

対峙するは父親を狙いつづける憎き男。

リグルにとってはすべてがおあつらえ向きだった。

いくよ。

短く気合をあげ、リグルは地を蹴った。

水っぽい土が跳ねあがる。

リグルは光の速さでウガルグに駆け寄り、剣を突き出した。

普通ならばまず避けきれぬ攻撃ではない。

大の字に寝そべったまま、ラナは素直に感心した。

しかしウガルグは身をかわした。

かわしながら鋭い爪をふりおろした。

リグルの肩から鮮血が飛ぶ。

彼は痛みに顔をゆがめる、だが一瞬も怯まず腰をひねり、突いた

剣をそのまま横に大きく薙いだ。

「おっと」

ウガルグは小さな狼狽の、しかしどこかからかつような調子をふくんだ声をあげて飛び退った。

その身のこなしはさすがのものである。

忌々しげにリグルが舌を打つ。

「ふうん。親父に追いやられていたのばかり見ていたから、ずいぶん弱っちい野郎だと思っていたけれど。」

これでけっこう、一筋縄じゃいかないものだね」

ウガルグは甲高い声で笑う。

血の舞う戦いを楽しんでいるのだ、心の底から。

「口はよく回るようだな。しかしそれもいつまでもつか。」

いくらでもかかってくるがいい、ガントウーラー族の出来損ない  
「め」

「あんたも言うねえ」

リグルは口の端をつりあげた。しかし目は笑っていない。

紫の瞳は爛々と燃えてウガルグを見据えている。



剣と爪とが二度、三度と打ち交わされた。  
鋭い音が、しつとりとした森の空気にこだまする。

リグルの攻撃は、回を重ねるにつれて鮮烈さを増しつつあった。

体は痛み、息はあがったが、それでいてよけいに彼の神経は研ぎ澄まされた。

これはウガルグの予想しないことだった。

「やり」

大きく肩で息をしながら、リグルがにんまりと笑う。

ウガルグの右腕から一しずくの血が流れ落ちた。

四度目にしてついに彼の刃が敵に噛みついたのだ。

今度はウガルグが舌を鳴らす番だった。

「小ざかしい」

炎のような舌をちらりと覗かせ、流れる血を舐め取る。

まだまだ、とリグルは言った。まだまだこれからだよ。

そしてその言葉は真実だった。

彼の真骨頂はここからだったのだ。

「右っ」

鋭く短くリグルが叫ぶ。

ウガルグは反射的に言われたほうを見た。

だが刃は彼の左から襲いかかってきたのだ。

ぎょっと目を見開き、しかしウガルグは間一髪でそれを受けた。

「猪口才な」

「上、上」

リグルの“口”撃は続く。

今度はウガルグも引つかからなかった。

言葉とは逆の、下を見る。

「ぐあっ」

だが、リグルはその頭脳にかけて彼の一枚上をいつていた。

リグルは言葉のとおり、上から剣をふりおろしたのだ。

初めてウガルグの体に浅くない傷がついた。

「ばかだね。上だつて教えてやったのに足元ばかり見てさ」

「小娘が！」

ウガルグは怒りに燃えた。

それこそリグルの思つつぶだということにも気づかずに。

なるほど、とアイシスはすっかり舌を巻いてしまった。

リグルの戦い方には学ぶべきことがたくさんある。

自分にはないものを、彼はたくさん持っているようだった。

魔族特有のしなやかな筋肉と、おそるべき反射神経、天性のセンス。

それに加えてリグルには、よく回る口だつてあるのだ。  
使いようによれば、これは大きな戦力となる。

頭のいい彼はそれをよく分かつていた。

そして彼にはもうひとつ、誇るべき点がある。

彼が女として生まれ、男として生きてきた二十余年のなかで培った最も大きなもの、それは。

「左、ほら次は上だよ」

小さな傷をたくさんこさえ、ウガルグは熱りたつて吼え声をあげた。

平常心を保っていれば難なく避けられるだろう攻撃も、リグルのたくみな言葉に惑わされ、うまくかわすことができないのだ。

「なんだか冴えなくなってきたね。ウガルグさんよ、あんたそのままでもいいのかい。まだ本気を出しちゃいないんだろうが」

ぜえ、とウガルグが息をつく。

彼はすっかりリグルの心理作戦に支配されていた。

そう傷を負っているわけでもないのに、劣勢にあるような錯覚。

主導権はもはやリグルのものだった。

「よかるう。存分になぶってやるうと思っていたが、そこまで早く死にたいのならば望みどおり殺してやる」

ウガルグは唸り声をあげ、腰をかがめた。

とたんに空気の重みが増す。

アイシスの肌がざわついた。

なにが起こるといふのだろう。

知らず、息をひそめている。

大気に怒りが満ち、息苦しくなる。  
指先がぴりりと痺れる。

威圧感に負けじとアイシスは両足を踏ん張った。

沼の水が風もないのに揺れた。

かと思つと水面がせりあがり、息をのんでいる間に細い柱が幾本も沼から突き出る形となった。

先の尖った、禍々しい柱である。

これがウガルグの“本気”だということのか。

彼はどうやら水の精霊を呑みこんだようだった。

「貫け！」

ウガルグが右手を払うのと同時に、無数の柱がリグル目がけて飛びかかった。

まるで太い矢を射掛けられているようである。  
リグルは猫のような俊敏さでそれを避けた。

しかし数が多い。かわしきれるものではない。

「つつっ！」

リグルは顔をしかめた。

食いしばった歯のすきまから悲鳴が漏れる。  
柱のひとつに足を貫かれたのだ。

甲を貫き、深々と地面に刺さる柱。

リグルは採集された虫のように、張りつけられて身動きがとれなくなってしまうた。

「無慈悲にも残る柱が襲いかかる 避けられない。」

目を見開くリグルの体に、水の柱が突き刺さるつとつと、まさにそのときだった。

「ネットレトっ」

静観を決めこんでいたネットレトが動いたのだ。

彼は目にも留まらぬ速さで剣を抜き放ち、風車のごとくふり回しながらリグルの前に立ちはだかった。

巨兵のような雄々しさである。

その堂々としたたち振る舞いに、リグルは痛みさえも忘れて魅入

ってしまった。

彼の回す刃に遮られ、水は勢いを失ってしまう。

すべての柱がただの力ない水となって崩れてしまつと、ネットレトは剣をふつて水気をはらつた。

足もとには大きな水溜りができている。

ち、とウガルグが舌を打った。

「邪魔な」

「いや、もうどころ。リグルも盾など必要とはすまい」

なかば夢うつつだったリグルは、その言葉でようやく気を取り直した。

鈍い痛み視線を落とすと、右の甲には暗い穴が開いており、そこから血が湧き水のごとくあふれ出している。柱は水となって流れてしまったようだった。

痛みに汗が流れたが、しかしまだ動ける。

まだ、まだだ。

リグルが持つもうひとつの力、それは執念だった。

彼の生きてきた歩みというのは、まさに執念そのものだったといつても過言ではない。

生への執念、そして誇りへの執着。

いつか父親を見返してやる、自分を認めさせてやるという一心で彼は生きてきた。

より強く、より賢く。

なにこともけっして諦めず、口の端をつりあげ、余裕の笑みで乗り越えてきた。

いま乗りこえるべき新たな壁はウガルグなのだ。

リグルは諦めない。体に穴を穿たれようと怯みはしない。

彼は何度でも立ち上がる、己の誇りのために。

「うおおおおっ！」

リグルが吼えた。

彼の心がここまで猛るのを、アイシスたちは初めて見た。

いつもの冷静で人を小ばかにした態度からは想像もつかない、野性的で直線的な彼の姿。

アイシスは拳を握った。



勝て、リグル。勝て。

「頭の悪いやつめ。自ら標的となるか！」

「また柱が浮かび上がった。」

ぶるぶると震えると、いつせいに風を切ってリグルに飛びかかる。

さらに数が増えている。

そのうえ彼の右足には穴が開いている。

「避けられまい！」

「だれが避けるって言ったよ！」

リグルは足を止めなかった。方向を転じようとしなかった。彼はネットレトにならない、剣を大きくふり回したのだ。

その勢いに巻きこまれて風がうなる。

水は次々に弾けて飛び散った。

「柱のいくつかは崩しきることができず、その破片が体のあちらこちらに突き刺さった。」

しかしリグルは怯まない。

腹の底から吼え、剣をふりかぶると体の回転も加えてウガルグに切りつける。

ここまでわずか数秒のできごとだった。

「うわっ」

思わずラナが飛び起きる。アイシスは全身をぶるりと奮わせた。

リグルの剣は、ぬらりと大きなウガルグの体を、斜めに大きく切り裂いていた。

黒緑のローブが破け、どす黒い血が噴き出す。

ウガルグはそれを呆然と見つめていた。体から力が抜けていく、しかしこの赤いものはなんなのだろう、と。

彼はまるで敗北を予期していなかったのだ。

それが命取りであった。

どれほど力がある者であれ、慢心はその足元をすくう。

この戦いは、泥にまみれ、死を胸のうちに秘めたりグルの完全なる勝利であった。

不動かに見えた巨体が揺れ、どうと沼に落ちる。

開かれた口からは、声とも呼吸ともつかぬ不気味な音が漏れ出ていた。

まるで、地の底で炎が燃えているような。

盛大なしぶきをあげ、ウガルグは水の中へと落ちた。

そのまま抱かれるようにして深く、深くへと沈んでいく。

見開かれた瞳はリグルを捉えていた。

リグルはその呪いにも似た視線を全身で受け止めた。

けっして目を逸らさず、彼の瞳から炎がすっかり消えてしまうまで、ずっと。

はあ、とリグルは短く息をついた。

どっしりとなにかが抜け落ちたようだ。剣を持つ手がだらりと垂れ下がる。

次の瞬間、彼は膝から崩れ落ちた。

水びたしになった地面に顔から突っこむ、まさにその直前に彼の体を支えてくれた人物がいた。

ラナだ。

リグルは汗まみれの顔をあげた。

幾分か顔色が悪い。

しかし彼は気丈にも口端をつりあげると、にやりといつもの笑みを浮かべた。

「おまえ、また胸触る気じゃないだろうね」

「ばか。減らず口もほどほどにしろよ」

リグルはふつと息をもらした。

堪えていたものが、音をたててぶつりと途切れる。

長いまっげが生え揃った目を閉じ、疲れきったリグルは眠りに落ちた。

「おい、おいっ」

ラナは顔を青くした。

まさか、リグルは息をやめてしまったのでは。

恐ろしい考えが頭をよぎったが、しかしネットレトがその肩を優しく叩いた。

「眠っただけだろう。彼は本当によく戦った、きつと気を張りつめ

すぎていたのだ。休ませてやるう」

ラナははっと息をのんでリグルの面を見守った。

よく見れば、うつすらと開いた口から吐息が漏れているではないか。

なんと人騒がせな、とため息をつくとき、己の痛みがようやく思い出されてきた。

鈍い痛みで体がひどく重い。

いてて、といまさらのように顔をしかめるラナを見て、アイシスは自然と笑みをこぼした。

痛みすら忘れ、彼はリグルのために飛び出したのだ。

眠るリグルをそつと横たえ、アイシスとラナも体を休めた。

息をするだけであちらこちらが痛みを訴える。

アイシスは肩を落とし、気が抜けたようすで辺りを見回した。

壮絶な戦いの直後とは思えないほど、森はしっばりと湿っていて静かである。

魔族との戦いなど、実は夢だったのではないか。

そう感じてしまうほどだったが、しかしわき腹の痛みは現実だ。

ネトレトは靴を脱ぎ、沼に足をひたしていた。

もちろん、水遊びに興じているわけではない。

彼は商売をうまく運んでやる必要があった。

子を攫う魔族を倒す、というのが富豪から下された指令だ。

それを首尾よく達成したという証拠を持って帰らなければならなかった。

彼はウガルグが沈んだあたりを探っていたが、ふとその目がなにかをとらえた。

手を伸ばし、拾い上げてみると、それはふたつの石だった。と見えたそれら、実はウガルグの眼球であった。

彼の体は地に還り、目だけがこの世界に残されたのだ。

紫の光をうつすらとたたえたままのこの瞳を、ネトレトは魔族討伐の証として持ち帰ることにした。

おそらくはよきお守りとなって、かの富豪を後の世までも助けることだろう。

リグルはネトレトが背負って歩いた。

アイシスはわき腹を押さえ、ラナの肩を借りながら歩いた。

帰りの道のりはゆっくりと間延びしたものだだった。

たっぷり三日をかけて彼らはカリスト口の街に帰り着き、すぐに病院で手当てを受けた。

アイシスたち三人がきちんとした治療を受けているのを確認すると、ネトレトはその足で富豪の屋敷へと向かった。

「なんと！ 魔族の瞳とな、これは珍しいものを手にいれたことだ」  
土産は想像以上に喜ばれた。

それと引き換えに彼は、旅をするに十分なだけの金額を手渡された。

食事を、という誘いを断り、ネトレトはまた病院へと引き返す。

まるで媚びず、誇らない彼の姿勢を気に入ったのか、旅の手助けが必要となればいつでも声をかけるといい、と富豪は言った。

ネトレトは深く謝して屋敷をあとにする。

アイシスとラナは眠っていた。

代わりにリグルが起き出しており、彼はネトレトの姿を見つけると片手をふってみせた。

「ありがとう。あなたのおかげで助かった」

「いや」

ネトレトはベッドのわきに腰をおろす。

リグルは晴れやかな顔をしていた。

「なんだかこう、すっとしたよ。自分の中でずつつかえていたものが、ようやく流れ始めたっていう感じ。便秘が解消されたときみたいな」

ネットレトは苦笑する。

まったく、彼の口の悪さといったら。

しかしその顔があまりにすがすがしいので、小言はのみこんでおくことにした。

病室には大きな窓がつけられていて、太陽が照りつけている。

やっぱり夏の日差しはこうでなきゃ、とリグルが言った。



## 第五十六話・三日月の女

『聖伝』第五十六話

「キースさん」

宿へ帰ると、受付の女がネットレトを呼び止めた。

客がきていると言う。

自分を訪ねてくる者など、この街にいるだろうか。

ネットレトは訝しく思ったが、待っていたのは見覚えのある男だった。

たしか、例の富豪の屋敷に勤めている。

ネットレトは軽く頭をさげた。

男は品のいい笑みを浮かべて礼を返す。

「突然押しかけてすみません。主人がどうしても言つものですか  
ら」

男が口早に説明するにはこうだった。

魔族が討伐されたことを街の長に報告したところ、彼はいたく喜

び、街をあげて平和を祝おうということになった。

そこで提案されたのが、

「舞踏会？」

「ええ」

カリスト口には、街が誇る美しい広場がある。

海が見渡せるその広場で、大がかりな舞踏会を開こうというのだ。

ぜひご参加をと言う男に、はあ、とネットレトは歯切れの悪い返事をかえした。

985

「しかし私たちは粗野な旅人です。そのような華やかな場には似合いません」

「貴族が楽しむような気張ったものではありませんし、お気になさる必要はありませんよ」

「しかし足を怪我している者もおりますから」

「ならば杖を作らせましょう。その方の背丈はどれくらいです」

ネットレトは

「しかし」を連発したが、男にはすべてうまく返されてしまった。リグルには及ばずとも、よく口のまわる人物である。

最後に彼はこう言った。

「切にお願いします。主人の沽券にも関わることなのです」

引導を渡されたようなものだ、そう言われてしまっただけは断りようもない。

金持ちながらも嫌みったらしくない、かの富豪にネットレトは好感をもっていたから。

不承不承ネットレトはうなずき、男はその返事を喜んで持って帰った。

詳しい日時が決まればまた伝えにくる、と言って。

ネットレトは肩を落としたが、怪我人たちにこれを伝えると、彼らは思いのほか喜んだ。

「舞踏会だなんて！ ぼく、いったことも見たこともないよ」

「俺も。第一、踊り方だつて知らねえからな」

アイシスは海を背にステップを踏む人々の優雅さを思った。上質の絹が擦れる音や、ちらりとのぞく華奢な四肢なんかを。

その美しさは彼の故郷を彷彿と思い出させた。

けっして華美ではなく、しかし品があつて穏やかな優美さ。

ラナの心は別の場所にある。

華やかな会場、酒を飲み交わす人々。

彼の思惑はそれらをすり抜けたところ、きつとたくさん備えられるだろうテーブルの上にあつた。

湯気をたて、食欲をそそるにおいを振りまく料理の数々。

ベッドの上で、ラナはうつとりと目を細めた。

「足の調子はどうだ」

ネットレトの問いに、リグルは右足を持ち上げてみせた。

「体重をかけたら痛むけど、気を遣つてやれば歩くのも苦じゃないよ」

「そうか」

「踊るにも差し支えないね」

ネットレトは苦笑した。

彼らは順調に回復し、ネットレトは図書館に通つて日々をすごした。

男はまた彼の泊まる宿を訪ね、舞踏会は三日後に決まった、と教えてくれた。

「衣装はこちらで用意させていただきます」

男の言葉にネットレトは驚いた。

彼は気楽なものだと言ったはずではなかったか。

盛装が必要となれば、集まる人々もそれなりに緊張をするものだろう。

ネットレトはそういう派手で気詰まりな場が苦手だった。

そんな気負うほどのものではありませんよ。

男はそう言ったが、三日後、手渡されたタキシードは袖を通すにも気が引けるほどに上質な代物だった。

「うわっ。あれだな、エザがいた屋敷でもらったやつみたいだ」

ラナは小さなボタンを留めるのに苦戦している。

今回フリルなどの飾りはなかったため、武骨な彼でも一応さまにはなっている。

長い襟足を細く束ね、いつもとは一味違った雰囲気である。

アイシスとリグルもそれぞれ着替え、ついに観念したネットレトもくたびれたシャツを脱いだ。

背中には火傷のあとが生々しく刻まれている。

右腕には包帯が巻かれていた。例の刺青を隠してしまつたためだ。

アイシスの胸が小さく痛んだ。

禍々しい刺青が消えない限り、彼はきっと自分の過ちを責め続けることだろう。

迎えにきた男に急かされ、四人は会場へと向かった。

広場に近づくにつれ人が増えてくる。

彼らはアイシスたちを見かけると、あああれが、と感嘆の声をあげたり深くお辞儀をしたりするのだった。

中には泣き出す女などもいて、きつとウガルグらに子を攫われた母親だろう。

「ようこそお集まりいただきました。ご存知のとおり、我が街を苦しめ続けてきた憎き魔族が、今回、恐れを知らない男たちによって滅ぼされました」

壇上にあがり、声をはりあげているのが街の長だろう。

恰幅のいい男で、鬚をたっぷりとたくわえている。

長はすこし言葉を切り、効果的に間を置いた。

人々はわつと手を打ち叩き、四人の旅人を褒め称えた。  
アイシスは顔を真っ赤にしている。

「我らは多くのものを失った。ひどく悲しんだ。しかし負の時代は終わった、我らは明日を喜べるのです。今夜は大いに酔いませうぞ。笑いあい、高らかに平和を謳うのです」

「さあいつて」

アイシスたちは背を押されて前に出た。

大きな拍手に迎えられる。

かと思つと、大勢の女に取り囲まれてしまった。

色とりどりのドレスに身を包んだ女たちが、四人の腕を取り、服を引いては私を選べと詰めかかる。

なにごとかとアイシスは目を白黒させた。

「ダンスのお相手を選ぶのです」と男は言った。

「まずは主役が人々の先にたつて踊りますからね。今夜、主役はあなた方です」

ラナは心底ぞつとした。

大勢の前で、たった四人で（パートナーも含めれば八人だが）踊らなければならぬというのか。

彼の目論見では、ダンスに夢中人々をよそに、たっぷりとおいしい料理を楽しめるはずだったのだ。

まさかの展開に、リゲルを除く三人は大いにうろたえた。

また、ここに予想していなかったことがもうひとつ起きていた。

なんと黄色い声を多くかつさらったのはラナだったのだ。

カリストロは商業の街である。だれもが統制された日々を生きている。

小ぎれいな格好の男たちばかりが集う街で、ラナの武骨さは魅力的だった。

彼の素朴で力強い男っぷりは、斬新で目新しかったのだ。

こつもたくさんの女たちに囲まれたことは、ラナにとって初めてのことである。

すっかりしどろもどろになってしまい、相手を選ぶどころの話ではなかった。

「おい、いがぐり。さっさと選んでやれよ、女の子に失礼だろうが」  
茶化すようにリゲルが言う。



彼は片手に杖をつき、もう片手で女をエスコートしていた。

顔の造形はもちろん、くびれの美しい女である。まったくリグルはちゃっかり者であった。

ラナはしばらく唸っていたが、目をつぶると、たくさん伸ばされた手のうちからひとつを掴んだ。

偶然にも選ばれた女は、きゃあと喜び跳ねあがる。

アイシスたちもそれぞれ苦心し、どうにか相手を選び終わった。

まだ舞踏会は始まってもないというのに、彼らはすっかり疲れ  
てみえる。

そんな心を露も知らず、誘うような演奏が始まった。

エスコートする女に逆に引っぱられるようにして、アイシスたちは広場の中央へと進み出る。

「あ、あのっ、ぼく踊りとかしたことなくて」

アイシスは耳まで赤くしてうつむいた。

女はそんな彼にいいことを言ってくれた。

「難しく考えなくていいの。足をどう動かすとかじゃなくて、音楽を楽しめばいいのよ。」

それに、街の人たちはみんなあなたたちのことが好きよ、怖がらないで」

その言葉に救われ、アイシスはなんとか場を楽しむことができた。

そもそも視線など気にする必要もなかったのだ。

観衆の興味はもっぱらリグルのペアに向けられていたから。

リグルが器用な男だということはとつくに知っていたが、彼はダンスもべらぼうにうまかった。

背丈にあわせて作られた杖はよく手に馴染むらしく、それさえステップの一部かと思えるほど。

リグルの先導で身を舞わせる女の頬は上気し、すっかりダンスを楽しんでいる。

華麗という言葉がぴたりと当てはまるふたりだった。

ネットレトの動きはどうもぎこちなかったが、彼の場合は相手がよかった。うまくあわせてくれるのだ。

おかげでどうにか形にはなっていたが、悲惨なのはラナだった。

彼は進んでは女の足を踏み、下がってはズボンの裾を踏んで体勢を崩した。

ラナはすっかり冷や汗をかいていたが、そのうち全体も踊り始めたのでよかった。

肩を落とし、大きく息をつく。

気が緩んだところで彼は料理を乗せた盆にぶつかり、派手な音をたてて再び注目を集めてしまうのだった。

「もうだめ、限界」

一曲目が終わり、ラナはぐったりと椅子に座りこんだ。

アイシスも体を伸ばしていたが、彼はなかなかダンスを気に入ったようだ。

しかしラナが息をつけたのも一瞬、彼らは再び相手を求める女たちに囲まれてしまった。

どうにか抵抗しようともがくが、まるで無駄なあがきだった。今度は軽快な曲が流れはじめる。

「あれ？ リグルはもう踊らないの？」

アイシスの言葉に、リグルはひらひらと片手をふった。

「楽しんでおいで。俺はすこし足を休めるよ」

そう言って彼は右足を指さした。

アイシスの顔がすこしばかり曇ったが、リグルは明るい声で笑った。

痛むわけじゃないから、心配しなさんな。  
それよりもあれ、いがぐりのやつを心配してやらないとね。あれ  
ほど不器用なやつも珍しいよ。

彼は椅子に座ってくつろいでいたが、曲の合間、アイシスがちら  
と視線をやってみると、彼の姿はなくなっていた。

料理でも取りにいっているのだろうか。

「もうだめ、本当に限界」

二曲目が終わり、ラナはしおれるようにして椅子に座りこんだ。

彼の体は緊張で強ばり、一曲目よりも上達するどころかさらに失  
敗を重ねてしまったのだ。

アイシスは思わず苦笑した。

「ちょっと休憩させてもらう？　おいしいものでも食べて元気を出  
そうよ」

その提案は魅力的だった。

ラナはばか正直にも腹を鳴らしながらうなずいたが、しかし女た  
ちがそれを許そうはずがなかった。

彼女らは三度彼を取り囲んだのだ。

ラナはすっかり辟易してしまい、跳ねのける気力もないようだった。

彼を助けようにも、アイシス自身も包囲のなかにあって動けない。

頼みのネットレトも、すっかりもみくちゃにされていた。

ひとつに結んだ髪はよれて乱れてしまっている。

女の力は恐ろしいなあ、とアイシスは身を奮わせた。

そのとき、彼女らの興奮がしんと鎮まりかえった。

ひっそりとしたざわつきだけが残り、どうかしたのかとアイシスは視線を巡らせる。

「あっ」

そしてアイシスは見た。

艶のある黒髪をシニヨン風に結び上げ、黒のドレスに身を包んだ長身の女を。

四肢は長く、透け感のある袖から伸びる腕は、はっとするほどに白くて細い。

通った鼻筋に漆黒の目、吊りあがった口元は間違いなく、

「リグル」

信じられない、といった顔でアイシスが呟く。

美しいのだ。

息をのみ、黙りこんでしまうほどに繊細で、優美で、艶やかで。

ラナは魚がするように口をぱくぱくと動かした。

リグルは迷いなくまっすぐ彼の元へと進む。

「不細工。なに間の抜けた面してんの。おまえのダンスがあまりに下手くそだから、俺が直々に教えてやるうってんだよ」

そう言ってリグルは手を差し出した。

剣を握り、ふりまわしている時と同じとは思えない、白くて細い指である。

ラナは呆気にとられたままでいた。

しかしその足をばしりと襲う痛みがあった。リグルの杖だ。

「痛っ」

「女の子に失礼だって言っただろうが。ほら、はやく選びなよ」

「くそっ、ちよつとでも見とれた俺が間違っていた……」

したたかに脛を打たれ、ラナはちよっぴり涙目にすらなっている。リグルはふうんと鼻を鳴らした。

「見とれたんだ」

「あ、いやっ」

ラナは顔を真っ赤にしたが、ちくしょう、と小さく呟くと荒々しくリグルの手を取った。

いや、そうではない。

リグルはいま、間違いなく女であった。

三日月の名前にふさわしく、凜と美しいリジエアラ・スーであった。

三曲目はゆつたりと落ち着いた風情の曲だった。

なかなか動こうとしないラナを、リジエアラは目でうながす。

やや迷い、それからおそろおそろといった感じでラナは手を伸ばした。

片手をリジエアラの手に、そしてもう一方をその腰に。

「痛いって！ なにしゃがる！」

「おどおどしてんじゃないよ。そうやって怖がるから余計に格好悪いの。堂々としてな、胸張ってさ」

リジエアラは杖をたくみに使い、ラナがへまをしたらすぐにはしりとやった。

これがなかなか痛いのだ。

ラナはすっかりへっぴり腰だったが、しかしリジエアラの指導はとてもよかった。

下手なステップを踏むと途端に足を蹴られたが、時間が経つにつれてその回数も減っていく。

「そう、次は引いて、そう。うん、だいぶ形になってきた」

「そうか？」

ラナの顔がぱつと輝く。

子どもがおつかいをして褒められたかのような、純粹で無垢な笑顔だ。

リジエアラは鼻を鳴らした。しかし嫌味なふうは感じられない。

やがてゆっくりと尾を引くようにして曲が終わった。



男が頭をさげ、女はスカートの裾をちよっぴりつまんでそれに応える。

リジエアラはいつもの顔に戻っていた。

口の右端だけを吊り上げ、いたずらっぽく笑って。

「なかなかよかったよ、その調子でがんばりな。いい女の子を捕まえるんだよ」

「げっ、ばか言え！」

軽口を叩くと、リジエアラは身をひるがえして広場から去っていった。

ラナはしばらくその後姿を見送った。

だらりと下げた両の手を握る。

彼女の腰にそえた手。

触れて初めてわかったことだが、リジエアラの腰は細く、柔らかで、男の自分とはまるで違う華奢さだった。

しばらくして戻ってきたのはすっかり元のリグルだった。タキシードに着替えている。

アイシスは彼を見つけるとすぐに駆け寄った。

途中、料理の皿をちゃっかりくすねてくるのも忘れない。

「驚いたよ、リグル！ とても綺麗だった」

「ありがとう」

リグルは手を伸ばし、アイシスの持つ皿からさくらんぼを拝借する。

「でも、どういった心境の変化？」

おずおずとアイシスが尋ねる。

彼はたしか、女である自分の体を恨んでいたはずだった。男として生まれたかった、父親に必要とされたかったと。

彼の正直な問いに、ははと声をあげてリグルは笑った。

「さあ、なんだろうねえ。なんだか、少し許してやれる気になったんだ。女にも男にもなれない、中途半端な自分の存在をさ。あんたたちが教えてくれたからだよ、俺は俺だって。」

俺はリグルで、リジェアラで、男のつもりだけど、だけどどうしようもなく女なんだ。

でも、それでもいいかかって」

うん、とアイシスはうなずいた。嬉しそうに、にっこりと笑う。

「リグルはとても素敵だよ」

やがてラナとネットレトも加わった。

ラナは両手に皿を持っていて、そのどちらにも料理が山積みになされている。

ばかだね、と言ってリグルは呆れた。

「そんなに混ぜたら料理の味が変わっちゃうじゃない。欲張りも大概にしるよ」

「大丈夫だって、全部おいしく食うからさ」

その言葉どおり、彼はどの料理も本当においしそうに平らげた。

彼らは酒も飲み交わし（アイシスはもちろん控えたが）、ときどきダンスの誘いにも応えながら夜を満喫した。

潮のかがりがせまる広場で、星を見ながらステップを踏む。人々は笑いあい、酒を飲み、そして料理はどれもおいしい。

最高の夜だった。

## 第五十七話：なんてこった

### 『聖伝』第五十七話

ついに海を渡るときがやってきた。

「金がかかるぞ」

そんな彼らに、富豪がいくつかの助言をしてくれた。

海を渡るには舟を借りなければならないのだが、これがずいぶん高くつくらしい。

なんでも舟を操るのは大概がドワーフで、彼らは金にしつこい性格なのだという。

ドワーフは地下水流を見つけるのが得意で、地に住みながら彼らは水とも仲がいいのだ。

そこで小舟で大陸を行き来するのは、だいたいの場合彼らと相場が決まっていた。

「やつらに大金を持っていることを悟られてはならない。あればあるだけぶん取られるからな。旅にはなにかと入り用だろう、すつかり奪われてしまわないようになさい。」

途中でせびられたらば、金は少しずつ払うんだ。そのたびにもうこれ以上はという芝居をしながらね」

自然と彼らの期待はリグルに集まった。

彼の頭のよさは、こういう局面でたいそう頼りになるのだ。

富豪はわざわざ屋敷の外まで見送りに出てくれた。

彼はなかなかの人物であった。

アイシスたちは大きく手を振り、彼に別れを告げる。

港に向かう足取りは軽やかだった。

海上を舟で進むだなんて、いったいどういう心地だろう。

海はアイシスにとって、まるで未知の領域だった。

富豪の言つとおり、船着場にはちんちくりん、もといドワーフの姿が多く見られ、リグルはそのうちのひとりと交渉を始めた。

金はたんまりあったが、うまく誤魔化しながら話を進める。

ドワーフはあごひげをさすりながら品定めするようにリグルの全身を見回していたが、やがてうんとうなずいた。

四人は喜び、さっそく彼の持つ舟へと乗りこんだ。

ドワーフは名前をグッグルといった。

敵しい面構えの男だったが、つぶらな瞳がどこか愛嬌を感じさせる。

しかしいつも不機嫌で（ドワーフはしかめ面をした者が多かった）、舟の中でもあまり口を開こうとはしなかった。

アイシスはすっかり興奮していた。  
身を乗り出し、舟の先が水をきって進むさまを見つめている。

無数の泡が跳ね、顔にかかる。  
アイシスは子どものように声をあげ、手を伸ばして海水に触れてみたりした。

海の水はつめたく、そして優しい。

「おい、あまり顔を出すんじゃないね。舟の均衡が崩れて転覆すつぞ」  
グッグルはもごもごと唸るように言った。ひどく訛った、乱暴な口調である。

アイシスは慌てて顔を引っこめた。  
転覆だなんて冗談じゃない。

ネトレトは長い足を伸ばしてくつろいでいた。

まるで湿気のない風は肌に心地よく、短い髪が頬をくすぐる。  
目を閉じれば心地よい眠りに落ちてしまいそうだ。

リグルは腰をかかめ、足をよく揉み解していた。

彼のそばには白く光る杖が置かれている。

富豪が彼のために贈ったものだ。

ラナはアイシスと同じく気が昂ぶっており、海水をすくってはきやっきやとはしゃいでいた。

舟の行き来は頻繁にあった。

しかし彼らのように小舟で進んでいる者はあまり見かけなかった。どれも大きな船なのだ。

おそらくは貿易船だろう。

西の文化と東の文化はこうして交換されているのだ。

百人は優に乗れるかという船がそばを通るたび、アイシスたちの小舟は大きく揺れた。

まるで木の葉のような頼りなさである。

それでもグッグルの櫂を操る手さばきは見事なものだった。

海面が光を反射し、そのせいでひどく眩しい。アイシスは目を細めた。

すっかりカリスト口が遠くなっている。

反対側に目を凝らせば、うつすらと東の大陸が姿を見せ始めていた。

東の大陸、別名は宿す大陸。

大陸の中央やや下側に、ローハーという小さな島国がある。地図にすると、それがまるで子どものように見えるのだ。

ために東の大地は愛情をこめて宿す大陸、もしくは母なる大陸と呼ばれることもあった。

ふと舟が動きを止めた。

風を切るのを楽しんでいたアイシスがふり返る。

「どうかしたんですか？」

グッグルはなにも答えず、ただ手を突き出した。訳がわからずアイシスは首をかしげる。

グッグルはからまりあつた鬚をもごもごさせた。

「金」

「金？ もう払ったろう」

ラナが呆れて声を出す。



交渉の末、グッグルには相当な金額を渡したはずだ。それをいまさらどうしろと言うのか。

「あれあ、半分まで。もう半分向こういく、だからまた金を払え」

「ふざけないでくれる。交渉のときはそんなこと欠片も言わなかったよな」

「最初から俺は片道のつもりだった」

「ああ、いやだ。こういうへりくつ野郎は大嫌い」

リグルは大きいため息をついた。

話し合うのもばからしい、といったようすで手をふる。

グッグルは腕を組み、がんとして譲らなさそうだ。

アイシスはすっかり困ってしまった。

同じだけの額を払えと言われたら、実は払えないこともない。

しかしそうしてしまえば彼らは再び一文無しだ。

東の大陸についたら、また金稼ぎをしなければならぬ。

そういうことにはばかり時間を割いている余裕はないように思われた。

楽しい夜にはすっかり忘れてしまいそうになるが、アイシスは“

あれ”と戦わなければならないのだ。

「ねえ、グッグルさん。ぼくたちは旅の途中で、このお金はそのために必要なんだ。もう少しだけなら払えるけれど、さっきと同じだけはもう無理です」

アイシスは切に訴えたが、しかしグッグルは聞き入れなかった。それでもなんとか、とアイシスは頼んでみる。

そのうちラナが我慢できなくなったようだ、立ちあがって声を荒げた。

「そもそも、おまえが約束を破ったんじゃないか！ あれだけの金額で向こうまで渡してやるって、リグルに言っているのを俺は聞いたぞ。

なのになんでアイシスが頭を下げなきゃならないんだ、おかしいだろうが！」

「ラナ、落ち着いて」

ことを荒立ててはどうにもならないとアイシスはなだめたが、しかしラナの怒りは収まることがなかった。

彼は卑怯者が大嫌いなのだ。

人を悲しませるような嘘をひどく憎む。

グッグルは最初、彼の気迫にすっかり押されてしまっていたが、身を震わせると彼もまた立ちあがった。

「おかしくねえ！ 俺、言っただけえ！」

「払えないなら降りろ、こっから半分泳いでいつちまえ！」

言うなり彼は足を踏んぱり、体を左右に揺らしはじめた。彼の動きにあわせて舟が傾く。

「あっ」

「うわっ」

あっという間に舟はひっくり返り、グッグルも含めた五人は海へと投げ出されてしまった。

すぐにグッグルは舟を元に戻して這いあがる。

その背中をむんずと掴む手があった。

ぎょつとしてふり返ると、金色の瞳が彼をじっと見据えていた。

「あまり感心できる仕打ちではないな」

静かな声だったが、しかしネットレトの声には怒りが含まれていた。

すぐにリグルもよじ登ってきた。

「じいっ！」

リグルはすっかり頭にきており、グッグルを見ると掴みかかった。慌ててネットレトがそれを遮る。

舟のうえで暴れられ、また転覆でもしよつものならたまらない。

リグルとてばかではない、すぐに拳を収めた。

彼らの険相に、グッグルはすっかり怯えてしまったようだった。

ふつう、海に落とされようものなら怖気づき、舟べりにすがりついて大人しくなるものだ。

そうなればあとは簡単、持ち金はすべてグッグルのものとなる。

それがどうだ、彼らときたら。

怖気づくどころか、逆に凄みを増しているではないか。

「あれ」

グッグルが震えあがっていると、リグルがとんきょうな声をあげた。

舟から身を乗り出し、海面を見やる。

「嬢ちゃんたち、あがってこないね」

ふとネットレトは首をかしげた。なにかが引つかかる。

そうだ、彼らは海を知らないのではなかったか。

ラナは海水が塩辛いことも知らず、口にふくんで嘔き出しさえしたではないか。

「まさか、彼らは泳げないんじゃないか」

ひえ、と声をあげるとリグルは海へと飛びこんだ。静止する間もない。

派手な水しぶきをあげて彼は潜っていったが、しばらくすると再び浮かびあがってきた。

「だめだ！ 見当たらない」

「とにかくあがっておいで。彼女に頼もう」

「彼女？」

尋ねるよりも早く、ネットレトは詠唱を始めている。

風が巻き起こったかと思うと、目に美しい超越種、ヴァネッサがその姿を現した。

なるほど、トリグルは舌を打つ。

精霊はいくらでも水に潜っていることができる。

そう息の続かないリグルより、彼女のほうがずっと効率よくアイシスたちを探してくれることだろう。

グッグルは腰を抜かした。

精霊を見るのは初めてだったらしい。

あくどい男よの。

「ひっ」

彼にヴァネッサの言葉は聞こえなかったが、しかし彼はすくみあがった。

ネットレトはため息をつく。

「きみまで彼をいじめるのか。それよりアイシスとラナを助けてやってくれ」

御意。

すぐにヴァネッサは海に潜った。

黒い衣が波に揺れ、すぐに見えなくなってしまう。

リグルは落ち着かないようすで爪をかんだ。

「もしあいつらになにかあったら」

鋭い目でグッグルを睨みつける。

その眼光の鋭さに、グッグルはすっかり身を小さくしてしまった。

リグルはその先を言わなかった。

紫の炎が揺れる瞳は、海面をじっと見守っている。

グッグルは生きた心地もなかった。

ぴちゃぴちゃと頬を叩かれてアイシスは意識を取り戻した。

頭がうまく回らず、ひどく体が重い。

しこたま海水を飲んでしまったのだから仕方もないのだが、いまのアイシスにはそのことも分からなかった。

自分がどこにいるのかさえも、彼には分からなかったのだ。

薄暗いところだった。

不恰な岩がいくつも突き出ており、天井もごつごつとしている。岩壁はしっとり濡れていて、真夏のはずなのにどこかひんやり

と涼しかった。

鍾乳洞か？

アイシスは首をかしげた。

たしかさつきまで舟の上にはいたはずなのに。

気がついたか。

「うわあっ！」

アイシスはすつとんきょうな声をあげた。

その声は四方で反響し、その騒がしさにアイシスは思わず顔をしかめる。

そんな彼を、水の精霊アキュロスはおかしそつに見守っていた。

彼女は水色の衣を着ており、髪も衣服もしつぱり湿っているようだ。

涼やかな目をしている。

アイシスはまずその美しさに目を見張り、それからおそおそと口を開いた。

彼は水の精霊を見るのは初めてだったのだ。

「あの、あなたは……」



我が名はアキュロス、水を司る精霊じゃ。

「水の？　じゃあ、あなたがぼくを助けてくれたの？」

アキュロスはくすくすと笑った。

鈴のような笑い声、ユフィロスレジアと同じだ。

すぐとなりにはラナが転がっていた。

アイシスはアキュロスがやったのと同じようにして彼の頬を叩き、おかげで彼もすぐに気がついた。

「げっ、なんだここ」

鍾乳洞はどこか不気味に美しい。

滴る水滴が静かに音をたてている。

呆氣にとられたようすのラナに、アイシスはアキュロスを紹介した。

彼女が助けてくれたのだ、と。

「そりゃどうもありがとう。でもどうしてだ？　じゃあ、使役者がそう命じたのか？」

「あ、そういえば」

なるほど、とアイシスもようやくその考えに至った。

精霊がいるということは、その使役者もいるということだ。

それを探ねようとしたとき、鍾乳洞の奥から唸るような声が聞こえてきた。

「うるさい」

刺すように冷たい、掠れた声だった。

アイシスはひたと口を閉じる。

思わず顔を見合わせ小さくうなずくと、ふたりは声のほうへと足を進めた。

アキユロスが静かについていく。

鍾乳洞は案外狭かった。

ややも歩けばすぐ大きな壁に行く手を阻まれてしまったのだ。

アイシスはせわしなく辺りを見回したが、人の姿はどこにもない。

ではどこから声がしたというのだろうか。

「下じゃ。」

「下?」

言われてアイシスは視線を落とす。

そしてひっくり返った声で叫んだ。

大きな岩壁、その下の辺りに人が 生えていたのだ。

まさか、とアイシスは目を疑う。

「まったく騒がしい。アキュロスよ、また変なものを拾ってきたな」  
「げっ、喋った！」とラナが身をのけぞらせる。

それはしなびた男だった。

体のほとんどを岩壁に吞まれていて、顔と胸とがわずかに見えるばかりだ。

その顔には深いしわが刻まれていて、そうとう年を取っているのだろう。

だけどいったい、どうして？

なにがどうなったら、鍾乳洞から人が生えてくるのだろうか。

アイシスの頭はこんがらがった。

そんな彼らを通りこし、アキュロスがふわりと舞った。

男の傍らに立ち、その頬に自らの顔を寄せる。  
男はうつすらと目を開いたが、そこに力はまるでなかった。

「そんなにここの暮らしがいやなら、私など捨てていけばいいものを」

そのようなこと。

アキュロスは悲しげな目をしている。

彼女は男ともっと話したいようだったが、しかし男は再び目を閉じてしまった。

息をする音さえたてない彼は、そうしているとまるで石像のようだった。

アキュロスは身を震わせ唇を噛み、そつとうしろにさがった。ア  
イシスたちもそれに続く。

「絶対者？ あの人か？」

驚いてアイシスは声をあげた。

慌てて口を押さえる。

鍾乳洞で、彼の声はあまりに大きく響くのだ。

心配せずとも彼はもう眠った。一日のほとんどの時間を彼は眠ってすごしておる。

「でも、どうして」

ふたりの疑問は尽きなかった。

彼はいったい何者で、どういう経緯でここにきて、そして岩壁の一部となってしまったのか。

正直、彼は力ある人物には見えなかった。枯れかけた木のように儂く、頼りなかった。

生きようとする気力がまるで感じられないのだ。

アキュロスが美しい顔を悲しみにゆがめて語るにはこうだった。

男の名前はマシヨーカという。

彼ははつらつとした男だった、聡明な妻と子どもたちとに囲まれて。

マシヨーカはユリシア王城に勤める魔導師だった。

水の絶対者である彼の力は重宝されたし、それは彼の誇りであった。

しかし、なにかが狂った。

王は良識のある立派な人物であったが、年をとるにつれてそれが変わり始めたのだ。

民を一番に考えていた王は戦争を求めようになり、どうにかして他国を侵略しようと考えてるようになった。

マシヨーカは身を挺してそれを諫めた。

彼の知る王ならば、その忠言に耳を傾けてくれるはずだった。しかし手遅れだったのだ。

王は怒り、彼の家族を捕らえて処刑にしてしまった。

マシヨーカは家族の首が順に落ちていくのを、目の前で見せつけられたのだ。

彼は枯れてしまった。

喜びも悲しみも、もはや彼の胸を潤してはくれなかった。

なにも考えず、なにも口にせず歩き続けた。

やがて骨と皮ばかりになった彼の前に海が広がった。

マシヨーカは吸いこまれるようにして海へと身を投げた。

私は彼を死なせたくなかった、そういう形では。悲しみの底にあつたまま死んでは魂も迷おう。私は沈んでいく彼の体を引き、海の中を駆けた。

そして偶然この場所を見つけたのじゃ、だれも知らない鍾乳洞を。

「じゃあ、ここは海の底だっていうの？」

アキュロスはうなずき、アイシスは呆氣にとられてしまった。

「信じられないなあ。海の底でもしっかき息をしているなんて」

水からなにかを得ることなど、私には造作もないこと。

アキュロスは佇まいを正した。

アイシスたちの正面に立ち、まっすぐふたりの目を見つめる。

少年。我が君を救ってやってはくれまいか。

アイシスたちは再び顔を見合わせてしまった。

## 第五十八話：ささやきの洞窟

『聖伝』 第五十八話

耳慣れた声が聞こえたのは、いったいどうしたものかと考えを巡らせているときだった。

ああ、見つけた。探したぞ、まったくこの子犬どもは。

「わ、ヴァネッサ？」

美しい超越種は、水しぶきを散らすこともなく海からあがってきた。

小さな顔を揺らすと、髪につけた装飾具が涼やかな音をたてる。

間の抜けた声を出すな、エルフの王。せっかくのよい見目が台無しじゃ。

アイシスはすっかり顔を赤くしてしまう。  
ヴァネッサはおかしそうに手を口にそえ、ころころと身を震わせた。

それより早く戻ってくるがよい。ネットトたちがいたく心配しておる。



あつとアイシスは声をあげた。そういう配慮をすっかり忘れていた。

戦いにおいてさえあまりヴァネッサに頼ろうとしないネットレトが、ふたりを探すためだけに彼女を呼び出したのだ。

彼がどれだけ心を痛めているかは十分に予想できた。

アイシスは口早に説明した。

アキュロスは彼に紹介されると恭しく頭を下げた。

精霊の世界でも、やはり超越種は尊敬と畏怖の対象になるらしい。

それで、汝らはそのマシヨーカとやらを救おうというのか。

「うん。どうしたらいいのかまるで分からないけど、でもアキュロスはぼくたちを助けてくれたんだ。そしてそれ以上に彼を助けたがつている、どうにかしてあげたいんだ」

彼らにはそう言うておいてくれないかな、とアイシスは頼んだ。

ぼくたちは無事で、ちょっと帰るには時間がかかるけど心配いらないって。

すんだ際には望むところまでお送りする、とアキュロスが口を挟む。

それでヴァネッサも納得し、黒い衣をたなびかせると、彼女は再

び海へと潜った。

「とは言ったものの、だ」

「どうすれば彼を救えるものか、さっぱり」

アイシスとラナはあわせてため息をついた。

鍾乳洞に半ば吞まれた男など、聞いたことも見たこともない。

苦しみのうちを聞こうとて、彼はほとんど眠りっぱなしなのだから仕方ない。

「奥さんたちを殺されてしまったから、マシヨーカさんは気が触れてしまったんだよね。」

彼女らに会いさえすれば、また心を取り戻せるかもしれないけど」

「でも、死んだ人間にどうやって会えるっていうんだ」

ふたりは顔をつきあわせ、声をひそめて相談した。

しかし、ひそひそ声が反響すると、これがおそろしく不気味なのだ。

何百という目に見えない者たちが囁きあっているような。

アイシスはぎょっと肩をすくめて口を閉じた。

「まったく、厄介ごとを抱えこむのが好きなようだな」

「うわあっ！」

そんなときに声をかけられたものだから、アイシスはとびきりの悲鳴をあげてしまった。

何人ものアイシスが続けて“うわあっ！”とやる。  
まったくうるさくて仕方がない。

「なにをそう驚く。まるで幽霊でも見たようではないか」

「リ、リヒィ＝ミヒィ！ どうしてこんなところにつ

「水の中だろうが火の中だろうがぼくには関係ない、ということだよ」

すこしずれた答えを返し、飄々とリヒィ＝ミヒィは岩壁にもたれかかった。

彼は白くてぶよりとしていそうなものを被っていて、なにやら細かいひもがいくつか垂れ下がっている。

今回の被り物は、いつもに増しての悪趣味といえよう。

ラナがその珍妙さに目を離せずにいると、リヒィ＝ミヒィはにや

りと笑った。

「くらげだ。きみたちは知らんだろうが、これがけっこう美味しい」

「へ、へえ」

ラナの返事もつい乾いたものになる。

それで、とりヒィ＝ミヒィが言った。

「どうするつもりだ。マシヨーカの心の鎖は、なにかを訴えかけたところでどうなるものでもないぞ。なにせ長い時間が経っている、鎖もすっかり錆びついてしまった」

「うん、だからどうにか奥さんたちに会わせてあげたいな、と思ったんだけど」

「会わせてどうする。彼女らが迷いなく成仏できたことを知ったとて、それがなんの慰みになろう」

「慰めるとかじゃなく、背中を押してあげてほしいんだよ。彼はすっかり前に進むことをやめている、だって愛する者をいつぺんに失ってしまったから。」

「ほくもある時そうだった、記憶を封じこめて自分の身を守るつとでも、いつまでもそれじゃだめなんだ。」

「悲しみと絶望を知り、受け止め、背負ってでも足を踏み出してやらなくちゃいけない」

ほう、トリビィ＝ミビィは声をあげた。満足げにゆっくりとうなずく。

あごに手をそえる姿は、子どもの形をした彼にはとても似合わないものだった。

「なかなかいいことを言う。旅に鍛えられたな、エルフの王。そういう考えならばぼくも反対しない」

ついてくるがいい、と彼は言った。

うつすらと宙に浮かんだまま、彼は迷いなく進んでいく。

訝しく思いながらついていくと、リビィ＝ミビィはマシヨーカの前で足を止めた。

見守る者よ、そなたなにをしようというのじゃ。

「久しいなアキュロス。なに、きみのご主人を正気に返してやろうというのね」

どうやら彼らは顔見知りのようだ。

リビィ＝ミビィ、まったく謎に包まれた人物である。

「下れ、炎帝　サルマン」

アイシスとラナは思わず顔を覆った。

すさまじい突風だ。

小さな石が風に巻き上げられては頬や腕を打った。

それが弾けるようにびたりと止んでしまうと、炎の絶対種サルマンの姿がそこにあった。

雄々しくも凜とした美しさ。

アイシスがこれまでに見たサルマンとは比べようもないほどの華麗さだった。いや、どの精霊よりも。

夢で見るユフィロスレジアさえ、彼女のたじろがせるような美しさには敵わないのではないか。

それは純粹にリヒイ＝ミヒイの力の強大さを知らしめた。

「なにが始まるんだろう」

アイシスは首をひねる。

どうやらおとなしく状況を見守るしかなさそうだ。

リヒイ＝ミヒイは両手を上にあげた。

サルマンは身をくねらせてその動きに順ずる。

彼が手をおろすにつれ、サルマンの体は縮みはじめた。

アイシスのはつと息をのむ。

リヒイ＝ミヒイの手が胸の前であわされたとき、サルマンの姿はすっかり火の玉と化していた。

リヒイ＝ミヒイは当然のようにそれをマシヨーカの胸に押しこむ。

リヒイ＝ミヒイ！

「騒ぐな、死ぬものではない。気づけ薬のようなものだ」

リヒイ＝ミヒイは落ち着いたものだ。

火の玉は彼の小さな手に押され、ゆっくりとマシヨーカの体内へと入っていく。

それがすっかり入りきってしまった瞬間、まばたきをする間であったが、マシヨーカの体が炎に包まれた。

「うわっ」

ラナがすつとんきょうな声をあげる。

しかし、さらに驚くことに、マシヨーカの体が動き出したのだ。いや、鍾乳洞そのものが揺れ動いている。

「目が覚めたか、悲しき水の絶対者よ」

「リビィ＝ミビィか」

「迎えにきたのだ。きみは海の底で腐るべき人物ではない、さあ起きよ」

その声に誘われるようにして、マシヨーカは岩壁から身を乗り出した。

彼を包みこんで離すまいと見えた壁は、おもしろいほど簡単に崩れ落ちていく。

まず彼の胸が露わになり、続いて腰、腕、足とが抜け出した。

その細さといったら。

骨と皮だけ、という言葉がこれほどに似合う体もあるまい。

すっかり自由になってしまうと、マシヨーカは支えがなくなっ  
てよろめいた。

長く自分の力で立っていなかったのだ、仕方もない。

崩れそうになる彼を、アキュロスが献身的に支えた。

「ああ、アキュロス。おまえはまだここにいたのか」

否とよ我が君。私は最後までそなたのそばにおる。



マシヨーカはひっそりと笑った。

「さあ、いくがいいマシヨーカ。少年たちが希望の光だ」

「えっ！」

アイシスはうろたえた。

いけと言われても、しかしどこへ？

まさか本当に、死んでしまった妻たちの元へと連れていけと言っ  
のだろうか。

「宿す大陸の北の果て、人の息のかからない場所に洞窟がある。さ  
さやきの洞窟という。」

そこには無数の輝石があり、そのすべてに魂が宿っている。生ま  
れ変わりを待つ魂たちだ。彼らはいつてもささやいている。

そこへいけ、いってマシヨーカの背を押してやるがいい」

「そ、そこにいけば奥さんたちの声が聞こえる？」

「可能性はある」

アイシスとラナは顔を見合わせた。

いくしかないだろう、こつなつては。

いざ、ささやきの洞窟へ。

舟の上は静かなものだった。

ネトレトは腕を組んで目を閉じ、リグルは舟べりに肘をついて不機嫌だ。

グッグルは彼らのようすを窺いながら、必死で櫂をくっていた。

まったく彼にとっては災難である。

ひいひいと情けない声をあげながら、一路東を目指して小舟は進んだ。

もうじきに陸へつく。妙な叫び声が聞こえたのはそんな時だった。

「う……わああああ！」

すっかり裏返ったその声に、リグルがはっと顔をあげる。

見れば、海面から太い水柱が上がっているではないか。

そしてその頂点には黒い影。

細い手足をばたばたと動かす、その姿は間違いなく、

「アイシス、　　ラナ」

やがて水柱は小さくなり、悲鳴をあげながら彼らは大地に尻もちをついた。

「ア、アキュロス！ もう少し優しい方法はなかったのかよ！ つて伝えてくれ」

「いや、ラナの声は聞こえているよ」

すまぬ。

まったく騒がしい一群である。

砂浜にはおなじみのふたりと、それから見たこともない精霊がひとり、そしておそらくは人間だろうしわがれた男がひとりいた。

リゲルは目でグッゲルを急かす。

太陽が照るつけるなか、大粒の汗を飛ばしてグッゲルは先を急いだ。

「おーい！ ばかども、生きてたか！」

「わっ、リゲル！」

リゲルは身を乗り出して手をふっている。

ネトレトも優しくほほ笑み、手を軽くあげて見せた。

「心配したよ、というか呆れた。泳ぎ方も知らないなんて、恥ずか

しいったら」

「へへ、ごめんね」

岸が近づくとリグルは身軽に舟から飛び降りた。ネットレトもうしろに続く。

グッグルはやっと人心地がついたといったようすで、すっかりしおれかえっていた。

「それで、いったいなにがあったの。海の底でなにを楽しんでいたってわけ」

リグルはちらと視線をめぐらせる。

太陽を見て眩しそうに目を細めるマシヨーカに、どうなることやらと気を揉んでいるようすのアキユロス。

アイシスは彼らを紹介してやる必要があった。

「へえ、絶対者ねえ」

リグルは感心したように声をあげた。

これで彼らは四人の絶対者すべてに出会ったことになる。  
力が力を呼ぶという言葉は、やはり真実のようだ。

「ささやきの洞窟だって。色男は知ってる？」

「いや、初めて聞いた」

「ふうん。一番の識者でも知らないんだから、相当な奥地にあると見ていいね。まず地図になんかは載っちゃいないだろう。

どうするかなあ」

四人と精霊アキュロスは、しばし顔をつきあわせて考えにふけた。

マシヨーカは砂をすくってはこぼしを繰り返している。指の間をくすぐる砂の感触がたまらないらしい。

そのとき、すっかり忘れられていた人物が口を開いた。

ドワーフのグッグルだ。

彼はこの状況の珍妙さに引き留められ、どうも逃げ出すことでもできずにいたのだ。

「あ、あのう」

リグルが片目を開け、じろりとグッグルを見据える。まだその瞳にはうっすら怒りが残っているようだ。

グッグルは大きな手を広げて顔を隠した。  
敵つい見た目とは裏腹に、どうやらけっこうな小心者らしい。

リゲルは声をあげて笑った。

するどい目つきは彼なりのいたずらな戯れだったのだが、グッグルには刺激が強すぎたらしい。

「そう怖がらないでくれる、取って食いやしないさ。それで、なんなの」

「あ、あおう、その」

グッグルはすっかりしどろもどろだ。

焦ったためか、ひどい訛りがさらにひどくなっている。  
おかげで聞き取るにも一苦労だった。

「そのう、俺、知ってる。ささやきの洞窟、ドワーフはみんな憧れる」

「本当に？ 場所もわかりますか？」

「お、おおう」

アイシスは跳びあがって喜んだ。

無邪気なはしゃぎように、グッグルはすっかり圧倒される。その肩をラナが乱暴につかんだ。

「よし、じゃあ案内してくれるよな」

グッグルはどんぐりのような目をぱちぱちとしばたかせる。もう一方の肩をリグルがつかんだ。

「そりゃ当然だよな。なんせ、あんなひどい目に遭わせてくれたんだからさ」

「お……」

グッグルは縮みあがってしまい、ネットレトは思わず苦笑いをもらした。

一行はついに東の大陸へと足を踏み入れた。

港町は大勢で賑わっている。

できればすぐに食事をとりたいところだったが、その前にまず彼らはひなたぼっこをする必要があった。

海に落ちたせいで、髪や衣服はしっぽりと濡れてしまっていたから。

「まったく災難だよ、こんなじゃ店にだって入れやしない」

言葉裏になにをかにおわせながら、リゲル。  
グッグルはびくりと身を固くした。

「あーあ、喉が渴いたなあ。果汁たっぷりのさっぱりとしたジュース、飲みたいなあ」

「いいねえ。俺もさっぱり」

「ぼくは甘いのがいいなあ。マシヨーカさんは？」

マシヨーカはゆっくり首をふる。

だめだよ、とアイシスが言った。

「これからたくさん歩かなきゃいけないんだし、しっかり栄養を取らなきゃ。」

じゃあマシヨーカさんは牛乳ね。ネットレトは？」

「私は」

ネットレトは言いよどむ。

このいたずらに、自分も参加しろというのか。

彼はそういった人物ではなかったが、しかし三人の期待に満ちた顔といったら。

ネットレトは肩をすくめた。

「さっぱりで」



「よし、決まり。さっぱりがみつつに甘いのがひとつ、あとそれから牛乳ね」

リグルの声はすっかり笑っている。  
牛乳という発想が、彼にはなかなかおもしろかったようだ。

太陽が照りつける砂浜で牛乳だなんて。

リグルは財布をこそこそやると、銀貨をいくつか取り出した。  
当然のようにそれを受け取るのはグッグルだ。

「はい。間違えないでよね、注文。それに、つり銭をくすねようっ  
たつて無駄だよ、ジュースの相場なんて知れたものなんだから」

「お、おう」

「でも、自分にもジュースを買うなら別だよ。とびきりおいしいの  
をね」

グッグルの顔がぱつと明るくなった。彼はひどく単純なのだ。

その単純さゆえに愚かな行動に出ることもあったが、それでも彼  
は愛すべき人物であった。

小走りに街へと駆けていくグッグルの背を見送り、アイシスたちは  
穏やかな気持ちでほほ笑んだ。

## 第五十九話：進まなきや

『聖伝』 第五十九話

一行は思い思いに時間をすごした。

アイシスとラナは脱いだシャツを適当な枝にかけ、海へと走っていった。

ネットレトは服を着たまま風通しのいい木陰に座っている。

リグルもそのとなりに腰をおろしていたが、やがて勢いよく立ちあがると彼もまた海へと駆けた。

水を蹴り、すくってはかけ、三人はすっかりはしゃいでいる。

服を乾かす意味がないな、とネットレトはため息をついた。

「まったく騒がしいな」

気がつけばマショーカがとなりにいた。

彼のくぼんだ目は頼りなさげに揺れている。

「海の底でも彼らはああだった。おかげで目を覚ましてしまったよ」

「すみません。しかし、あれが彼らですから」

ネットレトの口元に笑みが浮かぶ。

ふと見やれば、マシヨーカの唇もつつすらと曲げられていた。

「昔を思い出すよ。私もああして笑っていた、そしてそのそばには子どもたちがいた」

マシヨーカは大きく息をつく。

ネットレトは彼をかわいそうに思った。

辛い現実から目をそらすあまり、枯れるようにして命を終えようとしていた哀れな男。

水の絶対者として多くの名声を得ながら、いまの彼はあまりにみすばらしかった。

彼を救いたい、ネットレトは本心からそう思った。

やがて砂を散らしながらグッグルが帰ってきた。

彼は丸い盆を持っていて、きつと店で借りたのだらう、そのうえに六つのコップが乗っている。

はい、とアイシスに差し出されたのはこってりとしたメロンのジュース、ラナたちには爽やかなパインのジュースだった。

マシヨーカには律儀に牛乳が手渡される。

彼はすこし戸惑ったが（真夏の砂浜で牛乳だって？）、汗だくのグッグルを見てはおとなしく受け取るほかなかった。

「あつ、ずっこ！ こいつ、ミックスジュースなんか買っていやがる」

リグルが顔をしかめ、しかしグッグルはお構いなしでコップを傾けた。

ミックスジュースにはたくさんの果実が必要で、ためになかなか高価なのだ。

グッグルは満足げに鬚を濡らし、わずかに銅貨を六枚だけ返してよこした。

この野郎、とラナが彼のコップを奪い取る。

「おっ」

グッグルが抗議の声をあげたが、それこそお構いなしである。

ひとつのコップをめくり、ラナとグッグルの追いかけっこが始まった。

「暑いのによくやるよ」

呆れた声でリグルが言う。

「ちゃっかり者の彼は、ラナが置いていったパインジューズまでいただいてしまった。」

「走り疲れて帰ってきたラナが、非難の叫びをあげたのは言うまでもない。」

「ああ、よけいに喉渴いた。もう服も乾いたし、さっさと街へいこうぜ。腹ごなししなきゃ」

言うなりラナはさっさと歩き出す。

ジューズを取り返したグッグルも、上機嫌でそのあとに続いた。

「しかし珍妙な一行だね。エルフの王に闇遣いに熟れたいがぐり、人にならざる俺。」

「そのうえけちなドワーフと、かすかすの絶対者ときたもんだ。こりや目だって仕方ない」

まさにリグルの言うとおりだった。

六人は一群となって歩くだけで注目を集めた。

「飯屋に入ってから、その食べっぷりでも観衆の興味をそそるのだった。」

「ラナはもとより、グッグルの食欲がまたすごいのだ。」

「彼はまるで遠慮のかけらも見せず、運ばれてきたものを次々と平らげるのだった。」

鬢には食べかすが絡み、お世辞にも上品とは言えたものじゃない。

そのうえ彼は満足してしまうと、特大のげっぷをひとつかましたのだ。

「ばか、ちょっとは控えろよ」

リグルはすっかり肩を落とした。

彼を案内役にするのは、どうも食費の面で苦勞が増えるのではないか。

まったく海に落ちたのが災難の始まり、彼は一刻も早くささやきの洞窟へいつてしまいたかった。

道のりはまるで楽ではなかった。

グッグルの足は頑健で疲れることを知らなかったが、問題はマシヨーカだった。

彼はひどい猫背で、一步踏み出すたびに細い体が頼りなく揺れる。一行はしょっちゅう彼のために休んでやる必要があった。

「すまない」

大きく肩で息をしながらマシヨーカが言う。

「何年ぶりだろうか、歩くことなど。  
正直、なぜ自分が歩いているのか、なにに向かっているのかも分  
からないのだ」

「長い時間に多くのものを奪われすぎたんだね。それを取り戻しに  
いくんだよ」

リグルの言葉に、マシヨーカはうつすらと顔をあげる。  
力のない目に少年たちの笑顔はひどく眩しい。

アイシスは薄ぼんやりと考え事をしていた。“あれ”のことだ。

世界が始まってからずっと、彼は孤独に生きてきた。  
いったいなにを思っただろう。

彼はエルフの歌を知っているだろうか、美しい歌を。  
彼は太陽の眩しさを知っているだろうか、朝露を照らす澄んだ光  
を。

岩壁に呑まれたマシヨーカを見たとき、アイシスがまず思ったの  
はどうしてか“あれ”のことだった。

彼は、エレンディウスは負の感情に呑まれて動けず、それは苦し  
んだに違いない。

マシヨーカはなかなかがんばった。

リヒイ「ミヒイの気つけ薬とやらも効いたのかもしれない。

頼りなかった足取りはしだいに力を取り戻し、一行は流れるように道を進んだ。

しだいに通りすぎる村も見当たらなくなっていき、気づけば突き出た岩がそっけない山道へと出ていた。

「俺の出身、このあたりだった」

グッグルが太い腕をふって言う。

彼は日を経るにつれ、四人の旅人に馴染んできたようだった。

「ささやきの洞窟、もうすぐ。あと山をふたつ越えっぞ」

「げっ、どこがもうすぐだ。山って針みたいに険しいじゃねえか」

ラナがげんなりと息を吐いた。

北に進むにつれ、山の傾斜はきつく辛くなってきた。

それでも一行はめげなかった。

ささやきの洞窟がいかに素晴らしいかを、グッグルが雄弁に語って聞かせるからだ。



訛りの強い彼の言葉は力強く、しかしどこか照れくさそうで、まだ見ぬ輝石のきらめきにアイシスは思いを馳せた。

マシヨーカとはたくさんのお話をした。

彼の静かな瞳は、多くの知識で満ちていた。

ネットレトは彼を信用に足る人物と見たし、それで大抵のことは憚りなく話した。

マシヨーカはそのひとつひとつを丁寧に聞き、ときにはいい助言をくれたりもした。

そういうとき、大概グッグルはラナと遊んでいた。

彼は愛すべきドワーフであったが、その単純さを信頼するには時間が足りなすぎたのだ。

「エルフの始祖、その悪の心とはな。心が分かれて存在しうるとは驚いたが、その片割れがいまに生きているのも驚きだ」

マシヨーカは灰色にくすんだ瞳でアイシスを見た。

「きみは呪うか？ 自分の生まれを」

「いえ」

アイシスは反射的にそう答えた。

そしてそのことにすこし驚いた。

「と、言い切ることはまだできません。どうしてぼくがって、やっぱり時々思うから。だけど逃げ出そうとは思いません。もう迷わないと決めたから」

「そうか」

そばで話を聞いていたネットレトは、その言葉をとて心強く思った。

エルフの少年と出会ってから、数えてもまだ一年にも満たない。世間知らずの少年は、しかしおそるべき速さで成長を遂げていた。

「それにしても、絶対者の力をもしのぐとは。その“あれ”とやら、もはや一存在として自由に動けるといふことだな」

「だと思いません。一度など、私たちは手ひどくやられましたから」

アイシスはぞつと身を震わせた。

なんの抵抗もできなかったあの時。

“あれ”の力は凄まじかった。

彼と向き合い、戦うためにもアイシスはさらなる力を得なければならぬ。

「巻きこんでしまうようで申し訳ないけど、マシヨーカさんにもいずれ身を隠してもらわないと。“あれ”はまた絶対者を狙うかもしれない」

「ああ、考えておこう。しかし、あいつは無事だろうか」

「あいつ?」

マシヨーカの瞳にふと色が宿った。

昔を懐かしむ目をしている。

「若き絶対者だ、地の精霊ラジネのな。といっても、いまはもう五十も半ばに近いのだろうか」

夢をなぞるかのような、優しく儂げな声だった。

あっとアイシスは声をあげる。

「それってもしかして、ハーデースのこと?」

マシヨーカはくぼんだ目をわずかに丸くする。知っているのか、と。

アイシスが偶然にも森のはずれで彼と出会い、数日をとともにすごしたことを話すと、彼はひっそりと笑った。

「そうか、彼は元気か。しかし、天才魔術師も生きていたとはな。私はハーデースとともに、彼の葬式にも参加したのだよ。あれはとんだ茶番だったというわけか」

それからしばらく話題はもっぱらふたりの天才にかかりきりだった。

マシヨーカがユリシア王城に勤めていたとき、ハーデースは新米として彼のもとで勉学に励んでいたのだという。

まったく、不思議な縁もあるものだ。

そうしてすぐに半月ほどがすぎた。

リグル曰く珍妙な一行は、ついにふたつの山も越えた。

「見る、あれが鏡の水。その向こうに見えるのがささやきの洞窟だ」

ずんぐりと太った指を突き出し、グツグルが言う。

その方向を見やると割かし大きな湖があった。

太陽の光を受け、生命がはじけるかのようにして輝いている。

鏡の水とはうまく名づけたものだ、とラナは思った。

洞窟を前にしてマシヨーカの足は迷った。

訝しく思っつてふり返ると、怖いのだ、と彼は言った。

「なにも考えずにここまで来たが、しかし妻たちは私を恨んでいるかもしれない。あの洞窟で、私を責めてなじるかもしれない。もしもそうなれば私はきつと耐えられない」

そう言う彼の姿はとてもちっぽけだった。

初めて海の底で出会ったときのような、すっかり枯れてしまった姿のように。

口を開いたのはラナだった。

「なあ、おっさん（アイシスが何度注意しても、彼はマシヨーカをこっ呼ぶのだ）。あんたの家族があんたを恨んでいようが、許していようが関係はないよ。あんたに必要なのは、それを受け入れることだ。」

恨み言を聞いてあんたの心が折れてしまっても、それはそれでいいことだと俺は思うよ。

あんたはそれをしなかつたらう、死という事実から目をそむけてしまつてさ。

だから死ぬことも生きることでもできず、海の底ですつと眠っていったんじゃないのか」

彼の言葉はときに核心をつく。

このときもそうだった。

マシヨーカは雷に打たれたかのように身を震わせ、何度もまばたきをするとラナを見た。

ラナは言葉を続ける。

「あんたは何十年も立ち止まっていたけど、もう進まなきゃ。そのためにしんどい思いをしてここまで来たんだろうに。」

その先にあるのが生か死か、俺には分からねえ。だけど進まなきゃ。

俺には精霊の声なんて聞こえやしないが、だけどあんたのアキユロスはひどく辛そうな顔をしていたぜ」

おお、とマシヨーカが息を吐く。

深い息だった。

アイシスたちも、しばらくは口を閉じて彼の言葉を味わった。

たとえ茨の道であれ、人は進まねばならないのだ。

それが生きるということなのだ。

悲しみをもってして初めて喜びが生まれる。

涙のしょっぱさがあるから、人は思い切り笑えるのだろう。

立ち止まっではなにも始まらない。

「いっしょ」

むっつりと宣言したのはグッグルだった。

一行は彼のあとに続く。

洞窟の前までくると、六人はぎよっとして足を止めた。奇妙な生物がいるのだ。

「ドワーフ以外の方がここにくるなんて何年ぶりかね」

その生物は流暢に共通語を話した。

その姿はどこか赤ん坊のようにも見えるが、しかし全身しわだらけである。

衣服らしい衣服は着ておらず、ぼろ布がわずかに腰まわりを覆っているくらいだ。

大きな目はぬめりと緑に光っており、髪のない頭には、これまたしわだらけの大きな耳が生えていた。

まるで狐のような耳である。

「わしはこの番人をしておるよ。マイフという。おまえさんたちはここに入るのか、入らないのか」

「入る。ぜひ案内してくれ」

そう答えたのはマシヨーカだった。  
彼の声に、いつものような浮ついた感じはない。

マイフは大きな口をにやりと歪めた。

「いいよ、そう望むのならば。けどこれだけは約束するんだよ、魂の石には絶対触れてはならない。おまえの魂が吸われるよ」

マイフの言葉に、アイシスは背筋がひやりとした。  
なんと恐ろしい響きだろう、魂が吸われるとは。

一行が重々しくうなずくを見ると、マイフは四つん這いになって歩き始めた。

「ついておいで。途中まではわしについてくるといい。そこからはおまえたちの勝手さ、求めれば魂がおまえたちを呼ぶからね」

六人はそろそろと歩いた。

洞窟の中は真っ暗で、わずかに先をいくマイフの姿さえおぼつかない。

彼を見失わないよう、アイシスたちは十分に気を払ってやる必要があった。



「おい」

ラナがグッグルの服を引っぱった。

「暗くてなにも見えやしねえ。なにが地上の天国だ、このうそつき」

「おっ、俺も入るのは初めてだから。話に聞いていた、目を疑うほどに美しいと」

「だったらそいつは光る目を持っていたんだ」

「しいっ」

ラナの軽口を、ふり返ったマイフが厳しく制した。

「静かにおしよ、のっぽにちびすけ。魂の音が聞こえなくなるだろ  
う」

「魂の声っていったって」

「なにも聞こえねえだろう。」

「そう言うラナの声は途中でぴたりと止まってしまった。」

「小さくなにかが聞こえてきたのだ。」

「鈴の音のような、それとも水が滴るかのような。」

「それにあわせて暗がりがかちかちと光った。」

「さあおゆき。いって魂のささやきをお聞き」

マイフの声に後押しされるようにして、六人はそれぞれの道を進んだ。

小さな光が揺れ、頼りなく足もとを照らす。

アイシスには予感があった。

呼ぶ声があるとしたら、それはきっと彼らだと。

アイシス、ああ、アイシスだね。

「……父、さん」

大きくなったね、アイシス。

アイシスの双眸から涙がこぼれ落ちた。

耳に懐かしい穏やかな声。

間違いなく父ルキアのものだった。

アイシスの前には大きな輝石があり、それは他のどの石よりも明

るい光を放っていた。

アイシスは思わず手を伸ばしそうになる。

しかしマイフの言葉が脳裏をよぎった。

魂の石には絶対に触れるな、触れれば己の魂を吸われると。

アイシスは慌てて手を引いた。

「父さんなんだね、本当に」

ああ、そうだよ。姿がないから信じられないかもしれないけどね。

ここにはたくさん命があるよ、みんな新たな芽吹きを待っている。

母さんもいるよ。

「母さんも？ どこに？」

ここよ、アイシス。私の可愛い息子。

両親の声が、優しくアイシスを包みこんだ。

アイシスの心が温かさに満ちあふれる。

彼を囲むようにしてたくさん輝石がひっそり光を放っていた。

奪われてしまったたくさんの命が、頬をなでるようにしてアイシ  
スに語りかける。

しばらくアイシスの涙は止まりそうになかった。

## 第六十話：世界がきみに味方する

### 『聖伝』第六十話

アイシスはたくさんのお話を話した。

話題は尽きようもなかった、彼らはあまりに短い時間をしか共に生きなかったから。

「旅の途中ではエザにも会ったんだよ。本当に偶然出会ったんだ、ぼくたちは。彼は途中まで一緒だったけど、いまはエルファントさんのところにいる」

そうか、エルファント殿の元に。ならば安心だね。

「彼はぼくらにもすごくよくしてくれたよ」

うん。彼は大地のように広い心を持つエルフだからね。

しかし、エルファント殿には悪いことをしたなあ。彼ともまたゆっくり話したいものだけど。

ルキアのすこし間延びしたような、ゆっくりとした口調は生前のままだった。

アイシスはすこしおかしくなっていてぶきだしてしまった。

そつだ、とアイシスは言う。

「父さんはぼくに質問したよね、運命を信じるかって。

ぼくはいま、運命に生きていますよ。自分のすべきことを知り、それに向かって日々をすごしている。

ねえ、父さんはあのときなんと答えたっけ、ぼくが聞き返したとき」

懐かしいね、と言ってルキアは目を細めた（ような気がした、たとえ姿は見えなくとも）。

よく覚えていたね。私は　こう答えたんだ、運命はあるだろうけど、だけと思ったたより自由なものだと。

「自由な？　でも、決まっているものじゃないの？」

大体はね。でも、ときどき与えられるんだ、それをがらりと変えてやる機会が。それに気づけない者もいるし、気づけても怖くて動けない者もいる。

そもそも、だれもが運命に生きているというのに、それを知らない者は多いんだ。

ねえ、アイシスは住みよい町を出て旅に出たんでしよう。きみと“あれ”との真実を知ったときも、それを否定せずに受け入れた。

アイシスはそうやって、少しずつ運命を変えてきたんだよ。

「運命を変える」

ふわふわと、それは捉えどころのない言葉のように感じた。

アイシスは、運命というものは途方もなく大きなもので、キグナデウスだとか偉大な神さまがすべてを把握し、操作しているものだと思っていたからだ。

それを変えるだって？

アイシスはちっぽけな水滴で、運命は海のようにだと感じていたのに。

いくらあがこうと運命は動じない、そのことはどこかアイシスの心を休めもしたのだけれど。

海だって最初は水滴のひとつから生まれたのよ。

母のセノビアが、まるでアイシスの心を読み取ったかのようにそう言った。

ルキアがその言葉に続く。

アイシスが毎日少しずつ努力を積むから、ある日ふと洪水が起こる。大きな決断をしなきゃならないときがそれだと思っ

決断を前に、きつと心は苦しむだろう。だけど苦痛だけじゃない、それは日々生きてきた証だからね、誇らなきゃならない。誇りに胸をいっばいにし、勇敢に道を選んだ。

より困難で涙が出そうな決断をしたとき、世界はきみに味方する。果敢な挑戦に拍手を送り、きみを応援しようとするんだ。

「世界が」

そう。世界は変わる、大げさに言うわけじゃなくね。だれだってその可能性を秘めているんだ。

アイシスはいま、限らない可能性を秘めているんだよ。

父の声は力強く、母の声は優しくかった。

アイシスはふたりの愛情を全身に浴びた。体がぐっと大きくなったように感じた。

時間ね。

セノビアがぽつりと呟いた。

心なしか、輝石の光が薄くなったように感じる。

また現実の世に帰るときがきたのだと、アイシスは心で理解する。



「じゃあ、ぼくはいくね」

うん。

そう言いながらもアイシスの足は動かない。

ルキアの声色も、彼がいくのを本心では望んでいないような響きがあった。

「いかなきゃ」

アイシスの瞳から、涙がまたこぼれ落ちる。

アイシスはそれを拭おうともしないで歯を食いしばった。

いかなきゃ、前に進まなきゃ。

ぼくは背中を押してもらったためにきたのに、ここで立ち止まってどうするんだ。

アイシスはようやく決心した。

ぐっと握っていた拳を開き、彼を取り囲んでいた輝石たちに手をふる。

アイシス。

「うん？」

私たちはおまえを誇りに思うよ。

アイシスはほほ笑んだ。

目に浮かんだ涙が、うなずくと同時にぱたりと落ちる。

ルキアの言葉はこうも言っているように感じた。

だから自分を責めてはいけない。

私たちは体を失ったけれど、ひとつも後悔はしていない。おまえという存在を守れて、私たちの魂は喜びに震えているのだから。

1065

誘われるようにして歩くと、やがてぽっかりと明かりが見えてきた。出口だ。

一歩ずつ踏みしめながら足を進めると、すでにマシヨーカ以外の全員がそこに揃っていた。

ラナとリグルは目を真っ赤にしている。

彼らもまた、早く別れすぎた者たちとささやきを交わしてきたのだらう。

どうだった、などと無粋なことを、彼らは口にしなかった。

ただ泣き腫らした目やどこか晴れやかな顔なんかを見て、ああここへきてよかったのだなとほほ笑むだけだ。

「おっさん遅いなあ」

もつ日はすっかり傾いている。

たしか洞窟に入ったのは昼にもならないころだったはず。しかしアイシスたちは辛抱づよく待った。

いま、マシヨーカはきつと運命の分岐点にいるのだ。

機会は彼に与えられたのだ。

結局、マシヨーカがようやく姿を見せたのは、もつつつすらと星も輝くころだった。

彼の顔を見、アイシスたちはすぐに理解した。

彼は前に進む決意をしたのだ。

彼のくすんだ瞳はもはや灰色でなく、鮮やかな翠緑色に光っている。

肌には艶が戻り、唇はみずみずしさをたたえている。

生と死との狭間から、ようやく彼は抜け出したのだ。

「すまない、待たせた」

彼の言葉には芯があり、宮廷魔導師として畏れられたろう若き日を思わせた。

アイシスはすっかり嬉しくなってしまう。

「みんな戻ったね」

岩の陰からマイフが這い出てきた。

「どうだった、失ったものの輝きは。望めば一生ここにいられるよ、一生ね。どうする、残りたいかい」

「いや」

六人は口をそろえ、がんとして答えた。

代表してマシヨーカが言葉を継ぐ。

「断る。過去はもはやどうあがいても過去なのだ、いくら輝いて見えようとも。」

昨日の雨なくして今日の川はなく、今日の川なくして明日の海は生まれまい。

私はまた生きる、祭りのようなこの今日を」

「そうかい」

アイシスは心の中でマシヨーカの言葉を繰り返した。

祭りのような今日。

たしかにそうだった。毎日がお祭りのようであった。いろいろなざわめき、楽しい発見、それからしっぽりとした孤独。

一日が去るときにはどうしようもなく胸が切なくなったりもする。しかし、足を止めさえしなければ、新しい祭りはもう始まるようにしているのだ。

マイフは大きな目をすこし伏せがちにした。ぼつりと、友達ができるかと思っただけだね、と言った。

もしかすると、彼は過去に心を囚われてしまった人間なのかもしれない。

ふり返ったまま、足を動けなくして。

案内のお礼を言い、アイシスは哀れなマイフに手をふった。

彼は六人がいくのをしばらく眺めていたが、やがて背をまるめて洞窟の中へと這って行ってしまった。

一行は足をそろえて山を越えた。

道のりは楽なものではなかったが、六人の心はそれぞれに満たされていて、急な傾斜も苦ではなかった。

ふとグッグルが体を強ばらせた。

彼がこうなると、たいていよくないことが起きる。

野生の勘、というものだろうか。

アイシスたちはにわかに緊張したが、このときも例外なく魔物がうようよと現れた。

グッグルは短い悲鳴をあげ、ラナの背中に隠れる。

ささやきの洞窟への道中、一行は多くの魔物と遭遇したが、グッグルはいつも怯えきってしまうのだ。

「魔物には学習能力がないよね。あれだけ仲間がやられているっていつのに、まだ懲りないんだ」

リグルが肩を鳴らしながら剣を抜く。

また研ぎにだしてやらねばならないだろう、小さな刃こぼれがいくつも見える。

続いてアイシスも剣を持ったが、しかしそれを遮る手があった。

マシヨーカだ。

「どうしました？」

アイシスは訝しく思って首をかしげる。

彼はグッグルのように怯えたりはしないが、魔物が出ても傍観を決めこんでいるはずだったのに。

「私の目も覚めた。すこしはきみたちの役にたちたい」

そう言うとマシヨーカは詠唱を始めた。

アイシスの肌がざわつく。

水の絶対者が、ついにその力を見せようというのだ。

「いまこそ猛れ、聖なる流れよ　アキュロス」

ネトレトは目を見張る。

彼の詠唱の短さといったら。

力ある者ほど少ない言霊で精霊を使役してやることができる。

短い詠唱はつまりその人物の力のほどを表すのだ。

彼の驚きをよそに、水の精霊アキュロスは衣をたなびかせて降りたつた。

美しい黒髪が光を受けて青に輝く。

彼女は美しくほほ笑んでいた。

マシヨーカをふり向き、その頬に顔を寄せた。

ああ、この時をどれほど待ったか。愛しい我が君、命を授けよ。

「ありがとうアキュロス。では存分に力を見せてくれ」

承知。

マシヨーカの力は偉大だった。

リヒィ＝ミヒィを別とすれば、これまでに出会ったどの絶対者よりも強く、神々しく、輝いていた。

巨大な狼のような姿をしたグーズの群れは、アキュロスの操る水の槍で、またたく間に蹴散らされ、あるいは刺し貫かれた。

その攻撃のさまはウガルグのそれと似ていたが、その優美さと強さではまるで比べ物にもならないように感じられた。

最後の一頭がのど笛を貫かれ、断末魔の叫びもそこそこに息絶えてしまうと、アキュロスは軽やかな身ぶりでふり返った。

その瞳は静かで、あれほどの暴れようの後だとはまるで思えようはずもない。



「すべてが終わった」とマシヨーカは言った。

アキュロスは空を舞い、彼の背に寄りかかるようにしてそばに立つ。

マシヨーカは彼女の細い手を取り、うつすらと目を閉じた。  
ゆるゆると息を吐き出す。

「そしてまた始まる、ここから」

ふたつの山を越えてしまい、一心地ついたところで一行は別の道をいくことになった。

「私は南へ」

「おう、俺も」

グッグルは商売のためにまた港町へ戻ると言ったし（「もう悪いことするなよ」とラナが念を押す）、マシヨーカは驚いたことに、あの海の底へと帰るのだそうだ。

「あれでなかなか住みよいからね。それに、地上ではいつ“あれ”に襲われるかもしれない。

大丈夫だ、もう壁に身を食われやしないうさ」

グッグルは何度もふり返っては手をふった。

やがて南へと戻る彼らの姿は木々に隠され、見えなくなってしまった。

それでも時々グッグルが叫んでいる野太い声が聞こえるのだった。

「滑稽なやつらだったなあ。グッグルのやつも、おっさんも」

ラナは頭の後ろで手を組んでいる。

そうだね、と言ってアイシスは空を見上げた。

大きな入道雲が見える。

はっとするような空の青に、迫りくるような白い巨城はとても雄々しく息をのむほどだった。

アイシスはマシヨーカのことを思い出した。

ささやきの洞窟からやつと出てきた彼は、夜空を見ておお、と嗚咽を漏らしたのだ。

自然とはこれほどに美しいものだったのかと。

彼の目がくすんでいたとき、その瞳は世界の色を映さなかった。

悲しみを棄ててしまったから、大いなる喜びも彼から逃げてしまったのだ。

そうになると、アイシスの思いはやはり“あれ”に向けられた。

彼はどんな憎しみに身を焦がし続けてきたのだろう。

笑顔という終着点のない涙は、どれほど苦かったことだろう。

ああ、可愛いそうな人！

アイシスは初めて“あれ”を可愛いそうだと思った。

恐れや憎しみでなく、純粹なる哀れみの念。

だって彼は、風に揺れる若葉の美しい生命力にも、朝にさえずる小鳥の愛らしいさえずりにも、石を洗いながら流れる清流のささやきにも気づけないのだ。

いくら星空が荘厳であろうとて、彼はそれに感動することを知らなかった。

彼はとにかく、なにかを恨み続けなければならなかったのだ。

そうしてしか存在しえなかったのだ。

本当に救いを必要としているのは、実は“あれ”なのかもしれない。

アイシスの瞳に涙が浮かんだが、しかし彼は空を見上げることでなんとかやりすごした。

この涙はとっておこう、いつか再び“あれ”と見えるその日まで。

四人はそのまま山伝いに東へと進んだ。

ときどき小さな村や遊牧民のテント群に寄り、必要な食料や羽織るものを買ったりした。

吹きつける風が、いつしか冷たさを帯びるようになってきたのだ。

山の近くを歩いていると、それは多くの魔物に出会った。

多くの人で賑わう街には、基本的に彼らは近づかない。

人の活気、生命力というのは、ときに恐ろしい魔物をさえ遠ざけるのだ。

必然的にアイシスたちは魔物退治にいそしむ毎日を送ることになったが（向こうから襲いかかってくるのだ、仕方ない）、予想外にこれは村人たちに喜ばれた。

魔物討伐の旅をいく四人組み、という評判はまたたく間に広がり、一行はどの村に立ち寄ってもなかなかの歓迎を受けた。

なにしろ彼らは目立つ。

銀の髪と金の髪、というだけでも十分な目印になりうるから。

「こんなのもらっちゃった」

ある日、宿屋に戻ってきたアイシスの両手は砂糖菓子でいっぱいになっていた。

市場を歩いていたらくれたのだという。

銀髪の少年はかなりの甘党、なんてうわさまで伝わっているのだらうか　まさか。

このもてなしはまったくの偶然だったが、しかしアイシスは大いに喜んだ。

ラナとリグルもそれぞれ少しずつ失敬してみたのだが、これがかなかにおいしい。

あるときは新品の剣を一振りずつ贈られたこともあった。

その刃の輝きを見るに、けっこうな業物である。

これにはネットレトも感激した。

彼らの剣はすっかり疲れきっていて、特に彼のとりグルのとはいまにも折れんばかりの疲弊具合だったからだ。

新しい友人はすぐ腰に馴染んだ。

そういうふうにして、彼らは図らずも名を売りながら道を進んだのだった。

しかし、うわさというものは良くも悪くも働く。

四人はまるでそんなところにまで気を払わなかったが、評判はなんと、人間のあいだだけで留まらなかったのだ。

「次々に魔物を倒してしまつ凄腕の剣士だと？　そうか、正義の味方というわけだな」

おもしろそうではないか。

そう言つて口角をつりあげる男の瞳は、紫色。

## 第六十一話：偉大なるおやじ

### 『聖伝』第六十一話

裂帛の気合が木々にこだまする。

アイシスの剣は、恐ろしい切れ味で魔物の胴をはらった。

「ずいぶんと無駄な動きがなくなったな」

干し肉をかじりながらネトレトが言う。

褒められてアイシスは素直に嬉しかった。

自分でも成長のほどは感じて取れる。

おぞましい魔物の姿はいつもアイシスを恐れさせたが、しかし体がすくむことはなかった。

恐怖のなかにもどこか冷静さを見つけられるようになったし、そのおかげで相手の動きも正確に見え、先の動きをいくらか読むこともできた。

ラナもまた大きな成長を遂げていて、彼は得意のけんか戦法と剣技とを組み合わせ、拳と刃の新しい戦闘様式をまさに確立しようとしていた。

ときどき、彼は巨大なグーズにやられたときのことを思い出す。

確か幻影を見せる森のことだった、丸太のような腕に怯え、めちやくちやにやられてしまったんだっけ。

彼もいまや一人前の剣士である。

その体つきは以前よりもさらに勇ましく、肌はより黒く灼けていた。

「それで、どこに向かうんだ」

「うーん」

アイシスは首をひねった。

行き先を決めるのはもはや彼の仕事となっていたが、特にこうと  
いった考えもひらめかない。

「道なりにいこう」

そこで彼らは踏みしだかれた道や獣道なんかを見つけては先に進んだ。

いつも左手には険しい山々がそびえていて、もう数ヶ月もすれば、  
きつと雪で真っ白に覆われてしまうことだろう。



ある日、ラナがふと気づいた。

「最近静かだなあ」

彼の言葉はまた核心をついた。

静かなのだ、道のりが。

魔物の襲撃もなく、黒の騎士団や“あれ”の気配もまるで感じられない。

ひっそりとなりを潜めた森は、逆に不気味にさえ思えた。

そこで彼らは“なにもない”ことに警戒しながら道を進んだのだが、そうして二日ほどが経ったときである。

日は傾き、空はすっかり朱に染まっていた。

四人はそろそろ夕ごはんを考え始めたのだったが、

「うわっ」

突然おそろしく強い風が吹き、木々が音をたてて激しく揺れたのだ。

まるで視界を遮るかのように木の葉が舞う。

アイシスは両手をめちゃくちやにふり回し、なんとか辺りを見回

そうとした。

「げっ。この野郎、なにしやがる！」

「リグル？」

なにごとだろうか、リグルの狼狽した声が聞こえる。

やっとのことで木の葉をはたき落としてしまうと、なんと彼の姿が見えないではないか。

「てめえっ、離しやがれ！」

リグルの声は、すこし離れた場所から聞こえた。

アイシスたちははっと顔を見合わせ、同時に声のほうを追う。

依然としてその姿は見えなかったが、遠ざかっていくリグルの怒声とその居場所を教えてくれた。

「ぼくは先にいくよ！」

「頼む！」

アイシスはエルフの輝く足で駆けた。  
風を切り、土を散らして。

しかし敵もさるもの、距離はそれ以上開くこともなかったが、しかし一向に縮む気配もなかった。

まさか人攫いなどではないだろう、人間ではありえない速さだ。だとしたら魔物だろうか？

「この……クソじじい！ 調子に乗るな！」

ひとときわ大きくリグルが叫び、同時に鈍い音が響く。ぶあつ、だかごあつ、だか哀れな悲鳴が聞こえた。

その声に、アイシスは一瞬肩をすくめる。

気を取り直して騒がしいほうへと駆け寄ると、仁王立ちしているリグルを見つけた。

彼の目は怒りでぎらぎら燃えている。

その形相はすこし近寄りがたくさえあった。

「リ、リグ  
」

「リジエちゃん！」

「ええっ？」

無事でよかった、というアイシスの言葉は、ほかの声によって遮られてしまった。

見れば、リグルの足元に男がしがみついているではないか。

年のころは天才魔術師に同じくらいだろうか、男の右頬は立派なまでに腫れあがっており、リグルの怒りがぶち当てられたのだから、ことは容易に想像がつく。

「ひどいじゃないか、リジエちゃん。せつかく、せつかく会えたっていうのに……」

「リジエ、ちゃん？」

アイシスはすっかり呆気にとられている。

リグルは喚きながら腕をふりまわし、しがみつく男をふり払おうと躍起になっていた。

そのうち追いついたラナとネットも、肩で息をしながらこの状況に目を白黒させている。

「離れるクソ野郎！ 暑い、暑苦しいっ」

「そんなっ、パパに向かってなんて言い草だ！」

「パ……」

パパだって！

アイシスとラナは同時に叫んだ。  
ネトレトも目を丸くしている。

リグルは顔を赤くし、大きくため息をついた。

「それで、ほ、ほんとうにこれがリグルの親父……」

「リグルとはどこの子だ。この子はリジェアラ、わしのかわいい一人娘だ」

ラナはぽかんと口を開けた。

男は鼻と口にうつすらと血を滲ませており、申し訳ながら　　まるで威厳とは程遠い様相だ。　　ま

リグルがウガルグに言った文句を借りるなら、彼の父親ガントウーラは、針の森の大帝と恐れられる偉大な悟りの王とのことだったが。

五人は思い思いの場所に腰をおろして（ネトレトは立ったままだったが）、ガントウーラはリグルにべったり張りついて離れな

かった。

それでリグルはひどく不機嫌で、なんども父親を押しやったり果ては殴りつけたりしていた。

それでもガントウーラはめげないのだから、その打たれ強さはさすが魔族といったところである。

「しかし、どうしていま」

「評判を聞いたのだ」とガントウーラは言った。

「魔物を倒してまわる、やたらと強い旅人がいるとな。それでちよつとばかり興味がわいて、下々にそれとなく探らせてみた。

そうしたらどうだ、黒髪の麗しい美女が紛れているというではないか。わしは悟った、それは我が娘だと！ あの子は生きていたのだと！」

「ひつつくなクソつたれ！」

腕にしがみつくガントウーラを、リグルは荒々しく突き放す。

なるほど、ガントウーラはたしかに端正な顔立ちをしていたが、いまその表情はひどく情けない。

「いまさらなんだよ、馴れ馴れしくすんじゃねえ。俺はあんたのこと、もう親父だなんて思っっちゃいねえんだよ」

「そ、そんなつ。おまえをわしの元に置いておかなかったことを怒っているなら、できることなら人間として暮らしてほしいと」

「そんな押しつけうんざりなんだよ!」

リグルの拳は固く握られたままだった。

しかしガントウーラは、殴られたときよりもずっと痛々しげに顔をゆがめた。

ガントウーラは紫の目を伏せた。

しばらく地面に視線をさまよわせていたが、やがて小さく息を吐くと、ようやく鼻血を指で拭った。

「とにかく、一度わしらの住処へいこう。わしら一族はいま、この山で暮らしているんだよ。兄弟たちもおまえに会いたがっている」

「俺は会いたくなんかねえ」

リグルは素っ気なく立ちあがった。

ガントウーラには目もくれず、尻についた木屑なんかを手で払う。

ガントウーラは娘の背を訴えかける目で見つめていたが、リグルがまるでふり返る気もないと悟ると、突然に立ちあがってその背後に飛びかかった。

「なっ」

狼狽の声をあげ、リグルがふり返ったときには遅かった。

彼は目にも留まらぬ速さで彼の腰から剣を引き抜き、あるところかラナの首に突きつけたのだ。

その素早さといったらなかった。

これにはアイシスたちも焦った。

ネットトはすばやく腰の剣に手をかけるが、ラナの状況を見てはうかつに抜くこともできない。

いったい彼はなにを考えているのだろう。

娘に冷たくされて八つ当たりのつもりだろうか　ばかっている！

「頼む、遊びにきて！　リジエちゃんお願い！」

しかし実際、彼の考えはさらにはばかげたものだった。

ガントウーラはラナを人質にし、ぜがひでもリグルを住処へと誘おうとしたのだ。

「な、なんて激しいおっさんなんだ」



突きつけられる刃の鋭さも忘れ、ラナはがっくりと肩を落とした。

リグルはやれやれと首をふる。

「知るか、俺はいかねえ」

「友達がどうなっても知らんぞ」

「そんなやつどうでもいい。どうせいがぐりだ、頭かち割ったところで熟れた実が出てくるだけだよ」

「んなわけあるかつ」

リグルの背中にラナが喚きかかる。

彼は意味ありげな視線をアイシスとネットレトに投げかけた。

ふたりは顔を見合わせ、困ったように頷きあつと、自ら進んでガントウーラの切っ先の元へと進んだ。

「おっ？　なんか人質が増えたぞリジエちゃん」

があ、とリグルが唸り声をあげる。

肩を怒らせてふり向いた彼は、まるで緊張感のない人質三人を見て盛大なため息をついた。

「いってやるうぜ、リグル」とラナ。

「話すことで隠れていた真実に気づけるかもしれない」とはネット。  
ト。

「いがみあえるのも互いが健在なればこそ、だよ」と止めをさしたのはアイシスだ。

リグルはもう一度ため息をついた。

ガントウーラの案内に続き、四人は森の道を進んだ。

丈の長い草が生えており、獣道すら見当たらない。  
しかしガントウーラの足取りに迷いはなかった。

彼の歩みはどこか弾んでも見える。

娘に会えたことが嬉しくて仕方ないらしい。

彼の足はおそろしく速く、アイシスはときどき駆け足になりながら進んだ。

そんなだったから、彼の言う住処にはすぐに着いた。

岩でできた建物はどっしりとしていて厳しい。

いざなわれて中へ入ると、岩の壁はひんやりと冷気を放っていた。

「リグルの兄弟って三十人以上いるんだよね」

アイシスがひそひそと耳打ちする。

たしか、次男坊は二十八人いたはずだ。

リグルは苦々しげにうなずき、俺も合わせて三十二、とだけ答えた。

魔族の住まう岩の砦は、ネトレトの好奇心を大いに刺激した。

珍しくも、彼は金の瞳を左右にせわしなく動かしている。

「さあ、ここが大広間だ。今日は宴にしよう。リジエちゃんのお好きな酒もたくさん用意するぞ！」

「げっ、あんたいつから娘に酒飲ませていたんだ」

単純に考えると、十をすぎるころにリグルはもう酒を楽しんでいたことになる。

そんなだからこんなふうになるんだ、と言うラナの足を、リグルは思い切り蹴飛ばした。

ラナは文句を言おうとしたが、大きな声にかきけられてしまう。

「リジエアラ！ おまえリジエアラだね、ああ大きくなって！」

「ええっ？」

「かわいそうに、苦勞したんだね」

「こんなに髪を真っ白にして」

「やはり女の子だね、背はあまり伸びなかったんだ」

「やいやいと投げかけられる声の中心にいたのは、残念ながらリグル本人ではなくアイシスだった。」

アイシスは顔を真っ赤にして抗議する。

「ぼくはアイシスで、男で！ あなたたちの妹はあつちですと。」

アイシスを取り囲む男たちは美しい顔立ちをしていたが、しかしどれも同じ姿なのだ。

十人は優に超えるというのに、目の大きさから笑いじわまで、すべてがそっくりに揃っている。

正直それは不気味な光景だった。

きっと彼らこそ二番目の兄たち、二十八ツ子とやらに違いない。

「ああ、おまえがリジェアラだね！」

「そうそう、そういえばこんな目をしていた」

「面影があるね、この悪い目つき」

「余計なお世話だ！」

「ああ、こんな反抗的なところまで変わらない」

ぐおとリグルは吼えた。

いつも余裕ぶっている彼も、いまは起こるできごとひとつひとつに全力で反応している。

ガントウーラに出会ってからというもの、彼はどうも調子を狂わされっぱなしだった。

そうしている間にも同じ顔の男は増え続ける。

アイシスは背伸びをして数えてみたが、彼らは全部で二十三人いた。

リグルがもみくちやにされている間に、宴の準備はちゃっちやが進められた。

ラナは魔族の食べ物にすこし心配な気持ちでいたが、並べられた料理はどれもつまそうなおいを放っているではないか。

単純な彼はすっかり上機嫌になった。

給仕に精を出しているのはどれも凜とした顔の男ばかりであったが、彼らもみな魔族なのだろうか。

しかし、そんなことはあまり気にならなかった。

彼らにはこやかで、エルフや人間にもまるで偏見なく接してくれたから。

アイシスは自分がいかに狭い目で世界を見ていたのかを知った。  
なにがどう、とくくれるものではないのだ。

彼らを通じ、アイシスは思いこみをして世界を思うことはよそうと考えた。

なにごとにも実際に触れてみないと分からないものだ。

「さあ、久しくなかつた客人だ。なによりの上客は我らがリジェアラである、みな杯を持って」

ガントウーラが厳かに言い、旅人たちとガントウーラ一族は酒の杯を手に立ちあがった。

むっつりとしながら、しかしリグルもそれに従う。

「青い月に！」

「青い月に！」

魔族たちはガントウーラの言葉を復唱すると、杯の中身を一息に干した。

思わずアイシスたちは顔を見合わせる。

「我々流の乾杯といったところだ」

きよとんとするアイシスたちに、正面に座った男が教えてくれた。

月は我々の象徴だ、と彼は言う。

赤い月は激動、そして青い月は静寂だと。

その彼がまたひどく格好いい。

これが人間流、と言って杯を差し出す手つきも優雅だった。

アイシスは慌てて杯を突き合わせ、失礼にならないようおそるおそる酒に口をつける。

「それ、長兄のプリアモス。気をつけな、そいつ相当なたらして、男も女も見境ないから」

「久しぶりに会ったっていうのに失礼だなあ、リジエアラは。それに私が色香に走るのは、かわいい妹が全然相手をしてくれないからだよ」

「はいはい」

よく見れば、リグルとプリアモスはよく似ている。  
黒くて長い髪だとか、切れ長で色気のある目だとか。

リグルは一息に酒を飲み、すかさずプリアモスが代わりを注いだ。

アイシスの頭はすっかりくわんくわんになっている。  
すこし舐めるようにしただけだというのに、酒気はあつという間に体中へと広がった。

「あ、言い忘れてたけど魔族の酒は強烈だからね」

リグルの忠告は、ちょっとばかりアイシスには遅かった。



## 第六十二話：ママの平手

『聖伝』第六十二話

ふと気がつくとき、アイシスは石のベッドに寝かされていた。

わずかに干し草が敷かれているばかりで、正直快適とは言いがたい代物だ。

身を起こすと頭が痛んだ。

なんと強烈な酒だったことだろう、アイシスには宴の記憶がほとんどなかった。

「はい」

頭を押さえるアイシスに、水の入ったコップが差し出される。

礼を言っつて顔をあげるとプリアモスが立っていた。

月の光に照らされて、彼はどこか幻想的にさえ見える。

「きみたちには礼を言わないと。妹を連れてきてくれてありがとう」

「いえ」

アイシスはすっかりまごついてしまっつ。

「一族が集まったのは久しぶりだなあ。パパも嬉しそうだったし」

「集まった？ でも、本当は兄弟だけで三十二人もいるんですよ」

「そうだよ」

しかし宴の席で、兄弟たちは三十人にも満たなかったはずだ。

それを聞くと、プリアモスはぽつりとこぼした。

「死んだ。魔族の生活っていうのは、これでなかなか厳しいんだ。

ばかな魔物が攻めてくることもあるし、私たち一族なんかは同族にもなかなか嫌われているからね」

「それは……すみません」

「謝ることじゃないよ」

プリアモスにはっこり笑うと、アイシスの小さな頭を撫でた。

温かい手だ。

アイシスはすっかり気を楽しんでいたが、それにしてもかわいいなあ、という呟きを聞くなり体を強ばらせた。

プリアモスは困ったように笑う。

「そんなに怖がらないでくれ。なんにも取って食おうというわけじゃ

ないさ、ただこうしているだけで満足だから。きみを見ていちゃ、  
そう眩きたくなるのも仕方ないだろう」

なるほど、さすがはたらしである。

もしもこんなことを耳元で囁かれようものなら、ほとんどの女は  
間違いなく骨抜きになってしまうだろう。

そういう面でも、リグルはプリアモスに似ているのかもしれない。

「で、でも、ぼくは男ですよっ」

「それは大した問題じゃないな。私は特別に守備範囲が広いほうだ  
けど、そもそも魔族というのはなかなか節度がないんだよ。

我々のママなんてドラゴンだからね」

ドラゴン！ アイシスはすつとんきょうな声をあげた。

「そう、七枚羽のドラゴンさ。額には三本の角が生えていたんだけ  
ど、夫婦喧嘩のせいで一本は折れてしまったらしい」

アイシスは頭がくらくらするのを感じた。  
なるほど、それで二十八ツ子というわけだ。

「それより、リジェアラについて教えてほしいな。それともきみの  
ことを？」

アイシスは慌ててリグルとのできごとを話し始めた。

しかしその間もプリアモスはアイシスの頭を撫で続けていたので、すっかり話し終えてしまふころにはアイシスの体は緊張でかちこちになっていた。

リグルは石の柵に腰かけ、じつと夜空に目をやっていた。

涼しい風が頬をなでる。

そつとガントウーラがやってきて、そばの柱にもたれかかった。リグルはとうに気づいていたが、あえて知らないふりをする。

「怒っているのか、無理やり連れてきたこと」

「別に」

リグルはひとつ小さくため息をつく。

まったく、どうしてこの人は。

「疲れただけ、久しぶりの酒だったから。それにあなたのばか息子、みんな勧めすぎるんだよ」

「嬉しくて仕方なかったのだろう」

ガントウーラは弁解するように言ったが、しかしそんなことは分かっている。

そんなことは分かっているのだ、自分がいかに愛され、想われているかなんて。

それなのにどうしてこの人は分からないのだろう、自分の気持ちに。  
どうしてそんなに不安そうな顔をするのだろう。

リジエちゃんリジエちゃんとはかみたいに叫ぶのも、実はリグルの反応を恐れていることだと気づいている。

まともに向きあうのが怖いのだ。

そうしてもしも冷たくあしらわれてしまったら、もはや言い訳のための逃げ道がない。

気づけばリグルは泣いていた。

声を漏らすこともなく、しゃくりあげることもなく、ただ透き通った涙を流していた。

「リジエアラ」

「俺ね、おふくろを殺しちまったんだ。血の争いで我を失って」

ガントウーラがはっと息をのむ音が聞こえた。

「我が子のためにあれほど尽くしてくれた人が、どうしてあんなふうに死ななきゃならないの。」

俺はどうしておふくろを殺さなきゃならなかったのさ。

魔族の血も、人間の血も憎かった。どちらかにすっぱり割れて生まれてきていたなら」

「……………」

「あなたたちと一緒にいられたら、俺は魔族になれたのに。それでも弱い存在だから、襲撃に遭ったらまっ先に狙われるだろう。だけどそうしていたら、俺はおふくろを殺さずにすんだんだよ。」

俺は おふくろと一緒に、きつと死ぬことができたのに」

ぱん、と乾いた音がした。

リグルは目を見開き、一呼吸遅れてから頬に手をやる。頬はあつく熱をもっていた。

「いまのはママの平手だ」

ガントウーラの声はすこし震えていた。  
握った拳も震えていた。

「二度とそんなことを言うな。命をかけておまえを守った、ママの魂に失礼だ」

「……ごめん、なさい」

兄たちがガントウーラにぶたれる姿を、幼いリグルは何度か目にしたことがある。

しかしガントウーラはリグルにけっして手をあげなかった。

リグルにはそれが不満だった。

自分が女だから見くびっているのだと、ひねくれた特別扱いを愛情の欠乏だと感じたのだ。

しかしガントウーラの手は真実を語った。

わしはおまえたちすべてを愛していると。

「ここには留まってくれんのか」

「言わずもがな」

「しかし、おまえのような生き方をしていると、また血の争いが起きるとも限らんど。

我らならおまえを守ってやれる、もうだれも傷つけずにすむ」

「そのためにも俺は強くなったんだよ」

「だが、たとえおまえがうまく争いを避けても、一概に半魔は短命と聞く」

「どれだけ生きたかじゃなくて、どう生きたかを大切にするよ」

「しかし」

ガントウーラの開きかけた口は、しかし添えられたリグルの指で固まってしまった。

「もうなにも言わないでよ。月は留まることなく変化するものだ、満ちては欠けていく。

あんたは偉大な悟りだろう、俺の決意のほどぐらい“視”てみせなよ」

しかしガントウーラは首を横にふった。

「視えるものか、子どもたちの心など。

実にうまくできている、本当に大切なものは、自分自身で確かめ



なければならぬものだ」

含蓄のある言葉だった。

なるほど、とリグルはうなずく。

俺はあんたが好きだよ、お父さん。

リグルは内心そう呟いた。

月に照らされる親子の姿を、柱の影からラナが見守っていた。

翌朝、全員が起きるのを待つなり四人は岩の砦を出ることにした。

すこし急ぎすぎではとプリアモスが残念がったが、しかし長居は危険だった。

実際、リグルはすこし体調がよくないように見受けられたから。

「残念だなあ、もつときみたちのことを知りたかったのに。」

ああ、そのきれいな金の瞳と真正面から向きあいたかったよ」

プリアモスはその本領をいかんなく発揮している。

アイシスの肩に手をかけながら、ネットレトをも口説こうとこのうた。

しかし旅人たちはそう守備範囲の広いほうではなかったので、残念なことに彼の思いはついで届かなかった。

「ところでリジェちゃん。パパはずっと気になっていたんだが、リグルというのは」

「ああ、偽名だよ。ずっと男のふりして生きていたからさ、男の名前が必要だったの」

ガントウーラは眉根を寄せた。娘の悲しい気持ちが伝わったのだ。男に生まれていれば、きつと父親の元を離れずにすんだのに、と  
いづとうにもならない気持ちが。

そんな顔をするなよ、そう言ってリグルは笑った。

「いま、俺は俺に満足しているよ。それに女っていうのも案外悪くない」

おや、とガントウーラは目を丸くした。  
それからぐつと声を小さくする。

「恋をしているな」

「はあっ?」

「うん、きつとそうだ。パパだってそうだったよ。ママに会って、

ああわしは男でよかったと実感したからなあ」

「煩悩まみれのアンタと同じにしないでくれる」

しかしガントウーラはうんうんと納得顔でうなずいている。

呆れてため息をつくリグルに、ガントウーラはいたずらな笑みを浮かべてこうささやいた。

「それで、お相手は。おまえの趣味だとあれか、あの金髪の男か。それとも年下趣向で銀髪か？」

リグルはがっくりと肩を落としたが、やがて豪快に笑い出した。

上等だ、さすがあんたよく分かっているよ、と。

しかし変わったやつらだったな。

ガントウーラ一族の砦をあとにし、元のように獣道を歩きながらしみじみとラナが言った。

「まさにあれか、類は友を呼ぶというやつ」

「あいつら友じゃねえし」

リグルはなかなか上機嫌だった。それでアイシスも嬉しかった。

やはり家族とはいいいものだ。

喜びも悲しみも怒りも全部、すべて大きな愛で包みこんでくれる。

とても温かく、優しくて強い。

それもひとつの力なのだろう。

うるさかったせみの声も、いつしか止んでいる。

代わりに涼やかに羽を鳴らす虫が多く見られた。

季節は確実に秋へと向かっている。

アイシスはそのとき初めて、ある重要なことを思い出した。

「ああつ、ラナの誕生日！」

そうなのだ。

彼の親友はその性格にふさわしく、夏の真っ盛り、八月の二十四日に生を受けた。

旅に出てからは時間の概念がすっかり抜けてしまっており、夏がすぎてようやくその考えに至ったのだ。

アイシスは悔やんだ、毎年その日を忘れたことなんてなかったの

に。

ラナ本人は気楽なもので、アイシスの言葉にそういえば、といった顔である。

「どうしよう、なにも贈り物考えてないよ。ラナはなにを喜ぶかなあ」

「と、いうことを本人の前で言うかなあ」

リグルは苦笑いを浮かべてしまう。

まったくアイシスの無邪気さには恐れ入る。

「そういえば俺はだれの誕生日も知らないや」

その一言で、しばらく話題はそれぞれの誕生日でもちきりだった。聞けば、ネトレトは十月の十日、リグルは一月八日の生まれだという。

ええ、とアイシスは声をあげた。

リグルの誕生日はすっかりすぎてしまっているではないか。

「ねえ、次に大きな街に出たら、お誕生日会をしようよ！」

アイシスは嬉しそうに手を叩き、すつとんきょうな提案をした。

はあ、と抜けた声をあげるラナに、アイシスは頬を赤くして説明する。

「ラナとリグルはなににもすることなく誕生日がすぎちゃったし、ネトレトはもうすぐでしょう。」

旅をしていちゃきつとまた忘れちゃうから、三人そろってお祝いするんだよ」

この提案に、意外にもリグルが賛同の声をあげた。彼なら子どもくさいと笑い飛ばしそうなものだが。

「いいね。なんだかそういうのって家族みたい」

家族。

四人のあいだに、妙にしんみりとした空気が流れた。

ほう、とだれかがため息をつく。

その言葉は心地よく耳になじんだ。

苦楽をともしるうちに、ときに拳を交わしながら、彼らはいっのまにか家族にも似た絆を得ていたのだ。

運命のもとに集い、剣に鍛えられた友情。

その大きさと心強さに、しばし彼らは感じ入った。

「いいな、やるうぜ。なあネット」

「そうだな」

アイシスは満面の笑みだ。

となれば主催者は必然的に彼である、がぜんやる気もわくだろう。

一行はしばし山道から離れ、街を求めて歩き始めた。

そうしてたどり着いたのは石の街コルクユラ、東ユリシアのうちではなかなか発達した町だった。

「いい、宿には夜まで戻ってきちやだめだよ。それに、入るときも必ずドアを叩いてぼくの返事を待ってからだよ、絶対だからね」

アイシスは三人にしつこく念を押した。

ついに合同誕生日会とやらの準備を始めるようだ。

なかば追い出されるように、三人は宿を出た。

まったく、アイシスの張りきりっぷりときたら。

しかしそんな彼の姿を三人は嬉しく思った。

例によってネットは図書館を探しにいったし、ラナとリグルはあてもなく街をうろつくことにした。

市場なんかを歩いていると、ときどきドワーフの姿を見かけた。

どうやら鉱石や輝石のたぐいを売る店が多いらしく、彼らは掘り出した石を売りにきているらしい。

さすがは石の街と銘打つだけのことはある。

ふたりは店をひやかして回った。

石細工の見事さはけっこうなもので、動物をかたどった一般的なものから、ユリシア城を模した細工なども売られていた。

「あ、アイシス」

ふとラナが顔をあげると、同じように店を覗いてまわるアイシスの姿があった。

その声が聞こえたのだろうか、アイシスはきつと顔をあげると、あっちへいけと素っ気なく手をふった。

ふたりはおとなしく回れ右して反対方向へと歩いていく。

暗がりから声が投げかけられたのは、それからずいぶん経ってからだった。



「若いの」

しわがれた声に、ふたりは揃えて足を止めた。

見れば、店と店のあいだのじめついた日陰に、ひとりの老婆がたたずんでいる。

「いま呼んだのって俺たちのこと？」

「そうじゃ。いい言葉を授けよう、こちらにおいて」

ラナは興味を誘われたが、しかしリグルは難しい顔をした。

老婆は占い師といった風情をしていたが、彼はそういう確証もない言葉が嫌いなのだ。

動かないリグルと老婆とを、ラナは交互に見ていたが、そのうち老婆は掠れた声で笑った。

「人にあらざる娘よ、おまえは疑り深いね。しかし言うっておこづ、時に前兆は人から与えられることもあるのだと」

「……………」

リグルは目を見開いた。

彼女はリグルの本質を見抜いている。

老婆の笑みが、突然に不気味なものに見えてきた。

「大切なものが傷ついたら、きつと私の元へおいで。おばばはその先の答えを知っているから」

リグルはなにか答えようとして口を開けた。  
しかしなにも言わずに固まってしまふ。

彼は片眉をあげると、風を見るように空をあおいだ。

「どつした」

ラナはきよとんとしている。

無理もない、彼は人間で、魔族の血をひくリグルの聴力には及ぶべくもないのだから。

悲鳴が聞こえた、とリグルは言う。

まあ、それ自体は大して珍しくもないことだ。  
けんかはどこでだって起こるし、買い物の袋を落としたって悲鳴をあげる女だっている。

しかし、老婆の言葉もあってか、どうも胸がざわつくのだ。

「いってみるか」

最後にちらりと老婆に視線を投げ、ふたりはリグルの先導で声のしたほうへと向かった。

老婆はしわだらけの口をなにやらもごもごと動かしていたが、なにを言っているかはまるで聞き取れなかった。

## 第六十三話：全知の目

### 『聖伝』第六十三話

ネットレトは図書館を飛び出した。  
その形相に、道行く人々はなにごとかと悲鳴をあげる。

「間違いないな」

ああ。東のほうだ、急げ。

ネットレトは齒噛みする。  
いま、アイシスをひとりにするべきではなかったのだ。

彼はきつと、心を躍らせながら誕生会の準備に勤しんでいただろうに。

全速力で通りを駆けていく彼を見て、街人のひとりが火事ですか、と訊いた。

しかしもちろん、それに応えている余裕はない。

「あつ、ネットレト」

市場に近づいたところでラナの声がした。  
見れば、リグルと連れ立って駆け寄ってくるではないか。

ふたりは一瞬、ネットレトの剣幕に驚いたようだったが、すぐに顔を引き締めて横に並んだ。

彼らなりに感じる場所があったのだろう。

「なにことなの」

「あれ」だ

走りながら短いやり取りが飛ぶ。

“あれ”。

彼が本を読んでいると、突然ヴァネッサが騒ぎ始めたのだ、“あれ”の気配がすると。

ラナの顔が青くなる。

「あいつ、海を渡ってきたっていうのかよ」

あれこれ推量している暇はなかった。

とにかく先を急がなければ、あるのはその一念のみである。

市場が近づくとつれ、人のざわめきが大きくなり始めた。なにかが起こっているらしいことは十分に察せられる。

魔導師のけんかだ、とだれかが叫ぶのが聞こえ、ラナは体を固くした。

「見る！」

リグルが指をさす先、昼の晴れた空は、神々しい光に満ちていた。

あれほど美しい光を放てる者はひとり、超越種ユフィロスレジア、ただ彼女のみだ。

彼女のいるところにアイシスがいる。

ラナはより強く地面を蹴ったが、その時だ。

大地も揺るがそうという激しい振動が起こり、あちこちで悲鳴があがった。

三人はよろめき、うまく立っていることもできない。

逃げる人々が濁流のように押し寄せ、三人はその波に抗って進まなければならなかった。

もどかしい、アイシスが危機に立たされていることは明らかなのに。

「アイシス！」

ラナは血を吐かんばかりに叫んだ。

無理に体をねじこみ、人をかきわけて進む。

親友を想う彼の強さは、厚い人の壁をも突き破った。

ひとり抜け出て光の元へと走り寄る。

「おい、アイシス！」

店が並ぶ角を曲がり、そしてラナは絶句した。

息をすることも忘れてしまう。

アイシスは彼に背を向けて立っていた。

そのそばにユフィロスレジアが控えている。

その荘厳さ、その高貴さ。

ラナは圧倒された。

これまで目にしてきたユフィロスレジアと、いま目の前にたたずむ彼女は別人であるかとさえ思われた。

開いた口からは声も出ない。

あれほど必死に駆けた足はぴくりとも動かない。

遅れて駆けつけたネトレットたちも、彼と同様押し黙ってしまった。

まるで初めて海を見たときのように、目もくらむ青空を見たときのように。

いま、アイシスはひとりの少年ではなく、壮大な世界そのものようにすら思えた。

連なる山々のように厳しくも静かであり、しかし荒れ狂う波のような衝動を内に秘めて。

「ちょっと見ないうちに成長したね、アイシス」

“あれ”はアイシスの正面ではほ笑んでいた。美しくも恐ろしい笑顔だ。

彼のそばにはなんと四種の精霊すべてが控えている。

火のサルマン、水のアキュロス、地のラジネ、風のウィンディーネ。

彼女らはどれも美しく、気高くあった。

とりわけウィンディーネは怖気づくような輝きすらたたえている。ハイネを喰らい、その力を手にした結果だろう。



アイシスの薄い背がわずかに動き、彼が息を吸いこんだのがわかった。

「そうだね、ぼくは成長している、たくさんの辛く悲しいことを通して」

ふとアイシスがふり返った。

その動作で呪縛が解かれたかのように、ようやく三人の体は力を取り戻す。

三人はアイシスと並ぶようにして立った。

「そうしてぼくは真実を見つけた。だからきみはぼくに敵わないんだ、絶対に」

“あれ”の眉がぴくりと動いた。

「絶対に？　たいそうな自信だね」

言うなりウィンディーネが身を舞わせ、目も開けていられない突風が吹いた。

風は拳となってアイシスを襲い、刃となってその肌を刻む。

食いしばる歯の隙間からつめき声がもれる、赤い血がしずくとな  
って滴り落ちる。

しかしアイシスは膝をつかなかった、“あれ”から目をそむける  
こともしない。

青い瞳はららんと燃えていて、“あれ”は彼のその態度が気に  
食わなかったようだ。

圧倒的な力を見せられ、アイシスは絶望のふちで恐怖に囚われる  
はずだったのに。

「うわっ、ア、アイシスっ」

大きく上下するアイシスの肩を、狼狽したラナが支える。

よく見てみれば、彼の体はすでに傷だらけだった。

服は破れ、あるいは焦げて、たくさんの切り傷や刺し傷からは血  
が流れている。

「こんな状況でどうしてぼくが負けるって？　ぼくのなにがきみに  
劣るって？」

「気づけないんだね」

アイシスの声は静かで、どこか憂いを帯びてさえた。

心配そうなラナに顔を向け、小さくうなずきその手を優しく払う。

ラナは傷ついた親友を止めたかったが、しかし抗えなかった。

アイシスの足もとは赤く大きな水溜りができていた。

リグルはその量を見て言葉をなくす、もうとても動ける力などないはずだ。彼が立っていることすら奇跡と言っても過言ではない。

「おい、アイシス」

その肩を支えようとしたとき、アイシスの体が大きく揺れた。

力なく揺れる銀の髪が、糸を引くようにして落ちていく。

「アイシス！」

すんでのところでラナが抱きとめた。

やはり無茶だったのだ。

ぐったりとするアイシスの顔に血の気はない。

“あれ”はじつと成り行きを見ていたが、アイシスがすっかり意識を失ったらしいことを知るとため息をついた。

彼はいつたい、なにを言おうとしていたのだろう。

気づけないとはいったい。

“あれ”はネットレトに視線を移した。

ラナとリグルが顔を青くしてアイシスに取りつくのに対し、彼は不動の姿勢でずっと“あれ”を睨まえていたのだ。

まるで宝を守る番人かのような姿である。

そしてその肩にはしなだれかかるヴァネッサの姿があった。

なるほど、前のような不意打ちは食わないということらしい。

「アイシスに言うておいて、答えを待っているって」

“あれ”はもう一度ため息をつき、背を向けたかと思うと消えてしまった。

すっかりひと気のなくなった市場は、しんと身が震えるほどに静かだった。

ラナはアイシスをそっと担ぎあげ、ガラス細工を手にしたときの数倍の気を払って病院へと駆けた。

適当に人をつかまえては道を聞きながら走ったのだが、彼らは血

まみれのアイシスを見て悲鳴をあげた。  
それほどに彼の傷はひどかった。

「頼む、助けてくれ！」

アイシスを抱えるラナも、彼の血に染まって赤くなっている。

病院は蜂の巣を突いたかのような騒ぎとなった。

医者はラナからひったくるようにしてアイシスを奪い、病室へと  
駆けこんだ。

追って入った医者が、無情にもドアを閉めてしまう。

ラナは廊下に崩れ落ちた。  
足がすっかり震えている。

「ちくしょう……ちくしょう！」

組んだ両手を額に押し当て、彼は生まれて初めて祈った。

神さまとやら、いるならアイシスを助けてくれ。

あいつはあんなに戦っているじゃないか、その小さな体で。

泣いてばかりのあいつが、恐ろしい敵にも背を向けなかったじゃ  
ないか。

彼は必死に祈った。頭が痛くなるほどに願い続けた。

ネトレトは壁に背を預けていて、リグルはその前を落ちつきなく  
いったりきたりしていた。

彼はある言葉を思い出していた。

『大切なものが傷ついたら、きっと私の元へおいで。おばばはその  
先の答えを知っているから』。

「ねえ」

ラナに呼びかけてみるが、しかし反応がない。  
ため息をつくとき、リグルはネトレトに向き直った。

「あのさ、俺たち昼間変なばあに会ったんだ。占い師風の、怪し  
いやつ」

ネトレトはわずかに眉をあげ、無言で先をうながす。

「そいつは一言も喋らないうちに俺が半魔だつて見抜いたんだけど  
ね、なんだか予言みたいなのを言っていたんだよ。

大切なものが傷ついたらまたこいつで、答えを知っているからつ  
て」

「答えを」

「ああ。前兆がどう、とかも言ってた」

ネトレトは驚いた。

前兆という言葉を読むのは、運命に生きている人物か、それか運命の言葉を聞ける者だからだ。

その老婆というのは、本当に力のある占い師かもしれない。

ネトレトは彼女の言う“答え”に興味を持った。

「ラナ」

呼びかけても、やはり返事はない。

ネトレトは彼の前にかがみこんだ。

「すこし席をはずす。でも大丈夫だね、アイシスのそばについてやってくるね」

意識しなくとも優しい声が出た。

ラナは顔をあげなかったが、しかし小さくうなずいた。

はたして老婆はそこにいた。

しわだらけの口を開けると、黄色くなった歯が二本だけ残っているのが見えた。

「きたね」

「きたよ。その答えてっていうのを教えてよ」

老婆は笑った。

小さい子どもをたしなめるようにして（実際リグルなど彼女からすればうんと子どもなのだろうが）、そう生き急ぐなと言っ

「心してお聞き、私が言うのは運命の言葉だよ。

銀髪の王が目覚ましたら、すぐに北東へと向かいなさい。山を越え、地図に載らない谷を目指すのじゃ。

そうすれば王の傷は癒えるだろうし、探し物も見つかるよ」

ふたりははっと息をのんだ。

彼女は本当にすべてを見透かしているらしい。

不意にその瞳に見つめられていることが恐ろしくなった。

彼女の目は白く濁っていたが、しかしその本当の力は光り輝いているようだった。

「ありがとうございます、そうします」

ネットレトが答えると、老婆はうんとうなずいた。

「急ぐがいい。彼の傷は深い、遅れると命も知れん。しかし、うまくやったのう」



「うまくとは」

「あれ」を怒らせたろう。すばらしいことだ、“あれ”は長く憎しみしか知らなかったから。

彼はいまごろ、久しくなかった感情に戸惑っていることだろう」

老婆はほえほえと笑った。

ネトレトは謹んで頭をさげる。

彼にうながされ、リグルもちよっぴり腰を折った。

彼女に質問は無駄だろう、とネトレトにはわかっていた。

聞いたところで答えてくれるどころか、彼女は自分に失望するだろうから。

せつかく運命の言葉を教えてやったというのに、なんと愚かなことをするものかと。

ネトレトはなにか言いたそうなりグルを引っぱり、なかば無理やり病院へと戻った。

老婆はその後姿を見送ることもなく、ぼんやりと通りを見ている。

彼らの姿がすっかり見えなくなってしまつと、彼女のうしろからぬつと現れた人影があった。

リヒイ＝ミヒイだ。

彼は全身をぼろ布で包んでおり、そのところどころには、まるできれいでもない石ころが縫いつけられている。

「帰ったか。しかしその変装、趣味がいいとは言えんな」

「おまえにだけは言われたくはないのう。ほえ、ほえ、ほえ」

「もうそのふりはいい」

リヒイ＝ミヒイは地面を蹴ることもなく浮きあがると、軽々と老婆を いや、いまやその人物は老婆の姿をしていなかった、それは若い男だった。

うつそうと茂る木々のように、重たげに絡みあう紫の髪。部分部分だけが白と黄色に染まっている。

まるで飾り気のないローブを着ていて、しかしあまり清潔そうではない。

どこか天才魔術師を思わせる、もっさりとした容貌だ。

「だが又エ。あんなことを言ってどうするつもりだ、彼らはどうなるんだい」

「それは私にもわからないよ」と又エ。

「あなたは“全知の目”なのにな？」

「いや、と又エは首をふる。

「私はただの執筆者だ、未来を見ているわけではないよ。道を示してやることはできても、決めるのは彼らだ。どうなるのかまで私にはわからない」

「そうかい」

又エは立ちあがると大きく伸びをした。線は細いが背は高い。

彼はよく体を伸ばすと、ああと大儀そうに息をついた。

「ゴジ、ダジ、帰るよ」

「おー」

「あい」

どこから現れたか、白髪の少年ふたりが彼のあとを追う。

リヒィ＝ミヒィはちぐはぐなみつつの背中を見送っていたが、やがて彼自身もすっかり消えてしまった。

「東北へいく」

そう告げると、ラナは驚いたように顔をあげた。

「なんでまた？ それに、アイシスはとても動ける状態じゃないぜ」  
アイシスは包帯だらけでベッドに横たわっている。息をするのも  
苦しそうだ。

いくら巻き直しても白い布地にはすぐ血が滲むので、医者たちは  
もう二度も包帯を取り替えた。

「動けないなら背負っていく。とにかく急ぐんだ。アイシスが目を  
覚まし次第、ここを発つ」

「なんでまたそんな」

「それがアイシスを救う道だからだ」

ラナはそれ以上食い下がらなかった。

彼もまた、アイシスと共にいくうちに、運命や心に従うことを学  
んでいたのだ。

「わかったよ。じゃあ、アイシスは俺が負ぶっていく」

「ああ」

ラナはアイシスの手を取った。

その年頃にしては小さく、頼りない手。

しかし、いまやアイシスは偉大な王だった。

体は小さくとも、その内に秘めるものは大きかった。

ラナは握る手に力をこめる。

きゅ、とアイシスがわずかに握り返した、ような気がした。

ラナは無理を言っつて病院に泊まった。

彼がついていれば安心だと、ネトレトたちは宿に戻った。

そしてドアを開けて驚いた。

部屋は鮮やかな色にあふれていたのだ。

テーブルやたんすの上、はては窓枠の上にも、色紙を切り抜いた稚拙な作品が並んでいる。

小さい子どもが作っつて遊ぶような飾りだった。

そのうちのひとつを手に取り、リグルは思わず顔をしかめる。

「へたくそ。不器用にもほどがある」

その声はすっかり湿っている。

彼は声を詰まらせ、涙を流した。

のろまな手つきながら、しかし一生懸命に飾りを作るアイシスの姿は、想像するに容易だった。

きつと彼はときおり手を休め、喜ぶ仲間たちの姿を思っただらう。

もしも今日がふつうの一日ならば、いまごろ三人は揃って部屋のドアを叩き、それをアイシスは満面の笑みで迎えていたに違いない。

それをつぶしたのは“あれ”だった。

リグルは“あれ”が憎くて仕方なかった。

アイシスから笑顔を奪い、代わりに重責を与えて苦しめる“あれ”が。

それはネトレトも同じだったらしい。

彼の黄金の瞳には、静かなる怒りが宿っていた。

テーブルの上には宿の人から借りたのだろう大皿がひとつと、小さな皿が四枚並んでいた。

アイシスは大きなケーキを買ったに違いない。

甘党の彼だから、きつととびきり砂糖がいっぱい入ったものを。

ネトレトはあまり甘いものを好まなかったが、しかし彼のためならおいしそうに頬張ってみせたのに。

言葉も出ないふたりを、たくさんの星が見守っていた。

風に吹かれ、窓辺では色紙がかさかさと揺れている。

## 第六十四話：親友の背中

『聖伝』第六十四話

アイシスは六日ものあいだ眠り続けた。

彼はその間ひどくうなされ、体は熱をもって熱かった。

ラナは医者に頼みこみ、彼の看病を手伝った。

そうすることではなにか変わるとも思えなかったが、すこしでもアイシスのためになりたかったのだ。

そうして七日目の朝に彼は目を覚ましたのだが、しかし容態がよくなっていくわけでもなかった。

彼の唇は相変わらず色をなくしていたし、目は潤んでいて元気がなかった。

「また負けちゃった」

アイシスは気丈にも笑ってみせたが、しかしすぐ痛みで顔を引きつらせた。

「ごめんね、お誕生日会」



リグルは胸を詰まらせた。  
「ばか、と怒鳴りつけたくなる。」

こんな状態になってまで、彼はなにを言い出すのか。

「ケーキも買ったんだよ。すごく大きくて、すごく甘そうなの」

「やっぱり」

ネットレトは思わず困ったような笑みをもらす。

「だけど、とアイシスは目を伏せた。」

「どこかに飛ばされちゃった。果物が散っていくのを見たけど、あのあとどうなったのかなあ。残念だよ、とてもおいしそうだったから。」

でも、こっちだけはなんとか守った」

そう言ってアイシスは体を動かそうとした。

しかしすぐにラナが手で制し、なにがほしいんだと問う。

よく息のあった動きだった。

「ほくの腰袋を、とアイシスは言う。」

ベッド脇の机に置かれたそれを取ると、中から小さな包みが見つめてきた。

「これ……」

「ぼくからの贈り物。リボンが巻かれているでしょう、赤がラナで、黄色がネトレト、紫がリグルだよ」

包みはラナからそれぞれに渡された。

震える指でリボンを解く。

出てきたのは雫の形をした輝石だった。  
うつすらと透明で、光に当ててみると中の模様が揺らめいて見える。

「きれい」

石を朝日にかかげ、ぼつりとリグルが呟いた。

アイシスは嬉しそうに笑う。

「同じものをね、ずっと以前の誕生日にラナがくれたんだ。深い青色をしていて、ぼくの目と同じ色だった。

いつかラナにも贈り返したいなあって思っていたんだけど、なかなか珍しい形だから」

「だけどさすがは石の街だね、とアイシスは満足げに言う。

三人の手のなかで、それぞれの瞳と同じ色をした石が輝く。

ラナは輝石を強く握りしめた。

気のせいだろうか、どこかほんのり温かい。

たまらなくなつて彼はアイシスの頭を撫でた。

アイシスは目を細めていたが、気づけば寝息をたてていた。きつと疲れたのだろう。

「まるで子犬だ」とリグルはほほ笑んだ。

コルキュラを発つのは翌日と決め、三人はそれぞれの行動に移つた。

医者に言おうものなら全力で反対されるのは目に見えている、ことは秘密裏に進めなければならぬ。

まず、リグルはそれとなく治療費を払った。

医者たちは退院するときでいいと言い張ったが、リグルは器用な口先で適当にごまかし、言われた額よりすこしばかり多くを渡した。

ラナとネットレトは市場へいき、ラナは砂糖菓子を、ネットレトは四人分のコートを買った。

風は冷たさを増している。

北へ向かうとなればなおさらだった。

人々は例の騒動の話にもちきりで、中にはラナたちの顔を覚えていた者もあり、ふたりはなにかと取り囲まれては質問責めにあつた。

あの少年たちは何者なのか、まさか黒の騎士団の一員ではあるまいな、と。

次々に投げかけられる問いにうんざりし、ふたりは野次馬をまいてしまつてから宿へと逃げ帰つた。

だれもついてきていないことを確認すると、ラナは再び病院へと足を向ける。

入れ違いにリグルが戻ってきた。

「これも片さないといけないのかあ」

部屋中に視線をめぐらし、彼は残念そうに肩を落とした。アイシスが作った飾りを、ずっとそのままにしていたのだ。

しかし宿を出るならこれも処分しなければならない。

「もつたいない気持ちはわかるが、しかしアイシスの気持ちは変わらずあり続けてくれる」

「そうだね」

ふたりは部屋の片づけに取りかかったが、リグルは小さな飾りを

ひとつ腰袋にしまっておいた。

夜が明け、三人はアイシスの病室に集まった。

アイシスの表情からは幾分か硬さが取れていて、リグルはほっと胸をなでおろす。

医者はいつも彼の容態に目を光らせていて、その傷がいかに深いかを物語っていた。

三人は機会を待ったが、とても気取られずに病院を抜け出すことは不可能のようだ。

そこでリグルが囿になった。

彼はつきそいの医者を誘い、病室の外で彼となにやら話をし始めた。

ぼそぼそと会話の断片が聞こえてくる中、ラナはアイシスが着替えるのを手伝った。

「ねえ、いったいどうしたの」

入院着を脱ぎながら、しかしアイシスはまだ事情をのみこめていない。

「ここを出るんだ」

「出る？ どうしてまた。“あれ”がそばにいるの？」

「いや、“あれ”については大丈夫だ。だけど、俺にもよく分からないんだけど、なにやらおばばのお告げがあったらしいぜ」

アイシスは声をひそめて笑った。

なんだかとても陽気なものに聞こえるではないか。

ラナはお得意の軽口を叩きながら準備をすませ、寒くないようアイシスに肩かけをかぶせた。

ゆっくり、慎重に、傷が痛まないようにして背負う。

「ここ数日ろくな食事を取っていないせいもあるだろう、もともと細身のアイシスの体はひどく軽かった。

「痛むか」

「平気だよ」

ネットレトが窓を開けて待っている。

ラナはそつと音をたてないように病院を抜け出した。

彼が十分にいつてしまったのを確認すると、ネットレトはなに食わぬ顔で病室を出た。

すぐリグルがそれに気づく。

短く視線を交わすと、リグルは医者に別れを告げて彼と並んだ。

医者はしばらく手をふっていたが、やがて病室へと足を向ける。

「走るぞ」

もぬけのからとなったベッドを見れば、あの若い医者は顔を青くすることだろう。

病院の人数を集め、すぐにでもアイシスを探し出しにかかるだろう。

コルキュラの医者たちはとても好意的で、旅人たちにすごく親切だった。

それを嬉しく思いながらも、いまは留まるわけにいかないのだ。

もはや抗いがたい力で運命は動いている。

その流れを変えることはできようが、止まることはできないのだ。

案の定、医者は空っぽのベッドを見て叫び声をあげた。

慌てて病室から飛び出すが、しかしネットレトたちの姿はもう、ない。

「ほら、これ食っとけ」

ラナから手渡された砂糖菓子を、ちみりちみりとアイシスは食べた。

目を覚ましてからもアイシスは食事を取ろうとしなかったのだがこれは食べた。

さすがはラナ、とネットレトは感心する。

アイシスのことをだれよりもよく分かっているのだ。

一行はひたすら北東へと進んだ。

地図はもう広げられることを忘れてしまったようだ。

目指す谷は地図にも載らないと老婆は言った。

そつとつ奥深い地にあるのだろう。

となれば戦いの覚悟も必要である、ネットレトは気を引き締めた。

風は日に日に冷たさを増しつつあった。

まだコートを着る必要はなかったが、しかし夏はもうすっかり遠いものとなっていた。

道を急ぐ四人の腰袋では、揃いの輝石が弾んでいる。



「大丈夫か」

ラナはしょっちゅうそう背に尋ねた。

アイシスはそのたびほほ笑みを返してやるのだが、どうやら嘘でもないらしい。

ベッドに伏せていたときよりも、彼はずっと調子がよさそうだった。

しかしラナは不安だった。

なんだというのだろう、この胸のざわつきは。

その体があまりに軽いからそう感じるのだろうか、アイシスはひどく儂げに思えた。

いつものすこし困ったようなほほ笑みも、明るく澄んだその声も、全部がいまにも消え入りそうな。

それでいてどこか神秘的ですらあった。

アイシスはなにかに気づいたのだろうか？

なにか大切なこと、たとえば命が呼吸する理由のようなものに。

四人は一ヶ月ほど歩きとおした。

ラナはときどき、本当にときどきアイシスを負う役目をネットレトに代わってもらったが、それ以外はずっと親友を離さなかった。

最初はぼつりぼつりとあった村も、やがてすっかり見えなくなってしまう。

それに従って魔物の数は増えた。

うさぎ程度の大きさしかないグーズの群れもいたし、熊よりもずっと巨大な恐ろしいグーズもいた。

たいていはネットレトとリグルのふたりがそれを切り払い、ときどきふたりは傷を負ったが道のりに支障はなかった。

行く先には険しい山々がそびえていて、そのうちのいくつかは天を突き刺す勢いで伸びている。

その頂上付近には白く雪が積もっているようだった。

四人がついにコートを着るころ、一行は久しぶりに村に出た。

小さな村だった。

人々も木の家も温かいのだからどこか色褪せていて、村そのものが時代の流れについていくことを忘れてしまったようだった。

「この村に旅人が寄るなんて、もう長いことなかったことだよ」

一行は長老の家に招かれ、そこで熱いスープをご馳走になった。

野菜の甘みがじつくりと滲み出てとてもおいしい。  
アイシスもこれは喜んで食べた。

しかし、と長老は言う。

「おまえさんたちはどこに向かおうと言ったね。南のほうからいられたようだが？」

「はい、北東に向かっています」

「北東に？ 向こうにはなにもないよ。ただ殺伐と荒れた土地が広がるばかりだ」

「私たちはその先に用事があるんです」

ネットレトはきっぱりと言い張ったが、これはけっしてはったりではない。

道を進むにつれ、彼は確信を抱き始めたのだ。  
これであっている、道を逸れてはいないと。

ふむ、と長老はうなずき、しばし考えこんだ。

「分かった。止めはしないが、しかし気をつけなさい。」

ずっと以前、いまはもうそんなことを考える者はいないが、荒れた土地へと探索に出た村人がいた。彼の残した書記によると、剣牙のような山の向こうから、大地がとどろかんばかりの唸り声が聞こ

えたのだそうだ。また、空に舞う大きな姿を見たとも書かれている。それが善良なものか悪しきものかは分からないが、よくよく注意なさい」

四人は長老の善意に感謝し、深く礼を言つて村を出た。

村人たちはわざわざ北の門まで彼らを見送った。

それに手をふり、四人は道を進もうとする。

「待って！」

細い声に呼び止められてふり返ると、少女が連れ立って駆けてくるではないか。

彼女らはそれぞれ四人の手を取ると、その右腕に麻糸を編んだものを結んでくれた。

「安全を祈るお守り。みんなで作ったの」

ラナは照れくさそうにしていたが、ふといいことを思いついて腰袋をまさぐった。

「なあ、これも一緒に結わえつけてくれないか」

彼が取り出したのは、アイシスから贈られた赤の輝石だった。

少女はその美しさにしばし見とれていたが、すぐにうまいことお守りに結びつけてくれた。

アイシスたちも同じようにしてもらおう。

「それじゃあ」

アイシスは少女らにお気に入りの砂糖菓子を分けてやった（「特別だよ」）。

礼を言い、今度こそ、と旅人たちは背を向ける。

揃いの石は右腕を動かすたびに揺れ、どこか嬉しそうだった。

まだ真冬というには早い季節だったが、しかし寒かった。仕方ない、彼らはけっこうな高山地を歩いていたので。

何日も雪が降り続けるときもあったし、ときには突風とともに吹きつけもした。

それでも一行は歩みを止めなかった。

心が呼ぶのに従い、ただひたすらに歩く。

アイシスは薬草に関する知識が豊富で、自分に必要な草をいくつか教えることができた。

ラナたちは形を頼りにそれを探し、すりつぶしては薬湯にして飲ませた。

おかげでアイシスの傷はすこしずつ癒えた。

しかし、彼はどうしても立ちあがれなかった。  
腹に力を入れると、どうやらひどく痛むらしい。

アイシスは引き続きラナの背の世話にならなければならず、彼はとても申し訳なさそうだった。

「ごめんね、ラナ。よけいに疲れるでしょう」

「小さなことを言うなよ。おまえみたいな軽いやつ、いくら背負っても平気だって」

それに、とラナは言葉を続ける。

「俺はけっこう嬉しいんだぜ、小さいころを思い出してさ。」

おまえがティエラにきたばかりのころ、時々外へ出るのをぐずったろう。そんなときはさ、こうしておまえを背負ってまで連れ出していたなあって」

「へえ、なかなか興味深い話だね」

リグルが茶々をいれ、アイシスは真っ赤になってしまふ。

そうだった、彼は幼いときにもこうしてラナの背によく負われていたのだっけ。

だから彼の背中はこんなにも懐かしく、温かいんだ。

いまま昔も変わらず、ラナの背中はアイシスよりずっと広くてた

くましかった。

四人はやがて木も生えていない土地に出た。

なるほど、先に長老が言っていたのはこの辺りのことだろう。

まばらな枯れ草はまるで忘れていかれたようで、どこか寂しげな風情だった。

粛々と歩けば、その足の下で凍った草が音をたてる。

その音に混じり、低い唸り声をアイシスは聞いた。

ぴくりと眉をあげ、顔をあげる。

ラナもネットレトも無反応だったが、しかし半魔のリグルだけは彼と同じように耳をすませていた。

しかしもうなにも聞こえない、吹き抜ける風の音だったのだろうか。

しかし、それから三日ほどがすぎたころである。

唸り声が、今度は四人全員にはつきりと届いた。

風の音とは明らかに違う、高かったり低かったり、なにかを訴えるかのようだった。

「聞いたか」

ネトレトの言葉に、三人はうなずきあう。

まるで長老の言葉どおり、声は鋭い山々の向こうから聞こえてきた。

そうになると、トリグルは空を見上げる。

しかし、灰色の空には雲以外に珍しいものはなにも見当たらなかった。

ともかく気になるのは唸り声の正体だ。

四人は山へと足を踏み入れた。

ラナは不思議に思ったが、荒地にさしかかったころからだろうか、まるで魔物に遭遇しなくなった。

それはそれで嬉しいことだったが、しかし不気味だ。ガントウーラー族と出会ったときの前例もある。

「もしかして、この辺りは魔族の住処だったりして」

どうやら魔物は魔族にあまり近づかないらしいのだ。彼らの強大な力を知っているからだろう。

ああ、とネトレトは重苦しくうなずいた。

「十二分に気を引き締めていこう。なにが起こっても対処できるよ



うにな」

ガントウラー族においては、まるで害意がなかったので助かったが、他がそうとは限らない。

背中のアイシスだけはなにがあっても守ると、ラナは決意を新たにした。

アイシスはよく眠っているようになった。

夢でも見ているのだろうか、それともどこか痛むのか、彼はよくうなされた。

体はあつく、どうやら熱が出ているようだ。

『遅れると命も知れん』、老婆の言葉がよみがえった。

「急ぐよ。もう飯を食うために立ち止まっている場合じゃない」

道は険しかったが、しかし一行の進みは以前にも増して伸びた。

アイシスの熱はあがる一方で、雪の中だというのに彼の頬は赤い。荒い息はあつく湿っていた。

「大丈夫だからな、アイシス」

確証もないラナの言葉に、アイシスは夢つつながらうなずいた。

唸り声は間違いなく進む先から聞こえてくる。

もうすぐ、もうすぐだ。

口癖のようにラナは言ったが、果たして彼の言つとおりになった。

「うわっ」

ひととき大きな山に登りきったときだ。  
ラナはすつとんきような声をあげた。

一行の前には深い谷が広がっており、山頂からは隅々まで見渡す  
ことができた。

ずいぶんな規模だ。

しかし、その一面は厚い霧で覆われていた。

手ですくえるかと思うほどに濃厚な霧で、ところどころに鋭い岩  
が突き出している。

「神々の住まう天空にでも迷いこんだみたい」

呆然とリグルが声をあげた。

その景色のどっしりとした荘厳さに、一向はしばし圧倒される。

しかし、この先どう進めばいいのか。

やみくもに霧の中へと進み入れればいいのだろうか。

四人が迷っていると、唐突に霧が晴れはじめた。

まるで潮が引いていくかのように、雲が風に流されるかのようにして。

あっという間に視界は開け、四人はさらに驚きの声をあげた。

深い霧に隠された谷底には、壮大な街が眠っていたのだ。

## 第六十五話：ドラゴンの生き血

### 『聖伝』第六十五話

同じ形をした家々が、秩序正しく並んでいる。

山頂から見ればそれらはとても小さく、整然としたそのさまは、まるで模型かのようにだった。

四人はすっかり目を丸くして硬直していたが、不意に大地をとどろかす唸り声が響いた。

なにかが吼えているようだ。

「げっ、これはひどいぜ」

鼓膜が震えるつるさに、ラナは思わず顔をしかめる。

長く尾を引く吼え声は、四人の体をひどくしびれさせた。

ようやく体の感覚が戻ってくると、一行は顔を見合わせてから山を下り始めた。

下り道は崖のように急な勾配をしていた。

ずり落ちてしまわないよう、細心にも細心の注意を払いながら先

に進む。

悪路のこともあり、一行は十日近くをかけてようやく谷底へと下りた。

人々は、彼らが山の中腹にいるあたりから気づいていたらしい。

すっかり下りてしまつのに合わせ、ふたりの男が彼らを迎えに出てきた。

背の高い男だ。

不思議な形の耳当てをしていて、大きな牙の飾りをつけている。

眼光の鋭い彼らは、しかし一言も口を利かなかった。

一行がある程度近づいてくると、そのまま背を向けて歩き始めたのだ。

アイシスたちは戸惑ってしまふ。

いったいどうすればいいのだろうか。

顔を見合わせていると、男たちは立ち止まってこちらを向いてい  
るではないか。

ついてこいということだろうか。

アイシスたちはもう一度顔を見合わせ、それから男たちのあとを追った。

男たちは迷いなく足を進めたが、やはり一言も話さなかった。

アイシスたちに声をかけないのはもちろん、互いに言葉を交わすこともない。

それで四人もどこか気詰まりで、彼らも黙りこんでしまうのだった。

歩く道はなかなか広くて、その両脇には家々が並んでいる。

そこから顔をのぞかせたり、通りに出たりして人々は旅人の姿を見やった。

客人が珍しいのだろうか。

しかしそれはアイシスたちにとっても同じことだった。

彼らの服装、装身具、それから家の造りまで、どれも見たことのないものばかりだったからだ。

先導する男たちのように耳当てをつけている者もいれば、耳当てだけで、なにも飾りをつけていない者もいた。

四人は大きな家へと通された。

ドアはなく、厚い毛皮が幾重にも張られている。これも四人には初めて見る様式だった。

細い廊下を通った先、円型の広間に案内される。

「ここで待つように」

そこでようやく男のひとりが口を開いた。  
目を丸くし、ラナはただうなずいて見せた。

広間にも廊下にも毛足の短い絨毯が敷かれていて、その模様も特異だった。

幾何学模様は派手な原色で彩られていて、茶一色の壁や屋根とはまるで趣向が違って見える。

四人はしばらく辺りを見回して時間をすごした。

「待たせたな」

太い声が聞こえ、アイシスはびくりと肩を跳ね上げた。  
威厳のある声だ。

声の主は悠々とした足取りで広間を横切り、奥にそなえられた椅子へと腰を下ろした。

長く伸びた鬚まで真っ白の、しかし眼光の鋭い老人である。

彼もまた奇妙な耳当てをつけており、その飾りは他よりずっと豪華だった。

権力者だろうことは一目でわかる。

ネトレトは謹んで頭をさげ、三人もそれに習った。

「気を休められい。我らはそなたらのよき友となろう、しかし礼儀は通さねばならぬ。」

まずは名乗り、素性を明かされよ」

礼を言い、ネトレトは頭をさげたままそれぞれを紹介した。

彼は偽名を使わなかった。

偽りを許さないという凄みを、かの老人から感じ取ったからだ。

「では我らも応えよう。」

我らはドラコ族、ドラゴンと共生する者じゃ。この霧の谷は幻の郷、我らドラコ族が最後に見つけた桃源郷じゃ」

「ドラコ族」

ネトレトが驚いた声をあげた。

アイシスたちには耳慣れない単語だったが。

「我ら一族を知っていたか、ネトレトよ」

「はい。しかし」

「滅びたものとおっておった、か？ 無理もない、現に伝記ではすべてそうなっているはずじゃからの」



そのとき、例の吼え声がまた聞こえた。

アイシスははっと息をのむ。

老人の言葉が真実ならば、あれはドラゴンの声だといふのか。

「わしはドラコ族の首長、ギレムリック。この郷におけるあいだ、そなたらの命はわしが保障しよう」

「でも、どうして」とリグル。

彼にはわからなかった。

どうしてこうも見ず知らずの旅人に彼らは優しいのだろうか。

い。こんな場所に暮らしている一族だ、まず他人種との交流はあるまい。

彼らにとって、自分たちの存在は畏怖の対象となってもおかしくないはずなのに。

ギレムリックの返答は明確だった。

「霧が晴れたからじゃ」

「霧が？」

「そう。この郷はまやかしの霧で守られておる。しかし、そなたらを迎えるために霧は晴れた。」

そなたらはこの郷に選ばれたのじゃ、だからわしらはそなたらを歓迎する」

なるほど、とリグルは言った。

それは彼が苦手とする確証のない理由だったが、しかしその土地で信仰するものにまで口を出す気はない。

彼らにとって、霧は神聖で絶対的なものなのだろう。

「ときにアイシス。そなた、体を毒されておるな」

「え？」

ギレムリックはそばに控えていた男に視線をやった。

男はうなずき、アイシスに近寄る。

「失礼」

男はすこし腰をかめると、短く断ってからアイシスの体に触れた。

腹部を触られたとたん、鋭い痛みがアイシスを襲う。

「っ！」

決るような痛みにも、アイシスは声を出すことすらできない。

息が詰まり、みるみる涙が溢れ出す。

男は崩れ落ちるアイシスの体を支えると、慌てて身を起こしたラナに彼を預けた。

アイシスの呼吸は短い。息をするだけでも、彼の腹部はきりきりと痛んだ。

「なにしゃがるっ」

ラナは吼えたが、しかし男はギレムリックになにごとかが耳打ちすると、そのまま席を立てってしまった。

「深い傷を負ったようじゃな、アイシス。外が癒えても内の傷が残っていたら命が危うい。」

そなたの体は腐り始めているぞ」

「腐るだつて！」

ラナが悲鳴にも似た声をあげた。

薬湯などのおかげでアイシスの傷は治ったように見えたが、真の災いは彼の内に巣くっていたというのか。

「こうなつては腹を開け、患いの元を切り取ってやらねばなるまい。しかしここにそれだけの技術をもつ医者はおらぬし、もはや山越えに耐えうる力もなかるう。」

このままじゃとそなたはゆるゆると死を迎えることになる、春を迎えることもなかるう……残された道はひとつじゃ」

アイシスを診た男が戻ってきた。

彼は小さな盆を手にしており、グラスがひとつ乗っている。グラスは赤い液体で満たされており、男の歩みに合わせてそれはぼつてりと揺れた。

男はそれを持ち、アイシスの前に立つ。

アイシスは呼吸を乱し、顔を赤らめたままそれを見た。強烈なおいがする。

「それを飲むのじゃ」

さらりとした口調だ。

体が腐るといふ言葉ほどに、それは衝撃的な内容だったが。

「うえ、本気がよ」

リグルが正直にも顔をしかめる。

そろりとグラスをのぞきこみ、これはなに、と問うと、

「ドラゴンの生き血じゃ」

「げっ」

今度はラナが声をあげた。

生き血だって？ しかもドラゴンの！

「ドラゴンは魔物の頂点にたつ生き物じゃ、その生命力は凄まじい。内なる病も癒してくれる」

「だけどそんな、生き血を飲むなんて」

ラナはすっかり顔を青くしている。

しかしギレムリックは彼の言葉をぴしやりと遮った。

「選ぶのはアイシスじゃ」

広間にいる者の視線が、すべてアイシスに注がれる。

アイシスは潤んだ目でグラスを見ていたが、やがて目を閉じ、絞り出すようにして言った。

「それで治るのだったら」

「うむ」

ギレムリックはアイシスの言葉に満足したようだったが、しかしその顔はすぐに険しくなった。

「効能は保障する、しかし危険も大きい。もしもそなたの体がドラゴンの血を拒めば、そなたは体が腐るのを待たずして命を落とすことになるじゃろう」

「……はい」

「それにもうひとつ。血がうまくそなたに馴染んだとしても、しかし代償は受けねばならぬ。

限りある生を受ける生き物のうち、ドラゴンは最も長い寿命を持つ。人間にして優に十の代の世を生きよう。

その血を受ければ、そなたはそれに近い時間を生きねばならなくなるのじゃ」

え、と間抜けな声をあげたのはラナだった。

「なんだ、それっていいことじゃねえか」

「んん。どうか、一概にはそうも言えない気がするけど」

「なんで？ 長生きっていいことだろう」

リグルは呆れてため息をついた。

「考えてもみるよ。人の世の十代っていったら、軽く二百年を超え

るだろう。それだけの時間を生きてみる、いったいいくつの命が先に逝くのを見なければならぬと思う？

おまえがどれだけががんばったって、まさかそれ以上生きられるはずもねえ。

もしもドラゴンの寿命を受けたら、アイシスはだれかと出会った  
びにそいつの死を思わなきゃならなくなるんだよ」

「あ……」

言われてようやくラナは気づいた。

長く生きることの苦しみを、人と出会うことの恐怖を。

アイシスの表情は硬かった。

命を落とす危険性について言われたときよりも緊張してさえ見える。

アイシスは心優しい少年だった。

自分の誕生日さえ忘れてしまうほど、いつも周囲を想っている。

そんな彼だからこそ、長すぎる生はより苦痛となるだろう。

しかし、ギレムリックの言つとおりだ。

残された道はひとつ。

生きるために、戦うためにアイシスは選ばなければならない。

「飲みます」

「うむ、それだけの覚悟があるなら」

ドラゴンの生き血が入ったグラスを、男は恭しくアイシスに捧げる。

アイシスは小さく頭をさげ、それを手に取った。

広間が異様な緊張感に包まれる。

その場にいる全員が息をのみ、張りつめた表情でアイシスを見つめる。

痛いほどの視線。

アイシスは大きく息をついた。  
えずくにおいが鼻をつく。

目を閉じ、呼吸を整え、意を決してアイシスはグラスに口をつけた。

「ぐぐっ」

「吐き出すでないぞ。血に対する不敬じゃ」



生理的な涙が滲む。

がんばれ、と言ってラナが拳を握る。

ままよ、とアイシスは一気にグラスを傾けた。

おお、とリグルが感嘆の声をあげた。

「よしっ、いいぞアイシス、飲みこめ！」

「うるさいよ、ちょっと黙ってな」

拳をふり回すラナを、リグルが後ろから押さえつける。

関節をきめられ、ぎゃあとラナは悲鳴をあげた。

しかしアイシスの耳にはそんな騒ぎも届かなかった。

熱い。

体中が熱いのだ。

はじめ、アイシスはその味を恐れていたが、舌は焼けたようにしびれ、もはやなにを感じようもなかった。

熱がある程度引いてしまうと、今度はひどく体が震え始めた。

なにかが体の中で暴れている。

「う、ああああっ！」

痛い。

体のあちこちが、頭が、割れるように痛い。

悶絶するアイシスを、慌ててラナが抱きとめる。

彼の腕のなかでアイシスは暴れた。

ギレムリックはそのようすから一瞬たりとも目を離さない。

ネトレトもリグルも、彼がいつたいどうなってしまうのかと心配

顔だ。

アイシスはひととき大きな悲鳴をあげると白目をむき、ぷつりと崩れ落ちてしまった。

使い古された表現をするなら、それこそまるで、操り人形の糸が切れてしまったかのように。

「うわっ、ア、アイシスしっかり」

胸に崩れかかってきたアイシスを、ラナはがっしりと受け止めた。

その頬に触れてみるが、一時は燃えるようだった熱さはもう感じられなかった。

どうやら体温は下がったらしい。息もしているようだ。

ラナはひとまず胸をなでおろした。

郷には宿がなかったのので、一行には大きな屋敷が宿泊地としてあてがわれた。

ギレムリックから先に使いがきていたらしく、案内のもと三人が屋敷を訪れると、その主人が礼を尽くして出迎えてくれた。

すこし小太りの男で、厳しい顔が多いドラコ族の中では珍しく柔和な表情だった。

アイシスは目を覚まさなかった。

ラナは彼のそばにいたかったが、ギレムリックが許さなかった。

「彼はしばらく戦わねばならぬ」

ドラゴンの血に認められるか、滅ぼされるかはそれからじゃ。偉大な首長は言った。

三人はどうも落ち着かなかった。

気づけばそれぞれがそれぞれの神に祈っていた。どうかアイシスが打ち克ちますように、と。

夜、リグルはギレムリックの屋敷を訪ね、アイシスを見舞った。

使用人に頼んで深皿に湯を張ってもらおう。

彼はふところから香草を取り出すと、湯の中でそれを揉んだ。清涼な香りがベッドを包む。

「苦しみがすこしでも軽くなりますよう」

リゲルはアイシスの汗ばむ額にキスをした。

アイシスはうなされ続けた。

二日経ち、三日経ち、四日が経った。

そしてその日、月が雲から顔を出したところ、ようやくアイシスは目を開けた。

「アイシス殿が気づかれたようですよ！」

屋敷の主人が、その太った体を揺らせて部屋に飛びこんでくると、ラナたちは文字どおり椅子から飛び上がった。

返事をする間ももどかしい。

先頭で飛び出したのはラナだったが、ギレムリックの屋敷が目の前で助かった。

彼はあまり正しい道順や方向に関心がない男だったから。

「アイシス！」

息をせきって駆けこむと、アイシスはにっこり笑ってふり向いた。彼はベッドに起きあがっていて、ギレムリックとなにごとか談笑していたようだ。

「ラナ」

「よかった、アイシス、本当によかった！」

ラナは涙を散らしながらベッドに飛びかかり、アイシスの首筋にしがみついた。

痛い、とアイシスは声をあげたが、その声はころころ笑っている。

やや遅れて駆けつけたネットレトは、おいおいと声をあげて泣くラナを見、どうしたものかと眉をさげた。

## 第六十六話：彼の探し物

### 『聖伝』第六十六話

「うん、傷はもう痛まないよ。驚くほどさっぱりしちゃった。お腹を触られても平気。」

体の調子が変わったところもないし、強いて言うならちょっとぴりり気だるいつてくらいかな」

アイシスは笑顔だ。

表情に無理をしているようすはない。

三人は心配そうな顔をしていたが（ラナはまだ鼻をすすっている）、そのようすを見てようやく胸をなでおろした。

「だけど、トリグルが言う。」

「それはなんなの」

それ、というのは眼帯のことだ。

飾り気のない茶色の眼帯で、アイシスの右目を覆っている。

「ああ、うん。これはちょっと、血の影響が出たみたいで」

具合が悪いわけじゃないんだよ。  
そう言ってアイシスは眼帯を外した。

三人は一様に息をのむ。

まさか、といった調子で声をあげたのはラナだった。

「色が」

アイシスの右目は、もはや海の色をしてはいなかった。  
例えるならば、それは萌える若葉の色。

ギレムリックが口をはさんだ。

「ドラゴンの瞳は黄金色じゃ。そして強い魔力を秘めておる。

どうやらドラゴンの血は、アイシスの体をよほど気に入ったらしい。  
い。

瞳と、それに宿る力までもが彼に表れたのじゃ」

「ドラゴンって視力がすごく優れているらしくて、ちょっと見えすぎるんだ。

左右でちょっと見え方が違うのは困るし、それにギレムリックさんが言うように靈惑的な力も持っているから、それを隠すためにも眼帯をしていたんだよ」

アイシスの口調は、簡単な問題を解いてみせるようだった（残念ながら、現実にはそのような機会はなかったけれど）。

しかしリゲルはぼかんとしている。

「お、おつかねえ。力が乗り移るだつて？　じゃあアイシスも空を飛ぶの、腹が減ったらばかでかい声で吼えるの？」

「まさか」

アイシスは困ったように笑った。

リゲルは完全にからかう口調だったが、それでそばに控えるドラコ族はすこしむっとしたようだった。

彼らはドラゴンに誇りと尊敬の念を持っている。

「そういうものじゃないよ。力っていうのは言うなれば精神の強さ、心の充実みたいなものだって」

「ならばユフィロスレジアはより美しく輝くだろうね」

たぶんね。アイシスはネットレトの言葉にほほ笑んだ。

「すげえ、じゃあもう“あれ”だって怖くねえな！　次は勝てるよな、絶対！」

アイシスはにっこり笑ったが、しかしどこか浮かない表情だった。



「さあ、改めてそなたたちを歓迎しよう。ドラコ族の秘境を存分に楽しむがよい」

アイシスはもう立って歩くことができた。

長く働いていなかった足は、最初こそすこしふらついたが、ややもすればまた健全な脚力を取り戻した。

翌日から四人はドラコ族の郷を見てまわることにしたが、まず向かう場所となればぴたりと意見がそろった。

「ドラゴンの厩舎へ！」

郷にはときどきドラゴンの吼え声が響く。

そのたびに彼らはドラゴンとはどのような生き物か、と胸を高鳴らせていたのだ。

リグルには血の繋がらない母親がいて、彼女はどうも力あるドラゴンらしいかったが、顔を見せると食べられるとやらで会ったことはなかった。

ギレムリックは郷の案内人として、ひとりの青年をつけてくれた。

灼けた肌に大きな鼻、それに意思の強そうな目をしている。

「俺はカカ・トゥルック。あんたらの話は聞いているぜ」

アイシスたちもそれぞれ名乗りながら、カカの大きな手と握手を

交わした。

年のころはネットレトほどだろうか。

とりわけ見目がいいわけではないが、人を惹きつける笑みを見せる若者だ。

「それで、どこに行く？」

「ドラゴンが見たい！」

勇んで言うラナに、腰に手を当てははとカカは笑った。

そうだろうと思ったよ、ついてきな、と。

「厩舎までちょっとばかり距離があるからな。歩きがてら軽く勉強  
といこう」

カカの話は明瞭で、ぼんぼんと太鼓を打つように弾みがあり、おかげでアイシスたちはその勉強とやらに集中することができた。

リグルもまたすばらしい話術の持ち主だが、それとはまた違う魅力だ。

彼はまずドラゴンについて話してくれた。

「ドラゴンが魔物の一種だっということは聞いたな。

彼らは魔物だけど、だが知能は恐ろしく高い。俺たちの言葉はきちんと理解するし、年をくったら話すことだってできる。

ときおり吼えているのは赤ん坊だ、このあいだ双子が生まれてさ」

「あれっ、赤ちゃんもつと数生まれたりしないんだ」

「そもそもドラゴンにはあまり生殖能力がないからな。双子でもすげえことさ」

アイシスとリグルは顔を見合わせた。

「げえ、とリグルは舌を出す。」

「じゃあ、恐るべきは親父の底力ってことだね」

「みただね」

苦笑いを浮かべるふたりを、カ力は不思議そうに見やった。

厩舎が近づくにつれ、ごまかしきれないにおいが辺りに漂い始めた。

思わずアイシスは鼻をつまみ、それを見てカ力は困ったように眉をさげた。

「彼らの体臭ってそりゃ独特のものだからね。慣れるまでは厳しいかもしれない」

そのくささも結構なものだったが、しかしわくわく感のほうがより大きい。

ついにドラゴンに会えるのだ。

厩舎は恐ろしくでかい。

カカは厩舎の番らしき男と挨拶を交わすと、さっさとした足取りで中へと入ってしまった。

どうしたものかと四人が足を止めていると、彼はもう一度顔を出し、ついてくるよう手で招く。

「うわあっ」

ラナがすっとんきょうな声をあげる。

へえ、トリグルはため息をついた。

ドラゴンはすばらしく大きかった。

一般的な小屋ぐらいの大きさのものもあり、それでこの規模の厩舎かとうなずかされる。

それぞれくすんだ緑や紫をしていて、わりと色鮮やかだ。

全身は堅そうな鱗に包まれていて、人魚のそれと同じようにしつとりと濡れて見えた。

光沢があって美しい。

彼らの鱗はきつと鎧のように堅固で、そこらの剣では彼らを傷つけることもできないだろう。

「すげえ、これがドラゴンかあ」

「あまり大声を出すなよ。ここにいるのは若い子たちだからな、なかなか血気盛んだぜ」

げっ、と言つてラナは身を引いた。

ドラゴンの多くは丸くなって眠っているが、しかし彼らとの間にはこれといった仕切りがない。

寢床を区分するための木の柵ならあるが、それがまさかドラゴンの邪魔になるわけもなからう。

まるで心配ない、とそれを指摘された力力は言った。

「厩舎の外に男の人がいたろう。彼は熟練のドラゴン使いだ。あと六つの厩舎があるけど、そのどれもにすごいドラゴン使いが配備されている。

ごくまれに間違いが起こってドラゴンが暴れても、すぐに彼らが怒りを鎮めてくれるさ」

「ドラゴン使い？」

ああ、と力力はうなずく。

それから彼は誇らしげに耳を指さした。

彼もまた、ギレムリックらと同じような耳当てをしていたのだ。

「これがドラゴン使いの証。学舎で専門の課程を終えた者だけに許

される証を。

そのドラゴン使いが経験をつみ、ドラコの騎士と認められたら、ドラゴンが牙のかけらをくれるんだ。ドラコの騎士はそれを削り、ちょうどいい大きさに整えて耳当てにつける。

牙の耳飾りはみんなの憧れなんだぜ」

なるほど、とアイシスがうなづく。

カカはまだ牙の飾りを持っておらず、いまは訓練を重ねる毎日だという。

彼は言った、いつかドラコの騎士になり、この郷を未来永劫守るのだ、と。

夢を語るときほど生き生きとした表情はない。  
すっかりアイシスまで嬉しくなってしまった。

それから四人はカカの案内でたくさん場所をまわった。

他の厩舎もほとんど見たし（赤ん坊と母親のいる厩舎だけは入れなかった）、老ドラゴンとは言葉も交わした。

ラナはすっかり感動し、目を興奮に輝かせていた。

「エルフの王よ、そなたの見つけた答えは正しい。迷うことも、恐

れることもない。心が誘うままに進むがよい」

老ドラゴンの言葉に、アイシスのはつと顔をあげた。

彼はわかっているのだ、アイシスの迷いを。

三人にはなにを言っているのか分からなかったが、しかしアイシスは深々と頭をさげた。

ドラゴン使いを目指す者が集う学舎に、飛行訓練場、それから闘技場なんかもあった。

ドラゴン同士が戦うのかとラナは鼻息を荒くしたが、しかしどうやら戦うのはドラコ族らしい。

彼らは戦いに生きる種族なのだ。

彼らとドラゴンとの共同生活は、見ていて本当に飽きなかった。雪のひどい日なんかは、ドラゴンまでもが雪かきにかり出されるのだ。

力を入れすぎて物置小屋を潰してしまったり、それでドラゴン使いに叱られたりと、まるでそのようすは腕白な少年のようですらあった。

アイシスは腹を抱えて笑ったものだ。

郷をいろいろと見物しながら、しかしネットレトはかの老婆の言葉が気になっていた。

彼女はこうも言ったのだ、探し物が見つかる。

その言葉で思い当たることといえばひとつしかなかった。

彼が長年求め続けてきたもの、闇遣いの呪いを解くための方法だ。

「闇遣い？」

「はい。闇の精霊ヴァネッサを使役する魔導師のことです」

ふむ、と屋敷の主人は首をひねった。

ぼつてりとしたあごに手を当て深く思索している。

しかしいくら唸れど答えは出ないようだった。

「すみませんが、私にはどうも分かりかねます。そもそもドラコ族と魔法とは疎遠でしてな」

「そうですか」

ネットレトは礼を言うと部屋を出た。

次にギレムリックの元へと向かう。

「ふむ、放出の呪いを解く方法とな」



ネットレトはうなずいた。

ギレムリックは腕を組み、目を閉じている。

ネットレトの鼓動が早くなる。

しかし首長の言葉は彼を落胆させた。

「すまんが、わしでは力になれそうにない」

「そう、ですか」

ネットレトは立ちあがり、礼を言つとそのまま背を向けようとした。

しかしギレムリックは手をあげてそれを制する。

ネットレトは訝しく思いながら再び腰をおろした。

「わしでは、と言つたはずじゃ。早飲みこみはいかんぞ、ネットレト  
」

「では」

「せつつくのもだめじゃ」

「……すみません」

ネットレトはおとなしく非を認める。

ギレムリックはちよっぴり彼をいじめたようだった。

その年にしては、ずいぶんと茶目っ気のある笑い声をあげたから。

ネットレトはすこし驚いた。

ギレムリックはとても厳格な人物だと思っていたからだ。

年のわりにずいぶんと素直な男じゃ、と言ってギレムリックは目を細めた。

「そなたの求めるものを持っておられるかは分からぬが、しかし恐ろしく物識りのお方がおる。わしの知るうちでは群を抜いて一番じゃ」

ギレムリックは使用人に紙を持ってこさせ、簡単な地図を書いてくれた。

どうやらその人物は、郷のずっと北のほうに住んでいるらしい。

「ひどく気難しいお方じゃからの、気をつけられよ。もしも追いつめられたらこう言う方がいい」

追いつめられたらどう？ いったいどういう人物なのだろう。

ネットレトは天才魔術師を思い出した。

彼はいつもむっつりとし、そのしかめ面はまるで崩れそうにもなかった。

物識りはだれもみなああいうふうなのだろうか。

心配するネットレトの耳に口を寄せ、ギレムリックはなに「何かを  
さそわく。

ネットレトはうなずき、ふと気になってこう訊いてみた。

「それで、そのお方というのは」

気のせいだろうか、ギレムリックの顔がわずかに寂しげに見えた  
のは。

「わしのじいさまの、じいさまの、そのまたじいさまじゃ。  
彼はもう二百歳を超えておられる」

はっとネットレトが息をのむ。

そつじゃ、とギレムリックは言った。

「彼もまた、ドラゴンの血を飲まれたのじゃよ」

三人には見学を楽しむよう言い、ネットレトはひとりで北へ向かう  
ことにした。

わざわざ気難しいと前忠告されるような人物だ、大勢で訪ねてい  
ってはおそろく気を害するだろう。

「げっ、まさかここでも図書館にいく気かよ」

「まあそんなところだ」

ラナはげんなりとしたようだった。

地図を手に、ネットレトの足取りは勇んだ。自然と歩みも早くなる。

老婆の言葉を鵜呑みにするわけではないが、しかし希望のもてる風向きではないか。

彼はその生い立ち上、なにかに期待するということを強く戒めてきたが、このときばかりは心も躍った。

ようやく光がちらと見えたのだから。

半日も歩けば家はまばらになり、やがて人の気配はまるで感じられなくなってしまうた。

初めてドラゴンの声を耳にした荒地のように、どこか寂しげな土地だった。

ネットレトは構わず歩き続け、太陽がすっかり隠れてしまうころ、彼はようやくひとつの小屋にたどりついた。

ぼつり、という言葉がよく当てはまる小屋だ。

なにもない大地に、置き忘れられたかのようにして。

その姿はどこか健気ですらあった。

ネトレトは緊張にやや体を固くする。

この小屋に彼がいる。

二百年もの時を生きてきた、誇り高きドラコ族の男が。

ひとつ深呼吸をすると、ネトレトは木のドアを叩いた。

乾いたドアは、意外といい音を響かせる。

彼はしばらく返事を待ってみたが、しかしなんの気配もない。

もう一度叩いてみるが、結果はやはり同じだった。

出かけているのだろうか。

諦めきれずに彼は三度手をふった、しかし今度ドアは打ち鳴らされなかった。

それよりも早く、内から勢いよく押し開かれたのだ。

短く息を吸い、ネトレトは身軽にも飛び退った。

それを追うようにして槍が繰り出された。

恐ろしい速さだ、剣に手をやる暇もない。

「くっ」

鋭い刃がわき腹をかすめ、焼けるような痛みがちりりと走った。  
しかしネットレトは怯まず腰に手を伸ばす。

瞬時に剣を引き抜き、同時にもう片手で槍を掴もうとしたが、しかしかわされてしまった。

槍を繰るのは凜々しい青年だった。

ネットレトは弁解しようとした、自分は旅人で、この家の主に用があつてきたのだと。

しかし口を開く余裕はなかった。

息もつかせぬ槍の猛襲が始まったのだ。

かつてこれほどに猛々しく、噛みつかんばかりの攻撃をネットレトは受けたことがなかった。

けっしてうぬぼれるわけではないが、同年代で自身と並ぶ武術の持ち主には会ったことがない。

事実、同年代でなくとも、剣を突きあわせて彼に敵う人間などそうはいないだろう。

地位は低かったが仮にも魔族である男を、いとも簡単に倒してしまふほどの実力である。

しかしいま、さしもの彼も反撃に出られなかった。

攻撃をすべて受けることすらできないのだ。

槍はときおりネトレトの体をかすめ、彼はいくつか深くはない傷を負った。

「サ、サイガッ」

凄まじい突きをいなし、次の攻撃にそなえながらネトレトが叫ぶ。

「サイガ・コルテウス！」

「……………」

そのとたん、男の動きがぴたりと止んだ。

ネトレトはギレムリックに感謝した。

彼の授けてくれた言葉がなければ、前言どおりまさに彼は槍に追いつめられていたことだろう。

男は鋭い目つきでネトレトを睨んでいた。

ネトレトは大粒の汗を光らせているというのに、彼は息のひとつもあげてやいない。

ふ、と小さく息を吐くと、男は槍の前後を持ち替え、ひときわ素早い突きを見舞った。

目にも留まらぬ速さである。

ネトレトは避けることができず、槍尻をもろに腹部にくらった。

「ギレムリックの仕業か」

男は呆れたようにため息をつき、背を折って激しく咳きこむネトレトをふり返った。

「名の元に訪ねてきた者を追い返すわけにはいかん。入れ」

ネトレトはそのときようやく知った。

男はかの人を使いかと思っていたが、彼こそがドラゴンの血と生きる者、偉大なるサイガ・コルテウスだったのだ。



## 第六十七話：サイガ・コルテウス

### 『聖伝』第六十七話

家に入ってネットレトはあぜんとした。

ぼつんと謙虚にたたずむ小屋は、その内に目を見張るばかりの量の武具を隠していたのだ。

壁という壁には剣や槍、弓矢やタガールの類がかけられていて、棍棒や大鎌といったえげつないものもちらほら見受けられた。

「それで、なんの用じゃ」

サイガはどっかと椅子に腰をおろす。

どのドラコ族の家でもそうあるように、彼の家もまた床全面を絨毯で覆っており、そして椅子は低かった。

この様式にもすこしばかり慣れていたので、ネットレトは迷うことなく絨毯に腰をおろす。

短い毛足が手のひらをくすぐった。

太めの眉が雄々しい印象を持たせるが、しかし全体的に繊細で美しい造形をした男だ。

剛勇という言葉がよく似合う男が多いドラコ族において、サイガの美麗さはすこし異質にも思われた。

藤色の髪は長く、無骨な手で苦心したのだろう、太めながらもきれいに三つ編みされている。

年頃はネットレトと変わらないように見えたが、しかし彼は想像もつかない長い時間を生きているのだ。

「そなたは唾（ ）か。なにか答えよ」（ ）：口がきけないこと、またはその人（ ）

「すみません」

サイガから放たれる生命力に感じいつていたネットレトは、いらついたようすの彼の言葉に慌てて話を切り出した。

「端的に言いますと、私は闇遣いで、その呪いを解く方法を探しているんです。

ギレムリック殿にはあなたを紹介していただき、あるいはその答えを知っているかと」

「知るか」

は、とつい間の抜けた声が出る。

「言葉の意味が分からんのか。知るか、と言ったのじゃ」

「は、はあ」

「用は済んだだろう。去れ」

「……………」

鋭い声だ、まるで追求を許さない。

ネットレトは呆気にとられ、しかし気を取り直すと立ちあがった。

丁寧に礼を述べ、背中を向ける。

しかし次の瞬間、ネットレトは痛みにつめき声をあげることとなった。

ふり返ればつぶてのような代物が落ちており、サイガはそれを投げたままの姿勢でいた。

「な、なにを」

「そなたはつまらん男じゃ」

はあ、とネットレトは一応うなずいてみせたが、しかしサイガの言わんとすることが分からない。

するとサイガは再びつぶてを投げてよこした。

ネットレトはすんでのところでそれをかわす。

「気難しい、という言葉はまったく生易しい表現であったとネットレトは内心毒づいた。」

「申し訳ありませんが、私にはよく意味がわかりません」

「ならば去れ」

「教えてはくさいませんか」

「その気はない。去れ」

ネットレトはこっそりため息をついた。

なんとという人物だろう。

しかし彼は礼儀を忘れず、頭をさげて再び背を向けた。しかし、

「ぐっ」

三度つぶては投げられたのだ。

今度は腰に当たり、ネットレトは思わず膝をついた。

絨毯の毛を握る手に力がこもる。

なぜこのような仕打ちを受けなければならぬのか。

ただ純粹に、敬意をもって彼を訪ねただけだというのに。

四度目のつぶては尻に当たった。  
まるでばかりにしている。

ネットレトは特別温厚というわけではない。  
ただ感情をいつも（無意識に）抑えているだけなのだ。

しかし、このときばかりは彼も怒った。

肩を震わせて立ちあがる。

相手が偉大で、素晴らしいことは分かっている、もはや我慢が  
ならなかった。

「いったいなんだというのだ、まるで害意のない相手にこの仕打ち  
とは！ 私の態度に非がありましたか、なにかがあなたの気に障り  
ましたか？ それともただ人を愚弄することがご趣味か！」

一通り叫んでしまっただけから、はっとネットレトは顔色をとりなした。

やって、しまった。

彼はギレムリックの遠い祖父で、権威のある人物だ。

いくら無礼極まりない態度とはいえ、彼に齒向かうことはすなわ  
ちギレムリックの好意にもそむくということ。

このままでは彼に顔向けができない。

どう詫びようかとネットレトは視線をうつろつかせる、しかし間拔けな拍手が彼の思考をさえぎった。

「うむ、なかなかであった。合格」

「……はい？」

「合格じゃと言っている。その間延びした顔をやめよ、見苦しい」

サイガは顔をしかめたが、しかしネットレトはすっかり呆気にとられてしまっている。

見苦しいといわれても、うまく表情を取り繕ってやる余裕もなかった。

「とにかく座るがよい。わしはの、そなたの心の声を聞きたかったのじゃ」

「心の」

ようやく気を取り直したネットレトは、彼の指示通りに腰をおろす。

「先にも言ったが、そなたはつまらん男じゃ。その歳でなにを達観した気になっておる。」

わしからすればそなたは赤子、いやそれ以前じゃ。もはやたまじやくしじゃ。

たまじやくしはそれらしく、もっと泥にまみれよとわしは言いたかったのじゃ」

「泥に、まみれる」

「そうじゃ。知るかと言われても食い下がれ、相手を絞めてでも情報のかけらを引き出すのじゃ、真にそれを求めるなら。

血を吐くほど切に訴えてみよ。

心から叫ばねば、欠けた心呼び戻すことなどできるものか」

ネットレトははっと息をのんだ。

サイガは行儀悪くも小指を耳につっこんでいる。

まるで無頓着な顔をしているというのに、彼の言葉はネットレトの胸深くに響いた。

「あなたは……！」

「わしをだれだと思っておる。そなたのことなどお見通しじゃ、そしてその求めるところも」

小指にふうと息を吹きかけ、サイガはなにをか放ってよこした。慌てて手を出し、ネットレトはそれを受け取る。

ずっしりと重い、それは分厚い本だった。

しっかりとした表紙は、しかし煤やほこりで黒ずんでいる。題名はエルフ語で書かれていた。

「これは」

「すべての精霊について書かれた詳しい考察、のはずじゃ」

サイガは言葉尻を濁した。

ネトレトは震える手で本を開いてみたが、彼の言葉のあいまいさの理由はすぐに分かった。

読めないのだ。

びっしりと詰めこまれた文字は、ざっと見ただけでも四種類以上で書かれているらしい。

そのうえほとんどが暗号化されているようで、きっとラナが見たら一瞬で卒倒してしまうだろう。

ネトレトでさえ目がちかちかした。

「いまは読めまい。一年や二年それに没頭したところで、やはり読めまい。しかし泥にまみれてもがいておれば、いつかは恵みの雨が降るっ」



「ありがとうございます」

ネトレトの声は掠れた。

ついに、ついに見つけたのだ。闇遣いに課せられた最大の呪い、その呪縛から逃れられるかもしれない道を。

ネトレトの腕のなかで、本はその質量よりもずっとずしりと重かった。

「それよりも、のう、もう一度手合わせをしよう」

「えっ」

「金の目よ、そなたはなかなか見こみがある。まだ伸びるぞ。ほれ、獲物は好きなものを選ぶがよい。わしが一番好きなのはこの大鎌じゃがの。見るからに禍々しいじゃろうが」

本も開いていないのに、ネトレトの目はまたちかちかした。

「あ、おかえり」

ただいま、と言ふなりネトレトは絨毯に倒れこんだ。うわっ、とラナが声をあげて駆け寄る。

ネットレトは疲れきっていて、汗だくで、そして泥まみれだった。

「なにがあつたんだよ、怪我もしているじゃねえか」

「恐ろしい人だった……」

「だれかに襲われたのか！」

早合点して憤るラナに、しかしネットレトは声をかけてやることも億劫だった。

目を閉じればサイガの嬉しそうな顔が、声がよみがえる。「立て、金の目。もう一度じゃ！」。

あれほどに元気な二百余歳がいるだろうか。

アイシスもあなるのだろうか。

「どうか 温和なままでいてくれ」

「温和？ 温和に見せかけて襲ってきたのか、卑怯な！」

まるで噛みあわない会話は、ネットレトの寝息で打ち切られてしまった。

彼はすっかり気を休め、ラナの腕の中で眠っていた。

三人は驚き、一様に目を丸くする。

ネットレトの顔を見よ、なんと穏やかな表情だろう。

「なにがいったいどうなったんだ？」

さあ、トリグルは腰をかがめた。  
ネトレトがしっかと抱えたままの本を取りあげる。

すこしばらばらとやって、しかし渋い声を出すとすぐに閉じてしまった。

「なに、それ？」

「見ないほうがいいよ、特におつむりの弱いやつはね」

おつむりの意味も分からないアイシスは、リグルから本を受け取って開いてみる。

「わっ」

視界が点滅するのを感じ、アイシスはぱたんと本を閉じた。

小さく風が起こり、古い紙のにおいが鼻をくすぐる。

ラナはふたりのようすに興味がわいたようだった。

「なんだよ、俺にも見せてくれよ」

「やめておいたほうがいいと思うけどねえ」

そう言うリグルの声はどこか誘っているようだ。

目はいたずらっぽく細められている。

それに、ラナはだめと言われれば余計に気になる性分だった。

彼はネットレトを胸に抱いたまま、子どものように澄んだ笑顔で本を手に取った。

それ以降彼がその本を見るたびに悲鳴をあげるようになったのは、もはや言うまでもないだろう。

事の次第を聞いたギレムリックは、おかしそうに笑い声をあげた。

「そうか、大じいさまと手合わせを。そなたはたいそう気に入られたようじゃな」

「運動不足を解消するいい機会だとか言っておられましたか」

「そうか、そうか」

ギレムリックは満足そうだ。

ネットレトはすこしげんなりしていたが、しかしサイガとの手合わせはいい経験だった。

回を重ねるごとに精度を増す彼の動きには辟易したが。

「大じいさまって」とラナ。

ネトレトが先日のいきさつをすべて話すと、うへえとラナは間抜けな声をあげた。

「なんだ、襲われたんじゃなくて鍛錬だったのか。てつきり敵でも現れたんだと思って、昨日俺たちは交代で見張りをしたんだぜ」

「そうそう、大変だったよ」

「うそつけ。おまえは寝ていただろうが。俺とアイシスが交代でがんばったの」

リグルはにやりと口端を吊り上げる。

「だってだいたいの予想はついていたからね、事の顛末。ネトレトが持っていた本って、きつと恐ろしく難しい魔導書なんですよ。」

まさか二百いくつのご老体と手合わせしていたなんて思わなかったけどさ」

「ああ」

まったく頭の回転のいい男である。

彼は本の存在から、ネトレトがすごした一日をも予想したのだ。

「ともかく、求めていたものが見つかってよかったのう」

「はい。本当にありがとうございました」

「礼を言うのはわしのほうじゃ。大じいさまの相手をつとめていた

だき助かった、本当にありがとう。

わしも若いころはときどき彼を訪ねておったが、毎回槍に迎えられたものじゃ。

歳を食ってはうつかり致命傷を負わされそうでのう、もう恐ろしいて会いにもいけないのじゃ。

いまはわしのひ孫が彼を訪れるために鍛錬を積んでおるが、まだ彼に認められるほどではない」

ギレムリックは目を細めた。

今度こそ本当に、彼の顔は寂しげに見えた。

「そうしてわしの孫が彼の相手となり、孫の孫が、孫の孫の孫がと続いていくのじゃろう。

そうして彼は長すぎる寿命が尽きるまで、自分の子らがどんどんと死んでいくのを見ねばならんのじゃ。

ドラゴンの血を飲むと知っておったら、きっと彼は子など作らなかつたろうに」

ドラコ族の郷にきてから半月近くがすぎていた。

カカは毎日たくさんを案内してくれたので、四人はもうほとんどを回ってしまった。

「そろそろ動くか」とラナ。

アイシスは重々しくうなずいた。

「ぼくはどうしてもいかなきゃならない。かつてファニマがあった、いまはもう焼けてしまったファルファラの森へ」

彼の言葉は凜としていて揺るぎなかった。

運命はその澄んだ声でアイシスを呼んでいた。

三人はそれに従うことを知っている。

しかし問題はどう進むかだ。

いくら寄り道をせずに急いだところで、ファニマまでは半年以上かかってしまつたろう。

なにかいい策はないかと四人は頭を突きあわせたが、屋敷の主人は逆にそんな彼らにこそ驚いた。

彼は当然といったようすでこう言ったのだ。

我らをなにと思われます、ドラコ族ですよ、と。

「ほ、本当にいいのかっ」

ドラゴンを前に、ラナはすっかり声を上ずらせている。

もちろん、とギレムリックはうなずいた。

「真に求めれば世界が応じる。我らが手を貸さないはずがない」

厩舎の前には木の舟が用意されていて、海に浮かぶそれと違うのは、舟の両端に丸い金具が取りつけられていることぐらい。

聞けば、ここに爪をかけてドラゴンが運んでくれるというのだ。

ひとりかふたりならば直接背に乗ることもできるが、多人数の、しかもドラゴン初心者ともなれば、この特別な舟を使ったほうがよほどいい。

アイシスたちはわくわくに溢れ、ラナは本当に食事のことすらしばし忘れた。

空の旅はいったいどんな心地だろうか。

「彼らを目的地まで運ぶのは、カカ、そなたの仕事じゃ」

「えっ、俺ですか！」

カカの頬は紅潮した。

四人は郷の貴賓である、それを送り届けるなんてかなり重要な仕事だ。

それを首長が任してくれようと言うのだ、若い彼は喜び勇んだ。

「ドラゴン使いの名に恥じめ働きを期待しておるぞ」

「はいっ！」



四人は世話になった人々にお礼を言っただけで帰った。

屋敷の主人はドラゴンの牙で作ったお守りをくれた。うまいこと革ひもが通されたそれを、ラナ以外は全員首にかけた。

ラナはやはり腰袋にしまった、彼の首にかかるのはハイネが遺したお守りだけだ。

その鱗は“あれ”の恐るべき攻撃に砕かれてしまっていたけれど。

ネトレトはサイガにもお礼を言いたかったが、しかし彼の住処は往復で一日かかってしまう場所にある。

決意を新たにしたいま、一日でも余計にすごすのは避けたかった。それに、彼はやはりきつとすべてを見通しているだろう。

「それじゃあ、舟に乗って！」

カカに急かされ、四人は舟へと乗りこんだ。カカはドラゴンの背へ。

優しくその鼻面を叩くとドラゴンは頭をさげ、それで彼は頭を足場にして身軽にのぼることができた。

「また会おう。この郷は何度でもそなたらを迎える」

「ありがとう！」

アイシスたちは身を乗り出して手をふった。

カカの指図でドラゴンはその大きな翼を広げ、器用に舟を持ち上げる。

軽々と舟は浮き上がり、ラナはうわっとかうへっとかうるさかった。

みるみるうちに小さくなっていく舟を見上げ、ギレムリックは彼らのために祈った。

「いい目をした赤子たちじゃ」

気づけばとなりに、なんとサイガが立っているではないか。

ギレムリックは驚きの声をあげた。

彼があ的小屋から遠く出てくることなど、久しくなかったことなのじ。

「ギレムリックよ、金の目をよこしたのはそなたの仕業じゃな。

彼らの生命力に、そなたもすこしは若返ったろう。

ほれ、そなたの分の槍も持ってきた。久しぶりに汗を流すとしよ  
うぞ」

「まったく、あなたという方は」

もしも遠く空から旅人たちがそのようすを見ていたら、きっと声

をあげて笑ったことだろう。

槍を交わすふたりを、ドラコ族たちが凜々しくも優しい笑顔で見守っていた。

## 第六十八話：世界がまわる理由

### 『聖伝』第六十八話

遮るものはなにもなかった。

険しい山々も尖った岩も、海でさえも彼らの邪魔をするには小さすぎた。

ドラゴンの運ぶ舟は存外揺れが少なく、アイシスたちは安心して顔を覗かせることができた。

彼らのはるかずっと下のほうで、景色は面白いほどに速くすぎた。家や木々など、あっという間に米粒ほどになってしまう。

興奮で熱くなった頬には冷たい風が心地よかった。

アイシスは舟から顔をつき出して考えた。  
いったいだれが、この広い大地に線を引こうなんてばかげたことを言い出したのだろう。

しかし、地図のうえでは太く国境が引かれていても、やはり地には区切りなどないのだ。

空から見れば、街も村も国も、発展した地もそうでない地も、どれも同じ世界の上にいる。

それだけだ。線を引いてしまうのは人の心だ。

見よ、動物たちはなんの疑問も抱かずに国境を越えるではないか。

心さえ道を見失わなければ、無意味な線など消えてしまうのだ。それにいさかや争いなんかも、きつと。

アイシスは老ドラゴンの言葉を思い出した。

間違っではないのだ。この大地もそう言っている。

四人は気づけばたくさんのお守りを持っていた。

まるで敬謙なほうじゃないのにねとリグルが言い（アイシスは内心こっそり反論したが）、彼らは声をあげて笑った。まったく澄んだ声だった。

お守りにはだれかがだれかを思う愛がこめられている。その力はすばらしかった。

五人はときどき地上に下りながら、二度舟の上で朝日を見た。アイシスはその朝日をきつと忘れることができない。

朝日も、夕日も、なんでもない一瞬も、すべてが輝いていた。

アイシスは限りなく幸せだった。  
彼は自分のなすべきことを知っていて、その答えをも見つけていたから。

「あれっ、変だなあ」

カカがすつとんきょうな声をあげた。

彼はドラゴンに方向を教えるしまつと綱を伝い、うまい具合に舟へと降りてきていたのだ。

しかし、指示もないのにドラゴンはその高度を落としてしまった。  
カカは慌ててその背によじのぼる。

このままでは町に降りてしまう。

ドラゴンを見慣れていない人たちは、きつと騒ぎ立てて彼らを畏れるだろうから、地上に降りる際は気をつけて森の深くやら山の奥地やらを選んでいたのに。

「クレイ、クレイ」

灰色の鱗をしたドラゴンは、その名前をクレイといった。

まだ若い雄で（といっても五十年は生きているらしい）、カカとは学舎時代から一緒だという。

彼は温厚で心優しく、カカの言うことをよく聞くドラゴンであっ

だが、このときは彼がいくら呼んでも高度を上げようとはしなかった。

「大丈夫だよ」

アイシスは舟から身を乗り出し、クレイの背に向かって呼びかけた。

しかし風が強く、カカにはその声が聞き取れない。

彼の言葉も切れ切れた。

「な　て言っ　？」

「大丈夫だって言ったの！　このままで大丈夫だから！」

アイシスの言葉は届いただろうか。

どちらにせよクレイはもう飛び続ける気はなかったようで、彼らはまるで予定しなかった場所へと降りたった。

地図と照らしあわせてみるに、その草原は、バレリア国の首都からすこし離れたところにあった。

首都からそう遠くないというのに、けっこうな寂れ具合だ。

もともとバレリアはエルヴァニア全土六国と比べても文明の進みが遅く、しかし自然にあふれた国なのだ。

「さっきはなんて？」

「大丈夫って言ったんだ。ぼくはちょうどここに降りたかったし、クレイはそれに気づいてくれたんだよ」

しかしカカはそう思わなかった。アイシスは彼に気を遣っているのだと感じた。

カカはドラゴン使いなのに、うまく指示通りに操れなかったことを恥じていた。

どうやら人通りも気にする必要はなさそうなので、一行はしばしそこで休むことにした。

クレイは羽を一度大きく広げ、それから身を丸くして眠った。まるで伸びをするかのような仕草だ。

彼はアイシスたちが眠っている間も飛んでいる。疲れていたのだろう。ありがとう、と言ってアイシスはその鼻先に触れたが、返ってきたのは荒い寝息と鼻水だった。

「すこし首都のほうを見てくる」

「俺も」

じゃあ俺も、とラナは言い、アイシスをふり返った。



「一緒にいこうぜ」

しかしアイシスは首をふった。  
いかなばならない場所がある。

お土産を待っているね。

そう言っただけでアイシスが手をふるから、仕方なく三人は彼を置いて出かけた。

三人は一緒に、バレイアにはおいしいお菓子があるかどうかを考えた。

「ぼくもちょっと出かけていいかな」

「自由」

クレイの体にもたれ、風が吹くのを見ながらカカが言う。  
彼も仮眠をとるつもりだった。

アイシスは気の向くままに歩き始めた。  
いつかネットレトを探したときもそうだったように、そうしていれば彼は道に迷わないだろうという確信があった。

そうしてしばらくいくと、彼は一本の細い木の前に出た。

その根元には小さな塚がふたつ。

どうやらアイシスを呼んでいたのはこの塚のようだ。

風がやんで静かだったが、アイシスは辛抱よく待った。

やがて、まだ明るいうちだというのに、なんということだろう、アイシスは幽霊を見たのだった。

アイシスは驚かなかった。

と言えば嘘になるかもしれないが、どこか予期していた部分もあったから、とりたてて騒ぐこともしなかった。

ただ、現れた男の姿が半分以上透けてしまっているのには言葉をなくしたが。

ゼン？

「ゼンって？　それがだれかの名前なら、ぼくは違うよ。ぼくはアイシスだ」

アイシスはわりとしっかりした答えを返した。

幽霊はゆっくりとした動作でアイシスを見た。

アイシス？　おかしいな、変なのつかまえちゃった。ゼンを

呼んだはずなのに。

どうやら向こうの人違いだったようだ。

アイシスは肩を落としたが、しかし幽霊には興味がわいた。

害意はなさそうだし、それになによりまだ夕方である。怖くはない。

幽霊は若い男だった。アイシスよりすこし上には見える。

ひどくのっぽで、そして細い。

背は曲がっており、そのせいでいっそう貧弱に見える。

髪は薄い小麦色をしていて、くるくるよじれて渦巻いていた。

「きみはだれ？ どうしてこんなところにいるの？」

質問はひとつずつにしてほしいな、おれ、頭悪いから。

とりあえず、おれの名前はユア。ユア＝A＝フロイアント。だげどほら、死んでいます。

「それは見たら分かったよ」

アイシスは苦笑した。

ユアの垂れ気味の瞳がアイシスを覗きこむ。

変わった目をしているね。

どうやら幽霊の目は眼帯をもすり抜けて見えてしまつらしい。

話すと長くなるので、それにユアは自らばかだと申告したので、説明は抜いて適当に流しておいた。

「それで、ユアはどうしてこんなところにいるの？」

うん、とユアはうなずいた。うん、それが問題だ。

待っているんだ、大切な人を。

「大切な人？　それがゼン？」

うん。けどあいつしぶとくてね。なかなかこっちにこないんだ。

この間もわざわざ遠くからきてくれたんだけど、杖をふり回してさ、

「わしゃまだまだ元気だぞ、ユア！」ってね。

ユアは垂れ下がった眉をさらに垂らした。

「大好きなんだね、ユアはゼンのことを、ゼンはユアのことを」

かもね。

ふう、とユアはため息をついた。おれは生きている間に悪いことをいっぱいしたから、ずっと引っぱられているんだけどねえ。七十年も逆らい続けて、おれはちよっぴり疲れたよ。

アイシスの胸がすこし狭くなった。

彼はずっと待っているのだ、親友を。

きつと最後に、親友とばかりを言い合いたいのだろう。

それだけのために、ただその一瞬のために、疲れたと言いながらも笑って彼を待っている。

どんなに素敵な友情が、彼らの間にはあるのだろうか。

きみは強いね。

「強い？ ぼくが？」

うん、芯の部分がね。それにとっても大切なことを知っているし、手にしている。

ほら、暗くなってきたしもういきなよ。世界で一番大切なものが、アイシスを待っているから。

「うん」

きてよかったとアイシスは思った。

アイシスはやはり間違えていないのだ。  
老ドラゴンの言葉も、ユアの言葉もアイシスの力となった。

一度手をふると、アイシスはもうふり返らずに草原へと道を急いだ。

世界で一番大切なもの、大好きな友達。

彼らはきつとアイシスがどこにいったのか思案していることだろう。

ユアはしばらく彼の背を見送っていたが、やがて風に吹かれて姿を消した。

残された木が、さらさらと枝を震わせる。

五人はまた空の旅に戻り、もうクレイはカカの指示にそむかなかった。

アイシスたちはたくさんのお話を話した。  
彼らの冒険譚は、カカをとてとても興奮させた。

アイシスは話しながら、これまで出会ったたくさんの人々について思いを馳せた。

エザはいまごろどうしているだろう、エルファントに弓を教わっているのだろうか。

アージエとハタは仲良くやっているだろうか、団長は元気だろうか。

ふたりの天才は今日もけんかをしているかな。

ソウマとリリイはきつと困りながらもちよっぴり笑ってそれを見物するだろう。

おっちょこちょいのネロは火傷をしていないだろうか、テオのエプロンはやっぱりいいにおいがするに違いない。

マシヨーカはまだ海の底にいるのか、グッグルはもう悪さをしていないだろうか。

「怖い？」

なんでもないふうを装って、ぼつりとラナが言う。

気づけばアイシスは泣いていたようだ、それで彼を心配させてしまったのかもしれない。

「ううん」

アイシスはすこし赤くなりながら涙を拭った。

怖くはない、アイシスは答えを見つけたのだから。

海を渡り、アイシスたちは懐かしいエヴァノンの大地へと戻った。

およそ一年ぶりの帰郷である。

しかし彼らの心は浮ついてはいなかった。  
これから彼らは“あれ”と向き合わなければならない。

「ティエラはどうかなあ、親父はがんばっているだろうか」

「うん、きっと」

ふたりはハロルドの豪快な笑いを思い出した。

傷を癒した彼は、きつと先頭に立ってティエラを復興へと導いてくれたに違いない。

あの町はまた輝きを取り戻しただろうか。

修道院はまた建ったのだろうか、そしてあの聖堂は。

新しくなった修道院に、できればトイレは少ないほうがいいなあ、とアイシスは思った。

彼が戻ったら、きつと神父さまは彼に便器を磨くよう言いつけるだろうか。

「アイシスの言っているところはここで間違いないよね」



カ力は地図を差し出した。

アイシスは地図上でファニマの位置を見たことがなかったが、しかし分かった。

彼の印した場所にはなんの文字も書かれていなかった。

もはやファニマは過去の街のものでしかないのだ。

しかしそれは人の心の話。

もちろんアイシスの中で記憶が褪せようはずもない。

「木が一本でも生えているといいなあ」

いつもよりずっと近い星空を眺めながらアイシスが言う。

ファルファラの木の美しさを、みんなにも見せてあげられたらいいのに。

風の峡谷でもファルファラの木は輝いていたが、しかしファニマで見たそれはやはり格別にきれいだった、とアイシスと思う。

愛すべきエヴァノン。

灯りの群れを指さしながら、四人はしばし思い出にひたった。

あそこがツィード山脈だから別荘はああたりかなあ、やっぱりマーニャは大きいね、なんてふうに。

リグルが大切な人のために戦ったタリファの街。  
湯屋の煙突からは夜でも煙があがっている。

初めてネトレトと出会ったノトの街。

彼の故郷と同じ名を持つこの街の、宿屋の女将はやはり若い男に  
関心いっぱいなのだろう。

そしてティエラ。

ラナとたくさんの日々をすごした大切な場所。

笑い声も、ちょっぴり辛いことも、たくさんもらった。

大地はいつもアイシスを優しく包んだ。

ありがとう。

アイシスは幸せで、世界のすべてにほほ笑みたかったし感謝した  
かった。

そこで、一番手近で最も大切な人たちにその気持ちを伝えてみる  
と、彼らはきよとんとし、ちょっと照れくさそうだった。

真っ直ぐな気持ちというのはどうもくすぐったいらしい。

「俺もみんなにお礼が言いたいな」

一番そういうことに消極的そうなりグルが言った。

ありがとう。

彼の言葉はとても素直だった。

ラナもネットレトも彼に続く。

四人はにっこり笑った。

「なんだか……はい、お別れです、みたいな雰囲気になっちゃったな」とラナ。

そのときの空気といったら。

まず彼らははっとし、それからぐつと難しい顔をした。

それからそのしかめ面がどんどん和らいでいき、最後にはまたしっとりした笑みに戻った。そうもあるう、と。

全員がきちんと理解していた。

どういふ結末であろうと、もうじきひとつの大きな流れが終わる。

そして同時にまた始まるのだ、それぞれの道は先へと続いている。

彼らとはときどき止まることはあっても、もう留まらないだろう。

どう道が伸びているのか分からないが、しかしいつまでもとなりを歩いてはいないだろうことぐらい知っている。

「近いな」

形容しがたい空気を打ち払うように、ネットレトがぽつりと呟いた。彼の眼下には黒々とした森が広がっている。

月はすっかり頂点にまで昇っており、なにに隠されることもない、とても立派な満月だった。

「なにがあっても手は出さないでね。これはぼくにとってのひとつのけじめだから」

そろそろファニマの上空というとき、アイシスは三人に向き直った。

カカも神妙にして聞いている。

「わかった。きっと見守っているよ、おまえを信じているから」

「ありがとう」

アイシスはにっこり笑った。

絶対に勝てよ、とラナが言う。

アイシスはやはり笑っていたが、ちょっとばかり困ったように眉をさげた。

見慣れた顔だったが、どうしたのだろうか。

“あれ”との戦いを前に、それはなんと頼りなさげな笑顔ではないか。

「ずっと考えていたんだけど、勝つ、っていうのはすこし違うような気がするんだ。ぼくはもちろん“あれ”と戦うけれど、勝つためじゃなくって、もっとこう」

アイシスは胸に手を当てた。

コルキュラで“あれ”と対峙したときに彼は気づいた。本当に大切なもの、彼の心を支える強さの源を。

愛だ。

人と、すべての生き物との間に生まれる愛。

それは言葉に語るにはあまりに大きく、手で触って確かめるには不確かだ。

しかし、愛はそこらじゅうに満ちあふれていて、いつだって優しく彼らを包みこんでくれる。

いま、アイシスは最高の友人たちと共にいて、彼らとは揺るぎない友情で結ばれていた。

そこにも確かに愛がある。

それはアイシスにとってとても心強いことだった。

これこそが真実だったのだ。

世界の真理、それは愛によって支えられているということが。

それに、アイシスは初めから知っていたはずだった。

美しいユフィロスレジアを呼ぶとき、彼はこう言っているではないか。

すべてを照らし、愛し、包みこむ力を我に。

愛に生きる人にはそれぞれの世界があった。

そしてより大きな愛に出会うたび、彼らの世界はさらに輝きを増して変化していくのだ。

世界は変えられる、ルキアはこう言ったはずだ。

アイシスは間違っていない。

しかしどうすればいいのだろう。

“あれ”を前に、愛の素晴らしさを説けというのか　まさか。

“あれ”が絶対に知れないだろうことをアイシスは知っている。しかし、その強みをどう使おう。

アイシスはまだ分からなかったが、しかし迷いはなかった。

月は明るい。

煌々と照る白い光を背に受け、四人は舟から飛び降りた。

もう十年に近い年月が経とうというのに、炎の痕跡はいまもファニマの跡地に残っていた。

すっかり焦げてしまい、命を感じさせない木々たち。

アイシスはいま、幼い自分が逃げ惑って走った道に立っていた。

「いじじい」

四人の影が、悲しみの道に長く伸びた。

## 第六十九話：呼吸するんだ、世界と共に

### 『聖伝』第六十九話

すっかり軽くなってしまった舟を持ち、クレイは空へと羽ばたいた。

その背に乗り、カ力は木々のあいだに目をこらす。

四人の姿は最初こそ見えていたが、やがて小さくなって居場所もわからなくなってしまうた。

「俺たちもいこう、クレイ。できることは全部したよな」

クレイも大きくなずいたようだ。

彼は四人のために祈り、どうか世界が答えを誤らないようにと強く願った。

ドラゴンの翼は力強く風を打ち、霧に守られた郷へと道を急ぐ。

四人のあいだに会話はなかった。

しかしそれぞれがとても充実しており、ひどく落ち着いていた。

耳を済ませれば彼らの心が、魂が、そして世界が語りかけるのが



聞こえるかというほどに。

ユフィロスレジアは美しい声で、ずっとアイシスにささやいていた。

彼女はとても嬉しそうで、これまでに仕えてきた彼女の愛しい君について語ってくれた。

いまは亡き、美しいエルフの王たち。

彼女は目を細め（た）だろつ、おそろく、それからこう言った。

その内でも最もどんくさい王は、愛についてよく知っている。

銀の髪が歴代の王の気高さに追いつくにはまだ時間がかかるだろうが、しかし彼ほどに運命を追求した者はいなかったと。

それから彼女は最高の祈りを彼に捧げた。愛している、と。

この一本道を、かつてアイシスは絶望に身を蝕まれながら走っていた。

ちょうど反対側からこちらのほうに。

いま帰るよ、とアイシスは言った。

恐れることはもうなにもない。

アイシスは失われた王の館へと足を進めた。

あまりに時が美しくすぎていくので、ラナは夢でも見ているのではと思った。

彼は何度か頬をつねってみたが、しかしやっぱり痛かった。

アイシスの足取りに迷いは見えない。

彼は親友を誇りに思った。

結局、なにも言葉はないままに四人はそこに着いた。

かつて素朴な美しさをたたえていた王の館。

地獄の業火に焼かれ、それはいま無残に朽ちていた。

焦げた木片がいくつも重なって倒れている。

アイシスの胸は痛んだが、しかし目をそらそうとはしなかった。

ささやきの洞窟でのルキアの言葉が思い出される。

おまえという存在を守れて、私たちの魂は喜びに震えている。

アイシスは顔をあげた。

空気が張りつめていくのを感じる。  
ぴりりと頬がしびれ、そのときがきたことを告げる。

“あれ”だ。

最初、なにもない場所が揺らめいた。

まるで陽炎のような揺れはしだいにしっかりとした線をなしていき、形をもち始める。

四人は固唾をのんでそのさまを見守った。

“あれ”が銀の髪を月の光に揺らしたとき、アイシスはちょっと手をふって三人をすこし後ろへと遠ざけた。

「意外と早かったね」

「きみはもう十分長く待ったからね」

遠めに見れば、ふたりのアイシスが向きあっているよう。

しかし彼らのあいだには決定的な違いがあった。

一方は憎しみしか知らず、もう一方は憎しみも愛も知っているのだ。

「よく分かっているね。じゃあさっさと決着をつけてしまおうよ」

「うん」

恐るべき風が巻き起こった。

その一瞬一瞬をすべて見逃すまいと、ラナは必死で目を開けた。

ひとつの大きな流れが、いままさにその終着へと向かっている。

枯れた木々も腐った土も、命の鼓動をもって彼らを見守っているようだった。

“あれ”は四人の精霊すべてを呼び出した。  
美しき精霊たちは、その唇をゆるやかに持ちあげてほほ笑んでいる。

アイシスはだれにでもなく小さくうなずいた。  
目を閉じ、わずかに息を吸う。

「光よ」

風がざわつく。

アイシスはいま、世界の中心にいた。

「すべてを照らし、愛し、包みこむ力を我に　ユフィロスレジア」

アイシスのそばに、光の超越種ユフィロスレジアが降りたつた。

その荘厳さといったら。

彼女はこれまでになく輝いていた。

装身具は涼やかな音をたて、長い黒髪は風をはらんでたわむ。

“あれ”の使役する精霊たちも、それは高貴に美しかった。

どちらも見事な輝きを放っており、近づくなと言われなくとも三人は動くことすらできなかった。

サルマンが地獄の業火を吹き、ウィンディーネの風がそれを助長する。

大地はラジネによって割られ、そこからアキュロスの聖なる水が噴き出でた。

アイシスは軽やかな跳躍で猛る炎を避ける。

その体をユフィロスレジアが中空で受け止め、彼の体をまともな

大地へと導いてやった。

“あれ”はにやりと口をゆがめ、再びウィンディーネに命じて突風を呼び出す。

ユフィロスレジアはアイシスのための壁となり、風の刃が彼を傷つけることはなかった。

間髪入れず、“あれ”が地を蹴って突きかかってくる。

彼の手には剣が握られていて、それは禍々しい炎に包まれていた。

「炎の剣！」

ラナが悲鳴をあげる。

黒い炎は憎悪に満ちていた。

アイシスは瞬時に剣を抜き、それに応戦したが、いくら刃を交わしても炎は肌を焼いた。

剣と剣とが強く打ち当たり、炎が大きく揺れる。

「うっ」

それはアイシスの顔を襲った。

熱いというよりもそれは刺すように痛く、そして根深く残るのだ

った。

恨みとはそういうものなのかもしれない。

とにかくアイシスは一瞬だったが目をつむり、それを“あれ”が見逃すはずはなかった。

彼は身を屈めると、伸びあがる力もあわせてアイシスに切りかかったのだ。

アイシスは避けることができなかった。

業火をたたえた刃はアイシスの胸を裂き、浅くない傷からは血がほとばしった。

「アイシス！」

「動いちゃだめだ！」

ラナは思わず身を乗り出したが、しかし鋭い声に制されてしまった。

“あれ”の猛襲は続く。

ウィンディーネが、胸の傷を抉らんと風を繰り出してきたのだ。

これはユフィロスレジアがよく防いだ。

彼女の姿は気高く、美しかった。

人の身を食らって得た悪しき力よ。

ユフィロスレジアの声には、どこか哀れさが漂っていた。

彼女は全身から目もくらむような光を放ち、それに射られてウインディーネは悲鳴をあげた。

苦痛にくねらせる身はどこか小さくなったようにも見える。

“あれ”は忌々しげに舌を打ち、残る三人の精霊にユフィロスレジアを襲わせた。

まだ気づかぬか。

ユフィロスレジアは宙を舞った。

星が流れるかのようなさまである。

夜闇に彼女の衣が美しく尾を引く。

ユフィロスレジアは両手を胸の前にやった。

手のあいだに光が集まり、やがて鋭い形をなしていく。

手をふるうと、それは矢よりも速く風を切った。

狙い違わずアキュロスの胸に突き刺さる。



アキユロスは悲鳴をあげ、彼女はすっかり消えうせてしまった。

「やるね。この短期間でなにがあったの」

“あれ”はすこし顔をゆがめてよろめいた。

二ヶ月ほど前に対峙したとき、たしかにアイシスの力はあがっていた。

しかし、それも最初に比べればの話だ。

“あれ”の生きてきた時間は長い、あまりに長い。  
そして味わい、食らってきた負の感情は、もはや押し止めることのできない大きさに膨れていた。

その彼だから、アイシスの首を落とすことなど、そう難しいことでもなかったはずだ。

それなのにいま、彼はおそろしく強い。

これはいったいどういうことだ？

思案にくれる“あれ”に、今度はアイシスが切りかかった。

裂帛の気合い。

しかし剣は空を切った。

“あれ”は背で円を描き、ずっと後方へと飛び退っていたのだ。

呼吸も置かずにアイシスはそれを追った。

大地を蹴り、全身を震わせて。

ふたつの剣は、光を散らす激しさでぶつかりあった。

アイシスの両腕は炎に焼かれているが、しかし剣筋の鋭さは衰えなかった。

アイシスは跳躍する、しかしその支えとなる大地が不意に形を変えた。突然くぼんでしまったのだ。

ラジネの仕業だった。

アイシスは体勢を崩してつんのめった。

“あれ”が飛びかかり、その背を貫かんと剣を構える。

アイシスは仰向けに身を起こし、迫りくる刃を足で蹴ってそらした。

鋭い刃に靴底が切れる。

そのままアイシスは足の反動を使って跳ね起きた。

狙いを外された“あれ”の剣は大地に深く刺さっており、彼はそれを抜こうともがく。

しかしどう力をこめても剣は動かなかった。

アイシスは刃を舞わせ、その彼に切りかかる。

仕方なく“あれ”は剣を手放して後退し、サルマンを呼び寄せて炎を見舞った。

アイシスは俊敏な動きでそれを避ける。

“あれ”はサルマンのとなりに立ち、アイシスが右へ左へと動き回るのを見ていたが、突如その場にはすぐわない、どこか間延びした声をあげた。

「ああ、わかった」

「え？」

一瞬炎が消えた、かと思った次の瞬間。

「あああああっ！」

「う、ああっ」

ラナが悲鳴をあげ、ネットトとリグルは息をのんだ。

悲痛なアイシスの叫び。

伸ばされた“あれ”の腕はアイシスの眼帯をむしりとり、その右目を抉ってしまったのだ。

眼窩からは恐ろしい勢いで血があふれ、アイシスは声にならない声をあげた。

意識が途切れてしまいそうなのに、しかしかつて味わったことのない痛みがそれを許さない。

血に濡れて顔は燃えるように熱い。

全身の血がさかのぼってくるようで、アイシスは頭が割れるかと思っただ。

足がぐらつき、剣を支えに立とうとするが、アイシスは膝をついてしまった。

「これのせいだね。なに、人魚の肉でも食らったの？」

萌える若葉の色をしたアイシスの瞳を、“あれ”は首をかしげて見上げている。

その手からは血が幾筋も滴り、“あれ”の頬も首筋も関係なく濡らしていく。

しかし“あれ”はまるで気にも留めていないようだった。

アイシス！ 気をしっかり持て、我を求めよ！

ユフィロスレジアは、うづくまるアイシスの背を揺らした。果たして声はアイシスの耳に届いただろうか。

彼は燃えるように熱い体を抱いて震えていた。真冬だというのに、彼は大粒の汗をかいている。

ユフィロスレジアは何度も彼の名前を呼び、その体をさすった。

「おい超越種、危ないぞ！」

悲鳴にも似たリグルの音が飛び、はっとユフィロスレジアは顔をあげた。

そのとたん、巨大な土の塊がユフィロスレジアを襲った。ラジネだ。

彼女はすんでのところでそれをかわしたが、しかし今度は地がせりあがってきた。

足もとをすくわれてうろたえていると、上からも土塊が降ってくる。

挟み潰そうというのか。

辛くも逃れたユフィロスレジアを、今度は炎が襲った。

ユフィロスレジアは避けることができず、怨念にも似た業火を一身に浴びてしまった。

裂くような悲鳴が響き渡る。

アイシスは雷に打たれたかのように体を震わせた。

身はまだ燃えるように熱かったが、しかし背の辺りだけが妙に心地よく温かい。

「みんな、な……？」

ラナ、ネットレト、リグルがそばに立っていた。

彼らはみなアイシスの背に手を当てており、それでどうやら心地よく感じたらしい。

彼らの手の温もりは、アイシスに心強い仲間存在を思い出させた。

「嬢ちゃん、まだできるよね。あんたって結構しぶといんだから」

「おまえの目が見えなくなったら、俺たちがおまえの目になるよ。おまえが立ち上がれなくなったら、俺たちがおまえを背負うから」

ふたりの言葉はアイシスの胸の奥深くまで届いた。

消えかけていた力がまた湧きあがってくるのを感じる。

「ユフィロスレジアが呼んでいる。我を求めよ」と

ネトレトはアイシスの耳元にささやいた。

我を求めよ。

思えば彼女のその呼びかけからすべてが始まったのだ。

ある朝アイシスは幽霊を見た。

彼女は美しく柔らかで、アイシスは彼女に会えてとても嬉しかった。

「ユフィ……」

ユフィロスレジアは身を焦がし、その体は頼りなさげに揺れていた。

しかしアイシスの声は聞き逃さない。  
どれほど小さかろうと、彼の声だけは。

「ユフィロスレジア！ ぼくに力を！ ぼくに」

アイシスは叫んだ。

彼がずっと追ってきたもの、彼が求めた力。

それは物質的ではなく、けっして荒ぶるものでもなく、優しくて柔らかくて、それでいてとても強い 愛の力。

アイシスはすべてを悟った。

友情がもたらす愛の力、それが起こす奇跡の技。

どうすればいいのかを、いまやアイシスは理解していた。

ユフィロスレジアは光となってアイシスを包んだ。

彼女の惜しみない愛が、彼に注がれていく。

とても温かい。

春の風が全身をくすぐっているようで、アイシスはしばし心地よさに身をあずけた。

王よ。どうか彼に安らぎを。



「うん」

アイシスは残った片目を開いた。

ユフィロスレジアの姿はもはやなかったが、しかし光はアイシスの体を包んだままだった。

アイシスはゆっくり立ち上がる。

ラナたちはその姿に圧倒され、口を開くこともできずに後ろへさがった。

“あれ”は口を朱に染めて動かしていた。

なんとおぞましいことだろう、彼はアイシスの瞳を食ったのだ。

ラナはこみ上げてくるものを我慢できず、顔を背けると吐き出してしまった。

“あれ”は彼の反応がなかなか気に入ったようだ。

口をゆがめ、声をあげて高らかに笑った。

「恐ろしいか。でもぼくをこうさせたのはきみたちだ。世界が、この世に渦巻く憎悪がぼくを生かした。」

ぼくはきみたちの穢れた感情で生きているんだよ。だれもがこういう性を持っている、ぼくはきみたちすべてなんだ。それをなぜ怖がるの？」

剣はいまや再び彼の手に握られていた。

“あれ”は空いた手で口を拭くと、にやりといっそう口元をゆがめた。

憎い。

憎い、恨めしい、悲しい、怖い、悔しい、腹立たしい。

“あれ”の中でこれらの感情がうごめくのをアイシスは見た。

眼窩からはやはり血があふれていたが、彼はもう痛みを感じていなかった。

彼は自分がどこか違う次元にいるとさえ思った。

足はしっかりと地についているはずなのに、どこか体が浮いて感じる。

風の音なんかはずっと遠くに感じるのに、言葉じゃない言葉が耳に訴えかけてくる。

アイシスは“あれ”の心の声を聞いていた。

“あれ”は心そのものであったから、耳を傾けてみればそれは非常に雄弁だった。

心は世の腐りっぷりを説き、人が人を裏切り、そこに生まれる憎しみの甘さについて語った。

だれもがだれもを陥れようとしている、と心は言った。

結局、人は己が一番かわいいのだ。

己の身が傷つけば悲鳴をあげるが、隣人が血を流しても、その痛みを思つて叫ぶか？

涙は己のためだけに流れる。

なにかを美しいと思つたら、それを美しいと感動している己のために涙を流すのだ。

結局、人はどこまでもひとりで、そうあることを自身もまた望んでいるのだ。

「そうかもしれない」

アイシスはぽつりと呟いた。

「たしかにそうかもしれない。人は自分が一番かわいくて、どうしようもないくらいにひとりだ。弱くて、儂くて、醜い」

「そのとおりだ」

「だけど、それは愛を知らないからだ。きみは愛を知らないんだ」

“あれ”の眉がぴくりと動いた。

アイシスは言葉を続ける。

「ぼくはきみに言ったよね、真実を見つけたと。だからきみはぼくに敵わないんだって」

「言ったね。ぜひその意味を説明してもらいたいけれど」

「ぼくは世界の起こりを知ったんだ、世界がまわり、太陽が昇る理由を。」

それは愛だよ。

愛は無償で、そこらじゅうに散らばっている。

だれもが手にすることができ、手の中で育み、大きくすることができる。

愛はだれかに与えることができるし、与えられることも、自分の心にひっそりと取っておいて、春の太陽のような温かさを味わうことだってできる。

愛は喜びをさらにいつそう輝かせ、そして悲しみの濃さも深くする。

それは喜ばしくも辛いけど、だけどそれが生きるということなんだ。喜びも苦しみも、すべて生の営みの一部なんだ。

ぼくたちは涙するから笑える、涙の冷たさを知っているからこそ笑顔が温かいんだ。

愛のなかにも憎しみがある。だから世界はこんなにも色鮮やかなんだよ」

アイシスは目を閉じた。

たくさんの笑顔とたくさんのしかめ面がまぶたをよぎる。

ファルファラの木は黄金で、湖は息をのむほどに澄んでいる。

海はどこまでも青く、太陽を受けて草は黄色だ。

「ぼくたちはちっぽけだけど、だけど愛を知っている。愛を知っていれば世界が生まれる。

たとえばぼくたちが死んだってこの世界はあり続けるし、朝日は時間を間違えずに昇ってくる。だけど、絶対になにかが変わるんだ。

愛に生きていれば、その人がいなくなってしまうとき、世界はすこしだけ色を失う。

毎朝太陽を見て荘厳だと感じていた人が、それをとても無頓着なものに感じるかもしれない。虫の音が、わずらわしいものに感じる

かもしれない。

ぼくたちはその瞬間を知っている。出会う喜びも、失う悲しみも。きみはそれを知らない。きみは自分の世界に生きていないから、命がとて小さくてつまらないものに思えるんだろう。だけどそれは間違いだ。どれもが真っ直ぐで、輝いている。

涙は自分勝手に流れるけれど、それがだれかの心を震わせることだつてあるんだ。

呼吸するんだ、世界と共に。愛は呼吸のひとつにも感じられるものだから。

この旅でぼくはそのことを学んだ」

アイシスはすつと目を開けた。

真正面から“あれ”を見据える。

わずかであったが、“あれ”はその視線にたじろいだ。

アイシスはまるで彼の知らない言葉を話していて、それはとても力あるものに感じられたからだ。

意志の強さをこめて腹のそこから絞り出し、しかし静かな声でアイシスは言った。

「これが答えだよ。ぼくは愛を知っている、だからきみはぼくに勝てない、絶対に」

月さえ息をひそめている。

彼らが心置きなく向きあえるように、その身をいつそつ輝かせながら。

## 第七十話：少年は愛をつたう

### 『聖伝』第七十話

リグルは目を見開いた。

“あれ”の姿がわずかにぶれたような気がしたのだ。

風にあおられる煙のように、それは不確かな線だった。

しかし、よくよく頭をふってみると、“あれ”は変わらずそこにいた。

見間違いだろうか。

「愛だつて？ ばかばかしい。古来、人の感情というものはいつだって負のほうが強かった。

憎しみは憎しみを生むけれど、愛が愛を生むとは限らない。憎しみは人に伝わることに大きくなっていくけど、愛は媒介を経ることに薄れていくじゃないか。

ぼくはそんなちっぽけなもの知らないけれど、長く生きていたからどんなものぐらいかは分かる。

それはあまりに不確かで、不明瞭で、無意味なものだ」

“あれ”の声はいらいらとしていて、彼の感情を代弁するかのようにならぬ炎が猛った。



熱風が吹きつけ、ラナは思わず顔を覆う。

「世界がすこしだけ色を失うだって？ たったひとつの命が消えたくらいで？ それもばかばかしいな。それは単なる思い上がりだよ。ぼくが死んでもきみが死んでも、世界はなにも変わらず呼吸し続ける」

「だけどそれは昨日までの呼吸とはすこし違うんだ」

「違うない！」

サルマンが宙に舞い上がり、恐ろしい炎の矢をいくつも射かけた。

アイシスは避けない。

彼を包む聖なる光が、地獄の業火を寄せつけないのだ。

彼の立つ大地は矢に崩されて穴だらけだったが、しかしアイシスは動じなかった。

“あれ”はたくさんの命を奪ってきた。

多くは間接的に、しかしときには直接的に。

それで世界が変わるだって？

“あれ”には信じられなかった。

大いなる力を持つ風の絶対者を食らったときも、太陽は変わらず輝いていたし、その夜の月もやはりいつもどおりだった。

なにも変わりやしないじゃないか。

それなのにどうして、こころも胸がざわつくのだろう。

アイシスの心は哀れさで満ちていた。

なんとかわいそうな“あれ”。

彼はなにも見えてやしないのだ。

小鳥のさえずりは彼に届かないだろうし、朝露が揺れるさまなどに目もくれないだろう。

彼は世界が息づいていることを知っているのに、その命の源に目を向けようとはしなかったのだ。

できなかったのだ、彼は大いなる愛を知らないから。

「訳の分からないことを言っただけを混乱させるな！ 憎しみはいつも勝つ、憎悪はなによりも強い力なんだ。

ぼくは体を手に入れて、ぬるい世界に教えてやる。これからは負の感情が支配する世界だ、二度ときみのように愛など語る夢詩人は

現れないだろう」

「寂しいね」

アイシスは一言そう言った。

寂しい、どうしようもなく胸が痛む。

“あれ”は動揺した。

アイシスは怒っているのではないのか？

“あれ”はアイシスの負の感情を育てたかった。

何度も大切なものを奪い、痛めつけ、ときには彼自身に傷を負わせて苦しめた。

そうして“あれ”自身を憎んでほしかった。

憎悪の念は、“あれ”にとって砂糖菓子のようなものだ。

己の半身のものともなれば、それは特上の。

しかしアイシスは寂しいと言った。

彼は寝ぼけているのだろうか？

どうしてあかも静かな目をしているのだろうか？

どうして歯を食いしばり、拳を怒りに震わせていないのだろうか？

「きみはあまりに孤独だった。だから愛に気づけなかった。愛はすべての生き物に与えられるけど、きみの心は憎しみでいっぱい、愛を与えられてもうまく育ててやることができなかつたんだ」

そしてぼくも孤独だった、とアイシスは言った。

永遠に失われていた魂の半身。

“あれ”はどうしようもなく寂しかったし、アイシスだって寂しかった。

“あれ”は吼えた。

“あれ”はいつだってすべての絶対的優位にいた。精神面においても、もちろん力の面においても。

いま、アイシスは力を奪われて死に瀕している。

ユフィロスレジアは疲れきっており、もはや淡い光でしかない。

彼らはなんの脅威でもない、はずだった。

それなのにどうだ。

なぜ彼の言葉はこれほどに響くのか。

彼が愛について語るたび、“あれ”は吐いてしまいそうになった。体のなかで、なにかが大きく変わるような。

無数の種から芽が萌え出るとき、きっと大地はこのように感じるのではないか。

その感情は恐ろしかった。

初めて味わうものだった。

いやな汗が流れ、サルマンとラジネは偉大な使役者の不調に戸惑った。

“あれ”はいまやひとりの男だった。

剣を握り、喚き、アイシスに突きかかる。

アイシスはそれを 受け入れた。

受け入れたのだ、彼の刃をその懐に。

「あ……ああっ！」

ラナが絶叫する。

アイシスは彼に背を向けていたが、その薄い背からは鋭い刃が生

えていた。

薄い胸板は、なんの抵抗も見せずに刺し貫かれてしまったのだ。

「ああああああ！ アイシス、アイシス！」

ラナは叫んだ。

涙があふれ、喉がつまる。しかしどれほど力をいれても体が動かない。

まるで大地に縛りつけられているようだった。

ネットとリグルももがいたが、しかしやはり動けなかった。

そうしている間にもアイシスの背からは血があふれ、みるみるうちに赤い水溜りが広がっていく。

“あれ”は一瞬目を見開いたが、すぐににやりと口の端をゆがめた。

「やっと」

その声は艶を帯び、どこかつつとりと夢を見ているようだった。

「やっとひとつになれる。アイシス、きみの心臓が止まったら、ぼ

くたちはまたひとつになれるんだよ」

「そうだね」

アイシスは静かに答えた。

彼は痛みを感じていなかった。

アイシスは大いなる存在に包まれていて、その命はまばゆいばかりの輝きを放っていた。

世界がアイシスの背を押している。

アイシスはうなずいた、彼は応えなければならない。

びりびりとしびれる腕は血にまみれていたが、しかし歯を食いしばり、アイシスは腕を伸ばした。

“あれ”は大きく目を見開いた。青色の瞳がくりくり揺れる。

背中が温かい。

アイシスは“あれ”を抱きしめたのだ。

だれもが予想していない行動だったし、目の前に見てもその意図が読めなかった。

アイシスはいったいなにをしているのか？

彼はいまにも死のうとしていて、“あれ”こそ憎むべき対象なのに。

アイシスはありったけの感情をこめて“あれ”を抱いた。

自分の体温が、“あれ”をも包みこんでしまえばいいと思った。

“あれ”は動かない、動けない。

アイシスはゆっくりと言葉をつむいだ。

「辛かったね、出口のない悲しみは。さぞ苦かったらうね、愛を知らない憎しみは。

ぼくたちはいま、再びひとつになる。だけど世界は明日も愛を歌い続けるよ。ぼくたちも歌うんだ、そう、きみは愛を知るんだよ。大丈夫、ぼくが教えてあげる。

ぼくは、ぼくはきみを　許すよ  
「

とたん、光が弾けた。

激しい風が巻き起こり、ラナとリグルは立っていることもできなかつた。



彼らは必死に抗ったが、その体は少しずつうしろへと追いやられ、ついにはしりもちをついてしまった。

「凄まじい力だ　！」

ネトレトはなんとか風に耐え、目を細く開いて光の中心を見ようとした。

しかし無駄だった。

彼のなかでヴァネッサが騒ぎ立て、彼はその力の大きさを知ることしかできなかった。

「これほどの力の中心にいたら体が保たない　消滅するぞ！」

「げっ」

ラナは飛び上がって悲鳴をあげた。

消滅だって！

ラナの脳裏をアイシスの笑顔がよぎった。

いつもの困ったような笑顔、ちよつとむくれたしかめ面、目を腫らした泣き顔、耳まで赤くした慌て顔。

失うわけにはいかない、彼はアイシスを失うわけにはいかなかつ

た。

しりもちをついている場合ではない。

「消えるなんて絶対に許さないぞ！ アイシス、おい、俺たちは！  
ずっと一緒だったし！ これからもずっと、ずっととなりで」

ラナは夢中でもがいた。

ネットレトですら動けない風の中を、泳ぐように手でかきながら進んでいく。

一歩、一歩、進むたびに彼は呼吸を整えてやらなければならなかった。

しかし足を踏み出す、親友を奪われてたまるものか！

「アイシス！」

そのときだ。

まるでラナが近づくのを待っていたかのように、一瞬で光が縮こまった。

三人はあつと声をあげる。

光の中心には体を寄せあうふたりの少年の姿があった。

「アイ」

次の瞬間、収束した光は圧倒的な力とともに破裂した。

風という表現では生ぬるいような、巨大な拳の殴打にも似た風が起こり、三人は一様に吹き飛ばされた。

木に背を打ちついたり、地面にどつと落ちたり。

がばと顔をあげ、そしてラナは絶句した。

そこにはなにもなかった、ただ変形した地面が残されていただけだ。

アイシスは、消えた。“あれ”と共に。

「……………」

だれも口を開かなかった。東の空がすこし白んでいる。

光が消えてしまってから、三人はそこらじゅうを駆け回り、アイシスの名を叫んでみた。

しかしあの愛らしい声が返ってくることはなかったし、その姿を見つけることもできなかった。

ラナは狂ったように叫び、森のどこへまでも入っていきこうとした。

「やめな」

リグルは背後から彼を押さえつけた。

うまく関節をとったはずなのに、しかしラナはリグルを跳ねのけた。

恐ろしい力だった。

リグルとネットレトは顔を見合わせ、今度はふたりがかりで彼を押さえた。

今度はラナも抗いようがなかった。

彼はめちやくちやに探し回ったせいで、体のあちこちに小さな傷を作っていた。

彼は全身と、その傷をも震わせて、まるで周りにはばかることなく声を放って泣いた。

それを見るふたりは居たたまれなかった。

「よしなよ、もうやめな」

リグルはラナの体を抱きしめた。

彼のよく鍛えられた体はとても大きかったが、しかしリグルの胸のなかではとても小さく感じた。

彼の悲しみようは、残るふたりにも現実を突きつけた。

アイシスは死んだ。

リグルも声をあげてわんわん泣いた。

ふたりの声は重なり、共に大きくなったり小さくなったりした。

ネトレトはうなだれ、じっと立ち尽くしていた。

涙が出ればいいのに、と彼は心から思った。涙が出れば、すこしはこの渦巻く感情も落ち着くだろうか。

アイシス、きみはどこへいったんだ。私はまだ、きみに教わりたいことがたくさんあったのに。

それに、まだお礼のひとつも言えてやしない。

ようやくラナが泣き止んでしまうと、辺りは異様な静寂に包まれた。

しっぽりしていて、ねばっこくて、気持ちが悪い。

リグルはラナになにか言葉をかけてやりたかった。  
しかしいくら考えても適当な言葉は見つからず、もれるのは湿っ  
たため息ばかりだった。

リグルはアイシスのことを思っていた。

かわいいアイシス。

初めて湯屋で彼を見たとき、実はリグルは彼に悪意を持った。

ひよろっこい体に、まあこれはどうにもならないことだが、女の  
ような幼い顔。

男に憧れるリグルにとって、男の体を持ちながらもまるでそれら  
しく鍛えていない、アイシスの存在はどうも気に食わなかった。

嬢ちゃん、という呼び名も最初はとげのある嫌味でしかなかった。

しかし時を経るにつれ、なにかが変わった。

彼の笑顔に秘められた影だとか、涙の向こうに見える強さだとか。

アイシスのひとつひとつがリグルの胸を打ち、その凍えていた感  
情をすこしずつ溶かしてくれたのだ。

彼がいなくなってしまういま、心のどこかがぼっかり損なわれ  
てしまったような気がした。

そこにはアイシスの笑顔が詰まっていたのに。

「いっつ」

リグルははつと息をのんだ。

顔をあげれば、ラナが背筋を伸ばして立っているではないか。

リグルは驚いた、彼はもう小さく震えてはいなかったから。

「いく、とは」

「帰るんだ、懐かしい場所に。そこで俺たちは待つんだ」

まるで不明瞭な答えだったが、しかしどこか抗えない響きがあった。

ネットレトはうなずくと、まだ呆然としているリグルを助け起こした。

ラナはすっかりとした足取りで歩き始める。

空はもう明るくなり始めていた。

彼らは丸一日歩きとおした。

山を下り、川のそばを通って、寂れた町を通りすぎて。

ややも歩けばネットレトは土地に見覚えがあることに気づいた。

そうだ、彼は一年前にもこの場所を通った。

そして町が炎に包まれている場面に出くわしたのだ。

そうして彼はエルフの王と出会った。

「うわっ、おまえ、ええっ！」

ラナの姿を見たハロルドの反応は妥当なものだった。

彼は突然帰ってきた息子に驚き、そしてそれ以上に喜び、彼のこさえた傷を見て心配した。

そういったひととおりの感情を全部顔に表してしまつと（百面相だ、トリグルは思った）、彼は息子を強く抱きしめた。

「よく帰ってきたなあ！　なんだか大きくなりやがつて！」

ラナはすこし恥ずかしそうだったが、ハロルドはお構いなしだった。

彼はひとまわり大きくなった息子の肩を叩いて満足そうだった。

そこでようやくネットレトたちの存在に気づき、また声をあげたのだった。

「それで、アイシスは」

なにげないハロルドの言葉に、ネットレトとトリグルは体を固くした。



喜びとおしのハロルドに、「こう言わなければならないのだ。彼はもう　いないのだよ。」

「ちょっと遅れてくる」

「え……」とリゲル。

「すごく大切な用事があつてさ。でも親父に会えるのを楽しみにしているぜ」

「そうか。いやあ、俺も楽しみだ！」

ハロルドは息子の言葉を露も疑っていないようだった。

とにかくまあ、入れ。

彼は三人の背中を押し、できたばかりの家へと招き入れた。

「どういうつもりだよ」

部屋に入り、ハロルドの姿がないのを見てからリゲルは口を開いた。

ハロルドの家の二階にはふたつの部屋があった。

となりあう部屋の、ひとつはまだ空っぽのままだった。いくぶんか小さなベッドだけが置かれている。

三人はそのうちのラナの部屋にいた。

「どういつつもりって?」

「親父さんにあんなこと言ってさ。悲しませたくない気持ちはわかるけど、いつかは、本当のことを」

リグルの言葉は切れ切れになった。どうしても涙がこみ上げてくるのだ。

その頭をネットレトが撫でてやった。

その手があまりに温かいので、リグルは再び泣き出してしまった。

「本当のことって?」

「だからっ! アイシスが」

「あいつは帰ってくるよ」

ラナはきっぱりと言い張った。

アイシスは帰ってくる。

リグルは最初、彼が現実から目をそらしているものだと思った。しかし彼の目は真っ直ぐだった。物事と真正面から向きあっている者の顔だ。

アイシスも最後、“あれ”と対峙していたときにそうだった。

「俺たちは待つんだ、あいつが帰ってくるのを。だからそんな顔するな、アイシスが心配するだろう。」

とにかく今日は寝て、明日になったら町を見て回るうぜ。一度燃えた町だ、すべてが新しくってうきつきするだろうよ。」

リグルはなにも言い返せなかった。

ラナは言葉どおり、ふたりを連れて町を回った。

ティエラは燃えてしまう前とだいたい同じ姿をしていて、ラナはとても喜んだ。

懐かしい人々が彼を取り囲み、たくさんの質問をした。

何度もアイシスについて訊かれたが、そのたびに彼はやはり、もうじき帰ってくると笑顔で返すのだった。

そうして五日がすぎ、十日がすぎた。

三人は町をうろつくことにも疲れ、部屋にじっとしていることが多くなった。

リグルは迷ったが、ついにこっそりハロルドを連れ出し、事の顛末をすべて話した。

アイシスは恐ろしい敵と戦い、その強大な力にもめげず、ついに彼を倒してしまったのだと。

しかしその代償は大きく、彼はもう戻ってこれないのだと。

「そう、か」

ハロルドは大きなため息をついた。

言っつてよかったのだろうか、とリグルは目をふせる。

さすがラナの父親らしく、彼は豪快な人物であったが、その彼がこんな表情でいるのはやるせなかった。

「話してくれてありがとうな。だけど、ラナはああ言っているぜ」

「あれは……きつと、あまりにも辛いから」

「そうかなあ。俺はあいつの言葉を信じたいけどなあ」

「でも、俺はこの目で見たんだ！ アイシスが光と一緒に、“あれ”と一緒に――！」

ハロルドはリグルの肩を叩いた。

リグルは嗚咽こそもらさなかったが、しかし二筋の涙を流していた。

「俺だつて信じたくないよ。またアイシスと笑いあいたいよ。ありがとも言い足りないし、もつとばかなこと言ってからかってやりたい。」

「だけど、アイシスはもう」

そのときだった。ばたばたとうるさい足音がして、ラナが階段を駆け下りてきたのは。

目を白黒させたネットレトがそれに続いている。

ラナはリグルを見つけると、すこし怒ったような声をあげた。

「おい、なにしているんだ。いくぞ!」

「は……」

「間抜け面するなつてば! 親父、ちゃんとケーキ買っておけよ!」

「ちょ、おい、この町にはまだケーキ屋なんて洒落たものはないぞ」

「だったら手作りだ、とびきり甘いのをよろしく!」

「やれやれ、とハロルドは肩をすくめる。」

慌しくふたりが家を飛び出していくのを、リグルは呆然と見ていた。

ラナはひょこりと玄関に顔を出し、そんなりグルをもう一度呼ん

だ。

わけが分からないままリグルも走る。

三人はただっ広い草原を走った。

ラナの足はすばらしく速い。

リグルでさえ息がきれた。

「ほら、聞こえるだろう」

なにが、と言おうとしてリグルは口をつぐんだ。

聞こえる。

優しい旋律が、柔らかな声が。

その声は三人の胸を打った。

なにか温かいものが、体全身からほとばしるよつな。

ラナたちは理解した。

これこそが愛なのだ。

ネトレトの瞳が潤んだ。

こぼれ落ちることはなかったが、しかし彼の目に涙が浮かんだ瞬

間だった。

草原をずっといくと、大きな一本の木が見えてきた。

冬の真中だというのに、その木は立派に葉を茂らせている。

ああ、とりグルは感嘆の声をあげた。

その葉は眩いばかりの金色をしていた。

風が吹き、ファルファラの木の枝が揺れる。

その上のほうに、ひとりの少年が腰かけていた。

彼の長い髪は枝とともに揺れ、銀色に輝いている。

彼の赤みのある唇は、丸くすぼんだりしながら音階をたどっていたが、やがてそれがふと止んだ。

三人は木の根元に立ち、少年を見上げている。

「……ラナ？ 迎えにきてくれたの？」

リグルは思わず口を押さえた。涙が双眸からこぼれ落ちる。

ネトレトはため息をつき、雲間さえ晴れるような、一番の笑顔を浮かべた。

少年は目を閉じていたが、しかしアイシスだった。

見間違えようはずがない、だって彼らはこの数日、ずっとその笑顔を思っていたのだから。

ラナがいつもの調子で言った。

「ああ。どうせおまえは今日がなんの日か覚えちゃいないだろうか  
らな」

アイシスは目を閉じたまま腕を伸ばした。

ラナも腕を広げ、降りてきた彼を抱きとめる。

着地の反動でくるりとひとつ回ったふたりは、まるでダンスを踊っているかのようだった。

「残念なことに、ケーキは親父の手作りだけだ。

誕生日おめでとう、アイシス」



## 終章：幽霊のキス

『聖伝』エピソード

「もういくのか」

旅装を調えたネットレットがうなずく。

懐かしい彼の白いコートが風にはためく。  
となりに立つリゲルの、黒いコートがまた対照的だった。

「約束したからな、すぐ迎えにいくと」

「そっか」

ラナは笑顔で手を差し出した。

ネットレットはうなずき、その手を握る。

アイシスもラナに導かれて手を伸ばした。

ネットレットはにっこりと笑い、彼ともまた固い握手を交わした。

「おまえは急ぐ必要なんてないだろうに。親父さんのところへいくんだろっ」

「まあね。だけどいきなり一人旅じゃあネットレトも寂しいだろうからな」

リグルはにやりと口をつりあげる。

参ったな、とネットレトは言った。すっかり見抜かれているな、と。

思わぬ彼の冗談に、三人は声をそろえて笑った。

リグルともふたりは握手を交わした。

アイシスはすこしずれた方向に手を出してしまい、リグルは慌てて体を動かさなければならなかった。

彼は視力をすっかり失ってしまったのだ。

あの日　アイシスの誕生日だ　帰ってきた彼は、しんと震えるほどに静かなほほ笑みを浮かべ、こう言った。

「あれ”はぼくと共にいるよ”

光のなかで、彼らは戦い続けたのだという。

“あれ”のもつ憎しみの力は強大だったが、しかし愛の力が打ち克ったのだ。

いや、この表現は妥当ではない。

だれが勝ちも負けもしなかった、ただ、憎しみを愛が包みこんだのだ。

許しという、最大の愛。

見返りを求めない無償の愛が、尖った心を優しく抱きしめたのだ。

“あれ”はひどく恐れたが、しかし最後には目を閉じ、温かな愛に身をゆだねた。

しかし壮絶な戦いだっただ。

もともと弱まっていたアイシスの目の力は完全に失われてしまい、アイシスは光を感じられなくなった。

しかし、そのことはアイシスにとってさして問題ではなかった。髪がより輝きを増し、腰の辺りまで長くなったのを見られないことだけは残念がったけれど。

アイシスたちはティエラの外れまでふたりを見送った。

ネットレトトリグルは何度もふり返り、そのたびに手を振った。

アイシスとラナも大きく手を打ちふりそれに応えた。

やがて彼らの姿が木々に隠されてしまうと、アイシスはひとつため息をついた。

ひとつの大きな流れが終わったのだ。

旅の仲間は解散し、アイシスはまた普通の少年として生きる。

剣を腰にさげることはないだろうし、もちろん魔物と命を削りあうこともないだろう。

彼はまた聖キグナディウスの像の前に額づき、祈りを捧げる少年に戻るのだ。

しかしいま、その少年は愛を知っている。

ひとつ大きく変わったこととはいえば、アイシスの目覚ましがつぶてから、ラナの声になったことだろうか。

帰ってきたアイシスには素敵な贈り物が待っていて、彼はハロルドとラナの三人で暮らし始めたのだ。

もう修道院の窓に石ころが投げられることはなかった。

それでもアイシスは朝の朝礼に出だし、寝坊をしようものならば

器を磨かされた。

残念なことに、生まれ変わった修道院は、ちよっぴりトイレの数が増えていた。

アイシスの部屋には変わったお守りがかけられている。  
人魚の鱗と、ドラゴンの牙でできているという。

町の人々は彼の話をまったくのほらだと言って笑った。  
アイシスも笑った。

しかし彼の右手首にはもうひとつのお守りが巻かれていて、青い石が結わえられている。

ラナも同じく、赤い石が。

世界のどこかで、今日も黄色と紫の石は揺れているのだろう。

それでアイシスは幸せだった。

アイシスが目をさましたのは寒さのせいではなかった。声を聞いたのだ。

うすく雲のかかった空はまだ暗く、窓の向こうで町はまだ眠っていた。

アイシスは朝が苦手だった。

だからそんな時間に自然と目がさめたことは驚きだった。

加えて驚いたことに、その朝アイシスは幽霊を見た。

それはアイシスがこれまでに見ただれよりも美しい女の人だった。

彼女はアイシスが深い眠りにあると思っていたらしく、目を開けるのを見ると小さく息をのんで身を引いた。

すきとおるように白い肌の奥で筋肉が動くのをアイシスは見た。

そして消えた、アイシスがまばたきをする一瞬のあいだに。

彼女がこの世のものでないことは明らかだった。

しかしアイシスは恐怖を感じていなかった。

さっき聞こえた自分を呼ぶ声の正体は、もしかすると彼女かもしれないと思ってほほ笑みさえこぼれた。

親友は今日も元気で、冬だというのに真っ黒だ。

アイシスの枕元には銀の短剣が置かれている。

そしてアイシスはときどきクツキーを焼いた。

いまの生活にすこし慣れたら、彼はまた旅に出ようと思っている。  
弟に会い、すばらしく成長したろう彼の男ぶりを称えるためだ。

アイシスは幽霊を見た。

美しい彼女は頬をよせ、アイシスの額にキスをする。

世界は新しいことだらけで、まだまだ不思議でいっぱいだった。

それでもときどき世界のことどもはひとつの同じ言葉を話して、  
そういつときアイシスは、その愛の調べに耳を委ねるのだった。

## あとがき

『聖伝』あとがき

まったく困ったことですが、彼らは自己主張がとっても強く、さらに困ったことに、わたしはそんな彼らが好きで仕方ないのでした。

わたしはただ、友達っていいなあ、ということを書きたかったんです。

素直に言うと、ほんとうは魔法だなんて都合のいいもの、どちらかといえば関わりたくない部類に入るんですが。

彼らが生まれたのはわたしが中学のはじめのころで、だから六、七年が経つわけですが、ようやくひとつの終わりを迎えることができました。

といたしますのも、毎度読んでくださる方がおられたからで、ここまでおつきあいくださったあなたに、わたしはなんとさえいいたいかもわかりません。



エルヴァニアは空想の世界です。

どこにもないけど、どこにだってあります。そして思っている。

物語はまだ続きます。

もうすこしエルヴァニア探索におつきあいいただけたら嬉しく思います。

お楽しみいただけたなら幸いです。

もしもご縁がありましたなら、また。

2009年 夏まつさかり

こいしるつこ

追伸：なにやらあとがきにあとがきがあるようです、お時間のある方はご覧ください。

で、すっきり終わろうと思ったんですが、文字数が足りないと言われてしまいました。

なのでどうでもいいことを書きますが、彼らはするめといつわり、

どちらかというときムチだと思っています。

もう大丈夫でしょうか、大丈夫でしょうか、

ありがとうございました、

では、

おわかります(ずっしん)

## あとがき（後書き）

あとがきのあとがき

現在、宅のパソコンが夏バテ中です。起動してくれません。

ワードが使いませんので、彼が元気を取り戻すまで（もしくは新しい子を迎えるまで）長編は書けそうにありません。

おつきあいいただける方には、しばらくお待ちいただけましたら、と思います。

そのあいだに絵など描けたら、と思っています。

もしかしたら、交流サイトさんのほうでこっそりやっているかもしれないので、名前を見かけたらにやりとしておいてくださいね。

ありがとうございました、

ほんとうにおしまい

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9648g/>

---

【お知らせあり】 聖伝 光と闇の邂逅

2010年11月15日19時54分発行